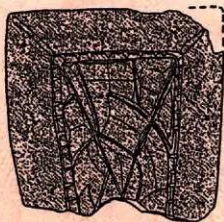


一般国道23号中勢道路(8工区)建設事業に伴う

六大 A 遺跡発掘調査報告

(木製品編)



2000・3

三重県埋蔵文化財センター



卷頭 1 武器形集中区一括



卷頭2 赤彩遺物



卷頭3 農具 耕起具

序

来るべき21世紀は、環境の時代とも呼ばれております。

三重県におきましても、環境先進県づくりをめざし、自然・歴史的環境を後世に伝えていくための様々な事業が行われているところです。

自然保護の重要性が説かれて久しく、自然は大切で守らねばならないもの、という認識が広く醸成されつつあります。しかしながら、身近な自然、たとえば近くに生えている草や木について、我々ほどの程度に知っているのでしょうか。桜や栗、あるいは檜や杉、松といった現在建築用材として利用されている木は知っていても、それ以外の木 例えは樺かほや樫かし、榎えの、椴ぶ、黄楊わうやうなどについてはどれくらい知っているのでしょうか。それが自然の中でどのような役割を担い、また人類に利用されてきたかなど。もしかすると、木とその名前の対応すらわからないことのほうが多いかもしれません。

ところで、遺跡を発掘していると、時々大量の木製品が出土することがあります。これらを詳しく調べると、昔の人々が自然に対して的確な知識を有していたことを実感することができます。六人A遺跡で出土した5世紀の横櫛はツゲ製でしたが、現在も髪をすく櫛はツゲの木で作られています。

真に環境を保全して後世に伝える、それは環境についての真摯な態度と正しい知識から生まれる、六人A遺跡の木製品は、そう我々現代人に語りかけているように思えてなりません。このように考えると、埋蔵文化財とは、過去の人間や自然と対峙し、現代人が環境と向き合うためのひとつのきっかけとなりうる可能性を提示するもの、ということができるでしょう。

最後になりましたが、本書によって、過去に学んで豊かな未来像を構築するための一助となることを期待するとともに、県民の皆様への埋蔵文化財へのより一層のご理解とご協力を念願して序文といたします。

平成12年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井 興 生

例 言

- 1 本書は、平成6～8年度に三重県が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した「般国道23号中勢道路建設に伴う六人A遺跡発掘調査報告書」の第1分冊である。
- 2 本書は、六人A遺跡の発掘調査報告書のうち、大溝（SD1）及び田河道（SR2）から出土した木製品を扱った木製品編である。従って、調査の経過や全体の遺構、出土状況及び木製品以外の遺物については、後刊の遺構・土器編を参照されたい。
- 3 六人A遺跡の現地調査は、平成5年度の範囲確認調査を小宮文裕・穂積裕昌・中村光司が、平成6年度の本調査を穂積裕昌・中川明・中村光司が、平成7年度の本調査を穂積裕昌・山本義浩が、平成8年度の本調査を宮田勝功がそれぞれ担当した。
- 4 木製品の整理及び当報告書の作成にあたっては、調査第三課第三係業務補助職員市川嘉子・太田浩子・森田嗣代・鈴木妙・黒川敬子・蒔田やよい・新田智子・倉田山起子・小林俊之・脇柴理美の補助を得たほか、調査補助員として、藤田有紀・川崎志乃・杉崎淳子・田中美穂・中村友子・石田浩司が現地調査もしくは当報告書作成に関わる整理作業に携わった。また、遺物トレスは、資料普及グループの植純子・石橋秀美・山上山香が行った。
- 5 遺物・発掘調査から当報告書の作成までには多数の方々のご教示を頂きました。特に、本分冊の作成に関しては、以下の方々のご指導、ご教示を頂きました。記して感謝の意を表します。

吉柳泰介 石井扶美子 石野博信 伊藤智久 岩崎茂 岩本貴 植田文雄 上原真人 千居直之
堀崎由 岡部裕俊 賢田雅昭 笠原壽 金子裕之 金原正明 川崎保 川畑和久 久々忠義
工業善通 黒田龍二 小島睦夫 斉藤明彦 佐藤達雄 根山林継 鈴木元 鈴木剛則 竹谷俊夫
辰巳和弘 館野和巳 佃幹雄 寺内隆夫 中浦基之 中川律子 西村歩 橋雅子 八賀晋 坂崎
穂上昇 平田浩康 福海貴子 藤川智之 松井一明 丸山哲夫 光谷拓実 宮島義和
宮本長二郎 村上由美子 村田龍一 望月由佳子 森浩一 山田昌久 山内紀嗣 山本輝雄

（順不同、敬称略）

- 6 本書において、上原真人『木器集成図録 近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所 1993を本文中で使用する場合、『木器集成』と略記した。同様に、町田章・上原真人『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 1984を使用する場合、『木器集成 古代篇』と略記した。
- 7 木製品の樹種同定は、古環境研究会（中勢道路埋蔵文化財発掘調査にかかる六人A遺跡出土木製品の樹種同定委託業務報告書、監修 金原正明）に委託し、その結果を遺物観察表に記した。
- 8 本文挿入のうち写真4・5は、天理大学 栗田雅昭氏の提供による。その他は、各担当者及び山口格が撮影した。
- 9 PL133の木簡（1491～1493）の写真は、奈良国立文化財研究所 佃幹雄氏の提供を受けた。
- 10 上記の木簡を除く写真図版の撮影は、山口格が担当した。
- 11 本書の編集・執筆は、穂積裕昌が担当した。
- 12 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

本文目次

I	前 言	1
	第1節 木製品の出土の概略	1
	第2節 木製造物の整理の概略	1
	1 現地調査	1
	2 整理作業	2
II	木製品の解説	2
	第1節 本書における木製品の分類	2
	1 木製品分類の視点	2
	2 六代A遺跡における木製品の分類	3
	第2節 SD1出土木製品	5
	1 農 具	5
	(1) 耕起具	5
	(2) 収獲具	11
	(3) 田下駄	14
	(4) 編具	15
	2 工 具	16
	(1) 鉄斧柄	16
	(2) 小利器柄	16
	3 紡織具	17
	(1) 紡錘車	17
	(2) 糸巻	17
	(3) 織機	19
	4 容 器	20
	(1) 剣物	20
	(2) 埴物	22
	(3) 指物	22
	(4) 曲物	23
	(5) その他	26
	5 家 具	26
	(1) 案	26
	(2) 椅子	27
	(3) 台	27
	6 武器・武具・馬具	27
	(1) 武器	28
	(2) 武具	28
	(3) 馬具	30
	7 祭祀具	30
	(1) 武器形	30
	(2) 形代	32
	(3) 斎串	34
	8 楽 器	34
	(1) 琴	34
	(2) 籠状木製品	35
	9 装著具	35
	(1) 飾	36
	(2) 下駄	36
	10 運搬具	38
	(1) 天杵棒	38
	(2) 背負子?	38
	(3) 輓	38

11	上木・作業用具	38
	(1) 鋸	39
	(2) 上叩具	39
	(3) 叩き板	39
12	食事具	39
	(1) 杓子状木製品	39
13	発火具	39
	(1) 火鑪口	39
14	漁撈具	40
	(1) 網杵	40
	(2) 浮子?	40
15	船材	40
16	建築部材	41
	(1) 柱材	41
	(2) 臥返し	43
	(3) 水平構造材	43
	(4) 扉口装置	45
	(5) 窓材?	46
	(6) 床材	46
	(7) 壁材	46
	(8) 屋根構造材	50
	(9) 梯子	51
	00 不明建築部材	51
17	木樋	51
18	接合補助材・栓、把手	51
	(1) 木釘	51
	(2) 栓もしくは楔	52
	(3) 挿入型の留具か把手	52
	(4) 繫縛型の留具	52
	(5) ソケット状木製品	52
	(6) 樹皮巻	53
	(7) 巻巻	53
19	木筒・木札状木製品	53
20	杭材	54
21	不明品・残材	54
	(1) 棒状具	54
	(2) 板状具	55
	(3) その他	57
第3節	S R 2 出土木製品	58
Ⅲ	木製品のまとめと考察	60
第1節	六次A遺跡出土木製品の特徴	60
1	存続時期	60
2	木器組成	60
3	製品と木製品	62
4	特殊遺物の位置づけ	62
第2節	個別遺物の考察	64
1	六次A遺跡出土木製品の耕起具について	64
2	出土遺物にみる高機出現の可能性	67
3	祭祀関連木製品について	68
4	六次A遺跡出土の建築部材とその周辺	69
第3節	今後の課題	71
1	木製品の加工具の問題	71
2	木器種類による樹種選択の問題	71

挿 図 目 次

図1	直柄平鋸の分類	5	図29	弓頭の種類	28
図2	直柄又鋸と横鋸	6	図30	刀形把部の分類	30
図3	泥除の分類	6	図31	木鎌の種類	32
図4	えぶりの分類	7	図32	砦板と具頭槽の接合模式図	35
図5	棒軸形曲柄平鋸の分類	8	図33	下駄の分類	37
図6	曲柄鋸の軸頭部形態	8	図34	天杆棒の分類	38
図7	棒軸形曲柄又鋸	8	図35	杓子状木製品の分類	39
図8	ナスビ形曲柄平鋸の分類	9	図36	直立柱建物用柱の柱頭形態	42
図9	ナスビ形曲柄又鋸の分類	9	図37	高床建物用柱の床上部の断面形態	43
図10	払い鋸	10	図38	壁受材の分類	44
図11	平鋸の分類	10	図39	縦放し材の断面形式図	45
図12	組合せ又鋸	11	図40	扉板の分類	46
図13	鎌柄の分類	11	図41	門孔の穿孔部位	46
図14	堅竹の分類	12	図42	縦壁板の左右への接合模式図	47
図15	小型竹・横竹	13	図43	壁材（壁木舞）出土状況図	49
図16	横鋸の分類	13	図44	垂木の分類	50
図17	円形枠付下駄の分類	15	図45	梯子の分類	51
図18	木脚の分類	16	図46	杓もしくは楔の分類	52
図19	紡錘車の分類	17	図47	挿入型留具か把手の分類	52
図20	棒の分類	18	図48	緊縛型留具の使用状況の復元	52
図21	認めかけの復元	18	図49	有頭棒の分類	55
図22	槽の分類	21	図50	差曲型の下駄模式図	58
図23	盤の分類	21	図51	横櫛出土の土器窟	63
図24	別物箱の分類	21	図52	ナスビ形曲柄鋸等部の変遷模式図	66
図25	上野市森脇遺跡出土の「桶」	22	図53	上野市森脇遺跡出土のナスビ形曲柄又鋸	66
図26	曲柄砦板と盤板の結合形態	24	図54	勾玉と木製刀形が出土した石組み井泉	68
図27	岐阜県宮川村の民俗例による曲物脚の復元	25	図55	武器形集中区	69
図28	溝結合型砦板の断面模式図	26	図56	武器形集中区で伴出の高林	69

表 目 次

出土木製品分類表	4	拵起具の組成 SD1・SR2	65
出土木製品組成 SD1・SR2	61	拵起具の組成 SD1 III層（IV層合）	65
出土木製品組成 SD1 III層（IV層合）	61	拵起具の組成 SD1・II層	65
出土木製品組成 SD1・II層	61	遺物観察表	72

本文挿入写真目次

写真1	横鋸と泥除B類のセット(26)	6	写真8	壁木舞継材と横材の繋ぎ	48
写真2	鋸の身と柄の繋ぎ(149)	11	写真9	壁木舞	48
写真3	認めかけ軸棒と「タタリ」の組合せ	19	写真10	木製品調査風景	59
写真4	飾り糸巻部の接写	28	写真11	木製品調査風景	59
写真5	片糸綴部に残る糸(上)と糸綴部断面(下)	29	写真12	木製品整理風景	71
写真6	形代に入れられた複製例(955)	33	写真13	木製品整理風景	71
写真7	縦壁板の接合(1249と1250)	47			

遺物図版目次

第1図	直柄平鋸(1~8)	第5図	泥除(39~47)
第2図	直柄平鋸・直柄平鋸木製品(9~20)	第6図	泥除(48~51)
第3図	直柄平鋸木製品・直柄又鋸・横鋸・泥除(21~28)	第7図	泥除・えぶり(52~64)
第4図	横鋸・泥除(29~38)	第8図	棒軸形曲柄平鋸(65~80)

- 第9回 棒軸形曲柄平継・棒軸形曲柄又継
ナスビ形曲柄平継(81~94)
- 第10回 ナスビ形曲柄平継・ナスビ形曲柄又継(95~106)
- 第11回 ナスビ形曲柄又継(107~127)
- 第12回 曲柄継の柄・払い継・木平鋸(128~142)
- 第13回 木平鋸・組合せ平鋸(143~148)
- 第14回 組合せ平鋸(149~151)
- 第15回 組合せ平鋸・不明鋸類類・不明鋸類類未製品
(152~170)
- 第16回 不明鋸類類未製品・不明鋸類類・鎌(171~180)
- 第17回 臼(181~183)
- 第18回 堅杵(184~199)
- 第19回 堅杵(200~209)
- 第20回 堅杵・小型杵・横杵・横槌(210~224)
- 第21回 手杵・捏合(225~228)
- 第22回 平純田下駄・円形杵付田下駄(229~242)
- 第23回 円形杵付田下駄・方形杵付田下駄(243~261)
- 第24回 方形杵付田下駄(262~281)
- 第25回 方形杵付田下駄(282~307)
- 第26回 日盛板・木鐮(308~322)
- 第27回 木鐮(323~342)
- 第28回 木鐮(343~358)
- 第29回 木鐮・鉄斧柄・小利器柄(359~380)
- 第30回 紡錘車・杵(381~407)
- 第31回 杵・鋸かけ・糸杵(408~426)
- 第32回 タタリ(427~433)
- 第33回 織機(434~447)
- 第34回 槽(448~452)
- 第35回 槽(453~456)
- 第36回 槽(457~462)
- 第37回 槽(463~469)
- 第38回 槽(470~475)
- 第39回 槽(476~480)
- 第40回 盤(481~493)
- 第41回 盤・箱(494~502)
- 第42回 箱・高杯・杯・碗・桶(503~511)
- 第43回 不明例物(512~516)
- 第44回 不明例物・漆器類・「四方転びの箱」(517~524)
- 第45回 「四方転びの箱」・紐結合箱(525~538)
- 第46回 連結箱・曲物(539~544)
- 第47回 曲物(545~550)
- 第48回 曲物(551~557)
- 第49回 曲物(558~565)
- 第50回 曲物(566~573)
- 第51回 曲物(574~585)
- 第52回 曲物(586~601)
- 第53回 曲物(602~612)
- 第54回 曲物(613~624)
- 第55回 曲物(625~644)
- 第56回 曲物(645~682)
- 第57回 曲物(683~709)
- 第58回 曲物(710~742)
- 第59回 曲物(743~764)
- 第60回 曲物(765~773)
- 第61回 曲物脚・その他器関係遺物(774~782)
- 第62回 案(783~784)
- 第63回 案(785~787)
- 第64回 案(788~795)
- 第65回 案・椅子(796~803)
- 第66回 椅子(804~805)
- 第67回 椅子(806~812)
- 第68回 指物・台(813~821)
- 第69回 弓(飾り・素子)・鉄箭の木柄部(822~835)
- 第70回 刀装具(把装具・鞘口装具・鞘皮装具)・
刀刺鞘(836~841)
- 第71回 刀刺鞘・盾・冑鏡(842~853)
- 第72回 刀形(854~872)
- 第73回 刀形(873~888)
- 第74回 刀形・劍形・鐙形(889~912)
- 第75回 鐙形(913~929)
- 第76回 木鎌・小刀形・刀形・その他武器形(930~951)
- 第77回 鳥形・馬形・舟形・楕圓形・陽物形・笠形
鳥形(952~972)
- 第78回 棒軸形木製品・さしば形・杵・琴(973~977)
- 第79回 琴(978~980)
- 第80回 琴・龜(ささら)状木製品・櫛(981~987)
- 第81回 下駄(988~993)
- 第82回 下駄(994~999)
- 第83回 下駄(1000~1005)
- 第84回 下駄(1006~1011)
- 第85回 下駄(1012~1017)
- 第86回 下駄(1018~1023)
- 第87回 下駄(1024~1029)
- 第88回 天杆棒(1030~1039)
- 第89回 背負子?・籠?・袋(1040~1042)
- 第90回 土俵巾・叩き板・杵子状木製品(1043~1053)
- 第91回 杵子状木製品・火燗(1054~1065)
- 第92回 漁撈具・船材(1066~1073)
- 第93回 船材(1074~1078)
- 第94回 船材(1079~1082)
- 第95回 船材(1083~1086)
- 第96回 堅穴住居用柱(1087~1094)
- 第97回 堅穴住居用柱・掘立柱建物用柱(1095~1102)
- 第98回 掘立柱建物用柱(1103~1107)
- 第99回 掘立柱建物用柱(1108~1111)
- 第100回 掘立柱建物用柱・その他柱材(1112~1120)
- 第101回 その他柱材(1121~1131)
- 第102回 その他柱材(1132~1143)
- 第103回 その他柱材(1144~1153)
- 第104回 風返し・堅穴住居用横架材
掘立柱建物用水平構造材(1154~1159)
- 第105回 掘立柱建物用水平構造材(1160~1164)
- 第106回 掘立柱建物用水平構造材(1165~1170)
- 第107回 掘立柱建物用水平構造材(1171~1176)
- 第108回 掘立柱建物用水平構造材(1177~1180)
- 第109回 掘立柱建物用水平構造材(1181~1188)
- 第110回 掘立柱建物用水平構造材(1189~1196)
- 第111回 掘立柱建物用水平構造材(1197~1203)
- 第112回 蔵放し材(1204~1209)
- 第113回 蔵放し材・榎材(1210~1215)
- 第114回 屎板(1216~1219)
- 第115回 屎板(1220~1225)
- 第116回 屎板(1226~1228)
- 第117回 屎板(1229~1235)

第118回 窓材?・床材(1236~1241)
 第119回 床材・板壁板(1242~1248)
 第120回 板壁板(1249~1254)
 第121回 板壁板(1255~1263)
 第122回 板壁板(1264~1269)
 第123回 板壁板(1270~1275)
 第124回 板壁板(1276~1283)
 第125回 板壁板(1284~1295)
 第126回 板壁板(1296~1304)
 第127回 噴木舞(1305~1325)
 第128回 垂木(1326~1330)
 第129回 垂木(1331~1345)
 第130回 垂木(1346~1354)
 第131回 垂木(1355~1361)
 第132回 垂木(1362~1371)
 第133回 垂木(1372~1381)
 第134回 垂木(1382~1394)
 第135回 垂木・梯子(1395~1403)
 第136回 梯子(1404~1408)
 第137回 梯子・不明建築部材(1409~1416)
 第138回 不明建築部材(1417~1427)
 第139回 不明建築部材(1428~1435)
 第140回 不明建築部材(1436~1443)
 第141回 不明建築部材(1444~1452)
 第142回 木樋(1453~1459)
 第143回 木釘・枠もしくは楔・把手(1460~1473)
 第144回 接合補助材・樹皮巻・受巻(1474~1490)
 第145回 木筒・木札状木製品(1491~1499)
 第146回 丸杭(1500~1510)
 第147回 丸杭(1511~1526)

第148回 丸杭・転用杭(1527~1549)
 第149回 棒状具(1550~1578)
 第150回 棒状具(1579~1596)
 第151回 棒状具(1597~1617)
 第152回 棒状具(1618~1639)
 第153回 板状具(1640~1647)
 第154回 板状具(1648~1654)
 第155回 板状具(1655~1666)
 第156回 板状具(1667~1684)
 第157回 板状具(1685~1696)
 第158回 板状具(1697~1708)
 第159回 板状具(1709~1718)
 第160回 板状具(1719~1728)
 第161回 板状具・その他不明品(1729~1746)
 第162回 その他不明品(1747~1760)
 第163回 その他不明品(1761~1770)
 第164回 その他不明品(1771~1783)
 第165回 その他不明品(1784~1793)
 第166回 その他不明品(1794~1807)
 第167回 その他不明品(1808~1814)
 第168回 その他不明品(1815~1827)
 第169回 その他不明品(1828~1843)
 第170回 その他不明品(1844~1862)
 第171回 直柄平鍛木製品・ナスビ形曲柄平鍛
 田下駄・木錘・紡錘車・認めかけ・糸枠
 織機(1863~1872)
 第172回 動物・形代・木杖・土木作業用具
 匙(1873~1882)
 第173回 噴材・垂木・接合補助材(1883~1888)
 第174回 板状具・棒状具・その他不明品(1889~1901)

写真図版目次

巻頭1 武器形集中小く一括
 巻頭2 赤彩遺物
 巻頭3 農具 耕起具

P.L.1 直柄平鍛
 P.L.2 直柄平鍛
 P.L.3 直柄平鍛
 P.L.4 直柄平鍛木製品
 P.L.5 直柄平鍛木製品・直柄又鍛・泥除付横鍛
 P.L.6 泥除付横鍛・横鍛
 P.L.7 横鍛・泥除
 P.L.8 泥除
 P.L.9 泥除
 P.L.10 泥除・えぶり・棒軸形曲柄平鍛
 P.L.11 棒軸形曲柄平鍛
 P.L.12 棒軸形曲柄平鍛・棒軸形曲柄又鍛
 ナスビ形曲柄平鍛
 P.L.13 ナスビ形曲柄平鍛
 P.L.14 ナスビ形曲柄又鍛
 P.L.15 ナスビ形曲柄又鍛
 P.L.16 曲柄鍛の柄・払い鍛
 P.L.17 木平鋤・組合せ平鋤
 P.L.18 組合せ平鋤
 P.L.19 組合せ平鋤

P.L.20 組合せ平鋤・組合せ又鋤
 P.L.21 不明鍛鋤類木製品・不明鍛鋤類・鎌
 P.L.22 臼・碓杵
 P.L.23 碓杵
 P.L.24 碓杵
 P.L.25 碓杵・小型杵・横杵・横槌
 P.L.26 横槌
 P.L.27 横槌・手柄・捏合
 P.L.28 単純田下駄・円形枠付田下駄
 P.L.29 円形枠付田下駄・方形枠付田下駄
 P.L.30 方形枠付田下駄
 P.L.31 方形枠付田下駄・日置板・木錘
 P.L.32 木錘
 P.L.33 木錘・鉄芥柄
 P.L.34 鉄芥柄・紡錘車・棒
 P.L.35 棒・認めかけ
 P.L.36 認めかけ・糸枠
 P.L.37 タタリ
 P.L.38 織機
 P.L.39 織機?
 P.L.40 槽
 P.L.41 槽
 P.L.42 槽
 P.L.43 槽

P L 44	槽	P L 97	船材
P L 45	敷・箱	P L 98	船材
P L 46	箱・高杯	P L 99	船材
P L 47	高杯・碗・桶・不明剣物	P L 100	窓穴住居用柱・掘立柱建物用柱
P L 48	不明刃物	P L 101	掘立柱建物用柱
P L 49	「四方転びの箱」・紐結合箱	P L 102	掘立柱建物用柱
P L 50	連結箱・曲物	P L 103	掘立柱建物用柱・その他柱材
P L 51	曲物	P L 104	鼠返し・窓穴住居用構架材 掘立柱建物用水平構造材
P L 52	曲物	P L 105	掘立柱建物用水平構造材
P L 53	曲物	P L 106	掘立柱建物用水平構造材
P L 54	曲物	P L 107	掘立柱建物用水平構造材
P L 55	曲物	P L 108	掘立柱建物用水平構造材
P L 56	曲物	P L 109	掘立柱建物用水平構造材
P L 57	曲物	P L 110	掘立柱建物用水平構造材・蔵出し材
P L 58	曲物脚・その他容器関係遺物	P L 111	蔵出し材
P L 59	案	P L 112	蔵出し材・船材・扉板
P L 60	案	P L 113	扉板
P L 61	案	P L 114	扉板
P L 62	案・椅子	P L 115	扉板
P L 63	椅子	P L 116	扉板・窓材？
P L 64	椅子	P L 117	床材
P L 65	椅子	P L 118	板壁板
P L 66	台	P L 119	板壁板
P L 67	飾り・ノ・素ワ・鉄釘の木柄部	P L 120	板壁板
P L 68	刀装具（把装具・鞘口装具・鞘尻装具）	P L 121	板壁板
P L 69	刀剣鞘	P L 122	板壁板
P L 70	刀剣鞘・盾	P L 123	壁木舞・垂木
P L 71	盾・家鏡	P L 124	垂木
P L 72	刀形	P L 125	垂木
P L 73	刀形	P L 126	垂木
P L 74	刀形・剣形	P L 127	梯子
P L 75	鍔形	P L 128	梯子・不明建築部材
P L 76	木鎌・小刀形・刀子形・その他武器形	P L 129	不明建築部材
P L 77	その他武器形・鳥形・馬形	P L 130	木樋・木釘・栓もしくは楔
P L 78	舟形・楕圓形・陽物形	P L 131	接合補助材
P L 79	笠形・鳥形？・輪形木製品	P L 132	接合補助材・樹皮巻・巻巻
P L 80	さしば形・産巾	P L 133	木圍・木札状木製品
P L 81	琴	P L 134	丸杭・転用杭
P L 82	琴	P L 135	棒状具
P L 83	琴柱・箆（ささら）状木製品・櫛	P L 136	棒状具
P L 84	下駄	P L 137	棒状具・板状具
P L 85	下駄	P L 138	板状具
P L 86	下駄	P L 139	板状具
P L 87	下駄	P L 140	板状具
P L 88	下駄	P L 141	板状具・その他不明品
P L 89	下駄	P L 142	その他不明品
P L 90	下駄	P L 143	その他不明品
P L 91	下駄	P L 144	その他不明品
P L 92	天祥棒・背負子？・鏡	P L 145	その他不明品
P L 93	腕・上印具・叩き板	P L 146	田下駄・糸持・曲物・形代・下駄・匙・垂木 接合補助材・板状具・棒状具
P L 94	食事具・火鍋臼		
P L 95	網杵・浮子？		
P L 96	船材		

I 前 言

第1節 木製品の出土の概略

本書で報告する木製品は、「考古学的に報告する必要を認める人工の木製遺物」という意味で用いており、厳密には製品とはいいたくない木製品や、製作工程で出てくる残材、枝を切り払っただけの木も含めている。

これら木製品は、そのほとんどが大溝SD1からの出土品で、次いで少量ながらSD1が流れ込んだ先とみられる落ち込みSR2からの出土品がある。このふたつの遺構で六六A遺跡出土の木製品はほぼ占められ、木製品の種類もほぼ網羅できる。これら以外の木製品としては、極く少量ながら柱穴に遺存していた柱根などが該当する。

SD1とSR2とは、上記のような地形との関係や存続時期、出土遺物の共通性からも一連の遺構と思われ、ともに弥生時代後期には堆積の開始が始まり、中世まで堆積が継続する。この間、弥生時代後期～古墳時代を中心とした時期は、井泉や礎敷、貼石等がSD1内に敷設され、大溝の利用が図られた。その中には、明らかに祭祀に関連すると思われる遺構（石組みの井泉等）や、祭祀遺物の廃棄の場としての利用も確認できる。

SD1には、各時代を通じて大量の上器・木製品類が投棄されているが、その一部は上述のように祭祀行為との関連での投棄ないしは設置も考えてよかろう。とはいえ、例えば木製品中の農具や建築部材など、その多くは特に祭祀行為との関連を考えなくともよいものである。従って、SD1は、時代を越えて物品投棄の場としての役割（祭祀遺物の投棄場としての役割もそのひとつ）があり、そこに時として祭祀の場としての役割も加わっていた遺構、とみるのが妥当であろう。

出土した木製品は、多岐の種類にわたる。このうち、出土状況的に何らかの意味が見てとれるのは、いずれもSD1内のもので、

- ① 組み合わされたままの状態で出土した家屋壁材
- ② 杭を打ち込んで板材を立てた施設

③ 石組み井泉に用いられていた転用材

④ 古墳時代中期の高塚とともに刀形や鐙形等の武器形が集中して出土した地点

等がある。このうち、①～③は何らかの施設として用いられた木製品、④は意図的に投棄された一群の武器形群ということになろう。しかしながら、他の大多数の木製品は、例えば多少建築部材等がまわって出土した地点等は存在するものの、基本的には出土状況的に特別の意味を見いだすことが困難なものである。このような出土状況等の詳細は、後刊の遺構・土器編を参照されたい。

なお、本分冊では、出土木製品の器種のほぼ全てを網羅できるSD1出土木製品を分類の基本として器種毎に掲載し、次いで量的には少量のSR2以下の木製品を遺構毎にSD1出土木製品での分類を準用して掲載した。

第2節 木製遺物の整理の概略

発掘調査から報告書作成に至るまでの木製品の取扱いについて、簡単に触れておく。

1 現地調査

現地調査では、木製品は出土状況等に凶化可能なものは凶化し、凶化しえなかったものは地区及び層序別の取り上げを行った。ただし、木製品の乾燥による劣化を防ぐため、写真撮影は個別写真あるいは小範囲の地点別の出土状況の撮影が中心で、SD1全体の木製品出土状況の撮影は行っていない。

取り上げを行った木は、即時に現地で洗浄を行って、明らかに自然木と思われるものは、サンプルとして残したものを以外は自然に返した。

調査1年目となる平成6年度の調査では、洗浄を行って人工物と認識した遺物は、その場で仮にA（実測を必要とする遺物）・B（余力があれば実測又は写真撮影を必要とする遺物）・C（実測・写真撮影は行わないが、明らかに人工物である遺物）の3つのランクに分別して整理所に持ち帰り、その後改めてランクをチェックし直した。本来、遺物に優劣をつけることは文化財の鑑賞からも奨められた

ものではないが、膨大な遺物量の簡明な整理作業を考えた場合、致し方ない面もあろう。

平成7年度の調査では、さらに整理作業（特に遺物実測作業）を円滑化するため、現地で洗浄後、A遺物をさらに器種別に分別して持ち帰った。

2 整理作業

持ち帰った木製品は、再度器種等の分別を行った後、順次器種別に実測作業を開始した。実測は、すべて原寸によった。実測においては、あくまでその木製品のもつ形態的特徴や加工・調整方法等を明示することを主眼とし、明らかに二次的な傷はできる限り省略、断面図以外への年輪表現は行わないことを基本とした。断面図へ表現する年輪は、全く実物のままだとはいかないまでも、その木製品の細かい木取りまで第三者が顕推できるよう極力実物に合致すべく努力した。なお最終的な実測点数は計1900点に上った。

木製品の登録は、あくまでこの実測番号（マイラー

毎に番号を与え、それを単位として枝番を与えたもの）がすべての基になっており、樹種同定や写真撮影もこの実測番号に従っている。実測に至らなかった遺物は、特に個別の番号は付与していない。

実測が終了した遺物は、樹種同定のための木片サンプル取りの作業を行った。この作業は、当初、金原正明氏によるご指導のもとで行ったが、最終的には一部の採取の難しい試料を除き、中勢道路整理所の業務補助員が中心となって行った。

木製品の保存処理についても簡単に述べておく。Aランク木製品は、上記の実測、樹種同定のサンプル取り及び処理前の写真撮影を行った後、予置措置が講じられ次第外部業者とPEG含浸法もしくは高級アルコール凍結法による保存処理を委託契約し、逐次保存処理を行った。CランクおよびBランクについては適宜写真撮影後に整理所内でPEG含浸法による保存処理を行った。

II 木製品の解説

第1節 本書における木製品の分類

1. 木製品分類の視点

土器と比べた場合の木製品がもつ資料的特性は、土器があくまで土で作られた容器であるのに対し、木製品は容器だけでなく木で作られた様々なモノがその対象として含まれることにある。もちろん、土器が個々にもつ属性の情報量の多様性はいうに及ばないが、木製品を土器と対置する場合には、あくまで木製品全体ではなく、木製容器類がその対象となる。つまり、「土器」と「木製品」とを対置することは、次元の異なるものを対置しているようなものである。

とはいえ、これまでの木製品研究が、農具など一部の器種を除いて土器研究の深化に対置しうるほど進んでいないもの事実である。これは、有機質遺物がもつ宿命的な問題、つまり、どの遺跡でも一律に出土するわけではないという普遍性の弱さ、保存していくことの困難さ、整理時の扱いづらさ等の資料が内在的にもつ制約よるところが大きい。それとともに、木製品は用途がわからない不明品が多く、こ

うした遺物が報告から漏れてしまうことが多いことも全体としての木製品研究の難しさを示している。

さらに木製品は、

- ①—製品が出土する場合
- ②—いくつかの部材が組み合わさってひとつの製品となっているべきものがバラバラの状態に出土する場合
- ③—製作工程時の木製品が出土する場合があり、さらに
- ④—それらが欠損したり転用された状態に出土する場合

も常であり、上記のいずれかから判断に迷うことになる。従って、先に土器と木製品を対置することの次元の違いをのべたのであるが、木製品分類に際してすら分類項目の次元が異なってしまうことがまま存在する。これは本書においても例外ではない。

例えば、用途の判明する木製品はその用途・機能で木製品を分類し、部材であっても製品同定が可能な部材は製品で分類しているのに対し、用途不明なものは製品であっても部材であっても、あるいはそのどちらかすら不明なものも形態的特徴に基づくと

類をせざるをえなくなる。なおかつその分類基準も、単に仕上がり時の形状を重視するのか(例えば「・・・状木製品」とするような例)、製作技法上の特徴を重視するのか(例えば、「指物」とか「削物」とするような例)等が報告者の見識や主観に拠ってまちまちになってしまうことは否めない。さらにいえば、用途同定を行っていた木製品ですら、その後の発掘や研究の進展により、それまでの同定が覆ることがないとはいえない(註1)。

また、上原真人が『木器集成』で指摘するように(註2)、主に民俗学的視点からの用途特定と、考古資料とが形態上の共通性からのみで対応とするのは仮説の域を出ない。

本書においては、こうした状況を鑑みつつも、遺物の名称の付与については、厳密な意味での考古資料としての扱いよりも、記述の煩雑さを避けて現在広く一般に名称が浸透しているものはそれに従った(たとえば、農具の「えぶり」や「泥除」は、鎌某類とすることなく、それぞれ「えぶり」「泥除」として扱った)。

さらに、今回名称を付与して報告する遺物については、その同定が将来的に覆るリスクを承知して、かなり復元的・積極的に用途なりを特定する方向を選んだ。もちろん、それらには遺物毎あるいは遺物群毎に適宜別のものである可能性等は併記しているが、それで完全というわけではない、それでも不明のものは多数残る。

この用途不明の木製品の扱いについては、出来るかぎり形態的特徴もしくは製作技法上の特徴から一括できる一群を単位として報告することに努めた。

部材や木製品については、最終的な製品の推定の可能なものは製品と一括して掲げ、杭等に二次的転用された場合でも、一次的用途の分かるものについてはそちらで扱った。

以上のように、六次A遺跡出土木製品の分類においては、分類基準の統一性よりも、用途判明品と不明品とが入り交じった状況にある多様多量の木製品の全体像をより簡便に捉えられる「分かりやすさ」を重視した。ご了解されたい。

なお、木製品に関する基本用語は、『木器集成図録 近畿原始篇』で使用されたものを参照したが、

分類項目や遺物群の括り方等では六次A遺跡の特性を考慮して、適宜独自の分類も取り入れた。

註

(1)例えば、これまで織機とされていたもの多くが、輪カンジキ型田下駄の枠材であることが判明したことなどが代表される。

(2)例言で述べたように、『木器集成図録 近畿原始篇(解説)』を本文中で使用する場合は『木器集成』、同様に『木器集成図録 近畿古代篇』を本文中で使用する場合は『木器集成 古代篇』とし、以下では特に註で断らない。

2. 六次A遺跡における木製品の分類

六次A遺跡出土の木製品について、SD1出土木製品の分類を基軸としてSR2出土木製品でこれを補充し、下記の21項目に分類整理した。

1. 農具(耕起具、収穫具、田下駄、編具)
2. 工具(鉄斧柄、小利器柄)
3. 紡織具(紡錘車、糸巻、織機)
4. 容器(列物、挽物、指物、曲物、その他)
5. 家具(案、椅子、台)
6. 武器・武具・馬具
7. 祭祀具(武器形、形代、斎巾)
8. 楽器(琴、籠状木製品)
9. 装着具(櫛、下駄)
10. 運搬具(天秤棒・天秤棒状木製品、背負子? 鞆)
11. 土木・作業用具(鍬、土甲具、叩き板)
12. 食事具(杵子状木製品、匙)
13. 発火具(火鎌白)
14. 漁撈具(網杵、浮子?)
15. 船材(準構造船)
16. 建築部材(柱材、鼠返し、水平構造材、扉11 表置、窓材?、床材、壁材、屋根構造材、梯子、不明建築部材)
17. 木樋・木樋状木製品
18. 接合補助材・栓、把手(木釘、栓もしくは楔挿入タイプの留具か把手、繫縛タイプの留具、ソケット状木製品、樹皮巻、巻巻)
19. 木簡・木札状木製品
20. 杭材
21. 不明品・残材(棒状具、板状具、その他)

以下、この分類に基づいて遺構毎に出土木製品の解説を加えていく。

第2節 SD1出土木製品

先にも記したとおり、遺構毎の出土木製品といってもそのほとんどはSD1出土木製品である。従って、ここでは、器種毎の分類や特徴の提示を行ったうえで、必要に応じて個々の遺物の特徴に触れていくことにする。

1 農具

農具は、実際に耕地の開墾や開墾、耕作等に使用する耕起具と田下駄、収穫や脱穀、製粉の際使用する収穫具、及び、必ずしも農具に限定できるものでもないが、農作業時に使用される籠等を作る編具がある。

(1) 耕起具

耕起具は、まず鍬と鋤とに大別される。そのうえで鍬は、柄が真っ直ぐな直柄鍬と柄が曲がる曲柄鍬に、鋤は一本鋤と組合せ鋤とに分かれ、さらに穂先の形態から平鍬鋤か叉鍬鋤等に分かれる。

三重県出土の耕起具については、すでに大川勝宏による分類がある(註1)。大川分類は、あくまで身の形態を分類の中心に据えているが、ここでは柄と身の装着方法でまず分類し、次いで身の形態で細分する。

① 直柄平鍬(1~23, PL1~5)

直柄平鍬は、一般に刃の長さから広鍬と狭鍬に分かれる。広鍬と狭鍬の分別は多分に流動的であるが、ここでは『木器集成』の区分に従い、身の幅が15cmを境としてそれ以上を広鍬、それ以下を狭鍬として扱う。

そうした場合、本遺跡の出土例では、柄孔隆起が舟形で、泥除装着用の蟻溝を有するものは身幅15cm以上の広鍬であり、柄孔隆起が顕著でなく(つまり柄孔周辺があまり影らまない)、蟻溝がないものは身幅15cm以下の狭鍬となっていて、大きさと形態とが対応している。

本遺跡で出土する広鍬は、身の頭部両側縁に抉りを有するタイプと、抉りを入れないタイプが存在する。抉りの入るタイプは、抉りの形態によって2細分できる。抉りを入れないタイプは、完形品は出土しておらず、木製品でのみ確認できる。

狭鍬は、1種類のみが出土した。

以下、木製品の知見も含め、広鍬3種、狭鍬1種に細別する。

広鍬A類 頭部に鋭角状に短く内側に切れ込む抉りをもち、刃部側縁はゆるやかな丸みをつもの。舟形隆起は明瞭で、泥除装着用の蟻溝をもつ(1~6)。

広鍬B類 頭部側縁部が緩やかに抉られ、刃部側縁に向かって外反しつつ広がる。頭部端部も緩やかに抉りを入れる。刃部側縁部は、比較的直線的である。舟形隆起、泥除装着用の溝をもつことなどはA類と基本的に同じ(7~8)。

広鍬C類 木製品でしか確認していないもので、狭い頭部から刃部に向かって広がり、中央あたりで平行するかたちとなって刃部端部へ至る抉りのないタイプ。『木器集成』では「広鍬V式」として分類されているもの。舟形隆起はまだ作りだされていないか、あっても低いものであろう。蟻溝の有無は不明(16~18)。

狭鍬 身幅が15cm以下の鍬で、舟形隆起は顕著でなく、蟻溝はない。柄孔は、頭部端部に偏ったところに穿たれ、身は頭部から刃先に向かってやや窄まり気味となる。形態から、機能・用途的には深掘用の耕作具としての役割にも対応しうるものであろう(14~15)。



図1 直柄平鍬の分類

広銀A類及び広銀B類に穿たれた蟻溝に対応する泥除は、本巻で泥除A類（後述）としたものに対応する。

9～13は、全体の形状は不明であるが、A類もしくはB類になる広銀であろう。

16～23は木製品である。このうち、16～18は、形状の特徴から広銀C類になる未製品と思われる。また、22～23は、木取りや形状から、本類の未製品の可能性があるものとしてここに掲げた。

② 直柄又銀(24～25、PL5)

六A遺跡出土の耕起具のなかで、柄孔部分まで残存し、穂先に直柄又銀と認定できる遺物は極めて少なく、1点のみである。その他、鋤等の可能性もあって不確定要素は残るものの、直柄又銀の可能性がごく少数存在する。

ほぼ全体形を知りうる個体(24)は、やや縦長の半円形の頭部に方形柄孔をもち、頭部は刃に比べて厚いものの頭部に明確な舟形隆起は持たず、方部は4本歯となるものである。装着角度は、約72°で、『木器集成』掲載の諸例と比較すると若干急角度である。

③ 横銀(26～33、PL5～7)

平面長方形で、中央部に浅い柄孔隆起をもち、楕円取りではあるものの、木目が横方向に通る。

直柄広銀のような泥除装着用の蟻溝をもつものはない。従って、六A遺跡出土の横銀の場合、泥除を装着するには26のように泥除と横銀の頭部両端を穿孔し、そこに板皮巻を巻き付けて両者の分離を防いでいたものと思われる。

なお、未製品ではあるが、頭部に段を作りだしている横銀(29～30)があり、この場合にはその段に泥除が組み合う可能性がある。ただし、こうした例は、『木器集成』では紹介されているものの、本遺跡の出土例はあくまで未製品であり、製品化する過

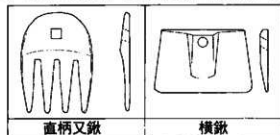


図2 直柄又銀と横銀

程でその部分が溝り取られた可能性も否定できず、最終的には製品でないこと決定できない。

横銀の出土数自体はあまり多くないが、未製品の占める割合の多いことがひとつの特徴で、特に29と30は、身を上下にしてセットで出土した。

④ 泥除(26・34～61、PL5～10)

銀をうち下ろした際に飛び散る泥が体や頭が付くのを防ぐものが泥除である。横銀やえぶりと同様、木目は基本的に横方向に通る。直柄広銀もしくは横銀とセットになる。六A遺跡出土の泥除は、以下の2種である。

A類 直線的な頭部の断面が前に向かって三角突帯状に作りだされたもので、頭部以下はやや下広りの不整形形を呈する。頭部の突出部は、直柄広銀に穿たれた泥除装着用の蟻溝と組み合う。『木器集成』で「泥除Ⅱ式」とされているものに相当する(34～43、破片もしくは未製品44～52もその可能性がある)。

B類 上端(頭部)と下端が直線的で、両側縁が下広りに丸みをもって広がる横長台形状の形態をとり、頭部を作りださず、真直ぐに終わる。上端両脇には方孔が穿たれ、横銀に穿たれた方孔と板皮巻等で緊縛されて接合する。『木器集成』で「泥除Ⅱ式」とされるものに相当する(26・53～61)

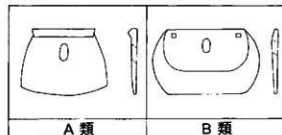


図3 泥除の分類



写真1 横銀と泥除B類のセット(26)

B類泥除のなかには、方孔の穿たれないものも存在しており、これらは泥除を受けるための段を頭部にもつ横線に対応する可能性がある。この場合は、緊縛用の方孔が必ずしもなくてもよい。六人A遺跡でも、前述のように未製品ながら頭部に段をもつらしい横線が存在するが、方孔の穿たれないB類泥除は最終段階の穿孔を施していない未製品の可能性もあり、不確定要素を含んでいる。

泥除は、横線とならんで突起具のなかでは製品として出上したものは少なく、圧倒的に未製品が多いのが特徴である。これらには、泥除製作工程の各段階を含んでいる。これらを製作順に記すと、

- 1 泥材を作る
- 2 最終的な形にあわせ、大きく外形のプランに削りだす
- 3 全体を削り込んで形を整え、頭部を作り出すものは作り出す
- 4 装着角度に合わせ、柄孔を穿つ

という工程が復元できる。

また、使用途中で割れたため、小円孔を穿って割れを緊縛したらしい個体もままみられる。

⑤ えぶり(62~64, PL10)

『木器集成』では横線の種類として扱っている器種であるが、本書では、直柄形態をとる横木取りで横長形状の突起具で、鋸歯状の刃部をもつものを、一般的な用例に従い、「えぶり」とした。

六人A遺跡出土のえぶりは、破片資料のみで完形品はない。唯一かろうじて柄孔の一部が残存した62をみると、柄孔は方形であったようで、装着角度はほぼ90°に近い。

出土点数も3点と少ないが、刃部形状から以下の2類に分かれる。

- A類 谷部に平坦部を持たず、鋸歯が連続するもの(62~63)
- B類 鋸歯の谷部に平坦面をもつもの(64)

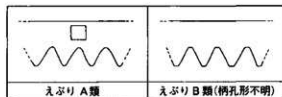


図4 えぶりの分類

⑥ 棒軸形曲柄平線(65~83, PL10~12)

曲柄線は、軸部の形状から、棒状の軸部をもつ棒軸形の曲柄線と、軸部がいわゆる「ナスビ形」を呈する曲柄線とに大別でき、それぞれが平線と叉線をもつ。

これらの形態分類を行うにはいくつかの視点がある。まず、刃に鉄刃を装着するかどうかを含め、用途・機能面を規定するものは刃部の形状であろう。また、曲柄部と緊縛する軸の形状も重要である。しかし、軸部は欠損していることも多く、ここでは軸部から刃に至る形状と刃部形状に注目して形態分類を行い、次に軸部をみていくこととする。

棒状軸形曲柄平線は、出土層位が弥生後期~古墳時代初頭の層が中心で、六人A遺跡では以下のように分類できる。

A1類 軸部と刃部の境は明瞭で、刃部(刃部上端)が平坦となる。刃部は下膨れで、肩部幅よりも刃部幅のほうが大きい。『木器集成』で「曲柄平線C1式」とされているもの(65~68)

A2類 軸部と刃部の形状はA1類と同様であるが、刃部最大径がほぼ刃部の中央部にくるもの。刃部は全体に細身(69~71)

B類 軸部と刃部の境は明瞭であるが、肩部が山形に下がり、刃部側縁が直線的で、肩幅と刃部幅がほぼ等しいもの。『木器集成』で「曲柄平線C2式」とされているもの(72~75)

C類 いわゆる刃部がなく、軸部からゆるやかに外反しながら刃部上端へ至るもの。刃部両側縁は直線的で、平行する。『木器集成』で「曲柄平線C3式」とされているもの(76~80)

D類 軸部と刃部の境は明瞭であるが、肩部は無で肩で、刃先まで緩やかに丸みをもって移行するもの。刃部は幅広で、肩部の丸い羽子板状を呈する(81~82)

E類 軸部上部が欠損しているため不確定要素を残すが、緩やかに外反してきた軸部が屈曲して直線的に平坦な肩部に下がる形

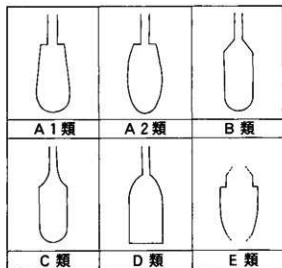


図5 棒軸形曲柄平鍬の分類

状をとる。ナスビ形の変異かとも思えるようなイレギュラーな形状(83)

以上のうち、刃部に確実に鉄刃が装着すると思われる個体はなく、棒軸形曲柄平鍬の盛行時期が特にU字形鉄刃の出現時期よりも前であることを示している。

また、A 2 類の一部には、刃幅の狭い狭鍬といえるものがあり(70等)、この個体については用途・機能性には耕作よりも開墾作業等に向く器種といえる。

軸頭部の形状は、いずれも内側(曲柄部との接合部)は平皿形であるが、外面の形状には以下のようなバリエーションがある。

- a 類軸頭 上面と内側縁を削り込んで頭部を作り出したもの
- b 類軸頭 上面に抉りを入れて溝状に掘り窪めたもの
- c 類軸頭 凸形に内側縁を落とし、さらに上面も段状に削り込んだもの

軸頭部の遺存例がいいとはいえないため、確定的なことはいえないが、現況の資料に拠る限り、a 類

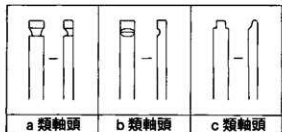


図6 曲柄鍬の軸頭部形態

軸頭はA類、b類軸頭はA類及びB類、c類軸頭はA類及びB類で使用されていることが確認できる。

① 棒軸形曲柄又鍬(84、PL12)

曲柄又鍬は、圧倒的にナスビ形の軸をもつものが多く、軸部から刃部まで残るもので棒軸形の又鍬と確認できる例は1点のみである。

確認できた個体(84)は、軸部と刃部の境が曲柄平鍬A類と同様に刃部に平坦面をもち、二股となる刃部が逆V字形となって最大径が刃部下部分にあるもので、軸端部はa類軸頭をもつ。『木器集成』で「曲柄又鍬C1式」とされているものに相当する。

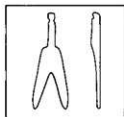


図7 棒軸形曲柄又鍬

② ナスビ形曲柄平鍬(85~97、PL12~13)

ナスビ形曲柄平鍬は、六人A遺跡出土の耕起具の主體となる器種である。

ナスビ形曲柄平鍬についても、棒軸形曲柄平鍬同様、Eに軸部(空部)と刃部の境の形態と刃部形状をもとに分類した。

- A類 笠の下のくびれから内湾気味に刃幅が増していくもの。刃部下平部を欠損するものが多いが、下膨れ形状の細長い形態が多いと思われる。『木器集成』で「曲柄平鍬D1式」とされているものに相当する(85~89)
- B1類 笠の下のくびれから外平し、途中で屈曲して直線的に刃端部に至るもの。『木器集成』で「曲柄平鍬DIII式」とされているものに相当する(93~94)
- B2類 笠部形状はB1類と変わらないが、刃部側縁にU字形鉄刃装着用の抉りをもち、刃部中央に二等辺三角状のスリットを有するもの(95)
- C類 笠部下のくびれはB類と同じであるが、軸頭頂部が細長くなく平皿に終わり、笠部中央に曲柄と接合するための栓孔をも

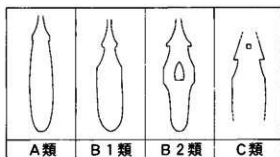


図8 ナスビ形曲柄平鍔の分類

つもの(97)

軸頭部の形状は、全体に欠損部が多いため不明な点が多いが、91のように軸頭部を有頭状に削りだすか、もしくはそれに加えて柄との装着面とは反対側を一段削り落とすことを基本としていたものと思われる。

A類のなかには、刃長が50cmを超える長大なものがある(85)。このような長大な例は、後述のナスビ形曲柄又鍔にも存在するが、大川勝宏はこうした例については鍔ではなく鋤として使用された可能性を指摘している(註2)。

大きな流れとして、A類からB類は時間的に変遷していく同一の組列上に並ぶものと思われる(これは後述のナスビ形曲柄又鍔も変遷の方向性は同じ)、A類からB類への移行は漸移的である。例えば、88~89はここではA類に指定したが、これらは85~86の一群と93~94の一群の中間的形態を取る。

なお、90~92・96は破片資料のため、詳細は不明である。特に92については、棒軸形曲柄平鍔の可能性もある。しかしながら、90は本類とした場合、85と同様にA類のなかでも長大なタイプになる可能性がある。

また、96については、身の断面形状からU字形鉄刃を装着するタイプと思われる。その場合、時間的に棒軸形曲柄平鍔とするよりはナスビ形曲柄平鍔としたほうが時間的な整合性があるものと判断し、本類に指定した。ただし、B2類のように身の中央にスリットをもつタイプかどうかは不明である。

③ ナスビ形曲柄又鍔(98~127, PL14~15)

六人A遺跡出土のナスビ形曲柄又鍔は、確認できるものすべてが「段鍔で、三又鍔は存在しない。

これまでの曲柄又鍔の例と同様、軸部と刃部の境の形態と刃部形状によって分類する。

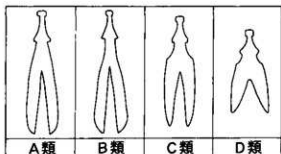


図9 ナスビ形曲柄又鍔の分類

A類 等の下のくびれから刃部中央もしくは刃端部まで内湾しつつ幅を広げながら延び、刃部最大径が中央もしくは刃部下方にあるもの。『木器集成』で「曲柄又鍔D1式」とされるものに相当する。刃の長さが50cm前後の長大なものが多い。刃部幅のほうが軸部幅よりも大きいものの、それほど差はない(98~102)

B類 等の下のくびれから一端外湾気味、もしくは直線的に外側に延びた後、屈曲く内湾傾向に移行するもの。A類とC類の中間形態をとる(103~105)

C類 等の下のくびれから外湾しながら幅を増して、刃部の途中で屈曲してその後は直線的に刃端部に至るもの。『木器集成』で「曲柄又鍔DⅢ式」とされるものに相当する(106~117)

D類 基本構造はC類と共通するが、等部の下を狭く込んだような形状となっており、刃部が小さなもの(125~127)

なお、118~124は、軸部が残存していないために棒軸形になるのかナスビ形になるのかは確定できない。しかしながら、前述のように六人A遺跡で確実に棒軸形曲柄又鍔と確認できる個体は1個体だけであることや、刃部のカーブの形状等からもナスビ形曲柄又鍔の刃部としたほうが妥当と判断されたため、ここに指定した。ただし、等部が遺存していないため、本類のどれに相当するかなど詳細は不明である。

軸頭部の形態がわかるものは、内側を平削りにして横長楕円形の有頭部を作ったもの、さらにこれに加えて外側(装着面の反対側)を削って段を作り出したものがある。この場合の頭部は、上述の棒軸形曲柄又鍔のA類棒軸でみたような予め棒軸部があっ

そこを削り込んで頭部を作り出したものではなく、逆に軸部のほうを削り込んで有頭部を削り出したものといえよう。

A類からD類に至る等部下の括れ形状は、袈りのないもの(A類)から大きく緩やかな袈りが入り(B類)、それが次第に短く急角度の袈りとなっていく変遷の過程として捉えることができ、ひとつの組列に乗るものと判断できる。

⑩ 曲柄鎌の柄(128~137、PL16)

六丈A遺跡出土の曲柄には、膝柄(128~129)と反柄(130~137)が共に存在し、量的には反柄のほうがやや多い。鎌に限らず、農具の場合、柄を認定するには身と接合する台部が残っていないと判断が難しいが、それを差し引いても六丈A遺跡では鎌身の量に比べて柄の出土量が少ない。

反柄のなかには鎌身との接合に紐による緊縛だけではなく、台部に方孔を穿って栓で止める仕事をしたもの(135)が見られる。これは、本書でナスビ形曲柄平鎌C類(97)とした鎌身に対応すると思われる。こうした栓止めの手法は、当地域では珍しい。

これとは別に、台部への方孔の有無は不明であるが、台部に近い柄の下部に2つの方孔をもつものが存在する(136~137)。これは、鎌身と台部との接合用とするよりは、使用時の鎌身の挿れ止め等の機能を考えたほうがよからう。

⑪ 払い鎌(138~139、PL16)

直柄タイプの鎌であるが、鎌身の横断面が低い台形で、木目が横線や乱線と同様に横方向に通り、刃が先端ではなく両側縁にあるものを、山田昌久の教示に従い、払い鎌とした。着柄角度は、約 110° ~ 120° と鈍角である。草類を払うために使用されたことが一応考えられるが、現状では両側縁にさほどシャープ感はない。

⑫ 一木平鋤(140~145、PL17)

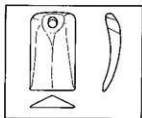


図10 払い鎌



図11 平鋤の分類

六丈A遺跡の一木平鋤は、鋤身の肩が直線的に水平もしくは水平に近くなる角肩タイプで、平面形はほぼ長方形になるものである。完形品で把手まで遺存している例はないが、未製品(143)の知見や140が一木平鋤の把手とすると、把手は中央に孔が開いた逆平円形の把手(『木器集成』で「鋤柄把手V a型」とされるもの)になる。

未製品ではあるが、ほぼ全体形のわかる143は、鋤身の長さとして把手を含めた柄の長さはほぼ1:1の割合となっている。

なお、六丈A遺跡では、一木鋤で確実に又鋤になる例は確認していない。

⑬ 組合せ平鋤(146~153、PL17~20)

組合せ平鋤には、鋤身の肩が水平となる角肩タイプのもので、未製品ではあるが肩部分が丸くなる丸肩タイプのもので確認できる。

鋤身の着柄(柄と鋤身の接合)方法の差異から、以下の二つのタイプに分類する。

A類 身の中央上方に2孔を穿孔してその間に繩状の溝を設け、その部分と身に作りだした着柄軸との2か所で柄と身を緊縛するタイプ。『木器集成』で「紐結合法」とされるもの(146)

B類 鋤身上部中央に着柄軸から斜く先端を鉤状にした繩状の溝を掘って、そこに組み合うよう先端を斜めに切り落とした柄を嵌め込み、さらに身の上方に延びた着柄軸と柄とを緊縛したもの(147~153)

上記のうち、B類は『木器集成』で「柄結合法」とされるものに類似するが、本例では鋤身に柄を挿入しないため、別タイプとして扱った。身に溝が存在しない151や152等は未製品であろうか。

なお、B類の149は、鎌身に柄が着柄された状態



写真2 鋤の身と柄の緊縛 (149)

で出したが、我々の不注意により、不幸にして、現場での洗浄時に着柄軸と柄を緊縛した紐を解かれてしまい、その紐も行方不明になるという事態が生じた。そのため、実測図に併置した紐の入った図は出土状況時の写真及び土状況図から復元した見取図であることを所っておきたい(写真2参照)。

また、148や152は、着柄仕口がなく、一木平鋤かとも思われたが、柄の断面が方形で、着柄軸と考えられたので、組合せ平鋤の木製品とした。調整を見ても、片側が和柄のみで仕上っており、この推定を裏付けている。ただし、153はやや根拠が薄弱である。

⑬ 組合せ又鋤(154~155、PL20)

確実なものとしては、5本歯の又鋤(154)が1点存在するのみである。

上述のA類による着柄法をとるが、方孔部分を別段溝状に掘り込んだりはしていない。若柄軸での緊縛紐は残存していなかったが、鋤身に穿孔した方孔部分では、身と柄を緊縛していた樹皮も残る。方孔と樹皮の間には別材が残存していて、板皮を方孔に通して身と柄を緊縛した後、樹皮と方孔の隙間に別材を埋め込んで樹皮が緩み解けるのを防いでいたことがわかる。

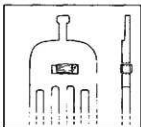


図12 組合せ又鋤

なお、このタイプの又鋤は、東海地域にしばしば散見されるものである。

155は、154との形状の共通性からここに併定したが、方幅が一定しておらず、鋤とするよりは權などの可能性もある。

⑭ 不明鉄鋤類(156~174、PL21)

樹種(カシ等の広葉樹)や木取り(炬目取り)、形状から鉄鋤類の身であろうと推定できるものの、遺存状況の悪さからいずれとも峻別できないものを一括した。製品の破片と、鋤類になるであろう木製品の破片とがある。

174は、柄からそのまま続く身の受け部をもっており、片側に湾曲した部分で身と緊縛した組み合わせタイプの長柄鋤である可能性を一応考えたが、装着される鋤が平鋤なのか又鋤なのかは不明である。先端が厚く残っていることから、木製品である可能性も残る。ただし、本例は他遺跡でも散見されるものの、明確に鋤身と伴ってはおらず、權など別のものである可能性もある。

(2) 収穫具

農作物の刈り取りに使用する鎌、収穫物を脱穀するための「F・杵・槌籠」、製粉の際に使用する捏台を収穫具として一括する。

① 鎌(175~180、PL21)

身に鉄を使用した鉄鎌の柄と思われるが、鉄は残っていない。以下の2形態が認められる。

A類 基部を有頭状に作りだして先端を斜めに切り落とし、全体的に屈曲をもたせた作りのもの(180)

B類 基部形状はA類と同じであるが、全体的に直線的な形状をとるもの(176~179)

B類は、柄の基部の部分しか遺存していないが、有頭状に作りだした基部形状が180と共通していることから、鎌とした。

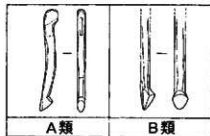


図13 鎌柄の分類

また、175は、柄頭部の鉄片装着部の装着孔が削れたものと理解し、鎌に拵いたが、別の部材の可能性も残る。

② 臼(181~183, PL22)

六人A遺跡出土の臼は、胴部がくびれて鼓形の形状をなすいわゆる大型臼であり、『木器集成』いうところの小型臼は存在しない。しかし、高さは極めて低平ながら口縁部が厚みをもった小形の鉢状のものは出土しており、これらは臼とは別に「捏台」として後述する。

臼は、口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、台部は反反しながら外側へ開く形状をなし、口縁部径よりもやや底部径を大きくして安定化を図っている。手筈調整による粗い作りであるが、底部の外面や口縁上端もしくは外端には面取りを施している。

唯一ほぼ全体形を知りうる181は、高さ42.5cmを測るが、他はそれよりやや大きめの法量をもつようである。

③ 堅杵(184~211, PL22~25)

六人A遺跡では、未製品も含め、堅杵の出土は多い。出土する堅杵は、すべて胴部の中央に筋帯を持たないものである(『木器集成』で「C類」とされるもの)。このタイプを、『木器集成』の分類にそのまま従い、搦部と柄部の境の形状をもとに2細分する。

C1類 搦部が円柱状を呈し、搦部と柄部との境が明瞭で、搦部から握部への移行部があるもの(184~185)

C2類 搦部が円柱状を呈し、搦部と柄部との境は明瞭であるが、とくに明瞭な搦部と柄部の移行部はもたず、柄部全体が曲線的に推移するもの(186~192・194~201・205~207・210~211)



図14 堅杵の分類

C3類 搦部端部が最大幅をもち、そこから連続的に細くなって、搦部と柄部の境が不明瞭なもの(193・202~204・208~209)

搦部先端部の形状には、平田なもの、丸いもの、円錐状に尖り気味なもの3形態が認められる。これらは、対応する臼等の形態に規定され、また村上由美子が詳細に明らかにしたように、対象とする種類の種類や作業内容・方法が異なるためと思われる(註3)、とくに上記の形態分類と明確な対応関係にあるわけではない。

ただし、搦部が両端とも遺存した200~203(未製品と思われる208と209を除く)のうち、C2類の200と201では先端部形状が両端とも同形態であるのに対し、C3類の202と203では一方が尖るのに対してもう一方が丸くなっていて、搦部両端の形状が異なっている。このことは、数少ない例からの類推ながら、六人A遺跡ではC3類が複数目的の用途に使用されていたことを示すものといえよう。

なお、搦部の長さにかんがった差異があるが、これは形態差の他に、どこまで使い込んだかを示すものであろう。

④ 小堅杵(212, PL25)

形状的には、細長いタイプの横槓といえなくもないが、先端が丸くなってそこを使用したと推定できるため、小型杵とした。堅杵のように、握部を挟んだ両側に搦部がくるような杵ではなく、縦方向に使用する細長い横槓状の形態をとっていたものと思われる。ただし、先端部を使用していたとはいっても、搦部側縁は使用しなかった、あるいは使用することを全く想定外だったとはいい切れず、横杵との弁別は流動的である。

⑤ 横杵(213, PL25)

弥生~古墳時代の横杵は類例が少ない。そのなかでも搦部と柄部を別材とする組合せ式の横杵は、木式の横杵と比べて機能的な点から、やや杵としての使用には不向きで、田畑の整地や砕土など別の機能も指摘されている(『木器集成』)。

六人A遺跡出土の横杵は、この組合せ式の横杵であり、隅丸方形の断面形を呈する搦部の中央より少し偏ったところに方形の柄孔があく。搦部はやや先細りで、端部は平皿である。組合せ式横杵としては

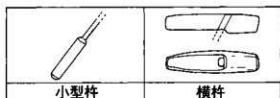


図15 小型杵・横杵

若柄角度はやや急角度で、約66°を測る。

⑥ 横杵(214~224、PL25~27)

六太A遺跡出土の横杵は、出土数が少ない割にはバリエーションが多い。

横杵は、『木器集成』では渡辺誠の説(註4)を引くかたちで横杵を主に身(敲打部)の形状による横杵の機能差に言及している。そこで示された分類は、主に身の太さと長さを重視したものである。

機能を重視した場合には当然そうした分類が有効であろうが、太さと長さの割合にはその分別が流動的な側面をもつこともまた否めない。ここでは、六太A遺跡出土の横杵について、こうした視点も考慮しつつも、長野県石川集里遺跡での木製品分類(註5)を参考として、柄部を作りだす肩部の形状や柄部形状を重視して分類する。

横杵A類 円筒状の身部から明瞭な肩部を作り出さずに柄部に緩やかに移行し、先端にグリップを削りだすもの(214~215)

横杵B1類 円筒状の身部と柄部の境が明瞭で身部から柄部が斜めに削りだされるもののうち、柄部がやや短く先端へいくにつれ太さが増すもの(216~217)

横杵B2類 身部から柄部の境まではB1類と同じであるが、柄部がやや長く、真っ直ぐ延びるもの(218~220)

横杵B3類 円筒状の身部と柄部の境が垂直に移行するもの(221~222)

横杵C類 身部と柄部の境はB1類と同じであるが、身部が先端へ向かって太くなる円錐形を呈し、柄部先端をグリップ状に削りだすもの。小形品の精製品(223~224)

以上のうち、A類の214は、仕上げの磨痕跡が顕著で未製品の可能性があり、B3類の222は形造的

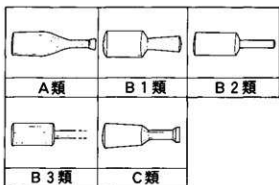


図16 横杵の分類

には横杵であるが、身部先端を使用しづらい痕跡があつて、手杵としても使用された可能性がある。

C類は、古墳時代中期の滑石製模造品の横杵と同形態であり、長野県石川集里遺跡では祭祀場からの出土が指摘されている。

『木器集成』による分類との対応をみると、本書分類のA類は「豆打ち用」とされる『木器集成』のE類に、本書分類のB1類とB3類も「豆打ち用」とされる『木器集成』のB類に、本書分類のB2類は主に藪打ち用される『木器集成』のA類にほぼ相当する。

なお、C類は、『木器集成』の分類では該当のものがない。

⑦ 手杵(225、PL27)

大きさや形状的には横杵とさほど変わらないが、身と柄が別材となった組合せタイプである。身部先端に敲打痕が顕著に残るのに対し、身部側縁は製作時の調整が面取り状に残るものの、使用した形跡が認められないことから、横杵とせず、手杵とした。

柄の断面は方形で、身は端部に溝が全周して有頭状に作り出されている。

⑧ 控台(226~228、PL27)

口はど深さはないが、断面形が厚い皿状を呈し、内面が滑らかなものについて、粉を捏ねるための控台と考えた。食事・調理具として分類すべきかもしれないが、用途に若干の不確定要素も残るため、口縁部の端部が肥厚し、上端もしくは側縁を切り

落として成形したもので、F1とするには全体に浅く、浅鉢状の器形になると思われる。ちょうど小麦粉やそば粉を捏ねるための器を想定するとよいであろうか。

なお、上ド2段の三重構造になった228は、本類とする積極的な根拠も乏しいのであるが、上段の内面は滑らかに仕上げられており、この点では上記の例と共通する。機能的に同様のものとするならば、上段が捏ねる部分、方形孔の開いた下段部分は別材をその方形孔から地面に突き刺して全体を固定するための脚台とも考えられる。あまり類例を見ないため、捏台以外の全く別の用途のものである可能性も残る。

(3) 田下駄

田下駄は、水田で履く履物のうち、足を浮かせる機能をもつもので、全体の形状から、足板のみからなる単純田下駄と長方形の板を十字形に組んだ上にあわせた枝を凹形に凹して止めた凹形枠付田下駄(輪カンジキ型田下駄)に2大別できる。

また、これらとは別に、厳密にはいわゆる田下駄とは機能が異なるが、水田で履く履物として、代掻き・緑肥踏み込み用の四角に組んだ「方形枠付き田下駄」(大足)がある(註6)。

本誌では、水田で履く履物として、以上3種の水田用履物を一括する。

『木器集成』では、輪カンジキ型田下駄や方形枠付き田下駄といった組合せタイプの田下駄が組合わさったままの状態で出土することがほとんどなく、また足板以外の部材が確実に田下駄の部材と同定することに困難が伴うことから、分類視点の中心に足板をすえて集成・分類している。

しかしながら、本稿においては、『木器集成』の分類を考慮しつつも、先ず田下駄の3大別の分類に従って区別し、その上で足板の形状をみていくことにする。

六丈八遺跡出土の田下駄には、単純田下駄がほとんどなく、輪カンジキ型田下駄もしくは方形枠付き田下駄が大部分を占める。

① 単純田下駄(229~232、PL28)

完形のものはなく、ごく少数その可能性のある破片が存在するのみで、これらとて輪カンジキ型田下

駄の足板である可能性も残る。

一応、単純田下駄として考えると、側縁部の一部が遺存したもので、側縁と穿孔位置に近いことから縦長タイプの4孔式の足板になるものと思われる。足板の前部がやや広いのが特徴である。

② 凹形枠付田下駄(233~257、PL28~29)

凹形枠付き田下駄(輪カンジキ型田下駄)は、足が直接乗る足板とその下に十字形に組まれる横木、それらの先端を凹形に被う凹形枠(輪)から構成されるが、凹形枠が確認できる例はほとんどなく、六丈八遺跡も例外ではない。

足板については、方形枠付き田下駄の足板との峻別が問題となるが、縦長長方形の長軸部両端に凹形枠との緊縛のための穿孔や挟り、木釘等をもつものを輪カンジキ型田下駄の足板として扱った。緒孔はすべて3孔式である。凹形枠との接合方法の差異から、以下のタイプに分類した。

A類 縦長8角形を呈し、両端に2個ずつの木釘で凹形枠を止めるもの(233)

B1類 縦長長方形の両端側面を内湾気味の山形に切り落とし、その上下端に緊縛用の穿孔を2個ずつ入れるもの(234~235)

B2類 全体の形状はB1類に近いが、上下端の緊縛用の穿孔が1個ずつで、全体形もより細長くなるもの(236~237)

C類 縦長長方形の上下両端からやや真ん中寄りに入った両側縁に挟りを入れ、緊縛用としたもの(239~242)

D1類 縦長長方形の上下両端に2個ずつの緊縛用の穿孔をもつもの。縦長とはいえず、輪カンジキ型田下駄の中ではやや扁平なものもある(243~245)

D2類 縦長長方形の上下両端中央に1個ずつの緊縛用の穿孔をもつもの。D1類よりはやや細長い(247~248)

なお、246は、D1類もしくはD2類と思われるが、緒孔が3孔以上あり、何方が先かは不明ながら再利用を行って前後を逆にし、右足用と左足用を取り替えて使用した時期があったようである。

249~251は、田下駄とする積極的な根拠には乏しいが、全体形や穿孔位置から、未製品も含め、本類

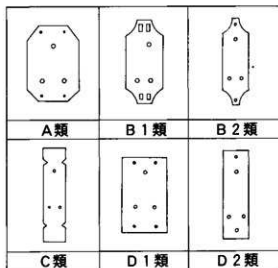


図17 円形枠付田下駄の分類

の足板の可能性があるものと判断した。

また、横木（252～257）については、秋山浩³の指摘（註7）に従い、横長扁平の板で、先端両側に抉りを入れて有頭状としたものを横木とした。

ただし、この材は、これまで織機の布巻具（チネリ）もしくは経巻具、あるいは中筒とされてきたものである。秋山の指摘のように、静岡県山木遺跡では出土状況からも輪カンジキ型田下駄の横木とするのが妥当としても、その他の全ての遺跡出土の同材も山木遺跡同様に横木であるとは現時点では断定しきれないほうがよからう。というのも、この材が織機の部材としても使用可能ということは竹内晶子の実験的研究（註8）でも指摘され、また現在まで残る高機の部材にも同様の材が使われているからである。特に部材の場合、形態上よく似ていても全く別の機能があることはありうることであろう。

従って、本書では上記のような特徴を持った材を輪カンジキ型田下駄の横木に指したが、その一部が織機の部材である可能性までも否定するものではない。これらの最終的な固定については、今後、原始機や原始的な地機が組み合せて出土した時に決定されるべきであらう。この問題に関しては、紡織具のところでも後述する。

③ 方形枠付田下駄(258～307、PL29～31)

方形枠付田下駄は、通常4種類の部材から構成される。縦方向に置く足板（1枚）、足板両端を挿入するための納孔付き横木（2本）、横木を挿入するために縦方向に置く枠材（2本）、及び枠材の上下

を横方向に繋ぐ枠木（不定複製）である。

足板は、確實なものとしては確認していない。しかし、輪カンジキ型田下駄の足板として扱ったもののうち、片側が欠損している239は、やや厚みが薄いものの、縦長長方形で3孔の精孔をもち、先端部を長方形に削りだしており、納孔付き横木に挿入するための足板として使用された可能性もある。

これに対し、納孔付き横木(258～266)は、明瞭に確認することができる。頂部が平川な低い山形を呈し、足板先端部を挿入するための長方形の納孔が中央部に穿たれたものである。枠木への挿入軸は欠損しているものが多いが、258では山形傾斜部からそのまま続く軸が横工字状に、262では山形傾斜部から一端屈曲して凸状に挿入軸が突き出していることがわかる。

枠木(267～281)も、納孔付き横木同様にその確認が容易である。横木を挿入するための方形孔をほぼ同間隔に側面に穿ったもので、方形孔の穿孔間隔は側体により長短がある。方形孔の形状には、ほぼ正方形のものやや縦長のものがある。端部が遺存している267や268では、端部より1孔分内側を削り込んで有頭状にしている。また、横木が挿入された状態で遺存する281では、横木用の方形孔とは別に、それに直交する方形孔をもつ。

横木(281～307)は、枠木納孔に挿入するための方形枠付田下駄の端部に削り出したもののうち、田を踏み込んでいくために身の断面を菱形にした材を一括した。ただし、円形枠付田下駄の横木同様に織機部材等との分別が難しく、田納とその基部が草者なものについては別の部材である可能性もある。

さて、横木を枠木へ挿入するにあたっては、枠木納孔に横木を挿入したうえで別材の楔を打ち込んで枠木と横木との固定をより強固なものにしているものがある(270等)。この手法は、全体形がわかる方形枠付田下駄が出土した大阪府友井東遺跡出土例(註9)にも認められ、このタイプの田下駄に通有の手法であったようである。

(4) 編具

俵、籠、蓑等の藁製品をはじめ、いわゆる「もじり編み」用に使われた編具について、『木器集成』に従い、農具に一括した。

編具を構成するものとして、編台、編台の目盛り板（以下、「目盛り板」と略）、木鍾があるが、六太A遺跡では編台は確認していない。

目盛り板の両端が出納状に方形に作りだされていることから、柄孔に挿入する可能性が高い。民俗例などでは、逆T字状に組んだ板材の縦板部に施した柄孔に目盛り板を挿入したりもするが、いずれにせよ、編台の特定は今後の課題である。

① 目盛り板(308～312, PL31)

いずれも、細長い板の長辺部片側を薄くして、その部分に継手を通すための刻みが施されたものである。

最も残りの良い308は、現長は69cmであるが、全長78.5cm程度には復元できるもので、両端を編台の柄に挿入するため細長く方形に作り出している。刻みははっきりとした方形に刻まれたものと、ややラフに三角状に刻まれたものがある。間隔は一部方形刻みが5cm間隔のようにも見えるが、全体的にはあまり規則性は認められない。当初は方形刻みのみでありその使用に比べて刻みを加えていったかもしれない。

その他の目盛り板はいずれも破片資料であるが、小さな三角状の刻みを長い間隔で施すものと、しっかりと台形状の刻みを短い間隔で施すものが存在する。

② 木鍾(313～371, PL31～33)

木鍾は、多数出土している。心持材を輪切りに切断した後の加工によって、基本的には2形態の木鍾が存在する。

A類 短く切断した丸太材の中央部を削りこんで鼓状としたもので、『木器集成』で4類とされているもの。両端を切り落としたままに残すものと、丸く削りだすものがあるが、切り落としたまま残すもの一部は未製品の可能性がある(313～334)

B類 短く切断した丸太材の中心を外した位置に穿孔を施したものの、『木器集成』で5類とされているもの(335～371)

出土した木鍾の木取りを見ると、A類ではすべてが芯持ち材を利用した一木からの削り出しであるのに対し、B類では芯持ち材の他、半截材や辺材も利

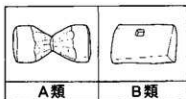


図18 木鍾の分類

用されていることがわかる。

なお、『木器集成』で3類とされている中央部に浅い溝を1周させた個体も出土しているが、1例のみであり、本遺跡においては少なくとも一般的なものではない。ここでは、A類の木製品として扱っている(313)。

註

- (1)大川勝宏「三重出土の木製農具」『三重県史研究』第9号 1993
- (2)同1に同じ
- (3)村上由美子「製作」『赤野井酒造跡1』滋賀県教育委員会他 1998
- (4)渡辺誠「ヨコヅナの考古民俗学的研究」『考古学雑誌』50-3 1985
- (5)野田直之「中央自動車道長野緑地文化財発掘調査報告」15-長野市内その3-石川集土遺跡 第3分冊(財)長野県埋蔵文化財センターほか 1997
- (6)渡辺保明「田下塚」『弥生文化の研究』5 1985
- (7)秋山浩三「人足の内輪切」『考古学研究』40-3 1993
- (8)竹内晶子「弥生の布を織る」『東京大学出版会』1989
- (9)上西英子他「大井東(その2)」『大府県教育委員会』1983

2 工具

工具として分類したものには、鉄斧の柄と、ナイフ状の小利器の柄と推定したものがあ

(1) 鉄斧柄(372～379, PL33～34)

すべて薪柄で、握部に木芯がくるように全体が削り出されている。斧台部の後台が平坦にならず、先端に向けて厚みを減じていく袋状鉄斧装着用の柄と推定されるもの(372～374・377～378)と、後台が平坦になる板状鉄斧装着用の柄と思われるもの(375～376・379)とがある。

袋状鉄斧装着用の柄には、装着部の形態が、斧台部先端が徐々に窄まっていくタイプ(373)と、柄台部全周が袋状に削りだされて装着部を作っているタイプ(372・377～378)がある。

木製品379は、全体に粗い削り痕を残すものであるが、後面を扁平化しようとしているらしいことが窺え、板状鉄斧装着用の可能性がある。

(2) 小利器柄(380)

断面方形の角体の全長の2/5程を半裁し、その部分に小孔4個を穿っている。溝等は彫っていないが、この半裁部に利器の基部をおき、小孔を目途穴と考えて楔を打ち込むと、小さな利器の柄として利用できるのではないかと考えた。その推定が正しい場合、ヤリガンナ等の小利器の柄部の可能性が想定される。

3 紡織具

糸を紡ぎ、紡いだ糸を巻き取り、さらに布を織る道具を一括する。

六太A遺跡では、糸を紡ぐ道具として紡鐘車、糸を巻き取り、また巻き取った糸を保持する道具として糸巻き(棒、総カケ、タタリ、糸棒)が、布を織る道具としては織機がある。ただし、『木器集成』も述べるとおり、織機の同定については問題点も多い。

(1) 紡鐘車(381~383, PL34)

六太A遺跡で出土する紡鐘車は、土製のものが主流であるが、少数(3点)ながら木製紡鐘車も存在する。少数ではあるが、これを断面形の形態によって、以下の2タイプに分類する。

A類 断面形が台形を呈するもの(381~382)

B類 断面形が長方形を呈するもの(383)

このうち、B類には裝飾等は認められないが、A類の382では断面の傾斜に沿って簡素な沈線が縦方向に刻まれ、漆も塗布されている。

なおA類は、古墳時代前期~中期の滑石製紡鐘車と同形態をとる。

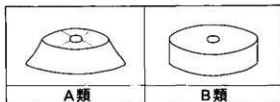


図19 紡鐘車の分類

(2) 糸巻

本書では、『木器集成』が指摘するように、紡いだ糸を巻き取ったり、巻いた糸を保持しておく道具を糸巻として一括する。

この系統の類には、使用方法や形態、機能の差異

によって以下の4類が認められる。

① 棒(384~407, PL34~35)

棒は、棒を「丁」字形に組合せ、中央の支え木を握って両側の腕木に糸を手動でからめ取っていく道具である。支え木の中央部に握部を作りだしているものと作りださないものがある。

『木器集成』では、腕木と支え木の結合方法の差異から、腕木の中央に納孔をあげ、支え木を差し込んだ「支え木さしこみ式」と、支え木両端に孔をあけてそこに腕木を通した「腕木貫通式」の2形態に分類しており、六太A遺跡出土資料もそれを基本に分類する。

A1類 A類は、「支え木さしこみ式」を一括する。

A1類はそのなかでも、腕木中央部の穿孔が長方形で、支え木両端は、穿孔部への挿入をより容易にするために断面長方形に作り出した出納とするか、削って薄くしているもの。木釘で止めるものもある。また、腕木中央の穿孔部を幅広にしたものもある(384~400)

A2類 腕木中央部の穿孔が円形になると思われるもので(未確認)、支え木両端を断面円形の出納とするもの。木釘で止めるものもある(401~403)

B1類 B類は、「腕木貫通式」を一括する。B1類は、腕木を挿入するために支え木両端をやや幅広に整形し、そこに腕木を挿入した後、木釘で止めるもの(404)

B2類 腕木を挿入するにあたって特に支え木両端を特に幅広にしないが、端部よりやや内側を穿孔してそこに腕木を挿入し、木釘で止めるもの(405)

B3類 支え木両端を木簾状に厚く作りだし、その中央部を開けて腕木を挿入するもの。木釘は使用しない(406~407)

A1類に使用される木釘は、1本のみのもので3本使用するものがある。今回、A類とした「支え木さしこみ式」の分類は、外見上の形態の特徴を重視したが、木釘未使用のものを使用するもの、また使用した場合の本数といった視点、あるいは支え木先端部が凸状の作り出しによるかどろみ等の視点で

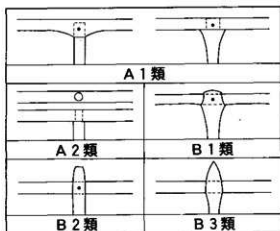


図20 材の分類
も分類できる。

B3類の結合方法をとる材は、腕木中央部を段の削りだしによって区画し、握部を形成している。なお、本遺跡では「支え木さしこみ式」(A類)の結合法をもつ支え木と握部をもつものは未確認である。ただし、こうした例は他遺跡では存在しており、握部の有無と結合法の対応には、流動的な側面が大きい。

また、出土した層位をみると、全体としてB類がⅢ層、A類がⅢa層～Ⅱ層を中心としており、全体としてB類からA類へ推移していくことがわかる。

② 認かけ(カセカケ、408～419、PL36)

認かけ(いわゆる「舞羽」)は、十字形に組み合わせた2本の支え木と支え木両側に穿たれた小孔に差し込まれて糸が巻きつく腕木、および2本の支え木を受ける台によって構成されるが、六人A遺跡出土の認かけは台と支え木の間にさらに軸棒を介する構造であったようである。

六人Aで確認した認かけの部材は、支え木と軸棒で、台と腕木は確認できなかった。このうち、腕木は、小さな棒状品であるため、支え木に組み合せて出土しないかぎり、単独出土ではその同定が難しいであろう。

支え木(408～416)は、両側が長く細く延びる長板(「羽部」と呼称する)と、中心部を一段薄く削り落とすことで真ん中に円形の軸孔を穿たれた幅広の中央部からなり、同形同大の支え木を2枚重ね合わせて軸孔を台先端の円形軸で受ける。確実に認かけの支え木と確認できる個体では、腕木を差し込むための小

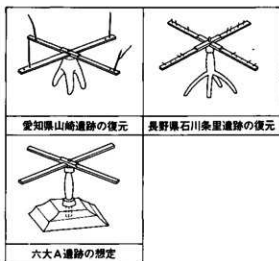


図21 認かけの復元

孔は斜めに穿たれている。従って、長方形長板の破片で斜めに小孔が穿たれたものの多くは、支え木の羽部の破片であった可能性が高い。

支え木中央部の平面形態には、長方形になるものと、中央部内側縁がくびれる形状をとるものがある。六人A遺跡出土の支え木には完存するものはないが、全長の復元が可能なのはいずれも全長が1mを越える長大なものである。

支え木を受ける軸棒(417～419)は、上部を断面円形の軸、下部を断面方形の軸を作りだしてその間を両側有頭の棒状具としたものである。材中央の棒状部分は、中央部が影らむ円形断面のもの(417)、円柱状のもの(418)、隅丸方形断面のもの(419)がある。下部の方形軸は、さらに別材の基台(未確認)の孔に差し込むためのものと思われる。

こうした例は、あまり確認例がなく、まだまだ不明な点が多いが、これまでは軸棒と脚が一体となった一木式の台が想定されてきた。例えば愛知県田原町山崎遺跡(注1)では、非常にシンプルながら中央部に支え木を受けるための軸をもつ3脚式の台が確認されている。また、長野県石川条里遺跡(注2)では、六人A遺跡出土の軸棒の棒状部分から脚が延びたような構造の台が想定されている。

従って、認かけの回転部である支え木を支える構造には、六人A遺跡のように軸棒と台を別材としてそれを組み合わせるものと、当初からそれら一体として作っていたものふたつの形態があったものと思われる。



写真3 認め軸棒と「タタリ」の組合せ

なお、軸棒を差し込む基台については確認していない。1mを越えるような支え木を支えるにはそのままではやや重量不足な感はあるが、後述の「タタリ」の台としたようなものが相当する可能性もなくはない。

③ 糸棒(420~426, PL36)

数少ないが、縦方向の腕木と横方向の横木(軸)を組み合わせるタイプの糸巻である糸棒の腕木も出土した。

横木と組み合わせ部分を厚く作りだしてそこに結合用の貫通しない円孔もしくは方孔を穿ったものである。全長がほぼ25~26cmとなるものばかりであり、規格性が高い。

④ タタリ(427~433, PL37)

タタリは、伊勢神宮の神宝や福岡県神ノ島出土品に金銅製の雛型製品として存在するもので、台部と柱部の2材からなる。方形もしくは円形の台の上面に孔をあけ、そこに柱部を挿入する。

六六A遺跡から出土したのはそのうちの台で、平面形が方形のものや円形のものがあり、ともに断面形は台形を呈し、上面は平らになる。上面の穿孔は方形に穿たれているが、そこから内部を楯広がりにより抉り取って、据えた時の安定を良くしている。

通常、「タタリ」は、県内資料の上野市高貫遺跡(註3)出土品をはじめ、台のみしか確認できない場合が多く、その場合、タタリの台かあるいは別の材の台かが分別しづらかったが、静岡県山ノ花遺跡(註4)などでは台と柱部がセットで出土すること

から、六六A遺跡の台も、一応タタリの台と認定した。県内の例では、六六A遺跡とも近い津市橋垣内遺跡(県道調査)B区ミゾ3から出土した「儀杖」とされるもの(註5)が柱部の可能性がある。

ただし、タタリ上面の穿孔部と、認め軸棒の基部分方形軸は大きさが近似しており、前述のようにこれらが組み合う可能性もなくはない。

(3) 織機(434~447, PL38~39)

本来組み合せて使用していたものが解体して部材単位で出土してしまうため、発掘資料で織機を同定することは難しい。また、前述のように、これまで織機の証巻具か布巻具(両者を「経(布)巻具」と呼称)、もしくは中筒とされてきた部材のように、輪カンジキ型田下駄の横木や方形型田下駄(大足)の横木とすべきことが指摘されている(註6)ものもある。六六A遺跡で織機に含めたものの中には、こうした同定にやや難のあるものも含んでいることを断っておく。

434~438は、その同定に問題を残す原始機に使用された経(布)巻具もしくは中筒とされるものである。両端を有頭状に作り出すか、両端を出納状に削りだした細長い板材のうち、田下駄の部材とするには断面形や厚みからやや不適当と判断したものを一応、織機部材として指定した。織機ではなく別材になる可能性も考えられるが、逆田下駄の部材としたものの中にも、本類であるものが含まれている可能性も残る。

こうした中で、439~440は、ほぼ機織として認定できるものである。一端は欠損しているが、断面隅丸方形の細長い棒状で、端部寄りのところに方形の柄孔を有する。おそらく、欠損部にも同じ位置に柄孔があって、直交する別材を挿入したと思われる。柄孔より内部には、3面に渡って糸の当たり痕があり、多数の糸が横一線にこの棒状具を先端にしたUターンをしていたと思われる。従って、この棒状具は、高機の糸巻具から出た糸を布巻具に引っ張るために一端糸を前に出して内側へ折り返すための部材、つまり高機の段も先端、もしくはそこからひとつ糸巻具寄り糸全体を一端高く上げるために高い位置に置かれる部材であると思われる。

441~445は、いわゆる有頭棒で、必ずしも織機に

限定できるわけではないが、民俗例ではこれと同様のものが高機の糸巻具として使用されている。

446は、機械とする積極的な根拠に乏しく、また機械としてもどの部分になるかは不明である。しかし、多数一定間隔で穿たれた円孔は糸を通すに相応しく、機械の部材の可能性もあるものと考えてここに措いた。

447は、大きさや形状から、高機タイプの機械の基台部となる可能性がある。

註

(1) 森田勝『愛知県稲沢郡田原町山崎遺跡』田原町教育委員会 1993

(2) 千原直之『中央自動車道長野緑地埋蔵文化財発掘調査報告書15-長野市内その3-石川集里遺跡、第3分冊』長野県埋蔵文化財センター・ほか 1997

(3) 穂積前田他『上野市上神』浮田・高野遺跡『平成2年度農業革新整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告-第3分冊-』三重県埋蔵文化財センター 1991

(4) 鈴木敏明他『山の花遺跡 本器編』浜松市教育委員会 1998

(5) 川口康也・紀平みどり『津市大塚原田町 橋内遺跡』（現地説明会資料）三重県埋蔵文化財センター 1993

(6) 秋山直二『大足再検討』『考古学研究』40-3 1993

4 容器

六大A遺跡出土の容器は、製作技法の差異から剣物、挽物、指物、曲物に分かれるが、このうち挽物は、大溝最上層から出土した中世の漆器碗である。

また、上記のような木製品とは別に、六大A遺跡では、瓢箪が複数個出土しており、このうちいくつかは容器として利用された可能性がある。しかも、少数ではあるが柄付きのものも存在しており、これらは「延喜式」でいう「柄付瓢」の可能性もある。

ここでは、容器を製作技法別に分別し、その上でタイプごとに分類、報告する。なお、容器とセットになる蓋等の付属物は、それぞれセットになる器種とあわせて報告する。

(1) 柄物

柄物は、種類が多く、槽、盤、箱、高杯、杯があり、箱は蓋用の受け部を有するものとなないものがある。このうち、槽、盤(皿)、箱はその同定が流動的な側面があるが、側面が斜め外方へ立つ容器で深いものを槽、浅いものを盤、側面が立直するものを箱とした。

① 槽(448~480、PL40~44)

槽は、法量や形状、脚の有無、側面の立ち上がりの特徴等を視点にすると、いくつかの形態に分類できそうである。法量の差は、用途・機能の差に係わってくるであろうし、厚さや側面の立ち上がり形状の差異は、仕上げ時の形態差以上に製作工程上の意図にかなりの差があるものと思われる。

法量は、どこで分別するか判断が難しいが、本書では、80cm以上を大形品、40cm~80cmを中形品、40cm以下を小形品として扱う。破片資料ばかりで全体形が判明する個体がなく、不確定要素は免れないが、以下のように分類した。

A類 長方形を呈する大形品。側面の立ち上がり

は内面が曲線的でやや浅く、全体に厚手。低い脚が4個付くものと、無脚のものがある(448~454)

B類 全体形は明瞭でないが、大形品で、横長の舟形形状をとる可能性がある。厚手で側面の立ち上がりは内面が不明瞭。無脚(455)

C類 長方形を呈する大形品。底面と側面、側面と側面の境が明瞭で、全体に薄手。側面長辺側は内湾気味に立ち上がる。脚の有無は不明(456)

D類 長方形を呈する中形品。全体形状、調整はA類に類似する。厚手で側部の立ち上がりは緩やかで、特に短辺側部は曲線的(459・461~462)

E類 長方形を呈する中形品。全体に薄手で、側面の立ち上がりが明瞭(457~458・465~466)

F類 中形品。底面が方形にならず、短辺は直線的、長辺は中央部が外側へ膨らむ曲線的な形状をとり、上面も長辺側が緩やかな波状を呈する。側面の立ち上がりは、外面は明瞭であるが、内面は不明瞭で曲線的。4脚が付くものと無脚のものがある(470~475)

G類 楕円形を呈する中形品。長軸方向の上面が方形に整形され、内外面とも立ち上がりの境が曲線的で、ボール状の形態をとる。4脚が付く(476~480)

H類 小形品で、底面と側面の境は外面は明瞭で

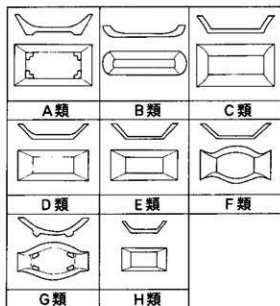


図22 槽の分類

あるが、内面は不明瞭で曲線的に推移するもの。A類やD類の小形品(460・463~464・469)

六人A遺跡においても、上野市北瀬池遺跡の報告書(註1)で指摘されているとおり、底面と側面の境の明瞭なものは深く、不明瞭なものは浅い、という指向は認められる。

ただし、大形槽の脚に着目すると、北瀬池遺跡例のような長辺に平行した長方形の脚ではなく、六人A遺跡では低いL字状ないしは短辺に平行した長方形のものが多い。

また、他遺跡では小形品でも脚が付くことが多いが、本遺跡では小形品で脚をもつ槽は少数である。

なお、槽には含めたが、側面部分のみが遺存したものいくつかは、前形であった可能性がある。

② 盤(481~497, PL45)

槽よりも浅く、底面の広さに対して側面の立ち上がりが少ないかほとんどない列物容器を盤として一括した。

盤を出土した層位をみると、ほとんどがII層からの出土で、盤は六人A遺跡では古墳時代中期以降から出現し、槽の出現時期よりも後出する。

形状や脚の有無等から、以下のように分類する。

A類 円形で、側面が屈曲してわずかに斜め外方へ立ち上がるもの。無脚(481~495)

B類 側面が立ち上がるというよりは、長方形の

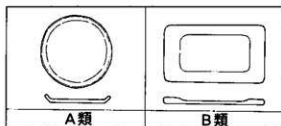


図23 蓋の分類

板状品を縁を残してわずかに窪ませた形状をとるもの(496~497)

484をはじめとして、A類には内外面に対物の当たり痕跡が認められるものが多い。

③ 箱(498~504, PL45~46)

底面から側面が直立するものを列物箱とし、槽・盤とは区別した。本来、槽とはこれらの類も含めていのであろうが、製作技術的に斜めに割ると垂直に彫り窪めるのとは異なる工程が必要と考え、ここでは区別した。

また、列物箱のうち、口縁部に蓋と組み合わせるための受け部を有するものを「合子」ということがあるが、ここでは列物箱で一括した。受け部の有無も含め、以下のように分類した。

A類 蓋用の受け部をもつもの。平面形は長方形で、上面は長辺側が広く、短辺側は狭い。上面の内側を一段低く彫り込んで受け部としたもの(498~499・503~504)

B類 全体の特徴はA類と同じであるが、上面に蓋受け用の段がないもの(500~501)

C類 平面長方形で、短辺部両端に突起をもつ小形品(502)

A類とB類は、いずれも出土層位はIII b層で、弥生後期~古墳初頭の所産と思われる。

これに対してC類の502は、II層からの出土で、年代的に下るものであろう。

注目すべきものとして、A類の499には、上面お

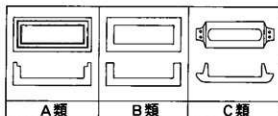


図24 列物箱の分類

よび側面に利器による線刻が認められる。2～4本を一定とした沈線文様で、上面は弧状に、側面は直線的に施している。

また、B類としたもののうち、503と504は、列込みが途中で、木製品であろう。

④ 高杯(505～507、PL46～47)

小破片ではあるが、高杯と思われる個体を2個、その可能性のあるもの1個を確認した。

505は、口縁部片と思われるもので、幅広の上端面から屈曲してかなり急角度で下方へ延びていくもので、弥生中期末葉の高杯の形態に類似する。大溝でも最下層に近いところから出土しており、弥生時代の所産であろう。

506は、底部片と思われるもので、大きい円形透かしを連続して横に穿っていく形態である。

507は、脚部片である。小片のため詳細は不明である。

当地域においては、木製高杯類の出土は珍しく、今後頻例の増加に注視したい。

⑤ 杯(508～509)

小さな槽といえなくもないが、他の槽とはかけ離れて小形で、また土器の杯と同様の形態を取っており、杯として扱った。

底面から屈曲して側面が外方へ延びるもので、円形プランをとる。

⑥ 椀(510、PL47)

ボール状の丸底椀の形態をとるもので、厚手で全体に精巧な作りである。

⑦ 桶(511、PL47)

脚付きの槽とも思われたが、補修孔があってその部分を下にするのは不適当なこと、上端部が生きていること(槽と考えた時は転用時の切筋と判断した)、それに全体が微かに弧状を呈しており、桶と判断した。上野市森脇遺跡の奈良時代の井戸から同形態の資料が出土していること(註2)も大きな判断材料となった。

底部はやや肥厚し、そこに底板があてがわれたらしい。円形の把手1個のこるが、本来は相対した2個の把手があったのであろう。森脇遺跡同様、奈良時代の所産であろう。

⑧ 不明制物(512～517、PL47～48)

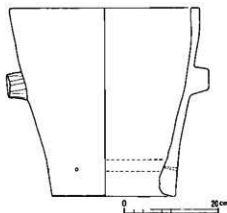


図25 上野市森脇遺跡出土の「杯」

容器かどうかは特定できないものも含むが、製作技術的に制物としうるものを一括する。以下、個別にみていこう。

512は、円形板の上面を折り込んだもので、盤の木製品の可能性がある。

513は、長方形板の側面全周に折り込みを入れ、上面を緩やかに折り込んで凹ませたものである。制物には違いないが、類例を知らない。

514は、底の抜けた槽もしくは紡織具タタリの小形品の可能性がある。ただし、タタリとするには実用としては単者である。

515は、小形の槽であろうか。

516～517は、同形態をとる。略円形の厚板を逆「山」字形に彫り残し、その中央に方形もしくは長方形の穿孔を施したもので、517の穿孔部には赤し込まれた別材も残る。調整は全体に粗い。用途は不明である。

(2) 挽物

大溝SD1出土の挽物としては、I層から出土した中世の椀が該当する。六人A遺跡では、大溝SD1以外では、井戸等からも挽物椀の出土がある。

① 椀(518～519)

ともに全面黒漆仕上げで、518には内面に2本単位の朱線が引かれている。519にも朱が施されていたようであるが、還存状態が悪く、漆膜状に依存したもので、詳細は不明である。

(3) 指物

板材の接合によって製作した容器について、指物容器として扱った。ただし、指物は、本来組み合っていたものが出土時には外れた状態となって出土す

ることが多く、板材の小口部に何らかの接合状況の痕跡の存在するものを指物容器として認定した。

この場合、確認できた接合の種類は、組通し孔を穿孔する「穿孔組結合」（『木器集成』）によるものがほとんどである。

以下の3形態が確認できる。

① 「四方転びの箱」（520～526、PL49）

本類には底板がなく、厳密には「箱」とは言いがたいが、組結合の箱状品のうち、4枚の側板が四方に傾斜した角籠台状をなすものについて、『木器集成』に従って「四方転びの箱」と呼称する。

『木器集成』も述べるとおり、直方体の箱の側板は45°に切り落とせばよいが、四方転びの箱では、側板の傾斜角度によって留めの角度が異なる。

四方の板が残ったほぼ完形の526の他、側面端部を斜めに切り落とし、小口部に組結合用の穿孔を施した台形板を、四方転びの箱として認定した。

このなかには、520のようにやや裾広がりになるタイプから、526のように傾斜角度が緩やかで、あまり裾広がりにならないタイプまでが存在する。また、組結合孔とは別に、各板に1個ないしは2個の比較的大きな穿孔をもつものもある。

六次A遺跡例では存在しないが、裾が広がる側に底板（もしくは蓋板）の存在を示すような皮隠が存在する場合があります（上野市北瀬池遺跡例など）、箱と考える要素のひとつではある。しかし、これは一般的ではなく、「四方転びの箱」と呼称しているものの、実際には「箱」とは言いがたい。

「四方転びの箱」は、指物技術上の用語であり（『木器集成』）、曲尺を使用した指物技術の台頭を示すなど（註3）、専ら製作技術論からの言及がなされているが、機能・用途面についてはほとんど言及されていない。

わずかに、この遺物を当初から言及している上原真人は、民具との対応から刺突漁法に使用する「のぞき眼鏡」（箱眼鏡）や「植木鉢カバー」について触れるが、古墳時代には相応しくないとされ、機能・用途面からの深い追求はない（註4）。

これに対し、仁木昭夫は、側板に穿孔をもつ個体の存在などから漁具や容器等を否定し、祭事用の「方」的な台の可能性を提起する（註5）。

ただ、上原や仁木が肯定的に考えた箱眼鏡であるが、側板に開く孔は指で掴むための孔と考えられ、箱眼鏡も機能的には想定可能である。中村光司によると、水面から底を覗く時の障害は水面を漂う波の乱反射であり、それを囲いで防ぐとガラスなしでもかなりクリアーに水中が見通せるという（註6）。いずれにせよ、機能面からの追求は、仁木が提起した台を含め、民俗事例も見ていながら、さらに追求していく必要がある。

② 組結合箱（527～538、PL49）

4枚の側板と1枚の底板から成ると思われるが、いずれも各々が解体した状態で出土したもので、全てが側板と底部が接合していたかどうかは不明である。あるいは、「四方転びの箱」同様、底板（もしくは蓋板）が付かない形態のものも存在する可能性がある。

側板（527～533）は、底部と口縁部は真直ぐに、側面は小口を45°に切り落とし、組結合のための穿孔を小口に沿って縦位に施す。この接合手法は、「四方転びの箱」と同じである。527のみ、側板接合用の穿孔列とは別に穿孔ある辺があり、これが底板との接合辺及び接合孔と思われる。

底板（534～538）は、方形もしくは長方形で、小口に沿って2個1単位の穿孔を施す。側板は、この穿孔の間に割え置かれ、底板及び側板の穿孔で組結合して緊縛していたものと思われる。

③ 連結箱（539、PL50）

破片資料のため箱状具になるか厳密には不明であるが、上下に鍵手状の段を作りだして連結部とした板状品である。現在残っているのは側板の一部と思われる。非常に精巧な作りで、内外面を黒漆で仕上げている。下部内面の段に接して別材の当たり痕跡があり、ここに底板が置かれたか、あるいはこちらが上になって、蓋板を受けたかとも推定される。

④ 曲物（540～778、PL50～58）

六次A遺跡出土の曲物には、円形もしくは楕円形の薄い底板（蓋板の可能性のあるものもあるが、ここでは一括して「底板」として扱う）をもつものと少数ながら脚付きの底部をもつものがある。また、曲物と結合する脚も存在する。

① 曲物身（540～773、PL50～57）

側板と底板の身本体について述べる。

側板は、薄いためにしばしば底板から外れ、また小破片で出土することが多いため、曲物の分類にあたっては、まず底板周縁部形態と、底板と側板の結合形態が当面の視点となるが、これらは互いにリンクしている。

『木器集成』では底板周縁部の形態をA～Fの7大別に、結合形態は樺皮結合と釘結合の2大別にする。底板周縁部形態の分類は他の基本となるものであるが、底板周縁部の形態分類と結合形態とは本来リンクして考えられるべききものではあるが、リンクされていない。

これに対して、静岡県瀬名遺跡の分類(註7)では、出土の曲物底板を底板周縁部形態と結合形態を加味して5分類する。細かい観察においても、『木器集成』では「樺皮結合」と一括されているものを実際には山桜皮が多いことを指摘したり、『木器集成 図録近畿古代篇』で木釘結合とされたものの一部をカバ紐固定用の木栓と指摘するなど、六人A遺跡の曲物を考えるうえで大いに参考となる。

このうち、皮紐縫じ結合を行ったうえに木栓でさらに完全に固定するものが六人A遺跡でも認められるが、皮紐もしくは木栓が脱落してしまっている場合には、分類が間違ってしまう可能性がある。

こうしたことを考慮しつつも、上記分類を参考としつつ、六人A遺跡で認められる底部(板)と側板との結合形態を以下のタイプに分類整理する。

A類 脚付きの底部の上面周縁部に側板の厚さ分の段を削りだしてそこに側板をあて、側面から木釘を打ち込んで止めるもの(540～541)

B類 底板は、周縁内側を垂直に切り込んで外側へ向かって斜めに切り上げたゆるやかな溝を彫り込み、端部を斜めに切り落とした『木器集成』のC形態をとる。溝の内側に紐孔を垂直に穿ち、周縁外端部を巻き込むように皮紐縫じする(542～543)

C1類 底板形状はB類に類似するが、周縁端部は垂直に切り落とす。溝内側と切り込み部の2か所に紐孔を内側(中央側)へ向かって斜めに穿ち、側板の穿孔の計3孔

で皮紐縫じする(544～546)

C2類 底板形状は基本的にC1類と同じであるが、溝内側の孔には紐の締めをなくすため木栓が打ち込まれるもの。六人A遺跡では、底板紐孔が垂直に穿たれたもののみが認められる(547～550)

D1類 底板は周縁外端を一段低く直角に切り落として(『木器集成』のD形態)そこに側板を寄せ、その内側に紐孔を穿って側板の紐孔との計3孔で皮紐縫じ結合するもの。底板紐孔は、内側へ向かって斜めに穿孔されるものと、垂直に穿孔されるもの、外側孔のみが垂直に穿孔されるものがある(551～557)

D2類 D1類の底板内側の紐孔に、紐の締め防止用の木栓を打ち込むもの(558～566)

E類 底板周縁外端を一段低く垂直に切り落とすのはD類と同じであるが、底板の紐孔は切り落とし部より内側の1孔のみで、周縁外端部を巻き込むように皮紐縫じするもの。紐孔は、内側へ向かって斜めに穿孔されるものと、垂直に穿孔されるものがある。全体にD類よりも切り落としが短小で、また巻き込み易くするために底板外端部を内側へ向かって斜めに切り落とし、皮の緩み防止のため木栓でとめる(567～578)

F類 底板の断面形状はD・E類と同じであるが、皮紐縫じではなく木釘打ち込みの釘結合により側板と底板を固定するもの(580～582)

G類 底板周縁部は平坦なままで(『木器集成』のE形態)、底板の側板を寄せた両脇に



図26 曲物底板と側板の結合形態

垂直に紐孔を穿ち、側板の紐孔と計3孔で皮紐綴りするもの(593~601)

H1類 平坦な底板の外側に直交して側板をあてて側面から木釘を打ち込んだ(『木器集成』のF形態)ものうち、底板と側板の底が同面となるもの(604)

H2類 結合形態はH1類と同類であるが、底板の底よりも側板の底のほうが一段低い上げ底構造をとるもの(605・770)

(なお、579・583~592・767~769・771~773は、曲物ではあるが類別不明。602~603、606~766はH類であるが、その細分は不明)

多少煩雑となったが、六人A遺跡で確認できた曲物底板の形状と結合形態を外観した。D類やE類などの皮紐綴じ用の穿孔のうち、内側へ向かって斜めに穿孔されたものと、垂直に穿孔されたものは、それをもつての類型分けこそしなかったが、一部がG類への連続性を示すものひとつとして位置づけができるかもしれない。

以上の分類を、曲物底部の形状を示す言葉として通常の「カギゾコ」と「クレゾコ」(註8)に当てはめると、B~G類が「カギゾコ」、H類が「クレゾコ」ということになる。A類については、その分類で分けるのは適当でない。

A類は、せいぜいが古くても古墳時代中期という六人A遺跡出土の曲物のなかで飛び抜けて古く、弥生後期~古墳初期の層位から出土している。木釘結合は一見新しうにみえるが、B類以降とは別系統の装飾性の高い脚付きの曲物に用いられた特殊な技術として位置づけが可能であろう。

曲物の平面形態についてみると、破片資料での不確定要素は残すものの、円形・円状突起付の円形・円状突起付の楕円形・隅丸長方形の4種類が認められる(円状突起の付かない楕円形の存在は破片資料が多いため確認できない)。このうち、G類底部をもつ曲物は円形もしくは隅丸長方形、H類底部をもつ曲物は円形に限定できる。

ところで、H類には、中央部に円孔を穿つものが多い。穿孔にあたっては、利器で直接円形に彫るものと、中央部を焼成によって穿孔するものがあるが、結果的には同じ状況を呈する。これは、蓋とみ

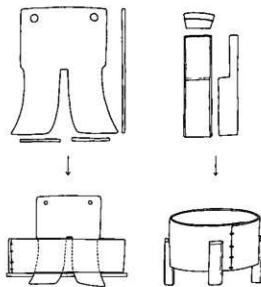


図27 岐阜県宮川村の民俗例による曲物脚の復元(774~777は左側、778は右側に対応。註9文献より)することもできるが、一部は蒸し器として利用されたことを示すのではなからうか。

側板については、側板を円形に丸めた時の合わせ目を狭くして1か所のみで綴じる例(この場合、1列綴じと2列綴じがある)と、合わせ目を広くとって2か所で綴じる例がある(この場合、前列を2列綴じ、後列を1列綴じとする)。なお、用語は、『木器集成図録近畿古代篇』による。

② 曲物脚(774~778)

774~777は、吊るすための紐孔をもった曲物脚と思われるものである。最も残りの良い774でみると、下部の二股は、ここに曲物側板で挟んで巻き込んで固定するための仕事で、二股より下の部分は脚となる。二股よりも上の部分は、側板よりも上に突き出て把手となる。これをひとつの曲物につき対になるよう2個1セットとして使用した。岐阜県宮川村の民俗資料などに類似がある(註9)。

775~777は、774との形態の共通性から同類と考えた。

778は、曲物側板と結合した曲物の脚で、下部の方形台部に曲物の底を寄せ、柱状に延びた部分で曲物側板と皮紐結合している。結合にあたっては、紐が緩まないように木栓を挿入してより強固に固定している。脚上面には、曲物底板があたった時の当たり痕跡が微かではあるが残っている。

(5) その他(779~782、PL58)

やや疑問が残るものも含むが、容器に関連すると思われる部材を一括した。

779は、コップ状の容器に付く把手の可能性がある。僅かに残る把手が付いた基部のところ(容器本体と思われる部分)はかすかに丸みをもっており、円形の容器であることを窺わせている。

780は、曲物や桶に付く把手の可能性もある。端部の軸部を本体の孔に挿入したものである。

781~782については、蓋と考えた。781は突起部を横むタイプ、782は有孔部に紐を通したタイプと思われる。ただし、782については、紐物の台状品の可能性もある。

註

(1)森田勝「他」愛知県美濃郡山崎遺跡(山崎町教育委員会) 1993

(2)昭和63年度「重松教育委員会文化課調査

(3)上原貞人「四方板の酒一古代木工技術の発歩(考察)」『平安京歴史研究一杉山』『先生未刊記念論文集』 1993

(4)同上

(5)『本居大士』出土した四方板の箱』『下田遺跡(郡山市神岡路遺跡)発掘調査報告書』『大泉文化財調査報告書』(財)大泉文化財調査研究センター 1996

(6)村田正司の報告による。

(7)村田正司「他」『美濃道跡6』(財)美濃道跡文化財調査研究所 1994

(8)前掲(7)の文献で、この用品が美濃の一人産地であった長野縣木曾郡神川村で用いられたものであること、他に適当な名称もないのでこの用語を使用する旨が記されている。本邦もこれに従った。

(9)山田久「考古資料の曲物物研究を器具研究にするために」『人類誌集報1997』東京国立大学考古学研究所 2 1997

5 家具

現代的な意味での「家具」ではもちろんないが、移動可能な調度品類のうち、案(机)と椅子(腰掛け)を中心として、平坦な板とそれに挿入する棒状品によって構成されるらしい台状の指物類を「家具」として一括する。

ここでは、案とは、物品を乗せることを意図したもので、椅子とは人間が座することも意図したものである、ということによって、区別している。しかし、小形でその範疇からはずれやはずれなもののや、その峻別が流動的なものも残り、どちらになるか不明なものはあえて分別せずに「指物・台」として一括する。

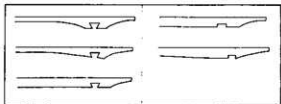


図28 溝結合型案天板の断面模式図

(左が断面「蟻溝」、右が断面方形、右下のみ上野市高貴遺跡)

(1) 案

案には、『木器集成』で「A形式」とされる棒状の脚を4個の天板を受ける四脚タイプの案と、『木器集成』で「B形式」とされる天板下面に短辺に沿って平行する溝を彫って、そこに幅広い板状脚を挿入する溝結合タイプの案、及び『木器集成』で「C形式」とされる天板端部寄りに2個の柄孔を穿って脚部上面の出納と結合させる「脚柄結合タイプ」の案がある。このうち、六代A遺跡では、溝結合タイプと「脚柄結合タイプ」が出土しており、全て古墳時代に属する。

① 溝結合タイプの案(783~799、PL59~62)

天板は、長方形の板材の下方面周縁部を外側へ向かって薄く削りだしたもので、下面に脚上部を挿入するための溝を彫る。

溝は、断面方形のもの、断面逆台形のいわゆる「蟻溝」を呈するものがあるが、蟻溝断面のものは溝に沿った部分が他よりも厚く削りだされているものが多い。特に783は、その傾向が顕著である。ただし、こうした要素が、後世の多足机等のようなより新しい要素に直接繋がっていくかどうかは現在の資料では時期的な断絶があり、明確ではない。

784~785は、ごく僅かではあるが、脚の上端部も部分的に挿入された状態で遺存していた。ともに脚との接合に蟻溝を有するタイプであり、この手法が大台と脚との接合に優れていることがわかる。

脚は、台形状を呈した板材の下部中央に半円形に削ったもの(789等)と、同じく下部中央を半円形の上端をさらに方形に削ったもの(791~792)、半円形の上端部を突起状に削り残すもの(796)の3形態が認められる。なお、798や799については、案の脚でない可能性も残る。

② 二脚柄結合タイプの案(800~802、PL62)

このタイプの案は、安定性を保つために横幅が脚

の幅によって規制され、必然的にやや細長い形状をとると思われる。

脚部はある程度認定可能であるが、天台はやや不確定である。

脚は、後述の指物椅子の脚部よりも薄手で、全体に華奢なものについて、このタイプの案の脚として認定した。基本構造は、後述の結合式の椅子と同じで、出納を天板に挿入し、天板を受ける部分は平坦となるものである。

(2) 椅子

椅子には、一木で作りだす割物の椅子と、2個の脚部と1枚の座板を別材で作って接合する指物の椅子とがある。

① 割物椅子(803~805、PL62~64)

いずれも弥生後期~古墳初期の層位から出土した厚手でしっかりしたものである。

座板は、803と805(同一個体の可能性がある)が円形に近く、804はやや楕円形に近くなり、いずれも中央部に向かって緩く窪む。座板周縁部の一部が遺存した804では、周縁上端部が面取りされている。

脚部は、台形で中央上部に透孔をもつ805と座板の長軸部に平行して長方形の脚部が作りだされ、中央部に大きな透孔をもつ804の2形態がある。803は、形態的には805と同じであるが、透孔が開けきっていない。

なお、奈良県谷遺跡(註1)や上野市城之越遺跡(註2)では、古墳時代前期~中期の所産と思われる非常に裾広りの脚部をもつ割物椅子があるが、そうした例は六太A遺跡では認められない。

② 指物椅子(806~812、PL64~65)

脚上端部に作りだした出納を座板両端近くに穿った柄孔に挿入する柄結合タイプの椅子を、指物椅子とした。

座板は、やや認定するのに難があるが、806は指物懸掛の座板としてよからう。千載された状態であるが、厚板の中央部が緩やかに彫り窪められ、短辺部両端に脚上の出納を受けるための柄孔をもつものである。

脚については、一定以上の重量を支えるため、柄結合タイプの案よりも厚くて丈夫で、上端部に座板に穿たれた孔に差し込まれる出納をもったやや

裾広りの厚板を脚として認定した。

他遺跡では、中央部が湾曲して窄まる例も存在するが(『木器集成』)、六太A遺跡では緩やかな台形もしくは三角状を呈している。

上端部の座板との結合形態をみると、単に出納にして座板に差し込むだけのタイプ(807~810)と、脚上端部が座板よりも上に突き出して、出納にあけた方形孔に木栓を挿入して座板と脚をより強固に留めるタイプ(811~812)とがある。このうち後者については、柄結合タイプの案である可能性もないわけでもないが、材が厚手でしっかりとしていることから懸掛で一括した。

脚には、沈線が施されたり、透孔が穿たれるなど装飾されることも多い。特に812には半円形の透かしが開けられ、底部端部も丸く整形されている。また、三角状の脚である808には、脚下部のやや偏った位置に方形孔が穿たれているが、これは重量を支えるための補助的な役割をする断面方形の棒を挿入するための柄孔であろう。

(3) 台(813~821、PL66)

破片のため詳細は不明ながら、平坦な板材に、棒状の別材を挿入するための柄孔を複数穿ち、立てることが可能な類を一括した。

中には815や817のように、結合する部分を厚く削りだしているものも存在する。案である可能性もないではないが、案とするにはやや細すぎ、案に近い簡単な指物の台状のものになるのではないかと推定した。

813のみ脚部で、出納を台部に挿入してさらに出た部分を枠で留めるタイプであるが、全体に刃物痕跡が顕著に残っている。

註

(1) 影本洋明『藤原町谷遺跡』『奈良県遺跡調査機関 1984年度奈良私立橿原考古学研究所 1985

(2) 徳橋裕司他『「遺跡上野市山」 城之越遺跡』『奈良県文化財センター 1993

6 武器・武具・馬具

武器関係遺物のうち、祭祀用として製作された武器形以外の実用の武器・武具・馬具を扱う。もちろん、実用品ではあっても、祭祀においても用いられ

た可能性を否定するものではない。

(1) 武器

ここでいう武器とは、攻撃用のものに限定しており、六次A遺跡では弓と鉾がある。刀装具や鞘の存在は、刀剣の存在も示しているが、鉄製の刀身部は遺存しておらず、それらは武具のところで扱う。

① 弓(822~834、PL67)

狩猟具とすべきものも含まれていようが、武器として一括する。また、木鎌は、後述の武器形祭具の項目で扱う。

糸を巻き付けて黒漆で仕上げた飾弓と、何も装飾を持たない丸木弓(素弓)がある。

飾弓(822)は、計19cm程の小破片で、弓弦部分は欠損しているが、溝(樋)を彫り、細い糸を巻き付けて黒漆を塗布した様子が顕微鏡観察(註1)によってよく観察できる。糸は52周程度巻かれているが、溝部分には存在しない。糸は途切れたような状況を呈しており、現況は腐食によるもので、本来は全周していたものと思われる。

なお、漆の塗布や弓幹に巻物を施すことは、装飾のためではなく弓自体を強化するための意見も『木器集成』で紹介されているが、その立場をとると「飾弓」ではなく「強化弓」ということになる。

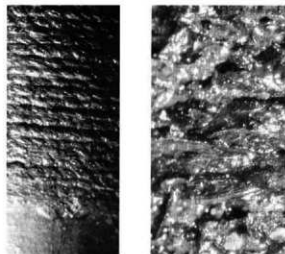


写真4 飾弓糸巻部の接写

丸木弓は、いずれも円形断面の1方向のみを上下に面取りし、弓弦部分を削り出しによって作り出している。

弓弦には、以下の形態が認められる。

A類 先端部を凸状に作りだすもの(823~827)



図29 弓弦の分類

B類 両脇を直角ではなく鈍角に削りだすもの(828~830)

C類 単に山形に切り落とすもの(831)

ただし、A類とB類は作業工程上多少の差異はあっても、その分別は流動的な側面もあり、弓弦作出の意図としては同じであろう。

ほとんどが破片であるが、831のみほぼ完形である。弓弦形迹はC類で、大溝右岸貼石(飛鳥時代)の直下から出土した。

832~834は、弓弦部分がなく、敷置には弓かどうかも不明瞭であるが、いずれも堅い樹種を使用して面取りされた特徴から弓として認定した。

② 鉄製の木柄部(835、PL67)

本来は鉄製品とすべきであろうが、鉄製の銚部とともに、木芯部も遺存していたため、ここで報告する。

木芯部は、削り出し材を利用して細長い円錐状とし、木先より14.5cmのところに銚身と組み合わせるための目釘孔が存在する。

木芯を被っている銚身は、断面形が基部に近い部分が木芯と同じ円形で、先端いくに鋭い変形となる。途中欠損しているが、約16cm分遺存している。

(2) 武具

ここでいう武具とは、盾など直接殺傷を目的としない軍用物品と、刀剣を納める鞘等の武器の付属品を一括したものである。六次A遺跡出土の武具は、刀装具、鞘類、盾がある。

① 刀装具(836~838、PL68)

把頭に付く把装具、鞘に付く鞘口装具と鞘尻装具が各1点づつ出土している。

把装具(836)は、刀の把の先端を飾るもので、全体に黒漆を塗布する。腹側に向けてやや丸みをもった逆三角状にすぼむ形態で、端面には線刻による直弧文を施して線刻部を朱彩し、側面にも方形の刻み

列を刻んで装飾する。端面とは逆側には、刀身を装着するための溝を彫っている。把頭の楓表にタグリ孔を穿っている。

鞘口装具(837)は、小破片のため詳細は不明であるが、外面には黒漆を塗布し、直線的な線刻装飾には朱が施されている。

鞘尻装具(838)は、把装具同様、直弧文による線刻装飾を施して黒漆を塗布した後、線刻部には朱を入れて鮮やかに飾っている。ただし、この朱は、出土時は鮮やかであったが、保存処理委託に出したおり、遺憾ながら朱の部分が剥落してしまった。

これら3点は、いずれも奈良県天理市布留遺跡に類例が求められ(註2)、また把装具は和歌山県鳴神II遺跡で出土したものと類似している(『木器集成』)。

② 刀剣鞘(839~844、PL69~70)

鞘は、構造的には平截した2枚の板材の内側を刃身形状に合わせて彫り込み、再び2枚を合わせて鞘口と鞘尻で結合するものである。

断面形が片側が太い倒卵形になるか先端部内面の彫り込みが刀形を呈するものを刀鞘、断面形が上下対象の紡錘形になるか先端部内面が剣に合わせた山形を呈するものを剣鞘とした。

ほぼ完形の839は、杉材を平截して作られたもので、刃長17.2cmの短剣の鞘になる。鞘口と鞘尻を共に鞘間よりも一回り太く作った『木器集成』分類の「c・c型式」に相当する。また、840~841も、長さは異なるが、839と同様のタイプである。

これに対して、842~843は、欠損部が大きく詳細は不明である。ただし、842については刀先部が幅狭くなってきており、端部に鞘尻装具を嵌め込む「b型式」もしくはその変形(端部に柄は作りださないが全体を細くして鞘尻装具を嵌め込む)であったか、あるいはその部分を樹皮等で緊縛するタイプであった可能性も考えられる。

また、844は、鞘とすると鞘間が鞘尻へ向かって緩やかに幅広になっていくもので、あまり類例を見ないものである。鞘尻も、端に柄を作り出すタイプであるが、通常の方形の突起状に突き出す形状ではなく、鞘間先端から一段薄く彫り込んで徐々に窄まる形態をとる。

鞘は、県内では上野市越之越遺跡で剣鞘、刀鞘ともに鞘尻に柄を作り出すタイプ(『木器集成』の「b構造」)が出土しており、六太A遺跡が鞘間より鞘尻・鞘口を一回り太く作る「c構造」が主流なのと対照的である。

③ 盾(845~851、PL70~71)

県内では、古墳(上野市石山古墳、註3)以外では初めての出土である。

厚さ7mm程度のモミの板目材を長方形に整形し、盾の主軸に直交して横方向の小孔刺突列を上下に何段も重ねていくタイプの盾で、裏表面を赤彩する。小孔刺突列は、横方向に糸で綴じていくための小孔で、部分的に緊縛した糸も残存している。

このタイプの盾には、盾の上端が山形を呈するものと、水平なものとの二者が知られているが、六太A遺跡出土例には山形を示すような痕跡は見られず、基本的に水平形状の上端をもつものであったと思われる。

小孔列は、盾の上端もしくは下端(小口部)に近づくほど上下の間隔が狭く、盾の中央へ行くに従い広くなる。また、横方向に綴じていくので当然横方向には小孔の目は通るが、より上下の間隔の狭いものは小孔と小孔の距離が近接して縦方向にも比較的目が通っている。これに対し、上下の間隔が比

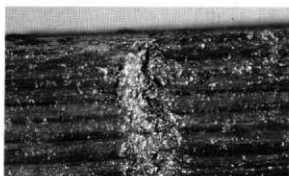


写真5 盾糸綴りに残る糸(上)と糸綴り断面(下)

較的広いものは、縦方向の目は通らず、全体としてやや粗い作りの印象を受ける。

つまり、出土した盾には、赤縁じ川の孔をかなり規則的に穿孔した厳密な作りのもと、全体に間隔がやや疎らなラフな作りのもつとあり、複数の盾が存在したことが確認できる。

なお、朱彩は、全体に退色しているが、表裏面で色調に若干差があるものがあり、赤いものとやや黄色が強いものがある。これは、赤の強い方がよりきつちりと朱彩されたと考えられ、その面のほうが表面であったと推定される。

大溝殿下層からの出土であり、弥生後期～古墳初期の所産であろう。

(3) 馬具(852～853、PL71)

豪鎧が2点出土している。

ほぼ全体形のおかる852では、やや縦長半円形の踏込み部から棒状の軸部が延びる。軸部には、吊紐が通るための方孔が前後方向、つまり足を乗せる踏込み部と同じ方向に穿っている。

これまで知られていた古墳時代の木製鎧は、孔が踏込み部に対して左右方向にあく鎧が主流である。

『木器集成』では、孔を豪鎧は左右方向に、半舌は前後方向に穿つとされているが、たからといって六太A遺跡の木製鎧が半舌鎧というわけではない。六太A遺跡出土の豪鎧は、古墳時代の豪鎧には孔が左右方向にあくもの他に、少数ながらも前後方向に穿たれるタイプも存在したことを示すひとつの資料として評価できるであろう。

もうひとつの鎧である853は、軸部が欠損しているが、852よりも縦長の踏込み部をもつ。踏込み部は中軸線を挟んで左右非対称で、片側は急角度、片側は広く外側へ開く。踏込み部外面の中央付近には隆帯を削りだしているが、外開きの部分にある隆帯は磨滅している。このことから、この鎧は、隆帯が磨滅している側が馬の腹に当たる部分で、馬の左腹側に置かれていたものと思われる。

註

(1) 豊田雅昭氏のご好意によって、大塚大学文学部考古学研究室にて当該遺物の顕微鏡観察を行った。

(2) 山内紀嗣他『布留遺跡(Ⅲ) (里中) 地く発掘調査報告書』埋蔵文化財大塚教調記④ 1995

7 祭祀具

木製の祭祀具には、大きく分けて形代と斎巾があり、形代はさらに武器を模した武器形(武器形木製品)と、武器以外の形代に分けることができる。このうち、六太A遺跡出土の祭祀具は、武器形が最も主体的地位を占める。

(1) 武器形

武器形には、刀形、剣形、鎧形、木鎌が確実なものとして存在し、別に少数の武器形ではあるが上記以外のものになるとと思われる武器形が存在する。

大溝SD1の出土状況を見ると、武器形の出土には多少の地点的、时期的偏りが見られる。

特に、古墳時代中期には、武器形徹底的に1か所から武器形が集中して出土した部分がある。ここでは、多量の刀形と鎧形、少数の剣形が1飾器高杯と滑石製白土とともに一括して廃棄されていた(図55参照)。

① 刀形(854～896、PL72～74)

六太A遺跡出土の武器形のなかでは最も出土量が多い。いずれの刀形も、抜身の状態を表現したものと思われる。

把部の表現方法から、以下のタイプに分類した。

- A 1 類 A 類は、把の作出にあたって刃部の腹と背の双方から把を作り出すもの。このうちA 1 類は、把を曲線的に表現したもの(854～856)
- A 2 類 把が直線的に表現されたもの(857)
- A 3 類 把の表現は直線的であるが、把縁と把頭に突起表現をもつもの(858)

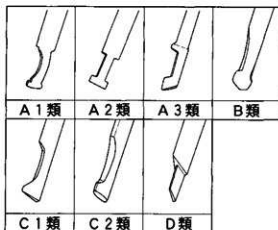


図30 刀形把部の分類

B類 背部の刀身から把間までは直線的であるが、把頭部のみは背部も作出したものの。

A類とC類の中間的な形態(859)

C1類 C類は、把の作出にあたって、背は刀身部分から手を加えず直線的に残し、腹部のみに挟りを加えて把を表現したものの。このうちC1類は、断面が板状形態をなす薄型のもの(860~885)

C2類 断面が三角形を呈する太型のもの(886)

D類 把を表現しないタイプ(887)

以上のうち、A類とD類は、作りが丁寧である。A類のなかでは、A1類がもっとも丁寧な作りをしており、奈良県大里市布留遺跡(註1)に類例が多いものである。また、A3類は、把頭とともに、把縁も装具で飾った太刀を表現したものであるが、形態的には石製模造品のなかの石製刀子との共通性も大きい。

1点のみが出土したD類は、把を表現せず、茎を表現したと思われる、非常に精巧な作りである。非泉から滑石製勾玉とともに出土しており、刀形のなかでも特別に製作されたようである。

最も簡略な作りはB類、特にB1類である。この類は、あまり仕事に丁寧さがなく、本来狭くなるはずの刀身の切っ先部分が最も幅広のままにされているものすら存在する。前述の武器形集地点を構成する刀形はほぼすべてがB1類である。

888~895は、先端が切先状になっていたり、断面三角状になる細長い板材であることなどから刀形としたが、さほど根拠があるものでもなく、刀形以外のものが含まれているかもしれない。888もD類刀形のようにもみえるが、木取りが異なり、別物である可能性もある。

なお、上記の分類とは別に、粗い加工を施して全体に湾曲した形状の棒状のものがある(896)。確証はないが、木刀というものが存在するとすれば、本例もその範疇に含まれるものかもしれない。

② 剣形(897~910、PL74)

六人A遺跡での剣形の出土は、刀形に比べて非常に少なく、定存のものもない。

基本的に剣形は、刃部切先が山形で、剣身中央に鎧をもち、把は把間が両側から覆り込まれ、剣身と

把頭から区別される。ただし、剣身中央の鎧は、明瞭に意識して削りだしたものの(897~901)と、中央部が厚くなるものの鎧の表現まではいまひとつ不明瞭なもの(906等)がある。

把頭部は、先端がやや尖り気味のもの(899等)と、丸いものがある。丸いタイプの903や904はこれのみをみると剣形とは認定しがたいが、上野市城之越遺跡ではこのタイプの把頭をもった剣形が出土しており(註2)、本例もそれを参照して剣形とした。

897は、大溝SD1最下層から出土したもので、弥生時代後期の所産であろう。丁寧な作りの短剣であるが、形状的には戈を思わせるものであり、「戈形」とすべきかもしれない。

909と910も、剣とするなら短剣であるが、鑢形等の可能性もある。

③ 鑢形(911~929、PL75)

鑢形のしたうちの大多数(913~927)は、一括投棄されたと思われる前述の武器集地点から出土したもので、共に出土した刀形B1類同様の非常に簡略で薄型の作りである。

これらは、20~25cm程度の身部から細長い柄が付くことが表現されたもので、ほぼ全体形を残す913では全長が103.3cmを測る。

身部は、断面形がレンズ状の諾刀で、少数ながら中央に鎧を表現するものもある。また、細長い紡錘形の身部からそのまま柄部に移行するような形状をとるものと、身部が屈折によって刃部と茎部に分かれているものがあるが、その場合は茎部と柄部が一体化している。

身部から続く柄部は、断面が多角形で丸く整形されておらず、本例の簡略さを示すものであろう。

上記以外で鑢形としたものは、ごく少数である。911は、断面方形の身部、929は断面菱形の身部をもつもので、ともに全体に厚みがある。912の鑢形も出土している。これに対し、912・928は薄型であるが、912については鑢形とする根拠は乏しい。

また、前述のように剣形としたもののうち、909と910が本来は鑢形であった可能性はある。

④ 木鏃(930~939、PL76)

武器として扱われた可能性もなくはないが、鉄鏃

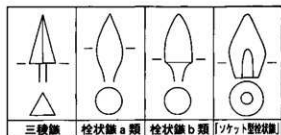


図31 木鎌の種類

が一般化してくる時期でもあること、矢尻のみが単独で存在する例は特殊な鎌に限られ、多くが矢尻部と矢柄部を一本で作出したものであることから一括して実用品ではなく祭祀用として扱った。

木鎌は、『木器集成』の分類に従い、身の形態によって分類する。

a. 三稜鎌(930～932)

930と932は矢尻のみが単独で作られていると思われるが、931は矢尻と矢柄がセットになったものと思われる。

これらの矢尻部は、身の断面が三角形で、茎の断面形が円形を呈する。930は通常の形態であるが、932は茎を挟んで両側に身がくる特異な形状を呈していることから木製品の可能性もある。

『木器集成』では、弥生時代後期に主体があることと、船載の青銅製三稜鎌(漢式鎌)を模倣した木鎌の可能性があり、同形態の骨鎌も出土していることが指摘されているが、当例も弥生後期～古墳初頭の層位から出土しており、問題はない。

b. 杓状鎌(934～939)

六太A遺跡出土木鎌の主体を占める木鎌である。全て矢尻と矢柄を一本で作出したもので、矢尻、矢柄ともに断面形は円形となる。以下の2形態に分類できる。

a 類一身の先端から矢柄まで稜をもち、そこから基部に推移するもの(935～939)

b 類一矢尻の下部に稜をもち、そこで身と茎が区別されるもの(934)

c. 「ソケット型杓状鎌」(933)

『木器集成』では類例が存在しない。身の形態からいくと杓状鎌の一種ということになろうが、矢尻が単独で存在し、しかも茎が出るのではなく矢尻に矢柄を挿入する形態を取って通常の矢尻とは結合方

法が異なる。従って、「ソケット型杓状鎌」として独立して扱った。

⑤ 小刀形(940、PL76)

把縁が表現されているが、刀身は短く、全体に短小であり、小刀形とすべきものである。把頭部は欠損している。

⑥ 刀子形(941～942、PL76)

断面が楕円形を呈した把の部分のほうが太く、刀身部のほうを薄く削り出した抜身状態の利器を刀子形とした。刀身部は、刃部、背とも明瞭である。

⑦ その他(943～951、PL76～77)

943は、原型となった武器は確定しかねるが、片刃が表現されており、武器形であろう。刀形もしくは戈形の可能性がある。

945～951は、武器形とする根拠も弱いものではあるが、先が尖っていたりすることなどから武器形の可能性を考えた。ただし、例えば950などは図示したものととは天地が逆になって、出柄の部分に有孔の板を挿入する脚付の台のようなもの可能性もあるし、必ずしも用途が武器形に限定できるものでもない。

(2) 形代

ここでは、武器形以外の形代を扱う。

六太A遺跡出土の形代は、量的にはあくまで武器形が主体であり、それ以外の形代はさほど量的には出土していない。

動物形として鳥形と馬形、器物の形代として角形と楕円形があり、それ以外に原型のわかる形代として陽物形(男茎形)がある。

① 鳥形(952～957・968～972、PL77・79)

後述の馬形とともに、非常にデフォルメされたものであり、その認定にはかなり困難を伴っている。

抉り等の切り込みを有する板材のうち、材に別材と連結するための貫通小孔や目釘孔があり、形状かも鳥形と推定できるものを一括した。ただし、破片資料が多く、馬形と峻別しきれないものも多い。

鳥形には、立体的に鳥を表現した立体鳥形と、側面観もしくは平面観のみを板材への切り込みで表現した平面鳥形とが存在する(『木器集成』)が、六太A遺跡の出土品は、鳥形とした場合、平面鳥形ということになる。



写真6 形代に入れられた線刻例(955)

952は、嘴をデフォルメしたような頭部と尾部をもち、中央部の目釘孔で両脇から串状具で抱え込むように留めたタイプの鳥形と思われる。ただし、形状的には、馬形になる可能性もなくはない。

953は、貫通小孔をもつもので、2枚の板材を組み合わせ、貫通小孔に目釘による軸を差し込むタイプの鳥形であった可能性がある。

954は、木釘であるが、長野県石川条里遺跡出土の鳥形の例(註3)を参考にすれば、上述のような2枚の板を組み合わせて留めるタイプの鳥形の留め具として使用された可能性がある。

955は、片側が丸みをもった板状品で、上端部と下端部に串状の棒を差し込んだと思われる小孔がある。挟り部周辺に線刻列があり、あるいは羽根を表現したものの可能性がある。

956~957は、板状品に所々挟りを入れたものである。形状的に鳥形をよりデフォルメしたものと考えたが、『木器集成』で裸馬とされているものにも類似しており、馬形の可能性もある。

なお、図版レイアウト上は別になってしまい、遺物番号も少し飛んでしまったが、968~972についても、別材を差し込むための1ないし2個の細長い方孔の存在や、丸みを帯びた紡錘形の形状から、鳥形もしくは馬形になる可能性がある。形代とするなら、馬形とするより鳥形のほうが適当であろうが、ただし、これもさほど根拠のあるものではない。

② 馬形(958~959, PL77)

馬形も、鳥形同様、板材に切り込みを入れて馬の側面観を表したもので、支え用の留具など別材と連結するための小孔が穿たれる。

ほぼ馬形と考えられるものに、958がある。上部の盛り上がりは、鞍を付けた飾り馬の状態を示した

と考えられる。下部には、小孔が穿たれており、ここで支え木と連結したのであろう。

959は、やや厚手の板に挟りを入れたもので、形状から馬形と考えたが、やや根拠に乏しい。また、天地が逆である可能性もある。

③ 舟形(960~964, PL78)

内面を削抜いた、より舟の形状に似せた舟形と、平面形のみ紡錘形の舟の形状をとるが内面までは挟りこまないミニチュアの離型的な舟形がある。また、前述の槽としたものなかにも、舟形が含まれている可能性がある。

このうち、961は、内面を削抜いたタイプの舟形で、舟の船首と船尾も明確な写実的な作りである。

962は、削り抜くタイプの舟形の可能性を考えたと、木取りからは槽の側板部かもしれない。ただ、槽的なものと考えた場合でも、左右非対称な特徴からやはり舟形となる可能性がある。

これに対し、963~964は、内面を削抜くような仕事はなく、平面形のみ舟の形状をとったものである。離型と呼ぶほど小さなものであるが、963については平面のみながら舟の船首と船尾の形を意識した写実的な作りである。

④ 横楕形(965, PL78)

身が円柱状でなく、先端へ向かって先太りしていることから、横楕形とするには疑問も残るが、握部と身部が明確に分離され、全体的な形状が横楕を連想させることから、横楕形と考えた。層的には弥生後期~古墳初頭の層から出土していてやや古い印象も受けるが、『木器集成』では京都市中久世遺跡の弥生中期の例も紹介されており、問題はないであろう。

⑤ 陽物形(966, PL78)

陽物形としてはやや特異な形状で、以下のような特徴がみられる。

- ・イスガヤの堅緻な細長い丸棒材を利用し、加工は両端部のみにし、中央部は樹皮を残したままにしている
- ・丸棒材の片側は、男茎部の先端部の加工を施したもので、端部に尿道出口の切り込みを入れ、その周りを男茎の形状を模して斜めに切り込みを入れて男茎部頭部を作りだした写実的な作り

である

- ・男根基部は、杭状に尖らせて地面等に差し込めるような形状にしている
- ・陰囊に相当する部分は存在しない。

以上の特徴のうち、片側先端を杭状に加工していることは、本例のもつ際立った特徴である。このことは、『古語拾遺』に記載された、「溝の用水に突肉と男茎形を置く」という話を彷彿とさせ、あたかも屹立した状態の男性器を大地に差し込んでその生命力を誇ったかのようなものである。堅い材を使用したことや、長いことも意味があったのかもしれない。

⑥ 笠形(967、PL79)

外面は非常に精巧な調整を施して表面を滑らかにし、内面をやや粗くくり抜いたもので、形状から笠形とした。

⑦ 軸棒形木製品(973、PL79)

厳密には形代かどうか以前に、何であるのかが不明であるが、黒漆仕上げで線刻部には朱を入れる非常に精巧な作りから、実用品というよりは祭祀用等の特別な製品である可能性をより強く感じ、ここに指定した。

芯持ち材を利用した棒状具で、どちらが上下かも不明であるが、図上での上端部は袈が入って樹皮等で緊縛するための仕事がなされており、溝部分に別材を挿入してそこで留めたものと思われる。そうした場合には、刀子の柄である可能性もあろう。

図上での下端部は、円形の有頭状になっており、三角形の刻みを横に連結してその部分に朱を入れている。

⑧ さしは形(974、PL80)

欠損のため半截されているが、幅広円形の部分とそれに取りつく軸部(握り部?)からなり、ちょうど同柄のような形状に復元できる。円形部分には手斧状の調整痕跡が残る。奈良景御所市南郷大東遺跡出土品に類例がある(註4)。

(3) 薙串(975~976、PL80)

ほぼ完形の976は、『木器集成古代篇』の分類ではBⅠ型式もしくはCⅠ型式に相当する畜串であるが、上頭状というよりは剣先状に切り落とした上端と、それよりさらに急角度の剣先状に切り落とした下端をもつ。全長は21.6cmと長くはなく、側面が

やや挟られ気味となる。ほぼ完形のものとしては1点のみを確認したのみであるが、後述の木札状木製品としたものや、薄型の板状木製品のなかにも畜串が含まれている可能性は否定できない。

註

①山内紀嗣他『市留遺跡(高)「甲中」地区発掘調査報告』埋蔵文化財大目録調査報告 1995

②徳信路昌他『二重原上野山比土 風之崎遺跡』『重忠埋蔵文化財センター』1992

③川内直之『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告』第13-1長野市内その3-石川集里遺跡第3分掘(財)長野県埋蔵文化財センター他 1997

④吉澤泰介他『井戸遺跡・南郷(丸山・大東)遺跡発掘調査報告』奈良県遺跡調査機関 1994年度奈良県立歴史考古学研究所 1995

8 楽器

琴と箏(ささら)状木製品がある。

単純に、音の鳴るものとして楽器としたが、古典の記述(紀記等)からも窺えたとおり、琴などは音によってカミを招く依り代として使用されたことが考えられ、「祭祀具」とみることにも可能である。

(1) 琴

以下、琴は、琴身と、琴柱に分けて説明する。

① 琴身(977~983、PL81~82)

六太A遺跡から出土した琴には、板作りの琴はなく、全て槽作りの琴と考えられるもので、このうち1点は小型品である。

出土した琴のタイプには、共鳴槽の上面に琴板を乗せるタイプ(『木器集成』でいうⅡa類、977~982)と、側板と上面の琴板とを一体にして作り、底板を嵌め込むタイプ(『木器集成』でいうⅡcタイプ、983)の2者がある。琴板を共鳴槽に乗せるタイプは、琴板4点(うち小型品1点)と共鳴槽2点が出土しており、いずれも別個体である。

琴板と共鳴槽が一括で遺存したものがないため確実なことはいえないが、一応現存の仕事から接合手法を整理すると、

a 接合一目釘孔によるもの(977、982)

b 接合一目釘孔に加え、樹皮による縦じを施すもの。樹皮縦じは、琴板側面に2個一対の切り込みを入れてこの下面に共鳴槽側板をあてがい、共鳴槽上部側面に入れた切

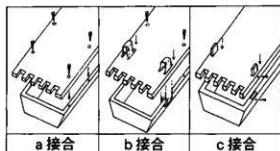


図32 琴板と共鳴槽の接合模式図

り込み（木確認）と樹皮縫する。この場合、切り込みと樹皮の間に木切片を挿入して樹皮をより安定させる（979）

c接合—琴板と共鳴槽側板（磯）上面の同じ位置に上から切り込みを入れて木切片を挿入し、琴板と磯の側面から木釘を打ち込んで固定したもの（978・980）

の3類がある。

977は、ほぼ中央で縦長に割れているうえに琴頭も欠損しているが、琴板のほぼ中央に音孔（響孔）と琴尾近くにやや大きめの集弦孔をもつ。琴尾には3突起が現存するが、欠損部の存在を考慮すると6突起存在したことが窺え、6弦琴に復元できる。共鳴槽との接合は、目釘孔（a接合）による。外面が滑らかなのに比べ、内面はハツリ痕があり、音響効果を上げるための配慮の可能性もある（註1）。

978は、欠損のため不明な面が多いが、琴尾内面に小口板用の溝を掘るもので、接合はc手法による。琴尾よりも琴頭の方が幅広くになっていることに特徴があり、琴尖が括れるタイプの琴であろう。

979は、琴尾・琴頭ともに欠損しており、確認に欠けるが、接合位置や方法から、琴と判断した。接合はb接合による。

980と981は、ともに共鳴槽と考えられるものであるが、981は琴板との接合仕口がなく、疑問も残る。ともに片側が狭くなっていくもので、先細りタイプの琴になるものである。

980は、縦に平載されたような遺存であるが、現存部内端近くの磯内面に小口板を入れるためと思われる縦方向の溝が掘られており、遠からず端部になるものと思われる。接合はc接合による。磯中央に2個の円孔が穿たれているが、これが当初からのものとすると言孔の可能性があり、側板に穿たれた

例としては極めて珍しい。

982は、小型品である。琴頭部は欠損しており、全体の法量や集弦孔の状況は不明である。琴尾は、一部欠損しているものの、6弦に復元できる。琴尾に向かって左に行くにつれ、突起の間隔、大きさとともに小さくなっていく。接合はa接合による。槽体の浅い共鳴槽とセットになるものであろう。

琴板と側板が一体に作られるタイプは、1点が出上している。大部分は欠損しているが、弦の付く琴板と側板が一体になっていること、琴尾近くに小口板用の溝が掘られていることは確認できる。弦の本数は不明。ⅢB層（弥生時代後期の層）から出土しており、この時期のものとする説は草津津市申武遺跡の例に次いで2例目となる（註2）。

② 琴柱(984、PL83)

SD1でもかなり上層（貼石上）から出土しており、上述の琴とはセットにならない新しいもの（飛鳥以降）である。

三角形の頂点を水平に切り取って弦を受ける部分を作り、下面に剣込みを入れたもので、安定のためか底辺の片側を横に延ばしている。全体に直線的な作りである。

(2) 彫状木製品(985、PL83)

彫とは、刻みを入れて鋸歯状にした歯部を別材に振り付け、音を鳴らしたものとされる。

基部が欠損しているが、現存長11.5cm、幅2cm、厚さ0.7cmの細長い板材に基部と刻み部を入れたものである。刻みは、左右対象ではないものの、両刃である。本例が「彫」とすると、この刻みを別材に当て、擦って音を出したものであろう。ただし、刻み部には擦れた痕跡はなく、「彫」として使用されたかどうかは確定できない。

註

(1) 放送大学 草津原産生のご表示による

(2) 小宮編著「共鳴槽を持つ琴出土」『滋賀文化財だよりNo.119』006頁
滋賀文化財保護協会 1987

9 装着具

人間の身に付けるものを一括した。櫛と下駄とがある。

(1) 櫛(986—987、PL83)

大溝SD1では、2点の横櫛が出土した。

986は、高坏と杯のみで構成された土器溜から出土したもので、古墳時代中期の所産である。僅かに欠損した部分もあるが、非常に精巧な作りで、側縁部が外反し、背部に丸みのあるのが特徴である。歯は58本を数え、1cm当たり8本が刻まれているが、これは鋸状貝で刻んだものであろう。片面には、実際の刻歯のさらに外側に当初歯をここまで刻もうとした設計時の予定ラインを示すと思われる線刻が見られるが、最終的にはその予定ラインよりやや内側で仕上げられている。

これは、古墳時代の横櫛としては大阪府小阪合遺跡の4世紀のものに続き、日本で2番目に古いものである。小阪合遺跡のものは、形態的には横櫛であるが、歯の間隔も粗く、歯の製作技術は堅櫛の系譜上で考えられている(註1)。

これに対し、本例は、新しい技術で歯を細かく作出した横櫛としては現状では日本最古のもので、この技術は後の時代の横櫛へと系譜的に連続していくものであろう。

もうひとつの横櫛である987は、986に比べて背部の丸みが緩くなり、側縁部も直線化したものである。ただし、背部から歯先くまでの断面形が鋭角の二等辺三角形形状を呈することなどは986と共通しており、基本的に986の技術の系譜上に乗るものであろう。

(2) 下駄(988~1029, PL84~91)

擾乱やI層から出土した新しい時期の下駄も含むが、多くが古墳時代中期~後期に属するものと思われ、古墳時代の下駄が大量に出土した例として非常に珍しいものである。

大溝SD1出土の下駄は、足を乗せる台と2枚の歯を一本で作りだした遊歯式の下駄で、台と歯を組み合わせた差歯式の下駄はない(落ち込みSR2には差歯式が1例存在する)。

歯がすり減ってわずかに旗跡だけ残ったものや、保護を施すための緒孔を当初穿ったものとは別のところに穿ち直して再利用を図ったもの、あるいは台の表面に足裏の形がつくまで覆き込まれたものなど全体にかなり使い込まれた個体も多い。

下駄は、木炭を上にして作られることが多く、六人A遺跡の下駄もそれが多いが、なかには木炭を上

にして作られているものもある。

下駄に関しては、『木器集成古代篇』において、台との関連における緒孔の穿孔位置、歯の作り方、台の平面形を指標として詳細な分類が試みられている。

ここでは、その視点に導かれつつ、中でも特に歯の作用方法に関して、歯が台側縁の内寄りから作り出されるのか、台と歯の側縁が直線的につながるのか、前後の歯を台の両端に寄せたのかを分類の基本に据え、その上で緒孔の穿孔位置や歯の断面形状等を見ていくこととする。

なお、緒孔の穿孔の類型に関しては、

A穿孔：前壺を左右いずれかの一方によせてあげ前・後壺とも歯の外側にあげたもの

B穿孔：後壺を後歯の前にあげたもの

C穿孔：前壺を台の中央にあげ後壺を歯の内側にあげたもの

という『木器集成古代篇』の分類を基本的に踏襲しつつ、それにあてはまらないものを別途説明する。

以上のような視点に基づき、六人A遺跡から出土した下駄を以下のように分類整理した。

A1類 A類は、歯が台側縁の内側から作り出されるものを一括する。A1類は、そのなかでも、歯が側面から見て外開きとなるもので、A穿孔の緒孔をもつもの(988)

A2類 基本的な特徴はA1類と同じであるが、緒孔の穿孔がB穿孔によるもの(989~993)

A3類 前歯、後歯とも、外側はほぼ垂直に延びるが、内側は外開きとなり、前歯内側から後歯内側にかけての断面が台形を呈するもの。緒孔はB穿孔(994~1004)

B1類 B類は、台と歯の間に段がなく台と歯の側縁が直線的に繋がるものを一括する。B1類は、そのなかでも前歯と後歯が側面から見て外開きとなるもの(A2類の歯側面断面と共通)で、緒孔はB穿孔になる(1012~1013・1017~1018)

B2類 前歯と後歯の外側はほぼ垂直に延びるが内側は外開きとなるもの(A3類の歯側面断面と共通)で、緒孔はB穿孔(1005

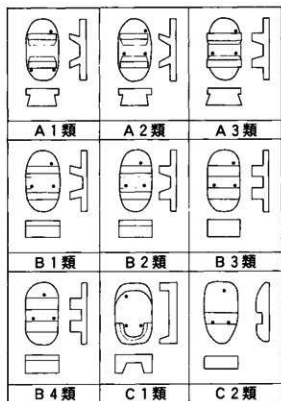


図33 下駄の分類

～1007・1010)

- B 3 類** 前歯と後歯の断面形が方形もしくは台形になり、緒孔はB穿孔によるもの(1008・1011・1014・1021～1024)
- B 4 類** 歯の特徴はB 3類と同じであるが、緒孔の穿孔がA穿孔によるもの(1025)
- C 1 類** 前後の歯を台の両端に寄せたもので、後歯が凹字状になるもの。緒孔の穿孔は、すべて前後の歯の内側に穿たれるが、前歯はどちらか片側に寄っている(1026～1027)
- C 2 類** 前歯が湾曲しつつ長大で、後歯が短いもの。緒孔は前歯は前歯中央部、後歯は後歯の前にあけたもの(1028～1029)

(1009・1015～1016・1019～1020もB類であるが遺存状況悪く細別不能)

A類は歯の横断面が台形を見せるもの、すなわち台側縁より少し内寄りから歯がはじまるぶんだけ歯の下辺部へ向けて広がるものが一般的で、なかには台幅よりも歯下辺部幅の方が広がるものも存在する。

同様の特徴は、B類のなかにもみることができ(特にB 2類やB 3類など)。

また、A 1類の988は、他のA類やB類の下駄では前歯がほぼ前歯に接するくらい近接して穿たれているのに対して、前歯よりもかなり前方に穿たれており、他の個体とは著しい差異をがしている。

六太A遺跡出土の下駄は、上記分類のうち、A 2類、A 3類、及びB類が多い。

型式学的には、段の有無を除けばA類とB類は共通点が多く、部分的に同時存在していた可能性が高いが、A 2類からB 1類、A 3類からB 2類へとそれぞれ連続した大きな流れがあるものと思われる。

その場合、連歯式の下駄は、台と歯の間に段があるA類から台と歯が連続的に推移するB類へ、という流れと、前歯・後歯ともに前後もしくは左右へ外開きになるものから歯が立直するタイプへ(A 2類からA 3類、B 1類からB 3類)、というふたつの流れが複合しつつ変化していくものと思われる。

A類は、基本的に『木器集成』(原始篇)に収録されている個体と基本的に共通しており、多くが古墳時代の所産とみて大過ないものと思われ、層位的にも問題はない。

B類についても、古いものが古墳時代にかかる可能性があり、『木器集成』(原始篇)でもそのタイプのものが1例ながら紹介されている。しかし、B類は飛鳥以降の時期も存在することから、六太A遺跡のB類下駄についても飛鳥以降のものも存在するものと思われる(層位的にはどちらでも可)。

緒孔の穿孔方法であるが、B 3類で焼け火害によると推定される穿孔を行ったものがあり(1024)、焼痕が残る。これは、曲物底板(もしくは蓋)中央部にあけた孔と穿孔方法が共通している。

A・B類とはやや系列を異にすると思われるC類であるが、こうしたタイプの下駄はやや新しくなると思われがちである。しかし、C 1類の1026は、層位的にはかなり下のほうから出土しており(II層下層)、層位・取り上げ方法に混乱がないとすれば古い可能性があり、今後、古墳時代に遡る類例がないかなど注視していきたい。ただし、C 2類は大溝S D 1でも攪乱からの出土で、鼻緒も残っており限りなく現代品に近い時期の可能性もある。従って、C

類については、形態的特徴から類型としては一括しているものの、全く時期の異なるものが含まれている可能性が大きい。

なお、今回はあまり触れられなかったが、下駄の全体形状や法量にはかなりの開きがあり、中には子供用かとも推定される小さな個体も含まれていることを付言しておく。

註

(1) 野田真一「小泉合遺跡第20次調査（KS91-20）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告6』第8八尾市文化財調査研究会 1993

10 運搬具

ここでは、陸上用の運搬具である天秤棒と背負子？、輓を扱う。『木器集成』では運搬具として扱われている舟・船については、別に1項目を設け、後述する。

(1) 天秤棒(1030~1039, PL92)

断面形が楕円形を呈するなどやや扁平な木材で、紐を吊り下げるため端部に切り込みの仕事を施したものを天秤棒とした。ただし、このなかには、天秤棒かどうか疑わしいものも含む。

これらについて、端部の切り込み部位によって、以下のように分類する。

A類一切り込みが傾斜にあるもの(1030~1031・1037)

B類一切り込みが上面にあるもの(1033~1035・1039)

C類一端部を有頭状にしたうえで側面と上端を巻き込むように切り込むもの(1032・1038)

以上のうち、天秤棒の可能性が高いのはB類である。ただし、通常、天秤棒は仏堂樹を使用するのが強度の面からいっても適当であるにもかかわらず、今回掲げたものの中には針葉樹を使用しているものも多く、これについては天秤棒かどうか疑わしい。



図34 天秤棒の分類

A類は、天秤棒の可能性は残すものの確定できないもので、現時点では「天秤棒状木製品」と呼称したい。C類に分類したうちの1032も、断面形や端部の切り込みの形状はむしろA類と共通性が強い。これらが天秤棒とした場合、両端の切り込みが2か所以上にわたっており、重量に応じて紐掛け位置を変えたものと思われる。なお、天秤棒ではなかった場合、A類は紡織具等の可能性が考えられる。

1036については、端部が遺存していない。それでもあえて天秤棒としたのは、断面形が楕円形で、中央部になるに従い偏平となっていく形状が天秤棒として適当と考えたことによる。同様の特徴は、B類とした1039ももつが、他は欠損部のため明らかではない。

(2) 背負子？(1040, PL92)

股木として枝分かれするやや鈍角のL字状を呈した樹幹部を用いたもので、幹木には縦方向と横方向に小孔をもつ。全体にやや大形なこと、爪木がやや鈍角に延びること、それに通常背負子とされるものとはやや形態が異なることが疑問ではあるが、爪木は欠損部付近からカーブして上へ向かう可能性もある。

この材を背負子とした場合、横方向の小孔は、もう一方の幹木と柄結合を行ったものと思われる。爪木と同じ方向に穿たれたやや大形の長方形孔は、積載物を留めるための緊縛用の孔であろう。

(3) 輓(1041, PL93)

「く」字形を呈した断面円形材の樹幹部を使用したもので、端部に欠けた部分があつて不明点が多いが、構造的には輓とするのが適当であろう。なお端部の欠損部は、緊縛用に掛りをいれたらしい痕跡はある。

物を牽引するというので運搬具に含めたが、牛耕用の道具というのでは農具(耕作具)に含めたほうが適当であろう。

11 土木・作業用具

この類に含めたものには、幾と土木作業時に土を叩き締めるため使用したと思われる土叩具、何かを打つために用いたのかとも推察される把手付きの叩き板を含めた。

(1) 鏝 (1042, PL92)

『木器集成』が紹介する鏝とは形状や把手孔の有無など異なるものが存在するが、把手と磨り板からなるという基本構造の共通性と、大きさが適宜なことから鏝と考えた。

磨り板は、左右への湾曲はないが、前後へはわずかに湾曲している。通常、鏝の把手には孔が存在するが、本例にはなく、また把手形状自体も通例とは異なっている。

(2) 土叩具 (1043, PL93)

丸太材の中央部をくり抜いて残った2か所を断面円形の把手に成形したもので、ちょうどぶたつた太鼓のようにも見える円柱部を2本の丸棒で連結したような形態をとる。円柱の両端には鍍打痕が残っていることから、2本の丸棒部を掘りとし、円柱を上方向に動かして使用したことが窺える。

管見による限り、他の型例を知らないが、上記のような形態的な特徴から、上下2個の円柱の重量を利用して上から下への力の移動によって何かを叩き締めるために使用した道具であったと思われる。その場合、杭等を打ち込むことにも使用できたと思われるが、円柱端面の幅が比較的広いことから、堅穴住居床面など土や粘土を叩き締めるために使用されたことが多かったものと推察される。

(3) 叩き板 (1044~1046)

羽子板状の長方形板材に把手のつくものを叩き板とした。ただし、叩き板といっても、『木器集成』も指摘するように、本例のように板材片面に何らの細工も施されていないものを土器製作用のものに限定する必要はなく、横断的な鍍打機能をもつ道具としたほうが実態に即したものであろう。

12 食事具

大溝SD1出土の食事具としては、杓子形木製品があるが、落ち込み状旧河道SD2には匙が出土している(後述)。

ただし、杓子状木製品としたものの全てが食事関係の道具に限定できるかどうかはわからない。

また、片面に多数の対称状のキズのある板状品は皿の可能性もないとはいえないが、確実性に欠けるため、後述の板状木製品(21-4)で一括する。

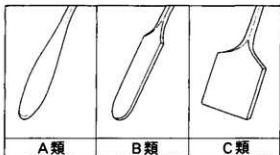


図35 杓子状木製品の分類

(1) 杓子状木製品 (1047~1057, PL94)

真っ直ぐな柄に扁平で幅の広い身がつくものについて、『木器集成』に従って杓子状木製品として一括した。

身の横断面は、紡錘形もしくは直線で、片面が窪むものはない。柄から身への移行形態及び身の形状によって以下の3類に分かれる。

A類 柄から身への移行が漸移的なもので、境界が不明瞭なもの(1047~1053)

B類 柄と身の境界が明瞭で、身が長方形に長いもの(1054)

C類 柄と身の境界が明瞭で、身の長さが短くより扁平感の強いもの(1055~1057)

六大A遺跡全体の木製品のなかで、食事具の占める割合は非常に小さいもので、杓子状木製品としたもののいくつかが別機能の道具も含んでいると仮定した場合、その割合はさらに低いものとなる。最も生活に密着した遺物のひとつといえる本類の少なさは、六大A遺跡がいわゆる生活臭をあまりもっていないことを如実に示すもののひとつといえようか。

13 発火具

六大A遺跡出土の木製品は、火を受けて焦げた痕跡のあるものは非常に多く、かつそのことは器種・器形を問わない。

六大A遺跡で発火具として確実に認定できるものは、回転摩擦式発火具のキリモミ式の火鑽(PL9)のみである。火鑽については、先端部が焦げた棒状品はかなり出土しているもの、積極的に火鑽件とする根拠に乏しく、ここでは省いた。

(1) 火鑽臼 (1058~1065, PL94)

角棒の縁に切り込みを刻み、上面から火鑽件を回転させて発火させたもので、他遺跡から出土する例

と基本的に変わらない。全体的に火鑽穴の間隔は疎らで、あまり使い込んでないものが多い。

また、これとは別に、比較的偏平な材の縁ではなく、材の中心線に沿って火鑽穴状の痕跡が見られるものがある。『木器集成』にはこうした例は掲載されていないが、積極的に他の用途を想定しがたく、酒桶的な理由ながらこれについても火鑽穴目を含めて掲載しておく。

14 漁撈具

漁撈具と認定できる遺物も非常に少なく、網杓と浮子の可能性のあるものがいくつか存在するのみである。弥生～古墳期の水際の遺跡でよく出土する「アカ取り」も出土品中には確認できない。

ただし、先端を尖らせた棒状品は多数出土している（後述の21-1の棒状具参照）。このなかには『木器集成』で「ヤス」として分類されているものと同形態のものも存在し、木製のヤスが存在する可能性は大きい、ヤスとそれ以外のものとの峻別が容易ではなく、ここでは触れない。

(1) 網杓 (1066~1067, PL95)

ともに網杓とする可能性があるが、不確定要素も残るものである。

1066は、枝分かれ部分を利用したもので、柄の付かない杓木だけの小型のものである。杓木は全周せず、半円もいかない短いものである。先端部に緊縛用の紐掛けを削りだす。非常に精巧な調整の痕跡であるが、杓木が短いことがやや難点である。

1067は、木の枝分かれ部分を利用し、幹を把手、枝を杓木としたものである。把手は隅丸方形に作りだし、先端付近に凹孔を穿ち、弦等に吊るすことができるようにしている。杓木は、4本に枝分かれする部分の相対する2本を利用したもので、残存するのは1本のみである。網罟めのための穿孔等は見られないが、半截されて整形は受けており素木のままではない。ただ、全体にやや扁平で、水を掻き、魚等を支えるだけの不十分感は否めない。

(2) 浮子? (1068~1072, PL95)

『木器集成』で浮子とされているものと形態類似したものをここに上げた。やや短い棒状品のうち比較的整形され、両端部のうちの片側に穿孔のある

ものである。不明品のなかにも含まれている可能性がある。ただし、『木器集成』も指摘するように、いまひとつ確証には乏しい。

15 船材

六代A遺跡出土の船は、通常、原船・古代の遺跡で出土例の多い丸木舟（列舟）ではなく、それを船底材として舷側板を接ぎ足したいわゆる準構造造船と思われる船材の部材である。

使用樹種が複数にわたっており、同一の船を構成する部材かどうかは不明である。全体のごく一部の部材が出土したのみで、全体構造がわかるほどではないが、古代の準構造造船を知るうえで非常に興味深い資料ということができよう。全長は、1数mにはなるうかと推定できる（註1）。

以下、船部材の可能性のあるものを含め、推定の部位毎に報告したい。

① 舳先? (1073, PL96)

船首に取り付けられた波除け板と思われるものである。波を切るため大きく湾曲した先端部と、それよりも厚みを減じた船底板との接合部からなる。

船底板との接合は、柄結合と思われ、溝で連結した方形孔を一定間隔で穿っている。

以上のように、木材は舳先と考えたが、欠損部がこのままで終わらず、現存部と同様の大きな湾曲部もつ左右対称の材であった場合、船内を区切り、強度を増やすための隔壁であった可能性もある。

② 舳? (1074, PL96)

船尾に取り付けられた波除け板と思われるものである。断面がやや鈍角のL字状の材で、その一方にはほぼ左右対称の方孔が穿たれている。これは、船底材と柄結合したものであろう。

③ 舷側板 (1075~1078, PL97)

厚さ4~5cm、幅（高さ）13cm前の長方形杉材に、上下2段にわたって長方形納孔列を穿ったもので、ここに樹皮を巻き込んだ木楔を打ち込んでいる。これは、舷側板を上下に継いで船体をより高くするためのもので、おそらく上下に重ね合わせた舷側板の継ぎ目を覆うように別材を当て、それを上下で楔止めすることによって2枚の舷側板を繋いでいたものと推定される。

結合用の枠止めに樹皮を巻き込む手法は、大坂府久宝寺遺跡出土の船（註2）や滋賀県下長遺跡出土の船材（註3）にも見られるもので、樹皮を巻き込むことによって穴から水が侵入するのを防ぐための仕事とされているものである。

④ 陸骨（1079～1080、PL98）

船底付材となる丸木舟部分を補強するため、列られたカーブに沿って嵌め込まれた材と思われる。つまり、本材のカーブがそのまま舟船底部の断面形状に対応しているものと思われる。縦方向に穿たれた方形孔は、ここに棒状の別材が穿たれたと思われる、船体区画が強化のための材があったのであろう。

⑤ その他（1081～1086、PL98～99）

部位は特定できないものの、船部材の可能性のあるものを一括した。a～c同様の杉材である。北海道千歳市美々々8遺跡出土のアイヌ文化期の船部材（註4）と共通するものがある。また、船部材でないとなると、建築部材などになる可能性があろう。

註

(1) 川田呂久氏のご教示による。以下、準構造船の部材全般にわたって山田氏のご教示を得た。

(2) 『瀬和地Ⅰ久宝寺遺跡一その2』大坂文化財センター、及び、『瀬和地Ⅰ「倭人船—久宝寺遺跡出土船材をめぐって—」』『瀬和地—先史古蹟記念文化論叢』1987

(3) 守山山教育委員会佐崎茂氏のご教示を得た。なお、守山山教育委員会の好意で、同部材を見ることができた。

(4) 山口尚也「美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財調査報告書—千歳市美々々8遺跡孤塚部・美々々8遺跡」&北海道埋蔵文化財センター 1996、及び、山口尚也「美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—千歳市美々々8遺跡孤塚部」&北海道埋蔵文化財センター 1997

16 建築部材

六人A遺跡出土の建築部材は、質・量ともに豊富で、そのほとんどが弥生後期～古墳中期までの非常にまとまった資料である。

しかしながら、種類のにはかなりの偏りがあり、また転用時の2次の改変を受けているものも多いため、倒壊建物のようにそのままのかたちで建物の上部構造を復元するには至らない。扉や梯子のように用途が明瞭で形態的にも特徴的なものはともかく、建物の軸組となる構造材（柱や桁材、梁材等）については、その同定も含め不明点が多い。

建物の軸組には、地面に直交して立てられる縦方

向の材である柱や束と、地面と水平方向に使用される横架材や台輪等の水平構造材があり、屋根に関わる部材については屋根勾配に合わせた斜め方向の仕口が存在することも予想される。

そこで、本稿では、残存した材の形態的特徴や加工形状、仕口の特徴、木取り等からその材がもつ属性を明らかにし、その材が縦方向に使用された材なのか、水平方向に使用された材なのか、あるいは斜め方向に使用された材（屋根材）なのかなどでまず大分類し、そのうえで判明するものについてはもう少し具体的な役割や特定の部材名称を詰めていきたい。

(1) 柱材

縦方向の構造材には、柱の他、床束等があるが、六人A遺跡で確認できるものは柱材だけである。

柱材には、竪穴住居用柱と掘立柱建物用柱とがあり、掘立柱建物用柱はさらに高床建物と通有の掘立柱建物用の2者に分かれるが、転用や欠損資料の場合にはその分別は難しい。その他、柱材と推定されるものの、遺存状況の不良さからどの種類の建物に伴う柱かが不明なものもかなり存在する。

① 竪穴住居用柱（1087～1095、PL100）

二股に枝分かれする部分を利用して、樹幹部を柱身とし、二股部をV字状に整形して梁・桁の上部構造材の受けとした柱材を竪穴住居用柱材として一括した。後述の掘立柱建物用柱、高床建物用柱に比べて樹皮や節等を削り削りしただけのものが多く、途中で屈曲しているものもあって、全体に整形が粗い。

このうち1087は、上部二股以外に挟りを入れたもので、中央部よりやや上のところに浅いコ字状の切り込みをもつ。これは、ここに横材を当てて竪穴住居の主柱に沿って一周し、壁を当てるための仕事かと思われ、竪穴住居用柱としては比較の仕事が丁寧である。

また、1091は、上部が二股に分かれるというよりは、枝が1本斜め上方へ延びた部分を利用したものである。やや細い感もあるが、一応、竪穴住居用柱に含めた。

1095は、欠損のため上部の構造が不明だが、材中央部に挟りがあり、横材をあてて繋ぎするための仕事と思われる。1087との共通性等も考え、竪穴住居

用柱とした。

② 掘立柱建物用柱 (1096～1118, PL100～103)

掘立柱建物には、床を上げる高床建物と、床を上げない非高床の通常の掘立柱建物がある。

この両者を柱材でみると、明らかに高床建物用とわかる柱は、床上部の柱を床下部よりも細く造り出すのに対し、非高床の掘立柱建物の柱は柱頭の横架材との接続部位を除いて基礎部から上部まで断面円形のままである。

さらに高床建物は、上述の床下部と床上部を通柱の一本で造り出し、細くした床上部に台輪や鼠返し等を落とし込む通柱式と、円柱の床下部と角柱の床上部とを別材で造る別材式の2者がある(註1)。

このうち、別材式の床上部のみが出土した場合、出土材のうえから非高床用柱の上半部とを分別することは難しい。

通柱式と別材式の高床建物は、出現時期や盛行期に差があり、通柱式が弥生時代以来の形式であるのに対して、別材式は5世紀頃を境に出現し、通柱式に取って代わっていくとされている(註2)。

このように掘立柱建物といっても、高床か非高床か、あるいは高床でも通柱式か別材式かといった建物形式の差異で用材の形状が異なることが予想される。しかしながら、柱頭仕口部の形状は、形式を越えた共通性もあり、ここでは六六A遺跡出土の掘立柱建物用柱に見られる柱頭の形態を類型化し、その知見を踏まえて個々の部材を見ていくこととする。

・掘立柱建物用柱の柱頭形態

基本形態として、a類～c類の3形態あり、さらにa類とb類は細分できる。

a類は、柱頭に出納を造り出し、そこで横架材の方形孔を受けるもので、出納の形態によって以下の2形態が存在する。

a 1類 柱頭にはほぼ正角柱を造り出すもの

a 2類 柱頭の中央部を残して削り出し、断面が凸状になるもの

b類は、柱頭の中央部を切り欠いて内側を凹状に残すもので、ここに貫材を落とし込むための「柱貫」形式をとるものである。以下の2形態がある。

b 1類 中央の凹部が完全に開放するもの

b 2類 中央部の凹部が完全に開放されず、片側

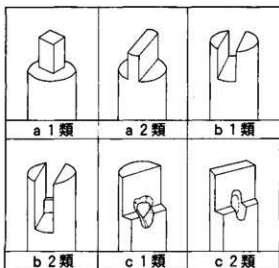


図36 掘立柱建物用柱の柱頭形態

に当あたり部をもつもの

c類は、柱頭部を先端から一定程度半載して断面L字状に半欠きし、この段差部を覆うかたちで中央部を穿孔するものである。

このうち、a類は、柱頭部以下がいずれも断面円形であり、現状の資料に拠る限り、六六A遺跡では非高床の掘立柱建物に伴う部材の柱頭に限られる。

b類は、貫材を縦に通し、その上に横架材を渡したものであると思われる。つまり、これは、横架材に乗りかかる上部の材の重量で横架材が柱間で折れたり下に軋んだりするのを防ぐため、それを支える目的の仕事であろう。その場合、上に桁材が架材が載るとすると、かなり重い屋敷を受けたものと思われ、また柱頭部以下が断面円形になる場合には、別材式の高床建物の床下部となつて、台輪等を載せて床上部全体を受けたことも考えられる。

なお、当あたりをもつb 2類は、建物の隅柱になるのであろうか。

c類は、b類とは逆に、上部に載る材はかなり軽い材が想定できる。

以下、上記の柱頭形態を踏まえた上で、建物形式毎に使用用材を見ていくこととする。

a. 非高床掘立柱建物用柱 (1096～1100・1105)
柱頭部の仕口より下位が断面円形の柱材を非高床用の掘立柱建物用柱とした。

柱頭仕口は、a～c類のいずれもが存在する。

このうち、a類は、高床建物となる確実な例がなく、本遺跡では非高床用の柱材の仕口として限定さ

れていた可能性がある。

ただし、1096等のように柱頭部の造り出しの端部が欠損している場合には、通柱式高床建物用柱の床下部と床上部の境の部分かもしれない。

また、1105は、柱上部の断面形が半円形で、通柱式高床建物の例と類似するが、断面半円部から断面円形部に漸移的に移行するため床下部との段差が明瞭でなく、本例に含めた。

b. 高床建物用柱材 (1101~1104・1106~1118)

床下部に対して床上部が細いことから高床建物に伴うことが明瞭な柱材と、段差部は存在しないものの断面方形を呈することから高床建物の柱上半部と考えられる柱材を高床建物用の柱とした。

床上部の断面形状には、

ア類 断面方形となるもの (1108・1113~1115)

イ類 断面略長方形で短辺部を元の円柱時のカーブを残すもの (1102~1104・1107・1118)

ウ類 円柱を半載して断面が半円形になるもの (1101・1106・1109~1112・1116~1117)

の3類が見られる。

このうち、ア類は、柱頭部の遺存例がない。

ウ類は、柱頭欠く床上部のみが出土した場合には柱材と認定することは困難だが、本遺跡では床下部から柱頭仕口部まで残存した例があり (1106)、高床用の柱材と認定した。同様の例は、六六八遺跡と同じ津市内の太田遺跡にも存在する (註3)。

また、ウ類は、使用用材がカシ・クスギ系の広葉樹であり、こういった木取りは用材の性質とも密接に関わっていたと思われる (註4)。

柱頭部を残すものはイ類とウ類にあり、イ類では

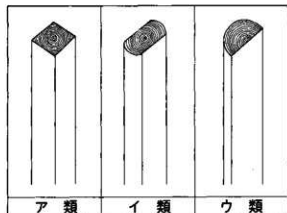


図37 高床建物用柱の床上部の断面形態

b1類とc類、ウ類ではc類の柱頭をもつ。

通柱式の高床建物は、これまで主に柱頭から鼠返しや台輪を落とし込むタイプが想定されてきたが、ウ類断面をもつものは横壁版を断面半円形の垂直部分に沿って積み上げた可能性も考えられる。同様のことは、b類のものについても可能性がある。

③ その他 (1119~1153, PL103)

上記のいずれとも決し難い柱材を一括した。円柱の一部を平坦にしたものなど多少の仕事を施したのも存在するが、積極的に高床建物用とする根拠に乏しく、ここに拵いた。

(2) 鼠返し (1154~1156, PL104)

鼠返しの可能性のある有孔の薄板材が3点確認できた。ただし、1156は、樹皮周縁を利用した材であり、疑問も残る。

いずれも方形または略台形の中央部に円孔もしくは方孔をもつ板材で、特に穿孔部付近が厚く盛り上がるといふことはない。

1154は、方形の穿孔の外側に円形に一段落としている。おそらく、図示した面が下面となり、方形に作りだした床土柱に木材を落とし込み、円形の床下部で受けるタイプの鼠返しであるが、床上部と床下部の直径があまり変わらないタイプの柱だったと思われる。

(3) 水平構造材

垂直方向の建物軸構造材である柱に対し、直交して組まれる水平方向の構造材を一括した。ただし、柱間を繋ぐ材ではあるが、扉を受ける蹴放しと△材は扉口装置としては後述する。

この類には、高床建物の床板や壁を受ける台輪、柱間を繋いで壁を受ける土居桁、柱頭に組まれる桁材や梁材があるが、本来の形状を全て留めるものはなく、いずれも破片もしくは転用品の破片である。

① 竪穴住居用横架材 (1157~1158, PL104)

丸木材の端部に方形の抉りを入れたものである。これは、竪穴住居用柱のうちでも、柱頭の二股の基部に加工を加えて面状に整形した仕事と対応するものであろう。

② 掘立柱建物用水平構造材

端部の仕口やその他特徴から掘立柱建物に伴うと思われる水平構造材のうち、後述の扉口装置部材

(置放し等)を除く部材を一括した。転用によって材そのものが切断されたものなどがあって、統一的視点で説明できないが、ある程度使用部位の類推ができるものから述べていきたい。

a. 台輪 (1159~1160, PL104)

長辺側の片側端部が短くL字状に立ち上がり、端部のみ板材厚の1/2に一段薄く落とされて、その中央に方形孔が穿たれた板材である。方形孔は、高床建物の床土柱を通して床下門柱上で止めるためのものと思われ、半分の厚さになっているのはここで隣接する台輪と連結したためであろう。また、長辺部端部の短い立ち上がりは、ここに床材となる板を渡した可能性が考えられる。

b. 大引 (1161~1162, PL104~105)

両端部が欠損のため、柱との接続方法は不明であるが、方形の欠き込み部分に床を張るための根太を通した大引と思われる。

1161は、板材の中央に台形突起を作りだしてそれに欠き込みを入れたもの、1162は、やや断面横長の方形材に欠き込みを行ったものである。1161は福岡県瀬尾遺跡資料中に類似するものがあり(注5)、それとの構造的共通性から大引とした。材の両端部は完結しており、台輪等の上に据え置かれ、柱間を埋めたものであろう。

c. 桁材 (1163~1164, PL105)

材の中央縦列に沿って、大型の方形孔と小型の方形孔が穿たれた板材である。材両端部が欠損しているため、大型方形孔と小型方形孔の配置の詳細は不明だが、大型方形孔と大型方形孔の間にくっつかの小型方形孔が並ぶらしい。大型方形孔は、柱頭の出納を受けるための納孔あるいは高床建物の床土部の角柱部分を通すための貫孔と思われるが、材が比較的薄いことを考えれば前者、すなわち軒桁材の可能性が高いものと判断される。その場合、小型方形孔は、壁の本舞材を差し込むためのもので、草壁を構成したものであろう。

d. 梁関係材? (1165, PL105)

端部が斜めに切り落とされ、その内側を端部と平行して斜め(約40°)に穿たれた方形孔をもち、端部と方形孔間の両端には上面から側縁に穿たれた小長方形の棧孔を有する厚手の板材である。端部や方

形孔の処理方向が斜めであるということは屋根に關係した部材である可能性を強く匂わせており、梁材とするには強度的に問題があるが、破風を受ける梁方向に使用された材の可能性が考えられる。

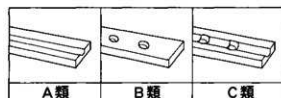


図38 壁受材の分類

e. 壁受材 (1166~1173, PL105~106)

断面が長方形もしくはそれを指向する板材で、広い面の一面に壁を受けるための溝や小穴をもつものを同材として認定した。

壁を受ける仕口の差異によって、以下の3類に分けられる。

A類 板材の中央縦列に沿って溝が掘られたもの

B類 板材の中央縦列に沿って小穴を一定間隔で配置するもの

C類 溝と小穴を複合したA類とB類を折衷したような形態をもつもの

以上のうち、A類は壁壁、B類は小穴が本舞孔となる草壁もしくは土壁、C類は縦桁材に分割された比較的幅の狭い板壁として復元できるであろう。

本材は、基本的には台輪の上に載って柱間を埋める材と思われる。材の端部が半円形に抉られて両角状になるものは、丸柱を挟み込む形態を取るものと思われる。

1167のように、材中央部に溝や小穴等の仕事の無いものは、その部分が開口部、つまり出入口となっていた可能性がある。

なお、溝をもつA類は、いわゆる数層・鴨居ということになる。

f. 梯子受材 (1174, PL107)

梯子を受ける切り込みをもった材。壁受材のような小穴や溝はないことから、この部分は壁のない部分、すなわち出入口になるものと思われる。この場合、扉口となる仕口もみられないことから、この材を使用した建物は、梯子で登ってきてそのまま直線的に開放したこの部分から建物内部に進入したものである。

なお、梯子受けの存在する部分の対側が一段落とされており、この部分に床板が載ったものと思われる。その場合、根太を通さず、木材に直接床張りを施したと判断される。

g. 不明横架材 (1175~1203, PL107~110)

横方向に使用される横架材と思われるものの、いまひとつ部位の特定が不明なものを一括した。特徴的なものを中心に、説明を加える。

1175~1176は、端部に一段切り落とした両角をもつ。1175は、断面形が凸状となるが、1176は断面長方形のままである。両角部分が隣接する同材の両角部と重なり、その間に柱床上部を挟み込んだものと思われる。

1177は、端部に出納を作り出しており、納結合により別材に差し込んだものと思われる。梁材等になるのであろうか。

1178は、断面長方形の材であるが、やや華奢な感じがしており、あるいは建築部材以外の用途をもつものかもしれない。

1179~1180は、同一地点で交互になって出土したもので、形状、長さとも類似しており、セットになる可能性が高い。端部をオーバ・ハング気味のL字に切り落とし、それよりやや下がったところに長方形の穿孔を施したもので、材中央部は手斧状の工具により面取りされ、断面長方形を呈する。1179はもう一方の端部が斜めに切り落とされている。具体的な使用部位は現在のところ特定できていない。

1181~1203は、材の形状、仕口、厚さ、全体的な大きさ等から、建築部材でも軸組みの構造材となるであろうと判断したもののうち、柱等の縦方向の材とするよりは横架材のほうが適当と判断したものである。

このうち、1187は、カシ・クスギ系の広葉樹を使用した材というんで材材とした1106や1118とも共通するものであるが、断面形状から横架材のほうがより適当と判断した。

1190は横架材でも建物本体から外に出ている部分の端部処理の一例と考えた。

(4) 扉口装置

出入口を形成する関係部材を一括した。このうち蹴放し材と榫材は、厳密には前段で述べた横架材に

含まれるもので、「扉口装置」と一括することは記述の整合性からはややバランスを欠くが、セットを構成する扉板と一括記述するため、このような段落構成とした。

扉材と、それを上下で受ける蹴放し材と、榫材がある。蹴放し材と榫材は、ともに柱間を埋める材である。

① 蹴放し材 (1204~1214, PL110~112)

扉口に据え置かれる敷居である。

この材は、両端に両角を造り出し、そこから扉に接した方立板を嵌め込むための溝を掘り、それが途切れるところに扉の回転軸をいれるための軸孔をもつ。この場合、軸孔が1個の場合は片扉式、2個の場合は両扉式となる。両扉式の場合は、いわゆる観音開きの扉が想定されている。

木取り方法やセットとなる扉構成、柱との固定方法の差異によっていくつかの形式に分けることが可能である。

六太A遺跡の蹴放しには、材の横断面が長方形になるもの(板材)と、半円形もしくは楕円形(丸太材もしくは半割丸太材)になるものがある。



図39 蹴放し材の断面形模式図

また、端部の両角は、中央部を方形に屈曲させている。このことから、六太A遺跡の蹴放しは、方形に造りだされた高床建物の床上部に対応したものである。

このうち、1213は端部より内側に入ったところに斜め方向の切り落としが認められるが、これは梯子を喰すための仕口であろう。

② 榫材 (1215, PL112)

蹴放しと大きさや形状に共通点があるが、扉の振れ防止のための突起をもつものを榫材とした。この突起は、建物内面揃いに接して当てられ、扉板の揺れを防止するものとされている(注6)。蹴放しとセットになるものであるが、六太A遺跡出土の榫材は、蹴放しよりも数が少なく、ほぼ確実なものとし

ては遺存状況の悪い1点を確認したのみである。

本材は、突起の位置が材中央に位置する断面凸形を呈するタイプで、ちょうど半截されたような状態で遺存していた。

ところで、本材の両角は、中央部かやや円弧状をしており、これは職放ししてみたような角柱に対応するというよりは丸柱に組み合うと思われる。榎材と職放しは、基本的に端部仕口は共通するものと思われることから、この榎材と同様に丸柱対応の職放しも存在したと思われる。

③ 扉板 (1216~1235, PL112~116)

すべて一木で削りだされたものである。六六A遺跡出土の扉を、形状に従って分類すると下記の通りとなる。

- A類** 造り出しの把手をもたないもの (1216~1219)
- B1類** B類は造り出し把手をもつものを一括する。このうちB1類は、把手をもつもので、板形状が幅広タイプのもの (1220)
- B2類** 造り出し把手をもつものうち、板形状が細長タイプのもの (1226~1231)
(1221~1225・1232~1235は破片のため不明)

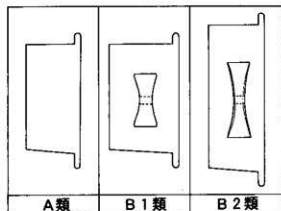


図40 扉板の分類

A類のうち、1219はいわゆるクグリ溝を彫り、ここに紐等を入れて開閉していたものと思われる。

B類の把手は、いずれも基部が幅広で中央部に分けて狭く湾曲してくる形状で、これは古墳時代前期を中心とした時期の伊勢・伊賀出土の把手付扉板を通じた特徴といえよう。把手の縦断面が台形状になる角張った把手と、稜を持たない丸みをもった把手とがある。

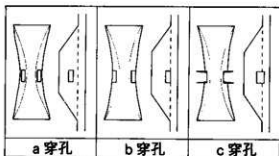


図41 門孔の穿孔部位

把手中央の最も狭い部分には、方形の穿孔が施される。これは、扉板を2枚並べて観音開きとした時に門の棒を通すための門孔(門錠)とみられる。

穿孔部位には若干の違いがみられ、

- a 把手断面の中央に施されるもの
- b 把手断面の扉板本体に接する部分で穿孔が施されるもの
- c 把手断面下部から扉の板面本体も挟り込むかたちで穿孔が施されるもの
- という差がある。

表面の調整は、基本的に手斧によるハツリであるが、一部はさらにそれに加えてヤリガンナ状の工具による最終の削り調整を施しているもの (1220) もある。

(5) 窓材? (1236, PL116)

扉と同様の特徴を有する材であるが、大きさが小さく、人間が出入りできないことから、窓材と考えた。家形埴輪には、しばしば窓が表現されており、本材もそれに相当するものと思われる。扉同様、長い方の軸が上部となる。把手仕口等はみられない。

(6) 床材 (1237~1244, PL117)

ある程度の重量を支えるだけの厚みをもち、片面は平坦に調整されているものの、もう片面は表面処理が不完全で、多少凹凸の残っている厚手の板材を床材の可能性のあるものとして一括した。当然のことながら、この場合、表面処理が不完全なものが下面(地面側)にくることを想定している。

(7) 壁材 (1245~1325, PL118~123)

板壁になるものと、木舞敷の草壁になる2種の壁材が存在する。このうち、草壁の構造材となる壁木舞については、分解した状態で出土すると認定するのが困難であるが、六六A遺跡では組み合わせた状態で出土しており、壁木舞と認定した。

① 板壁板 (1245~1304, PL118~122)

転用や欠損により本来形よりも小さくなったものや若干疑問の残るものもあるが、形状や厚さ、大きさ等から板壁板の可能性が考えられるものを一括する。屋根勾配に合わせて梁より上で使用されたと思われる妻壁板と、桁や梁より下で使用されたと思われる横壁板とがあるが、転用もあって認定するのは現実的には難しい。

a. 屋根妻壁板 (1245~1254, PL118~119)

いずれも転用や欠損のため小さくなっているが、板材の一边のみが斜めに切断されていたり、斜め方向の別材の当たり痕跡の存在から、屋根で使用された妻壁板と考えられるものを一括した。

最も残りのよい1249は、情報量が多い。長辺部に沿って方形孔が互い違いに穿たれており、隣接する材との緊縛用の接合仕口と思われる。穿孔のある長辺は、一边の端部断面が凸形、対辺の端部断面が凹形を呈しており、より組み合わせよいため仕事が施されている。短辺側は、両端とも尖り気味で、ともに溝に嵌め込まれたものと推定される。これを縦方向に置いた妻立壁板とすると屋根勾配が 54° とかなりの急角度となるが、当時の屋根勾配としては適当なものであろう。ただし、横に置かれた妻の横壁板であった可能性もなくはない(その場合は 36°)。表面調整は細かく丁寧な手斧によるものであるが、表裏で残存度が大きく異なり、残りの悪い方が風化の進む外側に置かれていたものと思われる。

1250~1253も、斜め切断部位はないが、穿孔や調整など1249と同じ仕事で、同一材と思われる。

1254は、残存した部位には斜めに切断された部分がない長方形板材であるが、材の片面短辺部の端部付近に斜めに当たった別材の当たり痕とそれに沿った穴があり、又首等の妻部の斜めに置かれた構造材に栓止めされていたものと思われる。

その他のものについては、一边に斜めの切断部を残す板材であるが、残存部位が小さく、材の同定も含めて詳細は不明である。

b. 横壁板 (1255~1304, PL119~122)

転用されていたり、端部の取り付け仕口が不明なことから壁材として確定しきれないものも残るが、平坦に調整された大型の板材であることから壁板の



写真7 縦壁板の接合(1249と1250)

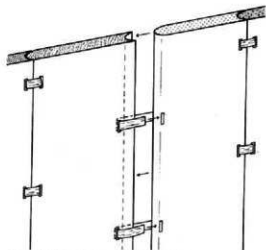


図42 縦壁板の左右への接合模式図

可能性のあるものを一括した。

長辺部を横方向にして横長材を積み上げのかたちで使用したのか、長辺部を縦方向にして縦長材を横に連結するかたちで使用したのかについては、不明な点が多い。

以下、特徴的なものについて記述する。

1264は、長辺部端部が斜めに切り落とされ、そこに穿孔が見られる。2枚の同材をここで合わせて緊縛したものであろう。従って、これについては、縦材として横方向に連結して使用していたものと推定される。

1283は、側縁部片面に約23cm間隔で方形の抉りが存在している。同様に、1291もやや不定間隔ながら側縁部に方形の抉りがみられる。これは、側縁部の

有孔列であったものが欠損して抉り状に残ったものであり、本来はこの部分に縄紐を通して横の材と繋ぎ合わせていくための仕事、いわゆる「ダボ」であったものと思われる。その場合、材は1264同様、縦方向で使用し、横に連結していったものと思われる。

その他のものについては、横壁板の可能性のあるものとしてここに措いた。

② 壁木舞 (図43及び1305~1325、PL123)

図43は、草壁の下地となる壁木舞である。出土当初、屋根下地とも思われたが、後述のように出土したものが一括して存在するのではなく、いくつかの単位に分割可能なことや、屋根下地とするには部材間の間隔が狭く、壁としたほうがより適当(注7)と判断されたことから、草壁の下地となる壁木舞と認定した。

本材は、主要部分が出土状況そのままのかたちを残すように樹脂で固め、切り取り保存したため、壁木舞を構成する個々の部材の実測図は存在しない。従って、ここでは出土当時の状況と、若干取り上げた部材片をもとに説明を加えたい。

出土した壁木舞は、細長い棒状材が格子状に組まれた状態で5×4.5mの範囲内から折り重なって出土したもので、それらをまとまりや遺存角度の差異からいくつかの単位に分割可能である。

図43で下部となる一群が最も重複する部分で、上位に1単位、中位にやや主軸を変えて東西に並ぶ2単位(最も遺存状況がよい単位で、この西群を中心とした部分を保存した)、上位に部分的ながら縦材2本と横材が梯子状に並ぶ1単位があり、さらに残りは極めて悪いがそれに北接するかたちでもう1単位が存在する(図43のはぼ中央部)。図43の左上にも扉板(1216)の下に1単位、その東隣の未製横敷(27)の下にも極めて残りの悪い1単位、図43右上部に3本の縦材を中心とした1単位とそれに主軸を変えて東接する1単位がある。従って、遺存度に差はあるものの、図示した範囲に最低でも9つの壁材の小単位が認められる。

このように、小単位毎のまとまりがみられることは、この材が本来こうした小単位毎にまず生まれ、それを単位としてプラモデルのように柱間に組み込まれていたことを強く窺わせている。



写真8 壁木舞縦材と横材の繋ぎ

では、残りのよい単位を中心に、その詳細をみてみよう。

仮にやや長い間隔で配置された太めの材を縦材、それに直交する細めの材を横材として検討を進めると、縦材は最長1.9~2m・太さ7cmで3本を1単位として約25~26cm間隔で平行に存在し、横材はそれに直交するかたちで最長1m・太さ4cmで最も残りの良い部分では約10cm間隔で15本残存している。横材と縦材の交差部分は葺状の縄紐によって十字状に繋ぎされていた。

縦材は、両先端部が尖っているものが多く、本来的には全て端部を尖らせていたものと思われる。これは、両端を壁受材に開けた孔に挿入するための仕口と思われる。

また、一部横材の下部から焼けた葺状の縄紐が横材に直交するかたちで出土している。

さらに、「縦材」とは別に、横材に直交する縦材よりもやや太い丸太材が部分的に残存しているが、これは柱の可能性もある。

以上のような諸点から、「縦材」は柱に平行して



写真9 壁木舞

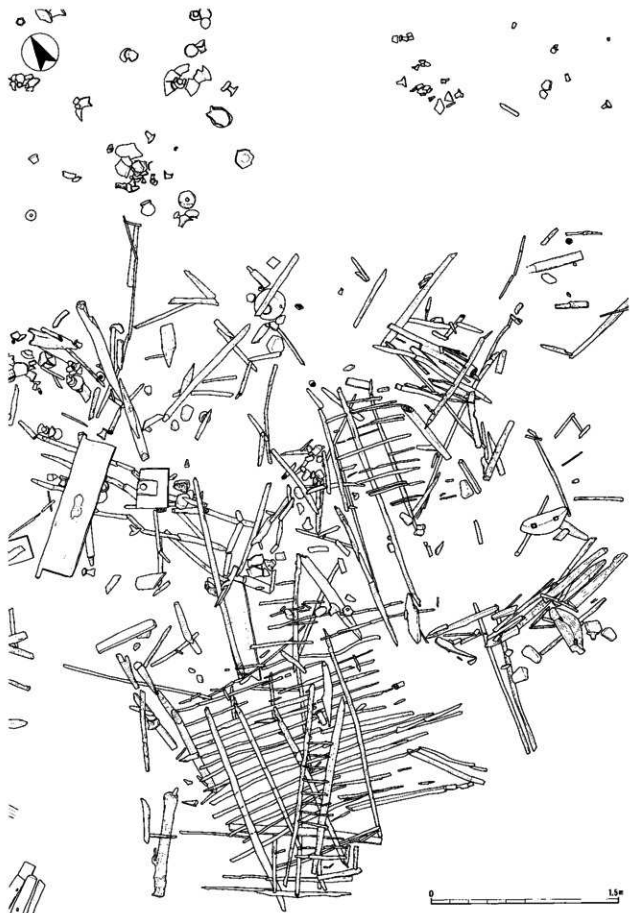


圖43 壁材（壁木舞）出土狀況圖（1：30）

立てられた材、「横材」はそれに直交して組まれた材と判断され、縦長1.9～2m（床～軒間）、横幅1m（柱間幅、ただし2単位を横に合わせて使用したと考えた場合2m）の1単位が復元できる。いずれにせよ、あまり大規模な建物に用いるものではないようである。

ただし、同じ地点で出土した把手の付かない扉板（1216）も同一建物に使用されたものとした場合、扉の縦長が横材としたものとはほぼ等しいことから、上記の考察とは逆に、「横材」としたものが縦に置かれ、「縦材」としたものが先端部を柱に開けられた貫孔に引っかけて柱間を横に繋ぐ材として使用された可能性も残る。

いずれにせよ、どのように復元できるかは、今後の資料の増加を待って最終的な判断がされるであろう。

なお、同示した実測図のうち、1316・1318～1319・1321は、先端を尖らせた「縦材」の一部で、この地点から取り上げを行ったものである。同様の材は大溝の各所からも多数出土しているが、特に特徴的な材でないため組み合った状態でなければ壁木舞と認定することは難しい。従って「杭」や不明品の「棒状木製品」の項目に扱いたなかでも細めの丸材については、本来は壁木舞を構成する部材が多数混じっているものと思われる。

⑧ 屋根構造材（1326～1398、PL123～126）

ここでいう屋根とは、軒より上の部分のうち、いわゆる「転び」の部分（勾配をもつ部分）を構成する材をいう（従って、妻壁板は壁材のところで一括した）。

屋根を構成する建築部材には棟木、垂木、又首、破風等があるが、六太A遺跡で確認できたものは垂木のみである。

① 垂木（1326～1398、PL123～126）

直径4～10cm程度の直線的な丸木で、端部に扱子を入れたり削り出しを施すなどで頭部の仕口を作りだしたものを本材として認定した。頭部が欠損し、端部が杭状に尖ったり1方向から斜めに切り落とされただけの材についても、柱とするには細すぎたりするものについては、垂木が含まれている可能性はあるものとして、ここに扱いた。

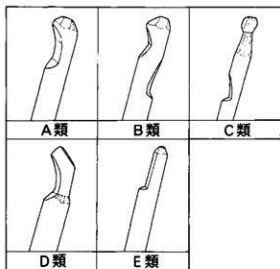


図44 垂木の種類

本材は、欠損や転用のため全体形が分かるものが少なく、また全体が残存しているようにみえる場合でも、片端部の尖りが垂木本来の仕事か杭への転用によるものかを確定しづらい。従って、ここでは、頭部が残存しているものについては、頭部の仕口形状の差異によって、以下のように大きく5類に分類した。

- A類** 端部全周を削り落とし、その下に1個の扱子を入れるもの（1326～1345）
- B類** 端部全周を削り落とし、その下に表裏2面の扱子を入れるもの。2面の扱子の位置がずれて施されるものもある（1346～1354）
- C類** 端部を乳頭状に丸く作りだし、そこからやや下がった位置に下側を急角度にした扱子を入れるもの（1355～1358）
- D類** 仕口部全体を一段削りだし、そこに大きな扱子を入れて、その逆面端部を斜めに切り落とすもの（1359～1361）
- E類** 端部を段状に切り落とすもの。切り落とす面が緩やかな弧状を呈するものもある（1362～1381）

以上のうち、A～C類は、比較的細い材に多く、D～E類は比較的大型の材に多い。ただし、A類とE類でも切り落とす面が緩やかな弧状を呈するもの（E類でも小型の材に多い）の境は流動的である。

1382～1398は、欠損のため仕口部は欠損しているもの、長さや太さなどから垂木の可能性を考えたものである。杭や前節でみた壁木舞材が含まれてい

る可能性もある。

(9) 梯子 (1399~1412, PL127~128)

木取りをみると、半割丸太材を利用したものからさらに大きな木材を分割した板目材もしくは柱目材を利用したものがあがるが、ここでは足掛部の形状から、以下の2形態に分類した。

A類 足掛部上面が立直し、下面はなだらかに平坦面へ移行するもの (1399~1403, 1409)

B類 足掛部の上面が立直するのはA類と同じだが、下面も角度はもつものの直線的に平坦面に移行し、全体として台形状を呈するもの (1404~1408, 1410)

(1411~1412は不明)

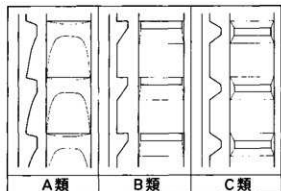


図45 梯子の分類

梯子の足掛部形態は、上記2形態の他、上野市北堀池遺跡(註8)で見られるような足掛部断面が上下の区別なく台形状を呈する形態のものがある(仮にこれを「C類」と仮称する)が、六太A遺跡では出上していない。

梯子足掛部の3形態をみると、A類は曲線的な梯子、B類とC類は直線的な梯子ともいえるが、実際の使用形態からみた場合、上面が立直するタイプのA類とB類は梯子を急角度に建物に架けることができるが、C類では低角度でしか架けざるをえず、上面の角度によって使用角度が規定される。

ところで、六太A遺跡出土の梯子では、A類とB類の差を越えて、ひとつの足掛部間の長さが約21cmのものが5点確認できた。このことは、当時の梯子製作のひとつの規格性を示すものとも捉えられる。

00 不明建築部材 (1413~1452, PL128~129)

特定部位の同定はできないものの、材の特徴等から建築部材の可能性のあるものを一括した。

ただし、材に加えられた仕事的には建築材と思われるものの、それにしてはやや小さいと思われるものもあり、あるいは「副」的な小建築に伴う部材も含まれていた可能性がある。

註

(1)宮本長二郎「古代の住居と集落」『講座日本技術の社会史 第7巻 建築』1983

(2)榎本久「古式大建築の変遷」『クラフと古代工権』1991

(3)徳信昭彦他「太田遺跡」『史跡23号中野遺跡(9)1区』建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山遺跡・太田遺跡発掘調査報告『三重県埋蔵文化財センター』1993

(4)山田昌久氏のご指示による

(5)山本舞雄「福岡県福岡市出土の建築材について」『新宮ハイパス開通埋蔵文化財調査報告』第4集 福岡県教育庁 1976

(6)宮本長二郎「古墳時代前期建築の展開」『中村遺跡本文化園地自動車道(新路線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-7)』『茨城県教育委員会』1986

(7)これに関して、宮本長二郎・山本舞雄・石野理信の諸先生からご指示を得た

(8)山田昌雄「北堀池遺跡発掘調査報告」『三重県教育委員会』1981

17 木樋 (1453~1459, PL130)

残存状況は悪いが、底面が平坦で、両側縁が立ち上がり断面凹形を呈するものについて、おそらくその内部に水を通したことを想定している。

側縁部の立ち上がりが方形もしくは逆台形状になる1453~1455・1458と、三角状を含めやや断面形状が緩いV字形に近い1456~1457・1459がある。

具体的な用途は不明で、すべてが同一目的のものとも思われない。中には、桶というよりは、古代の水容器である「水盛り」的に使用されたものも存在するかもしれない(註1)

註

(1)破片ではあるが、宮本長二郎氏のご指示により、かつて上野市北堀池遺跡出土本製品中に同材の可能性のあるものを指摘したことがある。徳信昭彦「三重県上野市北堀池遺跡」『三重県埋蔵文化財センター』1992

18 接合補助材・栓、把手

木釘や栓、継手といった、ふたつの部材を接合するため、もしくはその補助をするためのもの、またそれに形態上類似する楔や把手を一括した。建築材として使用されていた可能性のあるものも含むが、使用時の状況が不明なため、この類のものを一括して扱う。

(1) 木釘 (1460~1462, PL130)

辺材を利用して先端を尖らせた断面円形の細長い材を木釘とした。全体形がわかるものはないが、たんに細長く切り出したものではなく、全体に丁寧に仕上げられていることから、同材と認定した。

(2) 栓もしくは楔 (1463~1467, PL130)

小さな円柱状もしくは楕円柱状の木の片端部先端を薄く尖らせて、差し込んだり打ち込んだりできるようにしたものである。栓としても楔としても構造的には可能であり、実際どちらで使用されたかは不明である。

基本的に先端部は上に2方向から薄化されたもので、全体に杭よりも調整が丁寧である。頭部敲打部の作出にあたっては、以下の2形態がある。

A類 頭部を身よりも幅広く三角状に作り出したもの (1463)

B類 頭部と身の幅は同じまま頭部を丸く仕上げたもの (1464~1467)

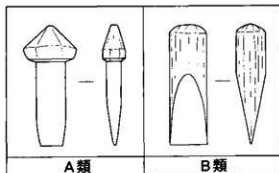


図46 栓もしくは楔の分類

以上は、それぞれ使用形態に応じて使い分けられたものであろう。

(3) 挿入型の留具か把手 (1468~1479, PL131~132)

基本構造が凸字形を呈し、別材に差し込まれる挿入部に方形もしくは円形の貫穴を穿たれたものを一括した。挿入部を別材に差し込み、貫穴に棒を挿入して留めたものである。形状によっては把手側(頭部)にも円形ないしは半円形の孔が穿たれたものもあるが、これは把手仕にもしくは装飾であり、本質的機能ではない。形態的に以下の類別に分類できる。

A1類 断面長方形の材で、頭部を方形もしくは半円形とし、そこから一段薄くなって、長細くて先端が尖った挿入部を作出するもの。挿入部のはぼ中央に長方形の貫孔

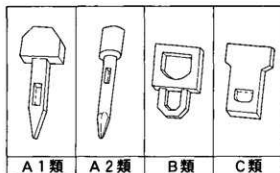


図47 挿入型留具か把手の分類

をもつ (1468~1472)

A2類 基本構造はA1類と共通するが、心持ち材を用いた断面円形のもの。ただし、挿入部に穿たれる貫孔は、頭部側に片寄る (1473~1474)

B類 基本構造はA類と共通するが、全体に扁平で、挿入部がA類ほど長くないもの (1475)

C類 B類と共通するが、頭部と挿入部の境に段を持たず、直線的に仕上げるもの (1476~1479)

以上のうち、B類は、頭部先端が斜めに整形されており、形状が斜めになるもの(例えば家屋屋根等)に関わって使用された留具の可能性はある。

また、C類の一部は、案の脚として使用された可能性を残すものである。

(4) 緊縛型の留具 (1480~1482, PL132)

小さな板材の両端を挟り込んで両頭を作り出したもので、材と材の境界に置いてこの材を置き、両端部で緊縛したものと思われる。つまり、この材は、ふたつの材の「橋渡し」をした留具と推定される。

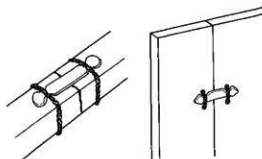


図48 緊縛型留具の使用状況の復元

(5) ソケット状木製品 (1483~1485, PL132)

平面形が円柱や鈴鐺円形、あるいは中央部が窪む

装飾を施した形状をもち、断面形が円形、つまり中央部に孔が開いた材である。おそらく、両端からそれぞれ円棒（軸部）を挿入してここで継いでいたものと推定される。

(6) 樹皮巻 (1486~1488, PL132)

六人A遺跡の部材には、しばしば樹皮で作られたと思われる薄皮がホヅ孔等に巻き込まれており、ここではそれが単独で出土したものを掲載した。ただし、未使用のものか、どこかに使用されていたものが割がれ落ちて残ったものかはわからない。

樹皮巻の使用は、曲物の底板と側板の接合をはじめ、船舷側板を枠止めする際に接合時の水漏れを防ぐために詰められたりするなど、各種の接合やその補助に広く利用されている。

六人A遺跡では、樹幹としては板の皮が多いようであり、図示した例以外にも大小の樹皮皮が出土している。

(7) 蔓巻 (1489~1490, PL132)

蔓状の繊維を3重程度円形に丸めたもの。部材間の接合にこうした蔓も使用されたと思われる。ただし、図示したものについては、大きさ等から、例えば小型丸瓦壺を置くための土器台のような機能を想定すべきかもしれない(註1)。

註

(1)川崎志乃氏の教示による


19 木簡・木札状木製品 (1491~1499・PL133)

長方形薄板材のうち、墨書が認められるものと頭部縁線に抉りを入れて付札状にしたものを木簡または木簡状木製品とした。いわゆる木簡形状のものは3点出土したが、このうち墨書があるものは2点である。以下、具体的に特徴を述べていく(註1)。

[1491] (PL133)

曲物底板状の板材を転用して墨書されたものである。上部を欠損する。表裏2面(文字数の多いほうを仮に表面とする)に墨書が認められる。

表面は、左右2段に記されたものと思われる。上部欠損部分を除く文字の判読は、以下のとおりである。

表右側「 真 可「 且多

表左側「 王」

文字の間隔は非常に不規則で、空白部分もある。

また、文字以外にも、横長の○印など意味不明の記号のような墨痕もあり、右側「三日」や左「一日」などは記号の可能性も高い。

裏面は、字数が少なく、左面に片寄った部分に記されている。文字の判読は、以下のとおりである。

裏面「」

表裏2面とも、太き・字体ともに異なる2種類の書体を確認することができる。表面の「真」「可」「且多」以外は線が太く、「三」とは異筆であろう。その場合、字体の異なる「真」が表裏に存在していることになる。

全体に字の並びが悪く、個々の文字の傾き等も統一が取れていない。従って、文章として書かれたというよりは漢字を個々に書いたという印象が強い。

記号? (梵字のように見えなくてもいい)の存在を重視すれば、いわゆる現符木簡の可能性も考えられるが、判読できない文字も多く、確定できない。

いずれにせよ、破片資料で残存状況が悪く、字の判読に困難を伴うものもあって、これのみで使用時の具体的な役割を判断するのは難しい。

[1492] (PL133)

上下端部は欠損しておらず、完結している。上部は緩やかな山形に切り落とされ、その下に両側縁から切り込みをいれて付札状にしている。墨書は、片面のみに認められ、判読は以下のとおりである。

「 蘇民将来子孫門也」

いわゆる「蘇民将来」札で、形状的にはほぼ原型を留めている。ただし、墨痕は薄く、「将来子孫」の部分は極めて判読しやすく、前後の文字からひとつの吉祥句であるこの字を類推した。なお、本例の場合、「蘇」を「蘇」のほうを使っている。また、子孫の下を受ける字が「門」であることは明瞭であるが、ここを「門」とする例は極めて珍しい。

[1493] (PL133)

墨書は確認できない。従って、破筆にはいわゆる木簡かどうかは不明であるが、頭部両端の切り込み形状は木簡を思わせるものである。

実際、伊賀国府(実際には、伊賀国府存続期間内の資料かどうかは不明で、伊賀国府東側に所在した外山遺跡群追越地区としたほうが実態に合う)から

も墨書の本簡2点とともに未使用を想定させる墨書のない本簡が数点出土している(註2)。従って、本資料も、未使用の本簡の可能性もある。

その場合、頭部の山形形状は、1492の「蘇民将来」札と共通しており、本例も1492と同様の「蘇民将来」札の準入れがなされなかったもの、という可能性もあろう。

1494~1499も黒痕は認められず、いわゆる本簡とは言いがたい。ただ、頭部下に抉りを入れたり、穿孔するなどした小形の細板状品であることから、本札形木製品とした。1494~1496は頭部両側縁に抉りを入れるもの、1497~1499は頭部に有孔部をもつものである。

註

(1)本簡の形跡にあたっては、奈良国立文化財研究所 瀬野和江氏のご教示を得た

(2)徳島県立 三木・伊賀国府歴史館「木簡研究」第13号 本簡学会 1991

20 杭材 (1500~1549, PL134)

棒状具の片側先端を尖らせて、打ち込めるようにしたものを杭とした。ただし、別材を杭として転用した転用杭のうち、転用前の性格を推定したものについてはここではあけず、転用前の種類の部分だけあげている(建築部材の項等)

完存のものはほとんどないため、後述の1617のような両端を尖らせていたものが確実になかったとはいえないが、一応、欠損部側先端は尖らせていないものと仮定して、杭として扱った。

自然木の丸太材を利用して先端を尖らせた丸杭と別材からの転用杭に2大別でき、さらに先端部を尖らせるための切り落としを2方向から施すものと、3方向以上の多方向から施すものがある。

なお、どこで峻別するかの困難さは残るが、太さについても太过于丈夫そうなタイプと、細長いタイプとがある。このうち、細長いタイプについては、杭よりもむしろ先端が尖る形状をもった建築部材、例えば垂木や壁の本舞を構成する部材として使用された可能性も残る。

具体的にいうと、建築部材の「壁材」の項目で扱った木舞材は、組まれたままの状態でも出土したことから木舞材と認識できたが、単独で出土した場合には杭として扱われてしまう可能性が高い。ここで扱っ

た「杭」のなかにも、こうした例が含まれている可能性は当然想定できるが、単独出土では峻別しきれないので杭として扱った。

21 不明品・残材

明瞭な加工が施されているにもかかわらず、製品もしくは部材の同定ができず、したがって用途も不明なものを一括した。形状の共通性からいくつかの類型にわけたが、同一類の項目に入るからといって同じ用途だったとは限らない。

(1) 棒状具 (1550~1639, PL135~137)

SD1では、大小様々な膨大な数の棒状具も出土しており、当然ここに同示したものがすべてではないが、代表的なものを形態的な共通性から一括して報告する。

① 先尖棒 (1550~1578, PL135)

いわゆる「杭」とするには細長いものの、棒状具の一端が尖ったもののうち、刃材利用で丁寧な仕事で作られたもの、及び芯持ちの丸木状の細棒利用のものでも削りだしによる整形が加えられた丁寧な作りの一群を同材として認定した。

用途としては、一部は杭として利用された可能性ももちろん含まれるが、それ以外に漁具のヤス、木釘や木栓、複的な用途として利用された可能性が考えられる。

② 有頭棒 (1579~1596, PL136)

大きさの偏差の幅が大きく、とうてい全てが同一用途のものとは思えないが、棒状具の端部を抉り込んで頭部を作りだしたものを一括した。完存のものではなく、もう片側の端部の状況は不明である。

頭部の作出方法から、以下の4類に分類した。

A類 端部よりやや内側の全周を削り込んで頭部を作りだしたもの (1579~1590)

B類 端部よりやや内側を心対照とした2か所に抉りを入れて頭部とその他を区別したもの (1591~1593)

C類 頭部を作出するにあたって、胴部よりも頭部を大きく作出したもの (1594)

D類 頭部を胴部に対してやや幅広く作出し、ここに穿孔を施すもの (1595~1596)

このうち、端部をA類の作出で行ったものなか

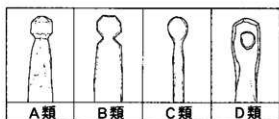


図49 有頭棒の分類

で断面円形の小型の棒状具のものの中には、仕上げの調整が非常に丁寧なものがある。このタイプの有頭棒の中には、欠損部である対側の端部も同様の仕事をやって、紡織具としていたものも含まれている可能性がある。

同様に、B類の端部処理を有する有頭棒についても、大きさが適当で、両端を同じ仕事をいたものであれば紡織具等として使用された可能性が想定できよう。

C類については、形状的に前述の「挿入タイプの留具もしくは継手」としたもののうちのA1類と類似するものもあるが、胴部の断面が円形で、細長く伸びるものについてはこの限りではない。

D類については何らかの柄を吊るすための仕口であるかもしれない。

③ 挟入棒 (1597～1602)

挟りに入った棒状具を一括した。破片資料が多く本来の形状を復元できない。従って、この類に一括してはあるが、用途には多様性があろう。別の材と組み合う部材のものも存在するであろう。

④ 有孔棒 (1603～1609, PL136)

穿孔を有する棒状具を一括した。穿孔が端部に寄っているものについては、本材が何かの柄であり、それを吊るすための仕口の可能性がある。

⑤ 箸状細棒 (1610～1615, PL136)

一見すると箸を思わせるような細棒の一群が同一地点でまとまって出土し、その一部を図がした。全長2.4cm以上、太さ6mmの辺材で、断面形が円形になるよう調整されている。古墳時代の所産であり、箸とは考えられず、用途は確定できない。ただ、出土地点が埴材の周辺であることから、その下地になるなどの可能性があるかもしれない。

⑥ 両端尖棒 (1616～1617, PL136)

太めの円棒の両端を尖らせたもの。樹皮も残る丸

棒の両断を尖らせただけの1616と、両端を尖らせるとともに中央部も細く削り込んだ1617とがある。

⑦ その他 (1618～1639, PL137)

上記の類型から漏れる棒状具。両端を欠いているものも多く、本来は上記①～⑥のどれかに相当するものも含んでいるものと思われる。特に、1632～1639は、aとした先尖棒の可能性がある。

以下、特徴的なもののみ簡単にみておこう。

1618は、断面楕円形の棒の長弧部に長さ7.5cm程度の溝を連続して彫り込んだものである。

1623は、屈曲する細棒であるが、削りによる丁寧な仕事が施されている。

1625も、中央部に原材が枝分かれしていたことを示す瘤が存在するが、全体に丁寧に仕上げられている。

(2) 板状具(1640～1731, PL137～141)

厚板か薄板、方形もしくは長方形板か長板、あるいは弧状板、有孔か無孔など、どの属性に属するかによって様々な類別が可能となる。

ただし、出土した形態が本来の状況を留めている可能性は低く、また穿孔をもつ場合にも、例えばそれが材の側縁部に認められる場合には接合のための仕事かもしれないし、転用された板材の場合には、穿孔位置が元の用途のための仕事で必ずしも用途や機能を示しているとは限らない。現状での穿孔数が1個の場合でも、破片資料であれば「単孔板」とはいえないことも同様である。

以上のような不確定要素をもってはいるが、こうした不明板材を分別していく最も基本的な要素のひとつはその「厚み」であろう。大きさなどは切断したりして本来の形状を変えるのは容易であるのに対し、厚みを減じるには若干面倒な仕事を伴うからである。転用材の厚板の場合には、転用前の用途が建築材であったものも含まれている。

以下の分類においては、以上のような諸点を考慮したうえで、多少分類基準に統一性を欠いても、特徴的な形状や手法の共通項に着目しつつ、見ていきたい。

① 仕口付板材 (1640～1642, PL137～138)

1640～1641は、同類である。板材の側面に方形の挟りを開け、そこに方形の楔を1/2挿入するし、木

釘で留める。つまり、楔によって隣接する材と接合する手法で、同様の手法は琴でも認められた。本材では、横方向だけでなく、縦方向にも同様の手法による仕口が存在しており、縦にも何らかのものとの接合していたことがわかる。

1642は、板材側縁を台形もしくは長方形に一段切り落として厚みを減じ、中央部に木釘を通したらしい小円孔をもつ。これは、同様の仕口をもった板材を2枚繋げ、仕口部分で両方の板の一段落とした部分に別材を嵌め込み、それに木釘を打ち込んで固定したものと思われる。さらに別縁は端部の表裏を削り落として面取りしており、それを別材の溝状部に挿入したものと思われる。

以上の材は、大きき的に建築部材等の大形材ではなく、もう少し小さなものの部材として使用されたものと思われる。

② 有孔板 (1643~1685・1729, PL138~139・141)

厚板か薄板、細長い幅広い板、方孔か円孔、比較的大きな孔か小さな孔、単孔か複孔、木釘状のものを伴うか伴わないかなど、個体によって偏差が大きいが、有孔部をもつ板材を一括した。以下、特徴的なものについて述べていきたい。

1643~1644は、細い溝を穿ってその両端部を穿孔する仕口をもった板材である。

1645は、丁寧な調整によって薄板に仕上げ、2個一対の小さな円孔をもつもので、材側面が緩やかに湾曲したものである。

1649は、中央部に方孔をもつ比較の厚手の長方形の板材で、長辺側縁部に沿って木釘が残る。

1648~1650は、円形もしくは方形の有孔部とは別に、側縁部もしくは材のコーナー部に小孔を有するものである。このうち、1649は、材中央部に方孔を穿ち、材の側縁部に木釘を打ち込んだらしい小孔が存在する。側縁部に穿たれた小孔は、隣接する材との縦繫縛接合用の仕口かもしれない。

1651は、4個の小孔が正方形に配置されており、脚となる棒状具の上にこの材を置いて木釘で固定したものかもしれない。小孔の穿孔位置が中央からも隅からもずれているのは、この材が転用されたため結果的にそうなったのであろう。

1683と1684は、円形板に小孔が穿たれたものである。このうち1684は、側縁部に沿って2個一対の小孔が穿たれている。曲物の可能性もあるが、円孔間の幅がやや不規則である。

レイアウト上ではやや離れてしまったが、1729も有孔板である。小刀状具による削り抜、ヤリカンナ状の細長い削りが丁寧に施されている。穿孔は、方形の孔が穿たれ、出納との隙間を埋めるための柱が残る。

③ 納付板材 (1685~1690・1731, PL141)

端部に出納をもつ板材。機能としては納孔挿入用、蒸籠組のための仕口、別材との繋ぎ用などが想定できるが、特定はできない。

1687は、左右非対称の出納をもつ。

1731は、小形の円板に出納をもつもので、ミニチュアの祭祀具的なものかもしれない。

④ その他 (1691~1728・1730, PL139~141)

上記のいずれとも決し難い板材であるが、これはあくまで欠損部を除いた現状での姿であり、欠損部分に上記に該当するような仕口があった個体も当然存在しよう。そういう点では、これはあくまで整理上の便宜的な分類である。

厚みや使用樹種の差は、転用前の材の性格と関連するものであろう。本来の大きさが不明な破片資料の場合、板材の厚さは漸層的に推移しているため薄板か厚板かの境界は曖昧であるが、かなり厚い大型材については建築部材の可能性もあろうし、調整痕跡を明瞭に残す厚板のなかには製作途中の未製品や不要となった切り落とした品の可能性もあろう。

以下、特徴的なものについて述べていく。

1709は、中央部が凹凸緩やかな丸みをもった厚板である。何らかのものとの背板として使用されたものであろうか。

1716~1718・1730は、弧状の板材である。厚さや大きさにばらつきがあり、同じ用途のものとは思えない。このうち、1716は、片面に粗を思わせるような刀痕が無数に残っている。

1720も、それ自体は方形系の板材であるが、一部に弧状部をもつ材である。

1730は、1731と大きさが近似する小さな円板状のものであるが、出土層位が1730が最上層の1a層、

1731が古墳時代のⅢa層と全く異なっており、出納もなく、別物とみてよからう。

(3) その他(1732～1862、PL141～145)

棒状具とも板状具とも明確な判断が付きがたい中途半端な厚みをもつものや、性格不明のもの、製作過程で不要となった残材等のうち、代表的なものを図示した。

以下、特徴的な個体についてのみ、具体的に見ておこう。

1737は、斜め方向に穿たれた方孔をもち、線刻をもつ。斜め方向の孔を重視すれば紡織具の糸巻(糸枠の腕木)の破片の可能性もある。

1741～1742は小円孔をもつ。1741には貫通しないものがあり、1742には木栓が詰まっている。1742の端部には出納がある。

1743～1744は、ともに同形態の部材である。片端部を欠くが、先端に急角度の抉りを入れ、ヤヤドがった位置に方孔を穿っている。

1747は、両端が一段薄く削りだされた断面長方形の短い棒状材で、両端を別材にソケット状に挿入したものであろう。そういう意味では、接合材とすべきかもしれない。

1750～1752は、先端部に出納をもつもので、組み合わせ式の脚状のものかもしれない。

1753は、断面V字状の細長い材である。同材を連結していくための仕口として、片端部に出納、もう片端部に円孔をもつ。

1754～1762は、円孔が作りだされたり、抉りが入れられたりした材である。このうち1761～1762は、両端部を欠くため全長は不明であるが、断面長方形の棒材に方形のブロック状のものが一定間隔で作られたものである。

1763は、先端部の薄く削られた部分に木栓が入っている。

1769は、組み合わせ部材である。断面がT字形に組み合が、断面逆U字形の横材に縦材を挿入して木釘で留める形態をとる。紡織関係の機械の一部かもしれない。

1784は、円柱材を削り込んで身部の短い横腿状のものをふたつ連結したような特異な形状をとる。握部に相当する部分の断面は方形である。

1794は、小さいながらも非常に精巧なもので、辺材利用の小さな棒状具の先端を薄くし、軸孔を穿って細い棒を挿入したものである。仕上げも丁寧で、何らかの部品であることを窺わせる。

1795は、両端部を太くして中央部を細くした断面円形の材で、これで完形品である。両端を太くしたことは、中央部に何かを巻き付けたような機能を想定させる。

1897は、両端部内側に抉りをもつ材である。円形棒杯田下駄の横木の可能性もある。

1801は、断面半円形の細長い材の上面に溝が彫られたものである。

1802は、材自体にはあまり特徴がなく残材の様相もあるが、製作時の利器の刃の1単位が明瞭に観察できる。

1807は、円柱状の材の両端をはつり落として、中央部は樹皮を剥いだ状態で残したもので、中央部に利器による刻みが存在する。これが意図的なものとした場合、人面状の刻みといえなくもない。

1808は、長方形材の表裏を利用して中央部を凸状に削り残したものである。長辺部の片側縁部だけに2ヶ所木釘をもつ。櫛状のもの、あるいは建築部材の大引状のものになる可能性もあるが、確定はできない。

1809は、中央部を細い把手状とし、両端部を裾広がり平面台形の板状とした特異な形状である。長軸方向に反り返っている。

1810は、スコップ形の形状で見ると組合せ鋸のような平面形をとるが、使用樹種が針葉樹で、また全くカーブのない形態的にも農具とするには無理があるものである。出納に穿孔をもち、それと直交した肩部をもつことは、ここに平坦な別材を当てて、案状の台として使用したかもしれない。その場合、下部の尖った部分は、地中に差し込むための仕事であらうか。

1815は、方形の板状材であるが、片面が滑らかに緩く窪められており、盤状のもの可能性がある。

1848は、断面が三角形になるものは、柵目板を取ろうとしてミカソ削した材をそのまま整形せず放棄したものであろう。そういうんで、残材ということができる。

1856～1858は、枝を切り落としただけであり、これも上記同様、残材的なものであろう。

第3節 SR2出土木製品

SD2は、北側を東流する志登茂川が形成した低渾な落ち込み状遺構で、SD1もここに流れ込んだものと判断される。そういう点では、SD1と一体の遺構ということができ、量的にはSD1にはるかに及ばないが、同様の組成をもつ木製品群が出土している。

以下、前述した六大A遺跡の木製品分類に従って解説していきたい。なお、量的に少ないので、各々を順に迫って概説することとする。

1 農具

耕起具、田下駄、編みがある。

耕起具としては、広楕円木製品とナスビ形曲柄鍬がある。

広楕円木製品(1863～1864)は、ともに本遺跡分類の広楕円C類としたものの木製品と思われる。

ナスビ形曲柄鍬(1865)は、筭部の破片である。破片が小さく、平鍬になるか又鍬になるかはわからない。平鍬とすればB1類、又鍬とすればB類もしくはC類になるものであろう。

田下駄としては、単純田下駄(1866)がある。側縁部を山形とする。足の形状にあわせ、門孔間の幅の広い方が前になるのであろう。

編みは、木鐺のみが存在する(1867～1868)。ともに、A類とした中央部を削り込んだ波状の木鐺である。

2 工具

該当するものは出土していない。

3 紡織具

紡錘車、糸巻、織機が1点ずつ出土している。

紡錘車(1869)は、B類とした断面形が台形を呈するもので、SD1出土の381～382に比べてやや厚みがあり、やや古い要素が見られる。

糸巻(1870)は、認めかけの支え木である。輪軸と組み合う中央部がSD1出土のものに比べてやや丸

みをもっている。1871は短太の糸棒である。

織機(1872)は、経(布)巻具もしくは中筒と思われる断面楕円形の細長い材である。

4 容器(1873～1877、PL146)

曲物(1873～1877)のみが該当する。

1873はG類、側板(1875)と底板(1876～1877)は側面からの釘接合タイプであるH類である。1874は、底板側縁部の際に門孔があるが、接合形態はいまひとつ不明である。

5 家具

該当するものは出土していない。

6 武器・武具・馬具

該当するものは出土していない。

7 祭祀具(1878、PL146)

形代様のものが1点存在する(1878)。

形状的に刀の把部分とすれば刀形であるが、やや厚みがある点と鈍もしくは鞘口に相当する部分が2か所ある点も気になる。あるいは全く別物の可能性もある。

8 楽器

該当するものは出土していない。

9 装束具(1879、PL146)

下駄が1点出土している(1879)。

SD1では出土例のなかった差し歯式の下駄である。台に溝を穿って歯を差し込むが、さらに歯の上面に前歯は左右対称の2個、後歯は台部の中央軸に沿った1個の出柄をもち、台部溝に穿った方孔と柄接合する。

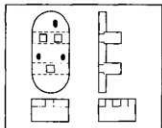


図50 差歯型の下駄模式図

10 運搬具

該当するものは出土していない。

11. 土木・作業用具 (1880~1881)

叩き板状のものが2点存在する(1880~1881)。柄に相当する部分がやや偏平で、否定的要素も残るが、肩部が楕で肩状を呈するため脚等ではなく、本類と判断した。ただし、叩き板としても、『木器集成』も想定するように、製陶具に限定できるものではない。

12 食事具 (1882, PL146)

匙1点が該当する(1882)。柄から身へ屈曲しつつ連続的に推移するもので、身は楕円形で浅い。『木器集成』のいうところのB II類ということになるが、例示されたものにはあまり合致するものがない。

13 発火具

該当するものは出土していない。

14 漁撈具

該当するものは出土していない。

15 船

該当するものは出土していない。

16 建築部材 (1883~1886, PL146)

壁材かと推定される板材(1883~1885)と、垂木(1886)が出土している。



写真10 木製品調査風景

壁材は、ともに斜め方向の切り落としがあり、妻壁板の可能性はある。

17 木桶・木桶状木製品

該当するものは出土していない。

18 接合補助材・栓、把手 (1887~1888, PL146)

(1887~1888)ともに欠損部があるが、挿入部が段をもって薄くなるA I類としたものである。

19 木簡・木札状木製品

該当するものは出土していない。

20 杭材

図示しうるほどのものは出土していない。

21 不明品・残材 (1889~1901, PL146)

以下、代表的なものについて個別にみていこう。1889は、方形厚板の一辺に抉りを入れたものである。板の片面は緩やかに湾曲しているのに対し、逆面は平坦に仕上げられている。

1890は、組み合わせ部材である。平坦面の部分に別材を当てて、木釘で留めたものであろう。

1891は、厚板であるが、丁寧な作りである。

1892は、小さな円形板である。

1893は、円形の小孔をもつ有孔板である。

1894は、先端を丸く仕上げた断面方形の棒状具である。何かの柄であらう。

1899は、丸木材を面取りして頭部を浮きでさせた有頭棒である。



写真11 木製品調査風景

III 木製品のまとめと考察

今回の木製品編は、六六A遺跡大溝SD1及び旧河道SR2出土の木製品を対象とした。これで、六六A遺跡出土木製品の大部分を占める。本邦所収分以外の木器には、大溝SD1の南側に展開する古代～中世集落に関わる井戸から出土した櫛や箸などの日常用具類、それに古代以降の掘立柱建物柱根があるが、いずれも少量で、これらは後目の『遺構・遺物編』で報告する予定である。

前節でみたように、六六A遺跡SD1やSR2では、弥生時代後期～中世までの多種類にわたる木製品が大量に出土した。これは、今後の当地域を代表する木製品資料となるだけでなく、一括して、あるいは個別に、他地域出土の資料と対比するためのひとつの基準となりうるものである。

個々の資料の分類視点や特徴、詳細は、前節の『木製品の解説』や遺物観察表でかなり細かく述べたので、ここでは、全体的なまとめと、解説の部分では書き切れなかった個々の遺物に関する若干の考察を行いたい。

第1節 六六A遺跡出土木製品の特徴

さて、今回図示したSD1およびSR2出土の木製品は、掲載点数1901点に及んだ。杭類やあまりに小片のもの、遺存状態の悪いもの、性格不明の板材や棒状木製品については図化を見送ったものもあるが、用途が明らかかなものや用途不明でも加工が明瞭であるものはほぼ網羅できたと思う。そこで、出土木製品群の全体的特徴を把握するため、以下、その概要や特徴を項目別に書き出すことにする。

1 存続時期

木製品の時期は、弥生時代後期（ごく一部中期最終末にくい込む可能性を残す）から古墳時代中期までを中心とするが、木簡や曲物、下駄などに古代から中世に所属するものも含む。残された木器の組成には時期的な差異があるが、曲物や下駄などは古墳時代からの模式的な連続性が連れるものもある。

従って、時期による木器の組成や量に変化はある

ものの、六六A遺跡では弥生時代後期から中世にいたるまでほぼ連続して同一場所に木器が投棄され続けた特異な例といえることができる。このことは、木器でも同じようなことがいえる。

2 木器組成

前述のように、出土遺構が旧河道や大溝であり、多少の層位的な混乱もあろうが、木製品の時期による全体的な推移をみるため、大雑把ではあるが出土した層位をもとに木製品の器種別の百分率比を算出した。

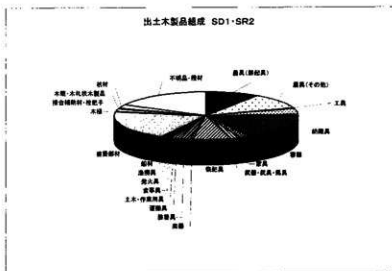
これによると、不明品と杭を除く出土木製品を全体としてみると、Ⅳ～Ⅲ層（弥生時代後期～古墳時代前期が中心）とⅠ～Ⅱ層（古墳時代中期から古代以降、Ⅰ層は中世であるが量的に少ない）とでは、主体的に出土する遺物に明らかな変化が存在することがわかる。すなわち前者では、木製品の組成が最も高率なのは建築部材であり、次いで農具、祭祀具、容器、紡織具の順となる。これに対し、後者では容器が最も多くなり、次いで農具、建築部材、装着具、紡織具、祭祀具と続く。

どちらの時期も建築部材が多いのは六六A遺跡の特徴といえる。建築部材、なかでも掘立柱建物部材の出土が多いことは、近傍に首長居館等の首長関連遺構群が存在することを予測させる。

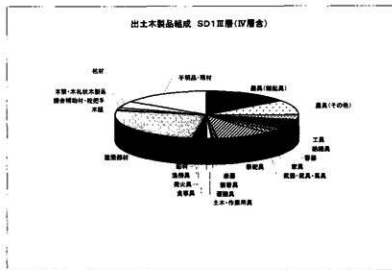
建築部材以外のものについてみると、古い時期は農具が多く、新しくなると曲物主体の容器に主体が移ることが目につく。これは、Ⅰ・Ⅱ層から曲物底板が多く出土したことに拠るが、このことは、『木器集成』が指摘する原始から古代への木器組成の主体の変化と対応している。なお、Ⅰ～Ⅱ層で装着具が多いのは、下駄が大量に出土したことに拠っており、なかでも古墳時代に属する古いものも多いのは前述のとおりである。

また、全体的量が多いため百分率比としては1%以下となってしまいが、六六A遺跡では多種多様な木製品の種類・器種がひと通り出土していることも特徴のひとつといえよう。そのため、全体としては、

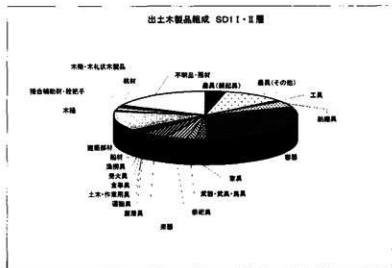
1	農具(鋤起具)	176	9%
	農具(その他)	189	10%
2	工具	9	1%
3	紡織具	71	4%
4	習習	340	18%
5	家具	29	2%
6	武器・武器・道具	37	2%
7	祭祀具	124	6%
8	楽器	9	1%
9	調理具	45	2%
10	運搬具	12	1%
11	土木・作業用具	7	0%
12	農事具	12	1%
13	灯火具	8	0%
14	漁撈具	7	0%
15	船材	14	1%
16	建築部材	370	19%
17	木桶	7	0%
18	複合補助材・捻起手	33	2%
19	木製・木孔状木製品	9	1%
20	埴材	50	3%
21	不明品・残材	326	17%
		1991	100%



1	農具(鋤起具)	143	19%
	農具(その他)	95	10%
2	工具	3	0%
3	紡織具	29	2%
4	習習	58	8%
5	家具	21	2%
6	武器・武器・道具	18	2%
7	祭祀具	80	10%
8	楽器	8	1%
9	調理具	2	0%
10	運搬具	8	1%
11	土木・作業用具	4	0%
12	農事具	9	1%
13	灯火具	3	0%
14	漁撈具	1	0%
15	船材	6	1%
16	建築部材	245	26%
17	木桶	3	0%
18	複合補助材・捻起手	12	1%
19	木製・木孔状木製品	1	0%
20	埴材	42	5%
21	不明品・残材	148	16%
		949	100%



1	農具(鋤起具)	37	4%
	農具(その他)	101	11%
2	工具	6	1%
3	紡織具	39	4%
4	習習	277	29%
5	家具	16	2%
6	武器・武器・道具	14	2%
7	祭祀具	33	4%
8	楽器	3	0%
9	調理具	41	4%
10	運搬具	4	0%
11	土木・作業用具	1	0%
12	農事具	2	0%
13	灯火具	3	0%
14	漁撈具	5	1%
15	船材	8	1%
16	建築部材	121	13%
17	木桶	4	0%
18	複合補助材・捻起手	18	2%
19	木製・木孔状木製品	8	1%
20	埴材	8	1%
21	不明品・残材	165	18%
		913	100%



※ただし、7-祭祀具のうち武器形集中区から出土した刀形、鍔形は地点数(点)があるが、それらはちょうど目一層層の間から出し、「目層下部～目a層上端」として取り上げた。得出した土師器高杯は、古墳時代前期木から中前期の所産と思われるが、本表の中では目層に含むものとして扱っている。従って、この「群」の構成が実際には目層ということであれば、目層の祭祀具の割合は低下し、逆に目層は増加することになる。

あまり特定器種に偏在することがない。

3 製品と未製品

六犬A遺跡で出土する木製品について、製品と未製品（製作途中の失敗品も含む）という視点で分類すると、意外と未製品が少ないことに気づく。

特に農具の耕起具をみた場合、弥生時代後期を中心とする大溝SD1Ⅲb層では一部の直柄平鍬（本書分類の広銀C類）や鋤に少量の未製品もあるものの、平鍬の大部分や曲柄鍬など直接大地を打撃する耕起具の類は基本的に製品のみで出土しており、Ⅲa層より上の層（古墳時代以降）になるとほぼ全てが製品ばかりになる。つまり、耕作の基本となる鍬（特に舟形隆起を作り出すタイプ）そのものは基本的に六犬A遺跡では製作が行われておらず、製作専従遺跡で作られた製品が専ら供給されていたことを窺わせている。その場合、弥生時代後期段階で自家生産された広銀C類（舟形隆起のないタイプ）は、他の直柄平鍬よりもやや格の落ちるものであった可能性もある。

これに対し、多数の未製品が存在するのは、泥除や横銀などの類である。このことは、耕作においては副次的な存在である泥除や横銀については、集落毎にアレンジして組み込むことが一般的に行われたことを窺わせている。なお、鋤も未製品がある。

案や槽、曲物、武具類、下駄等といった主要器種についても、鍬類と同様、基本的に未製品の出土はほとんどないことから（容器の未製品がごく少量あるが、定型的な槽ではない）、これらも製品の供給を受けていた物品群ということが出来る。なお、建築部材についても、転用されたものはあるものの、確実な未製品は確認できない。

逆に、多少なりとも未製品が存在するものに幣片があり、木鏝も1点ではあるが未製品が存在する（転用は比較的多い）。こうしてみると、収獲用農具や編み具には未製品（それに転用品）があり、自家生産も行われたようである。

このような状況は、弥生時代後期以降の遺跡であれば六犬A遺跡以外の周辺の遺跡も同様で、横銀や泥除を除く鍬で未製品が存在するのはやはり広銀C類だけで、その他の鍬木製品は曲柄鍬を含めて全く

出土していない。

以上のことから、納所遺跡など弥生時代前中期には集落もしくは拠点集落毎で製作されていた農具など主要木器は、遅くとも弥生時代後期以降、製作における專業化が一般化し、特定の製作遺跡で集中的に生産されるようになるものと思われる（註1）。

註

(1)これに関しては、別稿で触れた。徳植浩二「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について―三重県内の遺跡群からの基礎―」『研究紀要』第9号（遺跡学文化財センター、2000）

4 特殊遺物の位置づけ

本遺跡で確認される木製品のうち、どの遺跡でも一般的に出土するものではない、というものに飾り・刀装具類・鞘・盾・鎧等の武器・武具・馬具類、準構造部材、古墳時代に属する横銀などがある。

また、必ずしも珍しい遺物ではないが、本遺跡出土のような大量の出土が珍しいものに琴、下駄、扉板がある。

このうち武器・武具・馬具類の出土は、本遺跡が武器を保有する首長層に関わる遺跡であることを端的に示すものである。扉板の大量出土についても、他の掘立柱建物部材の出土とともに、近傍での倉庫をはじめとする掘立柱建物群の存在を予測させ、首長層との関連を窺わせている。

琴は、神マツリの道具として、刀形等の祭祀具と同様、祭祀に使用された可能性がある。琴は、『古事記』神功皇后段では「沙庭」（サニワ）と呼ばれる祭祀の場において、夜夜中、神を招き寄せる依代として使われている。人物年輪のなかにも「琴弾男子」と呼ばれるものがあるのをはじめ、古代中国では「伯牙琴聲」にみるように神仙思想とも深く関わり、礼学の基本となっている。従って、琴は単に楽器であるだけでなく、その日本での出現の当初から祭儀と深く関わっていたものと思われる。従って、六犬A遺跡で複数の琴が出土したことは、その祭祀がある時期人規模に、あるいは長期間祭祀が継続されていたことを示唆するものである。そして、記紀等の文献で示された琴弾人物が全て高位の人であったことを考えると、六犬A遺跡での琴を使用したであろう祭祀執行者も首長層以上の人物であった

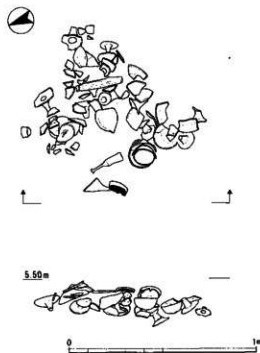


図51 横櫓出土の土器

のではなからうか。

横櫓についても、高杯と杯のみで構成された土器類から一括して出土したことを重視すれば、これも最終的な廃棄形態では何らかの祭祀に使用されたものの可能性がある。

古墳時代の横櫓は、現在のところ八尾市小阪合遺跡のものに次いで日本で2番目に古いものである。小阪合遺跡の横櫓が櫓目が太くて間隔の広い縄文時代以来の縦櫓の系譜に属するとされる(註1)のに対して、本例は櫓目間隔も狭く、刻歯間隔を狭くする新しい技術によって製作されている。こうした特徴をもつ横櫓は、金鈴塚など韓国遺跡から出土する横櫓とも共通しており(註2)、本材が朝鮮半島系の新技術の導入によって製作されたことを窺わせている。その場合、六大人遺跡からは東日本屈指の量となる大量の初期須臾器や韓式系土器が出土していることから、それらとともに横櫓も入ってきたのではないと思われる。なお、後述のように、この時期の下駄についても、大陸系の技術伝播の可能性も含めてもう少し検討する必要がある。

海岸線の遺跡ではないにもかかわらず準構造船舶材が出土したことは、当地の遺跡立地を考えると解決の糸口が見つかる。すなわち、遺跡脇を流れる志

登茂川は、近年まで洪水を繰り返す暴れ川であったが、これは現在の三重大学付近から北へ砂堆が発達し、これに阻まれるように河口部が胃袋状に狭窄していたため、古い時代にはその内側に広く水が溜まるか低湿状になっていたようである。こうした状況は、この砂堆上に鎮座する逆川神社という神社の社名(ここでは、小川が海岸とは逆の方向に流れる)や、付近に溜め池が多いことから如実に示されている。また、地元の伝承では、かつては河口からちょうど六大人遺跡付近まで舟が漕上したことを伝えている(註3)。こうしたことから、この準構造船舶についても、六大人遺跡まで漕上してきたものと思われる。その場合、志登茂川に続く落ち込みと思われるSR2ではなく、そこより地形的に高く、船の漕上が不可能な台地斜面にあるSD1から本材が出土したことは、本材が解体され、転用されたことを示しているであろう。

下駄の大量出土については、現時点での明確な回答を持ち合わせていない。出土層位や前章でみた型式学的検討からも六大人遺跡では下駄が古墳時代中期には出現しているのは確実で、横塚内遺跡でも1点ではあるが古墳時代の下駄が出土している。六大人遺跡の場合、古墳時代中期が下駄の出現の両期となるが、この時期は六大人遺跡を特徴付ける遺物である韓式系土器と初期須臾器が出現する時期でもあり、下駄の大量出土もこうした渡来系文物の出現と軌を一にしているのは興味深い。ただし、下駄の出現については古墳時代中期よりも遡るものが静岡県調査例から指摘されており(註4)、今後、大陸の類似も含めてさらに追求していかねばならない課題であろう。

註

①野田真一「小阪合遺跡第20次調査(KS91-20)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告7』和八尾市文化財調査研究会 1993

②朝鮮総督府「大正13年度古蹟調査報告」1924

③舟が漕上していたことに関する地元の伝承は、以下の通りである。

「六大人(寺院、六大人遺跡の隣接地)にかつて大きな船があり、それを日印に下まで漕が上してきた。その船は区大門の観音さん(津御倉)の舟材として切り倒された。」

④松井一明「古墳時代の下駄について」『取戻遺跡—遺跡・誌話編—』静岡県発掘調査委員会 1995

第2節 個別遺物の考察

1 六六A遺跡出土の耕起具について

六六A遺跡出土の耕作用農具(耕起具)は、ナスビ形曲柄鍬の一部がやや時的に下る可能性があるのを除き、そのほとんどが弥生時代後期から古墳時代までの所産である。この資料群は、大溝や旧河道出土の資料という制約上、ある程度層位的な所見があるとはいえ、厳密な時期限定ができるわけではない。

しかしながら、同一遺構でこれほど長期間にわたる鍬が出土することも珍しく、同一遺跡における農具組成と各々の遺物の変遷について、一定の指針を得ることも可能と思われる。

ここでは、遺物自体の型式学的な組別関係と出土層位の状況を対比して大雑把ではあるが六六A遺跡における耕起具の様相をまとめるとともに、ナスビ形曲柄鍬についての若干の検討を行う。

(1) 出土した耕起具のまとめ

まず、六六A遺跡から出土した耕起具の全体的な様相についてまとめること、以下のようになる。

- 直柄の平鍬は、狭鍬も含めて複数タイプ存在するが、狭鍬は量的に稀少である。弥生時代後期～古墳時代初頭(Ⅲb層)に主体をもつが、一部は古墳時代前期まで存続する可能性がある。
- 直柄の又鍬はごく少数しか存在せず、又鋤についても組合せ式のものがごく少数存在するにすぎない。
- 棒軸タイプの曲柄鍬は、1点だけ出土した曲柄又鍬も含めて、種上昇氏いうところの「東海系曲柄鍬」(註1)である。弥生時代後期～古墳時代初頭に主体があるが、古墳時代前期にも存続する。
- 棒軸形ともに、ナスビ形曲柄鍬も存在する。弥生時代後期に出現し、量的には減少するものの、少なくとも古墳時代いっぱいには存続する(特に又鍬、さらに下る可能性有り)。
- 棒軸形曲柄鍬、ナスビ形曲柄鍬ともにいくつもの形態差があり、年代的な変遷を推測させる。

- 直柄平鍬の一部(広鍬C類)、横鍬、泥除、鋤は未製品が存在するものの、舟形隆起を作り出すタイプの平鍬や東海系・ナスビ形を含め曲柄鍬の未製品は現時点では確認していない。
- 量的には少数であるが、弥生時代後期～古墳時代初頭の時期には「弘い鍬」とした特殊な耕起具が組成する。
- 横鍬は、古墳時代前期に時的な主体をもつようであるが、その前の時期にも若干存在するらしい。
- 泥除は、直柄広鍬に装着するタイプ(A類としたもの)が弥生時代後期～古墳時代初頭に時的な主体をもち、横鍬に装着するタイプ(B類としたもの)が量的には新しく古墳時代前期に時的な主体をもつ。
- 組合せ平鋤は、弥生時代後期～古墳時代初頭に主体をもつが、一木平鋤はやや下った時期まで残存するらしい。

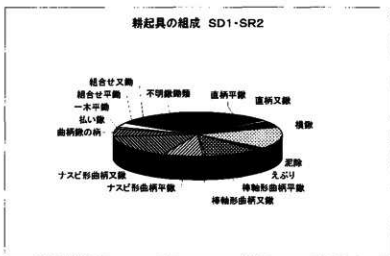
以上のうち、bとcから、本地域では、すでに弥生時代後期の段階でナスビ形曲柄鍬が耕起具の組成に加わっていて、「東海系曲柄鍬」も共存する状況が窺える。これは、尾張以東の状況とは明らかに異なっており、こと農具に関するかぎり、尾張地域と同一歩調は取らない。しかしながら、ナスビ形曲柄鍬の存在を除く耕起具の特徴は東海前であり、耕起具に関する限り、本地域は尾張以東の東海地域と西方の近畿地域との中間的な組成をもつ地域であることが確認できる。

(2) ナスビ形曲柄鍬の型式学的検討

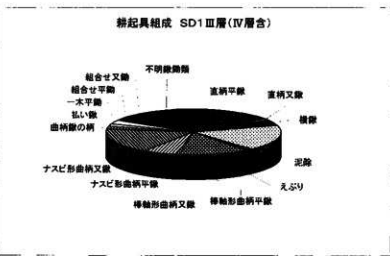
六六A遺跡では、直柄平鍬は狭鍬を含め4種類を確認したが、これらは出土層位に拠る限り同時期に併存していた可能性が高く、年代的前後関係というよりは同一地域における形式差の可能性が高いものと思われる。

これに対し、曲柄鍬については、その形態的特徴の差異や個々の遺物の所属層位から、全てが同一時期の所産というのではなく、一定程度の時間幅があり、その時間的な連続性が迫れるものと思われる。特に、ナスビ形曲柄鍬については、一定の変化の方向のもとに型式の組別が組めるものと思われる。こ

1 直柄平鍬	25	14%
2 直柄又鍬	2	1%
3 横鍬	8	4%
4 泥鍬	29	16%
5 えぶり	3	2%
6 棒軸形曲柄平鍬	19	11%
7 棒軸形曲柄又鍬	1	1%
8 ナスビ形曲柄平鍬	14	8%
9 ナスビ形曲柄又鍬	30	17%
10 曲柄鍬の柄	10	6%
11 払い鍬	2	1%
12 一木平鍬	6	3%
13 組合せ平鍬	8	4%
14 組合せ又鍬	2	1%
15 不明鍬種類	19	11%
計	178	100%



1 直柄平鍬	22	15%
2 直柄又鍬	1	1%
3 横鍬	8	4%
4 泥鍬	26	19%
5 えぶり	2	1%
6 棒軸形曲柄平鍬	18	13%
7 棒軸形曲柄又鍬	1	1%
8 ナスビ形曲柄平鍬	9	6%
9 ナスビ形曲柄又鍬	25	17%
10 曲柄鍬の柄	3	2%
11 払い鍬	2	1%
12 一木平鍬	4	3%
13 組合せ平鍬	8	6%
14 組合せ又鍬	2	1%
15 不明鍬種類	14	10%
計	143	100%



1 直柄平鍬	1	3%
2 直柄又鍬	1	3%
3 横鍬	2	6%
4 泥鍬	3	9%
5 えぶり	1	3%
6 棒軸形曲柄平鍬	1	3%
7 棒軸形曲柄又鍬	0	0%
8 ナスビ形曲柄平鍬	4	13%
9 ナスビ形曲柄又鍬	5	16%
10 曲柄鍬の柄	7	22%
11 払い鍬	0	0%
12 一木平鍬	2	6%
13 組合せ平鍬	0	0%
14 組合せ又鍬	0	0%
15 不明鍬種類	5	16%
計	32	100%



ここでは、そのことについて検討を加えたい。

六人A遺跡で出土するナスビ形曲柄鍬は、平鍬（狭鍬）と二股鍬だけで、三叉鍬は少なくとも現状の資料には存在しない。

これまでナスビ形曲柄鍬に関する分類は、『木器集成』や石川泰里遺跡（註2）で行われているが、それでは刃部の最大径の位置やその形状に最も多くの注意が払われているようである。しかしながら六人A遺跡出土資料を観察する限り、ナスビ形曲柄鍬を分類するうえで最も注目すべき点は、平鍬・又鍬とも笠部直下の括れ（挟り）の有無及びその度合いであろうと考えられる。もちろん、『木器集成』等でも、それが考慮されていないわけではないが、特に時間軸としての型式分類を行う場合、笠部直下の形態が時間差を最も反映する、ということが第一義的に考えられるべきことと思われる。

従って、少なくとも伊勢湾西岸地域の場合のナスビ形曲柄鍬の分類は、笠部直下の形態が時期区分においては規定的要素となる。その他の要素は、それよりも分類視点としてはやや弱いものとなるか、あるいは時間的変化ではなく、用途や機能、使用形態といったものに起因する偏差であって、また別の意義をもつものと判断したい。

六人A遺跡におけるナスビ形曲柄鍬の時間的変化は、笠部直下から外側に内湾しながら巻き込むように伸びていた刃部に括れ（挟り）が入っていく過程として理解できる。

具体的には、細かく見ていくと以下のような一系列的な型式組列として説明できる。

- a 笠部直下に括れはなく、笠部直下から刃部が

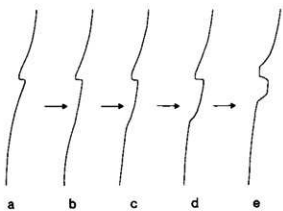


図52 ナスビ形曲柄鍬笠部の変遷模式図

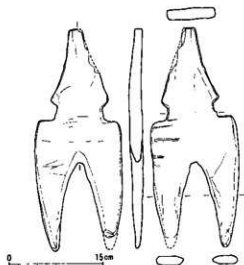


図53 上野市森脇遺跡出土のナスビ形曲柄又鍬

外側へ巻き込むように内湾しながら伸びる

- b 笠部直下の刃部がやや直線的になる
- c 笠部直下の刃部に緩やかに幅広の括れが入るようになる（換言すれば、外側に反る）が、それが極をもって区画されるほど明確化はされていない
- d 笠部直下の括れは明確化し、明瞭な後で刃部を上下に区分するようになる
- e 笠部直下の括れは急角度の「挟り」といってよいほど一点に集約化される

六人A遺跡の資料に拠るかぎり、ナスビ形曲柄鍬の組列は以上のように整理できると思われる（前述の『木製品の解説』のところでは、記述の便宜上、aとb、cとdをそれぞれ一括し、前者をA類、後者をB類として扱っている）。組列としては、aからの変化でも、eからの変化でも説明は可能であるが、aが出土層位でも下層を中心に、eが上層からの出土が多いことなどから、aを古く、eを新しく考え、aからeに向かって型式変遷していく、と思われる。

なお、dの段階から、刃部下部の両側縁は平行して下に伸びるようになる。

このdの段階は、ナスビ形曲柄鍬の歴史のなかでも画期になる時期であり、この段階の途中から、鉄刃装石のために刃部下部の両側縁を山形に尖らせた形態のものが出現する。また、六人A遺跡で北陸系の鍬身中央にスリットを開けたタイプのものが出土するものこの時期である。

それぞれに時間的な位置を与えるとすると、a～bは六人A遺跡でもⅢb層を中心としたⅢ層でも古い部分を中心に出土することから弥生時代後期～古墳時代初期の年代が与えられる。

dはU字形の鉄刃装着用のものを含むという特徴から5世紀に存続時期の一端が求められる。また、六人A遺跡の南側に所在する橋川内遺跡（踏道調査部分）B地区川3では5世紀の土器と共存していること（註3）も、年代推定の一端となろう。

eは、上野市森脇遺跡では飛鳥時代後半（8世紀初頭）の遺物と共存してこの時期まで残ることが確認できる（註4）。

cについては、bとdの間、すなわち古墳時代前期に存続時期の一端を与えたい。

なお、『木器集成』所収のナスビ形曲柄鍬の実測図を見れば、上記の諸点は他地域においてもある程度は同じ歩調をとるものと推定されるが、地域によってはaやbのような古いタイプが新しい時期まで残存することもあるようである。

註

(1) 藤7頁「木製農耕具研究の一視点—ナスビ形農耕具の出現から消滅まで—」『考古学フォーラム』3 1993

(2) 石山直之「中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書15—長野市内その3—右衛門早遺跡 第3分冊」長野県埋蔵文化財センターほか 1997

(3) 川「建也・紀字みどり」『津市大早野町 橋川内遺跡』（現地説明会資料）「埋蔵文化財センター」1993

(4) 平成元年年度「埋蔵文化財センター調査」森川富氏より実測図の提供を受けた。

2 出土遺物にみる高機出現の可能性

木製品が出土する遺跡の弥生～古墳時代の木製品で、「紡織具」として報告される部材は比較的数多いが、これらには糸を紡ぎ、紡いだ糸を巻き取り、さらにその糸から布を織る、という様々な段階の道具（部材）を一括して紡織具に括している。

このうち、糸を紡ぐ道具としての紡錘車と、糸を巻き取り、また巻き取った糸を保持しておく道具としての糸巻（棒、総カケ、タタリ、糸棒）についてはそれぞれ同材として認定されることが多いが、布を織る道具としての機織は、出土遺物として認定することはなかなか難しい。これは、当時の機織の実

態が現状では不明であることが多い。

弥生～古墳時代の機織は、最もシンプルな形態である原始機の他、ある段階で地機、さらに高機も加わったとされているが、原始機においてすら、『木器集成』も指摘するように、「これなら布が織れる」という可能性の域をでないものであって、機織としても他目的の部材でも使用可能、という程度のものを機織として認定していることが多い。ましてや地機や高機の構造や部材、その出現時期を出土品から認定することは困難な状況である。

しかしながら、六人A遺跡では、Ⅱ層中から高機の部材と推定した同形態の部材が2点近接して出土した。Ⅱ層は、古墳時代中期～奈良時代までを含むものであり、細かい時間限定はできないものの、これが高機の部材とすると、確認例の少ない高機の部材として貴重なものである。ここでは、これを手掛かりにして、原始・古代の高機の実態について考えてみたい。

前述のように、本例には糸を巻き込んだ時に生じる糸の当たり痕跡が存在しており、本例が機織であることや、ある程度長期にわたって使用されたことは確実である。ここでは、この部位を、糸巻具からの糸を一端前に出して手前へ折り返すための部材、つまり高機の最も先端部に位置する部材か、もしくはそこからひとつ布巻具寄りでは糸系全体を高く持ち上げるために高い位置に置かれた部材のどちらかと判断した。「篋」や「経（布）巻具」のように、この部材を指す具体的な部材名称は特にないでここでは仮に「経糸反転材」としておく。

この「経糸反転材」が地機に伴う可能性もなくはないが、現在、ある程度当時の地機を知る資料として知られている福岡県沖ノ島出土の金銅製地機のミニチュア品や、年に一度、伊勢神宮の神衣祭に奉納する織物を織る三重県松阪市神取織機殿神社の地機（これについては古態をとどめているという）には「経糸反転材」に相当する部材はない。

但し、六人A遺跡の「経糸反転材」としたものとほぼ同形態の部材が静岡県伊場遺跡にも存在する。鈴木敏則の教示によると、これらの部材は篋（オサ）の枠材となる「篋框（オサカマチ）」ないしは「篋枠（おさわく）」と呼称される部材とされ、この部

材の存在から篋の存在、ひいては地機もしくは高機の存在を示すという(註1)。

六人A遺跡のものについては、糸痕跡が3方向に残ることや、現在各地に残る高機部材との共通性から、「経糸反転材」と考えたが、「篋」である可能性もある。

今回部材同定を試みた「経糸反転材」が的を得たものであるなら、下部の糸巻具から上部の布巻具に向かって「く」形に糸を送っていく上下2重構造の高機の存在を示すものと評価できよう。

これ以外で高機の部材とされているものに、滋賀県五箇野町正源寺遺跡ST03の資料がある(註2)。これは、竪穴住居の「ベッド状遺構」からの一括品で、ナスピ形曲柄平鍬や椅子とともに出土している。『木器集成』では、竹内晶子の教示によって部位を経(布)巻具と特定しており、身の側面中央に断面方形の溝を穿ち、ここに経糸を結んだ横木を嵌め込んだものと推定されている。

なお、この一括品のなかには、従来から「経(布)巻具もしくは中筒」とされてきたものも存在している。最近では輪カンジキ型田下駄の足板とされるものであるが、長さは上述の経(布)巻具とはほぼ同大であることから、これも織機を構成する部材の可能性が高い。とするなら、足板か織機かはそれぞれの状況によるもので、この材に関する限り、本材は織機であり、なおかつ原始機と高機で顕著な差異はみられないことになる。

正源寺遺跡ST03の年代は、6世紀後半の年代が与えられており、現在の知見における高機出現年代の上限の一端を示している。六人A遺跡の場合はあまり細かい時期限定はできないが、これを否定するものではない。

このように、高機、地機ともに古い時代の実態は断片的にしかわかっていないが、六人A遺跡の「経糸反転材」の存在は、古代の織機を考えるうえで貴重な資料を提供したものと思われる。

地機や高機の存在を明確に決定づける部材は放であるが、これは織機のなかでも最もデリケートな部材であるため、遺存状態で出土することは極めて難しい。六人A遺跡出土品中には、篋に相当する部材は確認できなかったが、放を構成する極薄の細長い

歯部は、横櫛の歯を作りだすと同様の技術で製作できるものであり、古墳時代にこの技術が存在することは何ら不可能なことではない。伊場遺跡出土の「篋」は律令時代のものとされているが、今後、さらに古い時代の関連遺物の出土に注視して当時の放を確認するとともに、地機や高機の実態を追求していく必要がある。

註

①本誌に関して、旧財形教育委員会 鈴木敏嗣氏より多くのご意見を頂いた。

②林純一 五箇野町正源寺遺跡出土の木器について『古蹟考古』第21号、1999

3 祭祀関連木製品について

六人A遺跡で行われた祭祀には、土器や滑石製模造品、それに上马などを用いたもの他、木製品を用いたものもある。

祭祀に関連する木製品には、祭祀具そのものとして使用(奉斎)されたものと、祭祀に際して使用された物品とがある。前者の代表が各種形代や舟串であり、後者と推定されるものに六人A遺跡の場合、前述のように琴がある。

六人Aで出土する祭祀用木製品(祭祀具)には、月形・剣形・鎧形をはじめとする武器形、杵形等の

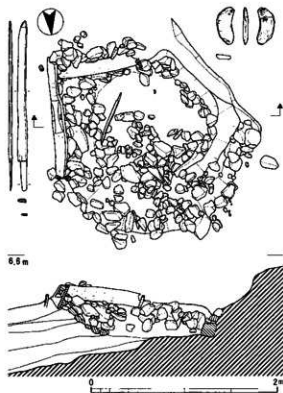


図54 勾玉と木製刀形が出土した石組み井泉



図55 武器形集中区

武器以外の物品群の形代、男茅形、あまり明確な形状ではないが鳥形・馬形の動物形、それに畚中有る。このうち、景的中心は武器形をはじめとする古墳時代を中心とする時期の祭祀具で、いわゆる律令祭祀を構成する祭祀具は少ない。

具体的な使用状況が復元できるものに大溝SD1内の石組み井衆のひとつから滑石製勾玉と木製刀形D皿(887)がセットで出土している例がある。大溝と井衆、その出土遺物としての刀形と勾玉という関係は、記紀神話に出てくるウケヒの部分と構造的に類似するものがあり、そうした祭儀が復元できるかもしれない(註1)。

また、刀形B1類と鏡形が一括して出土した武器形集中部(一部、銅形も含む可能性がある)も興味深い。ここでは、出土状況自体の規則性には乏しいが、同じ場所で土師器高杯が正立状態で出土していたり、この場所の埋土フルイ掛けで滑石製勾玉53点が出土したことから、この地点で行われたかどうかはともかく、木製武器形(刀形と鏡形)と土師器高杯、それに滑石製模造品をひとつの単位として行われた古墳時代中期(5世紀)の祭祀が復元できる。

なお、この木製品のセット(刀形と鏡形)は、六六A遺跡の南側700mに所在する橋内内遺跡(県道調査B地区用3)からも出土している。

こうした具体的な祭祀行為の復元とは別に、六六A遺跡の木製祭祀具で興味深いのは、刀形ひとつとつ

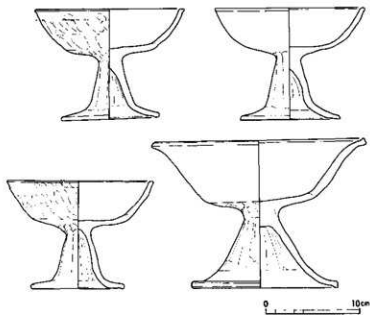


図56 武器形集中区で伴出の高杯

ても形態に複数のものがあることである。例えば前述の刀形B1は、作りも簡便で、さほどの丁寧さは必要とせず、出土する遺跡も橋内内遺跡のような一般集落でも出土するのに対し、刀形A1類としたものはやや複雑な作りで、主に各地の首長関連の遺跡で数多く出土している。これは、使用祭祀具に階層間の相違があるものとも思われ、ひいては六六A遺跡で行われた祭祀が重層構造であったことを示すと思われる。

このように考えてやれば、六六A遺跡では、複数の階層による多目的の祭祀がそれぞれの祭祀形態で行われていた可能性が高い。具体的な追求は今後の課題としたいが、たんに木製祭祀具だけでなく、琴などの関連木製品、木製祭祀具以外の土器や石製品も含め、全体の祭祀構造のなかで木製祭祀具を位置づけていく必要がある。

註

①池田清彦「六六A遺跡」『新河内道23号中務遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』三河財源蔵文化財センター 1995

4 六六A遺跡出土の建築部材とその周辺

六六A遺跡で最も多く出土した木製品は建築部材である。なかでも古墳時代の掘立柱建物部材が景的に多い。これらは、北池田遺跡出土の建築部材(註1)などととも、当地域の建築部材を考えるうえで貴重な資料といえる。以下、六六A遺跡出土の建

築部材を巡って、若干の考察を試みてみたい。

(1) 全体的なまとめ

六六A遺跡出土建築部材から知りえる内容・論点・課題は多岐にわたるが、全体的な概略を把握するため、特徴的な事柄について簡潔書きにすると、以下のようになる。

- a 竪穴住居用部材よりも掘立柱建物用部材が量的に卓越する。
- b 掘立柱建物柱の柱頭形態、断面形態についての具体的知見を得た。
- c 扉板が破片を含めて20個出土も出土したのをはじめ、敷放し材や楣材など扉口装置を構成する部材の出土が多い。
- d ただし、敷放し材に比べ、楣材の出土は少なく、上下をセットにした場合、組成上のアンバランスとなっている。
- e 壁を受ける壁受材と推定される部材にいくつかのバリエーションを得た。
- f 壁板の構造や接合仕口に関する具体的知見を得た。

このうち、bのなかの高束建物用柱の床上部の断面形態に関しては、本遺跡分期のA類とI類が静岡県山木遺跡で報告されたもの(註2)と共通し、ウ類が愛媛県吉野遺跡で報告されたものと共通する(註3)。このことは、六六A遺跡が地勢上、両遺跡の中間に位置することとも無関係ではなからうし、時期的な流行の差の可能性もある。

20枚にも上る扉板の出土は、全国的にも非常に多いものであろう。これは、近傍での倉庫群の存在を示唆するとともに、ひいては内容物を管理していたであろう首長層の存在をも示すものともいえる。ただし、扉板の大きさや門受け把手の形状に差異があることは、本材の時間的な幅を示すとともに、存在した建物に大小など複数の規格があったことを示している。そういう意味では、たんに全体として首長層の存在を示すという可能性とは別に、扉板についても規格に応じて使用者の階層が異なっていた、換言すれば使用者の階層構造が重層的なものであった可能性も考えられよう。ただし、その場合でも、他の出土遺物も勘案して全体としてみた場合、六六A遺跡が首長関連の遺跡であったことは動かず、首

長を頂点とする重層構造の集団が拠っていたと考えるのが現時点では最も妥当性の高いものであろう。

壁受材や壁については、まとまって出土した壁木舞も含め、その構造に関して多くの知見を得ることができた。このうち壁木舞は、比較的簡便な建物の壁を構成したたものと思われ、そういう意味ではここにも建物の規格差とそれに対応する使用者の重層構造、もしくは使用目的の差による使い分けがあったことを示している。

(2) 扉板の上下について

通常、扉板の開口部への納め方に関連して、軸吊棒の長さに長短がある場合、これまでは長いほうを上、短いほうを下として、扉以外の開口部を作り終えてから扉板を挿入したと考えるのが一般的であった(註4)。しかしながら、六六A遺跡で出土した扉板の軸吊棒に続く上下辺の状況を見ると、必ずしもそうとは限らず、その逆の場合も存在したのではないかと思われる(註5)。

六六A遺跡の扉板の水平辺(短辺)の磨耗を観察すると、軸吊棒に長短がある場合、長い軸吊棒と接する短辺基部の磨耗が最も激しいのに対し、短い軸吊棒側の磨耗はさほどでもない。これは、短い軸吊棒を上側とし、長い軸吊棒を下側として使用していたと判断できる。

また、軸吊棒に対する水平辺(短辺)の角度を見ると、一辺が90°もしくは鋭角に開くのに対し、もう一方の辺は鈍角になるものがあり、その場合、鈍角になる辺のほうが軸吊棒は長い。このことは、扉板自体の荷重のために扉板下辺が敷放し材と擦りあって開口しづらくなるのを防ぐため、長い軸吊棒を下にして、かつ軸吊棒より下辺をわずかに鈍角に上げて、扉板下辺と敷放し材が直接触れ合うのを避けるための仕事を施したのではないかと推定される。

この場合、扉板のいくつかで見られた側縁部の緩やかなかり(長い軸吊棒の少し上の側縁に入れられたもの)は、ここを緊縛することによって、扉板で最も破損しやすい荷重を受ける下方軸吊棒(長軸吊棒)付近を補強するための仕事と思われる。

そして、開口部への扉板の挿入は、開口部が出来上がってから最後に嵌め込まれたのではなく、開口部の建築過程の途中で挿入されたものと思われる。

従来考えられていたと同様、軸吊棒の長い方が上側にくる場合もあろうかと思われる。しかし、六大A遺跡出土の扉板の観察からは、一律に長い軸吊棒が上、というわけではどうやらなさそうである。

註

- (1)山田操他『北瀬遺跡発掘調査報告』第一分冊 三重県教育委員会 1981
 (2)後藤守一編『伊豆山木遺跡—弥生時代木製品の研究—』 1962
 (3)網見晋三他『古墳遺跡』松山市教育委員会 1974
 (4)宮本長二郎『古墳時代高床建築の扉構え』『中村遺跡—関越自動車道(新路線)地域埋蔵文化財発掘調査報告(KC-7)—』茨川市教育委員会 1986、松岡良彦『古墳時代以前の戸口装束』『塚田直先生古稀記念論文集』 1997
 (5)以下、このことに関しては、写真集巻のおりに山口裕夫より観察に基づくとご教示を得た

第3節 今後の課題

六大A遺跡出土の木製品から提起される課題は多岐にわたっており、他遺跡との対比・検討を経た上で結論を出さねばならない問題も数多いが、最後に今回あまり触れられなかった課題について簡潔に述べ、終わりとしたい。

1 木製品の加工具の問題

出土品群は、遺存状態が非常に良いものが多く、手斧やヤリカンナ、鑿等の工具痕跡も非常に明瞭であり、その加工痕から使用工具類を復元できる可能性がある。例えば、ヤリカンナひとつとっても、浅くて広いものから細くて深いものまでいくつもの形態に分かれそうであるし、手斧にしても刃幅の明瞭



写真12 木製品整理風景

なものも多い。こうしたことから、これらと当時の実物の工具類(註1)とを対比することによって、六大A遺跡出土木製品の加工技術の実態、引いては当時の木器加工技術もさらに明瞭になるものと思われる。自らも含め、今後の課題としたい。

なお、当報告書では、実測図、写真図版ともに遺物をもつ特徴的な部分を簡明に表現すると共に、製作・調整痕跡の明瞭な部分をより明示するよう努めた。ご活用頂きたい。

註

- (1)そういう意味では、当時の工具類の実物が数多く出土した岡山県金蔵山古墳の出土品などは非常に興味深い。西谷真由他『金蔵山古墳』書教考古類 1959

2 木器種類による樹種選択の問題

今回は、報告書の仕上げと樹種の報告の仕上げの時期が重なったため、本遺跡出土品の樹種選択の特徴についての検討は十分行えなかった。ただ、全体的には、城之越遺跡など伊賀を含む近畿地方の弥生～古墳時代の遺跡は木製品全体に占めるヒノキの利用が高いのに対し、六大A遺跡では全体としてカヤが多いとのことである(註1)。今後、さらに詳細に器種と樹種選択の関係を注視するとともに、遺跡周辺の古環境復元の成果(註2)も踏まえて当時の木材利用の実態に迫っていきたい。

註

- (1)金原正明氏のご教示による。また、花粉分析等からみた六大A遺跡周辺の古環境復元も、後刊の報告書(遺構・土器編)で予定している。
 (2)花粉分析と種子同定を基にして古環境復元を後刊の報告書で予定している。



写真13 木製品整理風景



美濃区に用いたスチールストーンは下記の通りである

遺物観察表 (位置の()内は坑名・層相)

図号 番号	米野番号	出 物	分類	質量 (cm)		水取中等	型 位	焼 区	研 磨	備 考
				全長	径					
1	305-01	隕石	A	24.5	刃部1.5	砥目	SD1 刃部下巻石取	E-T14	刃部削り出し	
2	350-01	隕石	A	(23.7)	刃部(12.4)	砥目	SD1 刃部下巻	E-U11	刃部削り出し	
3	131B	02隕石	A	30.0	刃部25.0	砥目	SD1 刃部	II C10	刃部削り出し	
4	348-01	隕石	A	(22.7)	刃部(18.3)	砥目	SD1 刃部	E-V11	刃部削り出し	
5	351-03	隕石	A	(19.6)	(9.4)	2.1	砥目	E-V12	刃部削り出し	
6	534-03	隕石	A	38.8	刃部(13.2)	砥目	SD1 刃部	E-W10	刃部削り出し	
7	1309-02	隕石	B	(26.6)	刃部(15.7)	砥目	SD1 刃部	II C10	刃部削り出し	
8	1309-01	隕石	B	(26.1)	刃部(12.4)	砥目	SD1 刃部	II-H8	刃部削り出し	
9	1314-02	隕石	A+C	(18.0)	(11.0)	1.0	砥目	SD1 刃部下巻	II-T10	
10	1314-02	隕石	A+C	(15.0)	(6.0)	2.2	砥目	SD1 刃部	II-A10	
11	1309-02	隕石	A+C	(9.7)	(8.3)	3.2	透眼目	SD1 刃部	II-E10	
12	334	02隕石	A+C	(9.2)	(10.2)	(2.1)	透眼目	SD1 刃部	II-E10	
13	328-06	隕石	A+C	(24.6)	(4.8)	3.2	砥目	SD1 刃部	II-S13	
14	338-03	隕石	鉄隕石	(28.6)	(10.5)	(1.9)	砥目	SD1 刃部	II-T13	
15	342-03	隕石	鉄隕石	(9.3)	(2.5)	2.2	透眼目	SD1 刃部	II-O9	
16	408-01	隕石	鉄隕石	34.9	22.9	6.8	砥目	SD1 刃部	II-N10	
17	1326	01隕石	C	34.2	(20.3)	5.2	砥目	SD1 刃部	II-D9	

種名	英和番号	源 候	分 類	長さ (cm)	幅	厚さ	水取り等	等 位	産 区	産 種	備 考
18	1323-02	鹿子	C	35.7	10.4	3.8	柀目	SD1 裏面下部	H-G9	コナツ属方ガガシ産風	柄孔帯孔の産前
19	1328-02	鹿子	A	37.1	19.8	3.6	柀目	SD1 裏面	H-H10	コナツ属方ガガシ産風	
20	1332-01	鹿子	A	38.0	25.5	3.0	柀目	SD1 裏面	H-C10	コナツ属方ガガシ産風	袋裏一部縫付
21	3987-01	鹿子	A	41.0	22.0	5.2	柀目	SD1 裏面	E-N8	コナツ属方ガガシ産風	
22	1327-01	鹿子	A	44.0	18.0	2.7	柀目	SD1 裏面	H-J11	コナツ属方ガガシ産風	
23	078-03	鹿子	A	166.3	21.3	5.5	柀目	SD1 裏面	E-U10	コナツ属方ガガシ産風	
24	1414-02	鹿子	A	22.9	13.9	2.5	柀目	SD1 裏面下部	H-D-E10	コナツ属方ガガシ産風	方眼柄、柄の裏に角縫付
25	329-02	鹿子	A	65.7	9.8	2.4	柀目	SD1 裏面	E-Y11	ツブアソイ	柄の裏に縫い込み
26	301-01	鹿子	A	37.1	10.4	3.8	柀目	SD1 裏面	E-N6	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み、縫い目裏面に縫い目、縫い目裏面に縫い目、縫い目裏面に縫い目、縫い目裏面に縫い目
27	337-02	鹿子	A	20.9	34.0	2.8	柀目	SD1 裏面	E-O10	コナツ属方ガガシ産風	
28	1322-03	鹿子	A	40.0	4.9	6.9	柀目	SD1 裏面	H-D10	コナツ属方ガガシ産風	
29	304-01	鹿子	A	17.0	36.8	6.2	柀目	SD1 裏面	E-W13	コナツ属方ガガシ産風	
30	334-02	鹿子	A	18.2	40.0	4.9	柀目	SD1 裏面	E-W13	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み、共に糸製品
31	346-04	鹿子	A	144.1	29.2	1.9	柀目	SD1 裏面	E-T13	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
32	1492-01	鹿子	A	17.6	43.0	2.6	柀目	SD1 裏面	E-O9	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
33	1328-01	鹿子	A	19.1	34.8	5.1	柀目	SD1 裏面	H-G10	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
34	1331-01	鹿子	A	24.5	31.1	1.7	柀目	SD1 裏面	H-J10	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
35	1318-01	鹿子	A	23.6	24.9	1.3	柀目	SD1 裏面	H-G10	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
36	1321-11	鹿子	A	10.5	19.0	1.0	柀目	SD1 裏面	H-112	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
37	1310-02	鹿子	A	14.8	27.0	1.0	柀目	SD1 裏面	H-C11	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
38	1322-04	鹿子	A	10.5	9.3	1.5	柀目	SD1 裏面	H-G9	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
39	342-01	鹿子	A	24.8	32.7	1.1	柀目	SD1 裏面	H-N13	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
40	1310-01	鹿子	A	21.4	31.4	2.0	柀目	SD1 裏面	H-K11	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
41	1309-01	鹿子	A	31.0	32.0	3.7	柀目	SD1 裏面	H-G9	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
42	1312-01	鹿子	A	28.8	37.3	1.6	柀目	SD1 裏面	H-B10	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
43	410-01	鹿子	A	25.6	32.0	3.7	柀目	SD1 裏面	E-N8	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
44	1311-02	鹿子	A	11.3	13.3	0.5	柀目	SD1 裏面	H-C10	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
45	1321-02	鹿子	A	7.0	14.5	1.2	柀目	SD1 裏面	H-A10	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
46	351-04	鹿子	A	6.2	16.6	1.2	柀目	SD1 裏面	E-Q11	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
47	340-06	鹿子	A	7.0	10.3	0.5	柀目	SD1 裏面	H-P10	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
48	1334-01	鹿子	A	27.5	32.5	4.0	柀目	SD1 裏面	H-G10	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
49	1335-01	鹿子	A	28.5	38.1	5.6	柀目	SD1 裏面	H-D9	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み
50	1339-01	鹿子	A	22.2	31.6	4.5	柀目	SD1 裏面	H-G10	コナツ属方ガガシ産風	柄の裏に縫い込み

製品 番号	実測番号	品名	分類	質量(g)		公差	長さ	寸法	部位	地区	新機	備考
				公差	長さ							
51	1529-01	器具	器具	A?	24.9	±0.9	5.7	径目	SD1 凹部	不明	コナノ属アカガシ属	
52	1532-02	器具	器具	A?	36.0	±0.6	6.0	径目	SD1 凹部	H-G10	コナノ属アカガシ属	横状片着
53	376-01	器具	器具	B	(7.5)	(32.3)	1.6	径目	SD1 凹部	E-P11	アサノ	20以上同様、機械上の単位適合品
54	338-01	器具	器具	B	(20.1)	(41.1)	1.0	径目	SD1 凹部	E-O9	コナノ属アカガシ属	
55	337-01	器具	器具	B	(20.1)	(41.1)	1.0	径目	SD1 凹部	E-N9	コナノ属アカガシ属	調整用調整
56	346-02	器具	器具	B	(13.6)	(22.0)	0.8	径目	SD1 凹部	E-W11	コナノ属アカガシ属	補修品、有り
57	351-02	器具	器具	B	11.0	(27.5)	0.9	径目	SD1 15~16目	E-R12	セノ	補修品、有り
58	1422-01	器具	器具	B	(13.0)	29.8	1.4	径目	SD1 凹部	H-L13	不明	補修品、有り
59	1310-01	器具	器具	B	(8.5)	(15.7)	0.5	径目	SD1 凹部	不明	コナノ属アカガシ属	
60	349-03	器具	器具	B	(12.6)	30.2	0.9	径目	SD1 凹部	E-S12	コナノ属アカガシ属	補修品、有り
61	372-10	器具	器具	B	(5.3)	(4.1)	0.4	径目	SD1 凹部	E-P10	コナノ属アカガシ属	
62	1414-01	器具	器具	A	(9.0)	(15.6)	2.3	径目	SD1 凹部	H-I19	コナノ属アカガシ属	
63	344-01	器具	器具	A	(5.5)	(16.7)	2.7	径目	SD1 凹部	セ-S-T	コナノ属アカガシ属	
64	344-02	器具	器具	B	(8.7)	33.1	2.0	径目	SD1 凹部	E-R8	コナノ属アカガシ属	
65	1319-02	器具	器具	B	(44.7)	分取5.6	分取1.2	径目	SD1 凹部	H-C9	コナノ属アカガシ属	
66	1007-00	器具	器具	A1	(39.0)	分取10.5	分取1.5	径目	SD1 凹部	H-I19	コナノ属コナノ属	穴開け加工調整用、 裏面磨削
67	339-01	器具	器具	A1	34.8	分取3.6	分取2.2	径目	SD1 凹部	E-U14	コナノ属コナノ属	
68	345-02	器具	器具	A1	(37.2)	分取(4.1)	分取2.4	径目	SD1 凹部	E-R11	コナノ属コナノ属	
69	336-02	器具	器具	A2	47.2	分取12.7	分取2.9	径目	SD1 凹部	E-U14	コナノ属コナノ属	
70	1317-01	器具	器具	A2	53.0	分取4.6	分取2.0	径目	SD1 凹部	H-A9	コナノ属コナノ属	
71	332-02	器具	器具	A2	(33.2)	分取10.5	分取1.5	径目	SD1 凹部	E-O9	コナノ属コナノ属	
72	345-04	器具	器具	B	(35.1)	分取4.1	分取2.4	径目	SD1 凹部	E-T10	コナノ属アカガシ属	調整用調整、 木製品、小
73	1317-02	器具	器具	B	53.0	分取3.8	分取2.5	径目	SD1 凹部	H-E9	コナノ属コナノ属	調整用調整、 木製品、小
74	339-02	器具	器具	B	62.3	分取5.4	分取2.2	径目	SD1 凹部	E-O9	コナノ属アカガシ属	
75	1321-01	器具	器具	B	(15.0)	分取(0.5)	分取1.1	径目	SD1 凹部	H-C10	コナノ属アカガシ属	
76	332-04	器具	器具	C	(33.9)	分取4.5	分取1.2	径目	SD1 凹部	E-X11	コナノ属アカガシ属	
77	1322-02	器具	器具	C	(29.5)	(8.9)	3.0	径目	SD1 凹部	H-R13	コナノ属アカガシ属	調整用
78	340-02	器具	器具	C	(28.3)	(8.1)	(1.4)	径目	SD1 凹部	E-S13	コナノ属アカガシ属	
79	349-04	器具	器具	C	(23.6)	(6.0)	1.5	径目	SD1 凹部	E-P9	コナノ属アカガシ属	
80	338-04	器具	器具	C	(10.3)	(4.9)	1.4	径目	SD1 凹部	E-M9	コナノ属アカガシ属	
81	1304-02	器具	器具	D	46.6	分取16.3	分取2.2	径目	SD1 凹部	H-G9	コナノ属コナノ属	
82	1313-02	器具	器具	D	(51.2)	16.9	2.4	径目	SD1 凹部	H-I19	コナノ属アカガシ属	
83	1314-04	器具	器具	E	(27.3)	12.7	1.0	径目	SD1 凹部	H-N14	コナノ属アカガシ属	
84	336-01	器具	器具	E	45.7	分取11.3	分取2.7	径目	SD1 凹部	E-T13	コナノ属アカガシ属	

測点 番号	測点番号	型 様	分 類		全長	正負 (cm)	高さ	水取の空	管 径	地 区	管 径	備 考
			種別	用途								
85	091-02	鳥丸	A	(79.4)	19.0	1.6	起程口	SD1 田舎	E-N9	コナラ属/カサシ少量	一部地付	
86	333-02	鳥丸	A	(18.7)	外直11.5	外直10.0	樋口	SD1 田舎	E-T14	コナラ属/カサシ少量	瓦葺・屋根付	
87	332-01	鳥丸	A	(32.8)	11.1	1.3	樋口	SD1 田舎	E-N9	コナラ属/カサシ少量	欠損部はひき置後付	
88	332-04	鳥丸	A	(32.0)	外直6.5	外直1.5	樋口	SD1 田舎	E-T14	コナラ属/カサシ少量	表直1/2裏面全面地付	
89	348-02	鳥丸	A	(55.3)	橋脚3.2	橋脚3.3	止程口	SD1 田舎	E-N11	コナラ属/カサシ少量		
90	347-01	鳥丸		(30.4)	橋脚2.2	橋脚2.1	樋口	SD1 田舎	E-P9	コナラ属/カサシ少量		
91	1320-01	鳥丸		(42.4)	外直12.1	外直1.1	起程口	SD1 田舎	H-C10	コナラ属/カサシ少量		
92	343-03	鳥丸		(26.7)	5.3	1.2	樋口	SD1 田舎	E-T12	コナラ属/カサシ少量	他物積出平線の可搬性も付	
93	1308-03	鳥丸	B1	(17.2)	14.0	1.2	樋口	SD1 田舎	H-P10	コナラ属/カサシ少量		
94	1308-01	鳥丸	B2	(32.3)	外直3.3	外直1.3	樋口	SD1 田舎	H-119	コナラ属/カサシ少量		
95	1317-02	鳥丸	B2	(48.0)	外直13.5	1.2	樋口	SD1 田舎	H-111	コナラ属/カサシ少量	身中央にパイプ入り	
96	403-06	鳥丸		(14.9)	外直10.0	外直3.3	樋口	SD1 田舎	E-T9	コナラ属/カサシ少量	橋り脚設置、パイプ中にパイプ可能 persons	
97	1322-01	鳥丸	C	(27.1)	(13.4)	1.2	樋口	SD1 田舎	H-113	コナラ属/カサシ少量	管径中央に積出管との混合用孔	
98	094-04	鳥丸		(76.5)	外直7.0	外直1.0	樋口	SD1 田舎	E-N9	コナラ属/カサシ少量		
99	087-02	鳥丸	A	73.5	外直7.7	外直1.5	樋口	SD1 田舎	E-N9	コナラ属/カサシ少量		
100	345-01	鳥丸	A	(47.3)	橋脚1.4	外直1.4	止程口	SD1 田舎	E-N8	コナラ属/カサシ少量		
101	335-02	鳥丸	A	(49.8)	(5.2)		樋口	SD1 田舎	E-Q9	コナラ属/カサシ少量		
102	331-01	鳥丸	A	(64.3)	橋脚2.7	橋脚2.2	止程口	SD1 田舎	E-N8	コナラ属/カサシ少量		
103	1319-04	鳥丸	B	(41.3)	外直(5.7)	外直(5.7)	起程口	SD1 田舎	H-111	コナラ属/カサシ少量		
104	348-03	鳥丸	B	(61.9)	外直(5.7)	外直(5.7)	起程口	SD1 田舎	E-N9	コナラ属/カサシ少量		
105	333-03	鳥丸	B	(41.7)	6.6	1.4	止程口	SD1 田舎	E-Q10	コナラ属/カサシ少量	乃堀狭い	
106	342-02	鳥丸	C	(38.1)	外直7.4	外直3.3	止程口	SD1 田舎	E-U12	コナラ属/カサシ少量		
107	087-01	鳥丸	C	91.6	外直9.8	外直1.5	樋口	SD1 田舎	E-Q10	コナラ属/カサシ少量		
108	347-01	鳥丸	C	(53.0)	橋脚2.4	橋脚2.2	樋口	SD1 田舎	E-U13	コナラ属/カサシ少量		
109	333-01	鳥丸	C	(48.8)	(5.8)	2.0	樋口	SD1 田舎	E-T12	コナラ属/カサシ少量		
110	347-02	鳥丸	C	(36.3)	外直(6.8)	外直(6.8)	止程口	SD1 田舎	E-N9	コナラ属/カサシ少量		
111	347-02	鳥丸	C	(32.9)	外直(6.8)	外直(6.8)	止程口	SD1 田舎	E-S11	コナラ属/カサシ少量		
112	331-02	鳥丸	C	(32.9)	外直(6.8)	外直(6.8)	止程口	SD1 田舎	E-P9	コナラ属/カサシ少量		
113	345-05	鳥丸	C	(33.8)	外直(4.5)	外直(4.5)	樋口	SD1 田舎	E-W9	コナラ属/カサシ少量		
114	343-00	鳥丸	C	(29.3)	外直(5.3)	外直(5.3)	樋口	SD1 田舎	E-T13	コナラ属/カサシ少量		
115	1319-01	鳥丸	C	(31.5)	外直(5.3)	外直(5.3)	樋口	SD1 田舎	H-A10	コナラ属/カサシ少量		
116	338-03	鳥丸	C	(31.5)	(5.6)	1.0	起程口	SD1 田舎	E-P9	コナラ属/カサシ少量	樋口上直で確認	
117	1308-04	鳥丸	C	(18.5)	外直(5.7)	外直(5.7)	樋口	SD1 田舎	H-P9	コナラ属/カサシ少量		
118	347-04	鳥丸	C	(14.0)	外直(5.5)	外直(5.5)	樋口	SD1 田舎	E-U13	コナラ属/カサシ少量		

種別・銘柄番号	部 種	分類	寸法(Cm)		水取等	番 号	地 区	産 種	備 考
			長さ	幅					
119 331-02 器具	棒器具	ナメテ形曲柄ノミ	(16.6)	刃部1.1	短口	SD1 直柄	E-113	コナラ属アカガシ産	
120 334-04 器具	棒器具	ナメテ形曲柄ノミ	(17.7)	3.7	短口	SD1 直柄	E-112	スズ	
121 347-04 器具	棒器具	ナメテ形曲柄ノミ	(14.6)	刃部(6.5)	刃部1.2	短口	SD1 直柄	E-112-U12	コナラ属アカガシ産
122 331-01 器具	棒器具	ナメテ形曲柄ノミ	(35.0)	刃部(6.9)	短口	SD1 直柄	E-112	コナラ属アカガシ産	
123 349-02 器具	棒器具	ナメテ形曲柄ノミ	(34.0)	刃部(6.8)	刃部0.8	短口	SD1 直柄	E-112	ツツジ
124 403-07 器具	棒器具	ナメテ形曲柄ノミ	(31.6)	刃部(5.2)	刃部1.1	短口	SD1 直柄	E-110	コナラ属アカガシ産 先巻掛け
125 1308-02 器具	棒器具	ナメテ形曲柄ノミ	(34.4)	刃部(6.8)	刃部1.1	短口	SD1 直柄	H-C8	コナラ属アカガシ産
126 1315-04 器具	棒器具	ナメテ形曲柄ノミ	(25.2)	(11.5)	1.2	短口	SD1 直柄	H-D9	コナラ属アカガシ産
127 339-04 器具	棒器具	ナメテ形曲柄ノミ	(13.9)	8.1	1.2	短口	SD1 直柄	E-112	コナラ属アカガシ産
128 1306-02 器具	棒器具	曲柄部の柄	(44.5)	抜き部0.9	抜き部0.3	SD1 直柄	H-D9	コナラ属アカガシ産	ナメテ形刃部の最終未形巻か
129 1422-03 器具	棒器具	曲柄部の柄	(23.5)	太34.5		SD1 直柄	H-C9	ムクナ	
130 403-01 器具	棒器具	曲柄部の柄	(12.5)	3.8	1.9	柄材の内出	SD1 直柄	E-N11	コナラ属アカガシ産
131 1492-01 器具	棒器具	曲柄部の柄	(33.0)	4.1	2.6	柄材の内出	SD1 直柄	H-A1	ヤブツバキ
132 1412-02 器具	棒器具	曲柄部の柄	(22.7)	5.3	3.2	柄材の内出	SD1 直柄	H-B10	オナキ
133 321-02 器具	棒器具	曲柄部の柄	(21.0)	(4.8)	2.2	柄材の内出	SD1 直柄	E-T8	散孔材
134 322-02 器具	棒器具	曲柄部の柄	(18.9)	7.7	2.4	柄材の内出	SD1 直柄	E-N9	ムクナ
135 1412-02 器具	棒器具	曲柄部の柄	(14.6)	3.3	4.5	柄材の内出	SD1 直柄	H-A1	ヒヤコキ属
136 1412-02 器具	棒器具	曲柄部の柄	(21.7)	4.0	5.4	柄材の内出	SD1 直柄	H-E9	ヒヤコキ属
137 1348-10 器具	棒器具	曲柄部の柄	(19.2)	2.8	2.6	柄材の内出	SD1 直柄	E-H8	散孔材
138 1316-01 器具	棒器具	臥ノミ	16.1	18.1	3.3	短口	SD1 直柄	H-G10	コナラ属アカガシ産
139 344-01 器具	棒器具	臥ノミ	23.4	刃部12.9	刃部0.8	短口	SD1 直柄	E-N11	今巻掛け 三方刃
140 349-01 器具	棒器具	一本平巻	(16.0)	14.0	2.0	柄材の内出	SD1 直柄	E-R11	三方刃
141 338-02 器具	棒器具	一本平巻	(24.1)	11.1	1.6	短口	SD1 直柄	E-N11	又巻把手の可能性有り
142 1320-02 器具	棒器具	一本平巻	(28.2)	刃部16.7	刃部2.4	短口	SD1 直柄	E-G10	コナラ属アカガシ産
143 088-02 器具	棒器具	一本平巻	(25.9)	刃部18.4	刃部3.7	短口	SD1 直柄	E-S8	コナラ属アカガシ産
144 1324-01 器具	棒器具	一本平巻	(43.8)	刃部(13.2)	刃部1.3	短口	SD1 直柄	H-B9	身部に柄部がほぼ可長
145 060-01 器具	棒器具	一本平巻	(64.7)	19.5	4.5	短口	SD1 直柄	E-T12	組合せ巻の可能性有り
146 1420-01 器具	棒器具	組合せ平巻	A (59.0)	(17.9)	(2.3)	短口	SD2 直柄	E-G10	組合せ巻の可能性有り
147 1323-01 器具	棒器具	組合せ平巻	B (28.3)	刃部(11.1)	刃部0.2	短口	SD1 直柄	H-G10	コナラ属アカガシ産
148 1304-01 器具	棒器具	組合せ平巻	B (48.5)	刃部18.1	刃部1.5	短口	SD1 直柄	H-N11	コナラ属アカガシ産
149 088-01 器具	棒器具	組合せ平巻	B (113.0)	刃部15.9	刃部0.5	短口	SD1 直柄	E-P10	コナラ属アカガシ産
150 340-01 器具	棒器具	組合せ平巻	B (42.0)	刃部16.6	刃部2.4	短口	SD1 直柄	E-P10	コナラ属アカガシ産
151 1306 01 器具	棒器具	組合せ平巻	B (41.2)	刃部14.5	刃部0.3	短口	SD1 直柄	H-D10	コナラ属アカガシ産
152 1318-01 器具	棒器具	組合せ平巻	B (51.0)	刃部18.6	刃部0.8	短口	SD1 直柄	H-110	柄部以上は曲柄部産種 未製品か

検査番号	実測番号	器 種		分 類	寸法 (cm)	材 質	木 部 等	部 位	地 区	新 種	備 考	
153	1319-04	器具	組合平平鋸	B	(29.0)	刃部(10.6)	刃部.5 延目	SD1 刃部	H-C9	コナノ属7カガシ電風		
154	1414-03	器具	組合平平鋸		(17.5)	(10.1)	1.9 延目	SD1 刃部	H-L12	コナノ属7カガシ電風	歯皮が留めらる	
155	343-03	器具	組合平平鋸		(6.5)	9.0	1.4 延目	SD1 刃部	E-T13	コナノ属7カガシ電風	歯具でない可能性もあり	
156	1316-02	器具	平形鋸歯部		(17.6)	柄部2.7	柄部1.3 延目	SD1 刃部下	H-G10	コナノ属7カガシ電風		
157	1321-04	器具	平形鋸歯部		(17.0)	刃部(6.0)	刃部1.4 延目	SD1 刃部	E-Y11	コナノ属7カガシ電風		
158	1321-06	器具	平形鋸歯部		(7.5)	柄部4.5	柄部0.9 延目	SD1 刃部	H-B8	コナノ属7カガシ電風		
159	1321-07	器具	平形鋸歯部		(9.5)	刃部1.5	刃部0.3 延目	SD1 刃部	H-A11	コナノ属7カガシ電風		
160	1319-03	器具	平形鋸歯部		(7.5)	刃部(8.7)	刃部1.0 延目	SD1 刃部	H-K12	タヌノ木		
161	1321-09	器具	平形鋸歯部		(25.5)	刃部(6.0)	刃部0.9 延目	SD1 刃部(鋸歯下部)	H-I11	コナノ属7カガシ電風		
162	1319-05	器具	平形鋸歯部		(18.1)	刃部(5.3)	刃部0.5 延目	SD1 刃部	H-K12	コナノ属7カガシ電風		
163	1321-08	器具	平形鋸歯部		(21.6)	刃部(6.3)	刃部0.9 延目	SD1 刃部下	H-A10	タヌノ木		
164	1321-05	器具	平形鋸歯部		(19.2)	刃部(7.0)	刃部1.0 延目	SD1 刃部	H-D9	コナノ属7カガシ電風		
165	1321-08	器具	平形鋸歯部		(13.0)	刃部(10.5)	刃部1.2 延目	SD1 刃部	H-I19	コナノ属7カガシ電風		
166	1321-10	器具	平形鋸歯部		(22.5)	刃部(3.3)	刃部1.4 延目	SD1 刃部	H-A10	タヌノ木	全面磨け	
167	338-04	器具	平形鋸歯部		(27.0)	(5.5)	(1.1)	延目	SD1 刃部	E-R13	タヌノ木	
168	349-05	器具	平形鋸歯部		(43.0)	(7.0)	1.5 延目	SD1 刃部	E-N9	シイ風	一部磨け	
169	1315-01	器具	平形鋸歯部		(52.3)	(12.5)	1.5 延目	SD1 刃部	H-I11	アブノ木		
170	1025-05	器具	平形鋸歯部		(69.0)	18.0	3.6 延目	SD1 刃部	H-C9	コナノ属コナノ属		
171	394-01	器具	平形鋸歯部		(26.8)	(12.4)	(2.6)	延目	SD1 刃部	H-P10	コナノ属コナノ属	
172	400-03	器具	平形鋸歯部		20.6	19.3	4.4 延目	SD1 刃部	E-Q9	アブノ木	磨化のため削り込み途中	
173	1326-01	器具	平形鋸歯部		50.0	4.2 延目		SD1 刃部下	H-E10	コナノ属7カガシ電風	半端な木製品か	
174	0360-01	器具	平形鋸歯部		(89.0)	刃部6.6	刃部1.4 延目	SD1 刃部	E-M8	コナノ属7カガシ電風	骨先磨化(削り)器具でない可能性もあり	
175	337-04	器具	収得具?		(23.2)	4.0	1.8 柄材部(中)	SD1 刃部下	E-T14	コナノ属コナノ属	磨ければ刃部の磨部	
176	372-19	器具	収得具	B	(5.6)	太32.8		SD1 刃部	E-O9	タヌノ木		
177	1411-03	器具	収得具	B	(15.3)	太21.9		柄材部(出)	H-L12	コナノ属7カガシ電風		
178	370-08	器具	収得具	B	(12.0)	太32.2		平鋸部(出)	E-W13	コナノ属7カガシ電風		
179	1411-02	器具	収得具	B	(18.0)	太33.0		柄材部(出)	H-C10	タヌノ木		
180	1413-05	器具	収得具	A	34.5	柄部A:32.1		柄材部(出)	H-D9	ヒノキ	柄は魚鱗	
181	032-01	器具	収得具	白	口部33.4	底径40.2		型木部?	E-T13	外面への刃部磨き 粗削り仕上げ		
182	098-01	器具	収得具	白	底径49.4	高さ32(3)		型木部?	E-Q10	内面磨け 外歯ハソリ成磨き		
183	038-01	器具	収得具	白	口部48.6	高さ35(1)		型木部?	不明	粗削り仕上げ		
184	1328-05	器具	収得具	C1	(40.4)			型木部	E-N9	タヌノ木		
185	1328-03	器具	収得具	C1	(37.2)	柄部A:33.9		芯材部(出)	H-I19	アブノ木	分断して本器完成後に磨け	
186	1328-02	器具	収得具	C1	(40.9)	柄部A:38.6		芯材部(出)	H-C10	タヌノ木		

検査実施番号	器具種別	器具	部 種	分類	寸法 (cm)		用途	水の容量	種 位	地 区	製 種	備 考	
					全長	幅							
186	095-05	器具	収得具	C2	429.4	無記入	SD1 目録下部	SD1 目録下部	E-Q10	ヤブツバキ			
187	1337-04	器具	収得具	C2	139.0	無記入	SD1 目録下部	SD1 目録下部	H-D9	ヤブツバキ		一徳池	
188	095-03	器具	収得具	C2	448.3	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-T14	ヤブツバキ		備部一徳池 備部丸る	
189	1339-01	器具	収得具	C2	447.3	無記入	SD1 目録	SD1 目録	H-K11	ヤブツバキ		備部丸る	
190	095-02	器具	収得具	C2	445.2	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-T12	ヤブツバキ			
191	095-04	器具	収得具	C2	446.2	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-N9	ヤブツバキ			
192	095-04	器具	収得具	C2	445.0	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-M9	コナラ属7カゴシ属		全体の2/3だけ	
193	095-06	器具	収得具	C3	181.1	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-N9	ヤブツバキ		形体は円錐形 備部平塚	
194	1337-01	器具	収得具	C2	439.0	無記入	SD1 目録	SD1 目録	H-C10	コナラ属7カゴシ属			
195	1339-03	器具	収得具	C2	435.5	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-Y10	コナラ属7カゴシ属			
196	1339-02	器具	収得具	C2	433.0	無記入	SD1 目録	SD1 目録	H-K19	ヤブツバキ		火積田池	
197	1337-03	器具	収得具	C2	433.0	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-Y10	コナラ属7カゴシ属			
198	1337-02	器具	収得具	C2	433.0	無記入	SD1 目録	SD1 目録	H-P9	ヤブツバキ			
199	095-08	器具	収得具	C2	426.5	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-R12	ヤブツバキ			
200	1050-01	器具	収得具	C2	100.4	太38.1	SD1 目録	SD1 目録	H-K12	ヤブツバキ			
201	095-02	器具	収得具	C2	97.3	太37.6	SD1 目録	SD1 目録	H-T13	無札材			
202	095-01	器具	収得具	C3	86.7	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-T13	コナラ属7カゴシ属			
203	095-03	器具	収得具	C3	84.9	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-U13	コナラ属7カゴシ属		全体の1/4だけ	
204	095-05	器具	収得具	C3	79.9	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-R11	ヤブツバキ			
205	388-04	器具	収得具	C2	143.5	(5.3)	SD1 目録	SD1 目録	E-T13				
206	388-02	器具	収得具	C2	144.8	太36.0	SD1 目録	SD1 目録	H-S12				
207	1322-08	器具	収得具	C2	174.6	無記入	SD1 目録	SD1 目録	H-H10	ヤブツバキ			
208	1032-01	器具	収得具	C3	97.9	太311.1	SD1 目録	SD1 目録	H-R10	コナラ属7カゴシ属			
209	1032-02	器具	収得具	C3	90.3	太311.0	SD1 目録	SD1 目録	H-R10	コナラ属7カゴシ属			
210	1400-01	器具	収得具	C2	432.2	太38.5	SD1 目録	SD1 目録	H-B9	コナラ属7カゴシ属			
211	1400-02	器具	収得具	C2	442.4	太38.3	SD1 目録	SD1 目録	H-C10	コナラ属7カゴシ属			
212	313-03	器具	小定片		24.7	無記入	SD1 目録	SD1 目録	E-M8	ヒノキ			
213	1339-01	器具	収得具	操作	33.0	3.0	SD1 目録	SD1 目録	H-L12	コナラ属7カゴシ属			
214	1303-01	器具	収得具	A	37.1	太38.7	SD1 目録	SD1 目録	H-I10	ヒノキ		「目」の調整 本件として使用した可能性有り	
215	1412-01	器具	備部	A	118.6	無記入	SD1 目録	SD1 目録	H-C9	ヤブツバキ		遠池	
216	308-01	器具	備部	B1	30.0	太38.0	SD1 目録	SD1 目録	E-Q10	列		遠池	
217	1303-03	器具	収得具	備部	B1	17.6	太23.6	SD1 目録	SD1 目録	H-A10	タイシタケノハナ		遠池
218	308-03	器具	収得具	B2	17.0	太31.6	SD1 目録	SD1 目録	H-T10				
219	1303-03	器具	収得具	備部	B2	38.4	太36.6	SD1 目録	SD1 目録	H-D10	ヤブツバキ		

調査番号	実測番号	器 係	分類	正数 (cm)			単位	水尺の等	層 位	地 区	形 種	備 考
				全長	幅	厚さ						
220	1400-04	農具	B2	18.9	7.0	4.7		SD1 直脚出し	H-J11	アスプロ	全体のみだけ 身蓋と取りのハランス違い	
221	3005-04	杖類具	B3	23.1	本3(6.5)			SD1 直脚出し	H-H19	ヤチ属		
222	3305-02	杖類具	B3	19.0	本3.1			SD1 直脚出し	H-C19	ヤチ	東瀬田も使用可	
223	356-03	農具	C	17.0	本3.0			SD1 直脚出し	E-P9	ヤブツバキ		
224	388-03	農具	C	7.5	本3.4.5			SD1 直脚出し	E-Q11			
225	356-02	農具	子持	24.6	本3.13.2			SD1 直脚出し	E-P10	道具材	適合ネタイプ 丸瀬田に使用可	
226	1402-02	杖類具	直竹	19.2	(6.2)			不明	E-X-Y9-10	アスノ	小径片 本持有り	
227	1402-01	杖類具	直竹	口徑(35.6)	高さ(6.4)			不明	H-C10	アスノ	残骸	
228	351-01	農具	杓子	39.8	24.5	7.5		柄付柄出し	E-T14		二段のローナツツの形状	
229	1403-01	農具	車輪田下駄	24.1	(6.3)	1.2		径目	H-I12	スギ	二段	
230	1325-01	農具	田下駄	24.2	(6.5)	1.9		径目	E-Y9	スギ		
231	303-03	農具	田下駄	26.0	(5.7)	1.5		径目	E-S8	ヒノキ		
232	403-04	農具	田下駄	26.1	(5.6)	1.3		径目	E-T10	ヒノキ	裏面全葉付	
233	352-03	農具	田下駄	32.1	14.3	2.1		径目	E-V12	スギ		
234	352-02	農具	田下駄	30.9	(15.6)	1.7		径目	E-N9	スギ	刀削側	
235	367-02	農具	田下駄	44.1	18.8	2.3		径目	E-T13	スギ		
236	352-01	農具	田下駄	46.0	12.1	1.9		径目	E-V12	スギ		
237	328-01	農具	田下駄	37.4	(6.6)	1.2		径目	E-R10	スギ		
238	376-03	農具	田下駄	35.1	(7.4)	1.3		径目	E-S10	スギ		
239	355-03	農具	田下駄	35.4	10.4	1.4		径目	E-O8	スギ	方形柄付田下駄の足板の可能性有り	
240	355-02	農具	田下駄	30.1	8.5	1.1		径目	E-S8	スギ		
241	385-01	農具	田下駄	45.7	9.8	1.3		径目	E-S8	スギ		
242	353-01	農具	田下駄	52.0	(13.2)	2.7		径目	E-R9	サトウ		
243	353-02	農具	田下駄	45.1	(13.6)	2.2		径目	E-Q9	スギ		
244	403-03	農具	田下駄	46.5	(10.2)	1.4		径目	E-S12	ヒノキ	裏面1/4葉付	
245	355-04	農具	田下駄	37.0	12.2	1.5		径目	E-R12	ヒノキ		
246	403-02	農具	田下駄	45.8	(8.9)	1.3		径目	E-V12	スギ		
247	452-03	農具	田下駄	29.4	(4.7)	1.7		径目	H-F9	アスプロ	一部削付	
248	1325-01	農具	田下駄	33.0	12.7	2.0		径目	H-B10	ヒノキ		
249	314-01	農具	田下駄	35.4	10.1	1.7		径目	E-N9	ヒノキ	側面1/4葉付	
250	328-02	農具	田下駄	32.8	13.5	1.3		径目	E-T9	スギ		
251	328-03	農具	田下駄	29.9	7.9	1.3		径目	E-T13	スギ		
252	321-03	農具	田下駄	36.6	4.1	1.2		柄付柄出し	E-T12	ヒノキ	杖類具の可能性有り	
253	331-02	農具	田下駄	35.8	3.8	1.1		柄付柄出し	E-T12	ヒノキ	杖類具の可能性有り	

計画 番号	実測番号	器 種	分類	寸法 (cm)		木柱の等	層 位	地 区	新 種	備 考		
				長さ	幅							
254	321-04	圓孔	円形枠付田下駄	横木	(22.4)	6.5	1.8	SD1 田層	E-10	スギ	枳殻丸の可能性有り	
255	321-08	田下駄	円形枠付田下駄	横木	(23.5)	3.1	1.4	新材枠出し	E-113	ヒノキ	枳殻丸の可能性有り	
256	321-07	田下駄	円形枠付田下駄	横木	(19.7)	4.9	1.2	新材枠出し	E-111	ヒノキ	枳殻丸の可能性有り	
257	322-01	田下駄	円形枠付田下駄	横木	(12.7)	4.4	0.9	新材枠出し	E-109	スギ	枳殻丸の可能性有り	
258	319-04	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(15.3)	(6.5)	1.7	低層	E-112	ヒノキ		
259	1424-01	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(11.3)	(6.3)	(3.3)	空神柄出し	H-112	ヤブニッケイ		
260	1364-02	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(33.5)	(5.0)	(1.5)	低層	H-C10	ヒノキ		
261	403-01	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(39.4)	(7.0)	1.9	低層	E-111	ヒノキ		
262	382-01	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(37.1)	8.1	1.6	低層	E-110	スギ		
263	1364-01	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(37.3)	8.0	2.0	低層	H-108	ヒノキ		
264	382-02	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(35.0)	9.0	1.1	逆戻り	E-08	ヒノキ		
265	1364-01	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(38.6)	7.5	2.5	低層	H-110	スギ		
266	1325-02	田下駄	方形枠付田下駄	横木	36.9	(6.4)	1.7	逆戻り	H-110	スギ		
267	037-04	田下駄	方形枠付田下駄	横木	76.6	5.7	2.5	新材枠出し	E-Q10	ヒノキ		
268	1362-01	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(36.3)	6.0	2.0	新材枠出し	SD1 田層	H-112	ヒノキ	裏面5面だけ 枠出し横木は裏面5面だけ
269	1364-02	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(13.5)	5.0	3.8	新材枠出し	SD1 田層	H-111	スギ	
270	1362-02	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(14.0)	4.5	2.5	新材枠出し	SD1 田層	H-112	ヒノキ	裏面5面だけ 枠出しに横木の残存
271	343-04	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(21.5)	5.5	2.2	新材枠出し	SD1 田層	ヒノキ		
272	1362-03	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(23.0)	4.5	2.5	新材枠出し	SD1 田層	E-Y10	ヒノキ	
273	1362-06	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(18.5)	3.7	2.6	新材枠出し	SD1 田層上部	H-C10	ヒノキ	
274	1428-02	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(21.9)	5.7	6.7	新材枠出し	SD1 田層上部	H-C10	スギ	
275	319-06	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(21.3)	5.5	2.3	新材枠出し	SD1 田層	E-U13	スギ	
276	319-04	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(18.2)	(5.0)	(3.1)	新材枠出し	SD1 田層	E-X10	スギ	
277	1364-04	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(17.0)	4.5	2.6	新材枠出し	SD1 田層	E-X-Y9-10	ヒノキ	
278	1362-04	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(34.0)	3.0	3.5	新材枠出し	SD1 田層下部	H-109	ヒノキ	
279	124-05	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(21.0)	(4.0)	2.0	新材枠出し	SD1 田層	E-R11	ヒノキ	
280	1364-05	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(14.3)	2.8	3.7	新材枠出し	SD1 田層	H-C10	ヒノキ	
281	388-06	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(40.1)	4.4	1.5	新材枠出し	SD1 田層	E-X10	スギ	枠出し横木
282	323-03	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(29.0)	3.7	1.4	新材枠出し	SD1 田層	E-N8	スギ	
284	323-04	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(50.2)	3.0	1.4	新材枠出し	SD1 田層	E-S12	ヒノキ	
285	324-07	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(27.5)	3.5	1.7	新材枠出し	SD1 田層	E-U11	ヒノキ	
286	1362-03	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(48.7)	3.0	1.5	新材枠出し	SD1 田層下部	H-119	スギ	
287	324-06	田下駄	方形枠付田下駄	横木	(38.4)	3.0	1.2	新材枠出し	SD1 田層	E-N9	スギ	

検査 番号	検査 品名	部 種	分 類	寸法(Cm)			単位	地区	仕様	備考
				全長	幅	厚さ				
298	323-01	器具	木口材	55.5	3.9	1.6	SD1 田層	E-N9	スギ	
299	324-00	器具	木口材	(25.4)	3.0	1.1	SD1 田層	E-N9	スギ	
300	323-05	器具	木口材	56.4	3.3	1.5	SD1 田層	E-P10	スギ	
301	381-04	器具	木口材	(24.0)	2.9	1.1	SD1 田層	E-S10	ヒノキ	
292	323-03	器具	木口材	(52.7)	4.5	1.6	SD1 田層	E-N9	スギ	
293	382-05	器具	木口材	(25.0)	3.0	1.5	SD1 田層	H-110	ヒノキ	
294	324-01	器具	木口材	(42.3)	3.9	1.2	SD1 田層	E-T12	ヒノキ	
295	324-02	器具	木口材	(36.9)	3.0	2.0	SD1 田層	E-P8	スギ	
296	324-04	器具	木口材	(34.6)	3.0	2.0	SD1 田層	E-S9	スギ	
297	324-03	器具	木口材	(38.1)	3.3	1.3	SD1 田層	E-R11	ヒノキ	
298	381-05	器具	木口材	(37.3)	3.6	2.1	SD1 田層	E-S12	ヒノキ	
299	1378-01	器具	木口材	(37.7)	4.2	1.7	SD1 田層	H-C10	ヒノキ	
300	1382-02	器具	木口材	(45.5)	3.2	1.5	SD1 田層	H-D11	スギ	
301	1382-04	器具	木口材	(29.0)	5.0	1.3	SD1 田層	H-I18	スギ	
302	1382-01	器具	木口材	(43.4)	4.0	1.2	SD1 田層	H-D10	ヒノキ	
303	381-06	器具	木口材	(69.4)	3.7	1.1	SD1 田層	E-U12	スギ	
304	1383-02	器具	木口材	(29.5)	3.0	1.4	SD1 田層	H-110	モミ	東部全盛後行
305	1344-05	器具	木口材	(16.6)	(3.3)	1.3	SD1 田層	H-111	スギ	
306	378-01	器具	木口材	(21.2)	3.4	1.4	SD1 田層	E-R11	スギ	
307	372-17	器具	木口材	(9.1)	3.0	1.8	SD1 田層	E-Y12	スギ	2016年度 薪打ち場跡に上層樹皮をたたく仕事 積み割除は下炭割
308	390-03	器具	木口材	(69.0)	4.1	1.9	SD1 田層	E-U12	スギ	
309	1413-05	器具	木口材	(26.2)	4.7	1.7	SD1 田層	H-P10	スギ	
310	1411-03	器具	木口材	(26.9)	4.5	2.0	SD1 田層	H-O9	スギ	
311	327-03	器具	木口材	(29.7)	3.5	1.3	SD1 田層	不明		編成でない可能性有り
312	1385-05	器具	木口材	(21.9)	2.4	0.5	SD1 田層	H-M12	スギ	
313	1388-01	器具	木口材	A	16.3	人39.7	SD1 田層	H-K10	イタヤギ	製品とするのは未製品か
314	328-03	器具	木口材	A	17.4	7.5	SD1 田層	E-T11	ツツライイ	
315	1387-01	器具	木口材	A	16.6	本27.9	SD1 田層	H-111	コナラ属カガシノ属	樹皮剥き
316	325-06	器具	木口材	A	14.5	本27.3	SD1 田層	E-P10	コナラ属カガシノ属	
317	1387-02	器具	木口材	A	18.1	本28.4	SD1 田層	H-111	ヤブツバキ	
318	325-06	器具	木口材	A	13.8	本26.0	SD1 田層	E-S12	コナラ属カガシノ属	
319	326-01	器具	木口材	A	18.8	本28.2	SD1 田層	E-T12	コナラ属カガシノ属	
320	326-03	器具	木口材	A	19.2	本27.0	SD1 田層	E-T12	ツツライイ	製品一割だけ 薪材行使用
321	1387-03	器具	木口材	A	11.0	本27.3	SD1 田層	H-E10	ヤブツバキ	

採石場 番号	実測断面 番号	区 種		分類		正算(㎝)		傾度	水位の寸	露 位	地 区	新 種	備 考
		区	種	分	類	左	右						
322	325-04	礫	礫	A	16.7	太37.9			芯持切り出し	SD1 直壁	E-T12	ヤブツハキ	
323	325-07	礫	礫	A	16.3	太38.3			芯持切り出し	SD1 直壁	E-T12	ヤブツハキ	
324	326-04	礫	礫	A	15.5	太36.0			芯持切り出し	SD1 直壁	E-R68	コナラ属7カガシ産属	
325	326-04	礫	礫	A	16.8	太36.3			芯持切り出し	SD1 直壁	E-S12	コナラ属7カガシ産属	
326	326-02	礫	礫	A	17.3	太36.1			芯持切り出し	SD1 直壁	E-R11	ヤブツハキ	
327	327-08	礫	礫	A	5.2	太38.3			芯持切り出し	SD1 直壁	E-V10	ヤカキ	
328	329-09	礫	礫	A	7.2	太36.8			芯持切り出し	SD1 直壁	E-U14	広葉樹	
329	1389-08	礫	礫	A	66.8	太39.6			芯持切り出し	SD1 直壁	H-B10	コナラ属7カガシ産属	
330	327-01	礫	礫	A	6.9	太37.5			芯持切り出し	SD1 直壁	E-U12		
331	326-07	礫	礫	A	65.3	太36.5			芯持切り出し	SD1 直壁	E-P98	コナラ属7カガシ産属	
332	326-08	礫	礫	A	(7.7)	(66)	(3.5)		芯持切り出し	SD1 直壁	E-P98	ヤブツハキ	
333	1387-04	礫	礫	A	9.7	太34.1			芯持切り出し	SD1 直壁下部	H-I19	シイ	
334	327-02	礫	礫	A	(4.9)	太34.5			芯持切り出し	SD1 直壁	E-N9	コナラ属コナラ産	
335	325-02	礫	礫	B	16.5	9.8	3.8		材持切り出し	SD1 直壁	E-S7	判	
336	325-01	礫	礫	B	16.5	9.8	3.8		材持切り出し	SD1 直壁	E-T12	コナラ属7カガシ産属	
337	368-01	礫	礫	B	18.5	太37.0			芯持切り出し	SD1 直壁	E-S11		
338	1381-06	礫	礫	B	15.6	6.5	(2.7)		芯持切り出し	SD1 直壁	E-Y10	コナラ属7カガシ産属	
339	325-02	礫	礫	B	15.0	8.4	7.0		不明	SD1 直壁	E-N9	シヤンソボ	
340	325-04	礫	礫	H	17.4	8.2	5.4		不明	SD1 直壁	E-S13	コナラ属7カガシ産属	
341	1385-02	礫	礫	B	14.0	太37.5			芯持切り出し	SD1 直壁	H-L11	シヤンソボ	
342	1385-02	礫	礫	B	13.1	6.3	6.1		芯持切り出し	SD1 直壁	H-J11	ヤブツハキ	
343	1381-04	礫	礫	H	14.0	7.4	4.5		径分持切り出し	SD1 直壁	H-I19	ヒヤク	
344	1389-01	礫	礫	B	13.3	6.1	5.0		材持切り出し	SD1 直壁	E-K-Y9-10	アサナロ	
345	1381-02	礫	礫	H	15.0	7.3	5.3		材持切り出し	SD1 直壁上部	H-G9	ヒヤク	
346	1389-02	礫	礫	B	16.1	7.4	2.6		材持切り出し	SD1 直壁	H-A9	アサナロ	
347	1385-06	礫	礫	H	13.8	7.5	4.9		芯持切り出し	SD1 直壁下部	H-L13	アサナロ	
348	1389-04	礫	礫	B	13.0	8.0	5.5		材持切り出し	SD1 直壁上部	H-K12	アサナロ	
349	1381-03	礫	礫	B	13.4	8.8	4.3		平截切り出し	SD1 直壁下部	H-K11	ヤブツハキ	一部延び
350	1388-07	礫	礫	B	13.0	7.0	4.5		径分持切り出し	SD1 直壁上部	H-C10	アサナロ	欠損部延び
351	1385-07	礫	礫	B	(18.2)	7.9	7.0		芯持切り出し	SD1 直壁下部	H-P9	ヒヤク	
352	1388-04	礫	礫	B	18.0	8.5	3.2		単面切り出し	SD1 直壁上部	H-O9	アサナロ	
353	1385-01	礫	礫	H	16.3	8.2	7.2		芯持切り出し	SD1 直壁下部	H G10	アサナロ	
354	327-08	礫	礫	B	(17.0)	7.0	(2.8)		材持切り出し	SD1 直壁	E-R11	コナラ属7カガシ産属	
355	1385-04	礫	礫	H	(13.6)	8.3	4.5		平截切り出し	SD1 直壁上部	H-I19	コナラ属7カガシ産属	

検査 番号	実測番号	器 種	分 類	寸法(mm)		備 考			
				長さ	幅				
356	1389-04	器具	B	15.2	7.9	3.2	コナノ属7分ガシ電風	H-B11	
357	1391-01	器具	B	13.9	8.0	5.9	芯持柄出し	SD1 目層上層	H-C9
358	1385-03	器具	B	15.0	7.4	5.4	芯持柄出し	SD1 目層上層	H-D9
359	1389-05	器具	B	13.3	6.7	3.4	半藏柄出し	SD1 目層下層	H-J11
360	1385-04	器具	B	16.8	6.0	4.8	芯持柄出し	SD1 目層下層	H-G10
361	377-03	器具	B	11.0	太35.0		芯持柄出し	SD1 目層	E-W11
362	377-01	器具	B	13.8	太36.0		芯持柄出し	SD1 目層	H-W10
363	1389-07	器具	B	11.9	7.3	4.0	半藏柄出し	SD1 目層	H-H18
364	1389-06	器具	B	14.6	6.6	3.4	半藏柄出し	SD1 目層	H-A10
365	1389-03	器具	B	15.9	6.3	3.0	半藏柄出し	SD1 目層	H-B9
366	1385-08	器具	B	14.0	7.8	4.3	芯持柄出し	SD1 目層	H-H9
367	1432-05	器具	B	(14.2)	7.2	1.9	柄持柄出し	SD1 目層上層	H-H9
368	1388-05	器具	B	12.2	7.5	6.5	芯持柄出し	SD1 目層上層	H-D9
369	1388-06	器具	B	13.0	6.6	6.5	芯持柄出し	SD1 目層上層	H-D9
370	1381-05	器具	B	12.2	5.5	4.3	芯持柄出し	SD1 目層下層	H-G8
371	1388-03	器具	B	15.0	8.2	5.7	半藏柄出し	SD1 目層	H-G9
372	308-08	工具	鋸	(14.3)	3.1	3.2	芯持柄出し	SD1 目層	E-U12
373	1307-03	工具	鉄爪柄	(27.5)	鉄爪部2.8		芯持柄出し	SD1 目層	H-I11
374	1307-01	工具	鉄爪柄	(17.5)	鋸部2.7		鋸部2.5	SD1 目層 F部	H-G9
375	1314-01	工具	鉄爪柄	(15.0)	鋸部2.0		鋸部2.5	SD1 目層	H-A10
376	1307-02	工具	鉄爪柄	(11.0)	鋸部2.5		鋸部2.5	SD1 目層下層	H-F10
377	372-18	上具	鉄爪柄	(11.3)	太33.2		芯持柄出し	SD1 目層	H-T11
378	395-01	工具	鉄爪柄	46.0	太53.0		芯持柄出し	SD1 目層	E-T11
379	307-04	工具	鉄爪柄	(21.2)	1.9	2.1	芯持柄出し	SD1 目層	H-G9
380	312-04	工具	小鋸柄				鋸部23.0	SD1 目層	E-V11
381	318-01	鉄線具	A	径7.0		1.6	柄持柄出し	SD1 目層	E-T9
382	318-02	鉄線具	A	径7.1		1.7	柄持柄出し	SD1 目層	E-S12
383	318-03	鉄線具	A	径6.8		1.7	柄持柄出し	SD1 目層	E-S12
384	1379-02	鉄線具	糸巻	(37.9)	太31.8		2線付柄出し	SD1 目層	H-I18
385	1379-04	鉄線具	糸巻	(25.2)	太31.7		柄持柄出し	SD1 目層	H-A9
386	1379-03	鉄線具	糸巻	(24.0)	太32.2		柄持柄出し	SD1 目層	H-A11
387	1379-05	鉄線具	糸巻	(21.0)	太32.0		柄持柄出し	SD1 目層上層	H-D9
388	1379-06	鉄線具	糸巻	A1 支丈未(5.8)	支丈未2.4		柄持柄出し	SD1 目層	H-A10
389	341-02	鉄線具	糸巻	22.6	太32.6		柄持柄出し	SD1 目層	E-N8

標記 番号	材料番号	源 種	分類	全長 (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ	水取の 有無	樹 代	地 区	形 種	備 考
396	1380-06	杉槓丸	A1	胸水(20.1)	太31.9			無	SD1 目簾下部	H-10	大杉	
391	319-02	杉槓丸	A1	(36.3)	22.4			無	SD1 目簾	E-N8	大杉 葉水 乙ノ杉	
392	319-03	杉槓丸	A1	(24.1)				無	SD1 目簾	E-N8	乙ノ杉	
393	1380-07	杉槓丸	A1	(21.0)	2.4	1.5		無	SD1 目簾	H-C10	大杉	
394	1380-01	杉槓丸	A1	(26.2)	2.2	1.6		無	SD1 目簾	E-V10	乙ノ杉	
395	1380-02	杉槓丸	A1	(25.6)	2.2	1.5		無	SD1 目簾	H-C9	大杉	
396	1380-08	杉槓丸	A1	(21.1)	1.8	2.1		無	SD1 目簾	H-A9	大杉	
397	1380-09	杉槓丸	A1	(23.6)	2.2	2.3		無	SD1 目簾	H-19	大杉	
398	023-03	杉槓丸	A1	(71.0)	4.6	2.9		無	SD1 目簾	E-S12	大杉	
399	1382-06	杉槓丸	A1	(44.0)	1.8	2.0		無	SD1 目簾	E-Y9	乙ノ杉	
400	320-03	杉槓丸	A1	(20.5)				無	SD1 目簾	E-R10	大杉	
401	341-04	杉槓丸	A2	36.7	太32.2			無	SD1 目簾	E-W10	乙ノ杉	
402	341-01	杉槓丸	A2	37.5	太32.5			無	SD1 目簾	E-O10	乙ノ杉	
403	1380-08	杉槓丸	A2	(37.6)	太32.1			無	SD1 目簾	H-A10	乙ノ杉	
404	319-01	杉槓丸	B1	(30.0)	24.5			無	SD1 目簾	E-R12	葉水 乙ノ杉	
405	1379-01	杉槓丸	B2	葉水(28.2)	葉水(23.4)			無	SD1 目簾	H-J10	コウヤナギ	
406	320-02	杉槓丸	B3	(27.9)	26.4			無	SD1 目簾	E-Q12	乙ノ杉	
407	320-01	杉槓丸	B3	(26.5)	26.2			無	SD1 目簾	E-T12	葉水 乙ノ杉	
408	1384-01	杉槓丸	B3	(71.8)	3.0	1.7		無	SD1 目簾	H-G+H9	乙ノ杉	
409	318-04	杉槓丸	B3	(58.2)	3.6	1.9		無	SD1 目簾	E-P10	乙ノ杉	
410	1384-02	杉槓丸	B3	(52.5)	3.5	1.8		無	SD1 目簾	H-D9	大杉	
411	318-03	杉槓丸	B3	(45.5)	5.7	1.6		無	SD1 目簾	E-T13	大杉	
412	318-06	杉槓丸	B3	(28.3)	5.2	1.5		無	SD1 目簾	E-T11	乙ノ杉	
413	372-16	杉槓丸	B3	(14.0)	(1.7)	0.8		無	SD1 目簾	E-S11	乙ノ杉	
414	378-10	杉槓丸	B3	18.3	1.6	0.9		無	SD1 目簾	E-U12	乙ノ杉	
415	1384-04	杉槓丸	B3	(27.1)	2.5	1.5		無	SD1 目簾	H-110	乙ノ杉	
416	1384-03	杉槓丸	B3	(35.9)	3.7	1.4		無	SD1 目簾	H-C9	葉ノ葉	
417	1378-01	杉槓丸	B3	42.8	太34.9			無	SD1 目簾	H-K11	乙ノ杉	
418	1378-02	杉槓丸	B3	(35.6)	太34.6			無	SD1 目簾	H-L11	葉ノ葉	
419	1378-03	杉槓丸	B3	(20.5)	太(4.3)			無	SD1 目簾	H-D10	コウヤナギ	
420	403-04	杉槓丸	B3	(22.8)	太31.5			無	SD1 目簾	E-X10	大杉	
421	1386-02	杉槓丸	B3	25.0	太31.7			無	SD1 目簾	H-B10	乙ノ杉	
422	1386-01	杉槓丸	B3	25.5	太31.6			無	SD1 目簾	H-Y10	大杉	
423	341-05	杉槓丸	B3	24.7	太31.9			無	SD1 目簾	E-V12	乙ノ杉	

器名	器種	分類	全長	口径	高さ	容量	木口等の	部位	地区	新機	備考
404	396-03	鉄鎌	17.0	太31.5			刃付切り出し	SD1 目録上取	H-111	スズ	
425	341-06	鉄鎌	(14.3)	太32.4			柄材切り出し	SD1 目録	E-59	シ/ホ	
426	1396-04	鉄鎌	(13.1)	太32.0			柄材切り出し	SD1 目録	E-X-Y9-10	シ/ホ	
427	1391-01	鉄鎌	29.8	太4.5	高さ8.0		半割切り出し	SD1 目録下部	H-79	ブカヤツ	
428	317-05	鉄鎌	27.4	23.2	高さ9.8		半割切り出し	SD1 目録	E-Q11	ツツ黒銅製草履風	表面1/4 裏面1/4磨け
429	1391-02	鉄鎌	16.0	28.1	高さ9.8		芯持切り出し	SD1 目録	H-C9	スズ	
430	1392-01	鉄鎌	15.2	27.0	高さ10.6		芯持切り出し	SD1 目録	E-Y10	ツツ/木片	孔貫通せず表面のみ
431	318-01	鉄鎌	29.5	24.2	高さ12.0		SD1 目録	E-M8	コウヤマツ		
432	317-01	鉄鎌	24.5	27.4	高さ10.8		柄材切り出し	SD1 目録	E-S12	コウヤマツ	
433	1390-01	鉄鎌	径23.6		高さ7.3		柄材切り出し	SD1 目録	H-E9	ツツ/木	
434	321-04	鉄鎌	(22.4)	4.6	2.2		柄材切り出し	SD1 目録転石部	E-W13	ホヤ	裏面1/2磨け
435	321-06	鉄鎌	(20.0)	5.2	2.4		柄材切り出し	SD1 目録	E-R11	シ/ホ	
436	1385-05	鉄鎌	(32.5)	4.0	1.5		柄材切り出し	SD1 目録	H-A9	スズ	
437	322-07	鉄鎌	41.1	2.4	1.3		柄材切り出し	SD1 目録	E-T14	シ/ホ片	
438	1383-01	鉄鎌	(45.4)	3.7	1.0		柄材切り出し	SD1 目録	H-110	シ/ホ	
439	1393-03	鉄鎌	(58.0)	1.8	2.2		柄材切り出し	SD1 目録	H-D9	スズ	糸の付たり風有り
440	1383-02	鉄鎌	(59.6)	1.8	2.5		柄材切り出し	SD1 目録	H-D9	スズ	糸の付たり風有り
441	322-05	鉄鎌?	(20.5)	太33.4			芯持切り出し	SD1 目録	E-X11	ツツ/木片	
442	1417-04	鉄鎌?	14.6	太32.8			芯持切り出し	SD1 目録	E-Y10	炭素鋼	
443	322-06	鉄鎌?	(14.6)	太33.1			芯持切り出し	SD1 目録	E-X10	撒孔材	
444	312-05	鉄鎌?	(10.2)	太32.8			芯持切り出し	SD1 目録	E-Q8	ホヤ片	
445	322-08	鉄鎌?	(12.1)	太31.6			芯持切り出し	SD1 目録上部	E-P9	ツツ黒銅製草履風	
446	322-09	鉄鎌?	90.0	2.4	0.9		柄材切り出し	SD1 目録	E-N9	スズ	
447	025-04	鉄鎌?	76.4	6.0	6.0		柄材切り出し	SD1 目録	E-T13	シ/ホ	表面1/2磨け
448	1019-01	鉄物	A	122.1	(20.6)	高さ8.2	柄材切り出し	SD1 目録 井条	H-J11	スズ	
449	104-01	鉄物	A	(91.9)	(19.8)	高さ12.8	柄材切り出し	SD1 目録	E-R11	スズ	し字部の跡
450	360-01	鉄物	A	(51.8)	(17.2)	高さ10.5	柄材切り出し	SD1 目録 下部→内層上部	E-R12	スズ	し字部の跡
451	1014-02	鉄物	A	(61.9)	(12.1)	高さ15.1	柄材切り出し	SD1 目録	H-79	ツツ/木	
452	077-01	鉄物	A	(62.2)	14.0	4.0	柄材切り出し	SD1 目録	E-W12		
453	103-01	鉄物	A	(96.5)	(15.5)	高さ3.3	柄材切り出し	SD1 目録	E-U12	ツツ風	
454	1014-01	鉄物	A	(97.5)	(23.6)	高さ8.5	柄材切り出し	SD1 目録 下部上取	H-M12	ツツ/木	側面磨け
455	074-01	鉄物	B	(102.5)	(29.0)	3.0	柄材切り出し	SD1 目録	E-M12	スズ	舟形状
456	1018-01	鉄物	C	(100.1)	(19.5)	高さ11.5	柄材切り出し	SD1 目録	H-K11	シ/ホ	
457	1387-02	鉄物	E	(18.5)	15.6	高さ5.2	柄材切り出し	SD1 目録	H-111	ツツ	長方形にたがふ

観測 番号	測所 番号	測器 名	分層	高さ (cm)		水位中等	水位	地区	新値	備考
				変長	高さ					
458	1367-03	浮標	E	(26.0)	(3.9)	観測点 不明	SD1 目録	H-110	七ノ沖	
459	393-03	浮標	D	(16.7)	10.8	観測点 不明	SD1 目録	E-X10	スギ	次橋北堤付
460	1372-01	浮標	H	(32.8)	(7.7)	観測点 不明	SD1 目録	H-B9	スギ	次橋北堤および外堤一部堤付
461	1366-03	浮標	D	(31.7)	(4.3)	観測点 不明	SD1 目録	H-I19	スギ	
462	1374-03	浮標	D	(43.1)	(5.1)	観測点 不明	SD1 目録下部	H-L13	中ノヤマキ	
463	1366-01	浮標	H	(32.4)	(5.0)	観測点 不明	SD1 目録	H-A10	スギ	
464	1416-03	浮標	I1	38.3	(6.8)	観測点 不明	SD1 目録	H-J10	七ノ沖	
465	1372-03	浮標	E	42.1	(5.9)	観測点 不明	SD1 目録	H-C9	中ノヤマキ	
466	409-01	浮標	F	(22.5)	(14.8)	観測点 不明	SD1 目録	E-S12	伊ノ沖	
467	393-06	浮標	F	(18.0)	(9.2)	(2.2)	観測点 不明	SD1 目録	E-S12	中ノヤマキ
468	048-03	浮標	F	(31.1)	(6.3)	1.9	観測点 不明	SD1 目録	E-S12	
469	1368-01	浮標	H	(32.6)	(5.8)	高5.4	観測点 不明	SD1 目録	不明	小舟のため分層不明 一部堤付
470	047-01	浮標	F	73.0	(35.9)	高9.6	観測点 不明	SD1 目録	不明	高潮面に月当たり風有り
471	093-01	浮標	F	(53.4)	(23.5)	高5.8(1)	観測点 不明	SD1 目録	不明	潮位差の消滅付
472	1477-01	浮標	F	(58.7)	(8.5)	高55.3	観測点 不明	SD1 目録	E-R10	スギ
473	1378-01	浮標	F	(46.0)	(19.1)	高59.0	観測点 不明	SD1 目録	E-R10	スギ
474	1359-04	浮標	F	(17.5)	(5.5)	(5.0)	観測点 不明	SD1 目録下部	H-K12	エノハ風
475	359-01	浮標	F	48.8	(16.6)	高33.6	観測点 不明	SD1 目録	H-H11	中ノヤマキ
476	383-01	浮標	G	48.0	(16.7)	高310.0	観測点 不明	SD1 目録	E-W12	中ノヤマキが少し重畳
477	364-01	浮標	G	(37.6)	(17.1)	高110.5	観測点 不明	SD1 目録	E-Q10	内重堤付
478	370-10	浮標	G	(11.1)	(5.5)	高34.0	観測点 不明	SD1 目録	E-T10	アサノ口
479	365-02	浮標	G	径(22.0)		高5.0	観測点 不明	SD1 目録	E-Q11	
480	393-01	浮標	G	径半徑10.4		高310.8	観測点 不明	SD1 目録	E-S12	中ノヤマキが少し重畳
481	1369-02	浮標	A	径(25.5)		高31.6	観測点 不明	SD1 目録下部	H-I11	スギ
482	1371-08	浮標	A	径(19.2)		高31.5	観測点 不明	SD1 目録下部	H-M13	七ノ沖
483	1371-03	浮標	A	(14.7)	(4.3)	0.6	観測点 不明	SD1 目録下部	H-L13	七ノ沖
484	1369-01	浮標	A	径(26.0)		高32.2	観測点 不明	SD1 目録	E-Y9	月当たり風有り
485	1371-06	浮標	A	径(22.8)		高31.1	観測点 不明	SD1 目録	H-I10	スギ
486	362-06	浮標	A	(11.1)	(3.8)	高31.2	観測点 不明	SD1 目録	E-V12	分当たり風有り
487	1374-01	浮標	A	直径(17.0)		高31.7	観測点 不明	SD1 目録	F-R11	七ノ沖
488	1371-07	浮標	A	(15.4)	(4.7)	0.6	観測点 不明	SD1 目録	I1-D10	月当たり風有り
489	1371-01	浮標	A	径(22.0)		高31.9	観測点 不明	SD1 目録	H-K11	七ノ沖
490	365-01	浮標	A	径(19.0)		0.7	観測点 不明	SD1 目録	E-U15	月当たり風有り
491	1371-02	浮標	A	(17.4)	(5.1)	1.0	観測点 不明	SD1 目録	H-L13	七ノ沖

観音寺番号 観音寺名	宗 値	分類	位置(cm)		木桁等	壁 位	地 区	形 様	備 考
			全長	高さ					
492 362-07 笠笠	刹物	A	(120.0)	高さ(4.6)	SD1 目録 高さ(4.6) 幅(120.0)	E-W10			
493 1369-03 笠笠	刹物	A	(120.0)	高さ(1.3)	SD1 目録 高さ(1.3) 幅(120.0)	H-A12	ズギ	月当り板有り	
494 1371-04 笠笠	刹物	A	(13.1)	(4.2)	SD1 目録 高さ(4.2) 幅(13.1)	H-A10	ズギ		
495 1389-04 笠笠	刹物	A	(14.0)	(4.5)	SD1 目録上部 高さ(4.5) 幅(14.0)	H-H10	ズギ		
496 391-03 笠笠	刹物	B	(44.2)	(11.2)	SD1 目録 高さ(11.2) 幅(44.2)	E-Q10			
497 393-02 笠笠	刹物	H	(20.1)	(17.2)	SD1 目録下部 高さ(17.2) 幅(20.1)	E-T9	ナナ割7分ガサ風流		
498 1387-01 笠笠	刹物	A	26.5	11.4	SD1 目録 高さ(11.4) 幅(26.5)	H-H10	コウヤツキ		
499 315-01 笠笠	刹物	A	43.1	14.4	SD1 目録 高さ(14.4) 幅(43.1)	E-T15	ヒノキ	上面および側面に黒刷	
500 314-02 笠笠	刹物	B	43.8	6.5	SD1 目録 高さ(6.5) 幅(43.8)	E-T15	ヒノキ		
501 393-05 笠笠	刹物	B	(15.3)	(8.1)	SD1 目録 高さ(8.1) 幅(15.3)	E-W10	ヒノキ		
502 312-09 笠笠	刹物	C	(11.8)	3.2	SD1 目録 高さ(3.2) 幅(11.8)	E-S10	ズギ		
503 399-01 笠笠	刹物	A	(48.3)	14.6	SD1 目録 高さ(14.6) 幅(48.3)	E-P10	ヤキ風	全面を刷り上りした上段のみ、黒刷込み	
504 1370-06 笠笠	刹物	A	31.9	9.3	SD1 目録 高さ(9.3) 幅(31.9)	H-H10	ヒノキ		
505 1374-03 笠笠	刹物	高杯	(8.8)	(8.2)	SD1 目録 高さ(8.2) 幅(8.8)	E-Y12	クスノキ		
506 1416-03 笠笠	刹物	高杯	(13.8)	(6.5)	SD1 目録 高さ(6.5) 幅(13.8)	H-B9	クスノキ		
507 1370-04 笠笠	刹物	高杯	高さ(10.8)		SD1 目録下部 高さ(10.8) 幅(10.8)	H-G10	クスノキ	一般刷り	
508 366-02 笠笠	刹物	杯	径(25.6)		SD1 目録 高さ(25.6) 幅(25.6)	E-V10	クスノキ		
509 1370-05 笠笠	刹物	杯	口径(19.8)	高さ(12.4)	SD1 目録 高さ(12.4) 幅(19.8)	H-L13	クスノキ		
510 1340-05 笠笠	刹物	圓	最大径(2.8)		SD1 目録 高さ(2.8) 幅(2.8)	H-B9	イヌギヤ	全面を刷り上り、ボーン吹の風流	
511 1373-01 笠笠	刹物	圓	口径(31.2)	底径(13.0)	SD1 目録 高さ(13.0) 幅(31.2)	H-A1	ズギ	一部刷り用紙肥手、黒刷風流	
512 400-01 笠笠	刹物	不明刹物	43.4	(16.8)	SD1 目録 高さ(16.8) 幅(43.4)	E-O10	モミ風	上面を刷り上りした途中、黒刷風流	
513 402-01 笠笠	刹物	不明刹物	53.4	18.1	SD1 目録 高さ(18.1) 幅(53.4)	E-P10	ヤツク風	タタリ小帯の凸形状	
514 365-03 笠笠	刹物	不明刹物	(23.0)	(20.4)	SD1 目録 高さ(20.4) 幅(23.0)	E-U13			
515 381-02 笠笠	刹物	不明刹物	21.5	(6.8)	SD1 目録下部 高さ(6.8) 幅(21.5)	E-R9			
516 1415-01 笠笠	刹物	不明刹物	(15.5)	(19.3)	SD1 目録 高さ(19.3) 幅(15.5)	H-C10	クスノキ		
517 1377-01 笠笠	刹物	不明刹物	(20.0)	(20.3)	SD1 目録 高さ(20.3) 幅(20.0)	H-A10	ズギ	方形枠孔に羽付縁人	
518 1342-02 笠笠	棟物	溝掛風	直径(7.8)		不明	H-K10	ツリ	全面黒刷、内面は木の漆で刷	
519 1342-04 笠笠	棟物	溝掛風	直径(7.2)		不明	H-S12	ブナ	管轄内縁	
520 366-01 笠笠	棟物	[四方配(5の檜)]	14.0	高さ(7.2)	SD1 目録 高さ(7.2) 幅(14.0)	E-B9	ズギ		
521 1370-02 笠笠	棟物	[四方配(5の檜)]	(17.0)	(2.3)	SD1 目録 高さ(2.3) 幅(17.0)	H-B9	ズギ		
522 362-03 笠笠	棟物	[四方配(5の檜)]	22.2	(4.8)	SD1 目録 高さ(4.8) 幅(22.2)	E-T13			
523 362-02 笠笠	棟物	[四方配(5の檜)]	12.2	6.3	SD1 目録 高さ(6.3) 幅(12.2)	E-T13			
524 1370-01 笠笠	棟物	[四方配(5の檜)]	29.6	10.3	SD1 目録下部・面掛 高さ(10.3) 幅(29.6)	H-B9	ヒノキ		
525 399-02 笠笠	棟物	[四方配(5の檜)]	31.8	(10.0)	SD1 目録 高さ(10.0) 幅(31.8)	E-S12	ズギ	木好風流	

報告書 番号	実測番号	器 種	分類		質量 (cm)		水垢内等	番 位	地 区	新 機	備 考
			分組	分級	量	型号					
526	362-01	容器	抽出	32.2 (13.0)	1.2	紙目	SD1 目層	E-Q10			
527	369-03	容器	抽出合層	13.3	7.2	紙目	SD1 目層	E-T14		スギ	木釘付成
528	362-04	容器	抽出	14.1	(4.0)	透紙目	SD1 目層	E-T14		スギ	
529	379-05	容器	抽出合層	(14.4)	4.7	透紙目	SD1 目層	E-Q11		スギ	
530	362-06	容器	抽出	15.5	5.8	0.7 透紙目	SD1 目層	E-T14		ヒノキ	
531	371-08	容器	抽出合層	20.5	(5.6)	紙目	SD1 目層	E-S11		スギ	
532	1370-03	容器	抽出合層	12.9	4.9	0.5 透紙目	SD1 目層透紙目下部	H-C10		スギ	
533	362-09	容器	抽出	9.8	5.3	0.7 透紙目	SD1 目層	E-P11		サワラ	分所産物産品の可能性有り 製練付成
534	1474-03	容器	抽出合層	20.0	(7.2)	紙目	SD1 目層	E-V9		スギ	
535	375-04	容器	抽出合層	31.9	(7.3)	1.1 透紙目	SD1 目層下部	E-S9		スギ	
536	1374-04	容器	抽出	(21.0)	9.0	0.7 紙目	SD1 目層	H-B9		コナラ	産アカガシ産品
537	1474-01	容器	抽出合層	61.0	9.7	1.0 紙目	SD1 目層	H-111		ヒノキ	製練付成
538	1474-02	容器	抽出	54.2	(5.5)	1.0 紙目	SD1 目層	H-J12		スギ	
539	1342-03	容器	抽出	(6.0)	(14.6)	器底3.4	SD1 1-2層下部	H-111-111-K13		コナラ	内産 産品名検定未済有り
540	1365-01	容器	抽出	A 最大径31.4		高さ5.6	製材付出し	SD1 目層下部	H-C10	ヒノキ	産品名検定未済有り
541	1365-02	容器	抽出	A 最大径(器底)		高さ(2.4)	製材付出し	SD1 目層	不明	ヒノキ	産品名検定未済有り
543	405-01	容器	抽出	B 65.6	(13.0)	1.1 紙目	SD1 目層	H-J12		ヒノキ	040記部付成
544	389-03	容器	抽出	B 63.2	(10.0)	1.5 透紙目	SD1 目層下部	E-T8		ヒノキ	
545	1450-04	容器	抽出	C1 69.1	(6.8)	1.0 紙目	SD1 目層下部	E-R7		ヒノキ	
546	1445-02	容器	抽出	C1 63.9	(9.9)	1.4 紙目	SD1 目層	E-D10		ヒノキ	製練付成
547	1449-01	容器	抽出	C2 径(28.8)	32.8	1.0 紙目	SD1 目層下部	E-R10		サワラ	一部焼け 木釘有り
548	1454-03	容器	抽出	C2 (32.3)	(5.3)	1.1 紙目	SD1 目層	H-110		ヒノキ	木釘 製練付成 裏面に万当たりの産有り
549	1454-02	容器	抽出	C2 (42.3)	(8.8)	1.6 紙目	SD1 目層	H-A10		サワラ	
550	1054-01	容器	抽出	C2 69.5	(17.0)	1.6 紙目	SD1 目層	H-E10		ヒノキ	木釘 製練付成 表面に月当たりの産有り
551	1032-01	容器	抽出	D1 67.3	37.1	1.3 紙目	SD1 目層上部	H-A9		ヒノキ	木釘 製練付成
552	1452-01	容器	抽出	D1 (60.2)	(11.4)	1.7 透紙目	SD1 目層	H-G9		ヒノキ	表面乃至の底有り
553	1454-01	容器	抽出	D1 (65.2)	(7.7)	1.7 透紙目	SD1 目層	H-E9		ヒノキ	木釘 製練付成 一部焼け
554	1453-02	容器	抽出	D1 (49.3)	(7.8)	1.6 紙目	SD1 目層上部	H-C10		サワラ	木釘 製練付成
555	1431-01	容器	抽出	D1 35.0	(11.4)	1.0 紙目	SD1 目層	H-G9		スギ	製練付成
556	1448-07	容器	抽出	D1 株(19.6)		0.8 紙目	SD1 目層	H-J12		ヒノキ	製練付成
557	1449-02	容器	抽出	D1 株(34.0)		0.8 紙目	SD1 目層	E-V9		ヒノキ	一部焼け 製練付成
558	013-03	容器	抽出	D2 (63.9)	(22.2)	1.9 紙目	SD1 目層	E-W11		ヒノキ	製練付成
559	1451-02	容器	抽出	D2 38.3	(12.5)	1.0 透紙目	SD1 目層	H-B10		ヒノキ	月当たりの産 木釘有り
										ヒノキ	一部焼け 月当たりの産 製練付成

製品番号	実測寸法	寸 法		分 割	正 規 (cm)		用途	本取寸径	備 位	建 区	組 構	備 考
		直径	高		直径	高						
560 1453-01 管芯	曲物	D2	33.2 (7.3)	1.2	芯径目	SD1 目層	H-C10	7x7x7	木釘 緊締結成	増長孔有り		
561 1444-01 管頭	曲物	D2	径(18.5)	1.1	板径	SD1 目層	H-B9-E-Y10	7x7x7	木釘 緊締結成	裏面一部抜け		
562 1444-02 管頭	曲物	D2	径(19.2)	1.0	板径	SD1 目層	E-Y12	9x7x7	木釘 緊締結成			
563 1443-04 管芯	曲物	D2	径(20.0)	0.9	板径	SD1 目層	E-Y10	7x7x7	裏面2ヶ所だけ	木釘有り		
564 1448-05 管芯	曲物	D2	径(19.2)	0.9	板径	SD1 F ~ 目層	E-Y9	7x7x7	裏面2ヶ所だけ	木釘 緊締結成		
565 1443-03 管芯	曲物	D2	径(19.5)	1.0	板径	SD1 目層	E-X11	7x7x7	裏面2ヶ所だけ	木釘 緊締結成		
566 1445-01 管頭	曲物	D2	31.7 (19.9)	0.8	芯径 1層目	SD1 目層 上層	H-C9	7x7x7	木釘 緊締結成	別当の板 増長板有り		
567 1448-02 管頭	曲物	E	径(32.0)	1.0	板径	SD1 目層	H-L12	7x7x7	木釘 緊締結成			
568 1444-03 管芯	曲物	E	径(20.8)	1.3	芯径目	SD1 目層	E-Y10	7x7x7	木釘有り			
569 1452-05 管芯	曲物	E	(54.2)	1.8	板径	SD1 目層 上層	H-C10	7x7x7				
570 1447-01 管頭	曲物	E	径(25.7)	1.2	板径	SD1 目層 下層	H-C10	7x7x7				
571 1459-01 管頭	曲物	F	径(26.0)	1.4	板径	SD1 目層	H-108	7x7x7				
572 1448-06 管芯	曲物	E	径(16.8)	1.2	板径	SD1 目層 下層	H-H10	7x7x7				
573 1447-02 管頭	曲物	E	径(20.5)	1.7	板径	SD1 目層 上層	H-C10	7x7x7				
574 1449-03 管芯	曲物	E	(32.0)	(17.5)	芯径目	SD1 目層	E-Y12-T11	7x7x7	穴開け板付			
575 1448-01 管芯	曲物	E	径(19.6)	0.9	板径	SD1 目層 F部	H-D9	9x7x7	一部抜け	木釘 緊締結成		
576 1448-04 管芯	曲物	F	径(18.8)	1.1	板径	SD1 目層	H-A12	7x7x7	木釘 緊締結成			
577 1448-06 管芯	曲物	E	径(20.4)	1.4	芯径目	SD1 目層	H-B9	7x7x7	木釘 緊締結成			
578 1446-03 管芯	曲物	E	径(20.0)	0.8	板径	SD1 目層	H-U12	7x7x7	裏面抜け? 裏面			
579 1455-03 管芯	曲物	F	(31.4)	(11.3)	1.7	板径	SD1 目層	E-T13	9x7x7			
580 1446-02 管芯	曲物	F	径(18.4)	1.0	板径	SD1 目層	H-B8	7x7x7	中央部抜き	管芯有り		
581 1444-04 管頭	曲物	F	径(28.0)	1.1	板径	SD1 目層	E-S11	7x7x7				
582 1446-01 管頭	曲物	F	径(18.8)	0.8	板径	SD1 目層	H-C9	7x7x7	側板有り	裏面の角のみ 本釘有り		
583 1443-02 管芯	曲物	不明	径(22.0)	1.2	板径	SD1 目層	H-A10	7x7x7	一部抜け			
584 1450-01 管芯	曲物	不明	径(22.0)	0.6	芯径目	SD1 目層 上層	H-G9	9x7x7				
585 1472-01 管芯	曲物	不明	(28.4)	(11.5)	1.3	芯径目	SD1 目層	H-A10	9x7x7			
586 120-04 管頭	曲物	不明	(66.0)	(6.0)	1.2	板径	SD1 目層	E-Y12	7x7x7			
587 120-03 管頭	曲物	不明	(49.0)	9.5	1.2	板径	SD1 目層	E-T9	7x7x7			
588 1455-01 管芯	曲物	不明	(39.0)	(8.5)	0.8	芯径目	SD1 目層 上層	H-B10	7x7x7			
589 1455-02 管芯	曲物	不明	(38.0)	(4.0)	1.4	板径	SD1 目層	E-X10	2x7			
590 1450-03 管頭	曲物	不明	径(19.4)	0.9	芯径目	SD1 目層	E-X9-10	7x7x7				
591 1444-04 管芯	曲物	不明	径(18.0)	1.4	板径	SD1 目層	E-W11	2x7				
592 1444-06 管芯	曲物	不明	径(18.8)	0.9	板径	SD1 目層	E-T8	2x7				
593 1032-02 管頭	曲物	G	62.4 (11.9)	0.8	芯径目	SD1 目層	H-L13			側板結成		

報告 番号	実施年月	区 名	分組	全長	法量 (cm)	断面	水取等	層位	地区	群 集	備 考
394	389-02	谷沢	G	61.7	(11.6)	1.0	底床柱	SD1 直層下部	E-R9		群集柱状
395	1433-04	谷沢	G	(20.0)	(8.5)	1.0	底柱	SD1 直層上部	H-C10	七ノ井	群集柱状
396	1405-14	谷沢	G	径(40.8)		0.8	底柱	SD1 直層上部	H-B11	ヤナフ	群集柱状
397	1405-11	谷沢	G	(16.0)	(5.7)	0.8	底柱	SD1 直層	H-B10	ヤナフ	群集柱状
398	1474-04	谷沢	G	(17.8)	(5.3)	0.4	透圧目	SD1 直層	H-A8	七ノ井	群集柱状
399	1472-02	谷沢	G	(29.1)	(8.8)	1.0	透圧目	SD1 直層	E-X10	七ノ井	断面 群集柱状
600	1471-04	谷沢	G	径(20.2)		0.7	透圧目	SD1 直層	H-B9	七ノ井	群集柱状
601	1471-01	谷沢	G	(7.7)	(2.0)	0.4	透圧目	SD1 直層	H-B10	七ノ井	群集柱状
602	1035-01	谷沢	H	径(54.0)		高さ19.5	堰口	SD1 直層	H-N12	七ノ井	群集柱状
603	1039-01	谷沢	H	径(65.0)		高さ(25.0)	堰口	SD1 不明	不明	不明	群集柱状
604	1341-01	谷沢	H1	径(13.7)		高さ(4.5)	堰口	SD1 P11周辺石内	H-K11	七ノ井	外側に堰柱の形跡 群集柱状
605	1341-02	谷沢	H2	径(5.2)		高さ0.0	堰目	SD1 直層	H-L12	七ノ井	刃先方向 群集柱状
606	1463-06	谷沢	H	径(18.0)		0.7	堰柱	SD1 不明	E-X9	七ノ井	群集柱状
607	1473-03	谷沢	H	径(36.8)		1.0	堰口	SD1 直層	H-M13	七ノ井	群集柱状
608	1473-04	谷沢	H	径(36.4)		0.8	透圧目	SD1 直層	H-M12	七ノ井	群集柱状
609	1493-14	谷沢	H	径(17.4)		0.5	堰柱	SD1 直層	H-109	七ノ井	木打貫り
610	1470-01	谷沢	H	径(12.4)		0.7	堰口	SD1 直層	E-T10	ヤナフ	欠損部だけ
611	1469-01	谷沢	H	径(25.2)		1.0	透圧目	SD1 直層	H-M12	七ノ井	群集柱状
612	1473-02	谷沢	H	径(26.0)		1.0	堰口	SD1 直層	H-111	ヤナフ	群集柱状
613	1455-05	谷沢	H	径(7.9)		0.9	堰口	SD1 直層	E-T9	不明	群集柱状
614	1455-01	谷沢	H	径(7.7)		0.9	透圧目	SD1 直層上部	E-S7	七ノ井	木打貫り
615	1457-01	谷沢	H	径(17.8)		0.9	透圧目	SD1 直層上部	H-D9	七ノ井	群集柱状
616	1465-06	谷沢	H	径(8.3)		0.8	透圧目	SD1 直層	H-B11	七ノ井	群集柱状
617	1466-02	谷沢	H	径(16.5)		0.7	堰口	SD1 直層下	E-Y11	ヤナフ	刃先方向 群集柱状
618	1461-03	谷沢	H	径(16.8)		0.8	堰口	SD1 直層	H-A12	七ノ井	群集柱状
619	1468-01	谷沢	H	径(18.0)		0.9	透圧目	SD1 直層～直層上部	H-D9	ヤナフ	木打貫り
620	1455-08	谷沢	H	径(16.0)		0.8	堰口	SD1 直層	H-A11	ヤナフ	刃先方向 群集柱状
621	1437-02	谷沢	H	径(16.8)		0.8	堰口	SD1 直層	H-112	不明	刃先方向 群集柱状
622	1456-07	谷沢	H	径(15.1)		0.8	透圧目	SD1 直層	E-R10	七ノ井	木打貫り
623	1455-06	谷沢	H	径(5.5)		0.6	透圧目	SD1 直層	H-112	ヤナフ	木打貫り
624	1455-03	谷沢	H	径(5.6)		0.8	透圧目	SD1 不明	E-P13	七ノ井	断面一部だけ 工具痕有り
625	1465-03	谷沢	H	径(16.2)		0.7	透圧目	SD1 直層	H-A9	七ノ井	群集柱状
626	1465-05	谷沢	H	径(16.0)		0.7	堰口	SD1 直層	E-Q10	不明	群集柱状
627	1461-07	谷沢	H	径(15.9)		0.9	堰口	SD1 直層～直層下部	E-S-TB	七ノ井	群集柱状

観測番号	採取番号	器 種	分類	正量(cm)		水位	地区	標 高	備 考
				全長	厚さ				
628	1437-04	浮標	H	径15.0	0.6	堤口	SD1 直壁	E-T11	七ノ水
629	1401-06	浮標	H	径(16.5)	0.8	堤口	SD1 直壁	H-L12	七ノ水
630	1405-07	浮標	H	径18.4	1.0	湖床口	SD1 直壁	H-D10	七ノ水
631	1404-01	浮標	H	径(18.0)	0.9	堤口	SD1 直壁下部	H-L12	七ノ水
632	1401-09	浮標	H	径(16.7)	0.9	堤口	SD1 直壁	E-T8	六ノ水
633	1407-07	浮標	H	径(16.6)	1.0	堤口	SD1 Lc脚	E-W11	七ノ水
634	1437-03	浮標	H	径14.8	1.0	堤口	SD1 直壁	H-A12	七ノ水
635	1405-04	浮標	H	径13.0	0.9	堤口	SD1 直壁	H-J12	六ノ水
636	1407-05	浮標	H	径(16.6)	0.9	堤口	SD1 直壁	E-V9	六ノ水
637	1407-02	浮標	H	径13.0	0.8	堤口	SD1 直壁	H-T8	六ノ水
638	1408-02	浮標	H	径13.0	1.0	湖床口	SD1 直壁下部	H-J11	七ノ水
639	1405-04	浮標	H	径14.7	0.7	堤口	SD1 L脚	H-C11	七ノ水
640	1408-03	浮標	H	径15.4	0.8	堤口	SD1 直壁	H-C9	七ノ水
641	1437-05	浮標	H	径11.8	0.8	堤口	SD1 直壁鉛石下置	E-W13	六ノ水
642	1437-06	浮標	H	径11.7	0.8	堤口	SD1 直壁	E-V9	六ノ水
643	1464-07	浮標	H	径(12.4)	0.7	堤口	SD1 直壁	H-L12	七ノ水
644	1464-06	浮標	H	径(11.0)	0.8	堤口	SD1 L脚	H-K13	六ノ水
645	1473-08	浮標	H	径(12.6)	0.9	湖床口	SD1 直壁	H-111	七ノ水
646	1409-05	浮標	H	径(12.2)	1.3	堤口	SD1 直壁	H-A9	七ノ水
647	1464-08	浮標	H	径(18.6)	1.0	堤口	SD1 直壁	H-H9	七ノ水
648	1464-02	浮標	H	径(17.9)	0.8	堤口	SD1 直壁	E-Y10	六ノ水
649	1404-03	浮標	H	径(17.0)	0.6	堤口	SD1 直壁	E-S12	六ノ水
650	1406-06	浮標	H	径(19.6)	0.8	堤口	SD1 不明	E-X9	六ノ水
651	1409-08	浮標	H	径(14.0)	0.8	堤口	SD1 直壁	H-A10	七ノ水
652	1405-12	浮標	H	径(11.6)	0.7	堤口	SD1 直壁	H-Y10	六ノ水
653	1403-02	浮標	H	径(13.4)	0.5	堤口	SD1 Lb脚	E-T14	六ノ水
654	1403-04	浮標	H	径(15.4)	0.8	湖床口	SD1 直壁	E-U13	七ノ水
655	1406-04	浮標	H	径(16.4)	0.7	堤口	SD1 直壁	E-Y9	七ノ水
656	1404-04	浮標	H	径(16.0)	0.7	堤口	SD1 直壁	H-M13	六ノ水
657	1403-13	浮標	H	径(11.7)	0.8	堤口	SD1 直壁	H-L12	七ノ水
658	1401-04	浮標	H	径(11.7)	0.7	堤口	SD1 直壁	E-Y10	六ノ水
659	1438-06	浮標	H	径(16.1)	0.7	堤口	SD1 直壁下部	H-K11	七ノ水
660	1403-09	浮標	H	径(16.1)	0.8	堤口	SD1 直壁上部	H-B11	七ノ水
661	1403-10	浮標	H	径(15.2)	0.8	堤口	SD1 直壁	H-A11	七ノ水

観測番号	測 種	分 類	公 差	経 度	水 深	潮 位	地 区	新 機	備 考
662	1463-11	浮標	H	径(15.8)	0.8	SD1 目録	H-A10	スズ	
663	1463-12	浮標	H	径(16.6)	0.6	SD1 目録	E-Q10	セ/沖風	水釘直り
664	1461-05	浮標	H	径(14.5)	0.8	SD1 目録	E-V11	セ/沖	
665	1469-08	浮標	H	径(15.6)	0.7	SD1 目録	E-V10	サ/サ	
666	1463-09	浮標	H	径(16.0)	0.7	SD1 目録	E-V10	セ/沖	月当たり観音り
667	1469-01	浮標	H	径(16.8)	0.7	SD1 目録5枚	H-C10	セ/沖	
668	1463-01	浮標	H	径(14.8)	0.7	SD1 目録	E-R11	セ/沖	
669	1464-10	浮標	H	径(14.0)	0.7	SD1 目録	H-O8		表面一部焼付
670	1463-03	浮標	H	径(17.0)	0.7	SD1 目録5枚	H-C10		
671	1463-05	浮標	H	径(13.8)	0.7	SD1 目録	E-Y9	セ/沖	
672	1471-14	浮標	H	径(16.4)	0.9	SD1 目録	E-Y10	セ/沖	
673	1463-06	浮標	H	径(12.0)	0.9	SD1 目録	H-L11	セ/沖	
674	1471-09	浮標	H	径(13.6)	0.5	SD1 目録	H-M11	サ/サ	
675	1471-08	浮標	H	径(16.4)	0.6	SD1 目録	H-A9	スズ	
676	1471-10	浮標	H	径(18.4)	0.6	SD1 目録	H-A11	セ/沖	
677	1471-09	浮標	H	径(18.4)	0.7	SD1 目録	E-Y12	セ/沖	
678	1471-11	浮標	H	径(16.4)	0.6	SD1 目録	E-V12	セ/沖	
679	1471-12	浮標	H	径(16.4)	0.8	SD1 目録	H-A12	セ/沖風	
680	1471-13	浮標	H	径(16.4)	0.4	SD1 目録	H-A9	セ/沖	水釘直り
681	1471-15	浮標	H	径(16.0)	0.7	SD1 目録	H-C11	セ/沖風	
682	1471-07	浮標	H	径(12.6)	0.8	SD1 目録	H-A12	セ/沖	
683	1469-03	浮標	H	径(23.3)	1.6	SD1 目録	E-X12	セ/沖	
684	1469-10	浮標	H	径(15.2)	0.6	SD1 目録	H-I11	セ/沖	
685	1467-08	浮標	H	径(14.0)	0.6	SD1 目録	H-P9	セ/沖	
686	1473-18	浮標	H	径(13.2)	0.7	SD1 目録	H-I12	セ/沖風	
687	1462-11	浮標	H	径(16.4)	0.6	SD1 目録	H-K12	セ/沖	表面一部焼付 観測データが不明
688	1467-04	浮標	H	径(14.8)	0.6	SD1 目録	E-S9	セ/沖	工具直り
689	1467-03	浮標	H	径(17.0)	1.0	SD1 目録	E-V12	スズ	
690	1467-01	浮標	H	径(6.0)	0.8	SD1 目録	H-J12	セ/沖風	
691	1465-08	浮標	H	径(16.4)	0.7	SD1 目録	H-I11	セ/沖	表面の腐蝕丁寧
692	1470-06	浮標	H	径(15.6)	0.6	SD1 目録	E-W12	セ/沖	
693	1467-06	浮標	H	径(18.4)	0.8	SD1 目録	H-C10	スズ	
694	1462-03	浮標	H	径(16.4)	0.6	SD1 目録	H-A10	セ/沖	
695	1462-01	浮標	H	径(15.6)	1.0	SD1 目録	E-Y11	ブ/沖	
696	1462-01	浮標	H	径(16.8)	0.7	SD1 目録	H-I09	セ/沖	月当たり観音り

観測 番号	火源番号	器 種			直径(cm)		水取方等	番 位	地 区	特 徴	備 考
		分類	全径	深さ	深さ						
697	1470-03	容器	II	径(18.0)	0.7	延目	SD1 目録上部	H-C10	七/沖		
698	1470-04	容器	H	径(18.6)	0.7	延目	SD1 目録	H-B11	七/沖		
699	1482-02	容器	H	径(15.8)	0.8	延目	SD1 目録上部	H-111	七/沖		
700	1482-09	容器	H	径(16.0)	0.8	延目	SD1 目録	H-A12	七/沖		
701	1470-09	容器	H	径(16.4)	0.5	延目	SD1 目録	E-T10	七/沖	破壊により変む	
702	1482-08	容器	H	径(14.4)	0.7	延目	SD1 目録	H-M11	七/沖		
703	1482-04	容器	H	径(17.2)	0.7	延目	SD1 目録	E-Q10	七/沖		
704	1482-05	容器	H	径(17.6)	0.8	延目	SD1 目録	H-D10	七/沖	刃当たり痕有り	
705	1468-06	容器	H	径(16.0)	0.5	延目	SD1 目録	E-V10	七/沖		
706	1468-08	容器	II	径(16.0)	0.8	延目	SD1 目録	H-A11	七/沖		
707	1468-11	容器	H	径(15.2)	0.6	延目	SD1 目録	E-Y10	七/沖		
708	1470-02	容器	H	径(15.6)	0.7	延目	SD1 目録	H-B10	七/沖		
709	1482-12	容器	H	径(16.8)	0.9	延目	SD1 目録	E-V11	七/沖		
710	1340-04	容器	H	径(13.8)	0.6	延目	SD1 左序配石	H-K9	七/沖	工具痕有り	
711	1464-09	容器	H	径(16.0)	0.8	延目	SD1 目録	E-U13	スチ		
712	1465-09	容器	H	径(15.6)	0.6	延目	SD1 目録	H-M11	七/沖		
713	1458-09	容器	H	径(16.0)	1.2	延目	SD1 目録	H-A11	七/沖		
714	1466-10	容器	H	径(19.2)	0.8	延目	SD1 目録	H-D10	七/沖		
715	1469-04	容器	H	径(26.0)	1.7	延目	SD1 目録下部	H-J13	七/沖	裏面一部欠け	
716	1468-04	容器	H	径(5.5)	0.6	延目	SD1 目録上部	H-D9	七/沖		
717	1466-03	容器	H	径(16.4)	0.7	延目	SD1 目録	E-S9	七/沖		
718	1466-06	容器	H	径(17.8)	0.6	延目	SD1 目録	E-T10	七/沖	刃当たり痕有り	
719	1466-03	容器	H	径(16.8)	0.8	延目	SD1 I 凸溝	E-V12	スチ		
720	1469-12	容器	H	径(17.8)	0.7	延目	SD1 目録	E-V10	七/沖		
721	1471-12	容器	H	(11.2)	(5.3)	延目	SD1 目録	H-A9	七/沖	裏面一部欠け	
722	1466-13	容器	H	径(13.6)	0.8	延目	SD1 目録	H-A10	スチ		
723	1463-07	容器	H	径(14.0)	0.7	延目	SD1 目録	H-J11	七/沖		
724	1469-09	容器	H	径(16.0)	0.7	延目	SD1 目録	H-M11	七/沖		
725	1469-11	容器	H	径(15.2)	0.7	延目	SD1 目録	E-P9	七/沖		
726	1471-09	容器	H	径(16.8)	0.5	延目	SD1 目録	E-S11	七/沖		
727	1471-09	容器	H	径(16.6)	0.5	延目	SD1 目録上部	H-D9	七/沖		
728	1471-03	容器	H	径(12.6)	0.6	延目	SD1 目録	H-M11	スチ		
729	1466-01	容器	H	径(15.4)	0.7	延目	SD1 目録上部	H-C10	七/沖	裏面一部欠け	

製件 番号	実測番号	器 種	分 類	正 量 (cm)		型 号	水 口 等	種 代	地 区	備 注	備 考
				全長	幅						
730	1488-07	油物	H	径(15.4)	0.8	底口	SD1 18層	E-V10	本邦		
731	1488-08	油物	II	径(15.2)	0.7	底口	SD1 18層	E-X-Y9-10	本邦	表面塗 青銅板付	
732	1470-10	油物	H	径(17.2)	0.7	底口	SD1 18層上部	H-D9	本邦		
733	1470-08	油物	H	径(17.6)	0.7	底口	SD1 18層	E-T8	本邦		
734	1488-07	油物	H	径(17.0)	0.8	逆底口	SD1 18層	E-Y10	本邦		
735	1488-08	油物	II	径(16.6)	0.5	底口	SD1 18層	E-P9	本邦		
736	1462-04	油物	H	径(16.8)	0.8	底口	SD1 18層	E-R11	本邦		
737	1482-10	油物	H	径(16.8)	0.6	逆底口	SD1 18層	H-A9	本邦	工具用有り	
738	1470-11	油物	H	径(14.6)	0.7	逆底口	SD1 18層	E-U9	本邦		
739	1470-04	油物	H	径(16.0)	0.7	逆底口	SD1 18層	E-N9	本邦		
740	1488-10	油物	H	径(16.8)	0.6	底口	SD1 18層上部	H-E9	本邦		
741	1488-12	油物	H	径(15.2)	0.7	底口	SD1 18層	E-X-Y9-10	本邦		
742	1470-01	油物	H	径(16.0)	0.6	底口	SD1 18層上部	H-I11	本邦		
743	1460-02	油物	II	径(17.2)	0.7	底口	SD1 18層	E-X-Y9	本邦	中央部焼き穿孔	
744	1460-01	油物	H	径(14.8)	1.2	逆底口	SD1 18層	E-S13	本邦	中央部焼き穿孔	
745	1481-02	油物	H	径(15.0)	0.7	底口	SD1 18層	E-N9	本邦	中央部焼き穿孔	
746	1458-08	油物	II	径(16.8)	0.8	底口	SD1 18層	E-Q10	本邦	中央部焼き穿孔	
747	1458-07	油物	H	径(17.0)	1.0	底口	SD1 18層	E-V10	本邦	中央部焼き穿孔	
748	1458-10	油物	H	径(16.4)	0.7	底口	SD1 18層	E-V10	本邦	中央部焼き穿孔	
749	1458-02	油物	II	径(16.8)	0.7	底口	SD1 18層上部	H-I11	本邦	中央部焼き穿孔	
750	1460-06	油物	H	径(16.4)	1.1	逆底口	SD1 18層	H-D9	本邦	中央部焼き穿孔	
751	1460-07	油物	H	径(16.0)	0.7	逆底口	SD1 18層	E-X11	本邦	中央部焼き穿孔	
752	1460-08	油物	II	径(17.0)	1.0	逆底口	SD1 18層	H-A11	本邦	中央部焼き穿孔	
753	1468-01	油物	H	径(17.4)	0.9	底口	SD1 18層	E-Y11	本邦	中央部焼き穿孔	
754	1465-02	油物	II	径(16.2)	0.5	底口	SD1 18層	E-T10	本邦	中央部焼き穿孔	
755	1458-01	油物	H	径(19.2)	0.7	底口	SD1 18層	H-R9	本邦	中央部焼き穿孔	
756	1460-04	油物	II	径(18.0)	0.8	底口	SD1 18層	E-W11	本邦	中央部焼き穿孔	
757	1460-03	油物	H	径(17.0)	1.0	逆底口	SD1 18層	E-Y11	本邦	中央部焼き穿孔	
758	1417-08	油物	II	18.2 (3.7)	0.9	逆底口	SD1 18層	E-T14	本邦	中央部焼き穿孔	
759	1485-01	油物	II	径(16.7)	0.8	底口	SD1 18層下部	E-S8	本邦	中央部焼き穿孔	
760	1460-03	油物	H	径(18.0)	1.0	底口	SD1 18層上部	H-D9	本邦	中央部焼き穿孔	
761	1458-06	油物	H	径(16.0)	0.7	底口	SD1 18層	E-T10	本邦	中央部焼き穿孔	
762	1458-03	油物	II	径(14.4)	0.6	底口	SD1 18層	H-M12	本邦	中央部焼き穿孔	
763	1461-08	油物	II	径(14.6)	0.9	底口	SD1 18層	E-W11	本邦	中央部焼き穿孔	

製品 番号	実測値(φ)	器 種	分類	全長 (mm)	重量 (g)	寸法 幅	寸法 深さ	不収内等	備 位	地 区	研 削	備 考
766	1458-04	容器	H	径(11.0)		0.8		SD1 目層	H-A11	ヒノキ	中央部材層による穿孔	
765	1461-01	容器	H	径(12.9)		0.9		SD1 目層	H-B9	ヒノキ	表面一部だけ中央部材層による穿孔	
766	1471-17	容器	H	(14.7)	(6.1)	0.8		SD1 目層	E-X9	ヒノキ	内部による穿孔 万当たりの値有り	
767	1472-03	容器	不明	(26.5)	(9.3)	1.0		SD1 1層	H-C11	スギ	内部による穿孔	
768	1473-01	容器	不明	(37.1)	(11.6)	1.5		SD1 目層	H-C10	ヒノキ	工具痕有り	
769	1475-01	容器	不明	径16.8	高さ(6.6)	0.2		SD1 1層	H-B8	ヒノキ	線痕有り 葉挿し痕	
770	1341-03	容器	112	径(16.0)			高さ(1.5)	SD1 目層	H-L12	ヒノキ	葉挿し痕	
771	1476-05	容器	不明	径不明	高さ(3.4)	0.25		SD1 目層	E-X10	ヒノキ	葉挿し痕	
772	1476-01	容器	不明	径25.8	高さ(9.0)	0.3		SD1 目層	H-I10	ヒノキ	葉挿し痕	
773	1475-05	容器	不明	径15.6	高さ(9.1)	0.3		SD1 目層	不明		ヒノキ	葉挿し痕
774	1352-01	容器	容器	26.6	16.7	0.9		SD1 目層	H-B11	スギ	二又部と方眼部の間に当たりの値有り	
775	375-04	容器	容器	27.0	(9.6)	1.2		SD1 目層下部	E-W12	スギ		
776	1352-05	容器	容器	26.3	(7.9)	1.1		SD1 目層下部	H-H9	ヒノキ		
777	1405-05	容器	容器	31.2	9.5	1.0		SD1 目層	E-Y10	ヒノキ		
778	385-05	容器	容器	26.7	5.0	4.3		新材材出し	E-X10	ヒノキ	木釘 葉挿し痕	
779	385-04	容器	その他	(20.1)	高さ2.4			芯材材出し	E-U12	クロマツ	コア状容壁の把手小	
780	377-06	容器	その他	(20.0)	8.0	3.2		新材材出し	E-O9	アブラナシ	ほぼ全面抜け 把手小	
781	381-01	容器	その他	27.3	6.8	2.3		半葉材出し	E-Q10		重	
782	402-02	容器	その他	44.1	(10.2)	2.5		SD1 目層	E-U12	スギ	板裏一部だけ 葉ノ尾物部の可能性有り	
783	681-01	家具	葉挿し型の葉	84.9	47.2	3.0		SD1 目層上面	E-U10		摘取手法 工具痕有り	
784	1038-01	家具	葉挿し型の葉	93.9	(31.7)	3.2		SD1 目層	E-Y10		摘取手法 脚一部脱落	
785	105-01	家具	葉挿し型の葉	84.9	(46.9)	2.2		SD1 目層	H-N9	コウヤクナ	摘取手法 脚一部脱落	
786	1350-05	家具	葉挿し型の葉	(25.5)	(16.8)	2.2		SD1 目層	H-L11	ヒノキ	摘取手法	
787	1350-01	家具	葉挿し型の葉	(20.7)	(13.3)	2.0		SD1 目層	H-D9	ヒノキ	摘取手法 工具痕有り	
788	105-01	家具	葉挿し型の葉	(38.0)	(41.6)	2.0		SD1 目層	E-N8	ヒノキ	摘取手法 工具痕有り	
789	387-03	家具	葉挿し型の葉	(18.7)	(11.1)	2.8		SD1 目層	E-W13			
790	387-02	家具	葉挿し型の葉	(15.0)	12.5	2.1		SD1 不明	不明			
791	1349-02	家具	葉挿し型の葉	高さ(19.9)	36.7	2.4		SD1 目層	H-A10	ヒノキ	葉挿し	
792	1349-01	家具	葉挿し型の葉	高さ(22.6)	(37.3)	2.1		SD1 目層	E-Y9	ヒノキ		
793	379-05	家具	葉挿し型の葉	11.0	6.9	1.6		SD1 目層	E-U13	スギ		
794	1349-04	家具	葉挿し型の葉	高さ(6.9)	(12.3)	1.8		SD1 目層	E-Y11	ヒノキ		
795	1349-03	家具	葉挿し型の葉	高さ(7.9)	(10.5)	1.7		SD1 目層	H-C10	ヒノキ		
796	387-01	家具	葉挿し型の葉	脚 37.6	(12.2)	2.3		SD1 目層	E-X10			
797	1350-03	家具	葉挿し型の葉	(9.8)	31.0	1.9		SD1 目層下部	H-L13	ヒノキ	工具痕有り	

報告番号	発掘番号	遺 積	分類	全長	幅	高さ(cm)	水取の層	層位	地区	副標	備考
796	375-06	道具	脚?	27.7	(5.4)	1.1	SD1 面以上層	E-M5	E-M5	E-M5	面と平らな部分の表面 全が風雨侵食 工具痕有り
799	1347-06	道具	漆器合蓋の蓋	7.1	30.2	0.8	SD1 面以上層	H-E10	H-E10		袋でない、可能性有り
800	344-03	道具	二脚形組合形小皿	(20.4)	5.8	1.6	SD1 面以上層	E-R12	E-R12	コナラ属?カガシ属	
801	1320-04	道具	二脚形組合形小皿	(22.0)	別部(11.1)	別部1.0	SD1 面以上層	H-K11	H-K11	ヒノキ	
802	1427-01	道具	二脚形組合形小皿	25.0	17.2	1.5	SD1 面以上層	H-B9	H-B9	アサノコ	裏面磨け
803	115-01	道具	鞘物棹子	(28.2)	(16.2)	高さ14.3 幅2.0 厚さ0.5	SD1 面以上層	E-T14	E-T14	コウヤナギ	全面磨け
804	1001-01	道具	鞘物棹子	46.9	(16.0)	高さ21.6 幅2.0 厚さ0.5	SD1 面以上層	H-G10	H-G10	コウヤナギ	全面磨け 断面に半円状の溝あり
805	112-01	道具	鞘物棹子	(31.0)	(12.0)	高さ16.7 幅2.0 厚さ0.5	SD1 面以上層	E-U14	E-U14	コウヤナギ	断面に方形小孔有り
806	380-03	道具	鞘物棹子	57.2	(11.4)	(2.0)	半割形出し	H-P10	H-P10		
807	1418-01	道具	鞘物棹子	(21.2)	(6.5)	2.0	SD1 面以上層	H-C9	H-C9	ヒノキ	表面磨け
808	1405-01	道具	鞘物棹子	(20.7)	23.8	3.2	SD1 面以上層	H-J11	H-J11	E-M5	
809	1382-01	道具	鞘物棹子	10.5	12.4	2.0	SD1 面以上層	H-C10	H-C10	ヒノキ	
810	1401-02	道具	鞘物棹子	(21.9)	10.8	8.2	新材形出し	H-L13	H-L13	コナラ属?カガシ属	
811	1406-01	道具	鞘物棹子	(25.6)	11.7	(4.2)	SD1 面以上層	H-C9	H-C9	コナラ属?カガシ属	
812	1418-03	道具	鞘物棹子	22.0	(6.0)	3.0	新材形出し	H-I9	H-I9	ヒノキ	中央の溝が少し膨状突起込みによる磨損
813	384-01	道具	鞘物台	59.0	(23.5)	2.4	SD1 面以上層	E-N9	E-N9		工具痕有り
814	1426-01	道具	鞘物台	43	(14.5)	3.3	SD1 面以上層	H-I10	H-I10	E-M5	断面に半円状の溝あり、断面に方形小孔あり、断面に半円状の溝あり
815	370-06	道具	鞘物台	(15.0)	4.4	1.6	SD1 面以上層	E-W10	E-W10	ヒノキ	工具痕有り
816	378-13	道具	鞘物台	(12.2)	3.8	2.7	新材形出し	E-T12	E-T12	ヒノキ	工具痕有り
817	379-06	道具	鞘物台	(23.1)	3.9	1.6	新材形出し	E-T13	E-T13	ヒノキ	工具痕有り
818	312-01	道具	鞘物台	(27.2)	(9.1)	1.8	SD1 面以上層	E-V9	E-V9	ヒノキ	
819	1419-03	道具	鞘物台	35.0	5.7	1.8	SD1 面以上層	H-F10	H-F10	ウツノ	欠損面磨け
820	1419-03	道具	鞘物台	39.1	5.5	0.9	SD1 面以上層	H-E9	H-E9	E-M5	
821	1419-01	道具	鞘物台	46.4	7.4	2.3	SD1 面以上層	H-C10	H-C10	ヒノキ	
822	002-02	武器	弓(番号)	(18.9)	太32.2		SD1 面以上層	H-G11	H-G11		遺棄者の遺物で磨損している
823	002-02	武器	弓(番号)	A	(56.2)	太23.3	SD1 面以上層	E-P9	E-P9	イヌギサ	
824	1343-03	武器	弓(番号)	A	(50.5)	1.5	SD1 面以上層	H-I11	H-I11		
825	002-04	武器	弓(番号)	A	(24.6)	太31.9	SD1 面以上層	E-S10	E-S10	イヌギサ	
826	1343-01	武器	弓(番号)	A	(48.0)	1.7	SD1 面以上層	H-M13	H-M13		
827	1343-02	武器	弓(番号)	A	(49.0)	1.8	SD1 面以上層	H-C10	H-C10		
828	1346-02	武器	弓(番号)	B	(33.0)	1.9	SD1 面以上層	H-C10	H-C10		
829	1343-03	武器	弓(番号)	B	(13.5)	2.0	SD1 面以上層	H-A10	H-A10		
830	1394-01	武器	弓(番号)	H	(37.1)	太23.0	新材形出し	H-A11	H-A11	毛土	
831	002-01	武器	弓(番号)	C	(97.6)	太31.9	SD1 面以上層	E-V14	E-V14	イヌギサ?	

種別	発原地番号	器 種	分類	全長	法線(cm)	形状	木理の方向	部位	地区	所 産	備 考
852	1343-04	武器 両刃 武器	弓(矢?)	18.0	1.8	1.8	芯材有りなし	SD1 直層	H-C10		
853	1346-01	武器 両刃 武器	弓(矢?)	52.8	1.6	1.3	芯材有りなし	SD1 直層	H-C9		
854	002-03	武器 両刃 武器	弓(矢?)	58.4	5.5	1.9	芯材有りなし	SD1 直層	E-U14	イヌナギ	
855	310-01	武器 両刃 武器	動物の骨柄蓋				骨材有りなし	SD1 直層	E-P10	鹿木材	成層より前、本産地は北の所産地
856	1302-02	武器 両刃 武器	刀装具(把装具)	(5.9)	5.8		柄材有りなし	SD1 直層	H-B11		柄材上げ、層材に染付、層材にCの乱布?
857	1302-03	武器 両刃 武器	刀装具(柄装具)	2.1		1.0	柄材有りなし	SD1 直層	H-J11		柄材上げ、層材に染付、層材にCの乱布?
858	310-05	武器 両刃 武器	刀装具(柄装具)	3.7	(6.1)	(1.7)	柄材有りなし	SD1 直層	E-S11		
859	310-02	武器 両刃 武器	刀装具	13.2	4.6	1.1	柄材有りなし	SD1 直層	E-O10	七ノ木	
860	1344-03	武器 両刃 武器	刀装具	35.7	3.9	(1.2)	柄材有りなし	SD1 直層	H-C9		
861	1344-02	武器 両刃 武器	刀装具	(29.1)	(2.9)	(1.5)	柄材有りなし	SD1 直層	H-G-H9		
862	381-01	武器 両刃 武器	刀装具	(13.7)	2.9	0.9	柄材有りなし	SD1 直層	E-PR	ヤナギ	
863	1344-04	武器 両刃 武器	刀装具	(24.2)	(3.0)	(1.3)	柄材有りなし	SD1 直層	H-H9		
864	1302-01	武器 両刃 武器	刀装具	(58.4)	3.4	1.2	柄材有りなし	SD1 直層	H-C10	合木	
865	1303-02	武器 両刃 武器	盾	(40.5)	0.7	0.7	板目	SD1 直層	H-D10		朱砂
866	1303-03	武器 両刃 武器	盾	(32.0)		0.7	板目	SD1 直層	E-Y11		朱砂
867	1303-01	武器 両刃 武器	盾	(37.5)		0.6	板目	SD1 直層	H-H10		朱砂
868	1341-06	武器 両刃 武器	盾	(5.0)	(2.0)	(0.6)	板目	SD1 直層	H-K10		朱砂
869	1341-04	武器 両刃 武器	盾	(7.4)	(1.5)	0.7	板目	SD1 直層	E-Y12		朱砂
870	1303-04	武器 両刃 武器	盾	(15.0)	(2.2)	0.7	板目	SD1 直層	E-Y11		朱砂
871	1341-05	武器 両刃 武器	盾	(15.2)	(3.0)	0.7	板目	SD1 直層	H-D10		朱砂
872	1301-02	武器 両刃 武器	楯	24.4	13.7		動物の皮	SD1 直層	H-L13		一部焼付
873	1376-01	武器 両刃 武器	楯	(5.3(21.0))	(11.0)		動物の皮	SD1 直層	H-F10		楯部内面に黒帯
874	302-01	武器 両刃 武器	刀形	(62.3)	刃部5.0	刃部1.3	板目	SD1 直層	E-U13		コナツ葉アマガシ産
875	308-01	武器 両刃 武器	刀形	(35.7)	刃部4.6	刃部0.9	板目	SD1 直層	E-D10	六才	コナツ葉アマガシ産
876	306-06	武器 両刃 武器	刀形	(19.1)	刃部3.0	刃部1.0	板目	SD1 直層	E-X12	六才	層材層で出上
877	308-02	武器 両刃 武器	刀形	(34.4)	刃部2.6	刃部0.8	板目	SD1 直層	E-W11	七ノ木	
878	306-09	武器 両刃 武器	刀形	(16.5)	刃部2.7	刃部0.4	板目	SD1 直層	E-O9	六才	楯部に焼付
879	308-10	武器 両刃 武器	刀形	(44.6)	3.0	1.7	逆板目	SD1 直層	H-B10	六才	
880	1344-01	武器 両刃 武器	刀形	(13.0)	刃部1.7	刃部0.5	板目	SD1 直層	E-M8	六才	コナツ葉アマガシ産
881	309-07	武器 両刃 武器	刀形	(21.0)	刃部2.3	刃部1.0	板目	SD1 直層	H-R10	六才	コナツ葉アマガシ産
882	1344-06	武器 両刃 武器	刀形	(14.2)	3.0	0.8	逆板目	SD1 直層	H-B10	六才	
883	306-08	武器 両刃 武器	刀形	(16.3)	刃部4.7	刃部0.5	板目	SD1 直層	E-O10	七ノ木	成層に染付
884	001-05	武器 両刃 武器	刀形	(21.1)	刃部1.7	刃部2.4	板目	SD1 直層	E-N9	七ノ木	成層に染付
885	308-03	武器 両刃 武器	刀形	(32.9)	刃部3.1	刃部1.7	板目	SD1 直層	E-L9	六才	成層に染付

警備番号	実施番号	器 種	分類	位置(cm)			木杭の等	種 位	地 区	樹 種	備 考
				全長	幅	高さ					
8665	305-04	架設具	C1	(64.0)	1/1002.2	1/1000.7	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8667	305-02	架設具	C1	(51.8)	1/1002.1	1/1000.7	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8668	302-05	架設具	C1	(60.3)	1/1002.4	1/1000.7	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8669	304-06	架設具	C1	(60.0)	1/1002.0	1/1000.6	指接目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8700	302-03	架設具	C1	56.5	1/1002.0	1/1000.7	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8711	001-04	架設具	C1	54.7	1/1002.3	1/1000.6	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8721	001-03	架設具	C1	32.3	1/1001.5	1/1000.6	透板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	スギ	武器形集中区
8723	001-14	架設具	C1	(49.0)	1/1002.1	1/1000.6	透板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8741	302-04	架設具	C1	31.9	1/1002.9	1/1001.0	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8751	305-03	架設具	C1	50.9	1/1002.4	1/1000.4	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8761	305-04	架設具	C1	50.3	1/1001.9	1/1000.4	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	スギ	武器形集中区
8771	001-12	架設具	C1	(49.8)	1/1001.6	1/1000.5	透板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	スギ	武器形集中区
8781	305-03	架設具	C1	(44.4)	1/1002.2	1/1000.5	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8791	305-01	架設具	C1	(45.7)	1/1002.0	1/1000.5	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8801	305-04	架設具	C1	(40.7)	1/1002.5	1/1000.7	透板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-O8	ヒノキ	武器形集中区
8811	001-10	架設具	C1	(38.3)	1/1001.9	1/1000.4	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8821	001-16	架設具	C1	(10.2)	1/1001.5	1/1000.6	-	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	タラシ	武器形集中区
8831	001-04	架設具	C1	(23.0)	1/1002.4	1/1000.8	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8841	001-19	架設具	C1	(40.8)	1/1001.8	1/1000.5	透板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	スギ	武器形集中区
8851	001-11	架設具	C1	(31.9)	1/1002.1	1/1000.5	板目	SD1 目下下部～目上端上端	E-N9	ヒノキ	武器形集中区
8861	307-04	架設具	C2	62.0	1/1002.2	1/1001.3	板目	SD1 目下	E-S13	ヒノキ	
8871	302-02	架設具	D	59.7	1/1003.1	1/1001.4	板目	SD1 石積併条	E-V9	コナラ属7カガシ属属	奇石松岡玉と併条
8881	329-04	架設具	C1	(52.3)	1/1005.2	1/1001.3	透板目	SD1 目下	E-M8	スギ	刀形でない可能性有り
8891	309-09	架設具	C1	(37.8)	1/1003.5	1/1001.8	透板目	SD1 目下	E-T-U12	スギ	
8911	309-04	架設具	C1	(36.5)	1/1003.3	1/1001.5	板目	SD1 目下	E-T13	スギ	
8921	309-01	架設具	C1	(19.7)	1/1002.2	1/1001.2	板目	SD1 目下	E-T12	スギ	
8931	1411-06	架設具	C1	(36.0)	0.8	0.8	透板目	SD1 目下下部	H-U10	ヒノキ	
8941	307-08	架設具	C1	(36.0)	1/1003.5	1/1001.6	透板目	SD1 目下	E-M8	ヒノキ	
8951	1345-02	架設具	C1	(31.8)	1/1003.1	1/1001.5	板目	SD1 目下	H-J11	ヒノキ	木刀の存在か、ただし仕上げは粗
8961	080-01	架設具	C1	(17.0)	1/1001.4	4.8	2.3	透板目	SD1 目下	E-S13	支那の可能性有り
8971	307-03	架設具	C1	(21.4)	1/1003.7	1/1001.0	板目	SD1 IV層(透子層)	Q11	ヒノキ	支那の可能性有り
8981	304-08	架設具	C1	(22.4)	1/1001.8	1/1001.6	透板目	SD1 目下	E-N9	スギ	武器形集中区の可能性有り
8991	001-09	架設具	C1	(36.7)	1/1002.3	1/1001.6	透板目	SD1 目下	E-N9	スギ	武器形集中区の可能性有り

報告 番号	実測番号	器 情			分類		流量 (cm ³ /min)		木皮の等	橋 位	壁 区	耐 性	備 考
		形状	材質	形状	材質	長さ	幅	高さ					
900	001-17	配管	武蔵系	扇形	扇形	(12.7)	分節2.6	分節0.6	逆圧口	SD1 田舎	E-N8	スチ	武蔵系中區の可能性有り
901	001-08	配管	武蔵系	扇形	扇形	(13.8)	分節2.2	分節0.5	逆圧口	SD1 田舎	E-N9	スチ	武蔵系中區の可能性有り
902	001-01	配管	武蔵系	扇形	扇形	(13.8)	分節2.5	分節0.5	堰目	SD1 田舎	E-N8	セパ	武蔵系中區の可能性有り
903	1342-06	配管	武蔵系	扇形	扇形	(6.3)	(4.2)	1.2	堰目	SD1 田舎下部	H-H10	セパ	
904	372-14	配管	武蔵系	扇形	扇形	(10.8)	(3.6)	0.8	堰目	SD1 田舎	E-R12	セパ	
905	1345-06	配管	武蔵系	扇形	扇形	(14.5)	分節2.1	分節1.0	堰目	SD1 田舎	H-C9		
906	309-02	配管	武蔵系	扇形	扇形	(20.1)	分節1.8	分節0.6	堰目	SD1 田舎	E-T13	セパ	
907	1348-08	配管	武蔵系	扇形	扇形	(10.3)	分節2.7	0.7	堰目	SD1 田舎	H-C10	スチ	
908	1345-04	配管	武蔵系	扇形	扇形	(24.0)	分節4.0	分節1.0	逆圧口	SD1 田舎	H-G9		
909	1345-07	配管	武蔵系	扇形	扇形	(16.0)	分節2.5	分節0.4	逆圧口	SD1 田舎下部	H-H11		
910	1346-05	配管	武蔵系	扇形	扇形	(28.3)	分節2.3	分節1.8	逆圧口	SD1 田舎下部	H-M12		扇形の可能性有り
911	374-01	配管	武蔵系	扇形	扇形	(49.5)	2.6	2.3	堰目	SD1 田舎	E-S7	スチ	扇形の可能性有り
912	1348-12	配管	武蔵系	扇形	扇形	(16.8)	1.2	0.3	逆圧口	SD1 田舎	E-V10	セパ	
913	001-07	配管	武蔵系	扇形	扇形	103.3	分節2.5	分節0.4	堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
914	303-03	配管	武蔵系	扇形	扇形	(39.8)	分節2.9	分節0.6	堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
915	304-02	配管	武蔵系	扇形	扇形	(59.6)	分節2.5	分節0.4	堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
916	304-01	配管	武蔵系	扇形	扇形	(57.0)	輸部A3.1.1		堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
917	304-04	配管	武蔵系	扇形	扇形	(57.6)	分節1.7	分節0.5	堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
918	303-04	配管	武蔵系	扇形	扇形	(51.7)	分節2.0	分節0.5	逆圧口	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
919	303-05	配管	武蔵系	扇形	扇形	(45.9)	分節2.4	分節0.5	逆圧口	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
920	304-03	配管	武蔵系	扇形	扇形	(39.0)	分節2.7	分節0.4	堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
921	001-05	配管	武蔵系	扇形	扇形	(57.7)	分節3.1	分節0.6	逆圧口	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	スチ	武蔵系中區
922	303-05	配管	武蔵系	扇形	扇形	(10.3)	分節1.6	分節0.3	堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
923	303-06	配管	武蔵系	扇形	扇形	(12.7)	輸部A3.0.0		堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
924	1345-08	配管	武蔵系	扇形	扇形	(23.7)	分節2.2	分節0.7	逆圧口	SD1 田舎下部-田舎上部	H-E10		武蔵系中區
925	304-07	配管	武蔵系	扇形	扇形	(28.8)	分節1.9	分節0.3	堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
926	303-01	配管	武蔵系	扇形	扇形	(32.0)	分節1.9	分節0.4	堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	スチ	武蔵系中區
927	303-02	配管	武蔵系	扇形	扇形	(41.3)	分節2.1	分節0.3	堰目	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
928	303-07	配管	武蔵系	扇形	扇形	(49.8)	輸部A3.1.0		逆圧口	SD1 田舎下部-田舎上部	E-N9	セパ	武蔵系中區
929	306-08	配管	武蔵系	扇形	扇形	(24.1)	分節1.3	分節1.8	堰目	SD1 田舎	E-V9	スチ	
930	1348-02	配管	武蔵系	木製	木製	a	10.2	分節1.1	逆圧口	SD1 田舎	H-H11		アソシエイト管
931	381-03	配管	武蔵系	木製	木製	a	(14.3)	実31.4	逆圧口	SD1 田舎	E-T10	ステン	
932	1348-01	配管	武蔵系	木製	木製	a	13.2	分節(1.3)	逆圧口	SD1 田舎	E-Y10	ステン	
933	1348-16	配管	武蔵系	木製	木製	c	3.6	実32.2	新材の出し	SD1 田舎	H-D10	ステン	鉄山 源地付

機号 番号	実用番号	新 様	分 類			寸法(cm)		厚さ	木取等の 内容	層 位	建 氏	組 種	備 考
			分類	全長	幅	高さ							
934	307-01	配電具	木櫃	b	(17.0)	幅部太31.3		新材作り出し	SD1 田層	E-T13	ツクヤナキ		
935	307-06	配電具	木櫃	b	(23.8)	幅部太31.7		新材作り出し	SD1 田層	E-Q	ヒノキ	表蓋一部撤去	
936	1346-06	配電具	木櫃	b	(9.2)	太32.0		新材作り出し	SD1 田層	H-A10			
937	307-06	配電具	木櫃	b	(12.7)	幅部太31.8		新材作り出し	SD1 田層	E-V12	ヤチノ葉		
938	1346-06	配電具	木櫃	b	(29.6)	太32.0		新材作り出し	SD1 田層	H-Y10			
939	307-07	配電具	木櫃	b	(43.3)	幅部太22.0		新材作り出し	SD1 田層	E-U13	ヒノキ		
940	306-07	配電具	木櫃	b	(19.3)	幅部太1.7	月部1.2	進目	SD1 田層	E-U13	ヒノキ		
941	1344-07	配電具	刀子形		(14.1)	月部2.2	月部1.8	板目	SD1 田層下部	H-L11			
942	1345-08	配電具	刀子形		(18.9)	月部1.9	月部1.2	口	SD1 田層	H-A11			
943	306-06	配電具	その他		(23.7)	3.5	1.5	板目	SD1 田層	E-U10	ヒノキ	刀形もしくは支那か	
944	311-06	配電具	その他		(46.8)	2.1	1.5	進目	SD1 田層	E-Q9	ヒノキ		
945	324-08	配電具	武蔵形		月部(24.3)	月部3.5	月部1.0	板目	SD1 田層	E-N8	ヒノキ	穴掘部撤去	
946	309-08	配電具	武蔵形		(34.5)	3.5	0.8	板目	SD1 田層	E-N8	ヒノキ	表蓋一部撤去	
947	327-07	配電具	武蔵形		(28.2)	月部4.7	月部1.0	板目	SD1 田層	E-N8	スギ	穴掘部撤去	
948	324-04	配電具	武蔵形		月部(21.0)	月部4.6	月部1.8	板目	SD1 田層	E-N8	スギ	表蓋一部撤去	
949	1345-08	配電具	武蔵形		(32.0)	2.1	1.1	進目	SD1 田層下部	H-111			
950	371-01	配電具	その他		(22.4)	3.5	1.5	板目	SD1 田層	E-Q8	ヒノキ		
951	307-08	配電具	武蔵形		(17.0)	月部3.2	月部0.9	板目	SD1 田層	E-V9	スギ		
952	1340-08	配電具	形代		16.5	3.1	1.4	板目	SD1 田層下部	H-C9			
953	1347-07	配電具	形代		(6.1)	(11.2)	0.6	進目	SD1 田層	H-E10			
954	1308-07	配電具	形代		16.3	2.4	1.9	新材作り出し	SD1 田層	H-A11	ヒノキ		
955	375-06	配電具	形代		(30.0)	(5.6)	0.9	進目	SD1 田層	E-T11	ヤナギ		
956	312-03	配電具	形代		16.6	2.9	0.5	板目	SD1 田層	E-Q11	ヒノキ	板形の可能性も有り	
957	372-03	配電具	形代		(13.7)	2.8	0.8	進目	SD1 田層	E-T13	スギ	板形の可能性も有り	
958	1347-08	配電具	形代		(5.5)	(18.1)	0.8	板目	SD1 田層	E-Y10			
959	385-06	配電具	形代		26.4	10.2	2.5	口	SD1 田層下部	E-T14	ツクヤナギカサノ葉		
960	1340-01	配電具	形代		10.7	2.7	高31.7	新材作り出し	SD1 田層	H-J9	ヒノキ		
961	308-03	配電具	形代		20.8	3.2	高31.6	新材作り出し	SD1 田層	E-X10	ヒノキ	金網撤去	
962	1369-06	配電具	形代		(22.4)	(4.5)	高31.5	新材作り出し	SD1 田層	H-J10	ヒノキ		
963	372-11	配電具	形代		6.6	1.6	0.3	進目	SD1 田層	E-T13	ヒノキ		
964	370-07	配電具	形代		(13.6)	2.1	0.8	進目	SD1 田層	E-U9	ヒノキ		
965	1340-11	配電具	横置形		10.9	太32.6		芯内作り出し	SD1 田層	H-B8			
966	308-01	配電具	圓筒形		35.0	太32.8		芯内作り出し	SD1 田層	E-T9	イヌギ	部留撤去 下部を状況に加工	
967	1363-02	配電具	笠形		幅太26.4	高3(6.3)		幅太20.0	SD1 田層下部	H-D9	ツ		

標準 番号	規格	器 種	分 類	寸法(mm)			材 質	備 考	
				全長	幅	厚さ			
968	372-04 振配具	形代	馬形?	15.9	2.9	0.6	SD1 口皿	E-N8	馬形の可能も有り
969	379-01 振配具	形代	馬形?	(27.0)	(3.0)	1.1	SD1 口皿	E-N9	馬形の可能も有り
970	1363-04 振配具	形代	馬形?	(27.9)	(7.3)	(2.3)	SD1 口皿	H-H10	馬形の可能も有り
971	1363-06 振配具	形代	馬形?	26.1	(7.8)	2.4	SD1 口皿	H-H10	馬形の可能も有り
972	1363-08 振配具	形代	馬形?	(29.2)	(6.6)	(2.0)	SD1 口皿	H-G9	馬形の可能も有り
973	310-04 振配具	形代	輪形木製品	(15.4)			SD1 口皿	E-S13	固定仕上げ 固定品外列に未器
974	1301-04 振配具	形代	なしば形	36.6	(10.4)	1.6	SD1 口皿	H-H9	固定品の形
975	1347-04 振配具	新市		36.1	3.1	0.4	SD1 口皿	H-L11	
976	1340-07 振配具	彦井		19.7	4.2	0.3	SD1 口皿	H-A9	
977	101-01 振器	琴	琴身	a (132.4)	(12.3)	2.3	SD1 口皿	E-T11	固定品は固定品止止 固定品は固定品止止
978	032-02 振器	琴	琴身	c (129.1)	(9.2)	1.4	SD1 口皿	E-U13	表面一部抜け 本機と本釘による接合
979	384-01 振器	琴	琴身	b (68.1)	18.6	1.3	SD1 口皿	E-P9	本釘は振器による接合 塵材裏面での出止
980	1011-01 振器	琴	琴身	a (19.3)	(12.3)	2.5	SD1 口皿	H-G10	一部抜け 本機と本釘による接合
981	061-01 振器	琴	琴身	090.8	17.2	高53.3	SD1 口皿	E-P11	一部抜け 固定品止止による接合の可能も有り
982	1301-01 振器	琴	琴身	a (17.0)	4.9	0.6	SD1 口皿	H-H9	小型の穴開
984	392-02 振器	琴	琴身	高52.2	(4.8)	1.2	SD1 口皿	H-C10	底板がはめ込みタイプ
985	1348-09 振器	脚板木製品	琴	(11.5)	2.0	0.8	SD1 口皿	E-X12	
986	310-03 振器	脚	琴	4.9	(9.0)	1.0	SD1 口皿	E-P8	同様に着着部 脚板設置の可能性も有り
987	372-13 振器	脚	脚	(2.8)	6.6	1.0	SD1 口皿	E-V10	固定品
988	337-01 振器	下駄	下駄	A1 23.1	10.5	高52.7	SD1 口皿	E-V10	固定品
989	1360-01 振器	下駄	下駄	A2 (20.0)	8.3	高53.7	SD1 口皿	H-E9	表面一部抜け 着口大きい体開き
990	1367-01 振器	下駄	下駄	A2 (22.2)	(6.2)	高53.2	SD1 口皿	H-K11	一部抜け
991	1354-02 振器	下駄	下駄	A2 25.9	(10.5)	高54.2	SD1 口皿	H-G8	
992	1356-04 振器	下駄	下駄	A2 (21.1)	(10.0)	高54.5	SD1 口皿	H-B9	
993	317-04 振器	下駄	下駄	A2 (17.4)	(8.4)	高53.6	SD1 口皿	E-T9	
994	308-04 振器	下駄	下駄	A3 23.6	(4.9)	高52.3	SD1 口皿	E-U13	
995	1368-04 振器	下駄	下駄	A3 (18.1)	(4.4)	高52.3	SD1 口皿	H-C9	
996	1360-02 振器	F駄	F駄	A3 (21.5)	12.0	高53.4(4.5)	SD1 口皿	H-G9	
997	1338-02 振器	下駄	下駄	A3 22.6	(7.9)	高53.1	SD1 口皿	H-H9	
998	1359-01 振器	下駄	下駄	A3 (22.1)	10.4	高52.4	SD1 口皿	H-I11	
1000	337-02 振器	下駄	下駄	A3 24.0	10.8	高52.5	SD1 口皿	E-U12	
1001	1343-06 振器	下駄	下駄	A3 (22.7)	8.7	高52.2	SD1 口皿	H-H9	

報告番号	採集場所	器 種	分類	寸法 (cm)		重量 (g)	本数や等	備 位	地 区	備 考
				全長	口径					
1002	1355-01	採石具	A3	24.5	11.6	高54.9	採石用の押し SDI 口磨	H-D10	片ヤ	使用者の足裏朝側
1003	1356-03	採石具	A3	18.2	5.0	高33.1	採石用の押し SDI 口磨	H-B10	コウヤマキ	
1004	1360-04	採石具	A3	13.3	5.7	高32.8	採石用の押し SDI 口磨下部	H-L12	コウヤマキ	
1005	1364-03	採石具	B2	23.1	5.8	高35.2	採石用の押し SDI 口磨	H-H-G9	ヒノキ	表面一部壊れ
1006	1355-02	採石具	B2	29.9	10.1	高35.8	採石用の押し SDI 口磨	H-D9	スズ	表面一部壊れ
1007	1369-03	採石具	B2	20.5	6.0	高34.5	採石用の押し SDI 口磨下部	H-D9	スズ	表面一部壊れ
1008	1358-01	採石具	B3	18.3	12.2	高34.3	半磨削の押し SDI 口磨上部	H-K10	アガマツ	表面一部壊れ
1009	1357-01	採石具	B3	25.9	9.4	高32.3	採石用の押し SDI 口磨上部	不明	ヒノキ	表面一部壊れ 使用者の足裏朝側
1010	1353-04	採石具	B2	21.0	8.5	高32.1	採石用の押し SDI 口磨	H-B10	ヒノキ	
1011	1355-03	採石具	B1	26.0	8.5	高33.5	採石用の押し SDI 口磨下部～口磨	H-L11	コウヤマキ	表面一部壊れ
1012	1358-03	採石具	B1	26.0	8.9	高34.0	採石用の押し SDI 口磨下部	H-H9	スズ	使用者の足裏朝側
1013	1354-01	採石具	B1	25.9	9.8	高34.1	採石用の押し SDI 口磨	H-G9	スズ	
1014	358-01	採石具	B3	24.5	10.0	高32.6	採石用の押し SDI 口磨	E-V9	ヒノキ	
1015	1357-02	採石具	B	24.5	11.0	高31.5	採石用の押し SDI 口磨	H-K11	ヒノキ	左側面として使用後右足で使部か
1016	1359-05	採石具	B	16.0	11.5	高32.0	採石用の押し SDI 口磨	H-L13	クスノキ	
1017	1357-06	採石具	B1	16.9	7.1	高32.3	採石用の押し SDI 口磨上部	H-G9	ヒノキ	
1018	1363-03	採石具	B1	17.2	8.8	高32.4	採石用の押し SDI 口磨	H-I10	木口	
1019	1357-04	採石具	B	10.7	6.3	高31.8	半磨削の押し SDI 口磨縁部	H-I11	エゴノ木	子供用か
1020	357-03	採石具	B	14.9	3.3	高31.4	採石用の押し SDI 口磨	E-V11	ヒノキ	磨の磨耗量多い
1021	358-03	採石具	B3	13.3	6.6	高32.1	採石用の押し SDI 口磨	E-U11	ヒノキ	
1022	1360-03	採石具	B3	20.0	4.3	高32.0	採石用の押し SDI 口磨	H-N13	コウヤマキ	表面一部壊れ
1023	358-02	採石具	B3	23.0	10.5	高33.0	採石用の押し SDI 口磨	E-T-V9	ヒノキ	
1024	1360-05	採石具	B3	20.0	8.7	高32.3	採石用の押し SDI 口磨上部	H-I11	スズ	磨の厚さは縁部厚
1025	1361-02	採石具	B4	22.0	6.4	高31.7	採石用の押し SDI 口磨	H-E11	ヒノキ	磨の磨耗量多い
1026	1353-01	採石具	C1	22.2	10.1	高34.8	半磨削の押し SDI 口磨下部	H-I19	コウヤマキ	使用者の足裏朝側
1027	1359-02	採石具	C1	23.0	9.0	高31.7	採石用の押し SDI 口磨	H-C9	コウヤマキ	
1028	1356-02	採石具	C2	20.0	6.4	高32.0	採石用の押し SDI 口磨	H-N13	ヤナフ	1025と一対か
1029	1366-01	採石具	C2	21.9	8.0	高33.4	採石用の押し SDI 口磨	H-N13	ヤナフ	使用者
1030	1418-05	採石具	A	15.1	5.5	2.5	採石用の押し SDI 口磨	H-C10	ヒノキ	表面一部壊れ
1031	360-04	採石具	A	25.1	5.8	2.5	採石用の押し SDI 口磨	E-T13	ヤナフ	
1032	1428-05	採石具	C	28.2	6.3	2.9	採石用の押し SDI 口磨	E-V9-10	ヒノキ	ややもらが、刃部だけが磨耗している
1033	322-04	採石具	B	19.7	2.6	1.5	採石用の押し SDI 口磨	E-N8	ヒノキ	
1034	1393-01	採石具	B	15.5	4.2	3.0	採石用の押し SDI 口磨下部	H-B10	スズ	
1035	314-03	採石具	B	16.1	3.3	3.3	採石用の押し SDI 口磨	E-O9	ヒノキ	

製品番号	業種番号	品名	分類	全長	直径(mm)	長さ	形状	用途	部位	地区	新値	備考
1036	329-03	運搬具		(64.7)	本32.7		鋼材押出し	SD1 直層	H-R8	E-R8	イボガキ	
1037	077-04	天付棒	A	(76.7)	6.0	4.0	鋼材押出し	SD1 直層	E-T11	E-T11	ネバ属	
1038	092-04	運搬具	C	(85.0)	4.9	2.3	鋼材押出し	SD1 直層	E-W10	E-W10	ネバ属	
1039	072-05	天付棒	B	189.9	6.3	3.7	鋼材押出し	SD1 直層	E-T10	E-T10	ネバ	
1040	083-01	運搬具		(122.7)	太35.6		芯押出し	SD1 直層	E-W12	E-W12	フナ科	芯押出しの取組部を利用
1041	1031-01	運搬具		(89.2)	太36.5		芯押出し	SD1 直層	H-C9	H-C9	ネバ属	芯押出しの取組部を利用
1042	1351-02	土木作業用具		28.7	11.0	6.0	半鋼材押出し	SD1 直層上部	H-G9	H-G9	ネバ属	
1043	1002-01	土木作業用具		50.1	本32.9		芯押出し	SD1 直層下部	H-L12	H-L12	ネバ	1/2だけ一本通り
1044	388-01	土木作業用具		38.0	8.9	2.2	柱付	SD1 直層	E-R9	E-R9	ネバ	
1045	1328-02	土木作業用具		37.3	(7.6)	3.6	透径目	SD1 直層下部	H-J11	H-J11	フナ科	
1046	344-04	土木作業用具		(27.5)	8.0	2.6	板付	SD1 直層	E-P10	E-P10	ネバ	裏面だけ
1047	374-01	食器具	A	46.1	4.2	1.1	透径目	SD1 直層	E-U12	E-U12	ネバ	
1048	1347-02	食器具	A	36.6	3.2	0.6	板付	SD1 直層	H-K11	H-K11	ネバ	裏面一部だけ
1049	1347-03	食器具	A	31.5	2.1	0.6	透径目	SD1 直層	H-K11	H-K11	ネバ	穴開きだけ
1050	374-09	食器具	A	(19.9)	4.0	1.0	透径目	SD1 直層下部	E-R9	E-R9	ネバ	
1051	374-07	食器具	A	(22.4)	3.3	1.0	板付	SD1 直層	E-W11	E-W11	ネバ	
1052	374-08	食器具	A	(17.0)	4.8	1.1	透径目	SD1 直層	E-S12	E-S12	ネバ	芯押出し
1053	337-03	食器具	A	(20.9)	3.7	1.2	透径目	SD1 直層	E-U13	E-U13	ネバ	芯押出し
1054	1347-01	食器具	B	37.2	3.6	0.9	板付	SD1 直層	H-A9	H-A9	ネバ	芯押出し
1055	1401-03	食器具	C	(28.7)	10.5	2.1	透径目	SD1 直層	H-E9	H-E9	ネバ	
1056	372-01	食器具	C	(13.2)	4.7	0.5	透径目	SD1 直層	E-T11	E-T11	ネバ	透径目
1057	371-10	食器具	C	(17.3)	7.0	0.7	透径目	SD1 直層	E-R12	E-R12	ネバ	
1058	1395-01	耐火具		(22.8)	2.0	1.9	鋼材押出し	SD1 直層下部	H-P10	H-P10	ネバ	使用済み
1059	1395-04	耐火具		(25.0)	(3.5)	1.5	鋼材押出し	SD1 直層	H-A10	H-A10	ネバ	使用済み
1060	385-07	耐火具		8.5	1.8	1.4	芯押出し	SD1 直層	F-S11	F-S11	ネバ	未使用 一部だけ
1061	1421-08	耐火具		(8.3)	3.1	0.6	板付	SD1 直層	H-J12	H-J12	ネバ	使用済み
1062	383-02	耐火具		(31.6)	4.5	2.5	鋼材押出し	SD1 直層	E-R11	E-R11	ネバ	未使用
1063	1421-07	耐火具		(15.7)	(2.9)	0.9	板付	SD1 直層	H-J12	H-J12	ネバ	使用済み
1064	1395-03	耐火具		(15.8)	1.7	1.6	鋼材押出し	SD1 直層	H-A11	H-A11	ネバ	未使用
1065	1395-05	耐火具		(22.0)	2.6	1.7	鋼材押出し	SD1 直層	H-A10	H-A10	ネバ	使用済み
1066	1363-01	清掃具		41.8	太3.2		芯押出し	SD1 直層	H-C10	H-C10	ネバ科	向難天候天候上層には時代が合わない
1067	392-01	洗防具		(14.6)	太32.0		芯押出し	SD1 直層	H-N9	H-N9	ネバ	
1068	1348-08	洗防具		(12.1)	2.4	0.6	透径目	SD1 直層	H-D9	H-D9	ネバ	
1069	1418-07	洗防具		(13.8)	3.6	1.4	鋼材押出し	SD1 直層	H-B10	H-B10	ネバ	

図号 番号	実測番号	器種	分類	全長 mm	寸法 mm	容量 mm	木造/石造	層位	地区	樹種	備考
1070	372-00	湧き出し	浮子?	5.4	0.5			SD1 目録	E-U12	スギ	
1071	369-04	湧き出し	浮子?	(33.7)	2.9	1.7		SD1 目録	E-W11	スギ	
1072	374-03	湧き出し	浮子?	35.0	3.0	1.1		SD1 目録	E-T13	アサナロ	
1073	087-01	湧き出し	輪巻?	(183.3)	(39.7)	(11.6)		SD1 目録	E-U13	スギ	表層に腐葉を巻き込んで 腐葉層を形成している
1074	075-01	湧き出し	輪巻?	55.1	29.2	3.1		SD1 目録	E-S12	コウヤマキ	
1075	1487-01	湧き出し	結核菌	(40.6)	9.2	4.3		SD1 目録	E-T12	サワラ	表層に腐葉を巻き込んで腐葉層を 形成している
1076	045-02	湧き出し	結核菌	(107.0)	13.6	4.5		SD1 目録	E-R11	スギ	木柱に腐葉を巻き込んで水侵入防止
1077	039-03	湧き出し	結核菌	108.9	12.9	4.0		SD1 目録	E-R11	ヒノキ	木柱に腐葉を巻き込んで水侵入防止
1078	044-01	湧き出し	結核菌	(115.6)	8.5	4.3		SD1 目録	E-U12	サワラ	木柱に腐葉を巻き込んで水侵入防止
1079	1029-02	湧き出し	結核菌	(106.2)	14.4	5.0		SD1 目録	H-M12	ヒノキ	
1080	1004-01	湧き出し	洗石	(119.1)	19.1	9.3		SD1 目録	H-L12	ヒノキ	
1081	034-01	湧き出し	その他	164.1	20.2	3.8		SD1 目録	E-S5	スギ	建築部材の可能性も有り
1082	066-01	湧き出し	その他	137.9	(18.8)	4.8		SD1 目録	E-T8	ヒノキ	表層に腐葉を巻き込んで腐葉層も有り
1083	050-02	湧き出し	その他	(102.1)	(17.1)	(4.2)		SD1 目録	E-T13	ヒノキ	建築部材の可能性も有り
1084	1034-01	湧き出し	その他	(93.4)	(27.5)	8.0		SD1 目録	H-R12		建築部材の可能性も有り
1085	038-02	湧き出し	その他	(129.3)	(26.5)	3.9		SD1 目録	E-Q11	モミ	表層に腐葉を巻き込んで腐葉層も有り
1086	040-02	湧き出し	その他	57.5	12.7	4.6		SD1 目録	E-R8	スギ	建築部材の可能性も有り
1087	062-02	建築部材	彫穴仕立用柱	(244.0)	太37.4			SD1 目録	E-U10	サ	全面腐け
1088	071-02	建築部材	彫穴仕立用柱	120.0	9.0	5.0		SD1 目録	E-U10	サ	全面腐け
1089	073-01	建築部材	彫穴仕立用柱	(67.0)	太313.0			SD1 目録	E-T11		全面腐け
1090	111-03	建築部材	彫穴仕立用柱	(31.0)	太38.5	(9.5)		SD1 目録	E-T14	ヒノキ	表層に腐葉を巻き込んで腐葉層も有り
1091	086-01	建築部材	彫穴仕立用柱	(153.5)	9.2			SD1 目録	E-T9	サ	全面腐け
1092	046-01	建築部材	彫穴仕立用柱	(35.5)	太324.4			SD1 目録	E-Q10		全面腐け
1093	054-01	建築部材	彫穴仕立用柱	(96.8)	太310.5			SD1 目録	E-R11	サ	全面腐け
1094	086-03	建築部材	彫穴仕立用柱	(112.0)	太37.9			SD1 目録	E-Q11	サ	全面腐け
1095	032-01	建築部材	彫穴仕立用柱	(216.5)	太39.0			SD1 目録	E-O9	コウヤマキ	全面腐け
1096	1429-02	建築部材	彫穴仕立用柱	(56.3)	太38.7			SD1 目録	H-G9	アサナロ	全面腐け
1097	071-02	建築部材	彫穴仕立用柱	(135.5)	太311.0			SD1 目録	E-T10	サ	全面腐け
1098	020-02	建築部材	彫穴仕立用柱	(91.7)	太38.5			SD1 目録	E-T13	アサナロ	全面腐け
1099	030-03	建築部材	彫穴仕立用柱	(59.4)	太313.5			SD1 目録	E-Q8	コウヤマキ	全面腐け
1100	1023-01	建築部材	彫穴仕立用柱	(213.0)	太31.0			SD1 目録	H-J11	サ	全面腐け
1101	039-03	建築部材	彫穴仕立用柱	(66.1)	(9.9)	(4.6)		SD1 目録	E-T11	サ	全面腐け
1102	1433-01	建築部材	彫穴仕立用柱	(66.8)	13.0	3.4		SD1 目録	E-O9	アサナロ	全面腐け
1103	1437-02	建築部材	彫穴仕立用柱	(51.9)	11.4	5.8		SD1 目録	H-J11	スギ	表層に腐葉を巻き込んで腐葉層も有り

報告番号 番号	調査号	源 名	分 類			正 置 (cm)	厚 さ	水 深 (cm)	標 高	地 区	衝 撞	備 考
			部	材	種							
1104	063-03	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	138.7	12.0	5.5	E-T9	ヤマガワ		
1105	016-02	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	a	094.0	10.1	7.9	E-N9-9	ヤマガワ	上部の半円断面から下部の円形断面へ移行した部分	
1107	014-01	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	216.0	13.3	8.4	E-O9	ヤマガワ	床下部の開口部部分は無立柱	
1108	063-01	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	138.8	9.0	4.0	E-T11	列	表面を削りけ	
1108	1013-01	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	96.2	10.4	10.4	H-B10	列	全面削りけ	
1109	033-01	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	79.5	本3 13.7		E-U13	数丸柱		
1110	078-02	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	211.0	(14.7)	10.4	E-T13			
1111	021-01	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	272.8	本3 14.0		E-S12		床下部は半円断面で、下部は円形断面、床面は削りけ	
1112	092-02	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	95.0	8.6	9.2	E-R11	ヤマガワ	削りけ	
1113	062-03	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	102.4	(9.8)	(4.8)	E-T13-U12	本3	削りけ	
1114	1035-01	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	76.5	11.7	7.3	H-A9	本3		
1115	090-02	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	59.7	本3 9.1		E-P10			
1116	1026-03	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	79.1	13.9	9.1	H-M12		無立柱建築物小	
1117	099-01	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	139.5	10.8	9.3	E-R11	ヤマガワ	無立柱建築物小	
1118	1027-03	建築部材	柱材	無立柱建築物用柱	b	139.3	10.1	5.5	H-A10		上面削り、無立柱建築物小	
1119	111-01	建築部材	柱材	その他		63.2	11.0	8.0	E-P10	ヤマガワ	一部削り、無立柱建築物小	
1120	122-01	建築部材	柱材	その他		65.0	本3 10.7		E-V15	コナラ属コナラ属	一部削り	
1121	021-02	建築部材	柱材	その他		159.5	本3 10.0		E-Q10	ヤマガワ	欠損削りけ	
1122	089-01	建築部材	柱材	その他		166.5	本3 12.5		E-X10	アゾウノキ	削りけ	
1123	020-03	建築部材	柱材	その他		166.3	本3 10.2		E-S9	コナラ属	削りけ	
1124	099-02	建築部材	柱材	その他		152.7	本3 11.2		E-S8	コナラ属	削りけ	
1125	1004-02	建築部材	柱材	その他		132.7	本3 11.6		E-Y11			
1127	1442-03	建築部材	柱材	その他		126	1442-01 (27.2)	本3 13.6	E-V15	コナラ属コナラ属		
1128	1442-02	建築部材	柱材	その他		24.3	本3 13.2		E-T14	コナラ属コナラ属		
1129	122-02	建築部材	柱材	その他		26.3	本3 12.2		E-T14	コナラ属コナラ属		
1130	092-08	建築部材	柱材	その他		54.1	本3 13.0		E-U15	コナラ属コナラ属		
1131	070-02	建築部材	柱材	その他		248.0	本3 10.3		E-R10	列		
1132	095-01	建築部材	柱材	その他		154.8	本3 11.4		E-R14	ヤマガワ	削りけ	
1133	027-01	建築部材	柱材	その他		130.9	本3 10.8		E-O9	コナラ属コナラ属		
1134	099-03	建築部材	柱材	その他		133.2	本3 9.3		E-N9			
1135	1035-04	建築部材	柱材	その他		144.2	本3 11.8		E-S11	ヤマガワ	削りけ	
1136	063-02	建築部材	柱材	その他		141.2	本3 9.5		E-U13	ヤマガワ	削りけ	
1137	1020-04	建築部材	柱材	その他		120.0	本3 12.5		H-O9	列		

標準 番号	実測番号	種 類	分 類	寸法(mm)			水取り等	層 位	地 区	備 考		
				長さ	幅	高さ						
1138	100-01	建築部材	柱材	その他	(126.8)	太38.0	木柱材	SD1 目鼻	E-V9	ヤキ炭		
1139	122-03	建築部材	柱材	その他	(96.3)	太310.7	芯材併出し	SD1 目鼻	E-P10	ヤカキ		
1140	1485-01	建築部材	柱材	その他	(59.3)	太38.8	芯材併出し	SD1 目鼻	E-U13	アサナコ		
1141	1028-04	建築部材	柱材	その他	(62.0)	太311.2	木太材	SD1 目鼻上部	H-I11	欠損出掛け		
1142	1005-02	建築部材	柱材	その他	(63.0)	太313.4	木太材	SD1 目鼻	H-I11	ヤキ炭		
1143	038-01	建築部材	柱材	その他	(69.0)	太313.9	木太材	SD1 目鼻	E-U13	欠損出掛け		
1144	100-02	建築部材	柱材	その他	(86.0)	太311.3	木太材	SD1 目鼻	E-T10	ヤキ炭		
1145	117-01	建築部材	柱材	その他	(84.7)	太310.2	芯材併出し	SD1 目鼻	E-N19	ヤキ炭		
1146	1023-03	建築部材	柱材	その他	(129.2)	太38.1	芯材併出し	SD1 目鼻	E-V10	一部出掛け		
1147	067-02	建築部材	柱材	その他	(81.8)	太314.2	木太材	SD1 目鼻	E-T11	欠損出掛け		
1148	1005-04	建築部材	柱材	その他	(88.1)	太310.8	芯材併出し	SD1 目鼻	H-I11	ヤキ炭		
1149	058-02	建築部材	柱材	その他	(100.8)	太312.3	木太材	SD1 目鼻	H-T13	欠損出及び端出掛け		
1150	092-01	建築部材	柱材	その他	(130.0)	太313.0	木太材	SD1 目鼻	E-T10	一部出掛け		
1151	004-02	建築部材	柱材	その他	(122.5)	太313.5	木太材	SD1 目鼻	E-P8	コアヤカキ		
1152	1009-02	建築部材	柱材	その他	(204.0)	太317.5	芯材併出し	SD1 目鼻	H-K11	欠損出掛け		
1153	1438-02	建築部材	柱材	その他	(24.8)	10.2	(5.7)	芯材併出し	SD1 目鼻	表面出掛け		
1154	1028-03	建築部材	柱材	その他	54.0	(17.0)	3.0	板H	SD1 目鼻	H-I10	方形孔の側面に凹部の無い段	
1155	1044-01	建築部材	板出し	板出し	(46.0)	(34.7)	3.6	板目	SD1 目鼻	H-I10	中央部ヤカキに方形の凹部の無い板面有り	
1156	1049-01	建築部材	板出し	板出し	(65.2)	(36.4)	2.4	板目	SD1 目鼻	H-I10	中央部ヤカキ	
1157	092-01	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	(66.7)	太339.0	芯材併出し	SD1 目鼻	E-T12	ナラ材製ヤカキの風通		
1158	1438-03	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	(30.8)	8.6	(4.9)	芯材併出し	SD1 目鼻	E-R11	表面出掛け	
1159	064-02	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	134.7	22.5	5.7	芯材併出し	SD1 目鼻	E-R11	側部は厚さ1/2となって方角孔を持つ	
1160	012-03	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	a	(49.9)	17.6	4.0	板H	SD1 目鼻	E-V9	ヤキ炭
1161	082-01	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	b	150.0	(28.0)	14.0	平端併出し	SD1 目鼻	E-W11	表面1/2厚度一部出掛け
1162	079-02	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	b	(106.0)	11.9	7.5	芯材併出し	SD1 目鼻	E-N8	コアヤカキ
1163	1007-01	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	c	(143.0)	18.5	3.0	通径F	SD1 目鼻	H-P10	七ノ木
1164	065-03	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	c	(119.4)	(7.8)	1.5	板H	SD1 目鼻	E-U12	ヤキ
1165	1032-03	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	d	(75.8)	19.1	4.9	板H	SD1 目鼻	H-A11	斜め方向の貫孔、縦出脚部材
1166	1028-01	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	e	135.0	13.0	6.0	平端併出し	SD1 目鼻	H-P9	ヤキ炭
1167	005-02	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	e	(143.0)	12.0	2.4	通径F	SD1 目鼻	E-N8	開口部ハ工器具置き
1168	012-01	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	e	(157.9)	(16.5)	(7.2)	平端併出し	SD1 目鼻	E-O8	フタナシ
1169	011-01	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	e	146.3	16.5	2.3	芯材併出し	SD1 目鼻	H-S12	ヤキ炭
1170	030-01	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	e	(132.0)	16.3	9.0	芯材併出し	SD1 目鼻	E-X11	フタナシ
1171	068-01	建築部材	水平構造材	梁又は柱用	e	(104.2)	15.6	4.2	板目	SD1 目鼻	E-V12	表面一部出掛け、貫通しない孔有り

仮設 番号	築造番号	築 種	分敷	寸法(Cm)		本積り等	備 位	地 区	備 考	
				長さ	幅					
1172	050-01	建築部材	c	(118.6)	13.7	4.3	SD1 目脚下部	E-R11	全面積付 小孔型はきや不換鋼	
1173	079-01	建築部材	c	(121.9)	9.5	2.0	SD1 目脚	E-R11	セ/ホ	
1174	039-01	建築部材	f	(129.5)	17.3	7.0	芯材押出し	SD1 目脚	A/F	
1175	079-03	建築部材	k	(133.0)	12.0	8.0	芯材押出し	SD1 目脚	セ/ホ	断面に鋼角を付す 鋼角は鋼角付 工具用鋼角
1176	1040-01	建築部材	k	(186.1)	14.7	7.2	芯材押出し	SD1 目脚	H-B9	鋼角は鋼角付
1177	027-02	建築部材	k	(194.2)	本S(9.6)		芯材押出し	SD1 上部	E-W16・P10	鋼角は鋼角付
1178	1061-01	建築部材	k	(164.1)	7.6	3.6	芯材目	SD1 目脚	H-C10	鋼角は鋼角付
1179	067-01	建築部材	k	291.2	11.0	7.3	芯材押出し	SD1 目脚	E-O9	鋼角は鋼角付
1180	010-01	建築部材	k	245.0	10.5	5.2	芯材押出し	SD1 目脚	E-O9	鋼角は鋼角付
1181	004-03	建築部材	k	(74.0)	(11.6)	(3.3)	芯材目	SD1 目脚	E-X11	鋼角は鋼角付
1182	1037-03	建築部材	k	(74.0)	12.7	2.4	板目	SD1 目脚 上部	H-J11	鋼角は鋼角付
1183	1043-05	建築部材	k	(53.7)	10.7	3.5	芯材目	SD1 目脚	H-B10	鋼角は鋼角付
1184	092-06	建築部材	k	(52.0)	16.8	4.0	板目	SD1 目脚	E-T7	鋼角は鋼角付
1185	018-01	建築部材	k	(131.9)	10.5	5.2	板目	SD1 目脚	E-T9	鋼角は鋼角付
1186	041-01	建築部材	k	(129.0)	(10.8)	(7.5)	芯材押出し	SD1 目脚	E-U10	鋼角は鋼角付
1187	1035-03	建築部材	k	(155.0)	10.0	4.0	芯材押出し	SD1 目脚	E-T11	鋼角は鋼角付
1188	010-05	建築部材	k	(127.5)	(15.9)	3.9	芯材目	SD1 目脚	E-O9	鋼角は鋼角付
1189	1015-01	建築部材	k	67.3	20.0	5.4	板目	SD1 目脚 鋼角下部	H-G10	鋼角は鋼角付
1190	1060-01	建築部材	k	(70.0)	12.1	6.2	芯材目	SD1 目脚	H-E9	鋼角は鋼角付
1191	073-03	建築部材	k	(68.5)	11.0	6.0	芯材押出し	SD1 目脚	E-S11	鋼角は鋼角付
1192	084-01	建築部材	k	(73.9)	(18.8)	(5.4)	板目	SD1 不明	不明	鋼角は鋼角付
1193	1487-03	建築部材	k	(73.4)	9.2	3.0	板目	SD1 目脚	E-T13	鋼角は鋼角付
1194	094-01	建築部材	k	(102.6)	9.4	1.7	芯材目	SD1 目脚	E-M8	鋼角は鋼角付
1195	022-03	建築部材	k	(107.8)	10.5	6.3	芯材押出し	SD1 目脚 下部	E-R11	鋼角は鋼角付
1196	090-05	建築部材	k	104.5	12.2	5.5	芯材押出し	SD1 目脚	E-S13	鋼角は鋼角付
1197	041-05	建築部材	k	(133.2)	(13.0)	(6.0)	板目	SD1 目脚 (鋼角)	E-S9	鋼角は鋼角付
1198	1029-01	建築部材	k	(142.0)	12.1	4.3	芯材押出し	SD1 目脚	H-M12	鋼角は鋼角付
1199	034-05	建築部材	k	(142.0)	(17.7)	2.8	芯材目	SD1 目脚	E-Q10	鋼角は鋼角付
1200	1035-05	建築部材	k	(126.0)	16.0	5.5	芯材押出し	SD1 目脚	H-B9	鋼角は鋼角付
1201	1020-01	建築部材	k	(113.2)	17.9	7.1	千載押出し	SD1 目脚	H-K12	鋼角は鋼角付
1202	119-03	建築部材	k	99.3	9.5	3.1	芯材目	SD1 目脚	E-S9	鋼角は鋼角付
1203	1023-01	建築部材	k	71.1	11.7	8.0	芯材押出し	SD1 目脚	H-E10	鋼角は鋼角付
1204	048-01	建築部材	k	(146.2)	19.2	4.3	板目	SD1 目脚	E-T13	鋼角は鋼角付
1205	076-01	建築部材	k	(140.3)	20.6	5.5	芯材目	SD1 目脚	E-U9	鋼角は鋼角付

種別	別冊番号	品 種	分 類	全長	正 距 (cm)	厚 さ	水 ぬ 等	解 位	地 区	附 属	備 考	
1206	1027-02	建築部材	開口装置	(123.3)	(14.8)	(4.1)	頑炬目	SD1 直層	H-89			
1207	1024-01	建築部材	壁山装置	112.5	24.0	4.0	板目	SD1 直層上層	H-89			
1208	050-02	建築部材	開口装置	(90.0)	19.6	3.5	板目	SD1 直層	E-S12	ヒノキ		
1209	038-01	建築部材	開口装置	132.4	(17.3)	3.7	板目	SD1 直層	E-S7	ヒノキ		
1210	012-04	建築部材	開口装置	(98.1)	(13.4)	4.3	板目	SD1 直層	E-V9	シイ風		
1211	1479-01	建築部材	開口装置	(45.6)	18.9	6.0	板目	SD1 直層	E-U9	ケヤキ		
1212	434-03	建築部材	開口装置	(98.6)	10.5	2.8	板目	SD1 直層	E-X9	ヒノキ		
1213	1019-03	建築部材	開口装置	(90.0)	13.5	8.0	板目	SD1 直層	H-K11	判		
1214	100-03	建築部材	開口装置	115.0	17.0	7.8	半端物出し	SD1 直層	E-T10	判		
1215	1005-01	建築部材	開口装置	(73.8)	(9.4)	7.1	半端物出し	SD1 直層下部・直層	H-L12	シイ風		
1216	1009-01	建築部材	開口装置	A	158.2	32.3	3.3	板目	SD1 直層下部	E-O9	ヒノキ	半端物出し 半端年代(昭和19年)を断つない
1217	1030-01	建築部材	開口装置	A	(111.3)	25.3	3.1	板目	SD1 直層	H-H10		換気工具による仕上げ
1218	067-01	建築部材	開口装置	A	(78.8)	25.2	4.0	板目	SD1 直層	E-U13	スギ	半外による側仕上げ
1219	1006-01	建築部材	開口装置	A	(56.3)	(94.1)	(5.3)	板目	SD1 直層	E-G10	アガマツ	次層面出し
1220	080-01	建築部材	開口装置	B1	(102.0)	37.6	12.2	半端物出し	SD1 直層	E-V10		中央部は換気工具による丁寧な仕上げ
1221	011-03	建築部材	開口装置	B2	(73.7)	(68.9)	9.7	半端物出し	SD1 直層	E-X10	ツツ黒御影寄置風	
1222	430-02	建築部材	開口装置	B2	(58.0)	31.3	3.2	半端物出し?	SD1 直層	E-U13	ヒノキ	
1224	430-01	建築部材	開口装置	B2	(54.4)	30.8	3.4	半端物出し?	SD1 直層	E-U13	ヒノキ	
1225	400-01	建築部材	開口装置	B2	(56.3)	(14.2)	3.2	半端物出し?	SD1 直層	E-U13	サワラ	
1226	009-02	建築部材	開口装置	B2	(46.0)	(26.2)	11.4	半端物出し	SD1 直層下部	E-R10	ツツ黒御影寄置風	
1227	1008-01	建築部材	開口装置	B2	149.6	(27.0)	(6.2)	板目	SD1 直層下部・直層	H-L12		半外による仕上げ
1228	083-01	建築部材	開口装置	B2	(136.2)	(56.3)	9.6	板目	SD1 直層	E-V9	ススノ木	
1229	1007-02	建築部材	開口装置	B2	(114.0)	(22.0)	2.5	半端物出し	SD1 直層	H-P9		板目を仕上げ直して板目側に配置
1230	013-01	建築部材	開口装置	B2	(104.1)	(21.2)	5.5	半端物出し	SD1 直層	E-V11	クスノ木	板目として板目側に穿孔
1231	1054-01	建築部材	開口装置	B2	(81.8)	(16.6)	(7.2)	半端物出し	SD1 直層	E-X10		貫通全面出し
1232	423-02	建築部材	開口装置	B2	(52.2)	(5.4)	3.2	板目	SD1 直層	H-E9	ヒノキ	
1233	037-03	建築部材	開口装置	B2	(67.1)	40.8	3.2	板目	SD1 直層	E-R11	スギ	
1234	1050-05	建築部材	開口装置	B2	(77.2)	40.8	3.2	板目	SD1 直層	H-G10		
1235	018-02	建築部材	開口装置	B2	(96.1)	40.8	3.2	板目	SD1 直層	H-V12	本ノ風	
1236	368-03	建築部材	天井材	38.8	20.1	2.8	板目	SD1 直層	E-X10	ヒノキ		覆てするは小さく窓枠の部分か
1237	051-02	建築部材	天井材	(120.3)	35.0	(5.0)	板目	SD1 直層	E-W11	モカシノ風		片側のみ半外による風化仕上げ
1238	072-01	建築部材	天井材	126.2	29.2	8.0	板目	SD1 直層下部	E-Y11	ツツ黒		片側のみ半外による風化仕上げ
1239	003-01	建築部材	天井材	(85.3)	23.5	3.5	板目	SD1 直層	E-P10	サワラ		

検査番号	実施番号	源 様		分類	法量 (cm)			木製の部	場 位	地 区	折 履	備 考
		長さ	全径		厚 量	厚さ						
1240	042-01	埋戻部材	床材	a	75.9	28.7	3.6	床目	SD1 田肩下部	E-T10	コナラ黒アカガシ垂流	表面一部抜け 農具取付か
1241	1017-01	埋戻部材	床材	a	47.2	(41.7)	3.8	板目	SD1 田心部	H-P9		丈夫な部か
1242	1081-01	埋戻部材	床材	a	(62.0)	30.0	(7.0)	板目	SD1 田心部	H-B9		
1243	056-01	埋戻部材	床材	a	(99.0)	33.0	4.8	板目	SD1 田肩下部	E-W10	ヒノキ	
1244	024-01	埋戻部材	床材	a	37.9	27.7	5.0	床目	SD1 田肩	E-R11	コナラ黒アカガシ	農具取付か
1245	020-06	埋戻部材	壁材	a	74.3	6.9	2.0	板目	SD1 田肩	E-R11	スギ	
1246	328-04	埋戻部材	壁材	a	(26.3)	(8.6)	2.3	板目	SD1 田肩	E-P9	スギ	
1248	1478-01	埋戻部材	壁材	a	(23.3)	(16.6)	1.5	板目	SD1 田肩	E-Q10	スギ	凸状に突る 埋戻部に割れ用の浮丸
1249	1478-02	埋戻部材	壁材	a	36.1	16.5	2.0	起す目	SD1 E～田肩 刀割面辺	E-N9	スギ	凸状に突る 埋戻部に割れ用の浮丸
1250	113-01	埋戻部材	壁材	a	136.3	30.9	2.7	板目	SD1 田肩	E-P8	スギ	斜縁部材は欠損し 木片等の凸部で浮丸
1251	089-01	埋戻部材	壁材	a	137.2	(19.8)	2.1	起す目	SD1 田肩	E-P8	スギ	斜縁部材は欠損するもの割れは既上
1251	089-01	埋戻部材	壁材	a	(85.4)	(3.3)	2.3	板目	SD1 田肩	E-O9	ヒノキ	
1252	089-01	埋戻部材	壁材	a	(65.3)	(5.4)	2.5	起し	SD1 田心部	E-O9	ヒノキ	
1253	089-02	埋戻部材	壁材	a	(98.5)	(6.6)	2.3	板目	SD1 田心部	E-O9	ヒノキ	
1254	012-05	埋戻部材	壁材	a	(121.9)	(20.9)	3.5	床目	SD1 田肩	E-T13	ヒノキ	
1255	049-01	埋戻部材	壁材	b	255.0	61.5	3.4	板目	SD1 田肩	E-T13	ヒノキ	斜め方向の割れ材の当たり残有り
1256	070-01	埋戻部材	壁材	b	(250.0)	(19.5)	(2.0)	板目	SD1 田肩下部	E-U11	コナラ黒アカガシ垂流	T形木製加工工具による仕上 木部の欠け
1257	1021-01	埋戻部材	壁材	b	249.3	(17.5)	2.9	板目	SD1 左片配石 P1	H-L10		
1258	1041-01	埋戻部材	壁材	b	(235.0)	(37.8)	(3.0)	板目	SD1 田心部	H-B9		片側埋部に欠け有り
1259	025-05	埋戻部材	壁材	b	(181.1)	(24.9)	(3.6)	起す目	SD1 田肩下部	E-S12	スギ	
1260	053-03	埋戻部材	壁材	b	(182.8)	13.1	1.6	床目	SD1 田肩下部	E-T9	ヒノキ	
1261	011-05	埋戻部材	壁材	b	(170.8)	18.3	3.5	板目	SD1 田肩	E-R11	ツブツブイ	
1262	1062-01	埋戻部材	壁材	b	(174.8)	15.6	2.4	起す目	SD1 田心部 井原	H-J11	スダジイ	
1263	076-03	埋戻部材	壁材	b	(174.8)	17.7	2.8	起す目	SD1 田心部	E-T11	ヒノキ	
1264	1056-01	埋戻部材	壁材	b	198.0	21.0	3.5	起す目	SD1 田心部側壁	H-N14	ヒノキ	埋戻材の凸部等し 浮丸二か所
1265	1024-02	埋戻部材	壁材	b	111.5	(30.0)	2.0	起す目	SD1 田心部	H-A10		表面一部抜け 手角側顯著
1266	068-01	埋戻部材	壁材	b	(113.7)	(22.1)	(2.8)	板目	SD1 田肩	E-U11	杉ノ木	表面一部抜け 手角側顯著
1267	065-01	埋戻部材	壁材	b	(141.4)	(25.5)	2.5	板目	SD1 田肩	E-W11	ヒノキ	表面一部抜け 手角側顯著
1268	1039-01	埋戻部材	壁材	b	(138.0)	(13.0)	1.7	板目	SD1 田心部	H-B9	ヒノキ	表面一部抜け 手角側顯著
1269	006-01	埋戻部材	壁材	b	144.1	16.0	2.5	板目	SD1 田心部	E-Q10	ヒノキ	
1270	035-01	埋戻部材	壁材	b	(145.3)	3.6	3.1	板目	SD1 田肩	E-Q10	ヒノキ	
1271	042-03	埋戻部材	壁材	b	128.0	11.1	2.1	板目	SD1 田肩	E-U12	スギ	表面一部抜け 手角側顯著
1272	1008-02	埋戻部材	壁材	b	134.5	(14.6)	(3.4)	起し	SD1 田心部 井原	H-J10	コナラ黒アカガシ	
1273	1012-01	埋戻部材	壁材	b	154.3	21.4	3.5	板目	SD1 田心部 井原七兵	H-G9		

報告番号	実施場所	器 種	分類	寸法 (cm)		本器の寸	備 位	地 区	損 傷	備 考
				全長	厚さ					
1274	1033-01	建築部材	壁紙	b	(150.8)	(22.2)	SD1 目録	H-113		
1275	1007-03	建築部材	壁紙	b	137.5	13.0	SD1 目録下部→目録 弁井	不明		
1276	1010-04	建築部材	壁紙	b	(96.1)	(13.1)	2.5 板目	H-109		
1277	004-01	建築部材	壁紙	b	109.5	(9.9)	3.0 板目	SD1 目録下部	E-Q8	トウビ風→ガタツ
1278	1020-03	建築部材	壁紙	b	102.7	16.1	1.7 板目	SD1 目録複数下部	H-Q10	シヤツ
1279	119-02	建築部材	壁紙	b	(115.0)	(13.3)	(2.0) 板目	SD1 目録	H-Q11	
1280	1030-03	建築部材	壁紙	b	(117.7)	13.8	2.3 板目	SD1 目録	H-Q9	
1281	1012-02	建築部材	壁紙	b	(130.0)	(18.7)	(4.2) 板目	SD1 目録下部→目録 弁井	H-111	アガツ
1282	137-01	建築部材	壁紙	b	(135.5)	17.8	1.9 板目	SD1 目録	不明	弁井部材
1283	119-01	建築部材	壁紙	b	(123.9)	(21.8)	(4.7) 板目	SD1 目録	E-Q10	側縁部に製煉用の穿孔(アガツ)有り
1284	1045-01	建築部材	壁紙	b	(139.2)	27.8	(5.0) 板目	SD1 目録下部	H-K12	
1285	1025-03	建築部材	壁紙	b	85.5	20.0	3.0 板目	SD1 目録	H-M12	
1286	1439-01	建築部材	壁紙	b	(53.9)	(19.0)	(2.2) 透庇目	SD1 目録	H-C10	アガツ
1287	077-04	建築部材	壁紙	b	(74.0)	15.0	2.0 板目	SD1 目録	E-V9	毛シ
1288	064-02	建築部材	壁紙	b	(59.3)	12.6	2.2 透庇目	SD1 目録	E-W13	
1289	053-05	建築部材	壁紙	b	(65.0)	12.5	1.5 板目	SD1 目録下部	E-T9	
1290	031-01	建築部材	壁紙	b	(71.3)	(25.0)	(2.0) 板目	SD1 目録上部	E-S8	穴損部抜け
1291	1037-02	建築部材	壁紙	b	85.0	16.0	2.0 透庇目	SD1 目録	E-Y10	
1292	1439-02	建築部材	壁紙	b	(44.2)	(21.0)	(3.0) 透庇目	SD1 目録下部→目録	H-L12	シヤツ
1293	1053-03	建築部材	壁紙	b	70.0	10.2	3.1 透庇目	SD1 目録	H-G8	
1294	023-02	建築部材	壁紙	b	(76.4)	10.0	3.9 板目	SD1 目録	E-T13	壁目抜け
1295	1024-03	建築部材	壁紙	b	(167.3)	5.7	1.5 板目	SD1 目録	H-D10	毛シ
1296	1047-01	建築部材	壁紙	b	(96.3)	23.0	3.0 板目	SD1 目録	H-D9	穴損部抜け
1297	1002-02	建築部材	壁紙	b	99.2	(21.7)	3.8 透庇目	SD1 目録下部→目録	H-L11	毛シ
1298	1039-02	建築部材	壁紙	b	119.5	(31.5)	5.0 板目	SD1 目録	H-109	毛シ
1299	090-04	建築部材	壁紙	b	(78.7)	12.0	1.6 透庇目	SD1 目録	H-T10	
1300	037-01	建築部材	壁紙	b	(67.0)	(16.0)	3.5 板目	SD1 不明	E-P13	
1301	1047-03	建築部材	壁紙	b	(77.5)	(20.0)	5.0 板目	SD1 目録	H-A9	
1302	1432-01	建築部材	壁紙	b	32.6	(18.8)	2.2 板目	SD1 目録	E-S12	毛シ
1303	1048-01	建築部材	壁紙	b	(78.2)	(28.0)	3.6 板目	SD1 目録上部	H-C9	
1304	040-03	建築部材	壁紙	b	71.2	10.1	1.9 透庇目	SD1 目録	E-R8	スギ
1305	017-01	建築部材	壁紙	b	(300.0)	太26.4	丸木材	SD1 目録	E-O9	
1306	017-02	建築部材	壁紙	b	(262.0)	太26.0	丸木材	SD1 目録	E-Q10	丸
1307	007-02	建築部材	壁紙	b	228.2	太35.1	丸木材	SD1 目録	E-Q8	ツク

陽気 番号	気象番号	器種	分類	寸法(mm)		水取り等	層位	地区	耐震	備考
				全長	厚さ					
1308	007-03	遮熱部材	壁材	214.2	太33.8	丸木材	SD1 巾層下部	E-Q9	ㄱ字鋼	
1309	045-01	遮熱部材	壁材	173.5	太33.8	丸木材	SD1 巾層	E-T13	ㄱ字鋼	
1310	013-01	遮熱部材	壁材	04.9	太33.7	丸木材	SD1 巾層	E-Y11	ㄱ字鋼ハキ	
1311	103-03	遮熱部材	壁材	07.2	太33.6	丸木材	SD1 巾層	E-Q11		
1312	121-02	遮熱部材	壁材	02.2	太33.8	丸木材	SD1 巾層	E-Q10	ｱｽﾌﾟﾙ	
1313	118-04	遮熱部材	壁材	06.0	太32.9	丸木材	SD1 巾層	E-P10	ﾋﾞｼﾞ	
1314	118-01	遮熱部材	壁材	01.5	太32.6	削付物別出し	SD1 巾層	E-P9	ｽﾈ	
1315	005-03	遮熱部材	壁材	06.3	太33.0	丸木材	SD1 巾層	E-Q8	壁紙材	
1316	126-01	遮熱部材	壁材	03.4	太35.4	丸木材	SD1 巾層 壁材	E-P10	ｽﾀｼﾞﾝ	削取部
1317	124-03	遮熱部材	壁材	04.0	太32.0	丸木材	SD1 巾層	E-P9	ﾋﾞｼﾞ	
1318	124-02	遮熱部材	壁材	03.0	太33.5	丸木材	SD1 巾層 壁材	E-Q10	ㄱ字鋼	
1319	124-04	遮熱部材	壁材	04.0	太33.2	丸木材	SD1 巾層 壁材	E-P10	ﾌﾟﾗｽﾀｲ	
1320	119-04	遮熱部材	壁材	10.2	太32.8	削付物別出し	SD1 巾層	E-T14	ㄱ字鋼	
1321	124-06	遮熱部材	壁材	03.0	太33.5	丸木材	SD1 巾層 壁材	E-P9	ㄱ字	
1322	373-02	遮熱部材	壁材	72.7	4.1	削付物別出し	SD1 巾層 SD1 1a層	E-O10 E-P9	ㄱ字鋼	方形孔に材料挿入
1323	118-03	遮熱部材	壁材	04.6	3.5	削付物別出し	SD1 巾層	E-P10	ｽﾈ	表面1/2だけ 壁材側以外出土
1324	373-01	遮熱部材	壁材	40.7	2.8	削付物別出し	SD1 巾層	E-S9	ｽﾈ	
1325	373-02	遮熱部材	壁材	32.2	4.4	削付物別出し	SD1 1a層 A 2.5F	E-P9	ㄱ字鋼	
1326	005-03	遮熱部材	壁材	166.3	太35.8	丸木材	SD1 巾層	E-P9	ㄱ字鋼	
1327	023-01	遮熱部材	壁材	173.1	太36.1	丸木材	SD1 巾層	E-T13		削取部
1328	076-03	遮熱部材	壁材	161.9	太35.7	丸木材	SD1 巾層	E-T11	ㄱ字鋼	
1329	018-03	遮熱部材	壁材	105.8	太35.3	丸木材	SD1 巾層	E-U13	ㄱ字鋼	
1330	062-04	遮熱部材	壁材	146.0	太35.9	丸木材	SD1 巾層	E-T11	ㄱ字	削取部
1331	1011-02	遮熱部材	壁材	105.8	太35.8	丸木材	SD1 巾層	H-G10	ｼﾝﾄﾞﾙ	削取部
1332	020-05	遮熱部材	壁材	04.9	太36.5	丸木材	SD1 巾層	E-R11	ㄱ字鋼	
1333	1022-03	遮熱部材	壁材	03.7	太35.0	丸木材	SD1 巾層	H-C9		
1334	1025-03	遮熱部材	壁材	146.5	太37.7	丸木材	SD1 巾層	H-A10	ㄱ字鋼	
1335	1440-01	遮熱部材	壁材	02.7	太33.8	丸木材	SD1 巾層	E-V11	ｼﾝﾄﾞﾙ	削取部
1336	048-04	遮熱部材	壁材	04.3	太35.1	丸木材	SD1 巾層	E-T13	ㄱ字鋼	欠部は削取
1337	1488-02	遮熱部材	壁材	04.3	太36.9	丸木材	SD1 巾層	E-Q11	ㄱ字鋼	表面一部削取
1338	1488-01	遮熱部材	壁材	147.8	太35.1	丸木材	SD1 巾層	E-N9	ｺﾝｸﾘｰﾄ	削取部
1339	1431-04	遮熱部材	壁材	026.3	4.5	丸木材	SD1 巾層	E-S11	ㄱ字鋼	
1340	1483-03	遮熱部材	壁材	143.4	4.4	丸木材	SD1 巾層	E-N8	削取部	

番号 名称(番号)	種 類	分 類	寸法(㎝)		水取の等	層 位	地 区	研 査	備 考	
			全長	厚さ						
1341	1485-02	建築部材	垂木	A	125.0	太54.7	SD1 留骨上端	E-Q10	ヒヤカ半風	
1342	1431-01	建築部材	厚板構造材	A	(11.8)	5.1	SD1 留骨	E-V10	ヒヤカ半	
1343	1431-02	建築部材	厚板構造材	A	(15.5)	太35.0	SD1 留骨	E-V12	ヒヤカ風	
1344	1431-06	建築部材	厚板構造材	A	(23.7)	太34.5	SD1 留骨	H-G10	スダシ	
1345	312-07	建築部材	厚板構造材	A	(14.5)	2.7	SD1 留骨	E-Q10	ヒヤカ半	
1346	108-03	建築部材	厚板構造材	B	(172.0)	太34.6	SD1 留骨	E-N9	ヒヤカ半風	
1347	023-01	建築部材	厚板構造材	B	(168.8)	太35.5	SD1 留骨	E-T13	ヒヤカ半	
1348	127-02	建築部材	厚板構造材	B	109.0	太35.6	SD1 留骨	不明	ヒヤカ半風	
1349	1440-02	建築部材	厚板構造材	B	(47.2)	太36.1	SD1 留骨貼石上	E-R11	スダシ	
1350	1437-03	建築部材	厚板構造材	B	(34.2)	太36.4	SD1 留骨貼石上	E-R11	スダシ	
1351	1485-03	建築部材	厚板構造材	B	(22.5)	太34.7	SD1 留骨	E-U11	スダシ	
1352	1485-05	建築部材	厚板構造材	B	(22.7)	太35.3	SD1 留骨	E-R11	スダシ	
1353	1431-05	建築部材	厚板構造材	B	(17.0)	太36.0	SD1 留骨	E-S11	スダシ	
1354	1431-01	建築部材	厚板構造材	B	(24.3)	7.5	4.5	SD1 留骨	E-U13	フダシ
1355	1461-02	建築部材	厚板構造材	C	(46.2)	太35.0	SD1 留骨下筋	E-T15	針葉樹	
1356	1433-03	建築部材	厚板構造材	C	(34.5)	太34.4	SD1 留骨	E-N9	ヒヤカ半風	
1357	1044-02	建築部材	厚板構造材	C	(44.3)	太36.0	SD1 留骨	H-F10		
1358	1433-02	建築部材	厚板構造材	C	(29.9)	太34.3	SD1 留骨	E-Q11	ヒヤカ半	
1359	107-01	建築部材	厚板構造材	D	(28.1)	太312.3	SD1 留骨下筋	E-R11	ヒヤカ風	
1360	032-02	建築部材	厚板構造材	D	(29.4)	太312.5	SD1 留骨	E-Q9	ヒヤカ風	
1361	008-03	建築部材	厚板構造材	D	178.4	太38.5	SD1 留骨	E-Q10	ヒヤカ風	
1362	130-01	建築部材	厚板構造材	E	(79.0)	太38.5	SD1 留骨	E-P10	アサナロ	
1363	008-02	建築部材	厚板構造材	E	(118.2)	太38.9	SD1 留骨	E-V11		
1364	063-03	建築部材	厚板構造材	E	(121.0)	太34.2	SD1 留骨	E-T11	ヒヤカ風	
1365	102-02	建築部材	厚板構造材	E	(130.0)	太37.1	SD1 留骨	E-W8	ヒヤカ半	
1366	040-01	建築部材	厚板構造材	E	(100.5)	太37.8	SD1 留骨	E-P9	ヒヤカ風	
1367	067-03	建築部材	厚板構造材	E	(71.5)	太36.2	SD1 留骨	E-S12	ヒヤカ風	
1368	1486-02	建築部材	厚板構造材	F	(34.2)	太36.2	SD1 留骨	E-S11	ヒヤカ風	
1369	1407-01	建築部材	厚板構造材	F	(33.8)	太37.9	SD1 留骨	H-L13	ヒヤカ風	
1370	1489-01	建築部材	厚板構造材	F	(23.7)	太35.8	SD1 留骨	E-U12	スダシ	
1371	1485-02	建築部材	厚板構造材	F	(47.8)	太35.6	SD1 留骨	E-T11	ヒヤカ半	
1372	044-03	建築部材	厚板構造材	F	(76.5)	太36.3	SD1 留骨	E-S12	ヒヤカ風	
1373	029-02	建築部材	厚板構造材	F	(75.6)	6.3	SD1 留骨	E-N8	ヒヤカ風	

標準品番号	品名	分類	寸法(mm)		材質	寸法	用途	規格	規格	規格	用途	備考
			全長	厚さ								
1374	034-03 建築部材	鉄板造材	61.0	太36.0	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-R12	ヤキ炭
1375	1035-02 建築部材	炭素部材	F	A310.0	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-Y10	ヤキ炭
1376	009-01 建築部材	炭素部材	E	237.4	太39.7	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-77B	ヤキ炭
1377	1050-02 建築部材	炭素部材	E	73.1	太35.8	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-Y	ヤキ炭
1378	044-04 建築部材	炭素部材	E	63.0	太36.4	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-U13	ヤキ炭
1379	042-03 建築部材	炭素部材	E	61.8	太36.6	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-S11	ヤキ炭
1380	1483-02 建築部材	炭素部材	F	41.0	太36.0	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-U13	七ノ井
1381	1480-02 建築部材	炭素部材	F	46.0	太36.5	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-V13	ヤキ炭
1382	074-03 建築部材	炭素部材	E	61.2	太35.0	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-T11	ヤキ炭
1383	061-03 建築部材	炭素部材	E	92.3	太35.5	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-S11	ヤキ炭
1384	062-03 建築部材	炭素部材	E	106.1	太34.5	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-S11	ヤキ炭
1385	072-03 建築部材	炭素部材	E	162.7	太35.1	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-U10	ヤキ炭
1386	023-04 建築部材	炭素部材	E	158.0	太36.0	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-T12	ヤキ炭
1387	048-02 建築部材	炭素部材	E	149.3	太35.2	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-T12	ヤキ炭
1388	020-01 建築部材	炭素部材	E	146.4	太33.8	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-T13	ヤキ炭
1389	066-03 建築部材	炭素部材	E	136.1	太35.6	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-T12	ヤキ炭
1390	063-02 建築部材	炭素部材	E	121.7	太35.2	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-S7	針炭
1391	044-02 建築部材	炭素部材	E	68.8	太37.2	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-S11	炭素部材
1392	048-02 建築部材	炭素部材	E	69.0	太34.3	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-V12	炭素部材
1393	028-04 建築部材	炭素部材	E	97.2	太35.5	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-N9	炭素部材
1394	021-03 建築部材	炭素部材	E	56.6	太37.8	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-U13	炭素部材
1395	108-01 建築部材	炭素部材	A	210.0	太36.1	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-N9	丸
1396	128-01 建築部材	炭素部材	A	240.4	太37.9	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-S7	七ノ井炭
1397	063-01 建築部材	炭素部材	E	200.0	太37.0	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-R11	七ノ井
1398	033-02 建築部材	炭素部材	E	152.9	太36.5	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-T13	ヤキ炭
1399	018-03 建築部材	棒子	A	75.6	φ2	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-O9	炭素部材
1400	1046-01 建築部材	棒子	A	93.7	φ3	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	H-B9	炭素部材
1401	019-01 建築部材	棒子	A	69.8	φ2.5	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-V12	炭素部材
1402	1046-02 建築部材	棒子	A	49.3	φ2.3	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	H C9	炭素部材
1403	1022-02 建築部材	棒子	A	64.3	φ2.7	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	H-L11	炭素部材
1404	033-02 建築部材	棒子	B	93.3	φ9	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-T14	炭素部材
1405	1003-02 建築部材	棒子	B	71.5	φ6.2	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	H-C10	炭素部材
1406	018-02 建築部材	棒子	B	131.5	φ5.5	炭素鋼	丸太材	丸太材	丸太材	丸太材	E-N9	炭素部材

備考	実測番号	器 種	法 量 (mm)			備 位	地 区	新 種	備 考		
			全長	厚さ	突起の高						
	1407 1057-01	建築部材	B	164.6	17.5	(7.0)	半彫削の出し	SD1 彫削下部	H-Q10	スダライ	表裏一面彫削
	1408 018-01	建築部材	B	185.9	18.5	(11.0)	芯彫削の出し	SD1 彫削	E-Q11	広葉樹	大面彫削
	1409 123-03	建築部材	A	55.6	14.8	8.6	芯彫削の出し	SD1 彫削	E-X11	スダライ	大面彫削
	1410 031-02	建築部材	B	80.8	13.9	(6.0)	芯彫削の出し	SD1 彫削	E-O10	マキ属	
	1411 1045-02	建築部材	棒子	110.3	18.0	(7.2)	半彫削の出し	SD1 彫削	E-Y9		足縁付近大面彫削
	1412 091-01	建築部材	棒子	66.9	(22.0)	(6.7)	半彫削の出し	SD1 彫削	E-T13		全面彫削
	1413 006-02	建築部材	不明建築部材	134.1	7.6	4.9	半彫削の出し	SD1 彫削	E-S8	マキ属	
	1414 102-01	建築部材	不明建築部材	134.5	12.0	6.8	半彫削の出し	SD1 彫削	E-O9	マツノク	
	1415 028-01	建築部材	不明建築部材	95.0	6.5	2.8	半彫削の出し	SD1 彫削	E-N11		大面彫削
	1416 126-02	建築部材	不明建築部材	62.9	15.6	7.4	半彫削の出し	SD1 彫削	E-R11	ムクノキ	
	1417 1038-02	建築部材	不明建築部材	118.0	16.5	8.0	半彫削の出し	SD1 彫削	H-G9		
	1418 029-01	建築部材	不明建築部材	124.5	7.3	4.3	半彫削の出し	SD1 彫削	E-P8	マキ属	
	1419 1035-01	建築部材	不明建築部材	136.0	8.0	5.5	芯彫削の出し	SD1 彫削	H-K12		
	1420 064-01	建築部材	不明建築部材	136.7	6.8	6.1	芯彫削の出し	SD1 彫削	E-S11	ヤブツバキ	側面突出彫削状に作り出して穿孔
	1421 1033-02	建築部材	不明建築部材	140.9	本312.0		芯彫削の出し	SD1 彫削	H-K12		本木材に深い溝状の跡のみ
	1422 1480-01	建築部材	不明建築部材	49.9	本35.5		芯彫削の出し	SD1 彫削	E-Q10		大面彫削
	1423 1481-01	建築部材	不明建築部材	41.7	6.5	4.6	彫削の出し	SD1 不明		ヒノキ科	表面一面彫削
	1424 1018-03	建築部材	不明建築部材	57.2	(13.0)	6.0	芯彫削の出し	SD1 彫削	H-L12	ムクノキ	
	1425 1438-01	建築部材	不明建築部材	54.7	15.8	7.8	半彫削の出し	SD1 彫削	E-S12	ヒノキ科	
	1426 1479-02	建築部材	不明建築部材	35.6	15.2	(8.6)	芯彫削の出し	SD1 彫削	E-S12	スダライ	片持たの彫削
	1427 026-01	建築部材	不明建築部材	219.0	(8.0)	(4.5)	半彫削の出し	SD1 彫削	E-R8		
	1428 019-03	建築部材	不明建築部材	92.2	8.0	4.0	彫削の出し	SD1 彫削	E-T13	ツバノク	
	1429 022-01	建築部材	不明建築部材	99.9	(12.1)	(7.3)	彫削の出し	SD1 彫削	E-T9		コア材彫削コナ彫削
	1430 1026-01	建築部材	不明建築部材	131.7	11.6	4.0	彫削の出し	SD1 彫削	H-L13		
	1431 021-03	建築部材	不明建築部材	98.8	(8.4)	(4.7)	彫削の出し	SD1 彫削	E-R8	スギ	
	1432 064-04	建築部材	不明建築部材	117.9	(5.1)	3.7	彫削の出し	SD1 彫削	E-N9		
	1433 1021-03	建築部材	不明建築部材	(28.2)	(6.7)	3.0	彫削の出し	SD1 彫削	H-A9		
	1434 008-01	建築部材	不明建築部材	190.1	10.7	5.0	彫削の出し	SD1 彫削	E-N9		
	1435 1023-02	建築部材	不明建築部材	302.6	本310.2		芯彫削の出し	SD1 彫削	H-J12		全体2/3彫削
	1436 082-02	建築部材	不明建築部材	173.0	本310.0		芯彫削の出し	SD1 彫削	E-W10		
	1437 1021-02	建築部材	不明建築部材	193.8			丸木材	SD1 彫削	H-E9	コウヤツク	
	1438 1009-01	建築部材	不明建築部材	204.0	本312.5		丸木材	SD1 彫削	H-D9	マキ属	
	1439 1038-01	建築部材	不明建築部材	188.8	9.6	5.0	両面彫削の出し	SD1 彫削	E-Y9-10		

製品 番号	丸鋼品名	第 1 種		分類	全長 mm	寸法(mm)		水圧等	階 位	建 区	用 途	備 考
		直径	長さ			外径	内径					
1440	089-04 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(93.0)	10.5	2.6	逆接目	SD1 田山部下	E-P10		
1441	129-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(83.0)	9.0	3.0	接目	SD1 田山側	E-O10	スチール	
1442	083-04 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(83.2)	(10.3)	4.0	接目	SD1 田山部下	E-T11	全面焼付	
1443	1435-01 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		39.1	18.5	3.4	接目	SD1 田山下部(取付)	E-T8	スチール	表面中央部焼付
1444	1047-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(78.0)	(17.5)	3.0	接目	SD1 田山上部	H-K12		
1445	103-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(43.1)	(11.6)	(4.7)	接目	SD1 不明	不明	スチール	表面一部焼付
1446	066-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		114.2	21.7	6.4	接目	SD1 田山下部	E-S9	コテテ鋼アケガシ塗層	
1447	1030-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(69.2)	(15.7)	3.6	接目	SD1 田山側	H-K11		傷み程度小
1448	071-01 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(936.4)	16.3	5.0	接目	SD1 田山側	E-R9	スチール	
1449	092-01 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		216.2	11.5	4.8	芯材部出し	SD1 田山側	E-R11	ツブツブ	表面一部焼付
1450	085-01 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(237.2)	(12.8)	(4.6)	芯材部	SD1 田山側	E-T8	スチール	
1451	070-03 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(255.5)	10.0	4.5	接目	SD1 田山側	E-T9		
1452	1042-01 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(362.5)	(28.9)	(6.3)	接目	SD1 田山側	H-L12		
1453	1495-01 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(33.4)	7.2	高さ0.0	芯材部出し	SD1 田山側下部	H-H10	スチール	
1454	393-04 不備				(13.9)	8.4	1.9	芯材部出し	SD1 田山側	不明	スチール	
1455	313-02 不備				(33.9)	(14.5)	2.4	芯材部出し	SD1 左岸下部部	E-T13	スチール	
1456	037-02 不備				(69.2)	(14.7)	4.4	半截部出し	SD1 田山側	E-R10	スチール	
1457	094-02 不備				(73.1)	(8.9)	高さ 4.4	芯材部出し	SD1 田山側	E-T8	スチール	
1458	073-02 不備				(98.5)	10.0	4.0	高さ部出し	SD1 田山側	E-V9	スチール	表面穴部焼付
1459	106-02 不備				(164.3)	11.8	高さ(0.3)	芯材部出し	SD1 田山側	E-O9	スチール	片端部焼付に作り出し
1460	1383-06 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(17.0)	高さ1.3		芯材部出し	SD1 田山側	H-E9	スチール	
1461	372-01 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(13.0)	高さ0.9		芯材部出し	SD1 田山側	E-N9	スチール	
1462	341-08 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材		(9.9)	高さ1.0		芯材部出し	SD1 田山側	E-U9	スチール	
1463	1413-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	A	25.1	6.3	3.2	芯材部出し	SD1 田山側	H-B10	スチール	
1464	1143-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	B	(21.8)	3.4	3.4	芯材部出し	SD1 田山下部+田山側	H-J11	スチール	
1465	398-03 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	B	26.3	高さ5.8		芯材部出し	SD1 田山側 球蓋部材	E-N9	スチール	表面焼付
1466	356-03 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	B	22.3	高さ5.5		芯材部出し	SD1 田山側	E-T13	スチール	片端部焼付
1467	370-09 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	B	(15.4)	高さ5.0		芯材部出し	SD1 田山側	E-T13	スチール	片端部焼付(写真参照)
1468	371-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	A1	(10.7)	6.8	2.3	芯材部出し	SD1 田山側	H-U13	スチール	
1469	383-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	A1	(11.0)	5.0	2.7	接目	SD1 田山側	F-Y12	スチール	
1470	371-02 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	A1	21.0	6.8	2.5	接目	SD1 田山側	E-U13	スチール	
1471	371-06 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	A1	19.5	5.7	2.2	接目	SD1 田山側	E-T12	スチール	
1472	1418-06 球蓋部材	不明球蓋部材	不明球蓋部材	A1	13.5	高さ0.0	高さ0.0	接目	SD1 田山側	H-N13	スチール	

調査 番号	測線番号	測 程		分幅	断面(㎝)		水取の層	層 位	地 区	樹 種	備 考
		直径	幅		高さ	厚さ					
1506	089-01	丸杭		(93.1)	太28.8		丸木材	SD1 田層	北-U12	ツバシバ	樹皮残る
1507	117-04	丸杭		(93.0)	9.0	0.6	丸木材	SD1 田層	E-N9	マツ属	表層焼け
1508	046-02	丸杭		(87.0)	太26.9		丸木材	SD1 田層	E-U12		
1509	110-04	丸杭		(84.5)	太28.0		丸木材	SD1 田層	E-U14	イタダキ	
1510	048-03	丸杭		(89.6)	太29.3		丸木材	SD1 田層	E-S11	マツ属	樹皮残る
1511	042-02	丸杭		(88.0)	太28.8		丸木材	SD1 田層	E-R11	マツ属	樹皮残る 欠損部焼け
1512	1005-03	丸杭		(79.4)	太29.7		丸木材	SD1 田層	H-D10	マツ属	
1513	123-01	丸杭		(77.2)	太27.6		丸木材	SD1 田層	E-R11	マツ属	焼部焼け
1514	1003-01	丸杭		(75.2)	太29.5		丸木材	SD1 II→田a層	H-U11	マツ属	焼部焼け
1515	090-03	丸杭		(75.0)	太27.2		丸木材	SD1 田層	E-Q10		樹皮残る 欠損部焼け
1516	1022-01	丸杭		(69.8)	太211.9		丸木材	SD1 田層下部→田a層	H-R11	マツ属	欠損部焼け
1517	123-02	丸杭		(67.5)	太29.7		丸木材	SD1 田層	E-N8	針葉樹	
1518	1016-02	丸杭		(64.2)	太23(10.0)		丸木材	SD1 田層下部→田a層	H-L12	ク	
1519	066-02	丸杭		99.7	太27.7		丸木材	SD1 田層	E-S11	マツ属	欠損部焼け
1520	1005-02	丸杭		(69.0)	太25.0		丸木材	SD1 田層下部→田a層	H-L12	散乱材	樹皮残る
1521	092-03	丸杭		(72.0)	太27.3		丸木材	SD1 田層	E-O10		
1522	027-04	丸杭		(69.3)	太27(9)		丸木材	SD1 B→田層	E-O10		
1523	091-01	丸杭		(68.0)	太29.2		丸木材	SD1 田層	E-R11	マツ属	
1524	027-02	丸杭		(67.9)	太28.1		丸木材	SD1 田層	E-O10	針葉樹	欠損部焼け
1525	121-05	丸杭		77.5	太25.6		丸木材	SD1 田層	E-R12	クロマツ	樹皮残る
1526	110-01	丸杭		(71.8)	太28.3		丸木材	SD1 田層中	E-S13	マツ属	樹皮残る
1527	077-02	丸杭		(54.2)	太27.4		丸木材	SD1 田層	E-S12		欠損部焼け
1528	039-02	丸杭		(44.7)	太24.9		丸木材	SD1 田層	E-U11	カヤ	樹皮残る
1529	395-04	丸杭		(48.8)	太23.2		丸木材	SD1 田層	E-U11	イチイ	
1530	314-04	丸杭		(53.5)	太25.2		丸木材	SD1 田層上層	E-S8	ヒノキ科	樹皮残る 焼部焼け
1531	128-02	丸杭		(123.3)	太23.6		丸木材	SD1 田層	E-N19	コナラ属アカガシ連属	樹皮残る
1532	003-02	丸杭		(69.4)	太22.4		丸木材	SD1 田層	E-X12		樹皮残る
1533	1013-03	丸杭		(67.8)	太23.9		丸木材	SD1 田層	H-A11		樹皮残る
1534	111-02	丸杭		(67.6)	太26.2		丸木材	SD1 田層	E-N9		樹皮残る
1535	1090-04	丸杭		(77.4)	太23.2		丸木材	SD1 田層	E-Y10		
1536	121-03	丸杭		(73.3)	太24.8		丸木材	SD1 田層上層	E-S8		樹皮残る
1537	107-04	丸杭		(47.5)	太29.0		丸木材	SD1 田層	E-Q11	サカキ	
1538	107-02	丸杭		174.2	太28.1		丸木材	SD1 II→田層 川原側山	E-N9	マツ属	

番号	業種区分	器具	分類	長さ(cm)	幅	厚さ	木材の等級	部位	地区	樹種	備考
1539	107-03	板材	丸太	1398.0	太35.5		丸太材	SD1 目割	E-N9		
1540	103-02	板材	丸太	996.0	太32.0		丸太材	丸太材	H-J11	ウラギ	
1541	104-02	板材	丸太	106.1	太34.9		丸太材	SD1 目割 下層	E-Y11	ウラギ	全面磨け
1542	022-02	板材	丸太	113.3	太33.6		丸太材	SD1 目割	E-W12	ウラギ	
1543	1050-03	板材	丸太	96.9	太33.3		丸太材	SD1 目割	E-Y10		樹皮剥き
1544	088-03	板材	丸太	98.0	太35.2		丸太材	SD1 目割	E-T11		欠損面磨け
1545	121-01	板材	丸太	88.9	太33.4		丸太材	SD1 目割	E-X10	フスナ	
1546	118-02	板材	丸太	61.9	太33.0		丸太材	SD1 目割	E-T14	ウラギ	
1547	308-01	板材	丸太	32.6	太35.0		丸太材	SD1 E-目割	E-Q10	ウラギ	
1548	1036-01	板材	丸太	172.8	太31.1		丸太材	SD1 目割	H-E10		
1549	019-02	板材	船形板	64.0	12.3	7.1	船形材出し	SD1 目割	E-R12	ウ	一面磨け
1550	1396-01	不明品・残材	棒状丸	37.3	太31.9		船形材出し	SD1 目割 下層	H-A10	ウラギ	
1551	1396-02	不明品・残材	棒状丸	34.6	太3 2.1		船形材出し	SD1 目割	H-C10	ヒノ	
1552	1397-02	不明品・残材	棒状丸	35.2	1.8	1.3	船形材出し	SD1 目割	H-L12	ヒノ	
1553	1396-03	不明品・残材	棒状丸	33.9	太31.6		船形材出し	SD1 目割 下層	H-G10	コウヤク	
1554	1396-04	不明品・残材	棒状丸	30.0	太32.2		船形材出し	SD1 目割 上部	H-F9	ヒノ	
1555	1396-06	不明品・残材	棒状丸	27.7	太31.6		船形材出し	SD1 目割	H-C10	ヒノ	
1556	311-06	不明品・残材	棒状丸	26.3	2.1	1.0	船形材出し	SD1 目割	E-10	ヒノ	
1557	1398-06	不明品・残材	棒状丸	26.3	太32.4		船形材出し	SD1 目割	H-C9	ヒノ	
1558	1396-07	不明品・残材	棒状丸	25.5	太31.8		船形材出し	SD1 目割 上部	H-D9	ヒノ	
1559	1396-08	不明品・残材	棒状丸	24.1	太31.5		船形材出し	SD1 目割	H-A11	ウラ	
1560	369-07	不明品・残材	棒状丸	23.2	(2.2)	1.3	船形材出し	SD1 目割	E-O9	ウラ	
1561	1397-06	不明品・残材	棒状丸	20.3	1.6	0.9	船形材出し	SD1 目割	E-Y10	ヒノ	
1562	369-08	不明品・残材	棒状丸	20.6	太31.5		船形材出し	SD1 目割 下層	E-P10	ウラ	
1563	1397-01	不明品・残材	棒状丸	19.4	2.2	1.2	船形材出し	SD1 目割	H-C10	ヒノ	
1564	369-05	不明品・残材	棒状丸	18.2	1.4	1.1	船形材出し	SD1 目割	E-W10	ヒノ	
1565	341-07	不明品・残材	棒状丸	16.6	太32.6		船形材出し	SD1 目割	E-R11	ウラ	
1566	1393-04	不明品・残材	棒状丸	16.0	2.0	1.7	船形材出し	SD1 目割	H-B11	ウラ	
1567	1348-03	不明品・残材	棒状丸	15.9	1.7	0.8	船形材出し	SD1 目割	E-Y10	ヒノ	
1568	1397-03	不明品・残材	棒状丸	17.4	2.2	1.2	船形材出し	SD1 目割 下層	H-H9	ヒノ	
1569	341-08	不明品・残材	棒状丸	16.7	太31.7		船形材出し	SD1 目割	E-U9	コウヤク	
1570	378-05	不明品・残材	棒状丸	25.3	2.7	1.7	船形材出し	SD1 目割	E-X10	ウラ	
1571	311-04	不明品・残材	棒状丸	18.6	1.9	1.8	船形材出し	SD1 目割 船石	E-Q11	ウラ	

調査 番号	実測番号	別種	分類	直径 (cm)		高さ	位置	地区	樹種	備考
				全径	冠径					
1572	1397-06	先尖棒	有頭棒	21.6	2.4	1.2	SD1 目録	H-C10	ヒノキ	
1573	1397-07	先尖棒	有頭棒	(15.9)	2.4	1.6	SD1 目録	H-N12	ウツギ	
1574	374-05	先尖棒	有頭棒	33.7	太31.1		SD1 目録	E-S9	ヒノキ	
1575	374-06	先尖棒	有頭棒	(16.0)	太31.8		丸太材	E-T13	針葉樹	
1576	1399-03	先尖棒	有頭棒	39.2	太31.8		SD1 目録	H-C9	マツ	多数刀傷の痕有り
1577	378-02	先尖棒	有頭棒	(29.2)	太32.2		SD1 目録	E-T10	マツ	
1578	1399-07	先尖棒	有頭棒	32.2	太32.1		SD1 目録	H-B10	マツ	
1579	1348-07	有頭棒	有頭棒	A (13.1)	太31.8		SD1 目録	H-D10	マツ	
1580	405-03	有頭棒	有頭棒	A (19.5)	太31.8		SD1 目録	E-S12	ヒノキ	
1581	1389-09	有頭棒	有頭棒	A (24.1)	太32.0		SD1 目録	H-E9	ヒノキ	
1582	383-04	有頭棒	有頭棒	A (21.8)	太32.0		SD1 目録	E-T15	ヒノキ	
1583	383-06	有頭棒	有頭棒	A (24.0)	太32.5		SD1 目録	E-U12	スダシ	
1584	1411-01	有頭棒	有頭棒	A (66.7)	太33.4		SD1 目録	E-Y10	コナラ	コナラ葉アカガシ葉風
1585	380-01	有頭棒	有頭棒	A (50.4)	太34.5		SD1 目録	E-S11	サカキ	
1586	383-01	有頭棒	有頭棒	A (37.0)	4.5	1.8	SD1 目録	E-S12	ヒノキ	欠損部跡付
1587	329-01	有頭棒	有頭棒	A (27.1)	太32.8		SD1 目録	E-P9	ヤブツバキ	
1588	330-04	有頭棒	有頭棒	A (7.0)	太32.7		SD1 目録	E-T13	シイ	
1589	321-01	有頭棒	有頭棒	A (34.0)	3.5	2.4	SD1 目録	E-N8	カヤ	
1590	312-10	有頭棒	有頭棒	A (19.8)	太31.9		SD1 目録	E-T14	ヒノキ	
1591	385-03	有頭棒	有頭棒	B (29.2)	太319.4		SD1 目録	E-S11	スダシ	
1592	1347-06	有頭棒	有頭棒	B (21.7)	3.6	0.5	SD1 目録	H-L12		
1593	1340-12	有頭棒	有頭棒	B (13.5)	2.6	1.1	SD1 目録	E-Y11		
1594	405-02	有頭棒	有頭棒	C (27.4)	太31.1		SD1 目録	E-P11	コナラ	
1595	1417-02	有頭棒	有頭棒	D (16.1)	4.1	2.4	SD1 目録	H-A12	クロマツ	
1596	1348-10	有頭棒	有頭棒	D (7.0)	3.3	1.0	SD1 目録	E-D8	コナラ	コナラ葉アカガシ葉風
1597	305-03	有頭棒	有頭棒	(66.0)	(2.3)	2.5	SD1 目録	E-V11	スギ	
1598	1015-03	有頭棒	有頭棒	64.8	3.4	1.8	SD1 目録	H-I10		
1599	311-03	有頭棒	有頭棒	33.2	1.4	1.3	SD1 目録	E-V12	ヒノキ	
1600	378-08	有頭棒	有頭棒	(21.6)	(2.5)	(1.6)	SD1 目録	E-Y12	ヒノキ	
1601	1421-04	有頭棒	有頭棒	(24.3)	(2.3)	0.8	SD1 目録	H-A11	サワラ	
1602	1399-08	有頭棒	有頭棒	22.9	1.5	1.1	SD1 目録	H-C9	ヒノキ	
1603	369-03	有頭棒	有頭棒	(32.0)	太33.2		SD1 目録	E-T13	コナラ	コナラ葉アカガシ葉風
1604	1399-02	有頭棒	有頭棒	(33.0)	2.2	1.0	SD1 目録	H-A10	スギ	

報告番号 実測番号	調査年度	分類	質量 (cm)		長さ	幅	厚さ		水取中等	層位	地区	新種	備考
			全長	幅			厚さ	厚さ					
1629	330-09	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	14.8	△33.0			芯持押出し	SD1 田層	E-N08	ヤキ瓦	
1630	1417-09	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(4.5)	本32.9			芯持押出し	SD1 田層	H-09	ヤキ瓦	
1640	1053-01	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	70.5	14.6	2.6		根目	SD1 田層	H-A9	ヤキ瓦	材質面に方孔並列の小眼が本瓦で隣接し接合
1641	1053-02	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	71.5	10.7	2.6		根目	SD1 田層	E-Y9	ヤキ瓦	材質面に方孔並列の小眼が本瓦で隣接し接合
1642	1427-03	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	26.6	(6.9)	2.0		根目	SD1 田層	H-A9	ヤキ瓦	
1643	401-04	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	25.2	(13.0)	0.9		透根目	SD1 田層	E-T14	ヒノキ	
1644	401-02	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(31.8)	(14.4)	1.3		透根目	SD1 田層	E-S11	ヒノキ	
1645	376-01	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	22.0	(15.6)	0.7		透根目	SD1 田層	E-R13	ヒノキ	
1647	367-09	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(25.2)	(16.7)	1.8		透根目	SD1 田層	E-X12	ヤキ瓦	
1648	1425-02	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	26.4	(9.0)	1.1		透根目	SD1 田層	E-R12	ヤキ瓦	
1649	388-03	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	53.9	13.4	2.6		透根目	SD1 田層	H-C10	ヒノキ	片当たり残等
1649	388-03	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	33.0	14.3	2.6		透根目	SD1 田層	E-U12	ヤキ瓦	傾斜部に本瓦有り
1650	341-03	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(15.6)	5.8	1.1		根目	SD1 田層	E-W11	ヤキ瓦	
1651	397-01	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(48.9)	9.2	1.5		透根目	SD1 田層	E-R11	ヤキ瓦	立方形状に並列の穿孔有り
1652	385-01	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(41.6)	19.0	1.3		透根目	SD1 田層	E-P9	ヤキ瓦	
1653	1432-02	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(45.9)	17.5	2.9		根目	SD1 田層	E-X10	ヤキ瓦	
1654	1436-02	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	47.3	11.4	2.1		透根目	SD1 田層	H-E9	ヤキ瓦	
1655	407-01	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(59.6)	(6.3)	1.0		透根目	SD1 田層	E-T10	ヒノキ	
1656	411-02	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(55.9)	(6.7)	1.5		透根目	SD1 田層	E-V12	ヒノキ	
1657	367-01	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(45.6)	(10.5)	1.6		透根目	SD1 田層	E-U9	ヤキ瓦	
1658	312-02	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(16.6)	(6.4)	1.2		根目	SD1 田層	E-V9	ヤキ瓦	
1659	307-04	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(24.7)	(13.0)	(1.8)		根目	SD1 田層	E-T13	ヤキ瓦	表面に方眼付
1660	382-06	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(23.6)	(8.3)	1.6		透根目	SD1 田層	E-W11	ヒノキ	
1661	371-07	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	21.3	5.8	1.0		透根目	SD1 田層	E-U13	アサナロ	
1662	376-05	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(23.9)	(6.9)	1.0		根目	SD1 田層	E-R9	ヤキ瓦	
1663	1424-03	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(19.5)	(1.2)	(5.9)		根目	SD1 田層	E-Y10	ヤキ瓦	
1664	376-04	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(28.4)	(7.4)	(6.9)		根目	SD1 田層	E-U12	ヤキ瓦	
1665	370-05	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(20.5)	5.0	1.5		透根目	SD1 田層	E-W10	ヤキ瓦	コナノミ類が方角ノミ類
1666	1410-02	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(47.0)	(7.0)	0.9		透根目	SD1 田層	E-U8	ヤキ瓦	
1667	1437-01	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(41.3)	8.6	2.7		根目	SD1 田層	H-A10	ヤキ瓦	
1668	363-03	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(28.2)	5.1	1.6		透根目	SD1 田層	E-T13	ヒノキ	
1669	1410-02	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(17.9)	2.9	1.1		透根目	SD1 田層	E-S9	ヤキ瓦	羽村産人
1670	1419-04	不明品・残材	硬炭瓦	硬炭瓦	(41.0)	5.1	1.3		透根目	SD1 田層	H-P9	ヤキ瓦	

種別 番号	実測番号	源 種	分類	寸法(cm)		木割り等	層 位	地 区	樹 種	備 考
				全長	厚さ					
1671	1348-06	不明品・残材	板状具	9.7	3.0	0.8	SD1 直層	H-B10	ヒノキ	
1672	378-08	不明品・残材	板状具	39.5	(3.6)	1.0	透庇目	E-T12	ササ	
1673	1340-06	不明品・残材	板状具	18.5	(3.1)	1.3	SD1 直層	H-H10	ヒノキ	
1674	378-04	不明品・残材	板状具	34.4	(3.6)	1.6	板口	E-S12	ヒノキ	
1675	370-11	不明品・残材	板状具	(26.8)	5.0	1.0	透庇目	E-Q11	スダシイ	
1676	376-06	不明品・残材	板状具	(19.1)	(3.5)	0.9	透庇目	E-S11	ササ	
1677	1416-06	不明品・残材	板状具	19.0	(4.7)	0.9	板口	H-E10	ヒノキ	裏面1/2残汁
1678	370-01	不明品・残材	板状具	(21.0)	(5.4)	0.8	板口	E-U12	ササ	
1679	378-06	不明品・残材	板状具	(21.5)	(3.8)	0.8	板口	E-T12	ササ	別材挿入
1680	1424-01	不明品・残材	板状具	(30.3)	(4.0)	1.7	SD1 直層	H-J11	ヒノキ	
1681	1417-09	不明品・残材	板状具	(18.1)	5.5	1.0	透庇目	H-A1	ササ	
1682	372-06	不明品・残材	板状具	(21.6)	(4.2)	(1.1)	板口	E-U13	ヒノキ	
1683	312-06	不明品・残材	板状具	(16.0)	2.8	1.1	板口	E-S10	サシ風	補修用ササ
1684	1471-18	不明品・残材	板状具	板(10.6)		1.1	透庇目	H-A1	ササ	二側一対の両孔が隣接しにくる
1685	397-02	不明品・残材	板状具	(42.2)	20.3	(3.5)	SD. 直層	E-Y12		
1686	075-02	不明品・残材	板状具	46.7	19.4	3.7	透庇目	E-T10	ヒノキ	
1687	1043-01	不明品・残材	板状具	(59.3)	16.4	2.3	板口	H-M13		河階部に出納
1688	407-02	不明品・残材	板状具	(29.8)	25.3	4.8	板口	E-S12		
1689	1352-06	不明品・残材	板状具	(18.0)	4.4	0.8	透庇目	H-A10	ヒノキ	
1690	1352-04	不明品・残材	板状具	(15.5)	4.8	1.0	板口	H-A10	ヒノキ	
1691	392-03	不明品・残材	板状具	25.2	11.8	1.9	透庇目	E-R9	ヒノキ	
1692	1426-03	不明品・残材	その他	32.4	5.9	0.9	SD1 直層下部→直層	H-B9	ヒノキ	
1693	396-05	不明品・残材	板状具	26.6	15.8	1.9	透庇目	E-U11		
1694	386-04	不明品・残材	板状具	19.1	13.1	2.0	透庇目	E-U13		
1695	375-01	不明品・残材	板状具	43.5	(9.4)	1.1	透庇目	E-Q10	ササ	
1696	1332-06	不明品・残材	板状具	(9.3)	9.5	0.6	透庇目	E-A10	ササ	
1697	1425-04	不明品・残材	板状具	15.9	13.0	1.5	透庇目	H-A12	ササ	樹体の一部を板状物出す
1698	1427-04	不明品・残材	板状具	14.2	10.8	2.5	板口	E-Y10	ヒノキ	
1699	349-01	不明品・残材	板状具	(26.0)	10.0	1.2	板口	E-N9	ササ	
1700	330-01	不明品・残材	板状具	(26.0)	9.0	1.2	透庇目	E-T13	ササ	脚付木割り部部分の可能残存?
1701	1422-02	不明品・残材	板状具	10.3	34.7	1.4	透庇目	H-C10	ササ	
1702	375-07	不明品・残材	板状具	(26.7)	(5.2)	1.0	透庇目	E-T13	ヒノキ	
1703	1470-12	不明品・残材	板状具	(19.7)	(6.8)	1.0	板口	E-X-Y9-10	ササ	

調査番号	調査内容	源種	分類	位置 (cm)		木根の寄	腐位	地区	樹種	備考	
				全長	深さ						
1704	1470-13	不明品・残材	根状具	19.6	(7.9)	芯根目	SD1 1層	H-B11	ヒノキ		
1705	380-02	不明品・残材	根状具	(51.9)	10.5	芯根目	SD1 1層	E-R11	スギ	欠損部抜け	
1706	404-01	不明品・残材	根状具	(54.5)	14.3	根目	SD1 1層	E-N9	ヒノキ		
1707	1434-02	不明品・残材	根状具	48.3	(8.8)	根目	SD1 1層下部	H-L12	スギ		
1708	384-01	不明品・残材	根状具	(60.0)	(8.9)	根目	SD1 1層	E-P10	ヒノキ		
1709	401-01	不明品・残材	根状具	(88.6)	(18.3)	根目	SD1 1層	E-S13	コナラ属ノスギ	片重断やがた残部有り	
1710	382-09	不明品・残材	根状具	31.9	10.0	芯根目	SD1 1層左部	不明	スギ		
1711	1427-03	不明品・残材	根状具	22.6	(7.6)	根目	SD1 1層	H-K13	スギ		
1712	1416-01	不明品・残材	根状具	(22.3)	(6.5)	根目	SD1 1層	H-D10	スギ		
1713	376-01	不明品・残材	根状具	(40.1)	(6.6)	根目	SD1 1層	E-T9	スギ		
1714	406-03	不明品・残材	根状具	47.0	18.5	根目	SD1 1層	E-T13	スギ		
1715	408-02	不明品・残材	根状具	(57.3)	11.8	2.1	芯根目	E-U11	ヒノキ		
1716	1404-01	不明品・残材	根状具	残(37.4)		3.2	芯根目	H-C10	サツキ	片重断やがた残 断部抜きのみ	
1717	400-02	不明品・残材	根状具	30.6	17.4	2.1	芯根目	E-U12	シイ		
1718	1472-06	不明品・残材	根状具	(23.5)	14.6	1.3	根目	SD1 1層断部下部	H-P10	スギ	
1719	068-02	不明品・残材	根状具	(103.0)	21.0	3.1	芯根目	SD1 1層	E-T12	ヒノキ	
1720	135-01	不明品・残材	根状具	(91.1)	(24.7)	(3.2)	根目	SD1 1層	E-W12	クスノキ	断部一部抜け
1721	125-02	不明品・残材	根状具	(98.5)	(18.9)	2.3	根目	SD1 1層	E-U13	ヒノキ	
1722	404-02	不明品・残材	根状具	38.7	12.5	4.2	芯根目	SD1 1層	E-T13	ヒノキ	表面1/2抜け
1723	1083-03	不明品・残材	根状具	(62.8)	(8.7)	(2.1)	根目	SD1 1層	E-Y10	コナラ	
1724	401-03	不明品・残材	根状具	(25.2)	(10.1)	1.7	根目	SD1 1層	E-T11	ヒノキ	
1725	1015-01	不明品・残材	根状具	72.5	(15.5)	(1.2)	根目	SD1 1層	H-N12	コナラ	薄板
1726	1425-03	不明品・残材	根状具	(25.8)	13.4	1.6	根目	SD1 1層上部	H-I10	コナラ	
1727	127-03	不明品・残材	根状具	87.0	15.0	4.7	根目	SD1 1層上部	不明	ムクロジ	
1728	1068-02	不明品・残材	根状具	(97.0)	(19.0)	6.0	根目	SD1 1層上部	H-N14	クロマツ	
1729	1037-01	不明品・残材	有孔根	(90.2)	12.9	3.8	根目	SD1 1層	E-Y10	コナラ	小刀加工品(樹上)による仕上げ残部
1730	372-12	不明品・残材	根状具	66.6		1.0	根目	SD1 1層	E-S11	ヒノキ	
1731	1348-15	不明品・残材	根状具	7.1	5.8	0.5	根目	SD1 1層	H-A9	コナラ	コナラ属ノスギ
1732	1428-04	不明品・残材	その他	36.2	13.8	4.6	半断部出し	SD1 1層上部	H-E9	サツキ	
1733	1428-04	不明品・残材	その他	(22.9)	8.9	4.9	根状部出し	SD1 1層上部	H-E9	スギ	
1734	322-02	不明品・残材	その他	38.9	4.3	1.0	芯根目	SD1 1層	E-T12	ヒノキ	
1735	377-01	不明品・残材	その他	(29.3)	5.5	2.0	半断部出し	SD1 1層	E-O9	ヒノキ	表面1/4抜け
1736	396-03	不明品・残材	その他	(13.0)	8.0	1.3	根目	SD1 1層	E-T9	ヒノキ	

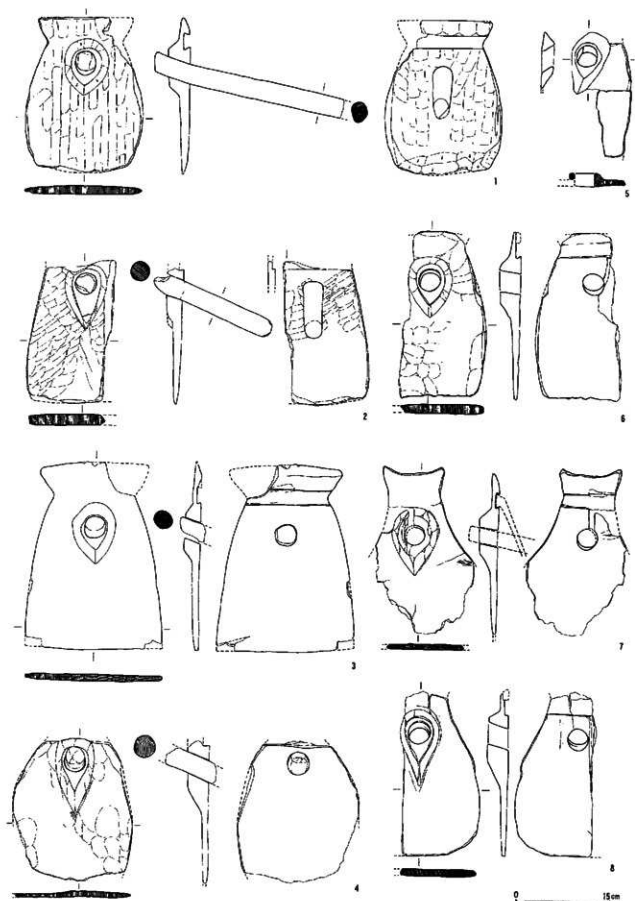
調査番号	実測番号	器具	分類		寸法		小取の寸	脚立	地区	財種	備考	
			全長	皿高	皿高	皿高						
1737	1417-01	不明品・残材	その他		18.7	0.0	1.4	総取目	SD1 皿脚上部	H-112	ヒノキ	棟梁の文様有り 糸巻籠太夫
1738	1722-04	不明品・残材	その他		38.2	5.1	2.7	取目	SD1 皿脚下部	E-S10		
1739	1422-04	不明品・残材	その他		59.3	4.0	2.3	芯材の出し	SD1 皿脚上部	H-112	ツグナシ	
1740	371-09	不明品・残材	その他		(19.3)	4.3	1.0	取目	SD1 皿脚	E-V12	スギ	
1741	1421-02	不明品・残材	その他		(54.6)	4.4	1.6	取目	SD1 皿脚上部	H-B11	ヒノキ	明材押入
1742	1340-10	不明品・残材	その他		(39.3)	3.6	1.4	取目	SD1 皿脚	H-111		
1743	1398-01	不明品・残材	その他		(11.8)	3.3	1.3	取目	SD1 皿脚下部	H-C10	ヒノキ	
1744	1398-03	不明品・残材	その他		(38.2)	2.9	1.1	取目	SD1 皿脚上部	H-C10	ヒノキ	
1745	372-03	不明品・残材	その他		(14.8)	2.3	0.4	芯取目	SD1 1 4部	E-U8	スギ	
1746	372-13	不明品・残材	その他		(14.8)	(2.2)	0.6	残目	SD1 皿脚下部	E-W11	針葉樹	
1747	1386-07	不明品・残材	その他		(15.0)	2.3	1.1	芯取目	SD1 皿脚	H-A11	ヒノキ	
1748	379-04	不明品・残材	その他		7.5	(6.6)	2.7	取材の出し	SD1 皿脚	E-W10	ヒノキ	組合せ残材
1749	385-08	不明品・残材	その他		(6.4)	5.3	3.0	取材の出し	SD1 皿脚	E-N8	スギ	
1750	380-03	不明品・残材	その他		19.9	4.8	2.6	取材の出し	SD1 皿脚芯下	E-O11	スギ	火燧部取付
1751	1397-09	不明品・残材	その他		(24.9)	4.1	2.7	半取材の出し	SD1 皿脚下部	H-111	コナラ属コナラ節	表面・漆喰付
1752	1401-02	不明品・残材	その他		31.6	11.8	4.9	半取材の出し	SD1 皿脚	E-S12	サウナ	
1753	378-01	不明品・残材	その他		(33.2)	3.1	1.6	取材の出し	SD1 皿脚下部	E-S9	スギ	片端部孔・透透部に出納有り
1754	371-04	不明品・残材	その他		(15.8)	5.2	2.6	取材の出し	SD1 皿脚	H-112	クスノキ	漆喰取付
1755	1352-03	不明品・残材	その他		(17.0)	4.8	2.8	取材の出し	SD1 皿脚	H-B9	スギ	
1756	1403-03	不明品・残材	その他		(11.4)	4.5	3.5	取材の出し	SD1 皿脚	H-C10	スギ	
1757	1340-08	不明品・残材	その他		(9.5)	3.8	4.3	取材の出し	SD1 皿脚	H-111		
1758	1428-01	不明品・残材	その他		19.9	7.3	3.1	取材の出し	SD1 皿脚	H-B10	スギ	
1759	1403-06	不明品・残材	その他		(19.2)	(4.2)	5.0	取材の出し	SD1 不明	不明	ヒノキ	
1760	312-08	不明品・残材	その他		(10.7)	(3.3)	1.1	取目	SD1 皿脚	E-V11	スギ	
1761	383-03	不明品・残材	その他		(38.3)	4.0	2.4	取材の出し	SD1 1 4部	E-U13	スギ	
1762	1421-01	不明品・残材	その他		(39.0)	2.8	(3.4)	取材の出し	SD1 皿脚	H-A9	ヒノキ	コナラ属アカボシ漆黒 明材押入
1763	1411-04	不明品・残材	その他		(40.0)	3.7	1.3	芯取目	SD1 皿脚	H-K12	ヒノキ	火燧部取付
1764	1398-08	不明品・残材	その他		(40.7)	5.0	2.6	取材の出し	SD1 皿脚上部	H-111	ヒノキ	
1765	1398-04	不明品・残材	その他		(41.5)	3.8	1.9	取材の出し	SD1 皿脚	H-B9	スギ	
1766	1398-01	不明品・残材	その他		(36.3)	4.3	1.8	取材の出し	SD1 皿脚	H-B10	スギ	
1767	379-08	不明品・残材	その他		(36.1)	(1.9)	3.0	取材の出し	SD1 皿脚	E-O8	ヒノキ	表面/2取付
1768	405-01	不明品・残材	その他		25.6	5.4	3.4	取材の出し	SD1 1 4部上	E-V10	ヒノキ	
1769	1423-04	不明品・残材	その他		483.0	2.4	1.8	取材の出し	SD1 皿脚	H-113	コナラ属アカボシ漆黒 組合せ残材 粘菌付漆喰付	

器具番号	実測番号	器 種	分類	全長	皿径 (cm)	厚さ	木取の等	測 位	地 区	新 種	備 考
1770	1423-01	不明品・残材	その他	24.3	(4.6)	3.8	素材作り出し	SD1 皿脚	H-A10-11	コウヤヤキ	
1771	1405-02	不明品・残材	その他	(28.3)	9.3	4.1	素材作り出し	SD1 皿脚	H-C11	ズキ	竹瓦取り
1772	380-03	不明品・残材	その他	(29.8)	(4.3)	4.3	素材作り出し	SD1 皿脚下部	E-R9	モミ風	
1773	381-02	不明品・残材	その他	(14.1)	3.8	2.6	素材作り出し	SD1 皿脚	E-X9	ヒノキ	何らの痕か
1774	377-04	不明品・残材	その他	(25.2)	7.3	3.0	素材作り出し	SD1 皿脚	E-S18	ズキ	
1775	389-01	不明品・残材	その他	(38.6)	9.1	6.5	芯持作り出し	SD1 皿脚	E-P10		
1776	401-01	不明品・残材	その他	(16.0)	太38.4		芯持作り出し	SD1 皿脚	H-A10	ヒノキ	
1777	1418-05	不明品・残材	その他	(15.6)	(11.2)	(3.0)	素材作り出し	SD1 皿脚	E-Y10	コウヤヤキが少風	
1778	1348-17	不明品・残材	その他	(6.6)	1.6	0.5	—	SD1 皿脚	E-Y10	タケヤキ	
1779	1352-08	不明品・残材	その他	(13.7)	7.8	2.5	素材作り出し	SD1 皿脚	H-C9	コウヤヤキが少風	
1780	1424-01	不明品・残材	その他	13.2	5.9	1.7	透底目	SD1 皿脚	H-E9	ズキ	
1781	329-05	不明品・残材	その他	6.4	6.3	1.4	素材作り出し	SD1 皿脚	E-M9	コウヤヤキコナ分	
1782	404-04	不明品・残材	その他	(22.5)	9.3	3.4	素材作り出し	SD1 皿脚	E-U9	ヤクヤ風	
1783	1464-02	不明品・残材	その他	(39.7)	12.7	6.0	透底作り出し	SD1 皿脚兼ト脚	E-Q10	モミ風	穴痕透抜け
1784	1331-01	不明品・残材	その他	32.4	太310.3		透底作り出し	SD1 皿脚兼ト脚	H-J10	タケ	何らの木製品か
1785	390-01	不明品・残材	その他	(52.3)	6.5	2.5	芯持作り出し	SD1 皿脚	E-T13		
1786	1391-03	不明品・残材	その他	(29.5)	5.1	4.3	芯持作り出し	SD1 皿脚上部	H-H10	アスター	
1787	380-05	不明品・残材	その他	(38.4)	太34.8		芯持作り出し	SD1 皿脚	E-N9	クローマフ	
1788	1481-04	不明品・残材	その他	32.9	3.8		芯持作り出し	SD1 皿脚	E-K13	ズキ	
1789	400-03	不明品・残材	その他	(6.4)	太35.1		素材作り出し	SD1 皿脚下部	H-J11	ズキ	
1790	327-04	不明品・残材	その他	(19.3)	太31.5		大木材	SD1 皿脚	E-X12	ヤクヤフ	
1791	375-08	不明品・残材	その他	(9.5)	4.4	1.3	飯目	SD1 皿脚	E-S12	ズキ	
1792	1340-09	不明品・残材	その他	(10.1)	3.8	1.5	素材作り出し	SD1 皿脚上部	H-H9		
1793	370-03	不明品・残材	その他	(15.6)	(5.2)	0.9	透底目	SD1 皿脚	E-T13	ズキ	
1794	308-05	不明品・残材	その他	23.1	太31.3		素材作り出し	SD1 皿脚	E-T13	ズキ	非常に精巧な作り
1795	1417-01	不明品・残材	その他	10.7	太34.5		芯持作り出し	SD1 皿脚	H-G10	イスガヤ風	
1796	377-03	不明品・残材	その他	(17.0)	5.9	2.0	透底目	SD1 皿脚	E-S12	シノ風?	穴痕透抜け 側縁部片断に付み
1797	1388-09	不明品・残材	その他	18.0	4.1	2.2	飯目	SD1 皿脚下部	H-C10	ヒノキ	何らの木製品か
1798	378-12	不明品・残材	その他	(13.7)	2.3	1.8	素材作り出し	SD1 皿脚	E-Y10	ヒノキ	
1799	1417-03	不明品・残材	その他	(15.8)	(2.0)	2.0	素材作り出し	SD1 皿脚下部	H-L12	コウヤヤキが少風	
1800	1416-04	不明品・残材	その他	(13.3)	(5.7)	(3.0)	素材作り出し	SD1 皿脚	H-A9	ヒノキ	
1801	1399-03	不明品・残材	その他	(12.0)	3.8	1.3	素材作り出し	SD1 皿脚	H-G9	ヒノキ	飯目 透抜け
1802	374-04	不明品・残材	その他	33.0	3.3	1.5	素材作り出し	SD1 皿脚	E-Q12	モミ風	丁具痕露著

調査 実施年度	器 種	分類	寸法 (cm)		部位	重量等	部位	地区	種 類	備 考
			全長	幅						
1803(1421-03)	不明品・焼材	その他	(21.2)	2.3	1.9	焼付痕跡なし	SD1 皿層	H-C9	スズ	
1804(1423-08)	不明品・焼材	その他	(25.4)	4.8	1.9	痕目	SD1 皿層	H-A9	ムクロジ	
1805(1348-11)	不明品・焼材	その他	(7.0)	(2.3)	1.9	芯部痕跡なし	SD1内 SZ	H-M12	ケヤキ	
1806(312-11)	不明品・焼材	その他	(8.4)	1.8	1.7	焼付痕跡なし	SD1 皿層	E-V11	コナラ属/カガクノ属	
1807(1410-01)	不明品・焼材	その他	26.5	△32.4		芯部痕跡なし	SD1 皿層	H-J11	ヤケ楓	月形による形が同一と見なして同一と見做す
1808(304-02)	不明品・焼材	その他	63.1	31.6	5.1	半面付痕跡なし	SD1 皿層	E-R8	ヒノキ	月形が同一と見做り 別件購入
1809(1361-01)	不明品・焼材	その他	42.1	(16.8)	3.2	新付痕跡なし	SD1 皿b層下層	H-M13	ヒノキ	
1810(1320-03)	不明品・焼材	その他	19.4	14.2	1.4	痕目	SD1 皿b層	H-D10	スズ	全皿焼け(生輪部盛目美しい)
1811(131-04)	不明品・焼材	その他	(76.3)	4.6	4.6	半面付痕跡なし	SD1 皿層	E-T9	スズ	
1812(1483-01)	不明品・焼材	その他	(66.2)	(5.0)	3.8	新付痕跡なし	SD1 皿b層	E-U13	ヒノキ	
1813(083-02)	不明品・焼材	その他	111.8	(9.8)	4.0	新付痕跡なし	SD1 皿層	E-S11	スズ	
1814(1438-02)	不明品・焼材	その他	(26.5)	15.1	4.3	新付痕跡なし	SD1 皿a層	H-D10	コナラ属	全皿焼け
1815(1001-01)	不明品・焼材	その他	91.2	(13.8)	2.1	痕目	SD1 皿a層	H-R9	ヒノキ	方形盛りの丸か
1816(1038-02)	不明品・焼材	その他	69.5	7.5	3.0	痕目	SD1 皿層	H-F9		
1817(054-02)	不明品・焼材	その他	(62.5)	(11.2)	2.4	痕目	SD1 皿層	E-S12		
1818(1484-01)	不明品・焼材	その他	(51.0)	(13.4)	(4.0)	新付痕跡なし	SD1 皿層	E-P9	ヒノキ科	全皿焼け
1819(1484-03)	不明品・焼材	その他	40.3	(8.7)	(3.6)	新付痕跡なし	SD1 皿層	E-U12	クロマツ	
1820(1487-02)	不明品・焼材	その他	(35.4)	(7.8)	3.1	新付痕跡なし	SD1 皿層	E-S11	スズ	
1821(1409-02)	不明品・焼材	その他	(21.8)	9.4	6.4	半面付痕跡なし	SD1 皿層	H-I11	コナラ属/スズ	
1822(404-03)	不明品・焼材	その他	(25.6)	(5.9)	2.3	痕目	SD1 皿層	E-T13	ヒノキ	
1823(1491-01)	不明品・焼材	その他	(46.6)	(12.5)	5.4	新付痕跡なし	SD1 皿層	E-R12	スズ/スズ	表面一部焼け
1824(110-03)	不明品・焼材	その他	(67.8)	(6.9)	(3.5)	新付痕跡なし	SD1 皿a層	E-N6		
1825(1016-01)	不明品・焼材	その他	(53.5)	(20.0)	(7.0)	新付痕跡なし	SD1 皿b層下層上層	H-G9	コナラ属/コナラ属	農具部材か
1826(1408-01)	不明品・焼材	その他	54.8	(13.3)	4.8	新付痕跡なし	SD1 皿層	H-I9	スズ	
1827(1435-02)	不明品・焼材	その他	(54.2)	9.2	6.8	新付痕跡なし	SD1 皿a層	H-D9	ケヤキ	
1828(1429-01)	不明品・焼材	その他	48.2	(14.8)	7.0	新付痕跡なし	SD1 皿層	H-D10	ヒノキ	
1829(411-01)	不明品・焼材	その他	(48.6)	(10.7)	3.4	痕目	SD1 皿層	E-V9	ヒノキ	表面全面焼け
1830(396-02)	不明品・焼材	その他	57.6	5.5	3.0	半面付痕跡なし	SD1 皿層	E-V12	ヒノキ	
1831(1316-03)	不明品・焼材	その他	(17.5)	4.5	1.0	痕目	SD1 皿層下層	H-L12	コナラ属/カガクノ属	
1832(351-03)	不明品・焼材	その他	(17.2)	(9.8)	1.4	痕目	SD1 皿a層	E-N9	ヒノキ	
1833(1412-04)	不明品・焼材	その他	(15.7)	△33.7		芯部痕跡なし	SD1 皿層	H-A9	ムクロジ	
1834(1360-04)	不明品・焼材	その他	(27.5)	(2.4)	1.2	新付痕跡なし	SD1 皿層上層	H-F10	スズ	
1835(1345-01)	不明品・焼材	その他	(34.6)	(4.7)	(2.7)	新付痕跡なし	SD1 皿層下層	H-M12		欠損部焼け

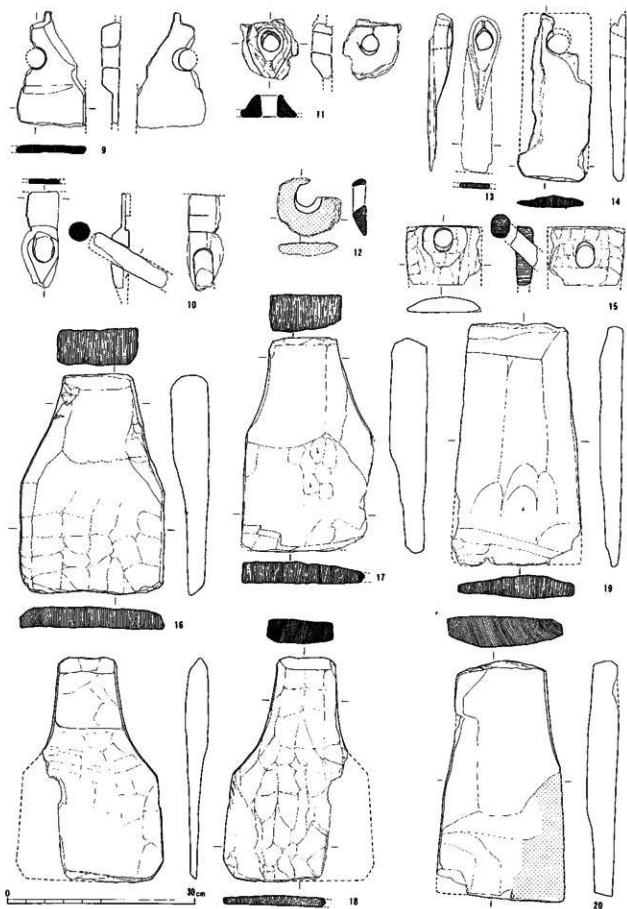
報告番号 観音寺	東原番号	記号		分類	寸法 (mm)		水没の等	級位	地区	樹種	備考
		長さ	厚さ		直径	断面					
1836	1429-01	不明品・残材	その他		26.4	太さ7.7	丸太材	SD1 目録	E-T9	ヤナギ	
1837	1382-01	不明品・残材	その他	(15.4)	22.2	7.7	芯材削出し	SD1 目録	H-G10	イヌガヤ	
1838	398-04	不明品・残材	その他	(47.0)	25.2	太さ6.3	丸太材	SD1 目録	E-U12	ヤナギ	
1839	1407-02	不明品・残材	その他	(47.0)	8.0	3.8	新材削出し	SD1 目録	E-X-Y9-10	ヒノキ	
1840	1060-01	不明品・残材	その他	(46.8)	13.2	9.8	芯材削出し	SD1 目録	H-M12	プロセツ	樹皮残心
1841	125-01	不明品・残材	その他	(62.8)	7.9	3.6	新材削出し	SD1 目録	E-U9	サカサバ	
1842	069-01	不明品・残材	その他	(90.4)	(5.5)	(3.4)	新材削出し	SD1 目録	E-S11		
1843	1055-01	不明品・残材	その他	(97.9)	9.8	4.6	新材削出し	SD1 目録	H-B10	モミ	
1844	028-02	不明品・残材	その他	(94.3)	太さ35.5		丸太材	SD1 目録	E-O9		
1845	028-01	不明品・残材	その他	(98.0)	太さ35.8		丸太材	SD1 目録	E-N9		表面1/3削け
1846	003-01	不明品・残材	その他	(94.2)	(5.1)	2.2	新材削出し	SD1 目録	E-O10		
1847	026-04	不明品・残材	その他	(76.2)	太さ7.5		丸太材	SD1 目録	E-P8		欠損削出し 枝打芯有り
1848	1049-01	不明品・残材	その他	51.8	15.1	8.1	新材削出し	SD1 目録	H-A11		いっぺん心残材
1849	313-01	不明品・残材	その他	(53.7)	9.0	4.5	半截削出し	SD1 目録	E-V9	欅丸材	
1850	343-01	不明品・残材	その他	(53.0)	6.0	2.0	新材削出し	SD1 目録	E-Y12	ツアラシ	
1851	411-01	不明品・残材	その他	(44.2)	(5.5)	3.1	新材削出し	SD1 目録	E-V12	アスナロ	
1852	1438-01	不明品・残材	その他	(10.0)	11.8	7.4	半截削出し	SD1 目録	E-P9	樺丸材	
1853	1409-01	不明品・残材	その他	25.3	太さ14.8		芯材削出し	SD1 目録	H-L14	ヒノキ	
1854	382-04	不明品・残材	その他	25.0	12.5	2.3	油紙口	SD1 目録	E-P10	スズ	
1855	1048-01	不明品・残材	その他	(65.9)	(23.3)	3.8	板目	SD1 目録	H-M12		
1856	026-01	不明品・残材	その他	(161.5)	太さ23.5		丸太材	SD1 目録	E-P10	イヌガヤ	自然木に近い状態
1857	1027-01	不明品・残材	その他	(177.3)	太さ38.0		丸太材	SD1 目録	H-B10	イヌガヤ	全截削け
1858	026-02	不明品・残材	その他	(160.0)	(13.4)	(9.5)	丸太材	SD1 目録	E-O9		自然木に近い状態
1859	116-01	不明品・残材	その他	135.5	16.5	6.9	新材削出し	SD1 目録	E-P9		コナラ製材時節
1860	061-01	不明品・残材	その他	197.4	(20.4)	12.5	新材削出し	SD1 不明	不明		コナラ製アカガシ製
1861	116-01	不明品・残材	その他	(124.0)	21.0	(12.0)	新材削出し	SD1 目録	E-N9		優良樹材か、樹皮残心
1862	1028-01	不明品・残材	その他	(112.0)	太さ16.0		丸太材	SD1 目録	E-Y10		全截削け
1863	3004-01	器具		C	38.0	24.6	4.3	板目	B-R13		
1864	3005-01	器具		C	(27.4)	(18.8)	4.3	板目	B-R13		
1865	3009-01	器具		C	(12.5)	(4.5)	1.3	板目	B-S12		
1866	3005-01	器具		C	(28.3)	19.6	1.3	油紙口	SR2		板削け下駄
1867	3009-01	器具		C	15.0	太さ5.5		SD1 目録	B-S14		板削け下駄
1868	3009-01	器具		C	(4.5)	(4.5)	(1.5)	芯材削出し	SR2		

番号	実用番号	型 様	分類	公差	寸法(mm)	木口の等	層 位	地 区	備 考
1809	3008-04	切縁板		特5.3	2.1	板H	SR2	B-R13	
1870	3005-03	切縁瓦	垂直	(11.1)	3.9	1.1	板H	B-L23	
1871	3009-04	切縁瓦	垂直	(29.8)	(2.6)	(3.2)	切材押出し	B-L23	
1872	3009-01	切縁瓦	垂直	(54.0)	4.0	2.5	切材押出し	B-R14	
1873	3005-08	切縁瓦	G	特(8.4)		板H	SR2	B-H16	
1874	3010-02	切縁瓦		特(42.8)		板H	SR2	B-Q25	
1875	3010-01	切縁瓦		特(55.8)		板H	SR2	B-Q25	
1876	3005-06	切縁瓦	H	特(13.6)		1.0	透縁目	B-O14	
1877	3005-07	切縁瓦		特13.1		1.0	透縁目	B-Q18	
1878	3003-04	切縁瓦	H	(16.8)	(5.5)	2.0	透縁目	B-S13	
1879	3005-01	切縁瓦	下縁	(16.7)	9.3	高34.5	透縁目	B-Y23	
1880	3003 06	切縁瓦	水平・垂直両用	(17.1)	9.9	1.7	透縁目	B-S13	
1881	3008-02	切縁瓦	切縁瓦	25.0	(8.4)	1.4	板H	B-R13	
1882	3005-04	切縁瓦	垂直	(27.5)	6.7	1.9	切材押出し	B-L15	
1883	3001 01	切縁瓦	切縁瓦	334.8	62.5	2.2	透縁目	B-R14	
1884	3007-04	切縁瓦	切縁瓦	(33.3)	(16.0)	2.0	透縁目	B-R24	
1885	3003-05	切縁瓦	切縁瓦	(9.4)	(16.3)	(1.8)	板H	B-S13	
1886	3002-02	切縁瓦	切縁瓦	197.5	433.0		切材押出し	B-Y24	
1887	3007-02	切縁瓦	切縁瓦	A1	14.3	8.8	板H	B-S12	
1888	3009-03	切縁瓦	切縁瓦	A1	(23.0)	(9.0)	(5.3)	切材押出し	SR2
1889	3002-01	切縁瓦	切縁瓦	(85.5)	(47.0)	6.5	板H	SR2	片側は垂直を指す
1890	3006-02	切縁瓦	有孔板	(29.0)	(16.3)	2.8	透縁目	B-O15	縦合草筋材
1891	3005-01	切縁瓦	切縁瓦	(7.1)	(6.2)	2.0	切材押出し	B-R23	
1892	3005-08	切縁瓦	切縁瓦	特7.0		1.0	透縁目	B-S19	
1893	3003-02	切縁瓦	有孔板	22.3	(3.5)	0.7	透縁目	B-R14	
1894	3007-01	切縁瓦	有孔板	(6.9)	1.3	0.4	板H	B-O15	何れの内側か
1895	3009-04	切縁瓦	有孔板	(13.0)	5.7	4.5	切材押出し	SR2	
1896	3003 03	切縁瓦	切縁瓦	35.5	(3.0)	1.1	透縁目	B-S13	
1897	3007-08	切縁瓦	切縁瓦	(42.0)	(6.2)	1.8	板H	B-S13	
1898	3007-03	切縁瓦	切縁瓦	(16.3)	(3.9)	(4.5)	切材押出し	B-Q17	何れの内側か
1899	3006 03	切縁瓦	有孔板	A (46.0)	A24.5		切材押出し	B-P15	切縁は水平を指す
1900	3003-01	切縁瓦	有孔板	65.8	5.3	1.6	透縁目	B-R14	切縁部か
1901	3008-03	切縁瓦	有孔板	(15.0)	4.1	1.1	透縁目	B-R13	



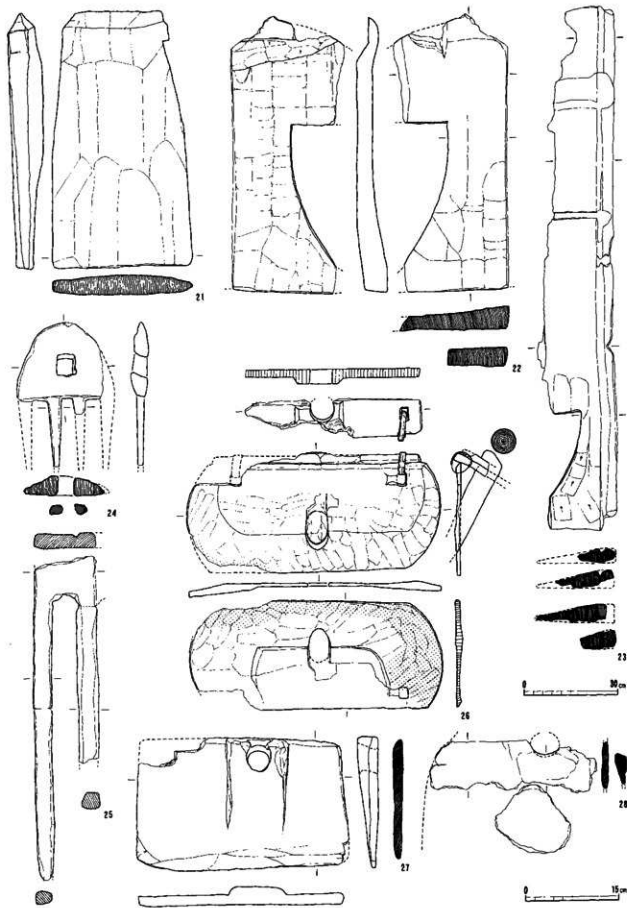
第1图 直柄平鍬 (1~8)

(1:6)



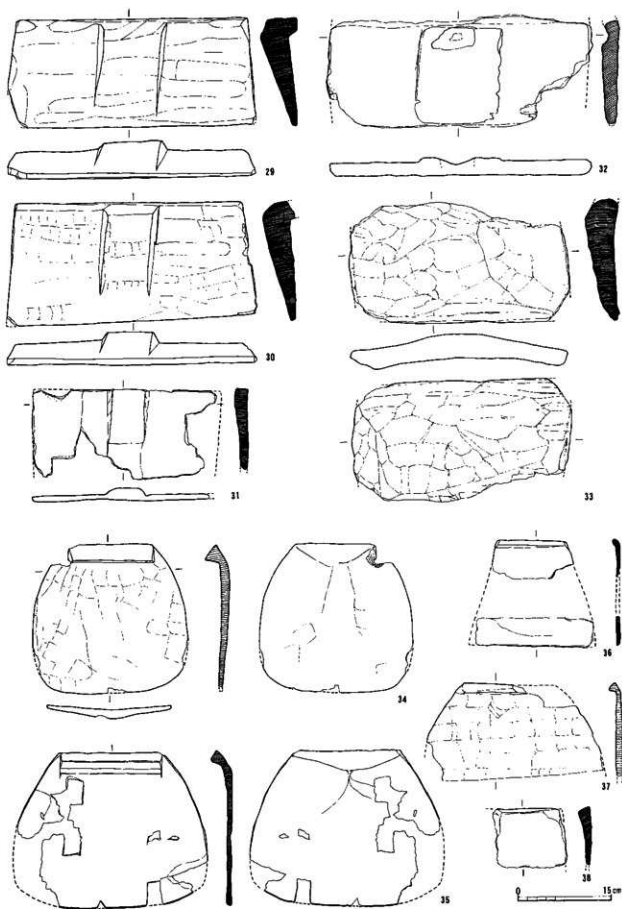
第2図 直柄平鉢・直柄平鉢未製品(9~20)

(1:6)



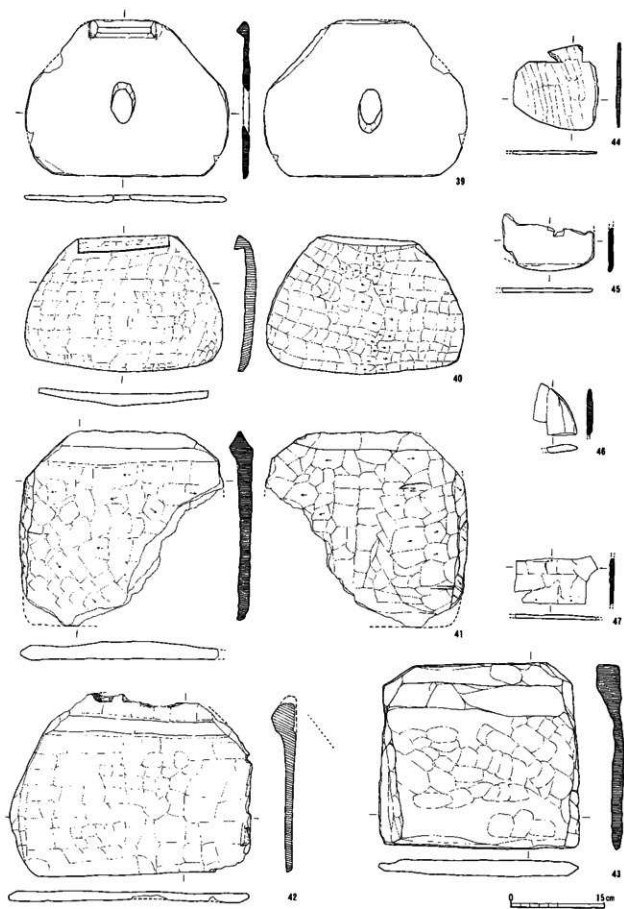
第3図 直柄平銀未製品・直柄又銀・横銀・泥除(21~28)

(23のみ1:12、その他1:6)



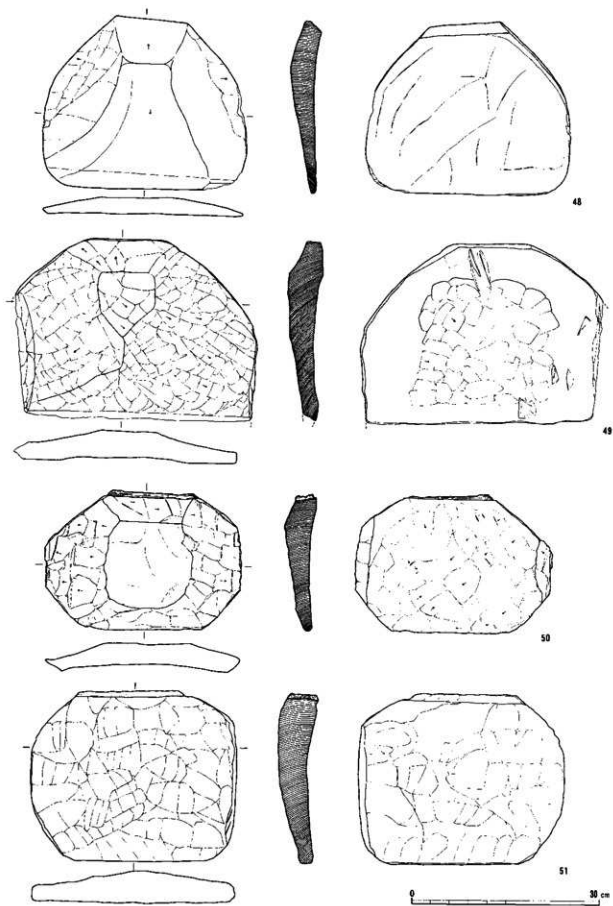
第4圖 横線・泥除(29~38)

(1:6)



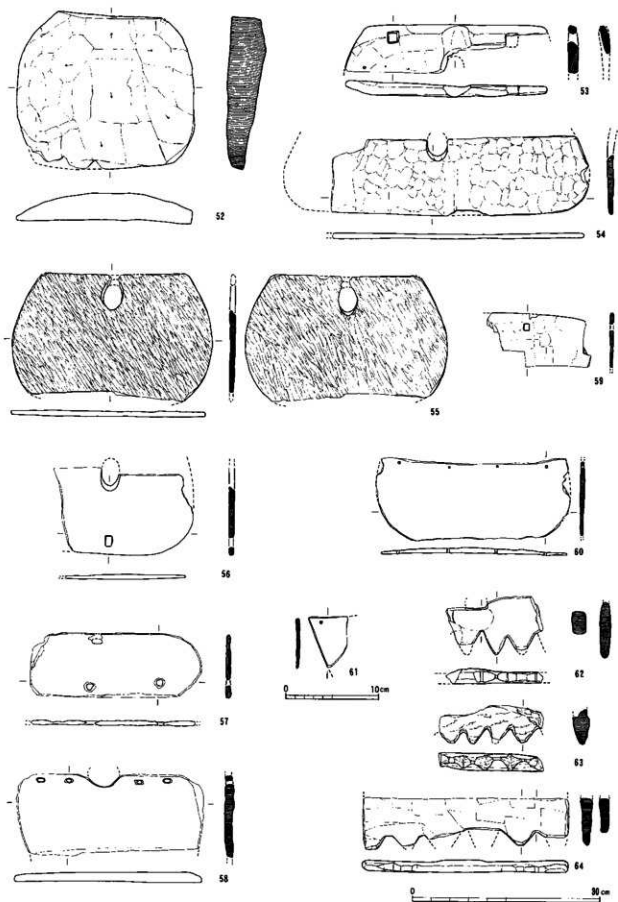
第5圖 泥除 (39~47)

(1:6)



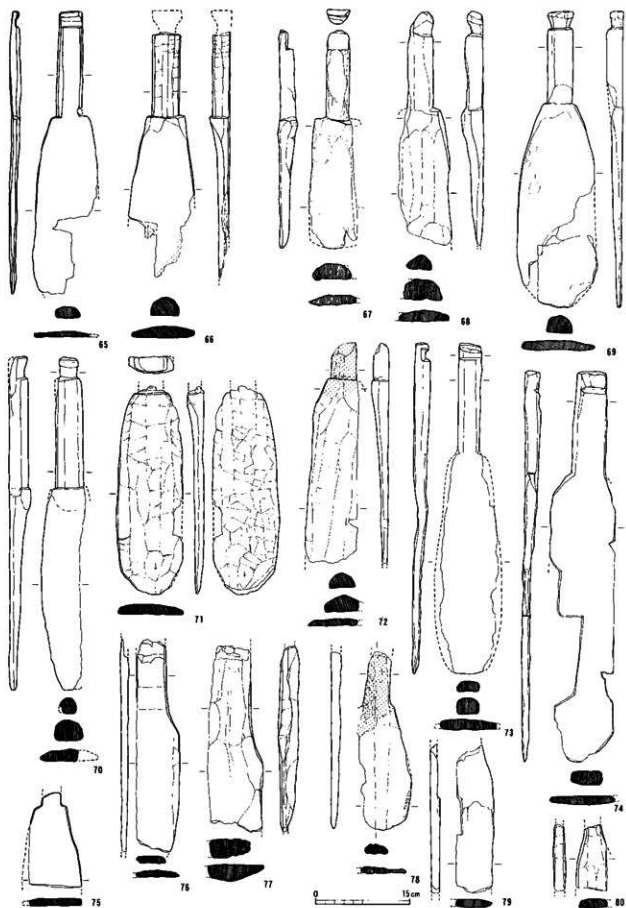
第6圖 泥罎 (48~51)

(1:6)



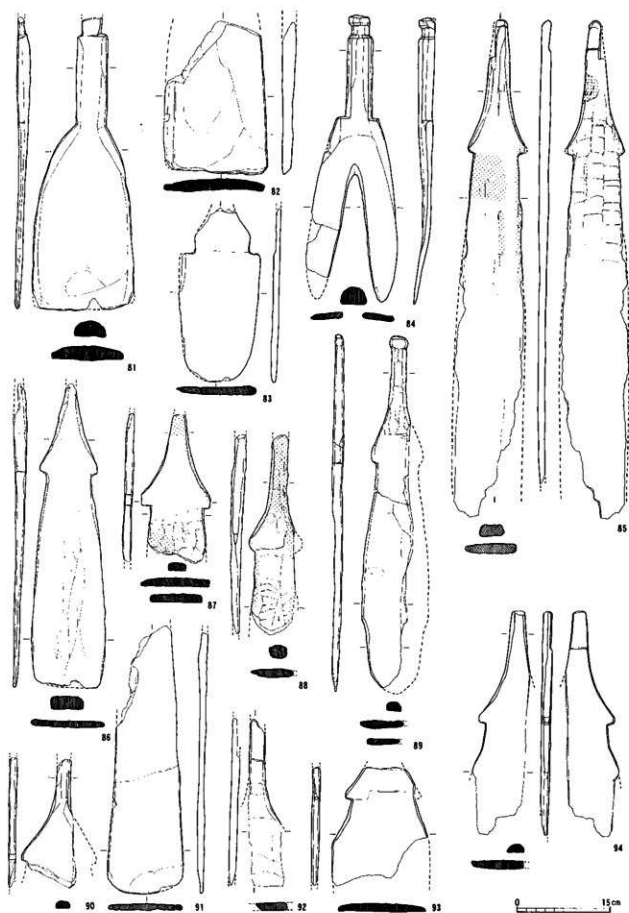
第7図 泥除・えぶり (52~64)

(61のみ1:4、その他1:6)



第8图 棒轴形曲柄平斧 (65~80)

(1:6)



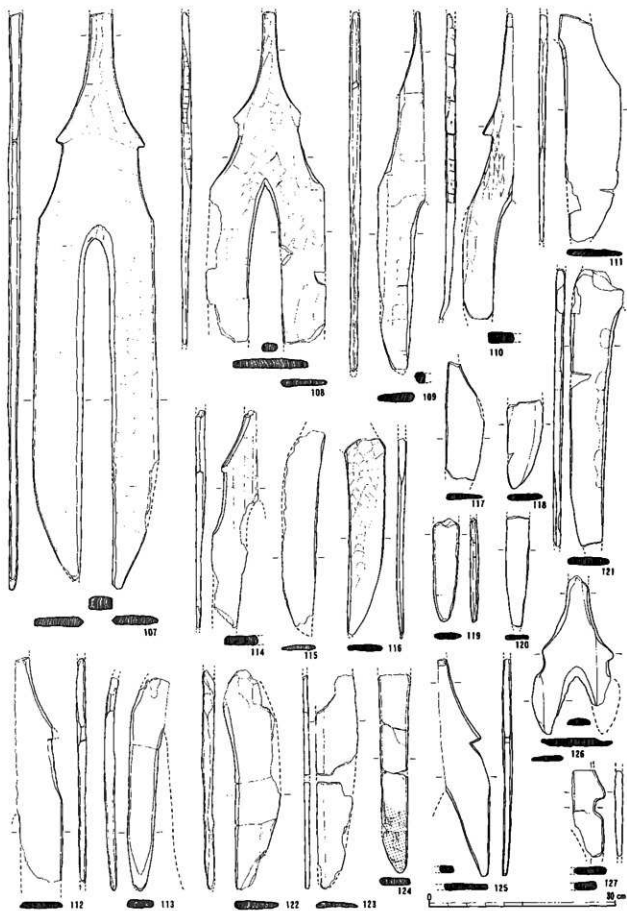
第9図 棒軸形曲柄平銀・棒軸形曲柄又銀・ナスビ形曲柄平銀 (81~94)

(1:6)



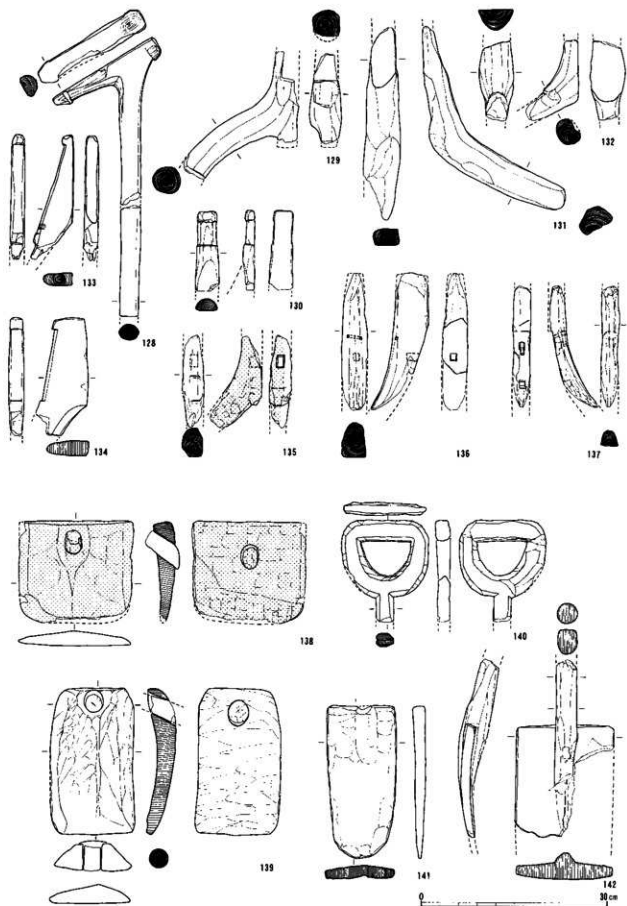
第10図 ナスビ形曲柄平鍔・ナスビ形曲柄又鍔 (95~106)

(1:6)



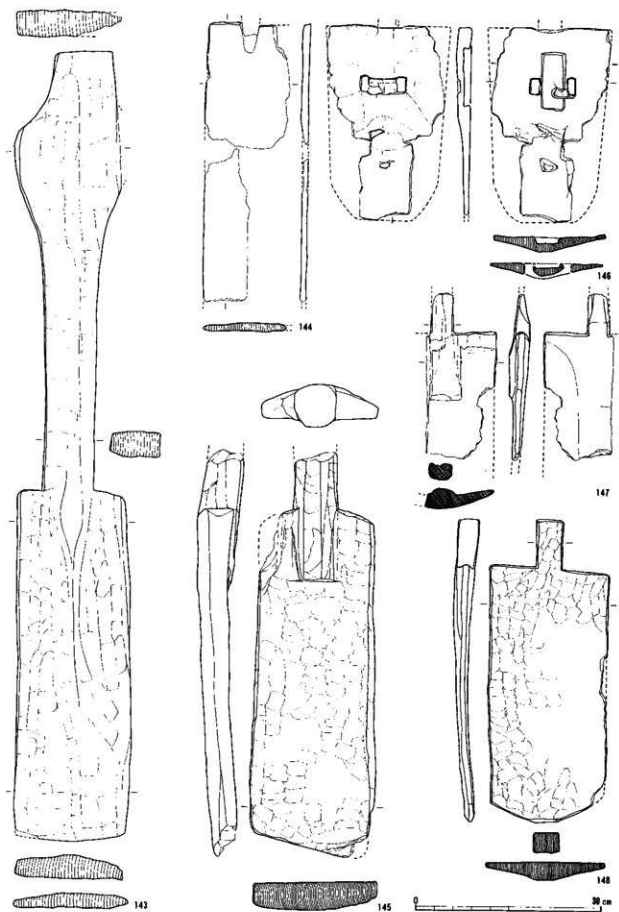
第11図 ナスビ形曲柄又鎌(107~127)

(1:6)



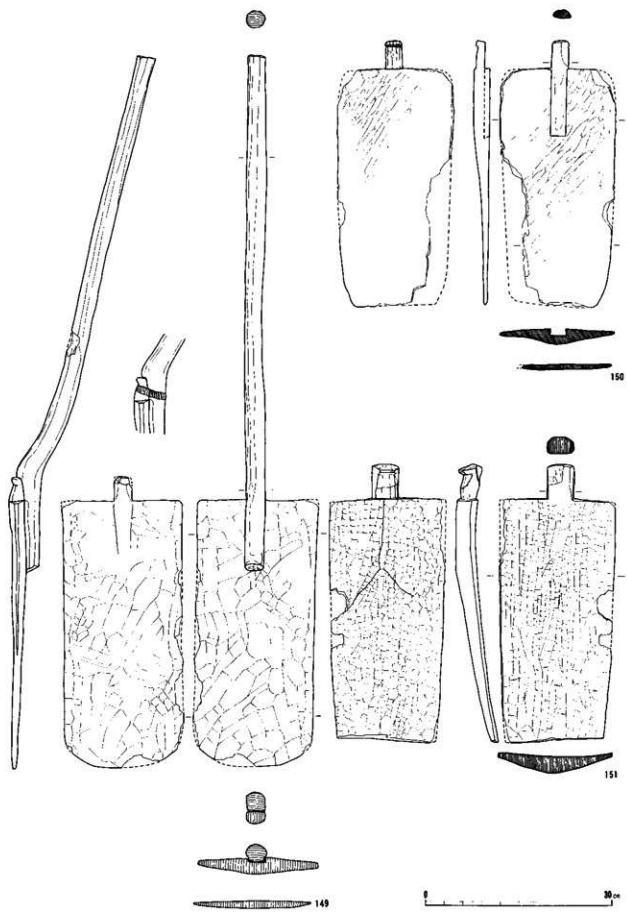
第12図 曲柄鎌の柄・払い鎌・一木平鋤(128~142)

(1:6)



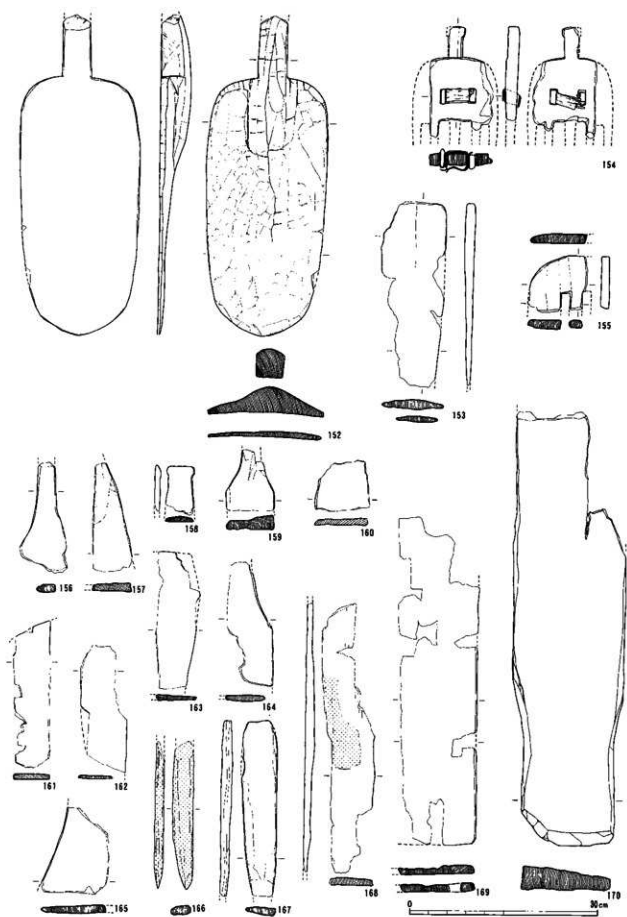
第13図 一木平櫛・組合せ平櫛(143~148)

(1:6)



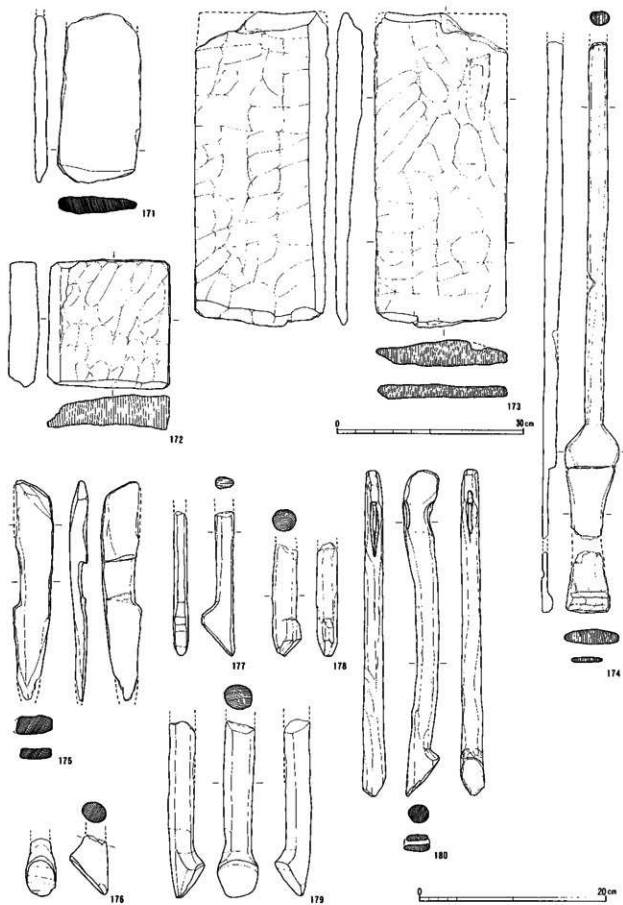
第14図 組合せ平甕(149~151)

(1:6)



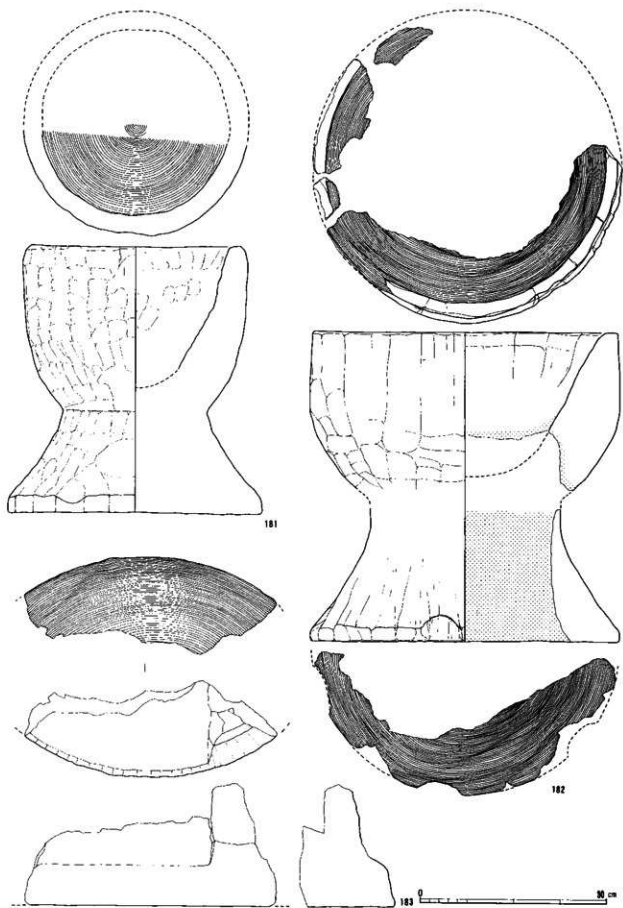
第15図 組合せ平鋤・不明鐵錫類・不明鐵錫類未製品(152~170)

(1:6)



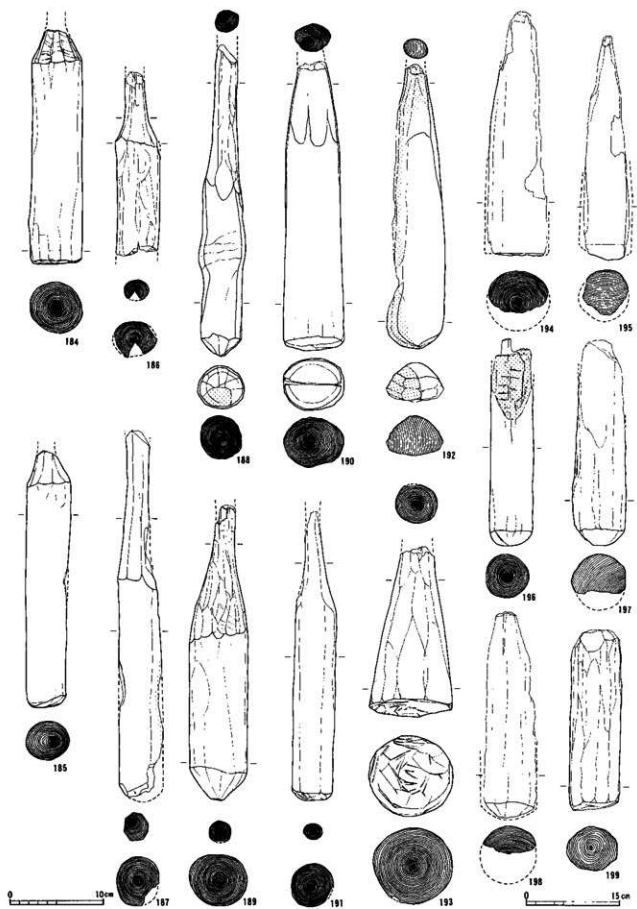
第16図 不明鉄錐類未製品・不明鉄錐類・鎌(171~180)

(171~174は1:6、その他1:4)



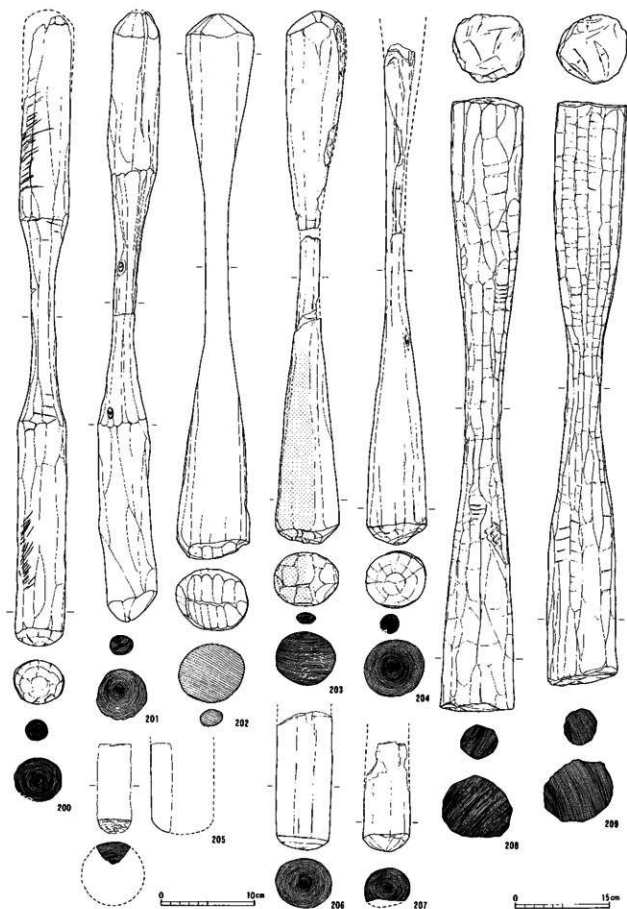
第17圖 白(181~183)

(1:6)



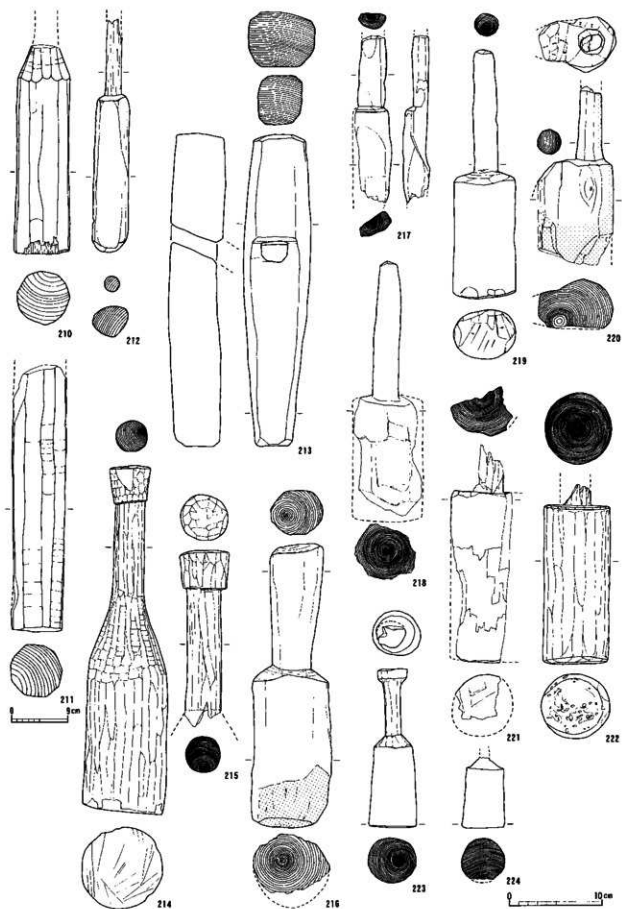
第18図 整件(184~199)

(187と193は1:4、その他1:6)



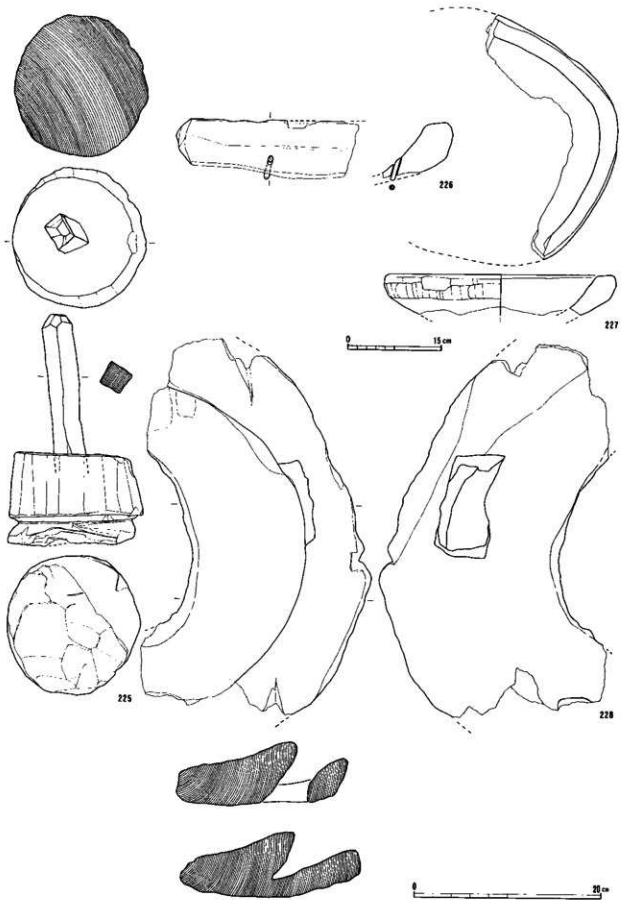
第19図 竖杵(200~209)

(206のみ1:4、その他1:6)



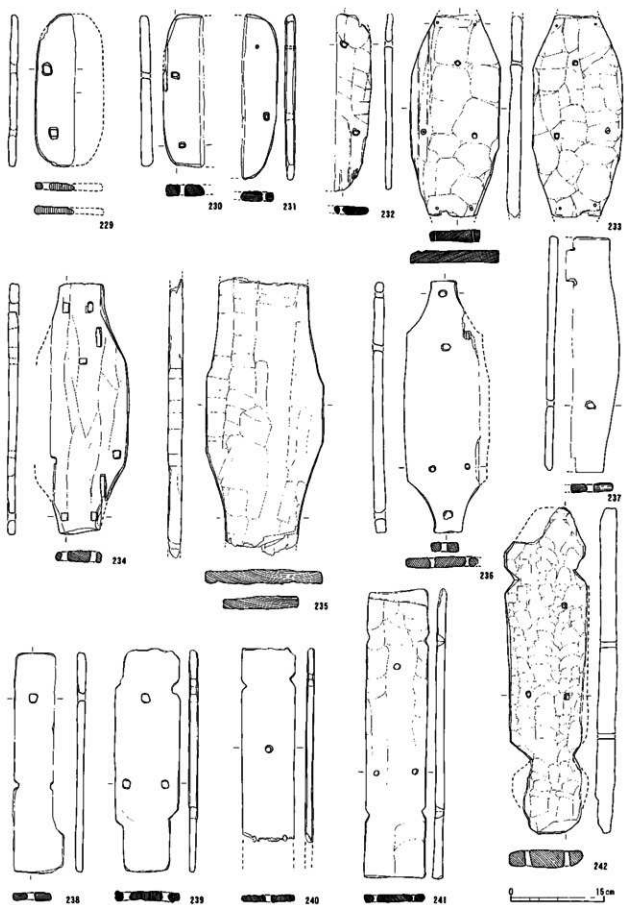
第20図 壺片・小型片・横片・横碇(210~224)

(210~211は1:6、その他1:4)



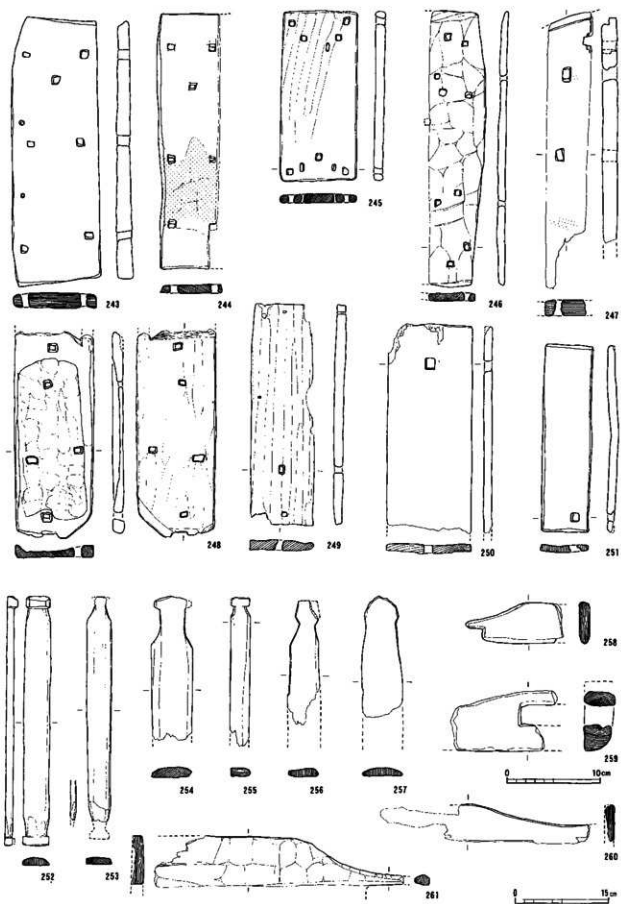
第21図 手斧・型台 (225~228)

(227のみ1:6、その他1:4)



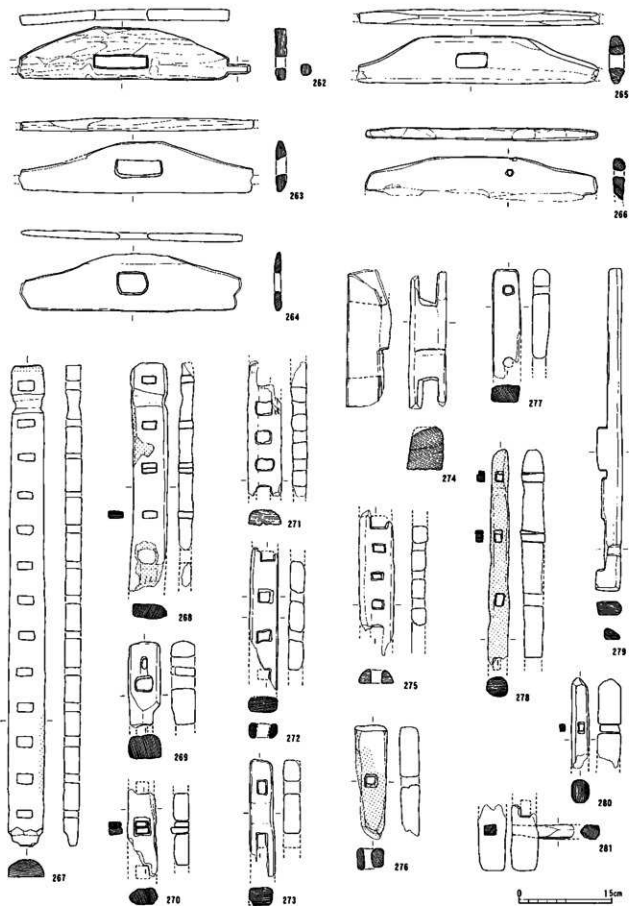
第22図 単純田下駄・円形袴付田下駄(229~242)

(1:6)



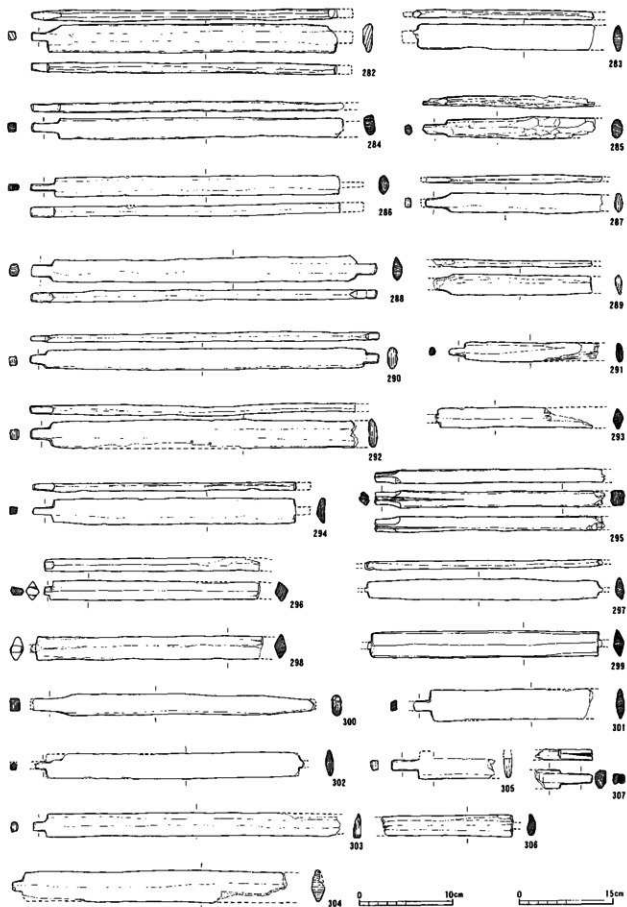
第23図 円形袴田下駄・方形袴田下駄(243～261)

(247・257・259は1:4、その他1:6)



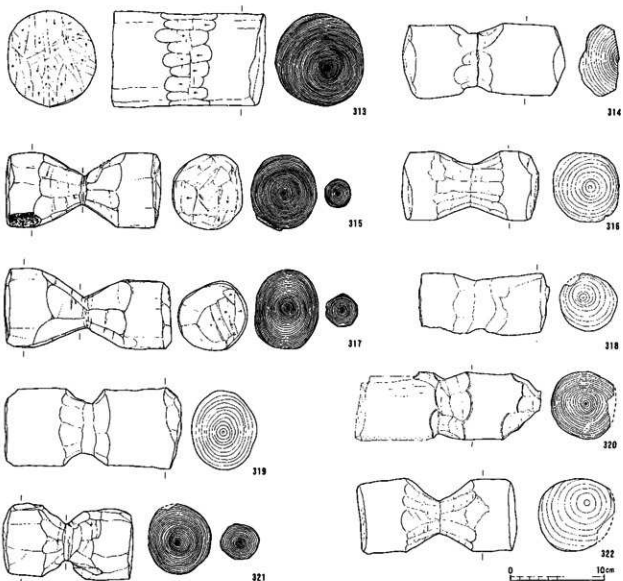
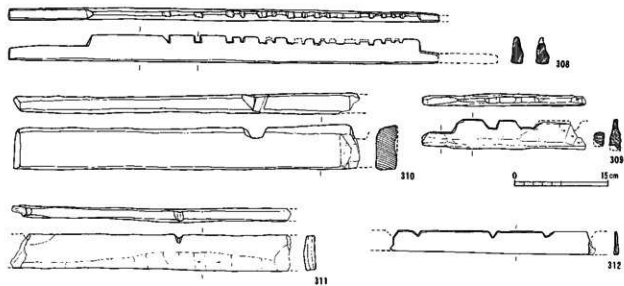
第24図 方形埴田下駄(262~281)

(1:6)



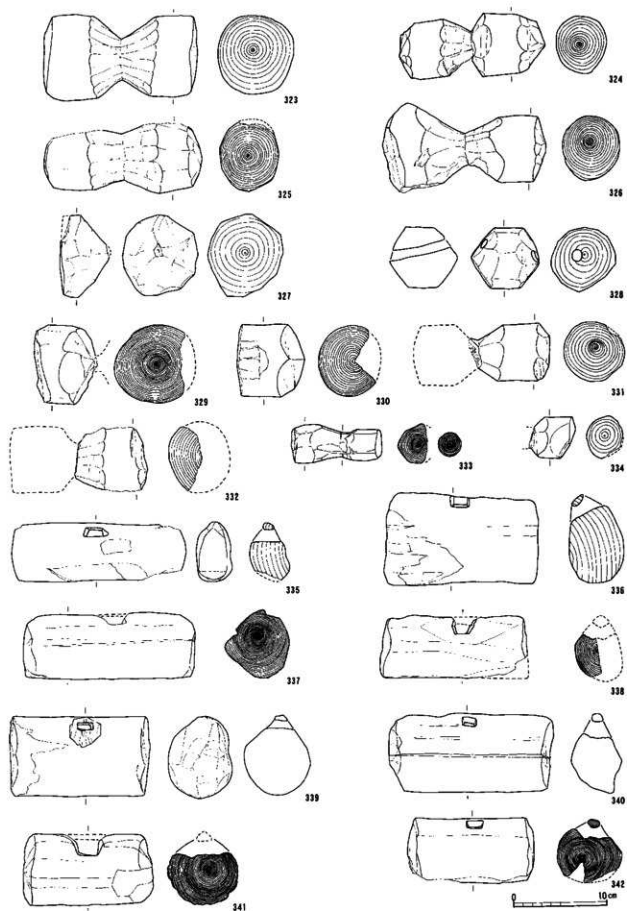
第25図 方形枠付田下駄(282~307)

(304のみ 1:4、その他 1:6)



第26図 目盛板・木鐺(308~322)

(308~309は1:6、その他1:4)



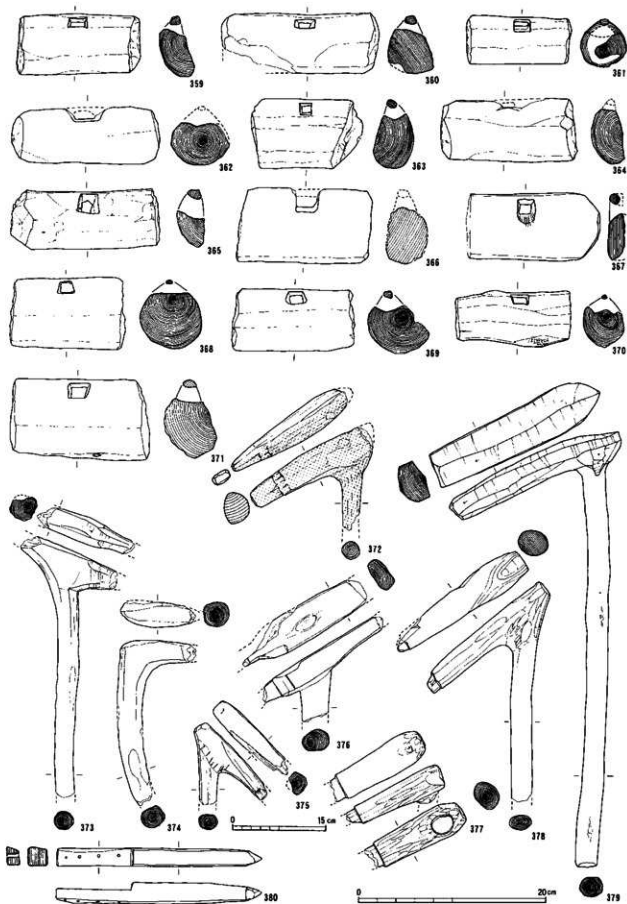
第27图 木罐(323~342)

(1:4)



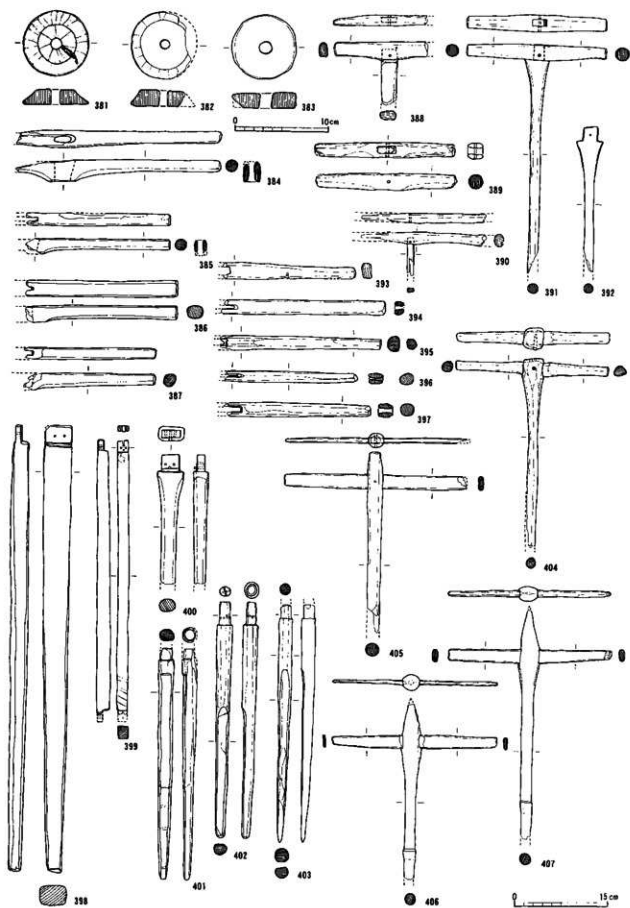
第28図 木鐮(343~358)

(1:4)



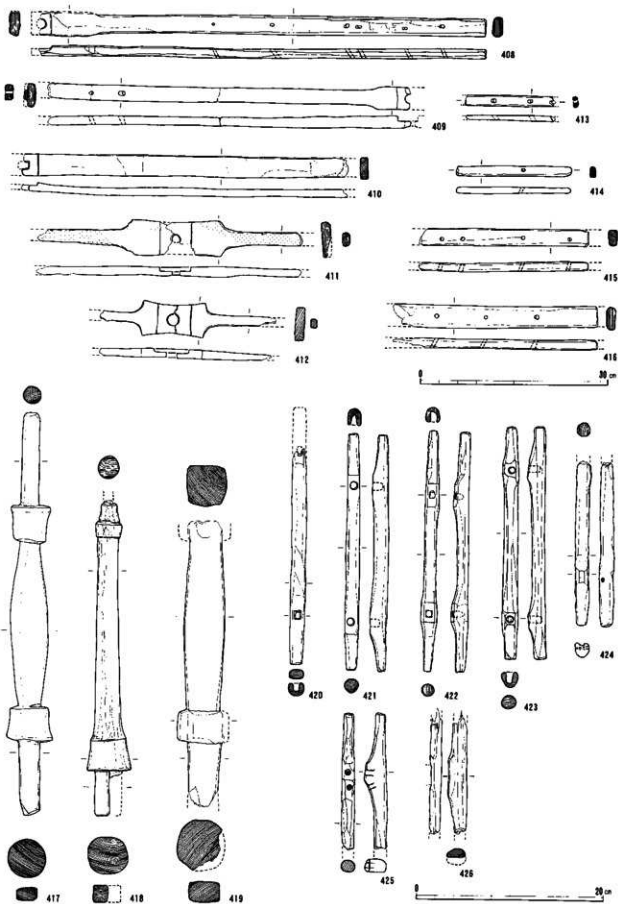
第29図 木錘・鉄斧柄・小利器柄(359~380)

(375のみ 1:6、その他 1:4)



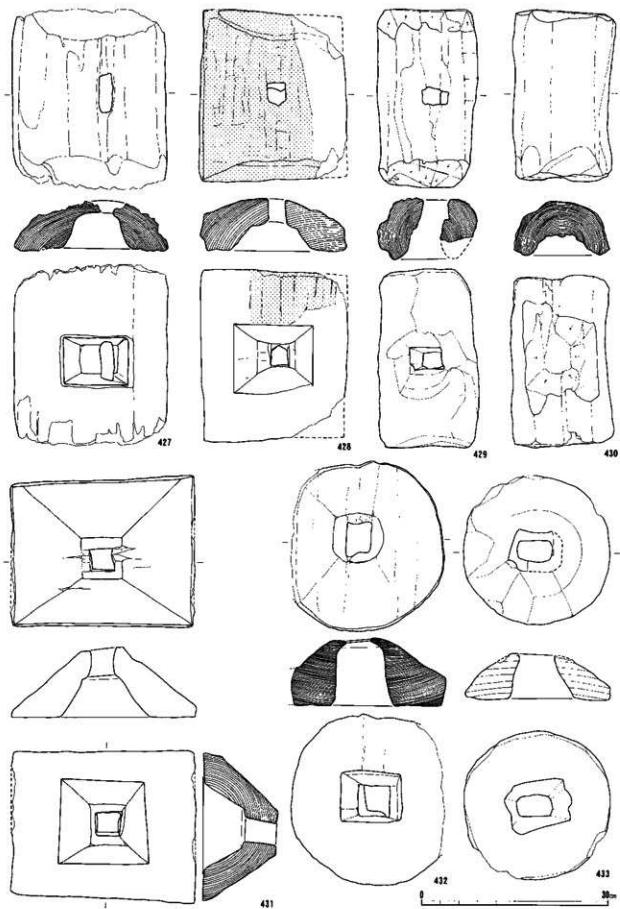
第30図 紡錘車・杵(381~407)

(381~383は1:4、その他1:6)



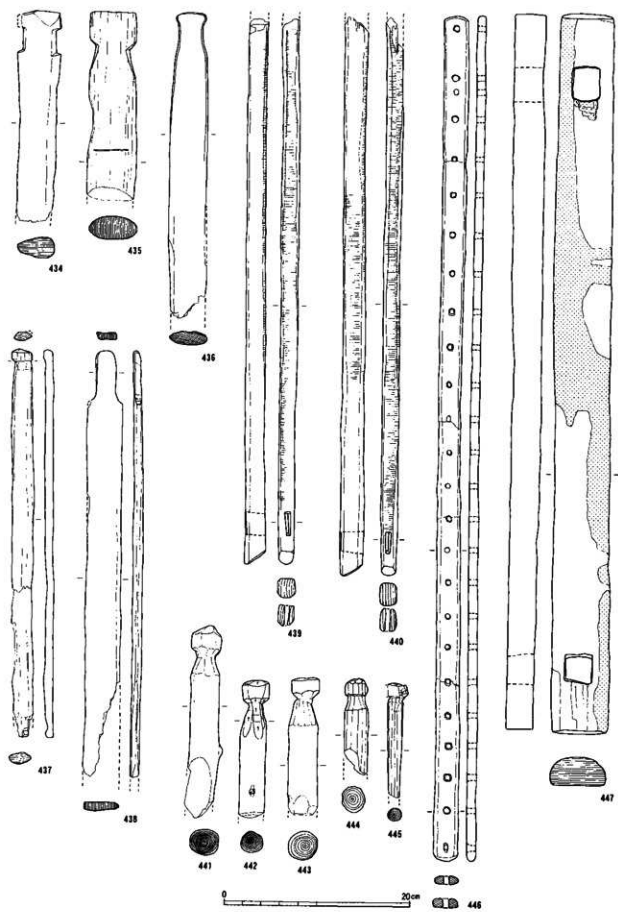
第31図 棒・穂かけ・糸棒(408~426)

(408~416は1:6、その他1:4)



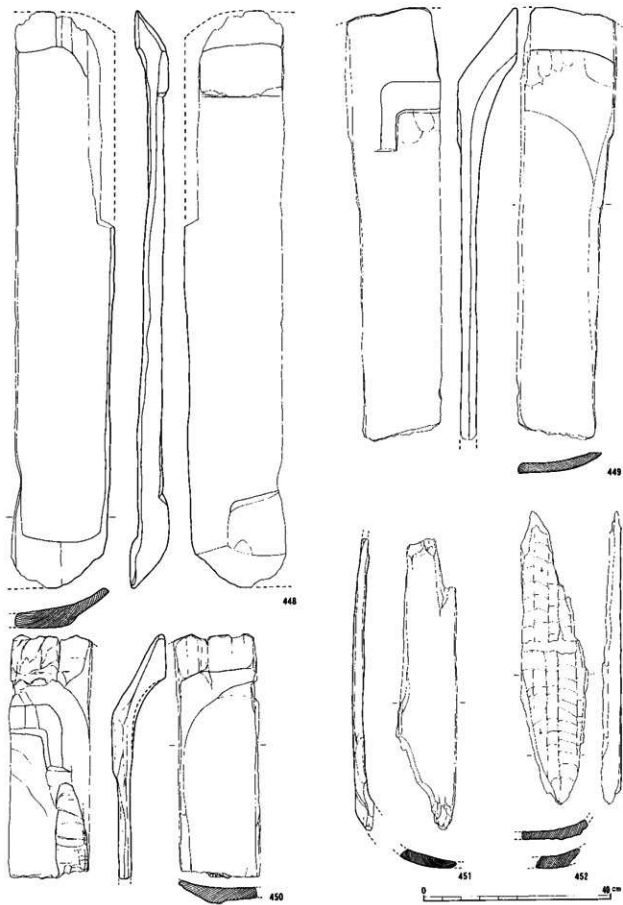
第32図 タタリ(427~433)

(1:6)



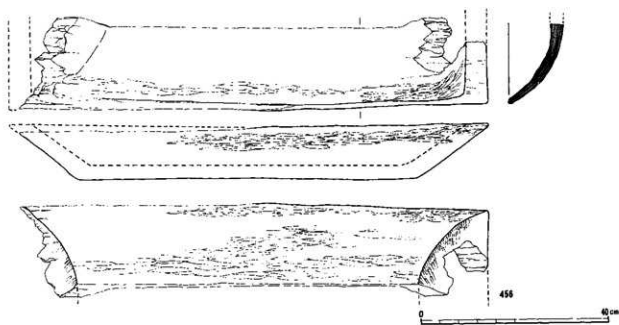
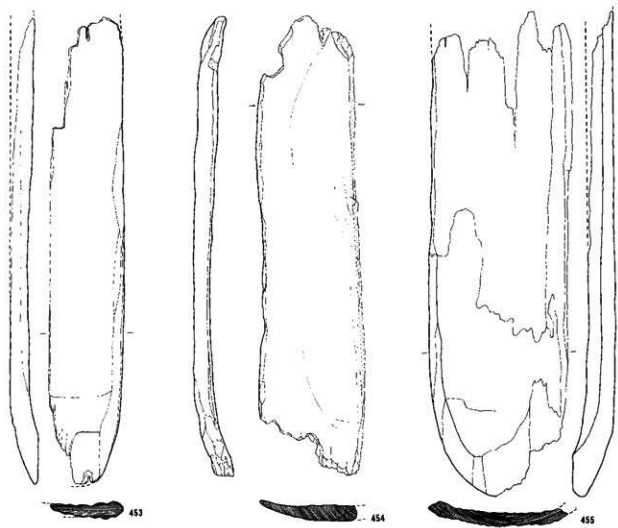
第33圖 鐵機(434~447)

(1:4)



第34図 權(448~452)

(1:8)



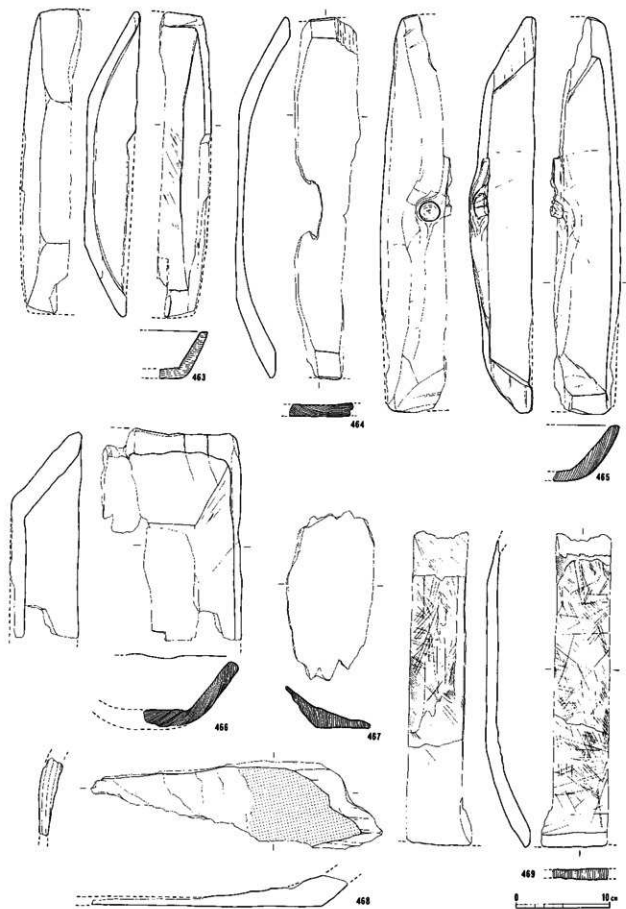
第35図 槽(453~456)

(1:8)



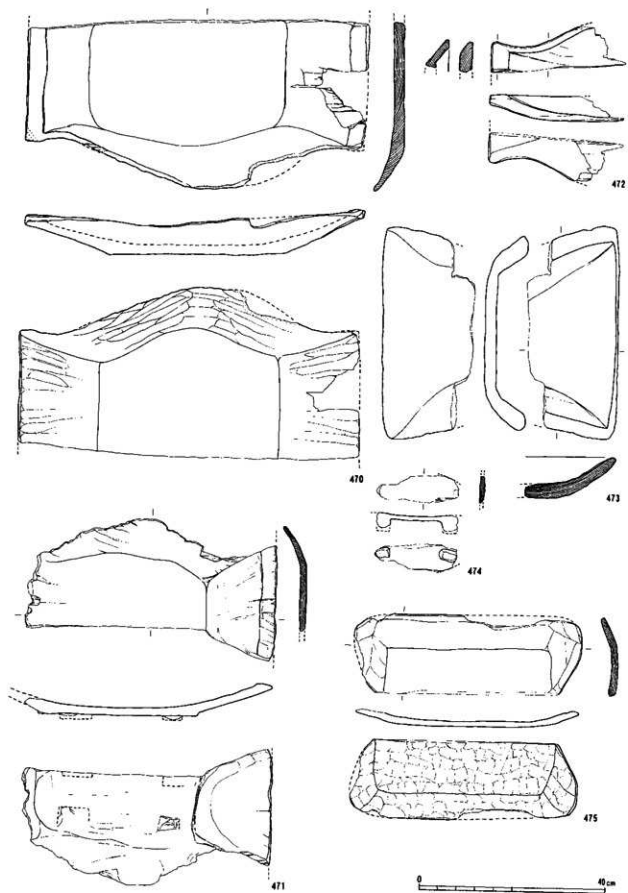
第36図 槽(457~462)

(1:4)



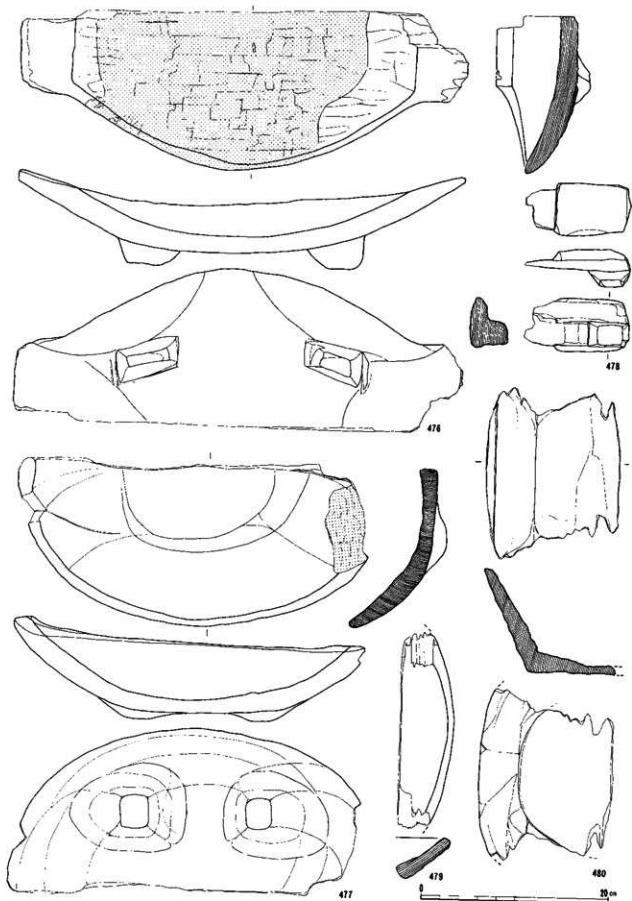
第37圖 槽(463~469)

(1:4)



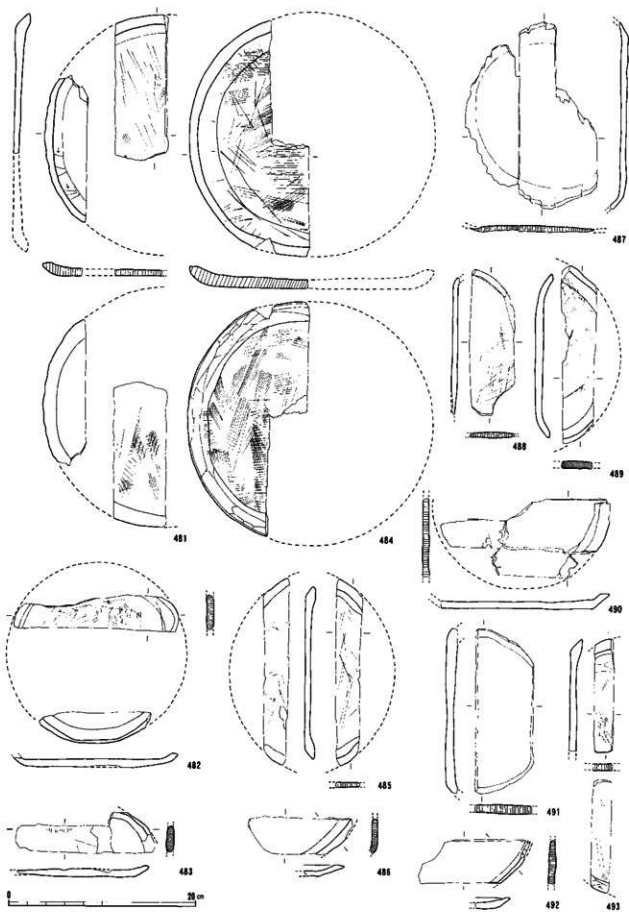
第38図 槽(470~475)

(1:8)



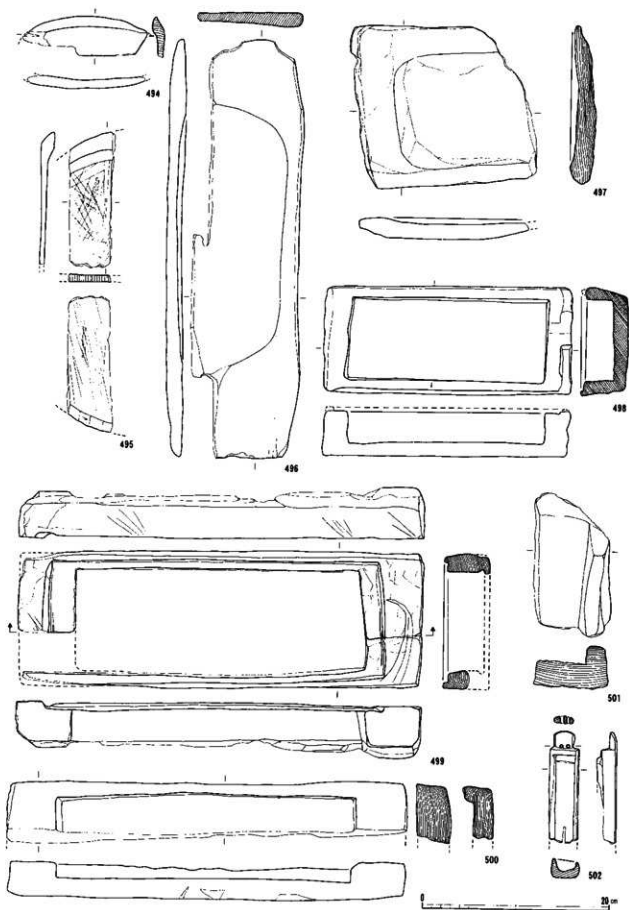
第39圖 槽(476~480)

(1:4)



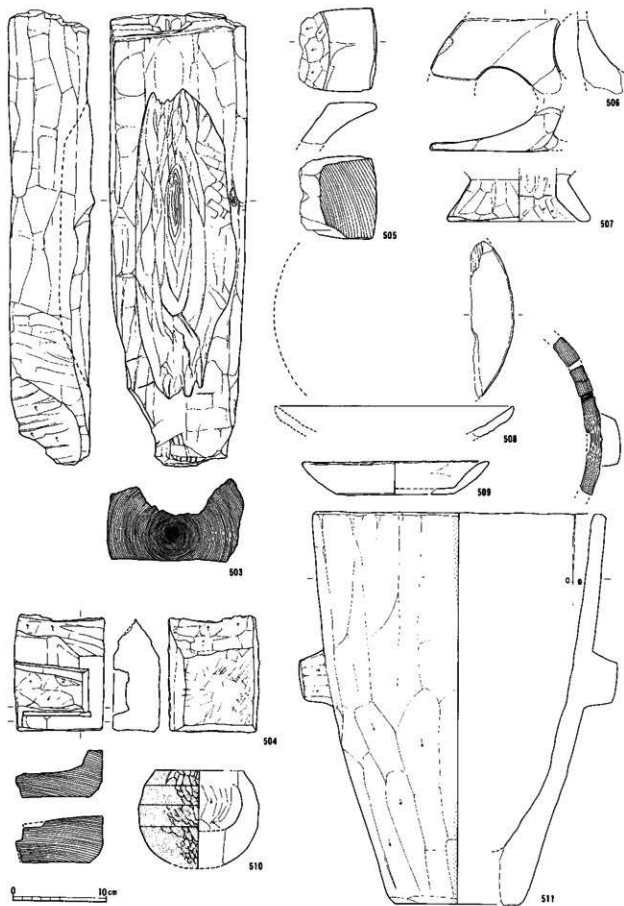
第40图 盆(481~493)

(1:4)



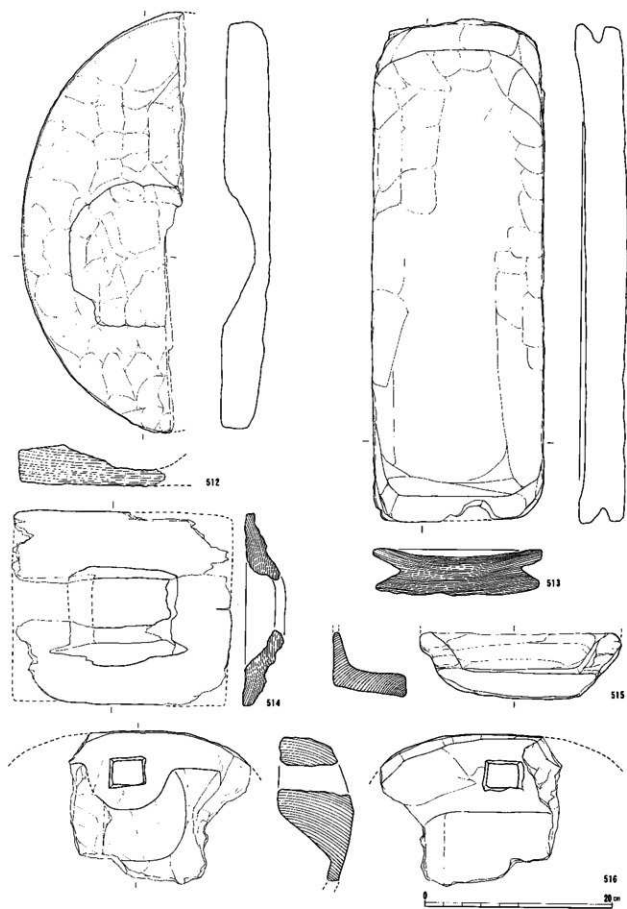
第41圖 盤・箱(494~502)

(1:4)



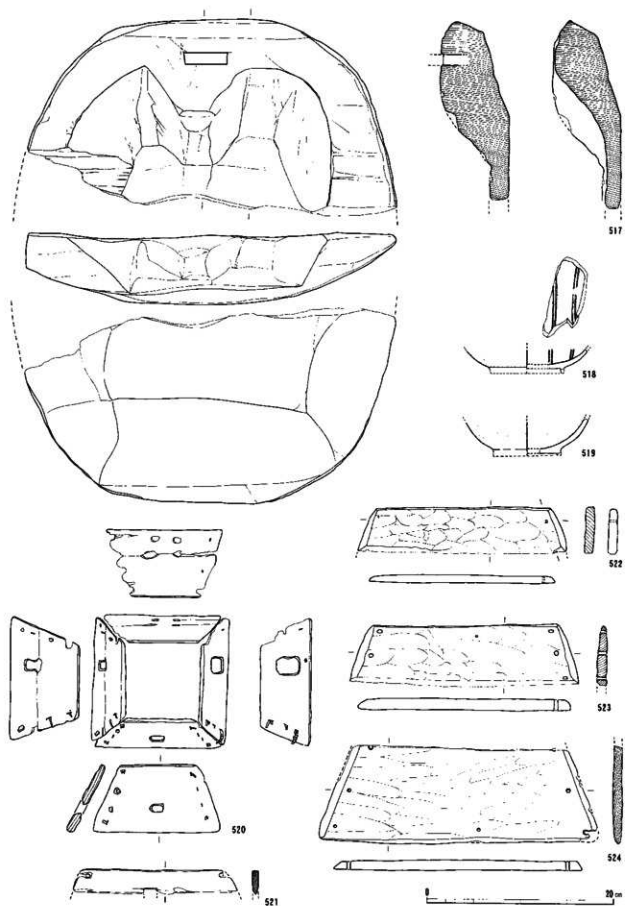
第42图 箱·高杯·杯·碗·桶(503~511)

(1:4)



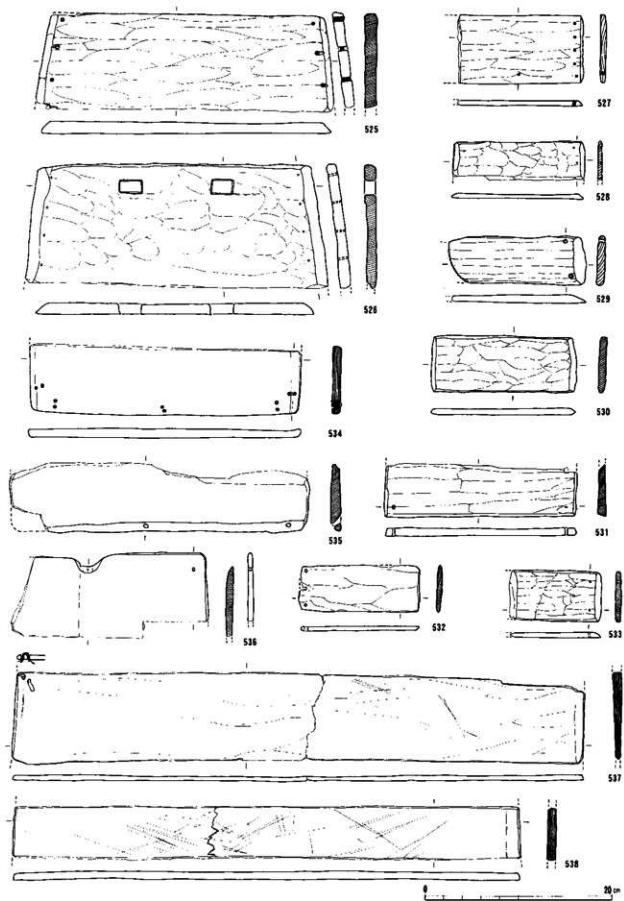
第43图 不明物(512~516)

(1:4)



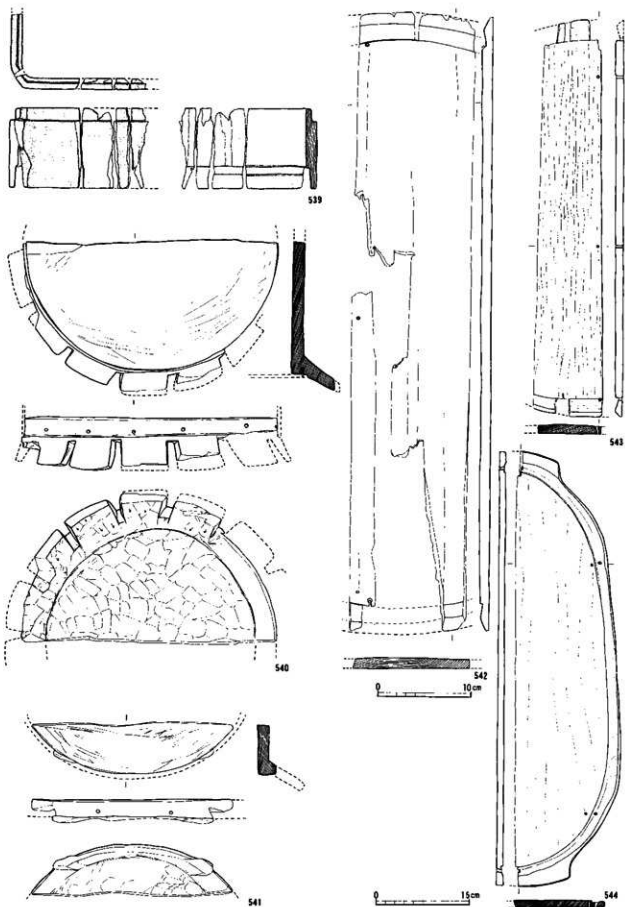
第44図 不明別物・漆器碗・「四方転びの箱」(517~524)

(1:4)



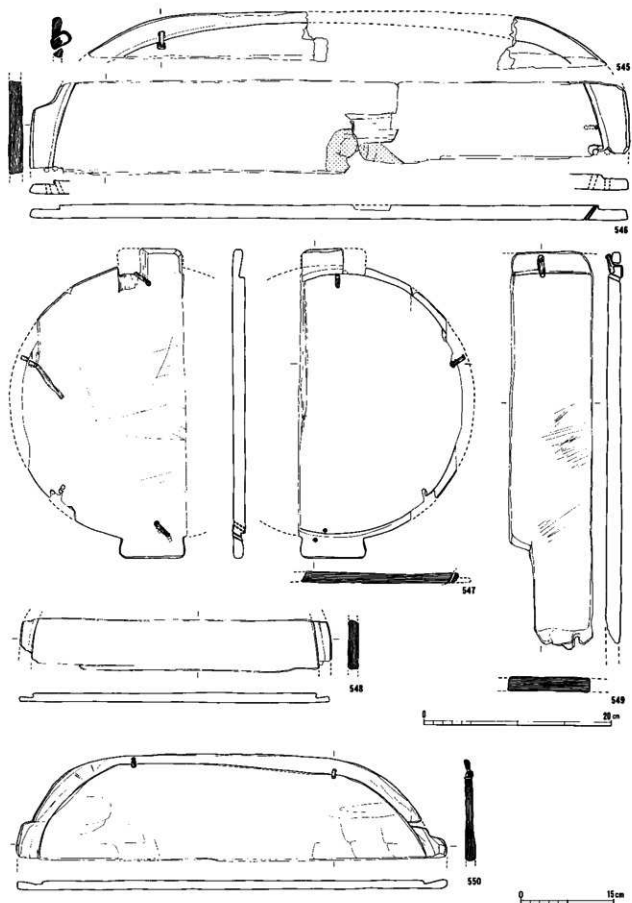
第45図 「四方転びの箱」・紐結合箱(525~538)

(1:4)



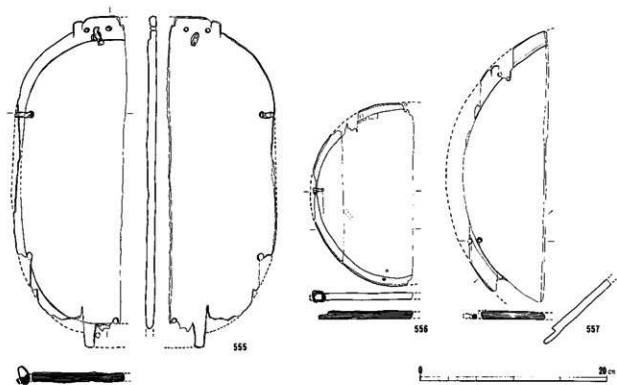
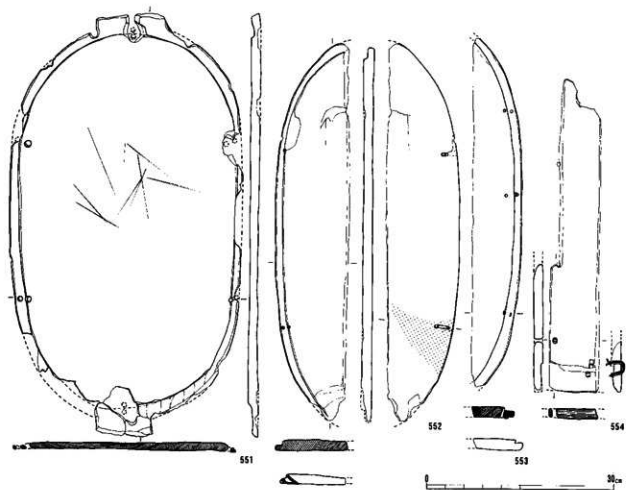
第46図 連結箱・曲物(539~544)

(539~542は 1:4、その他 1:6)



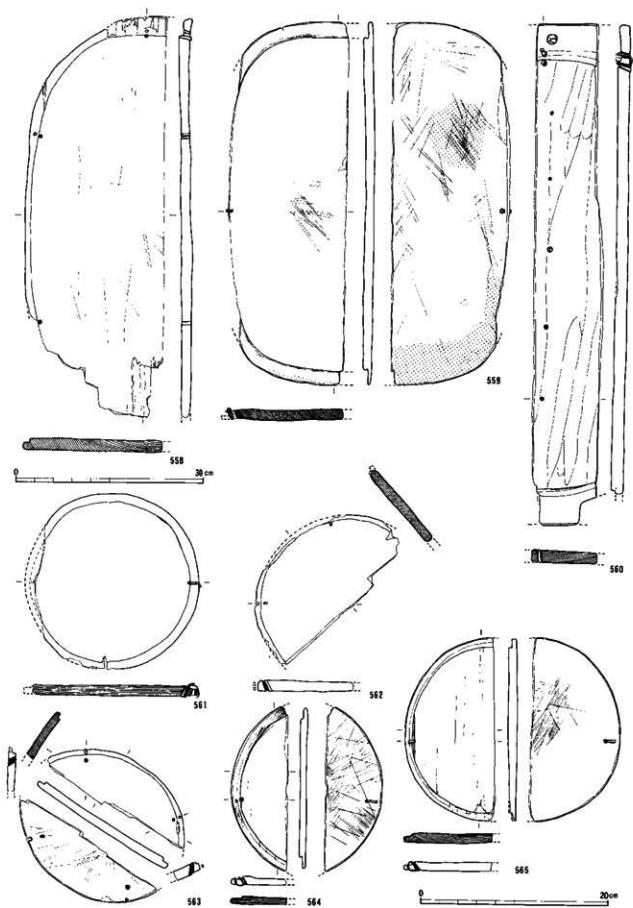
第47図 曲物(545~550)

(550のみ 1:6、その他 1:4)



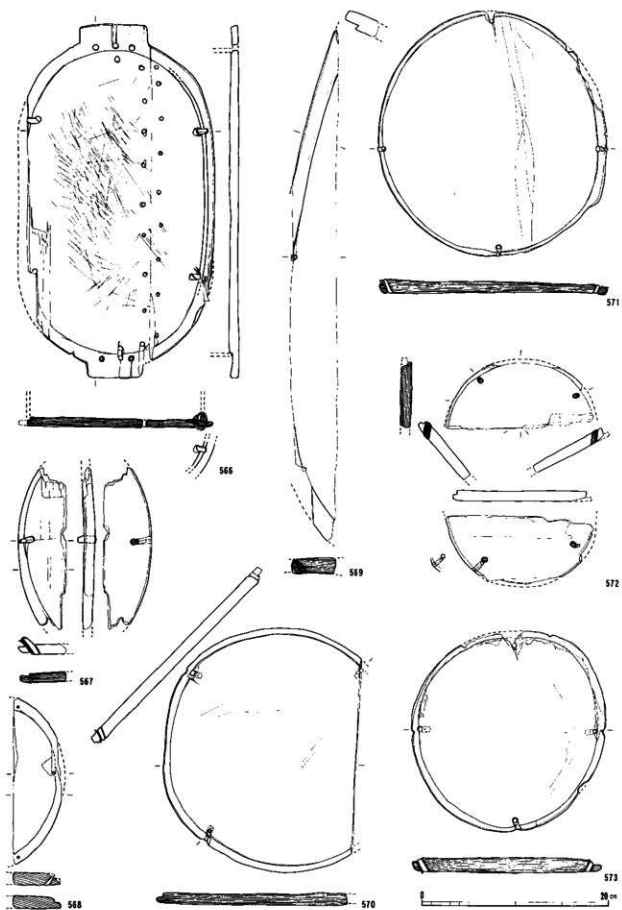
第48图 曲物(551~557)

(上段1:6、下段1:4)



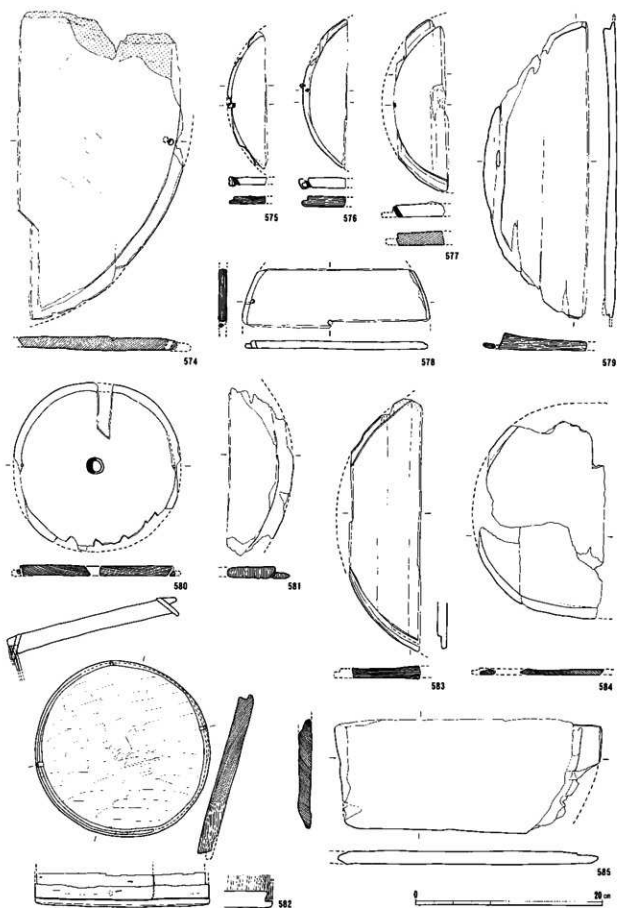
第49図 曲物(558~565)

(558は1:6、その他1:4)



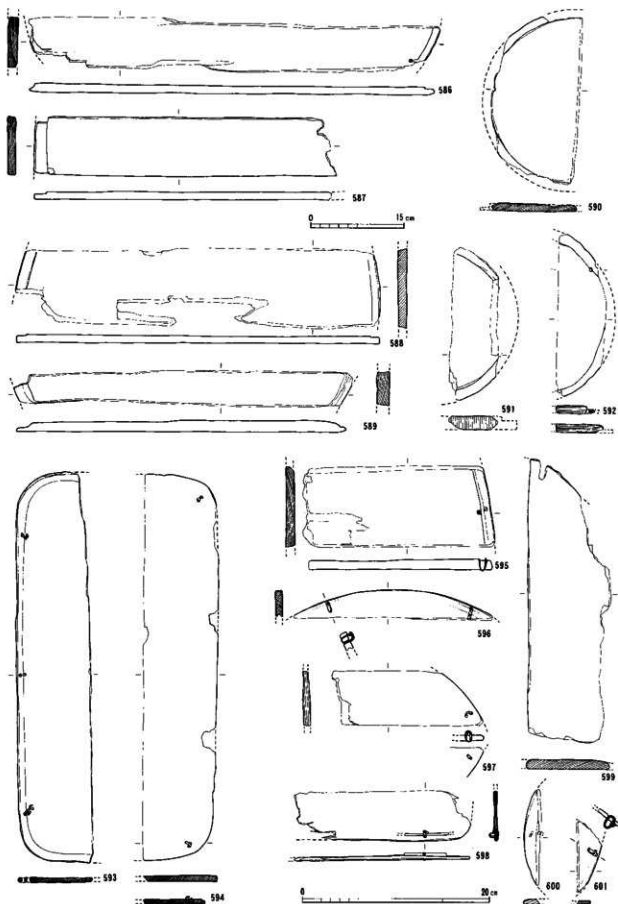
第50图 曲物(566~573)

(1:4)



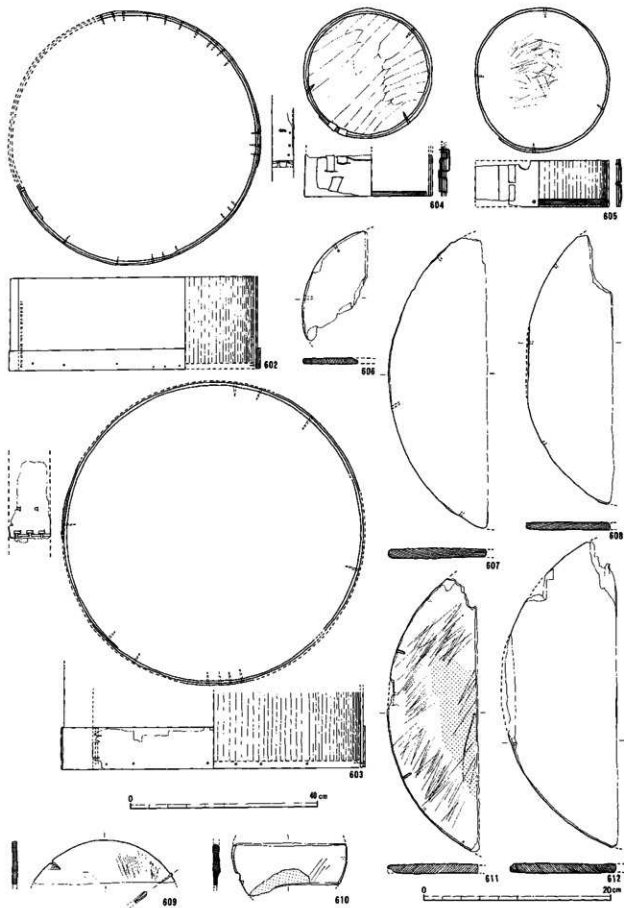
第51图 曲物(574~585)

(1:4)



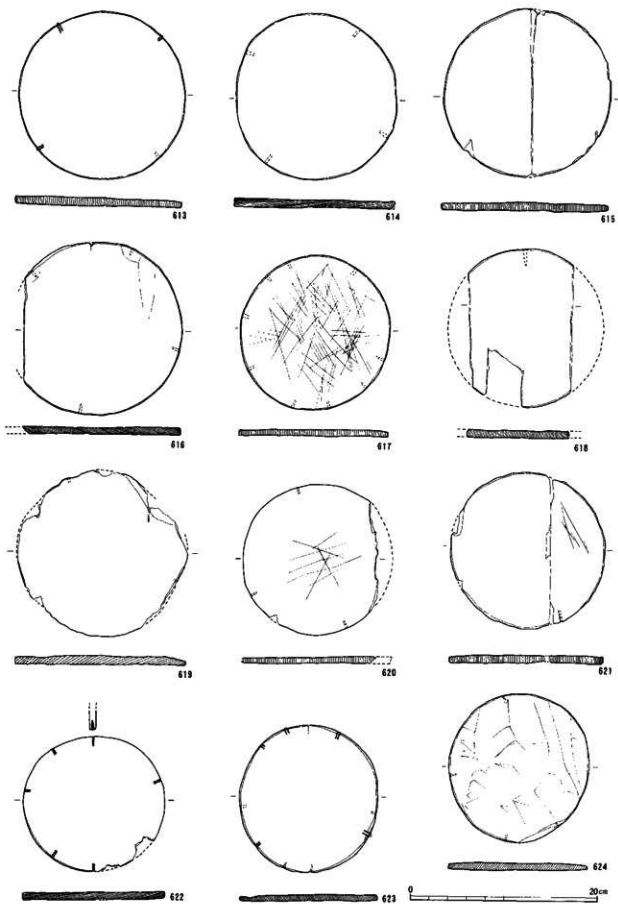
第52図 曲物(586~601)

(586~587・593~594は1:6、その他1:4)



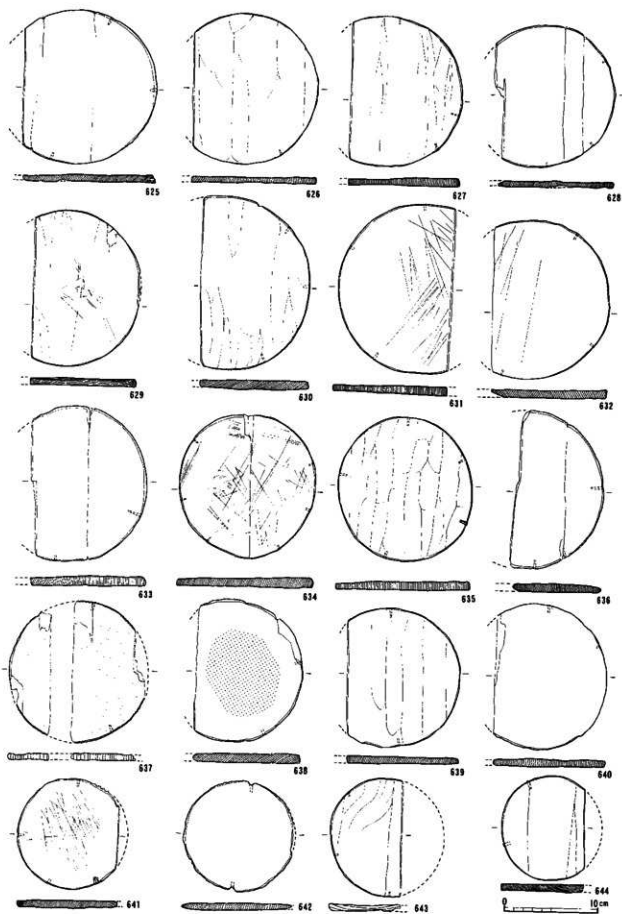
第53図 曲物(602~612)

(602~603は1:8、その他1:4)



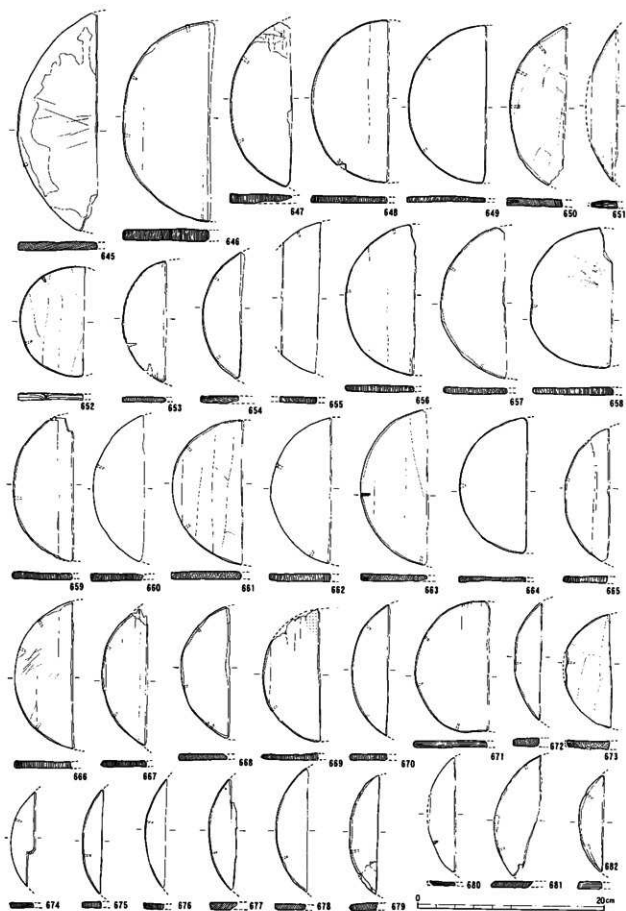
第54图 曲物(613~624)

(1:4)



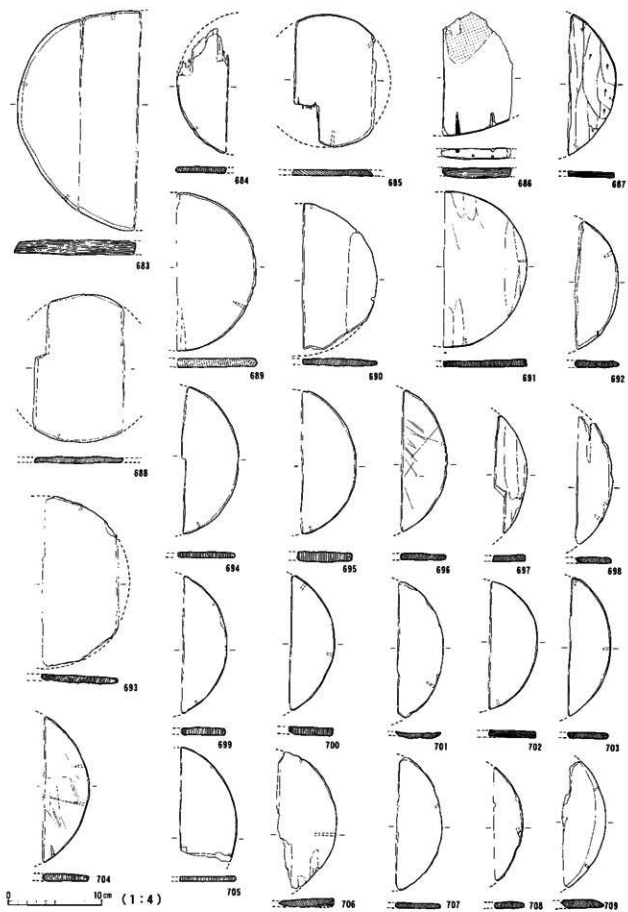
第55圖 曲物(625~644)

(1:4)

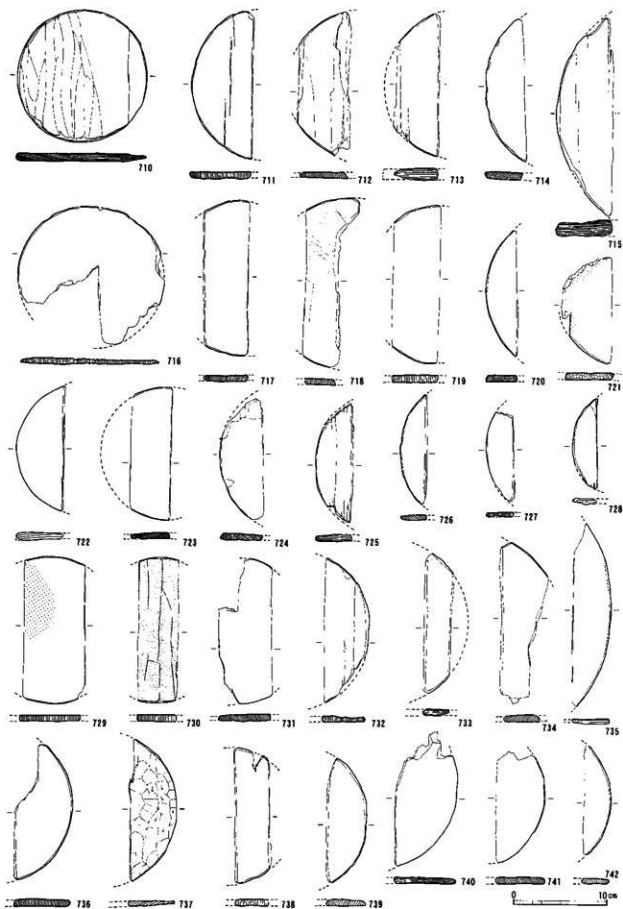


第56图 曲物(645~682)

(1:4)

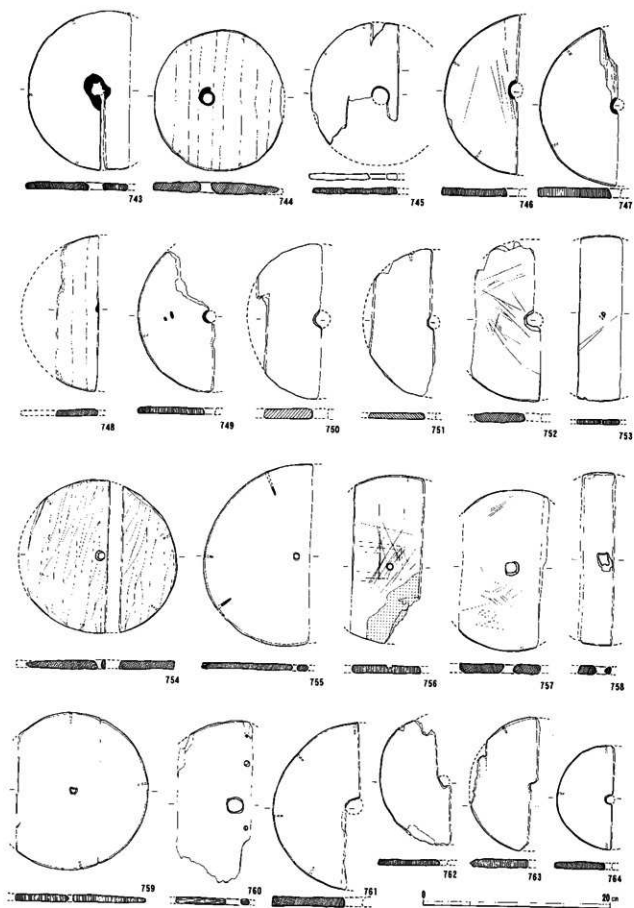


第57图 曲物(683~709)



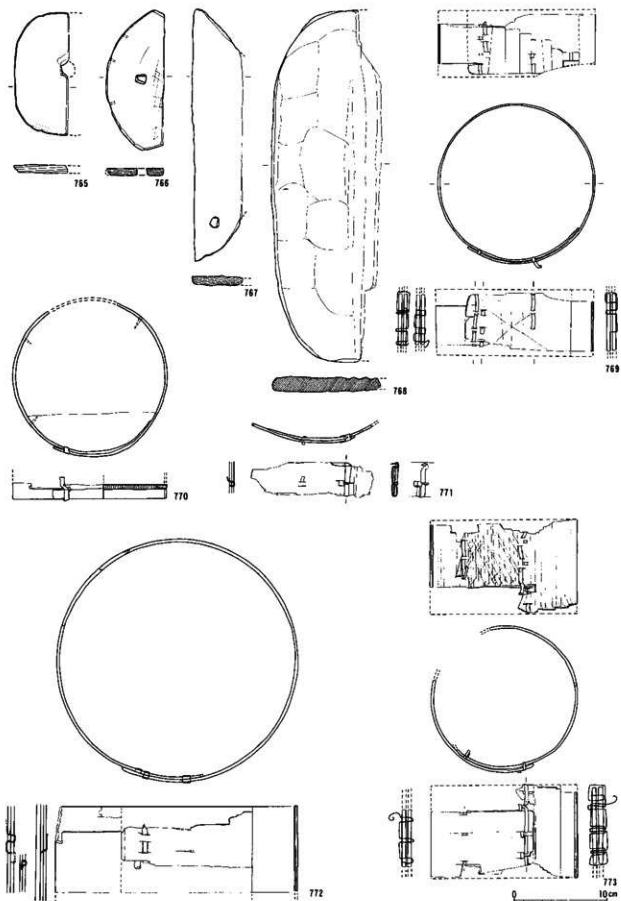
第58图 曲物(710~742)

(1:4)



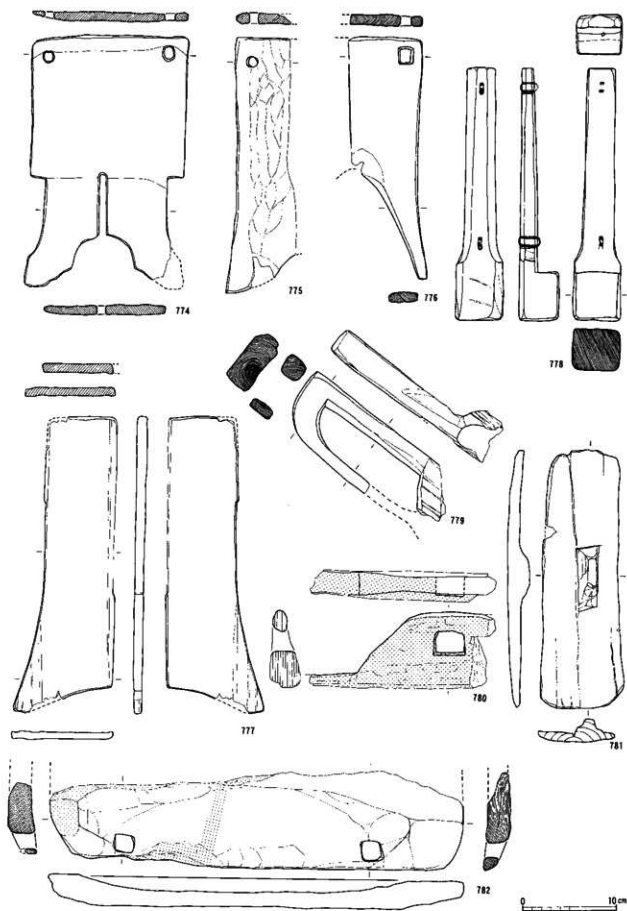
第59圖 曲物(743~764)

(1:4)



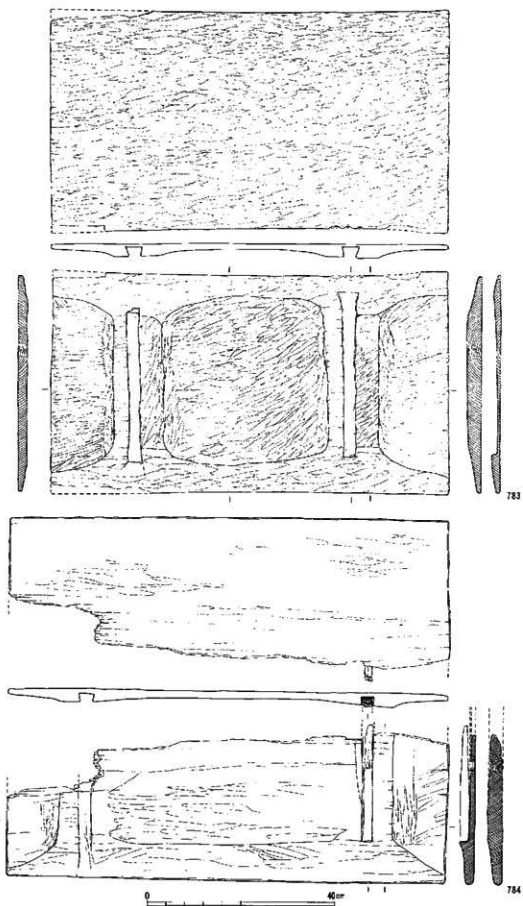
第60图 曲物(765~773)

(1:4)



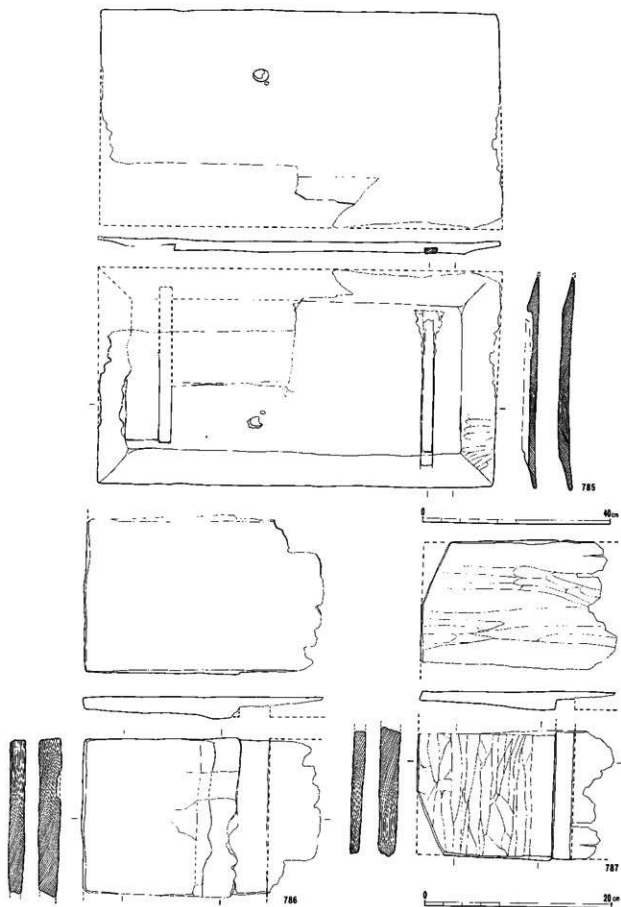
第61図 曲物脚・その他容器関係遺物(774~782)

(1:4)



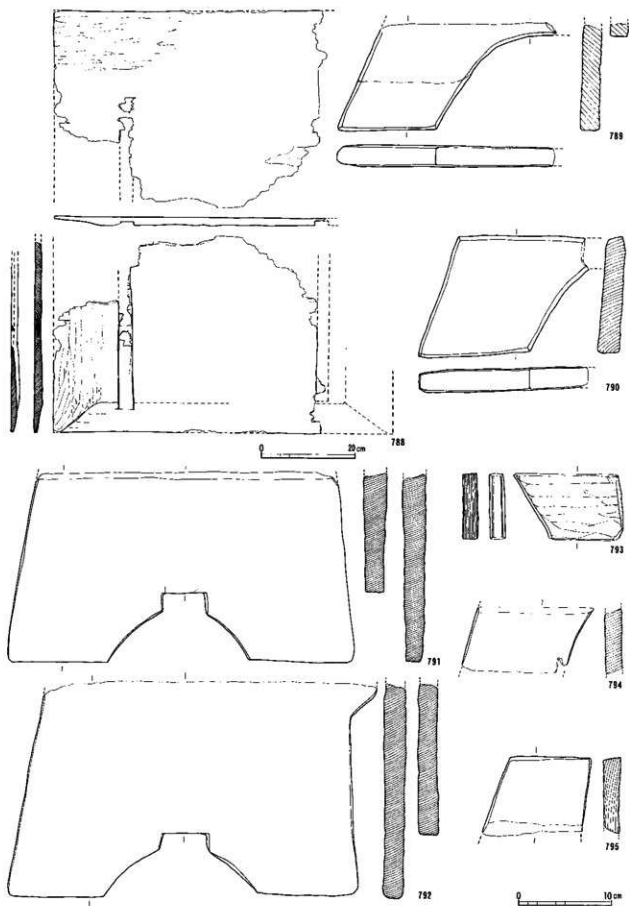
第62図 案(783~784)

(1:8)



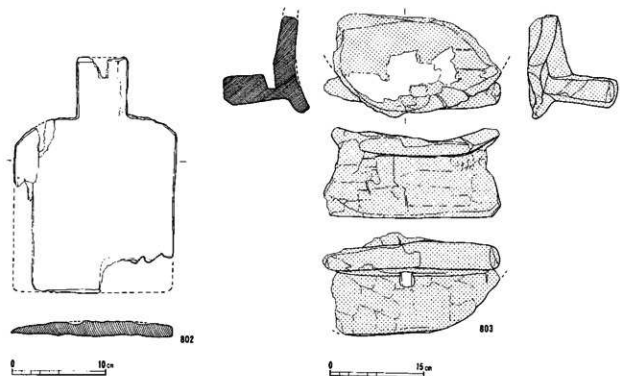
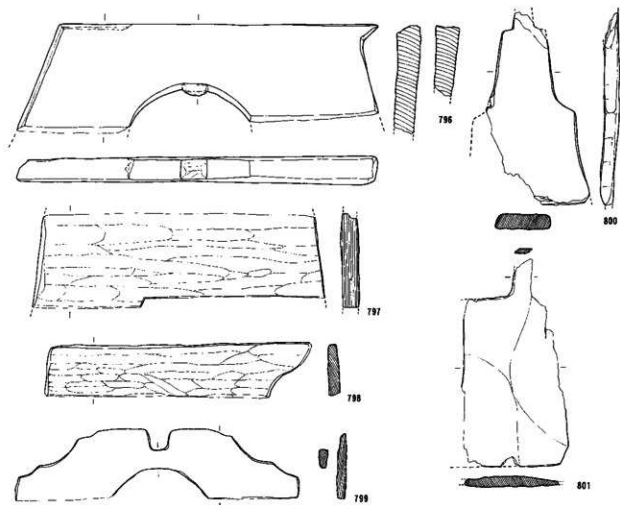
第63図 案(785~787)

(785のみ 1:8、その他 1:4)



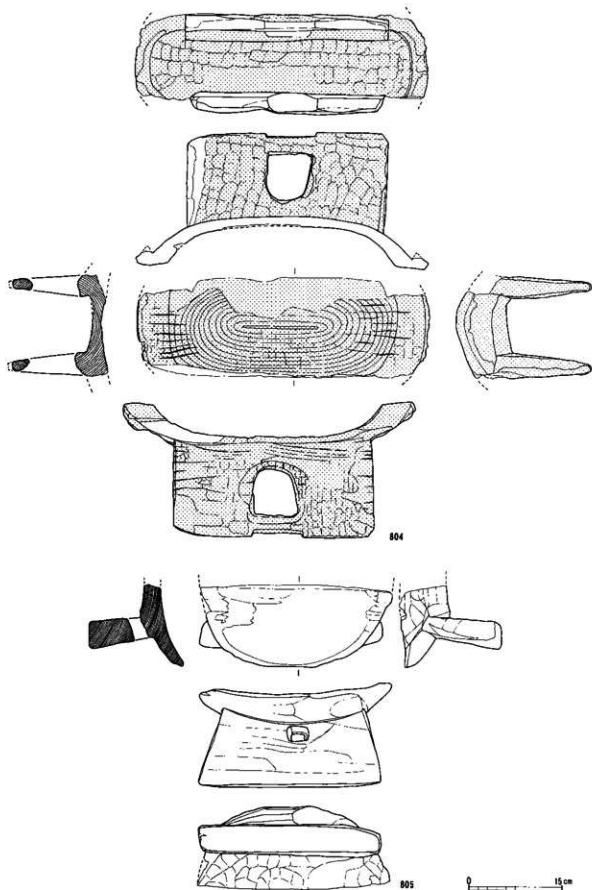
第64図 案(788~795)

(788のみ 1:8、その他 1:4)



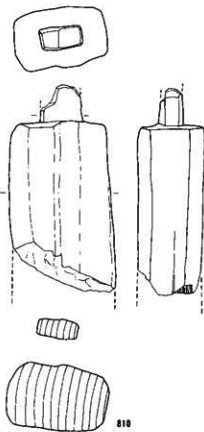
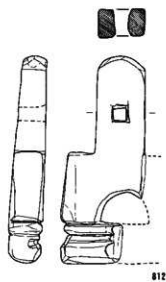
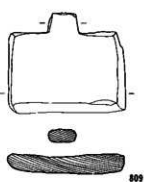
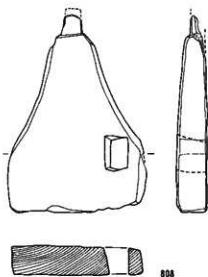
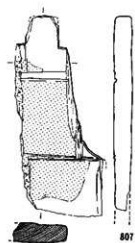
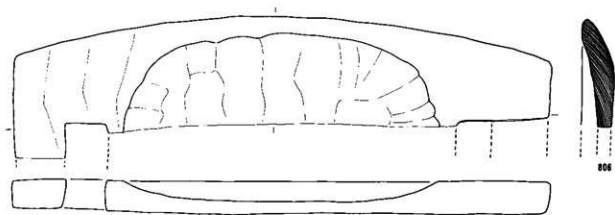
第65図 案・椅子(796~803)

(803のみ1:6、その他1:4)



第66图 椅子(804~805)

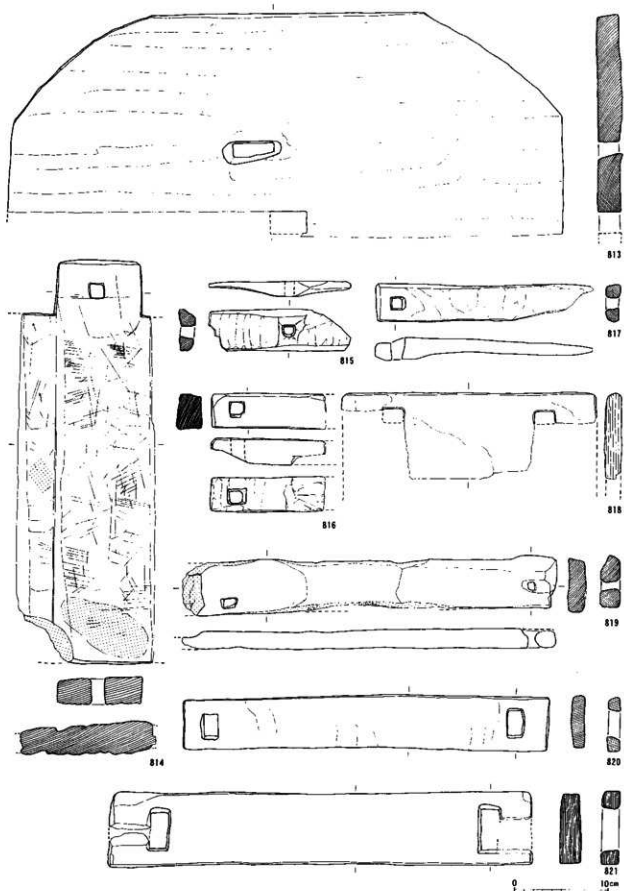
(1:6)



0 10cm

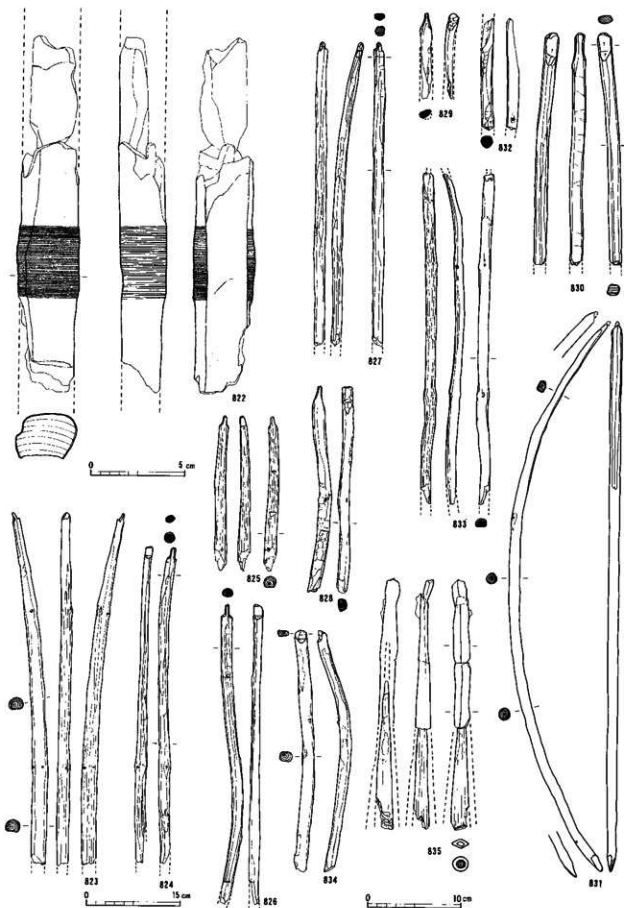
第67图 椅子(806~812)

(1:4)



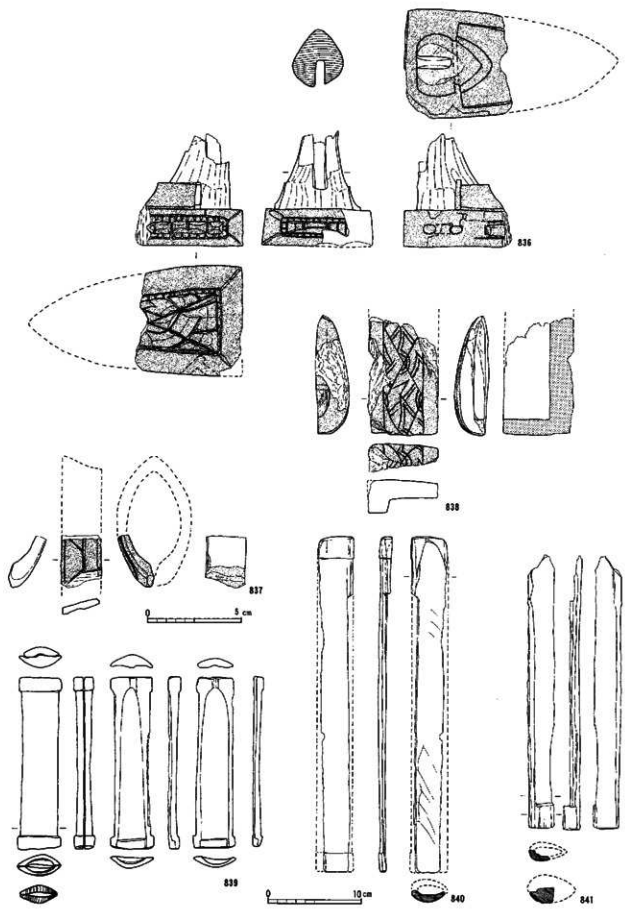
第68図 指物・台(813~821)

(1:4)



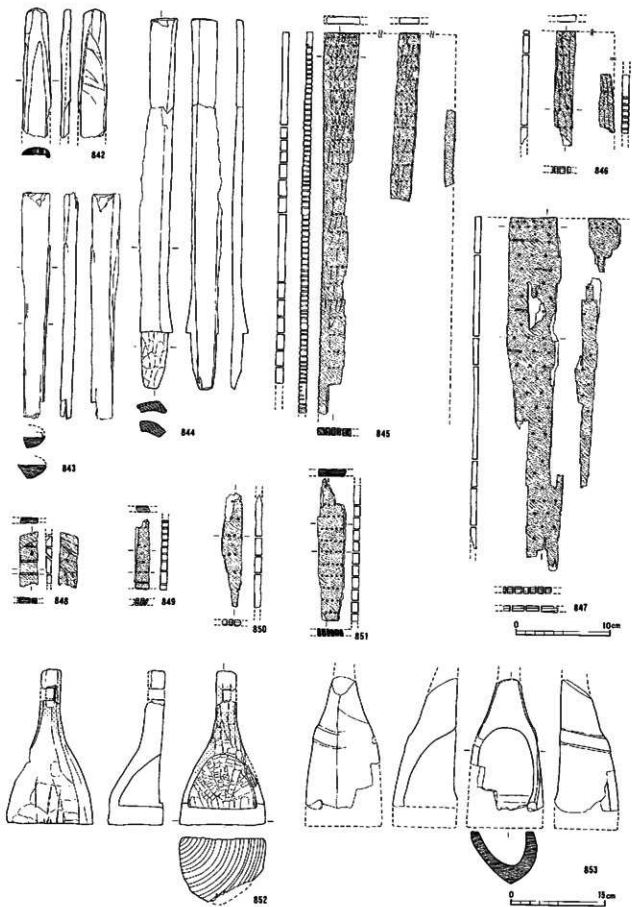
第69図 弓(飾弓/素弓)・鉄鋒の木柄部(822~835)

(822は1:2、835は1:4、その他1:6)



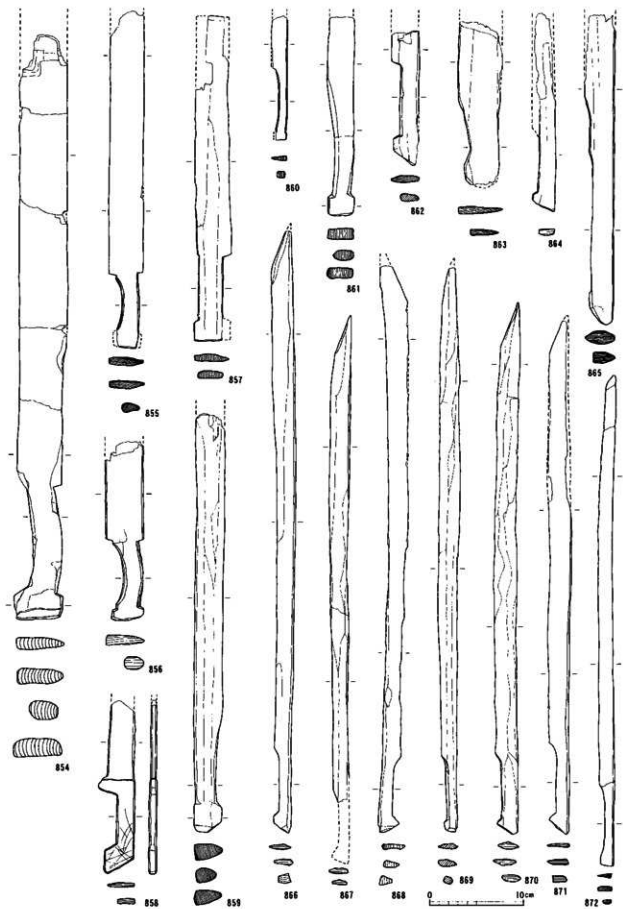
第70図 刀装具(把装具/鞘口装具/鞘尻装具)・刀剣鞘(836~841)

(836~838は1:2、その他1:4)



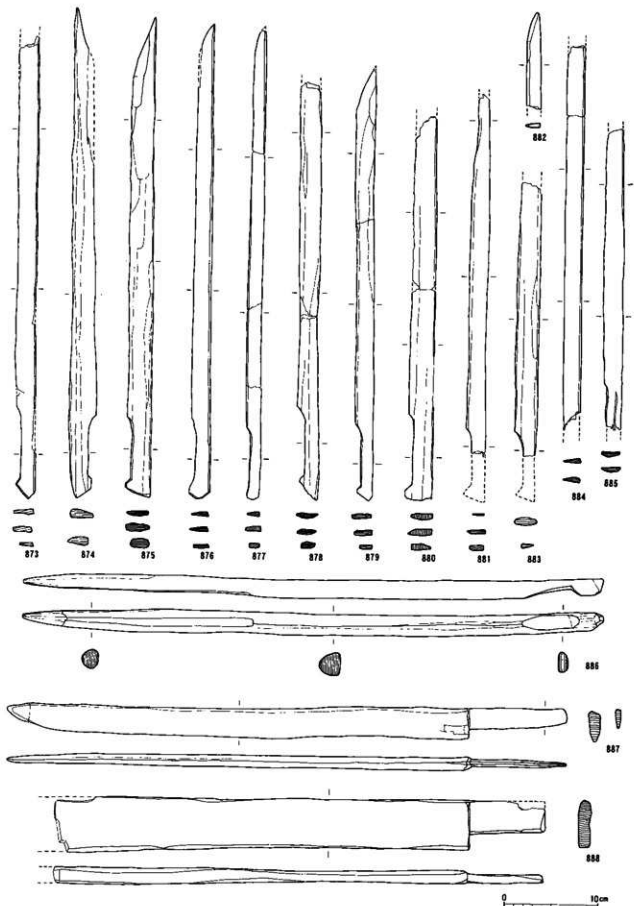
第71図 刀剣鞘・盾・壺紐(842~853)

(842~851は1:4、その他1:6)



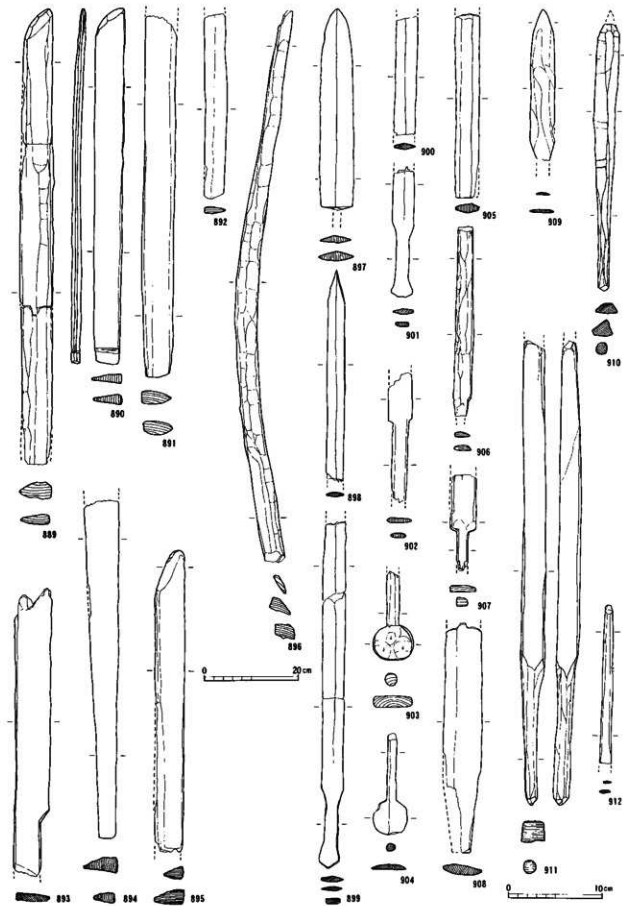
第72図 刀形(854~872)

(1:4)



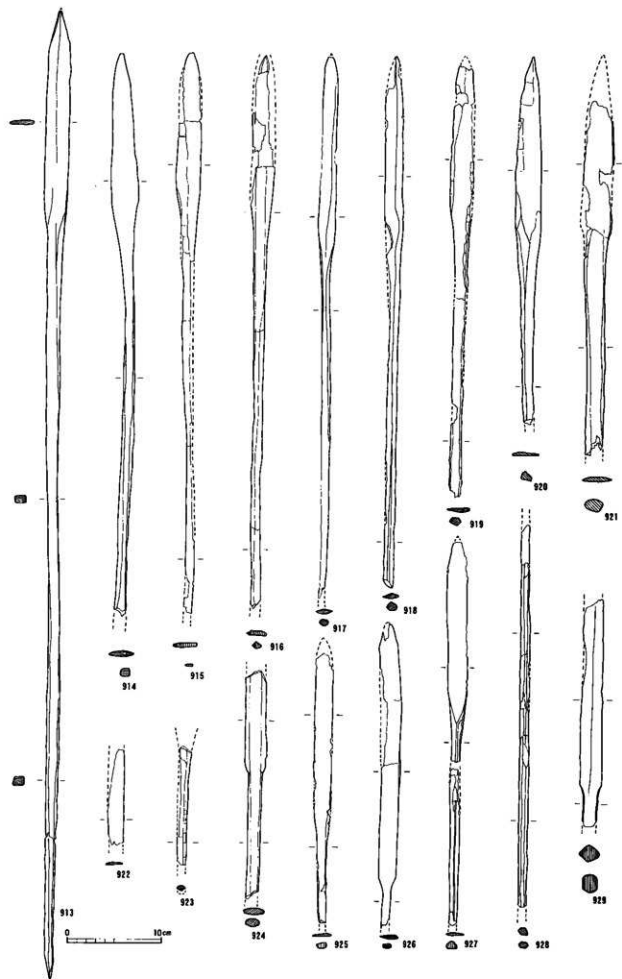
第73図 刀形(873~888)

(1:4)



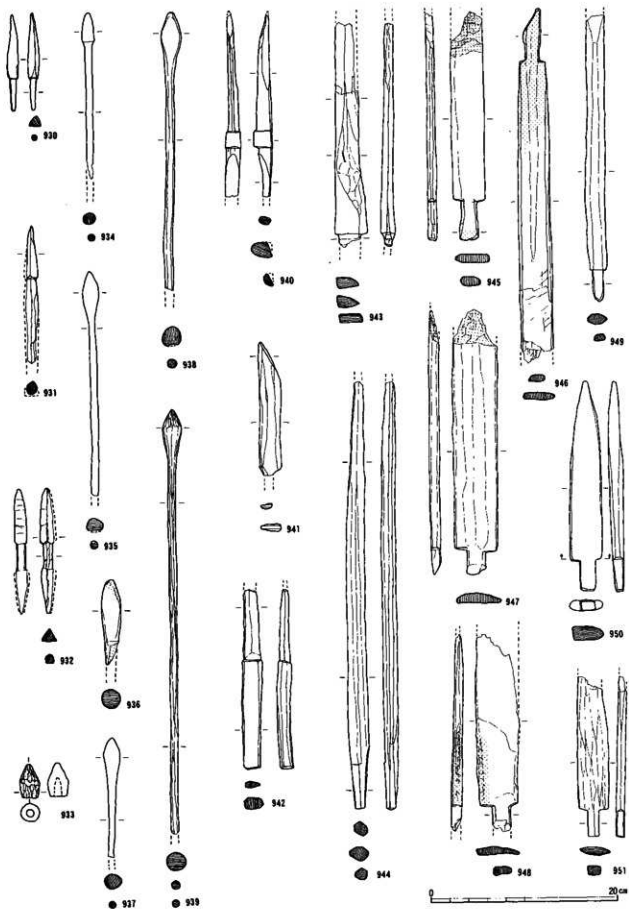
第74図 刀形・剣形・鏃形(889~912)

(896のみ1:8、その他1:4)



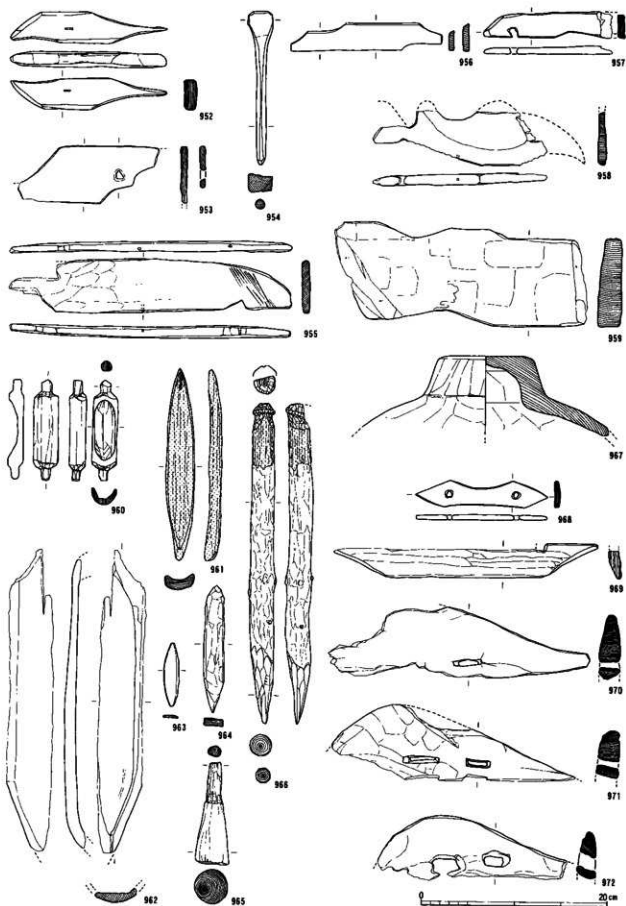
第75図 鏃形(913~929)

(1:4)



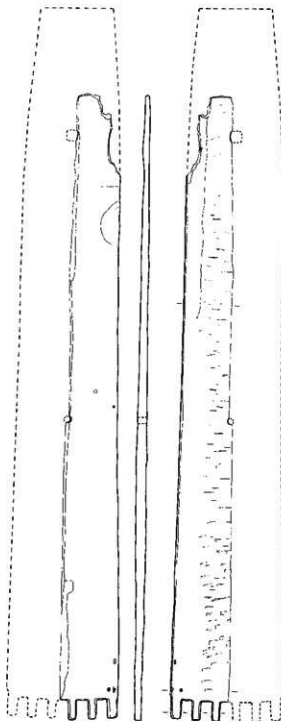
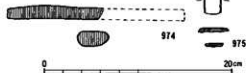
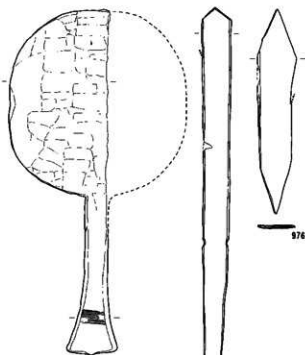
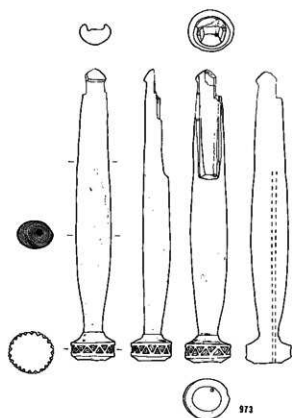
第76図 木鏃・小刀形・刀子形・其他武器形(930~951)

(1:4)



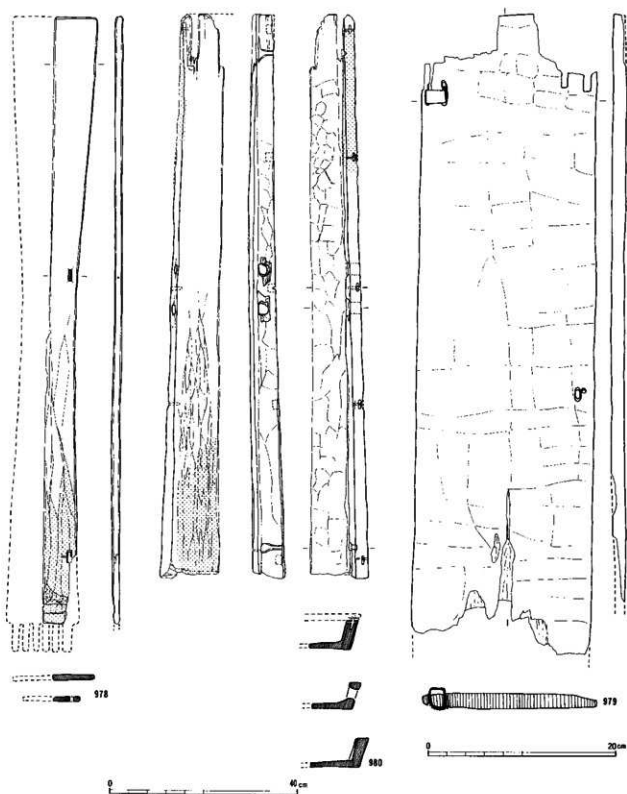
第77図 鳥形・馬形・舟形・横楯形・隅物形・笠形・鳥形？(952~972)

(1:4)



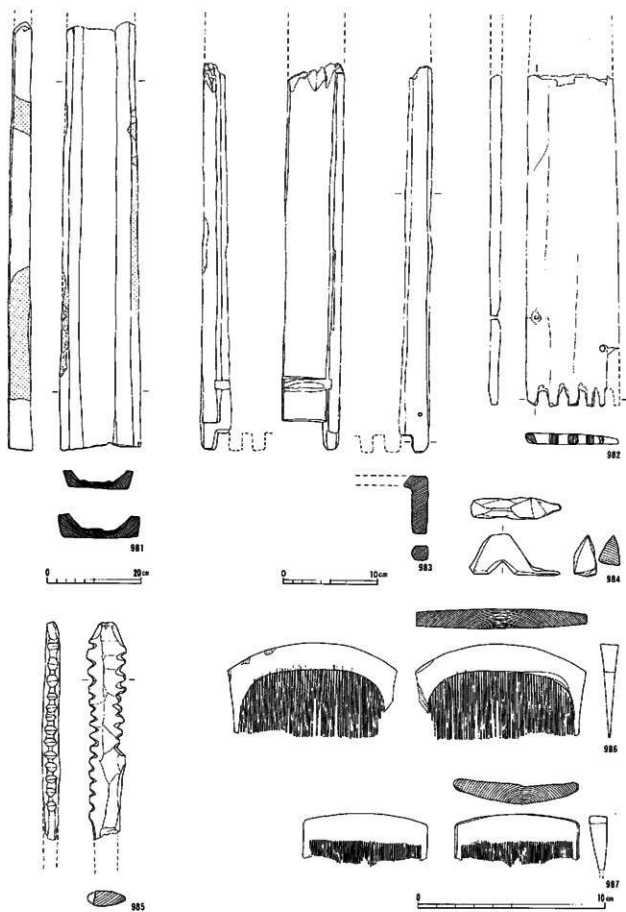
第78図 棒軸形木製品・さしば形・番串・琴(973~977)

(973は1:2、977は1:8、その他1:4)



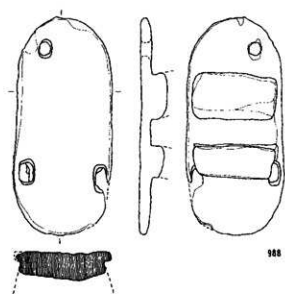
第79図 琴(978~980)

(979は1:4、その他1:8)

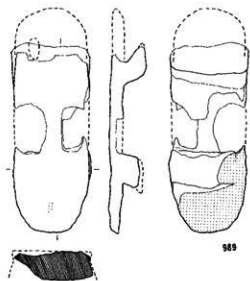


第80図 琴・鄭（ささら）状木製品・漆（981～987）

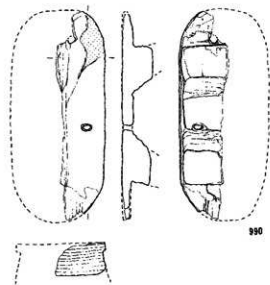
（981は1：8、982～983は1：4、その他1：2）



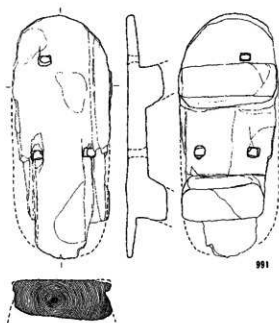
988



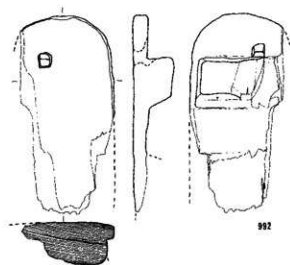
989



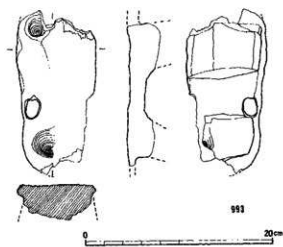
990



991



992

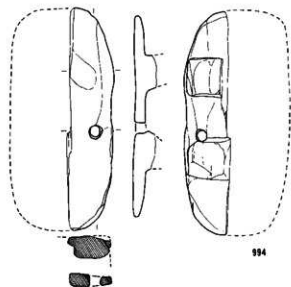


993

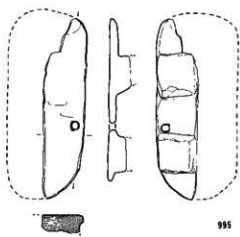
0 20cm

第81圖 下駄(988~993)

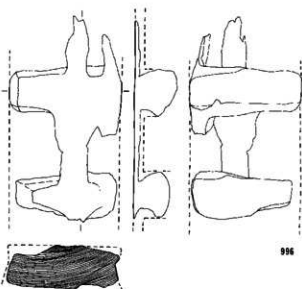
(1:4)



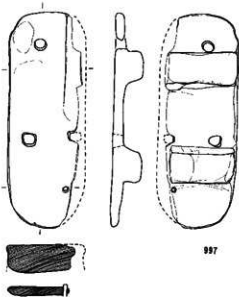
994



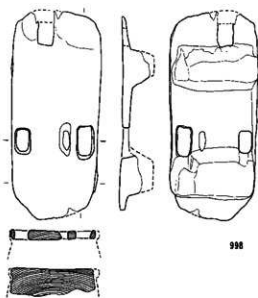
995



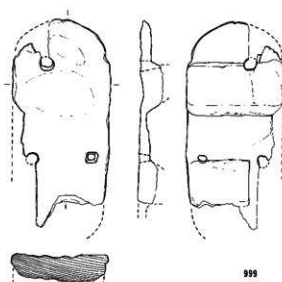
996



997



998

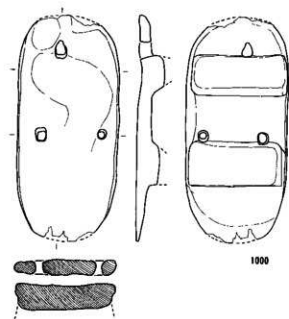


999

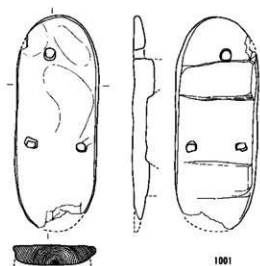
0 20cm

第82図 下駄(994~999)

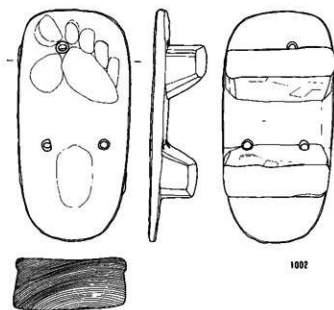
(1:4)



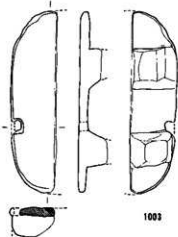
1000



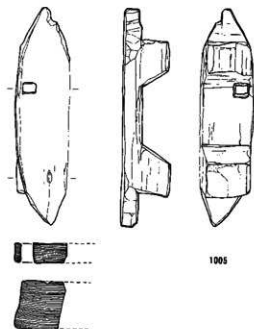
1001



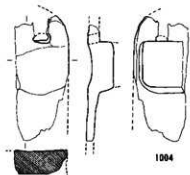
1002



1003



1005

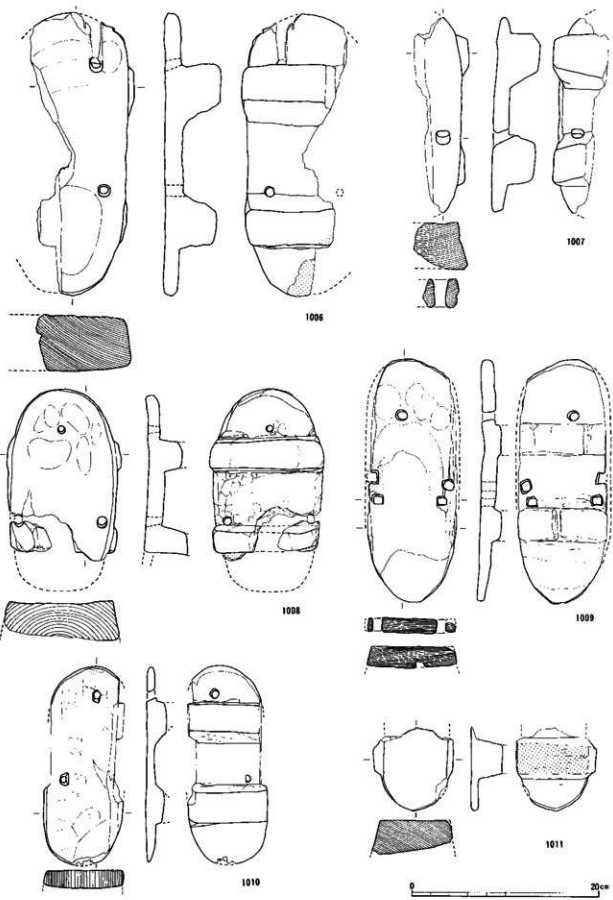


1004



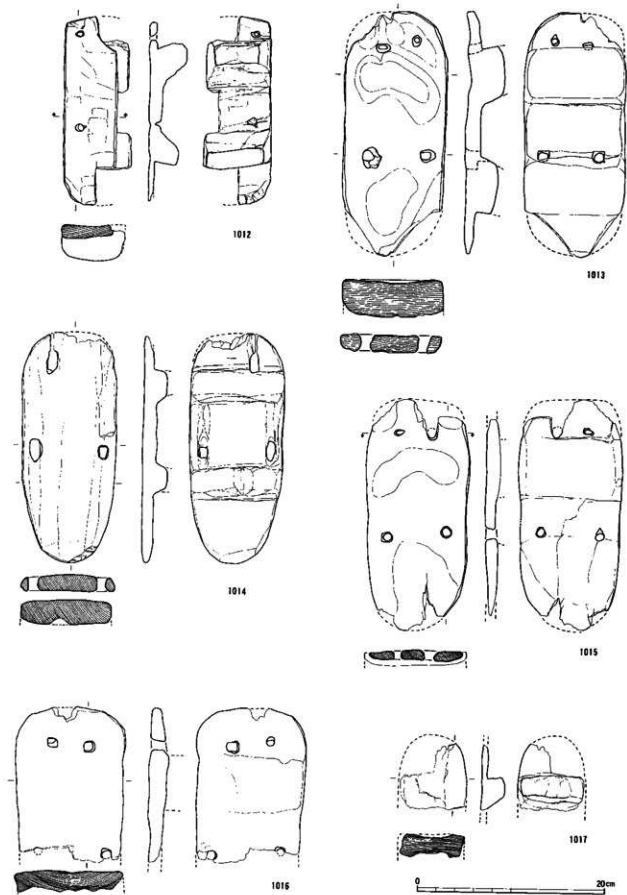
第83图 下駄(1000~1005)

(1:4)



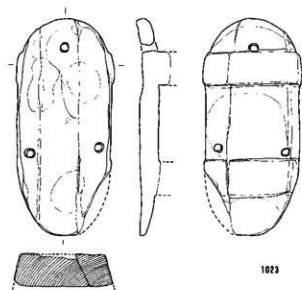
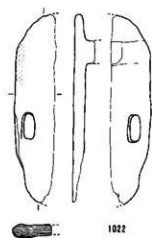
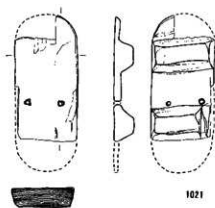
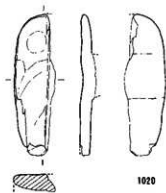
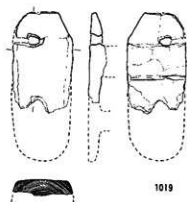
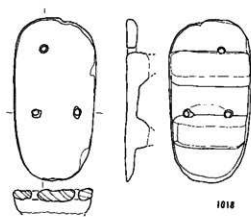
第84图 下款(1006~1011)

(1:4)



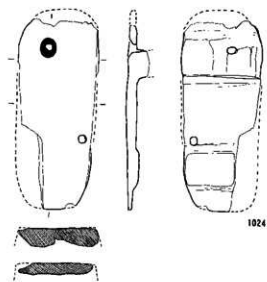
第85图 下駄(1012~1017)

(1:4)

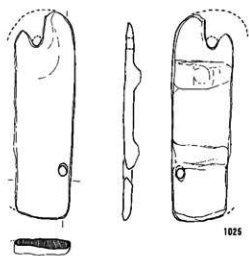


第86図 下駄(1018~1023)

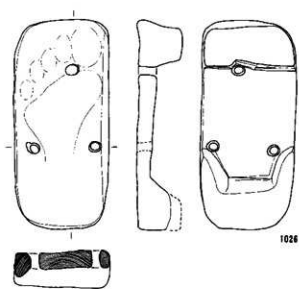
(1:4)



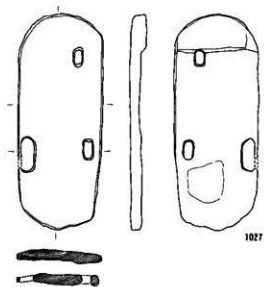
1024



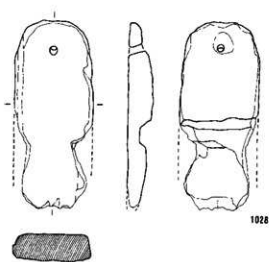
1025



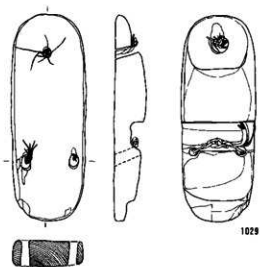
1026



1027



1028

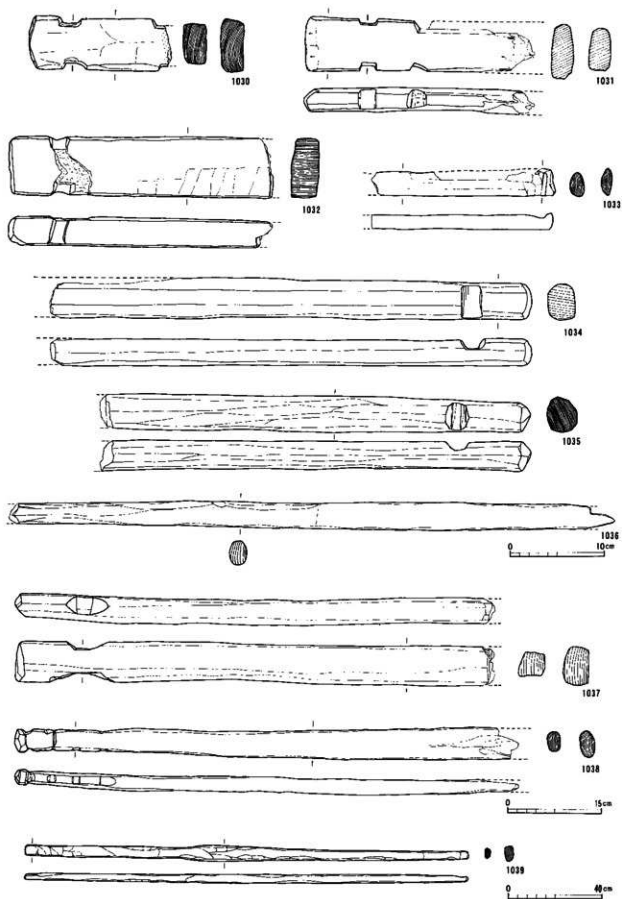


1029



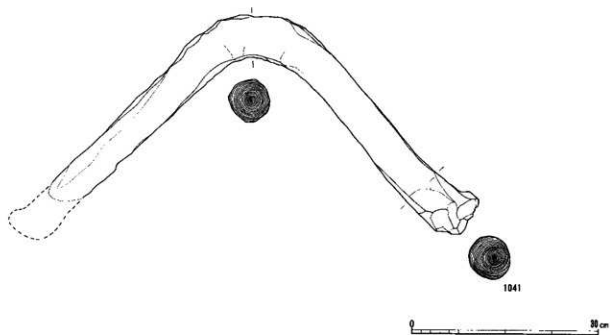
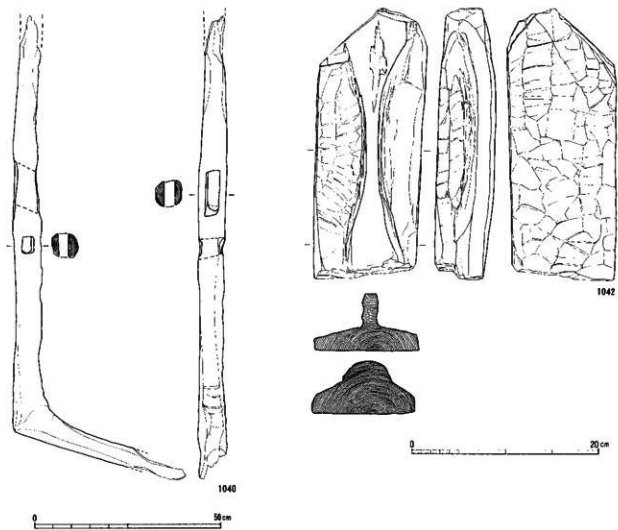
第87图 下駄(1024~1029)

(1:4)



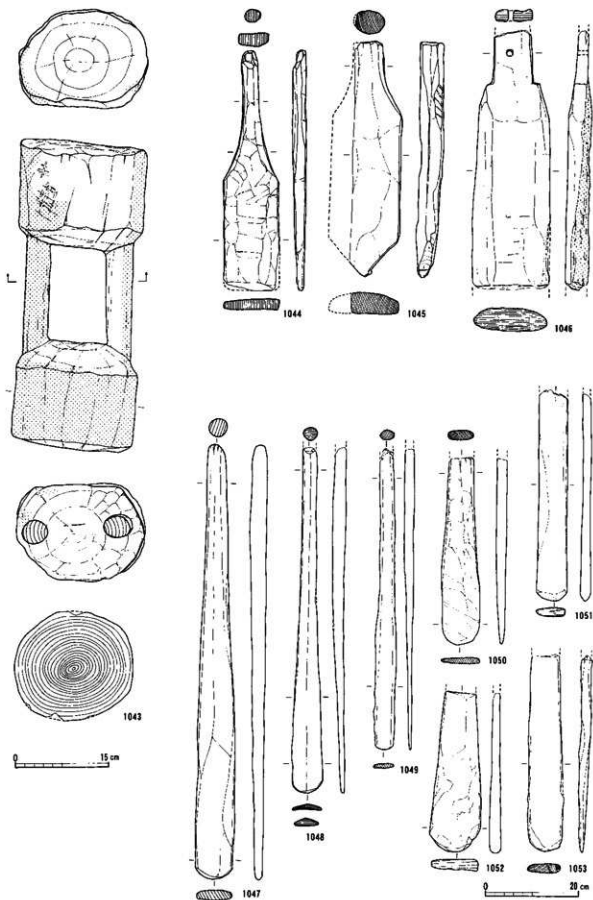
第88図 天秤棒(1030~1039)

(1037~1038は1:6、1039は1:8、その他1:4)



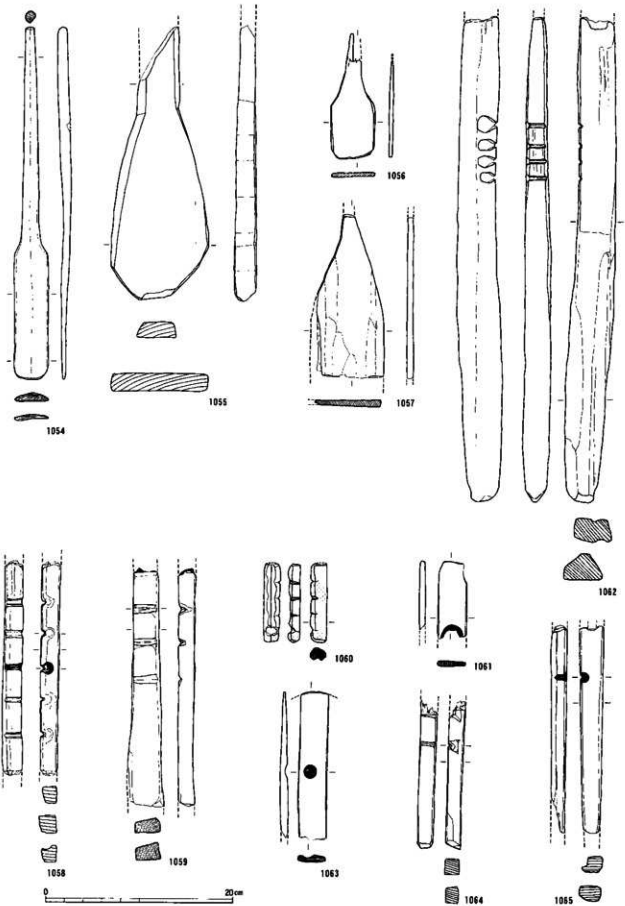
第89図 背負子?・甕?・鏝(1040~1042)

(1040は1:10、1041は1:6、1042は1:4)



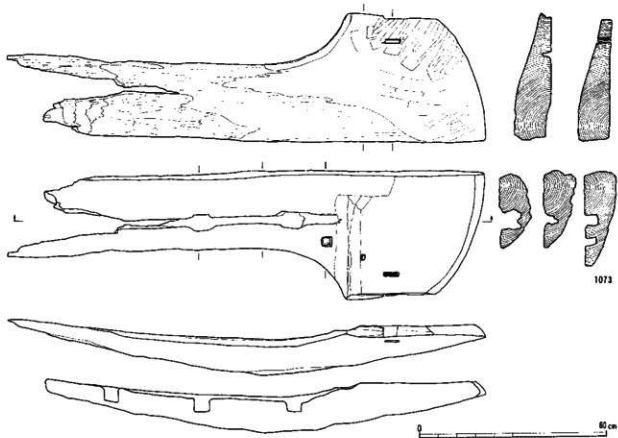
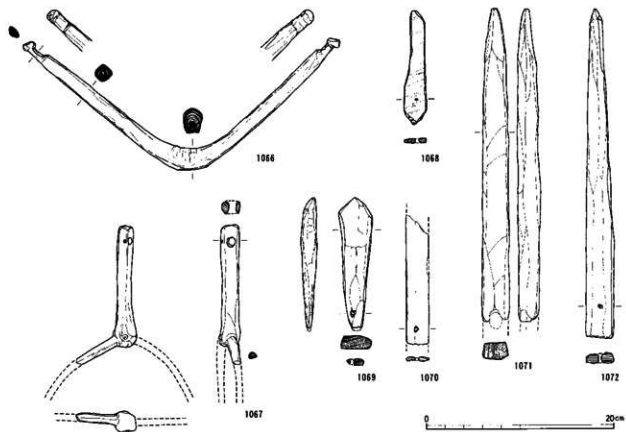
第90図 土印具・印き板・杓子状木製品(1043~1053)

(1043のみ1:6、その他1:4)



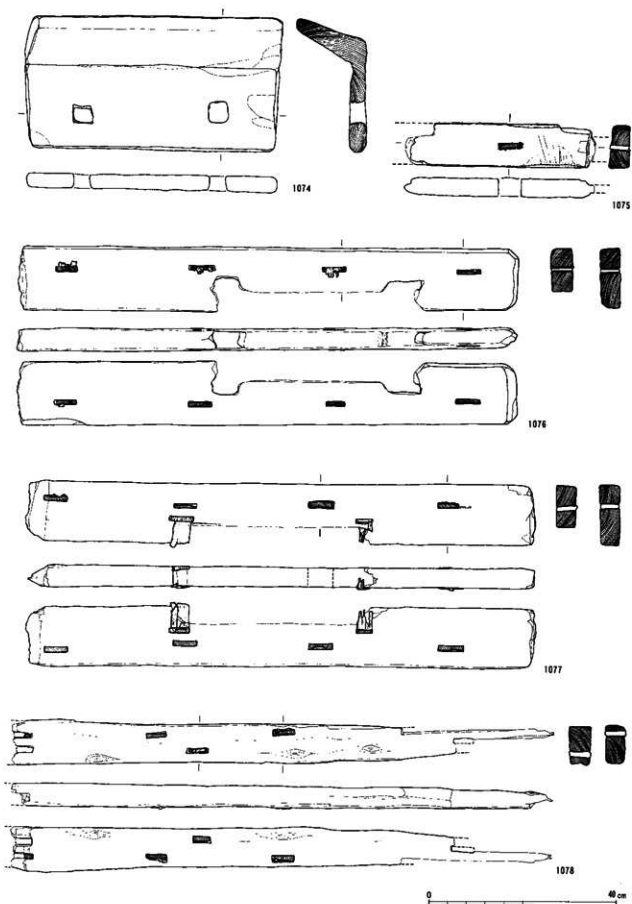
第91圖 杓子状木製品・火鑽臼(1054~1065)

(1:4)



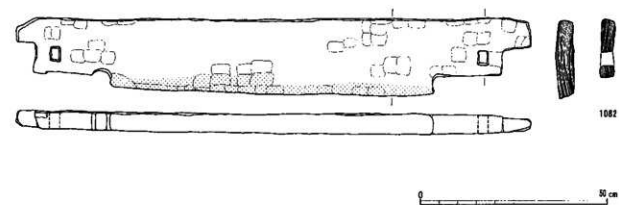
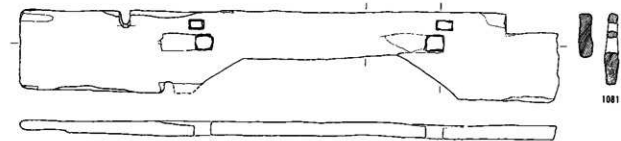
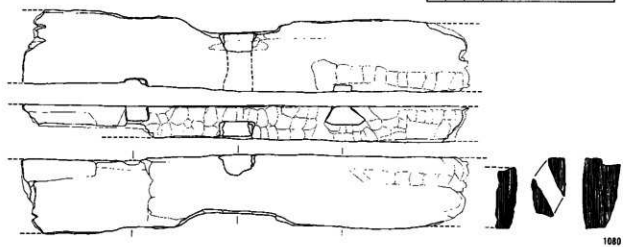
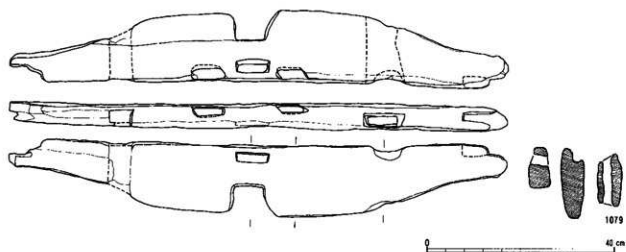
第92図 漁撈具・船材(1066～1073)

(1073のみ 1:12、その他 1:4)



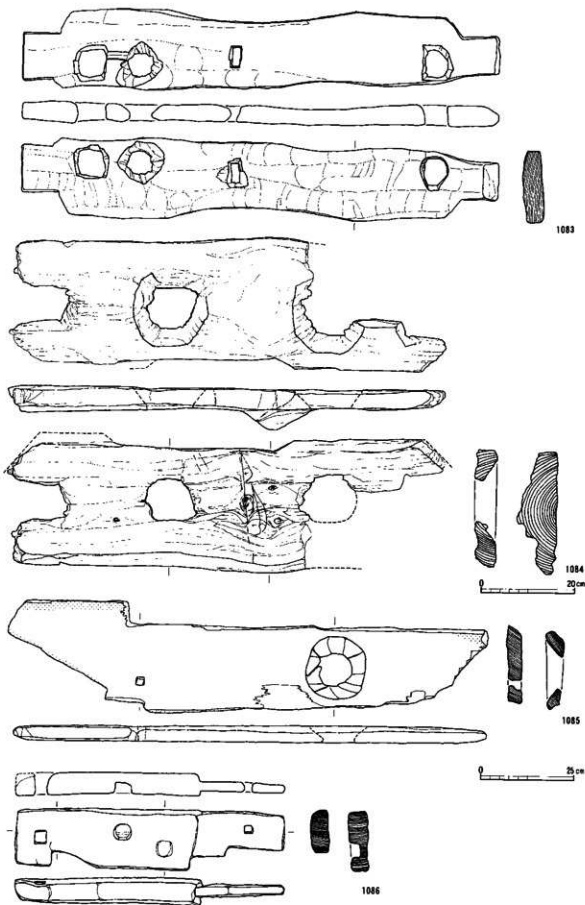
第93図 船材(1074~1078)

(1:8)



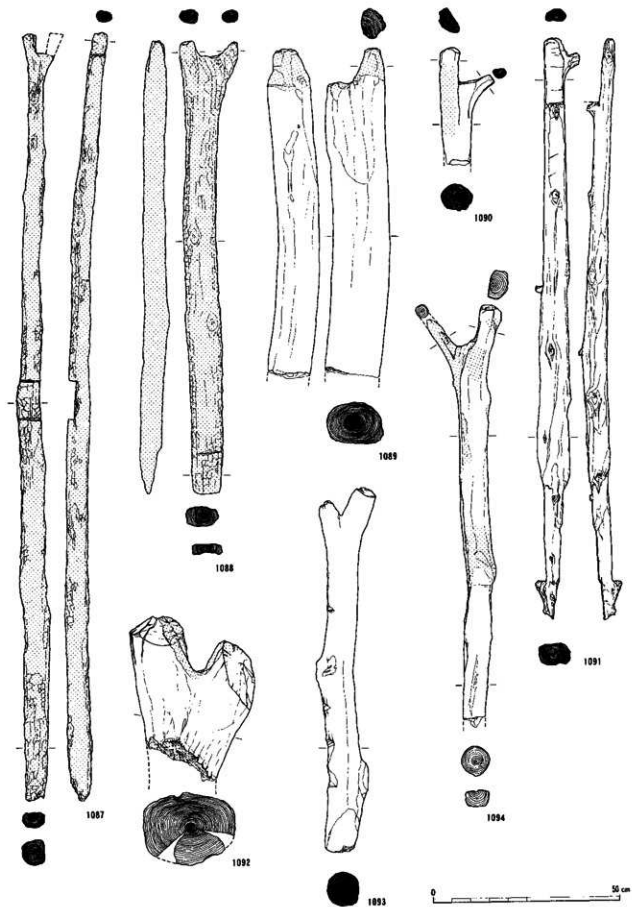
第94図 船材(1079~1082)

(1079のみ1:8、その他1:10)



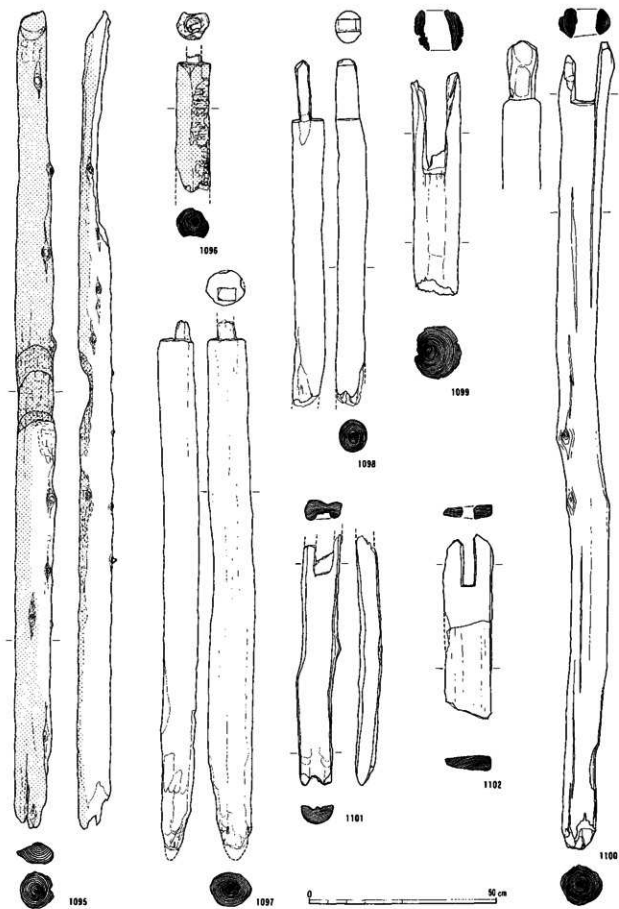
第95図 船材(1083~1086)

(1085のみ1:10、その他1:8)



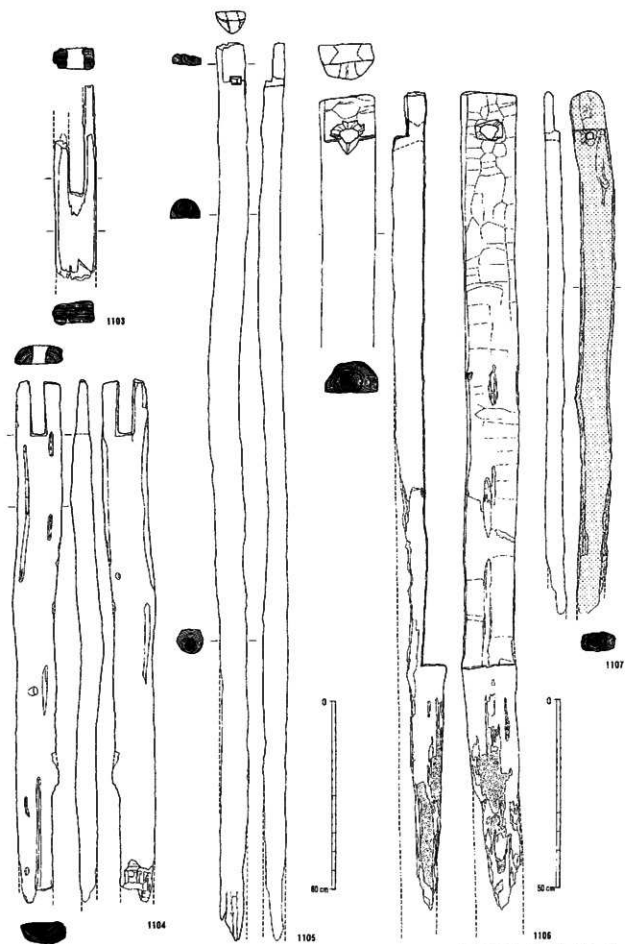
第96图 竖穴住居用柱(1087~1094)

(1:10)



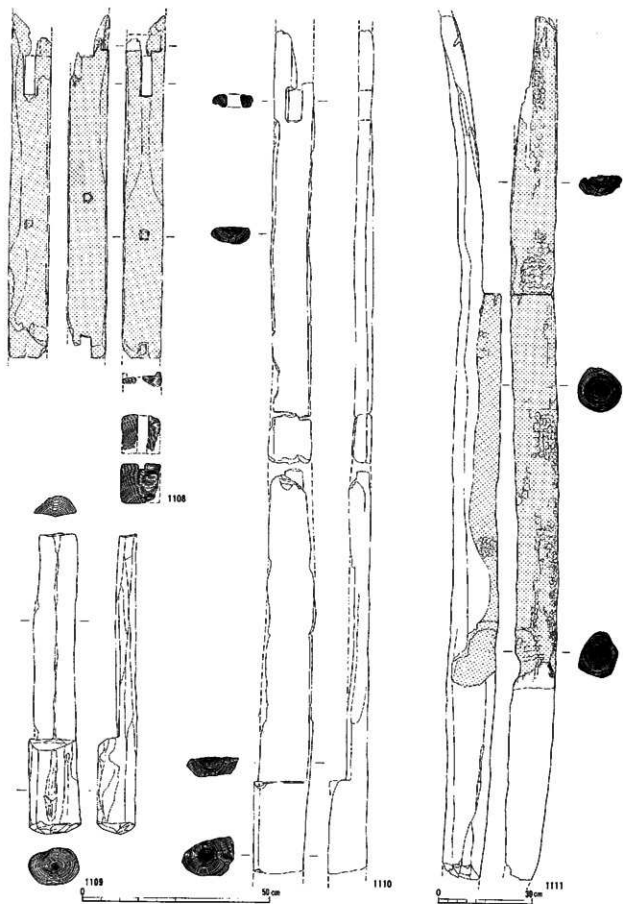
第97圖 竪穴住居用柱・掘立柱建物用柱(1095~1102)

(1:10)



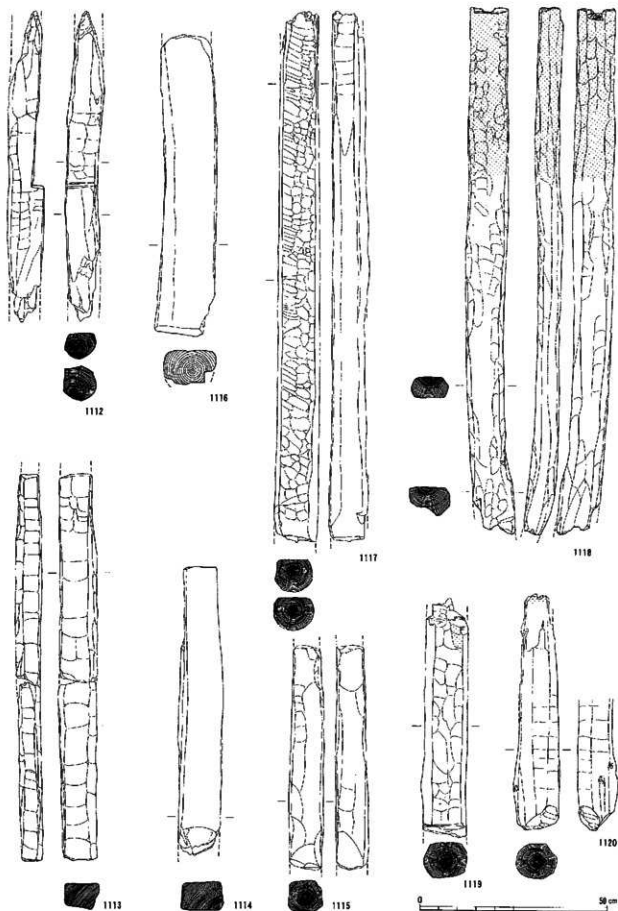
第98図 掘立柱建物用柱(1103~1107)

(1105のみ 1:12、その他 1:10)



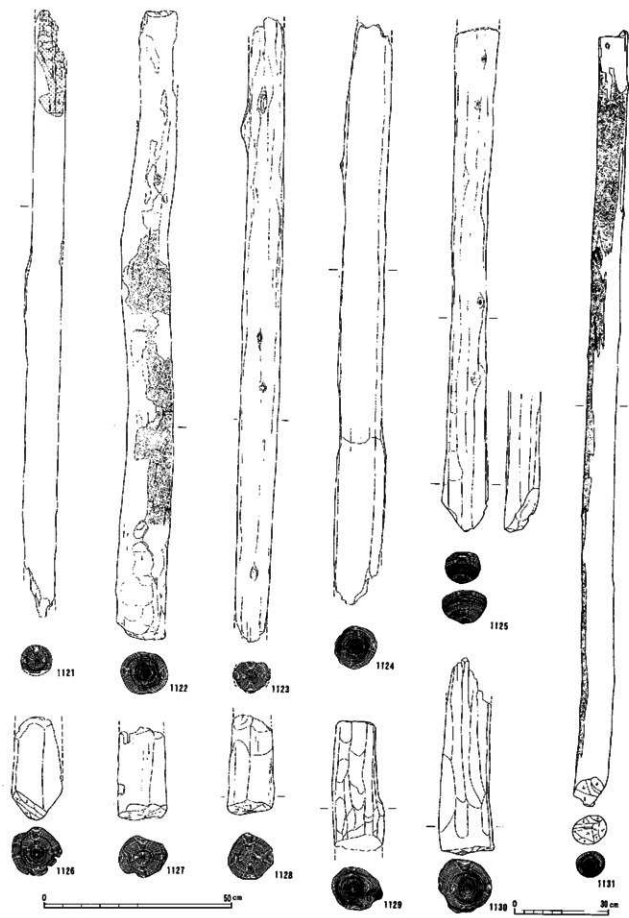
第99図 掘立柱建物用柱(1108~1111)

(1111のみ1:12、その他1:10)



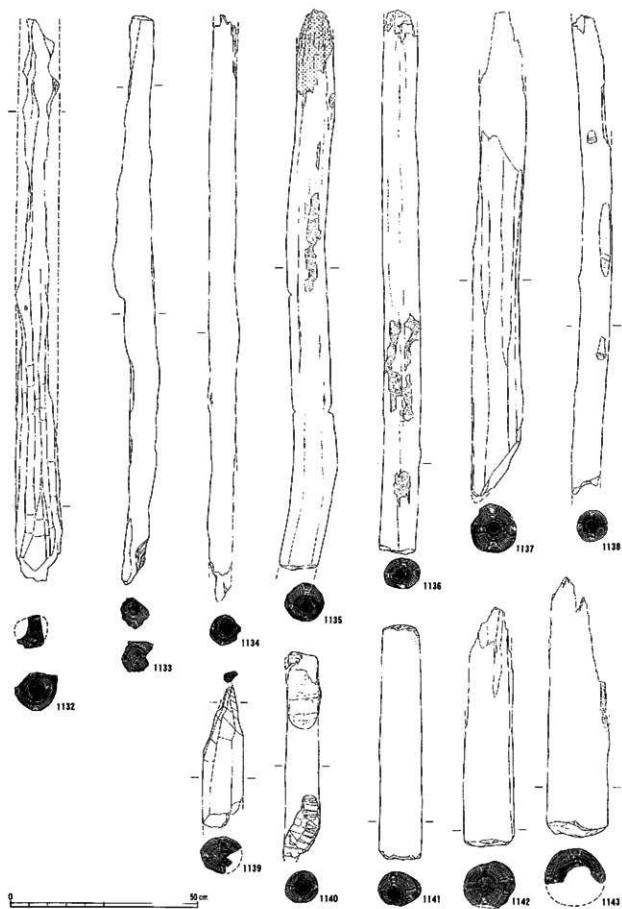
第100図 掘立柱建物用柱・その他柱材(1112~1120)

(1:10)



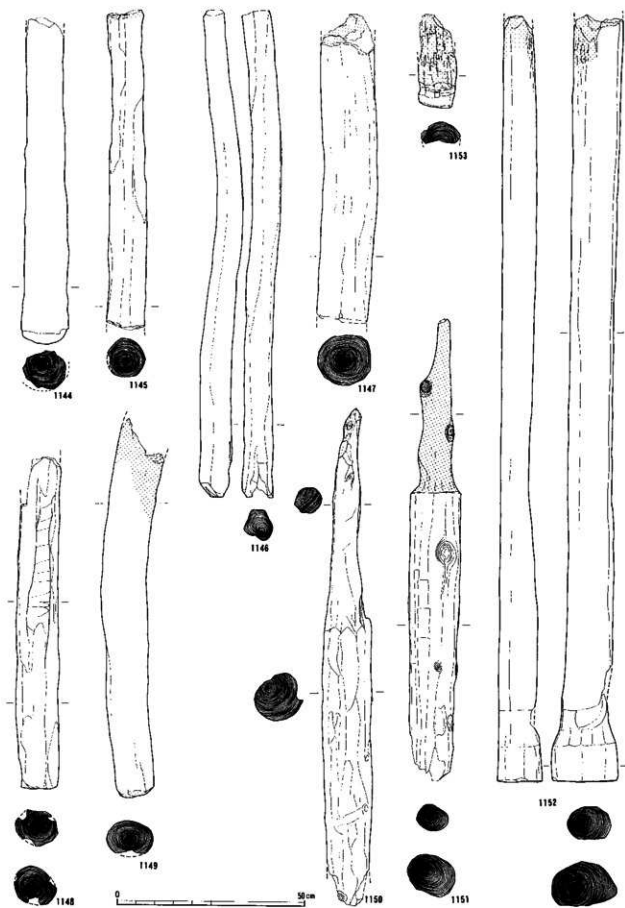
第101図 その他柱材(1121~1131)

(1131のみ 1:12、その他 1:10)



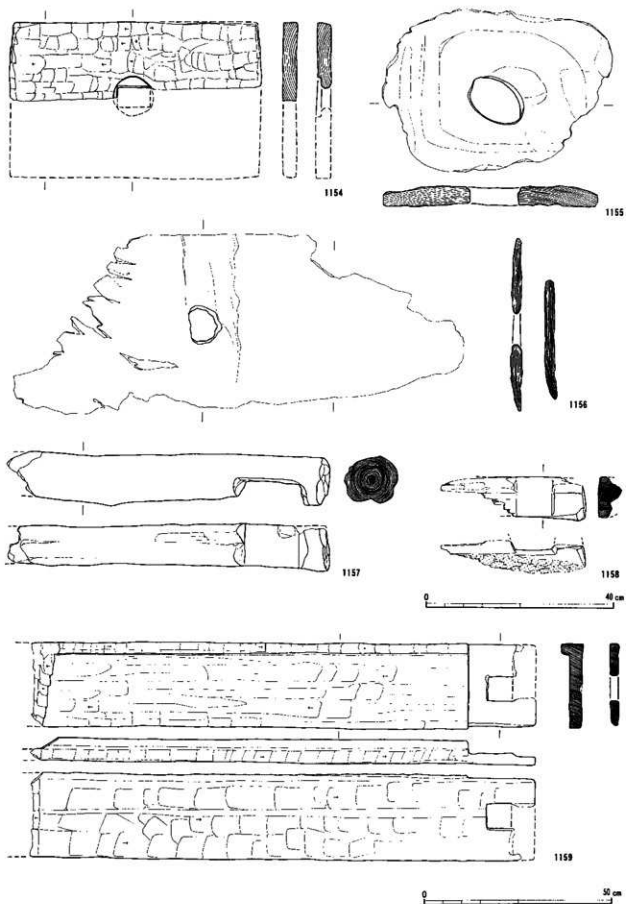
第102図 その他柱材(1132~1143)

(1:10)



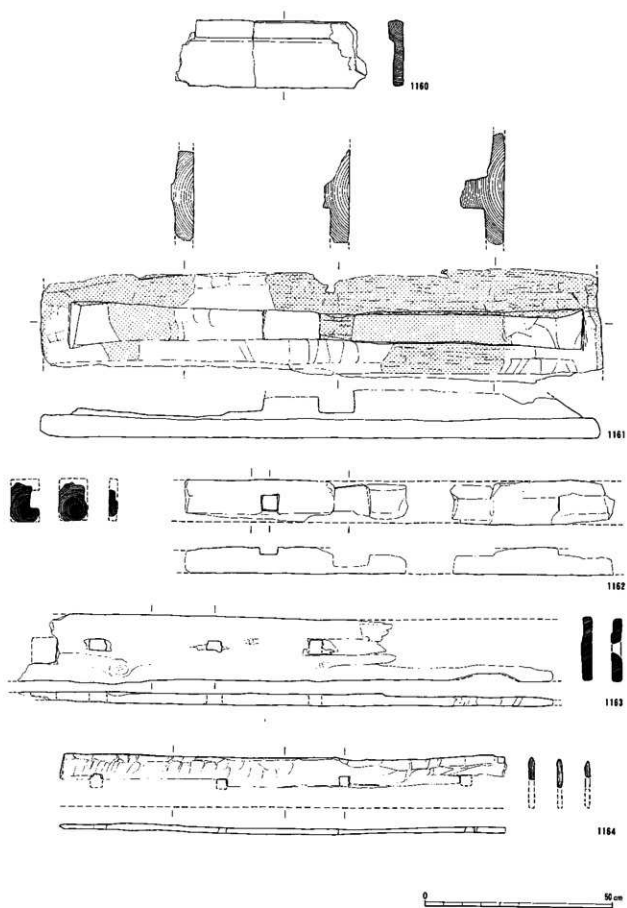
第103図 その他柱材(1144~1153)

(1:10)



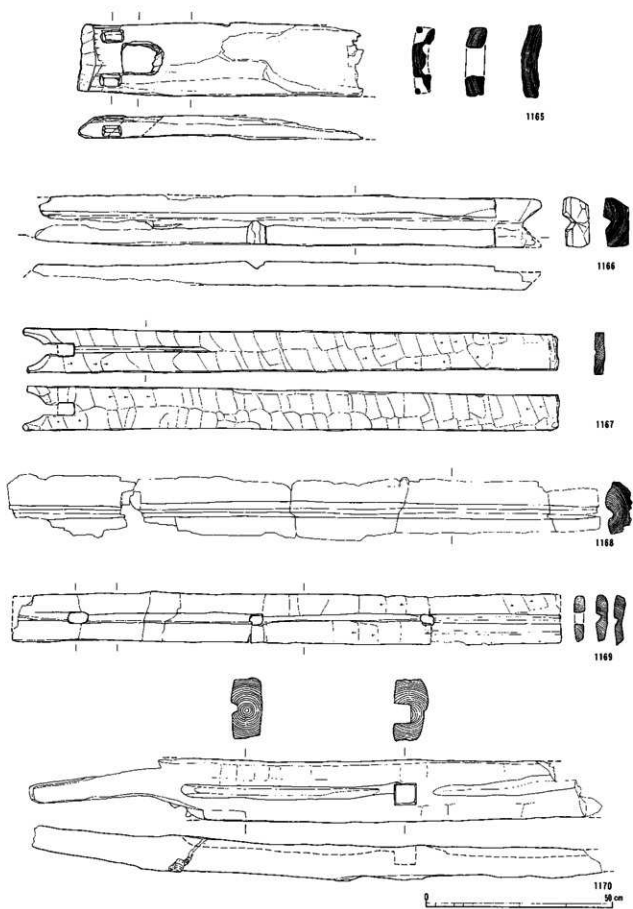
第104図 鼠返し・堅穴住居用横架材・掘立柱建物用水平構造材(1154~1159)

(1159のみ1:10、その他1:8)



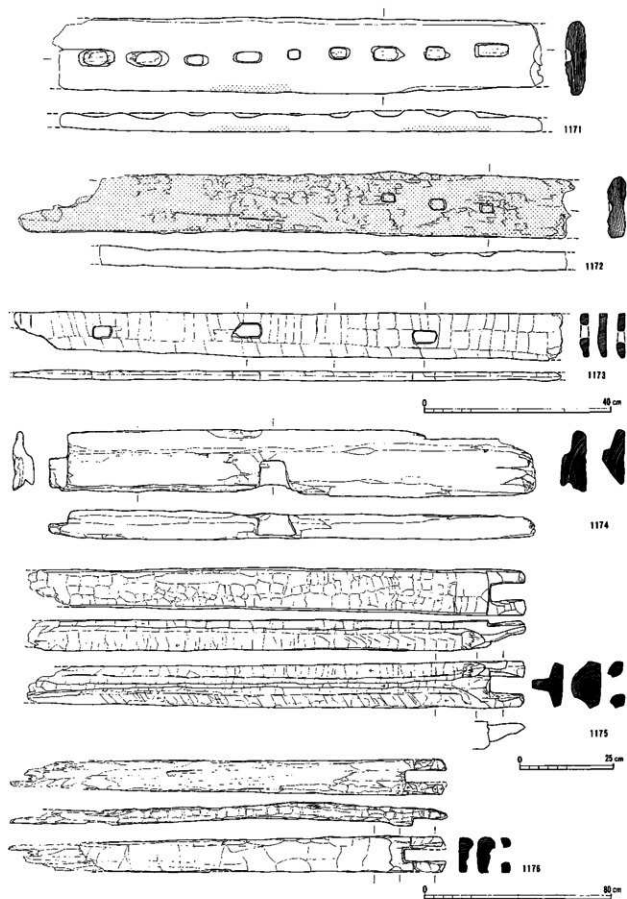
第105図 掘立柱建物用水平構造材(1160~1164)

(1:10)



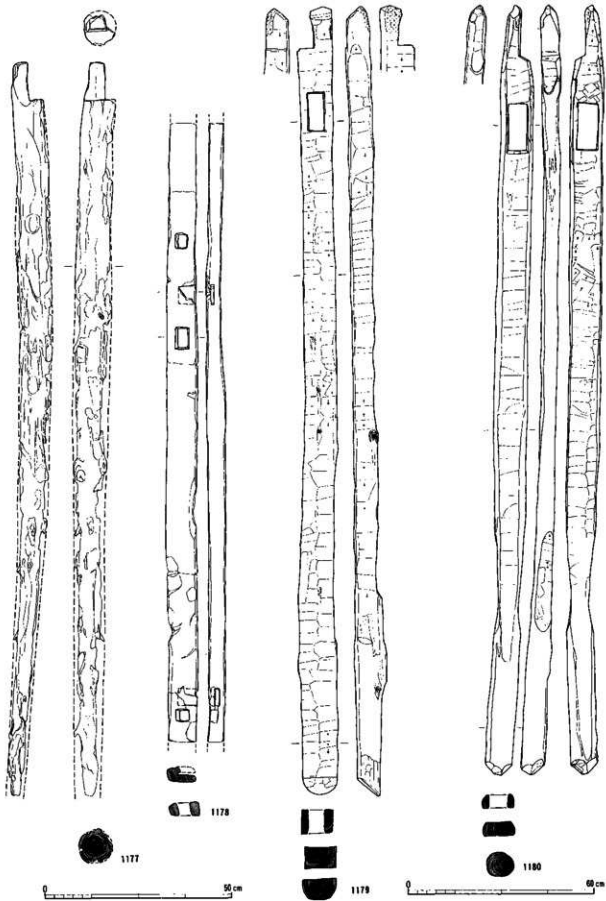
第106圖 掘立柱建物用水平構造材(1165~1170)

(1:10)



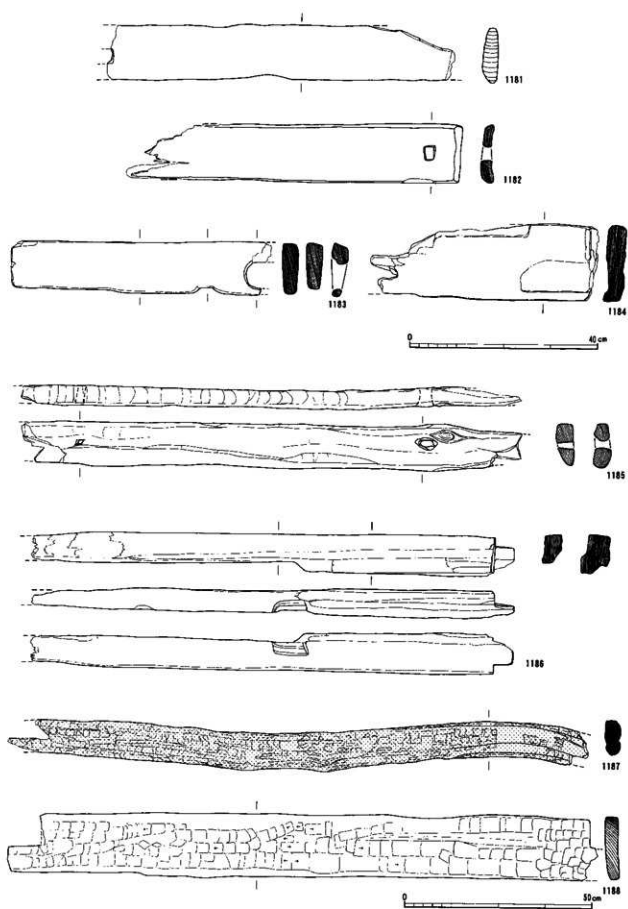
第107図 振立柱建物用水平構造材(1171~1176)

(1171~1173は1:8、1174~1175は1:10、1176は1:16)



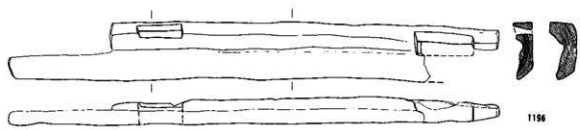
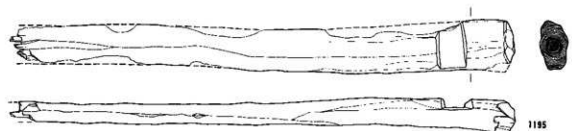
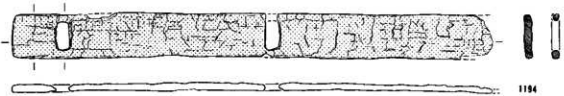
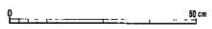
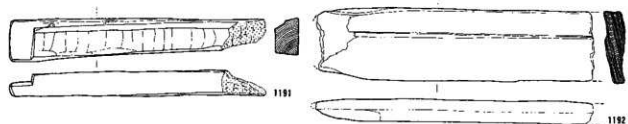
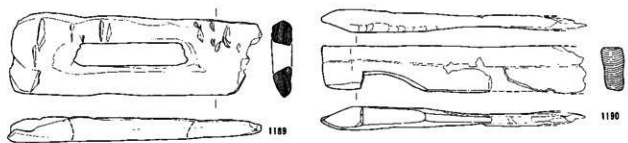
第108図 掘立柱建物用水平構造材(1177~1180)

(1177~1178は 1 : 10、1179~1180は 1 : 12)



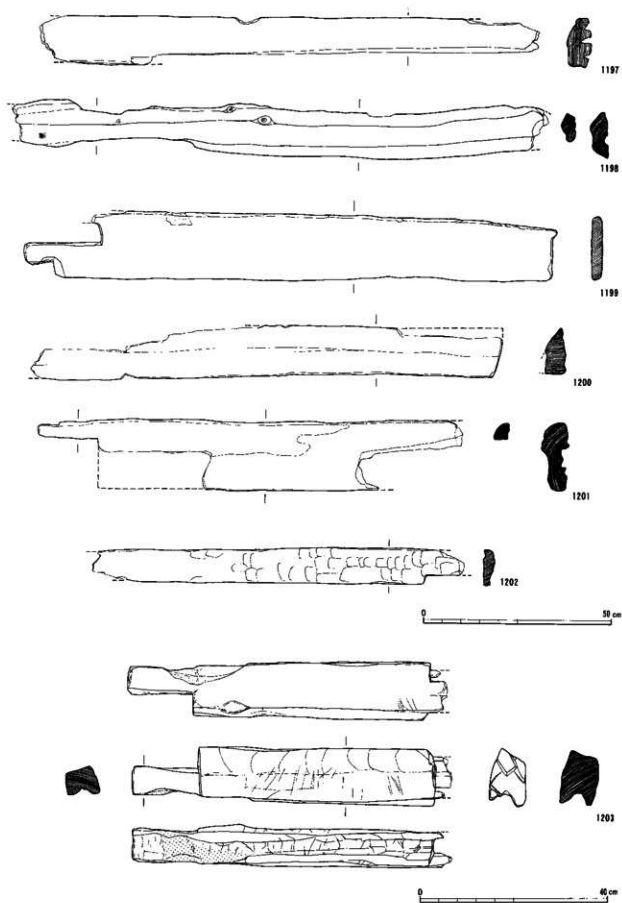
第109図 掘立柱建物用水平構造材(1181~1188)

(1181~1184は 1 : 8、1185~1188は 1 : 10)



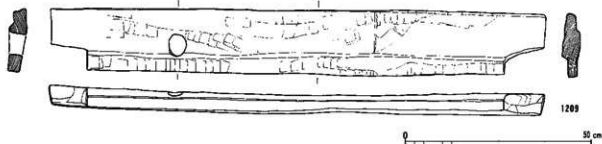
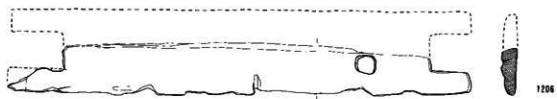
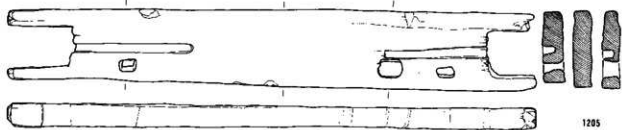
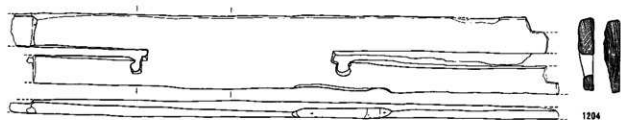
第110図 掘立柱建物用水平構造材(1189~1196)

(1189~1192は 1 : 10、1193~1196は 1 : 8)



第111図 掘立柱建物用水平構造材(1197~1203)

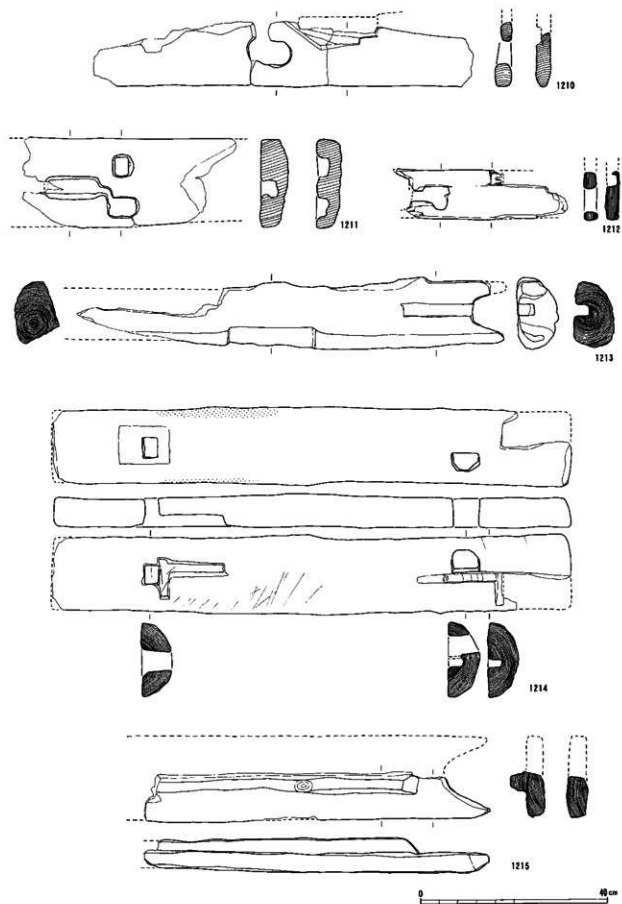
(1203のみ 1 : 8、その他 1 : 10)



0 50 cm

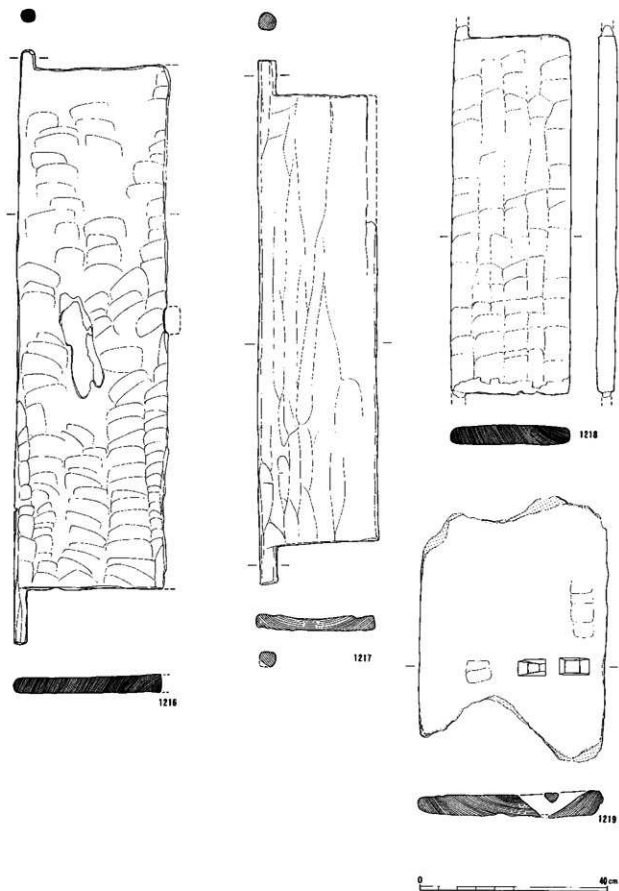
第112图 藏放匕材(1204~1209)

(1:10)



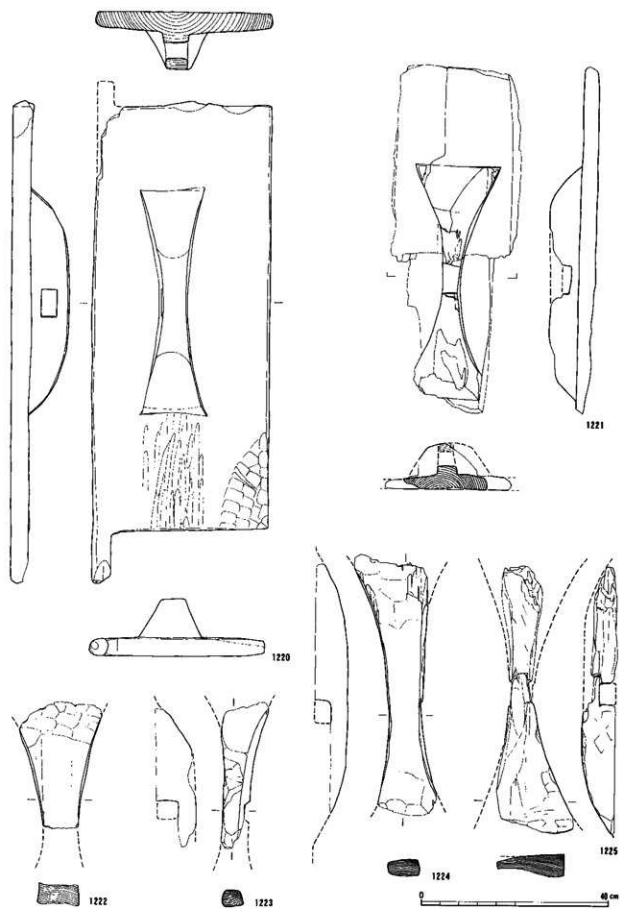
第113図 鍍放し材・補材(1210~1215)

(1:8)



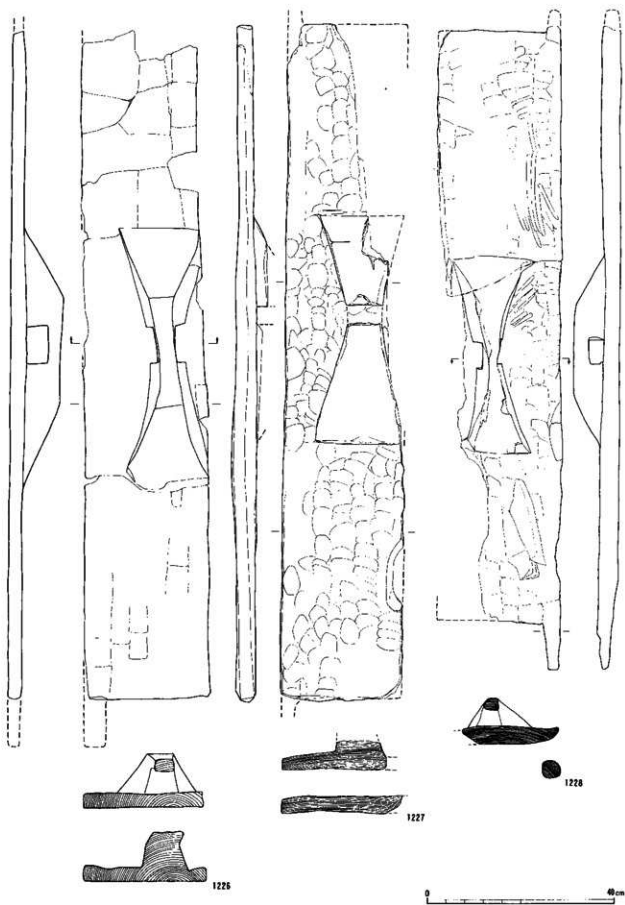
第114図 扉板(1216~1219)

(1:8)



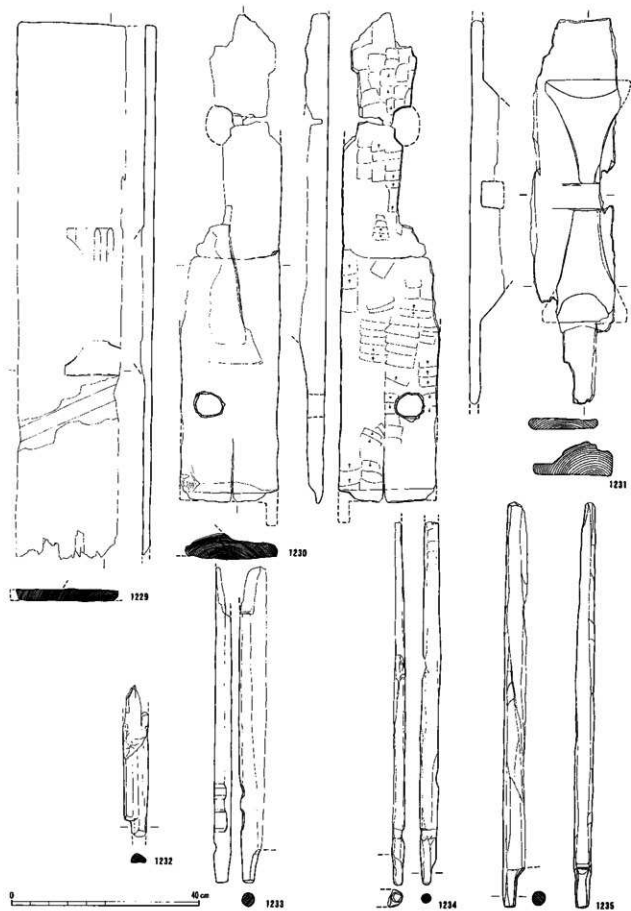
第115图 扉板(1220~1225)

(1:8)



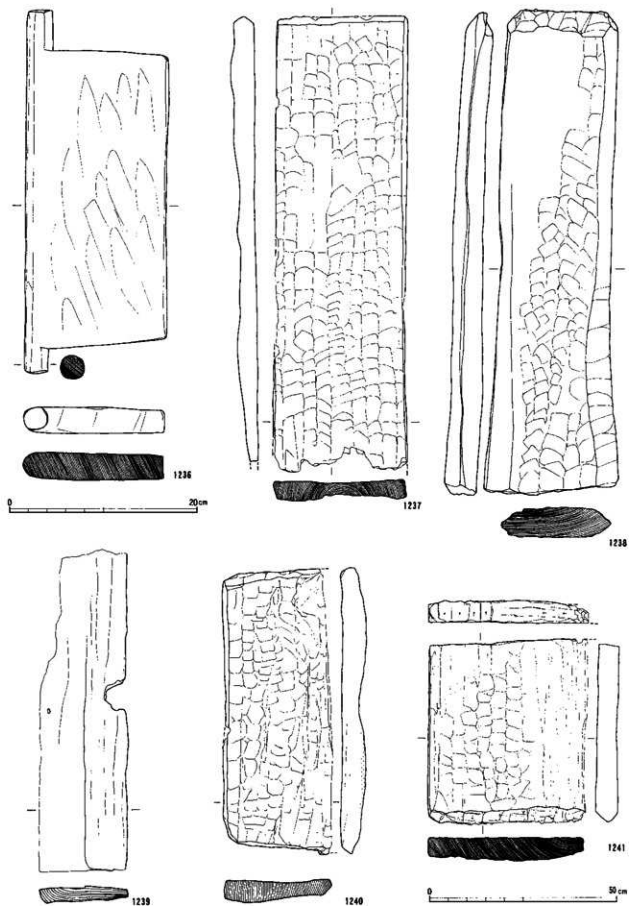
第116圖 扉板(1226~1228)

(1:8)



第117圖 扉板(1229~1235)

(1:8)



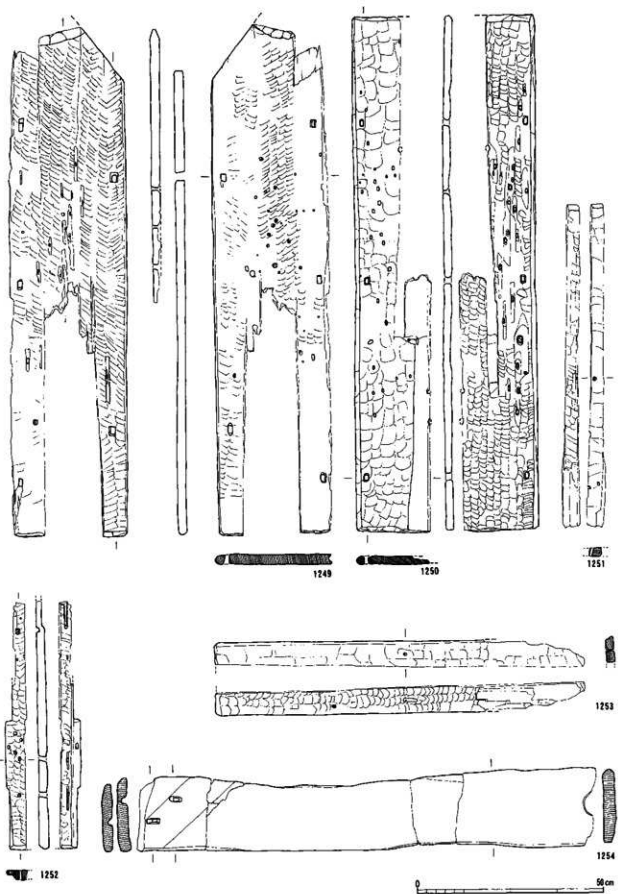
第118図 窓材・床材(1236~1241)

(1236のみ1:4、その他1:10)



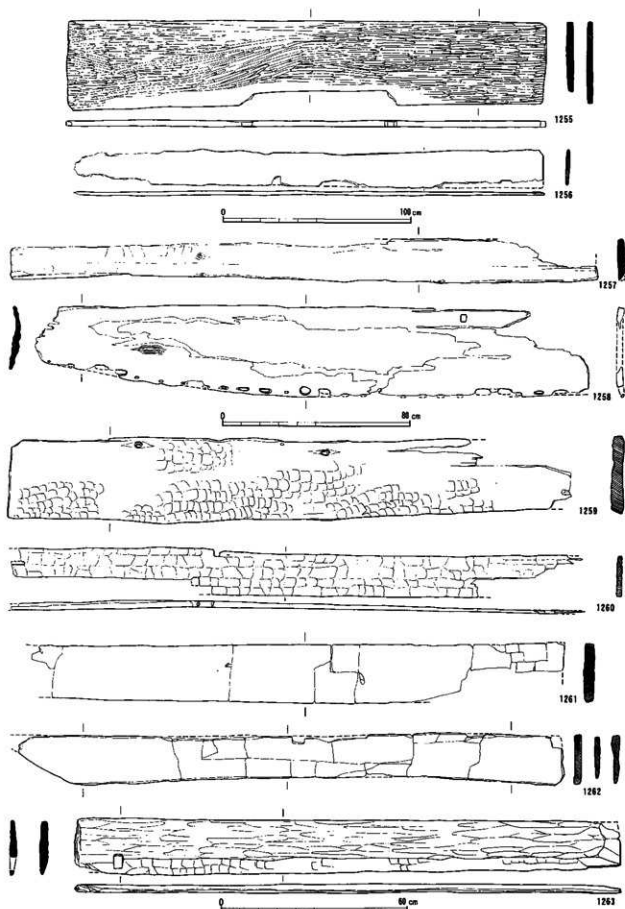
第119図 床材・板壁板(1242~1248)

(1242~1244は 1:10、その他 1:6)



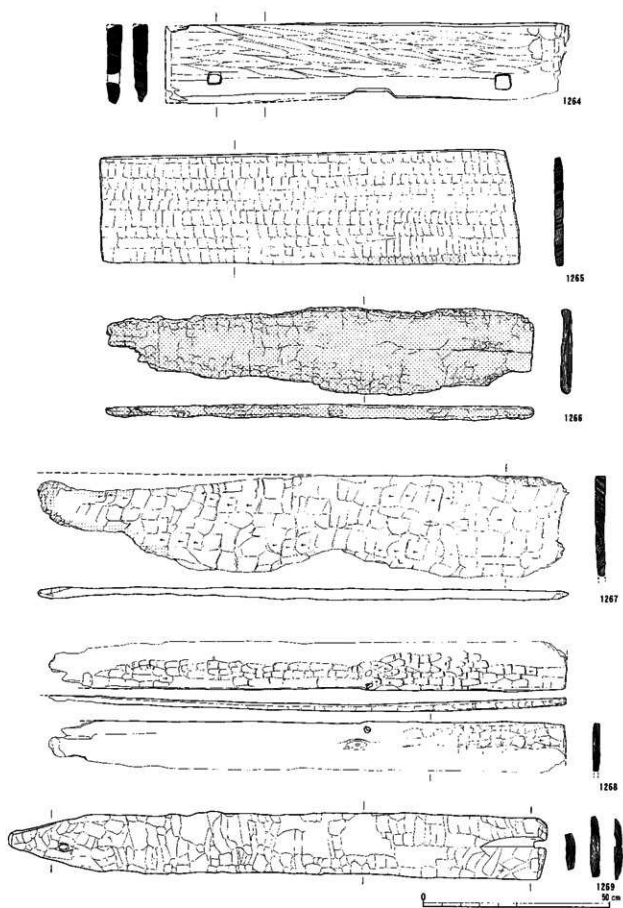
第120図 板壁板(1249~1254)

(1:10)



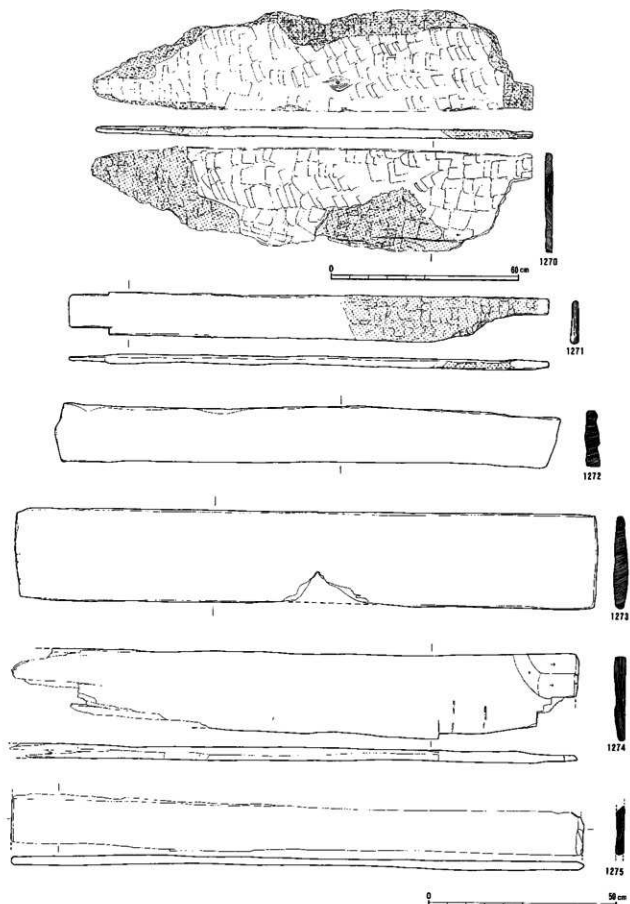
第121図 板壁板(1255~1263)

(1255~1256は1:20、1257~1258は1:16、1259~1263は1:12)



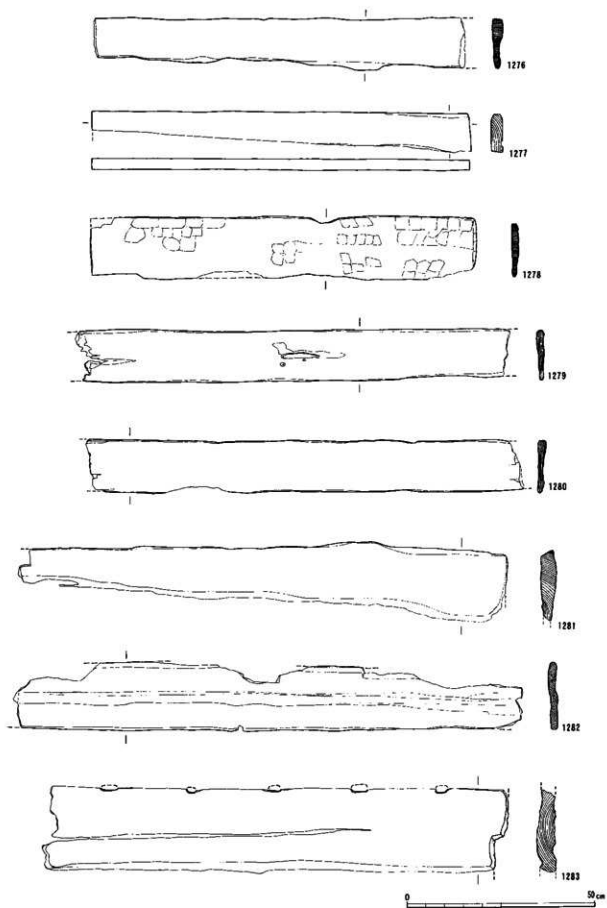
第122图 板壁板(1264~1269)

(1:10)



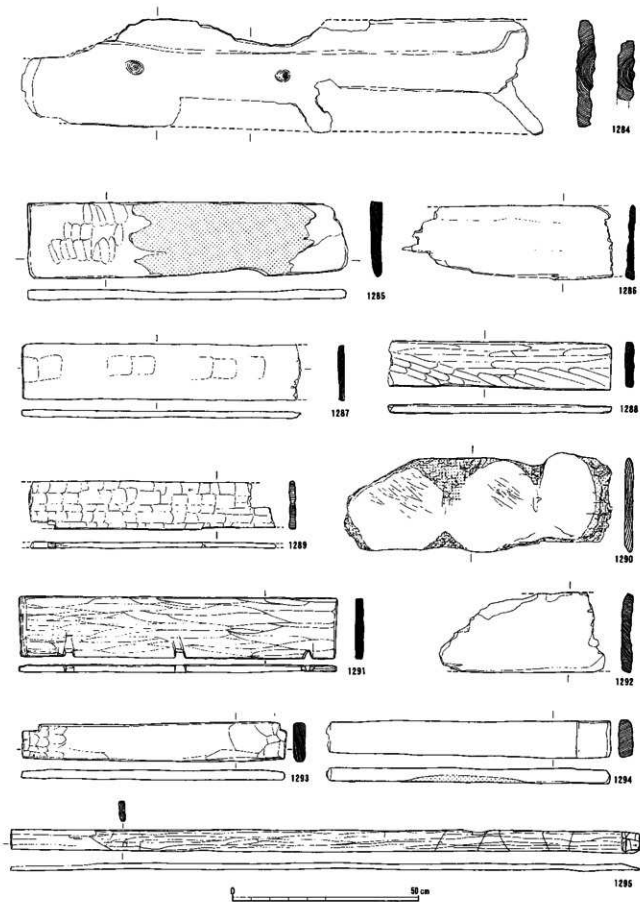
第123図 板置板(1270~1275)

(1270のみ1:12、その他1:10)



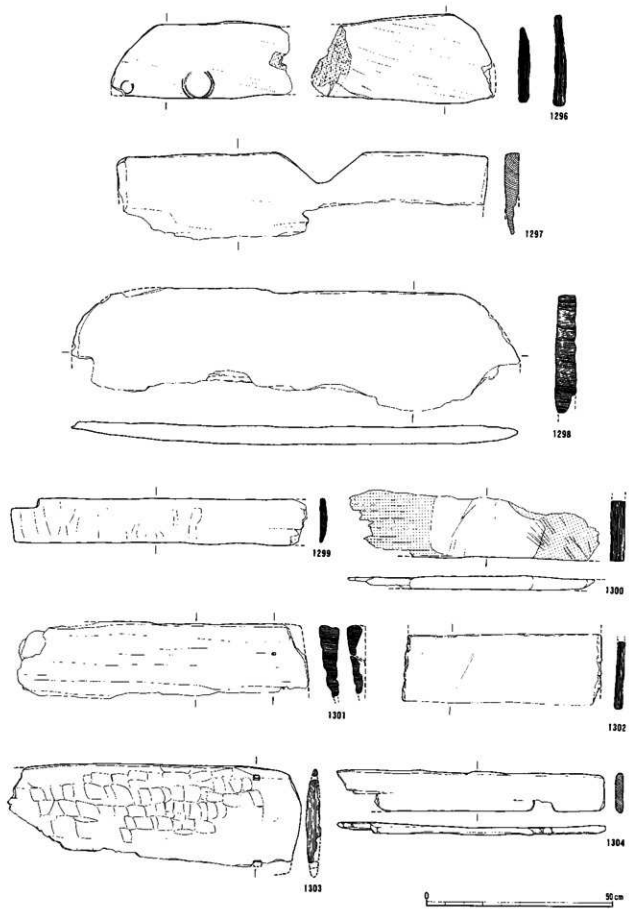
第124図 板壁板(1276~1283)

(1:10)



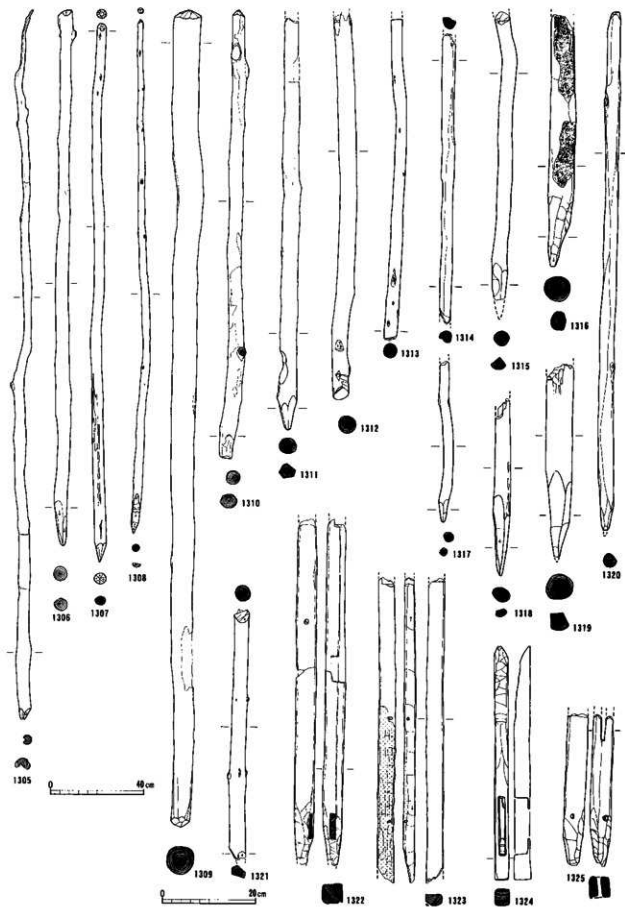
第125図 板壁板(1284~1295)

(1 : 10)



第126图 板壁板(1296~1304)

(1:10)



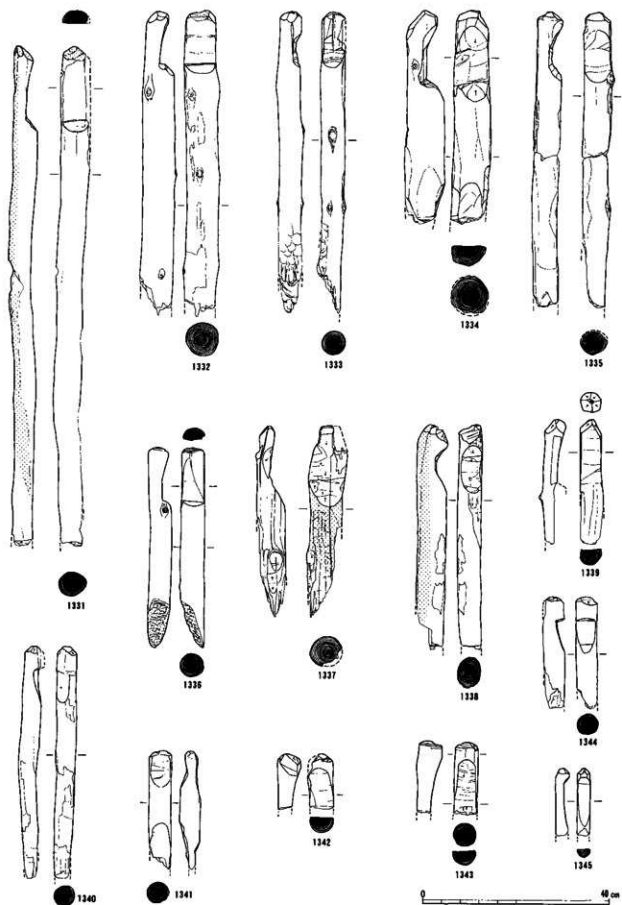
第127図 壘木葬(1305~1325)

(1305~1308は1:16、その他1:8)



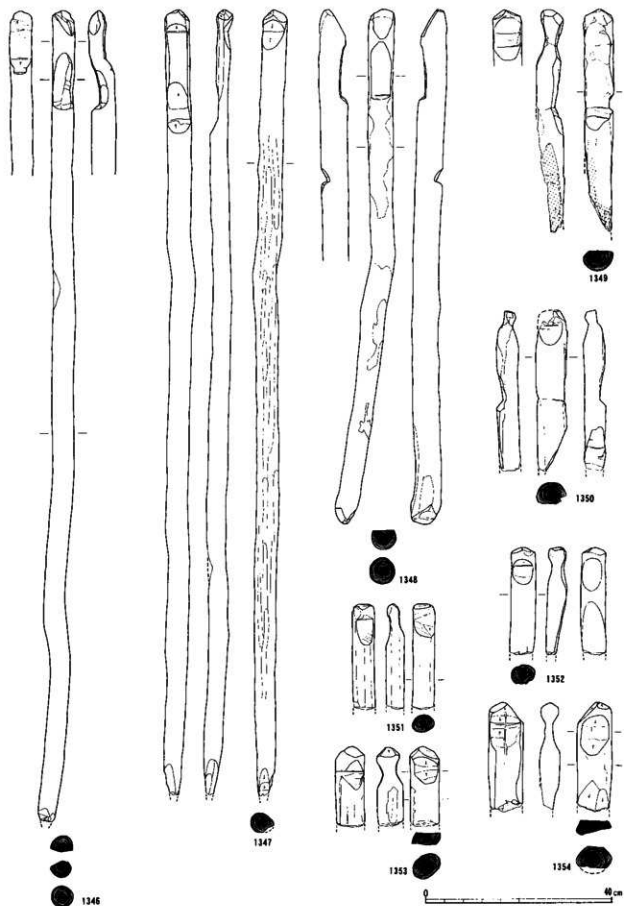
第128圖 垂木(1326-1330)

(1:8)



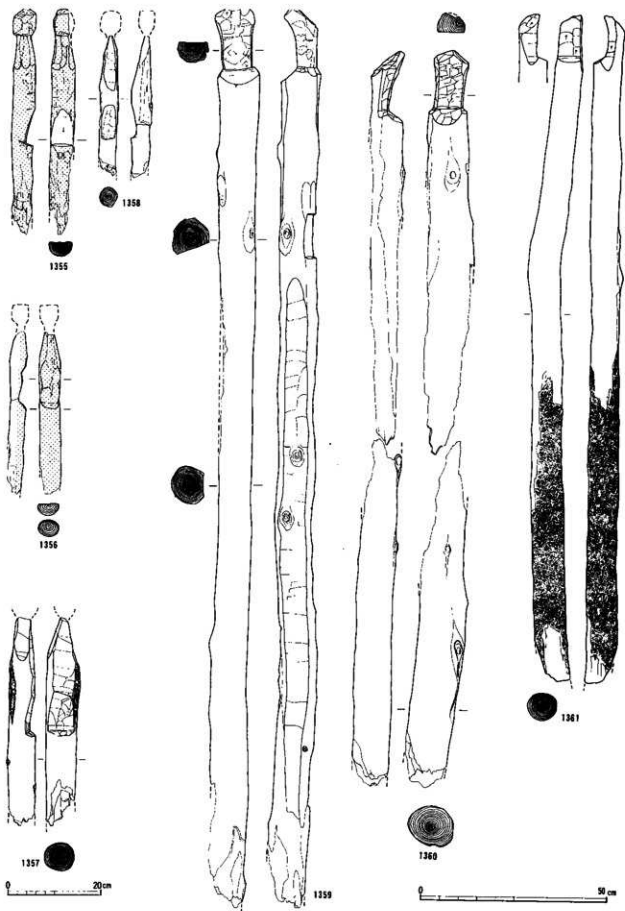
第129圖 垂木(1331~1345)

(1:8)



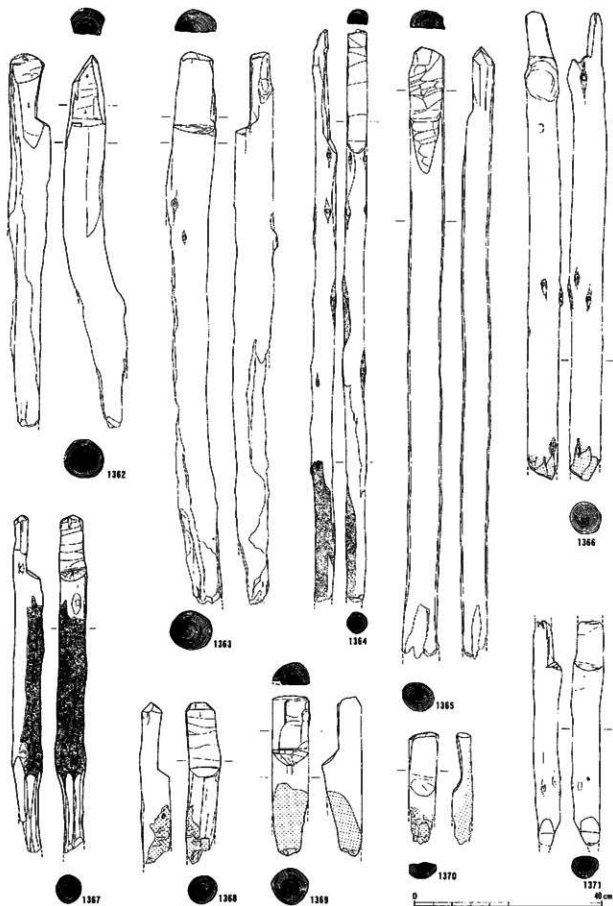
第130图 垂木(1346~1354)

(1:8)



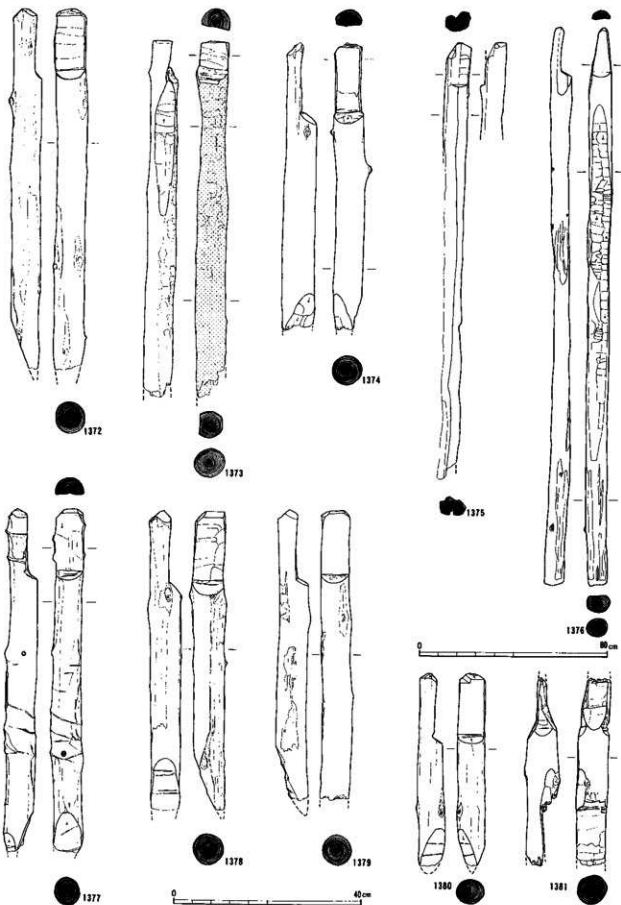
第131図 垂木(1355~1361)

(1355~1358は 1 : 8、その他 1 : 10)



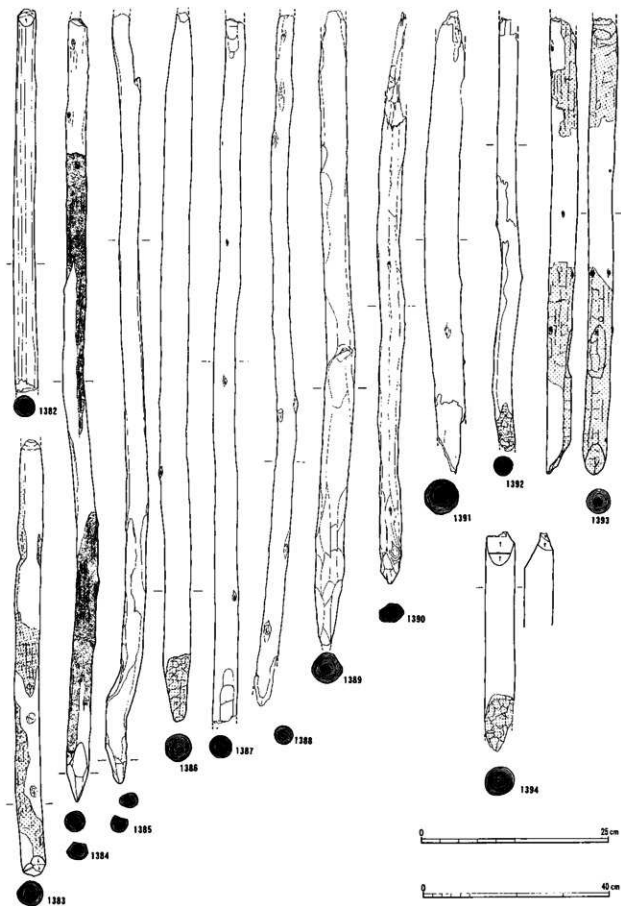
第132図 壺木(1362~1371)

(1:8)



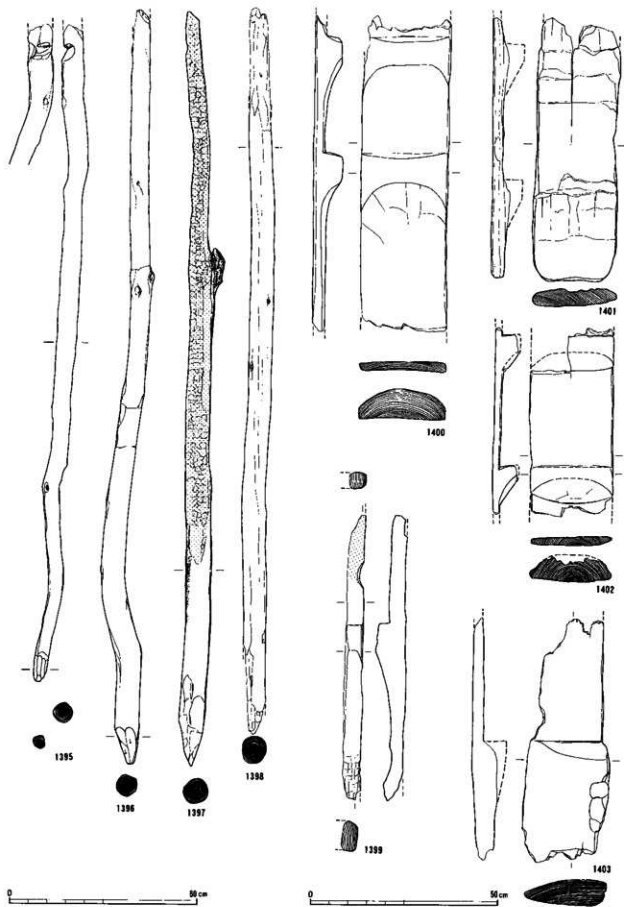
第133図 垂木(1372~1381)

(1375~1376は1:16、その他1:8)



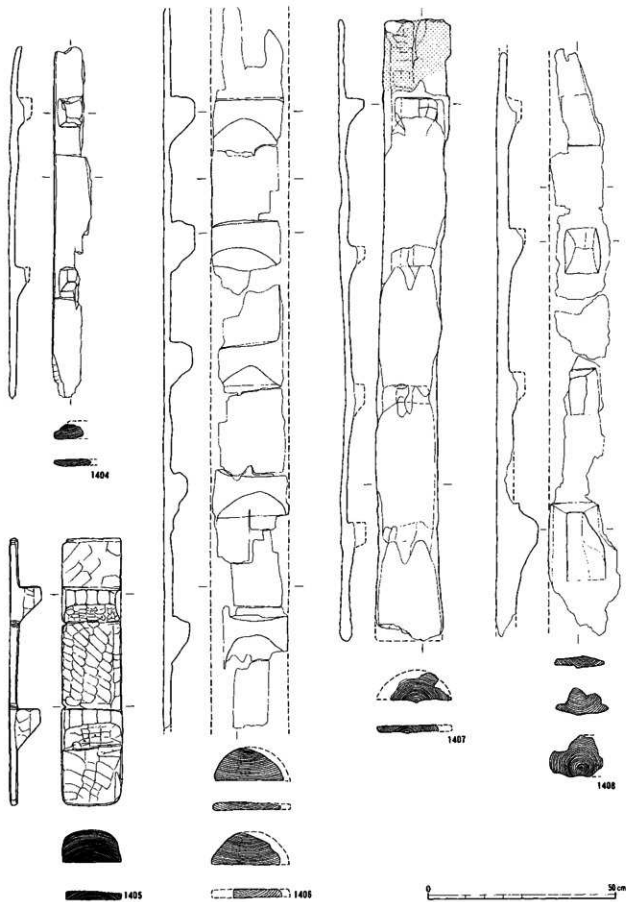
第134図 垂木(1382~1394)

(1394のみ1:5、その他1:8)



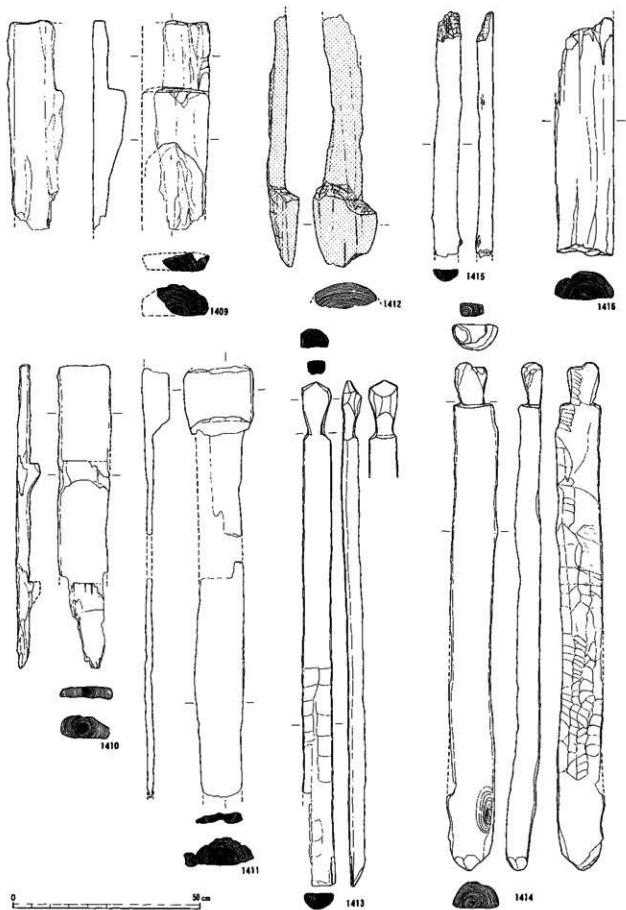
第135図 垂木・梯子(1395~1403)

(1395~1398は1:12、その他1:10)



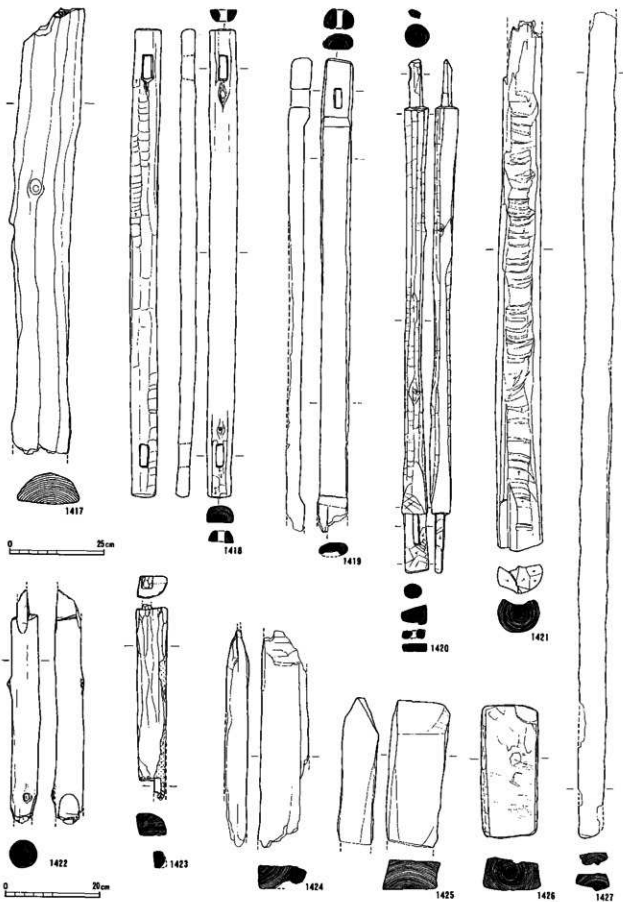
第136圖 梯子(1404~1408)

(1:10)



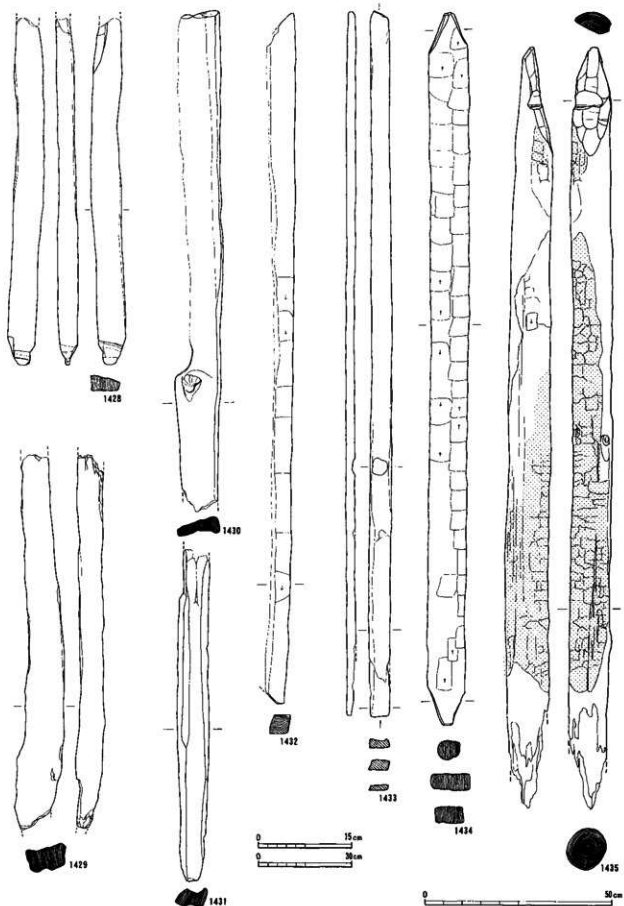
第137図 様子・不明建築部材(1409~1416)

(1:10)



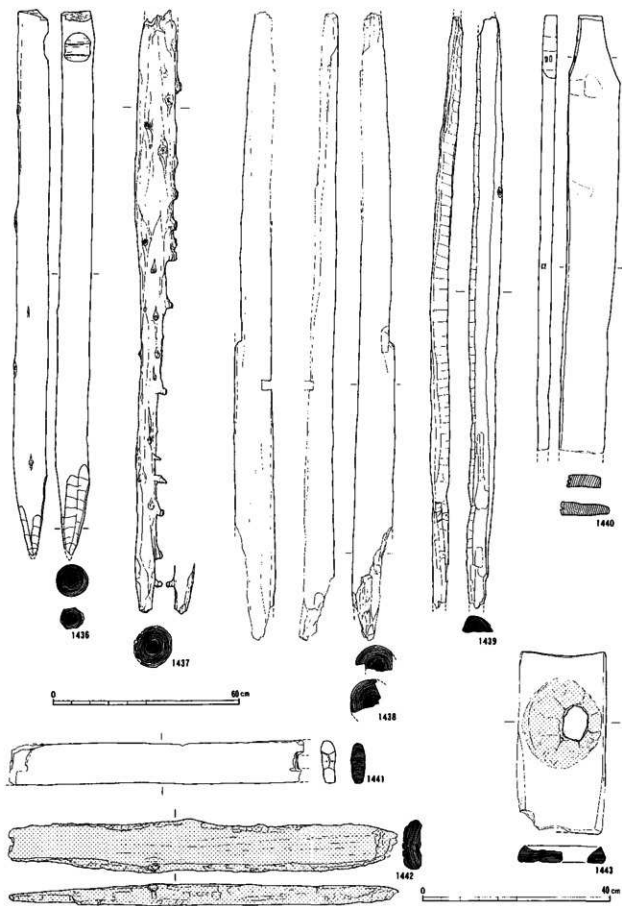
第138図 不明建築部材(1417~1427)

(1422~1423は1:8、その他1:10)



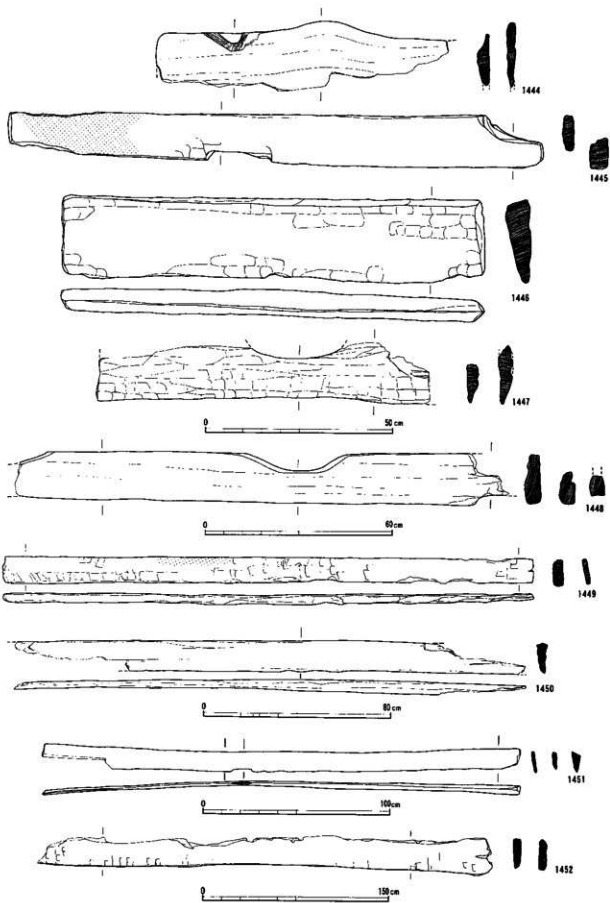
第139図 不明建築部材(1428~1435)

(1432は 1 : 6、1433は 1 : 12、その他 1 : 10)



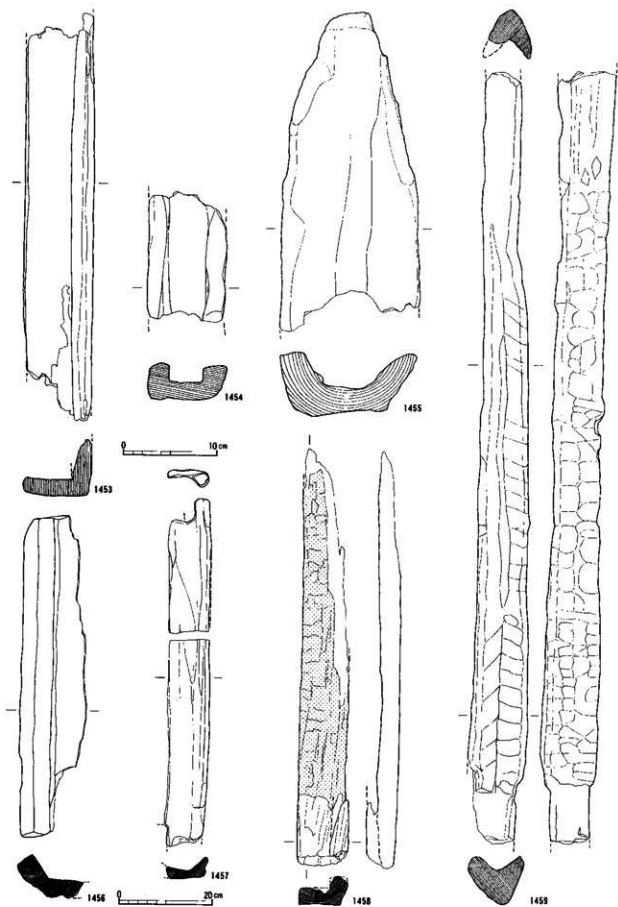
第140図 不明建築部材(1436~1443)

(1436~1439は1:12、その他1:8)



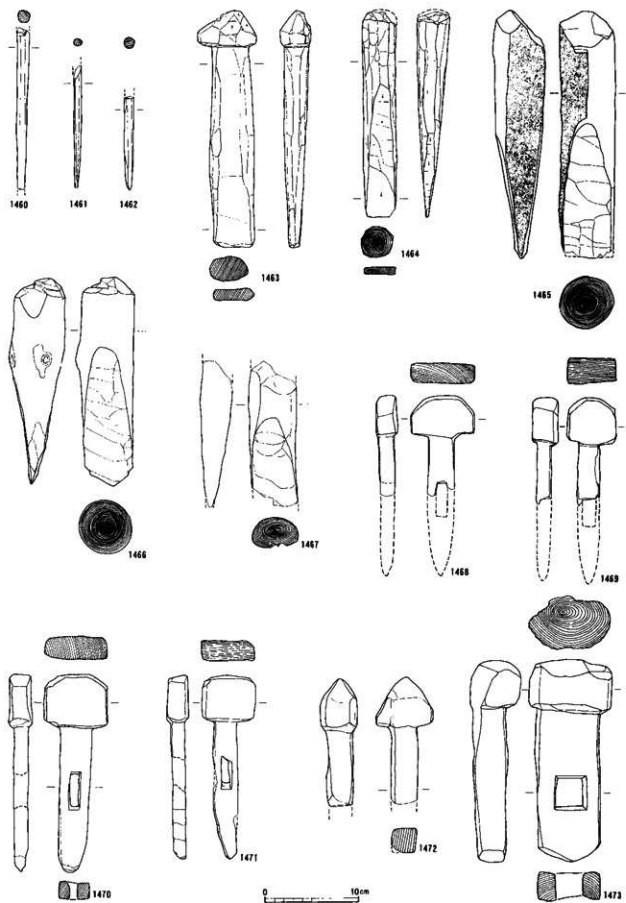
第141図 不明建築部材(1444~1452)

(1444~1447は1:10、1448は1:12、1449~1450は1:16、
1451は1:20、1452は1:30)



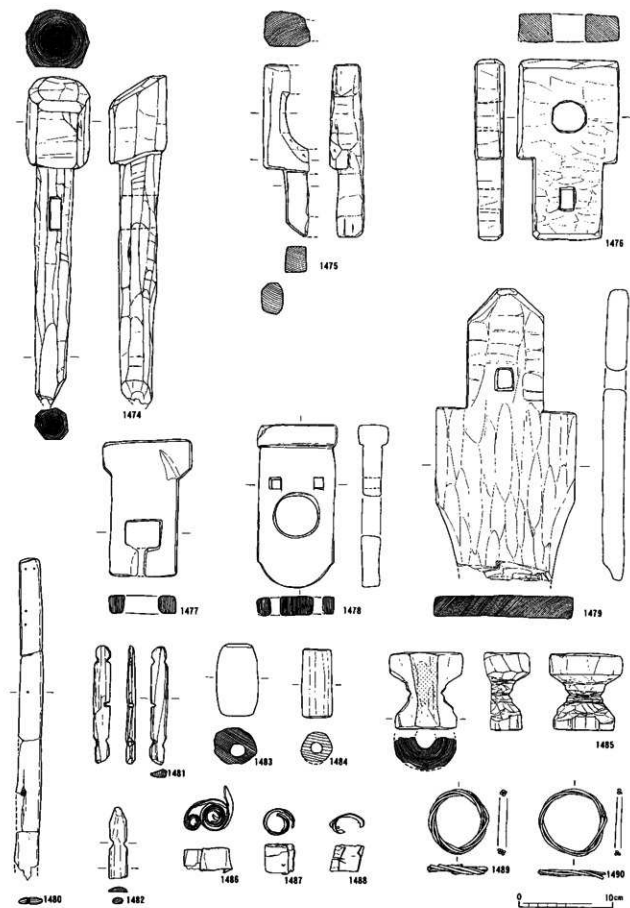
第142回 木樋(1453~1459)

(1453~1455は1:4、その他1:8)



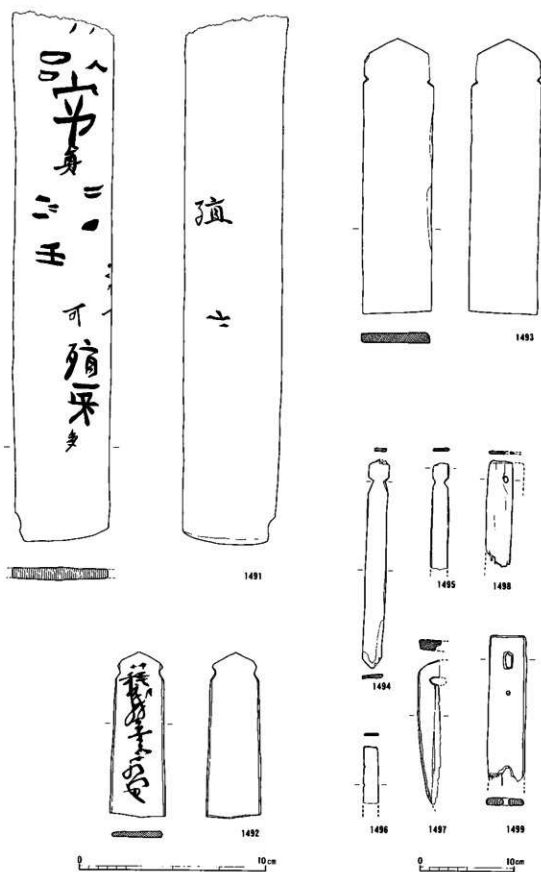
第143図 木釘・栓もしくは根・把手(1460~1473)

(1:4)



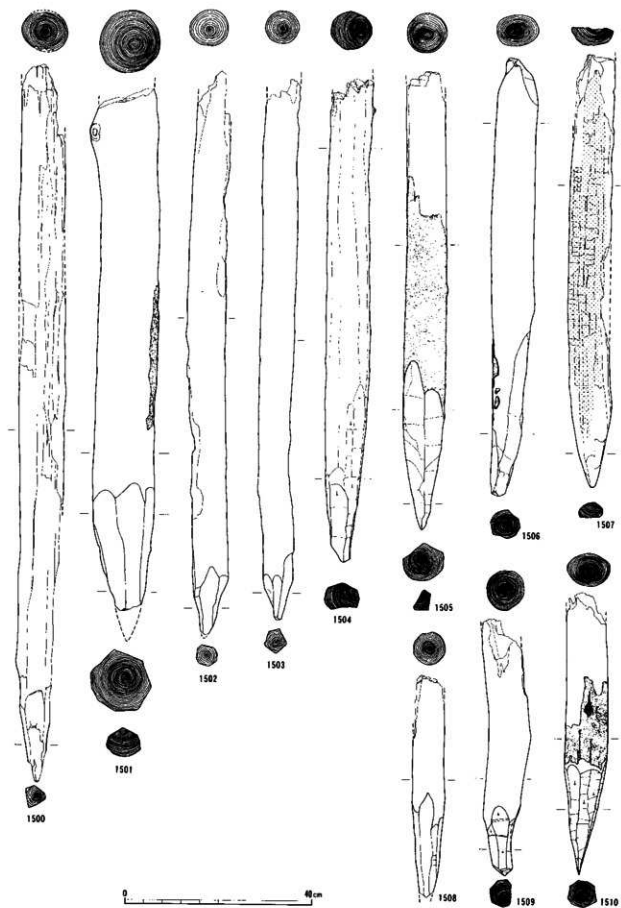
第144図 接合補助材・樹皮巻・臺巻(1474~1490)

(1:4)



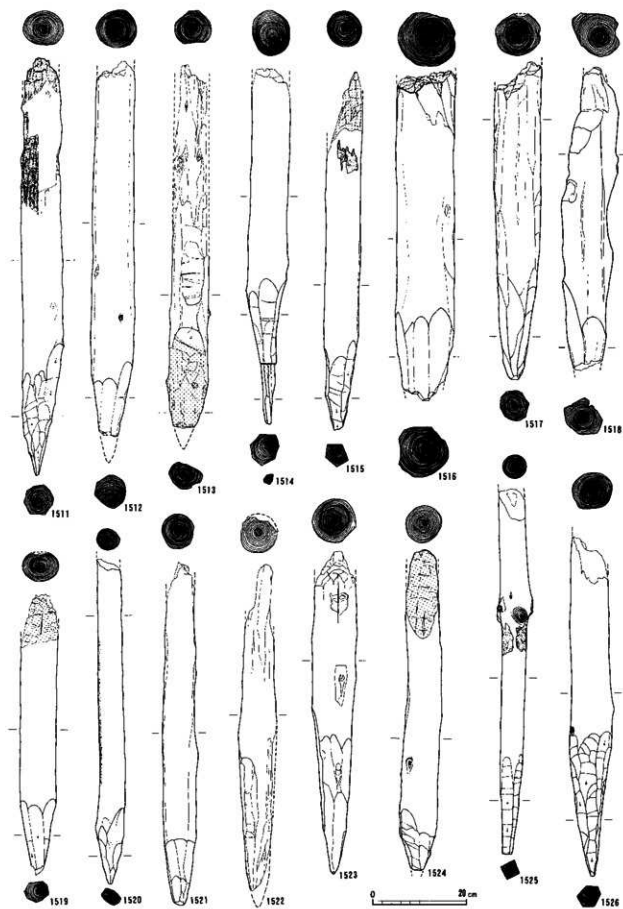
第145図 木簡・木札状木製品(1491~1499)

(1491~1493は1:2、その他1:4)



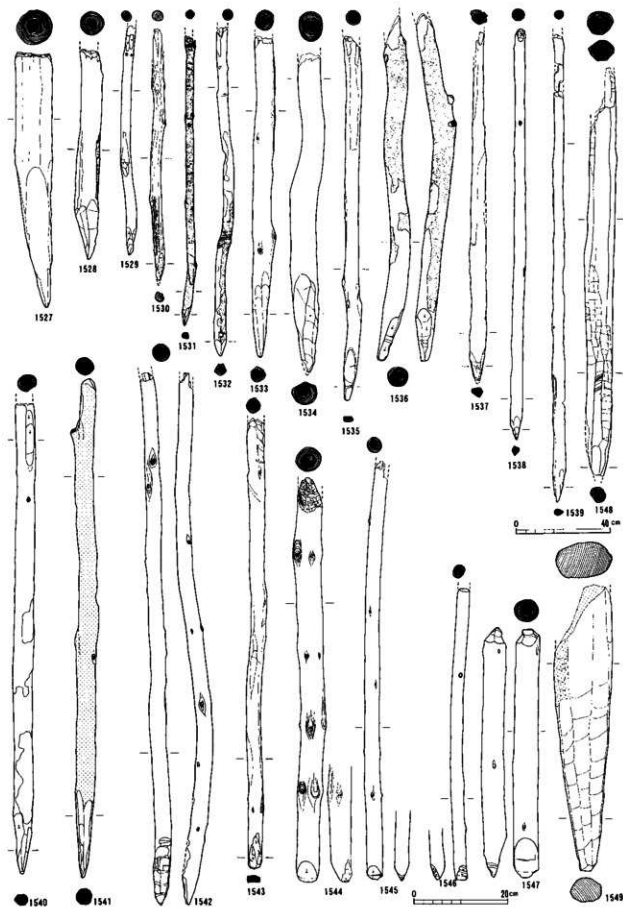
第146图 丸杭(1500~1510)

(1:8)



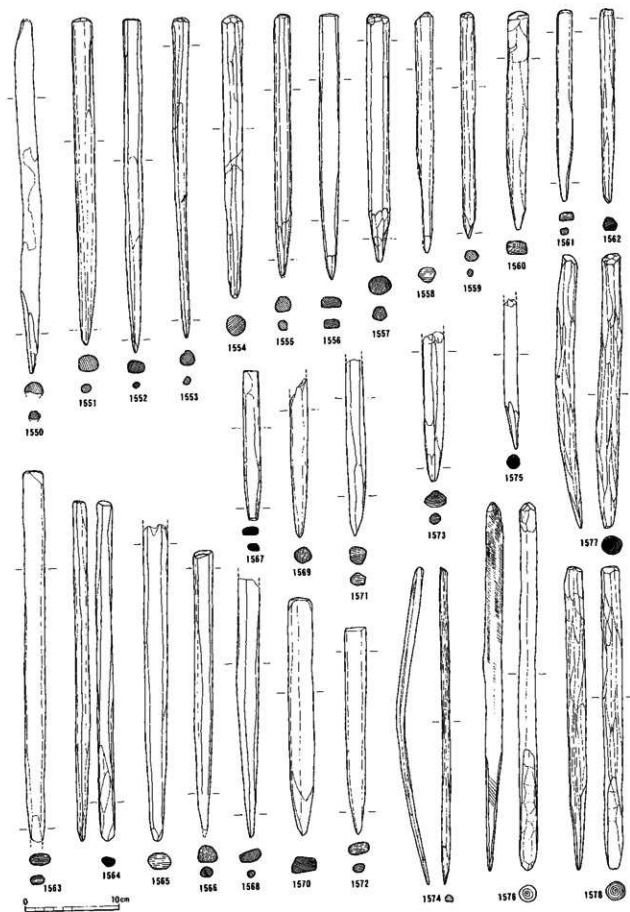
第147圖 丸杭(1511~1526)

(1:8)



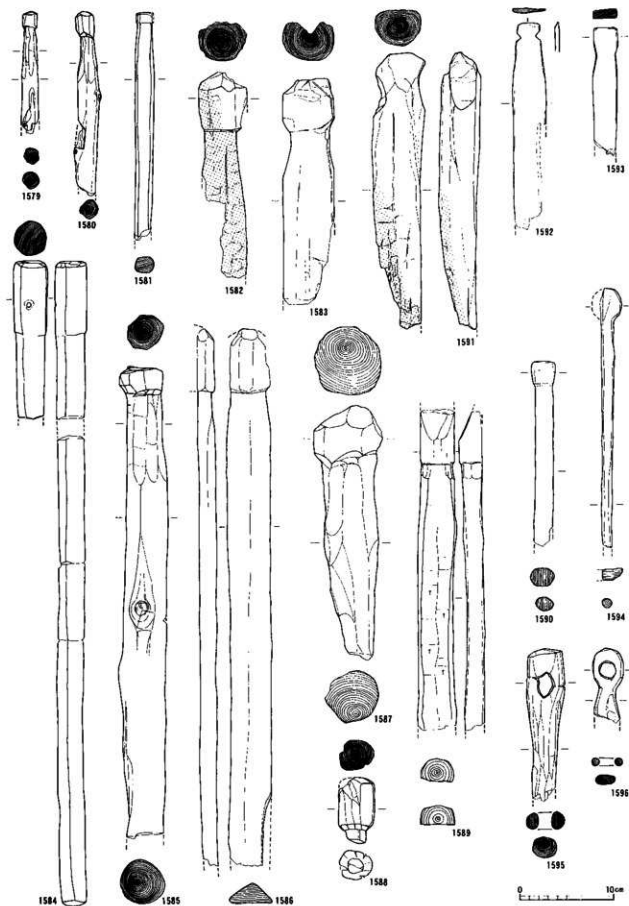
第148圖 丸杖・転用杖(1527~1549)

(上段 1 : 8、下段 1 : 4)



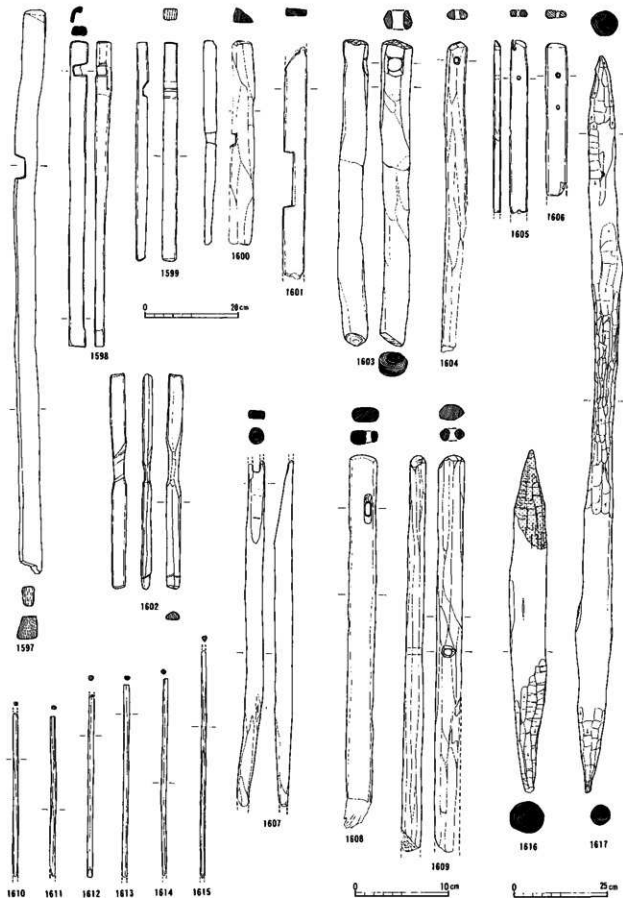
第149圖 棒状具(1550~1578)

(1:4)



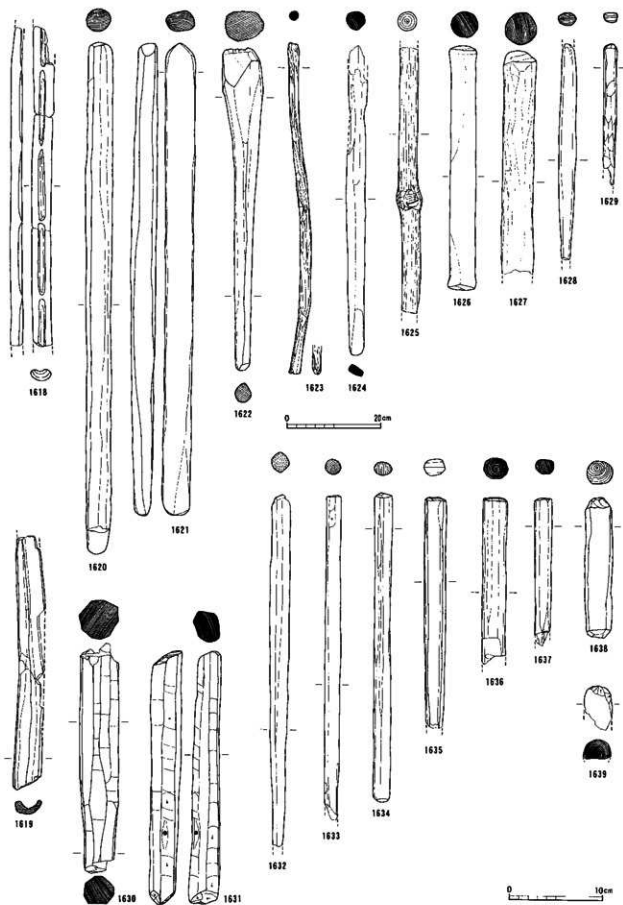
第150圖 棒状具(1579~1596)

(1:4)



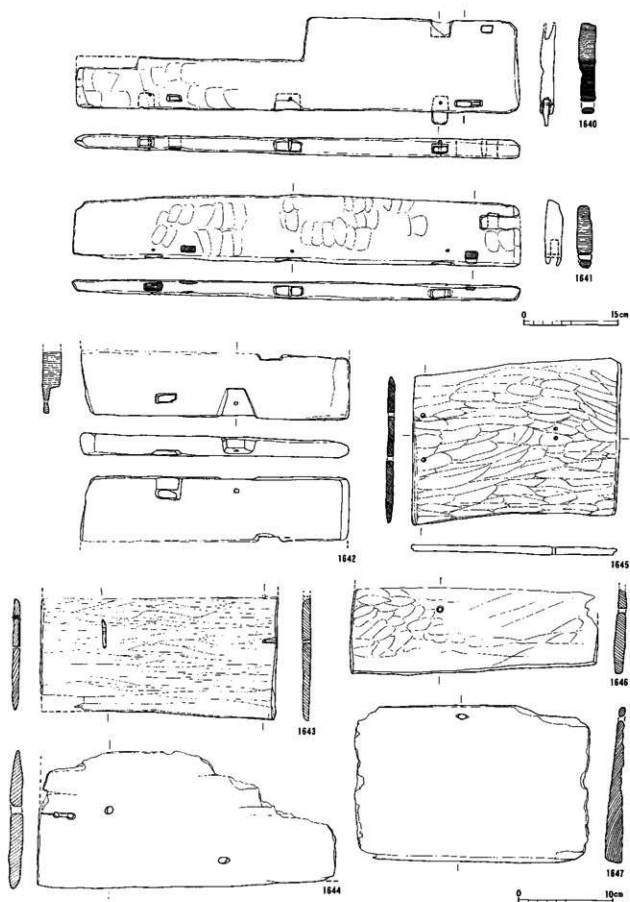
第151図 棒状具(1597~1617)

(1598・1608は1:8、1616~1617は1:10、その他1:4)



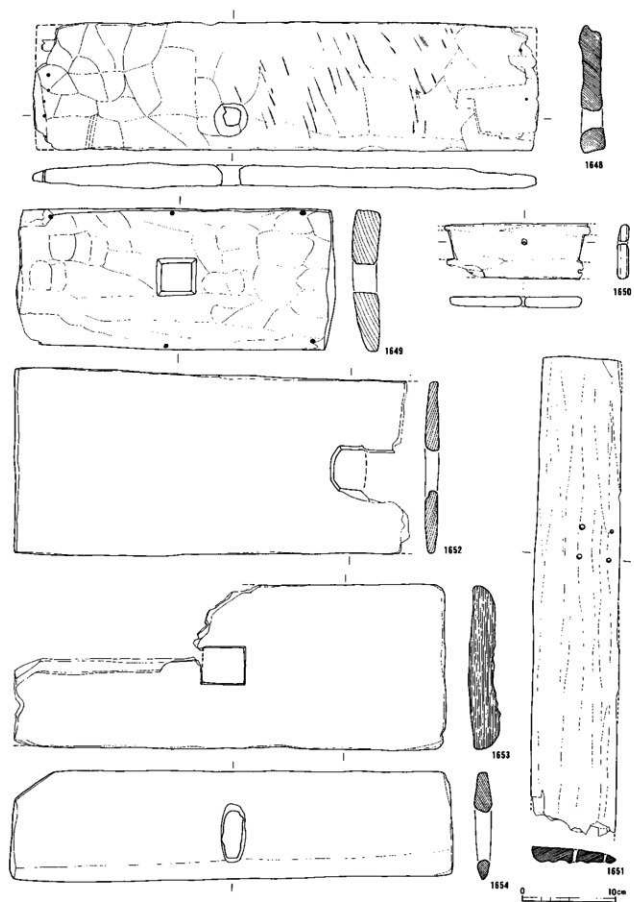
第152図 棒状具(1618～1639)

(1623～1624・1631は1：8、その他1：4)



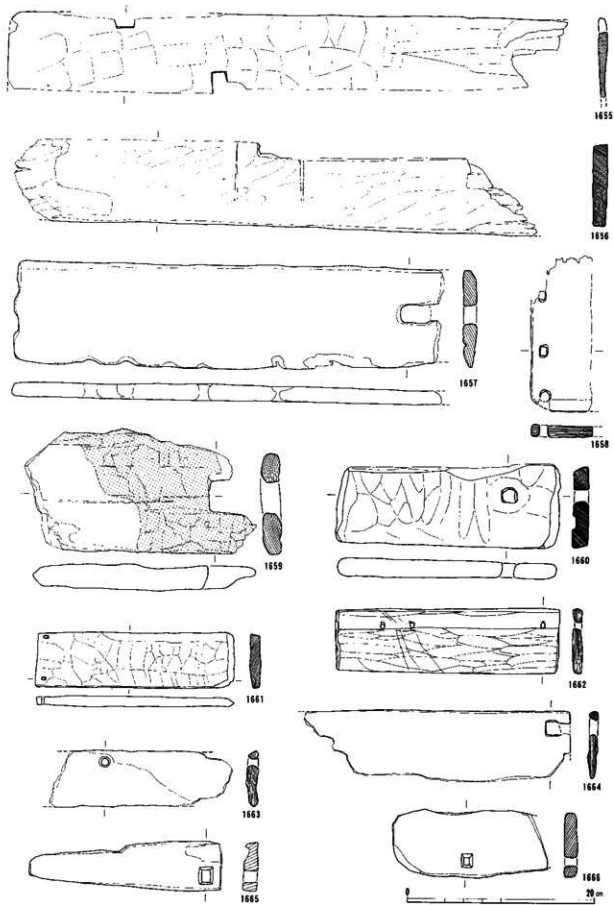
第153図 板状具(1640~1647)

(1640~1641は1:6、その他1:4)



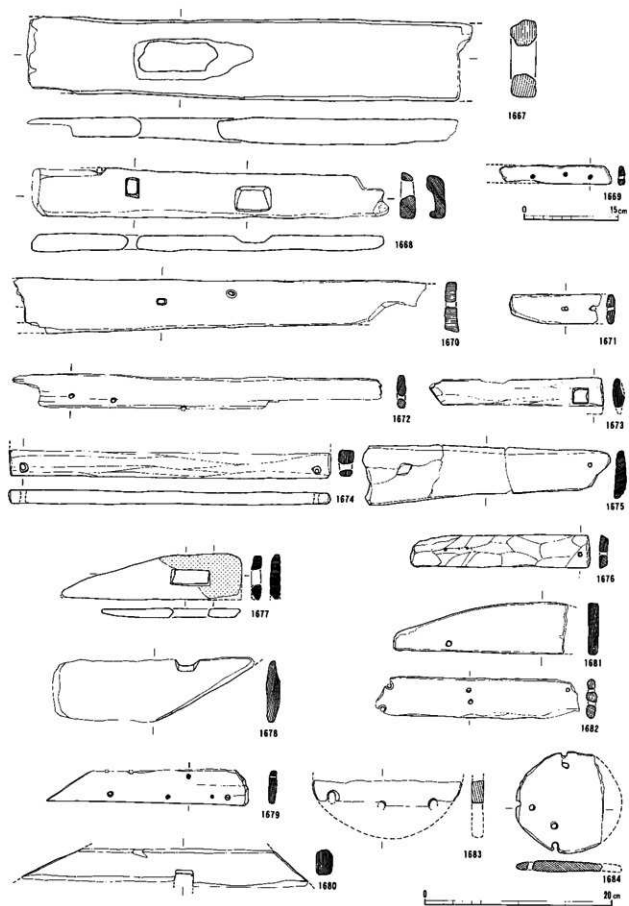
第154图 板状具(1648~1654)

(1:4)



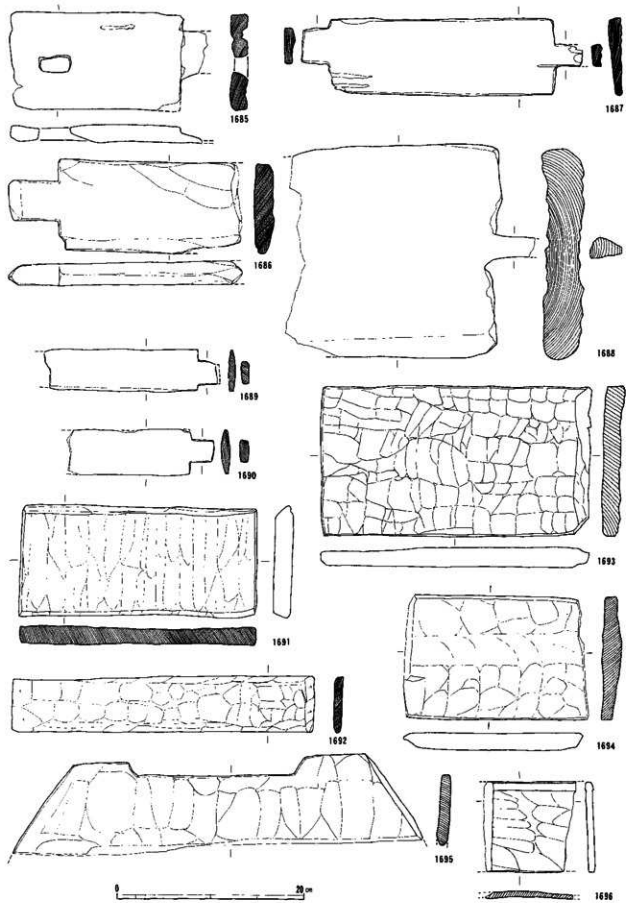
第155図 板状具(1655~1666)

(1:4)



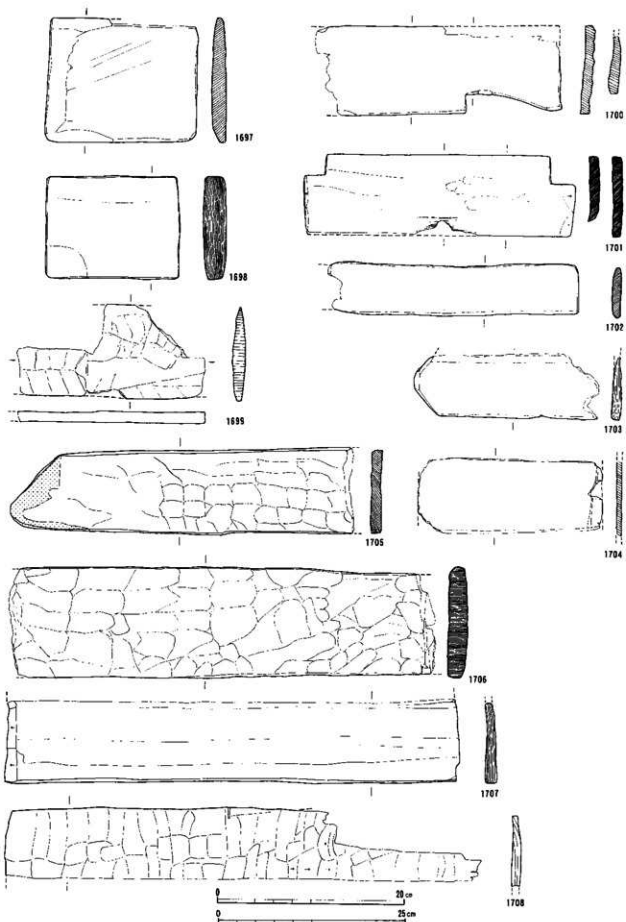
第156图 板状具(1667~1684)

(1:4)



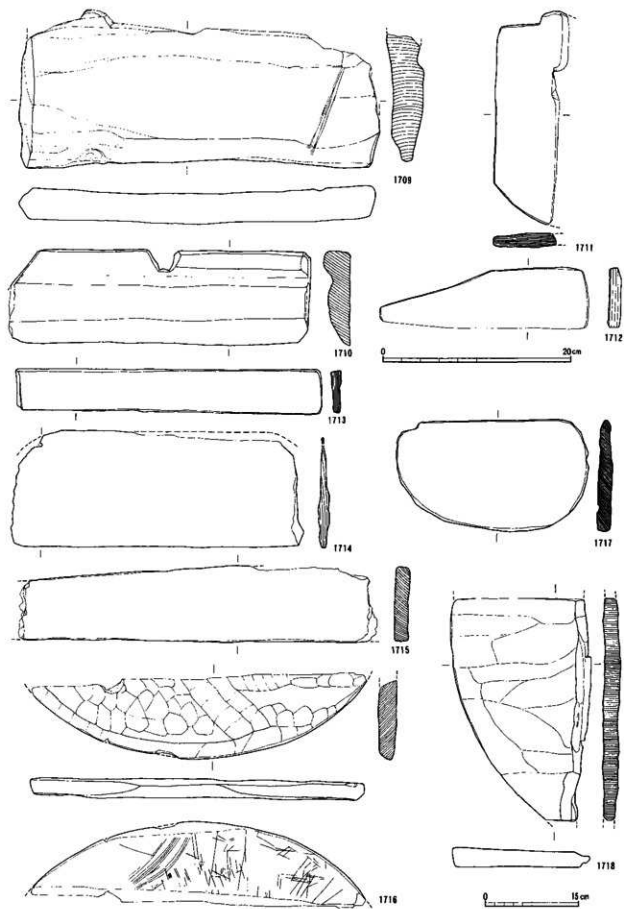
第157图 板状具(1685~1696)

(1:4)



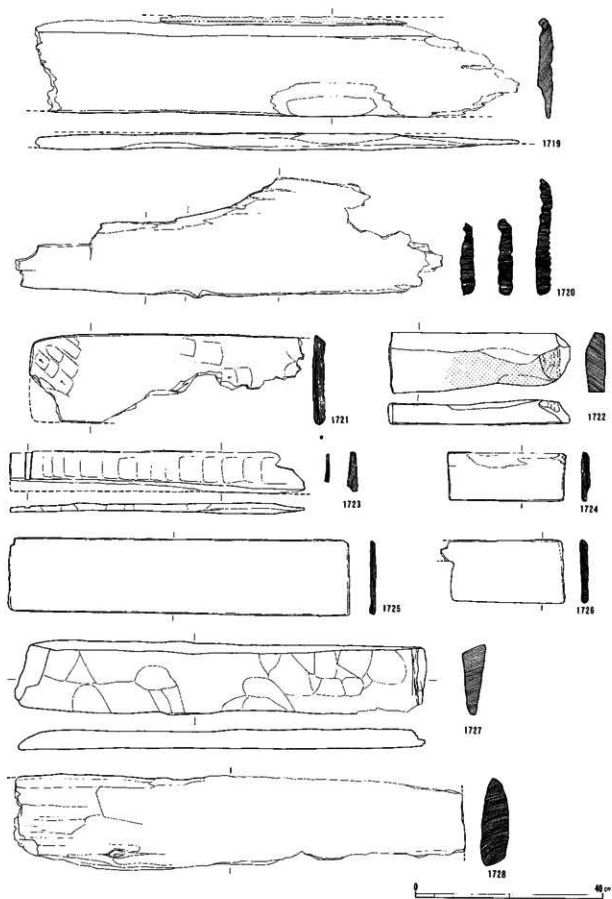
第158図 板状具(1697~1708)

(1701・1705・1706・1708は1:5、その他1:4)



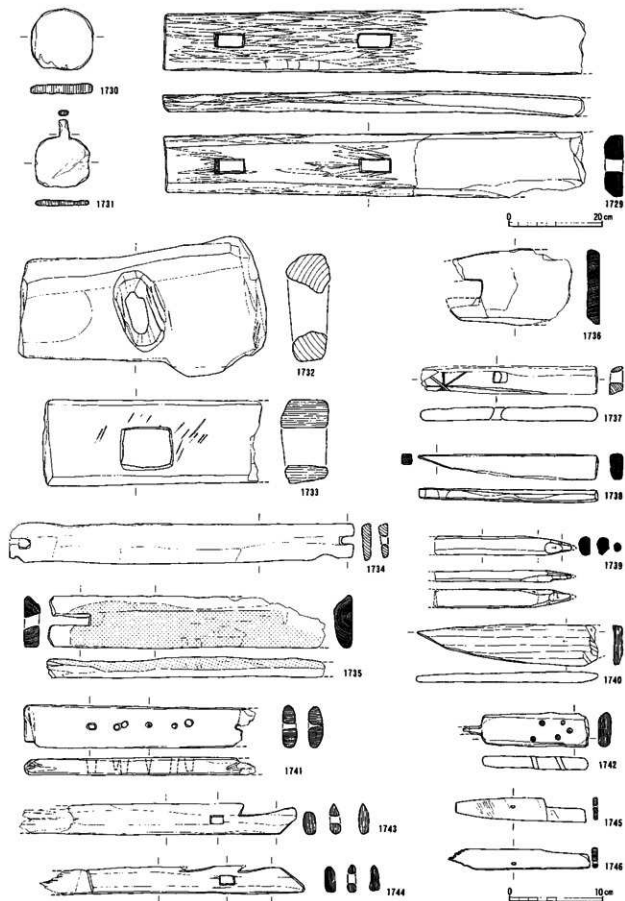
第159図 板状具(1709~1718)

(1713~1717は1:6、その他1:4)



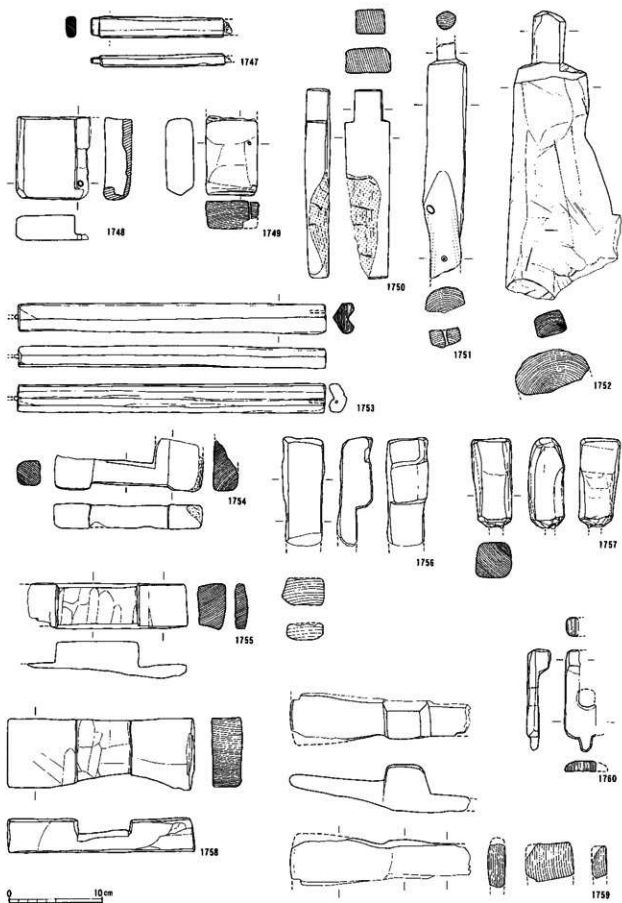
第160图 板状具(1719~1728)

(1:8)



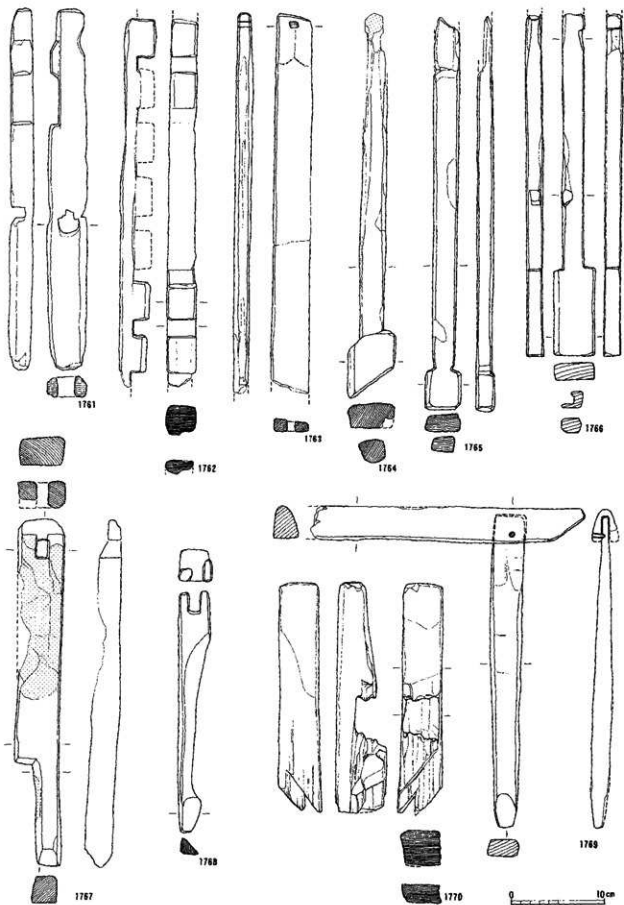
第161図 板状具・その他不明品(1729~1746)

(1729のみ1:8、その他1:4)



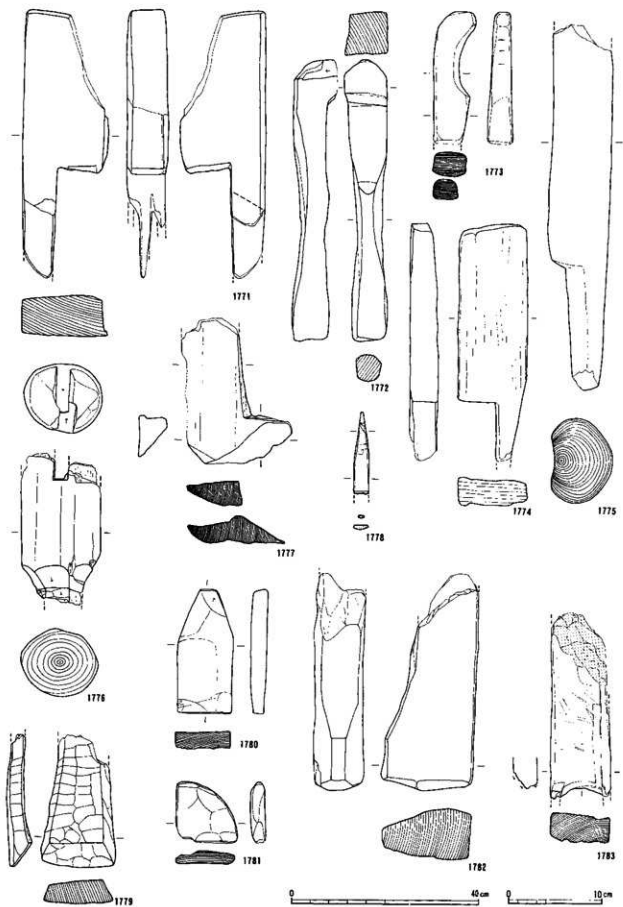
第162図 その他不明品(1747~1760)

(1:4)



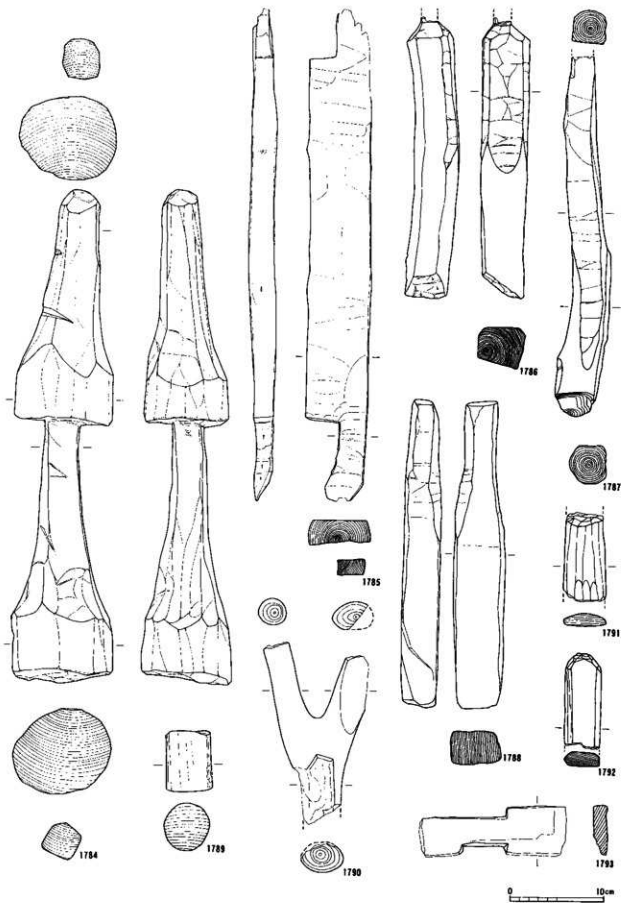
第163図 その他不明品(1761~1770)

(1:4)



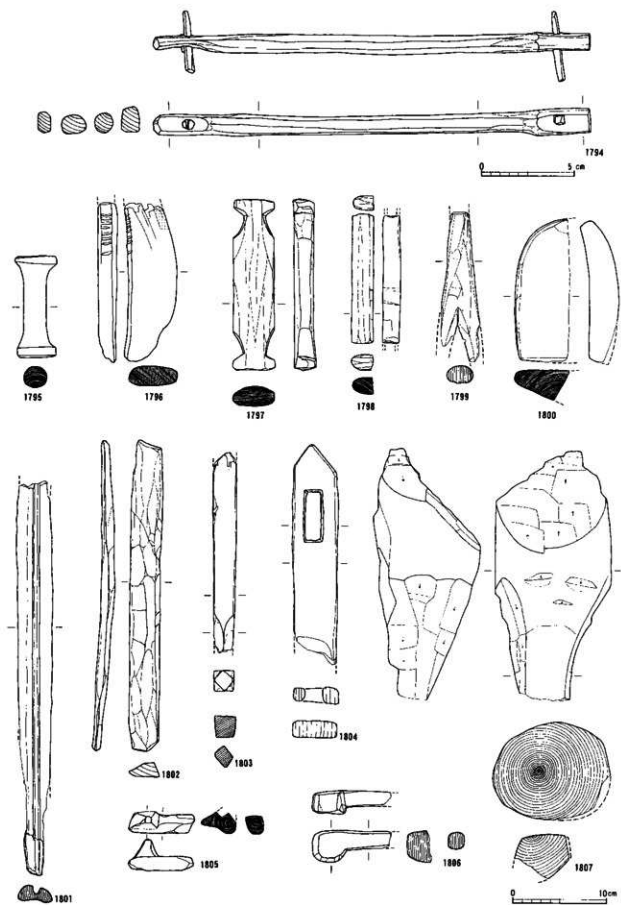
第164図 その他不明品(1771~1783)

(1783のみ1:8、その他1:4)



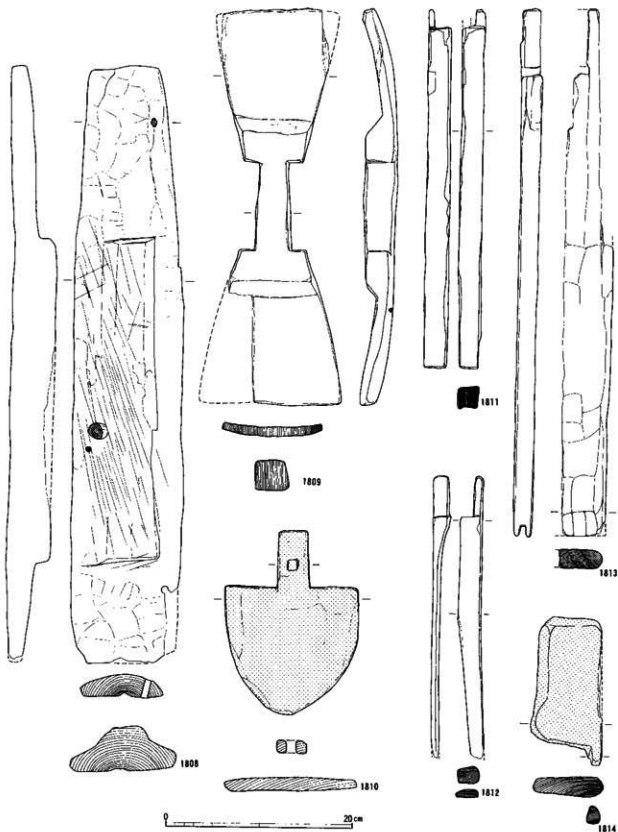
第165図 その他不明品(1784~1793)

(1:4)



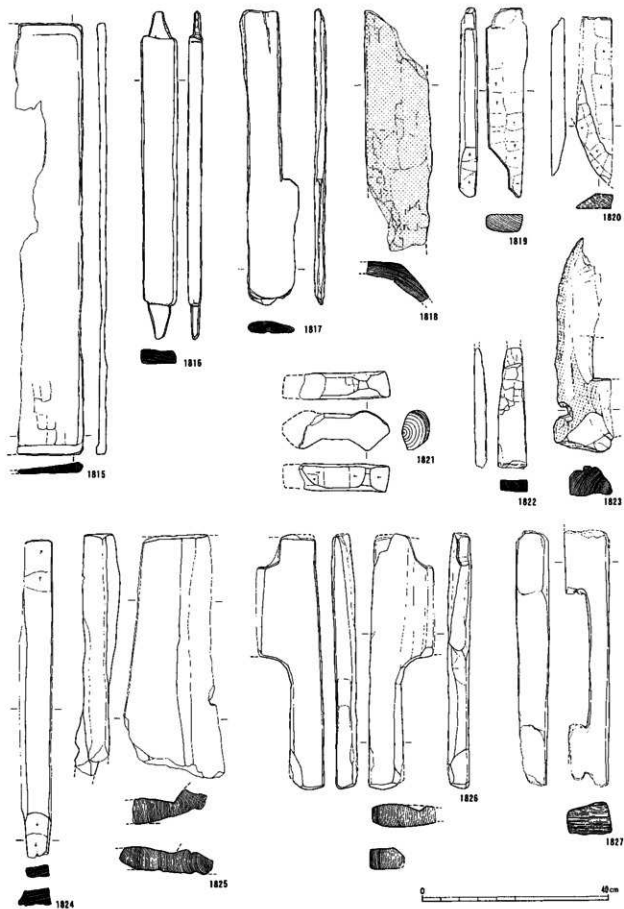
第166図 その他不明品(1794~1807)

(1794のみ1:2、その他1:4)



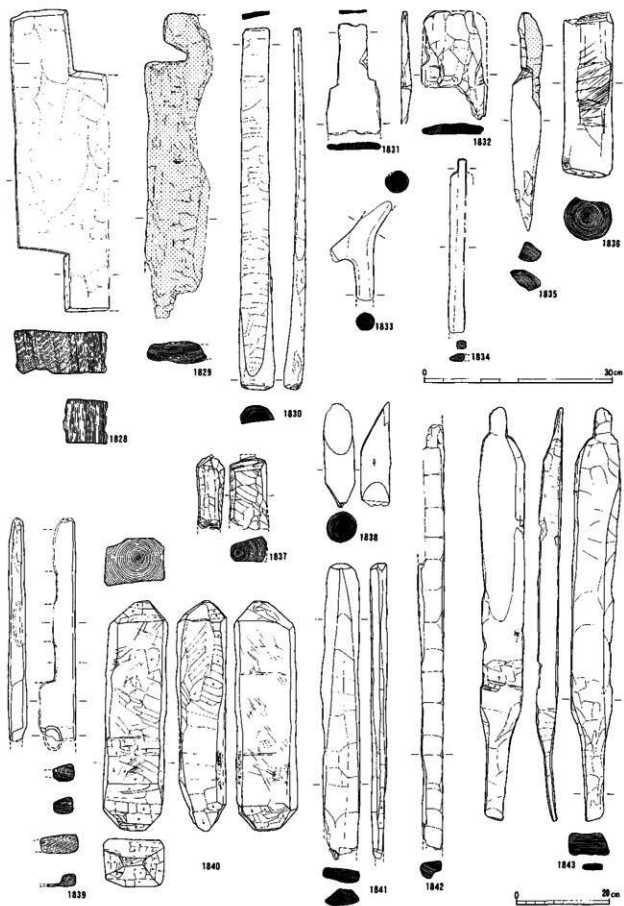
第167図 その他不明品(1808~1814)

(1808~1810は1:4、その他1:8)



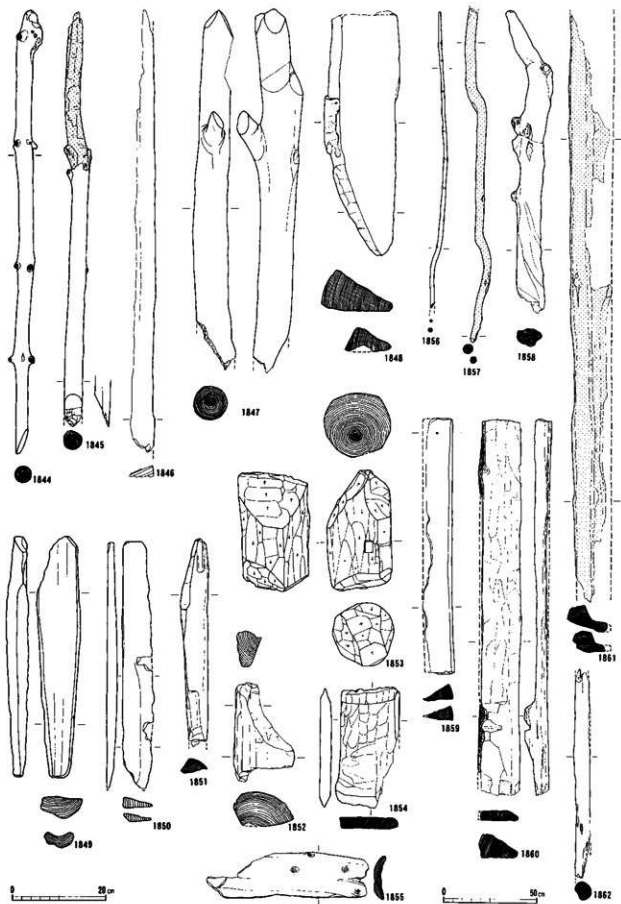
第168図 その他不明品(1815~1827)

(1:8)



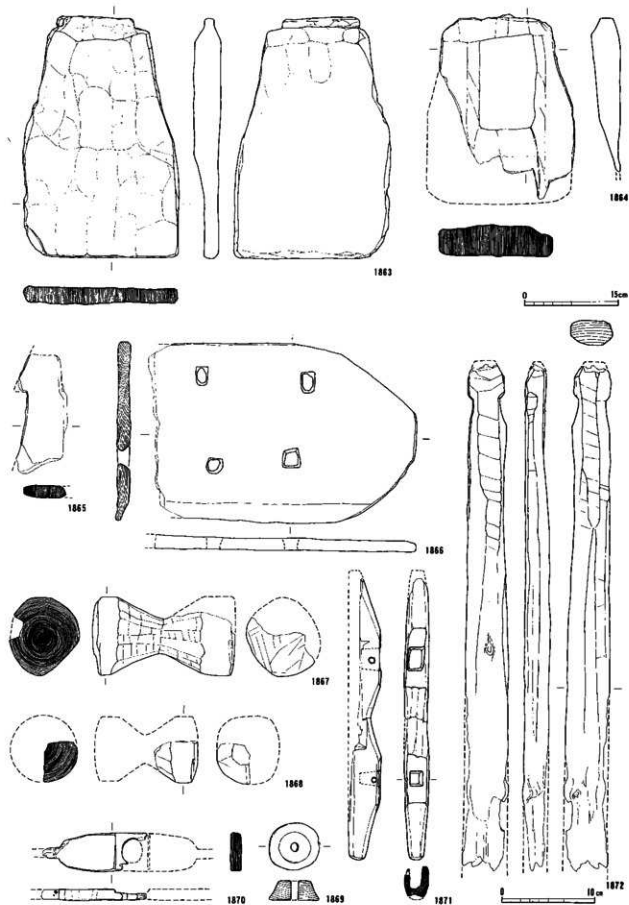
第169図 その他不明品(1828~1843)

(1828~1836は1:6、その他1:8)



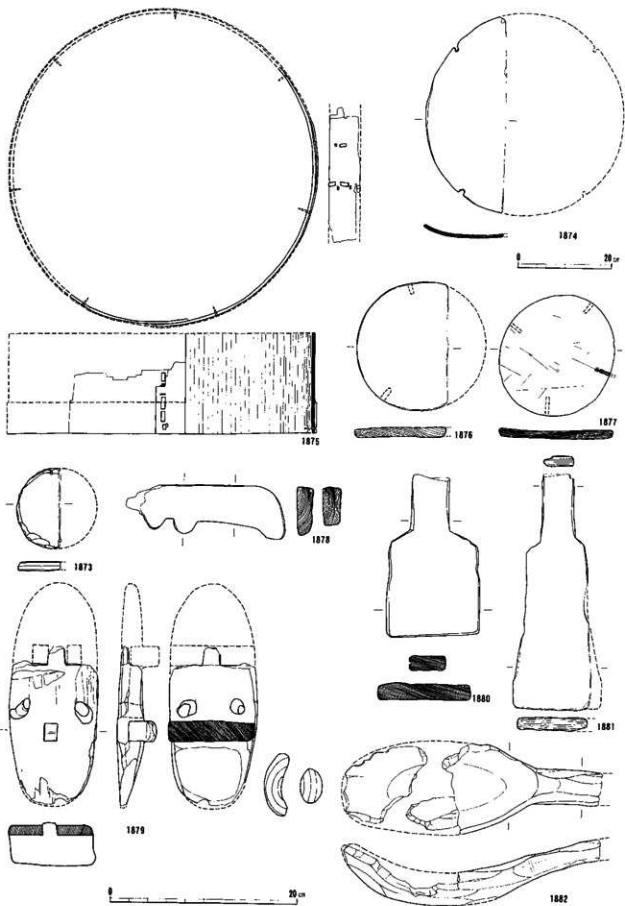
第170図 その他不明品(1844~1862)

(1844~1854は1:8、その他1:20)



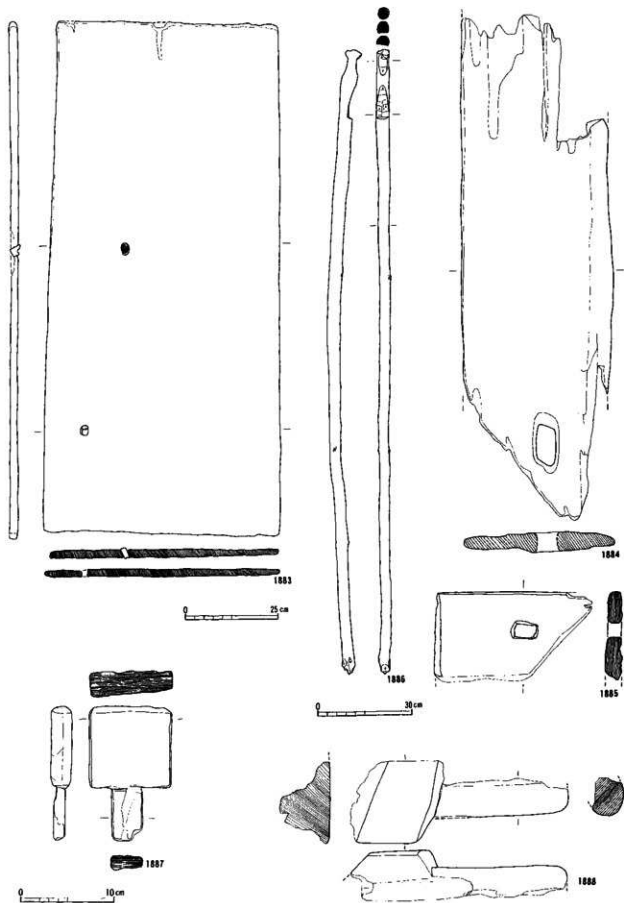
第171図 直柄平鐵未製品・ナスビ形曲柄平鐵・田下駄・木鐺・紡錘車・繩かけ・糸絆・織機(1863~1872)

(1863~1864は1:6、その他1:4)



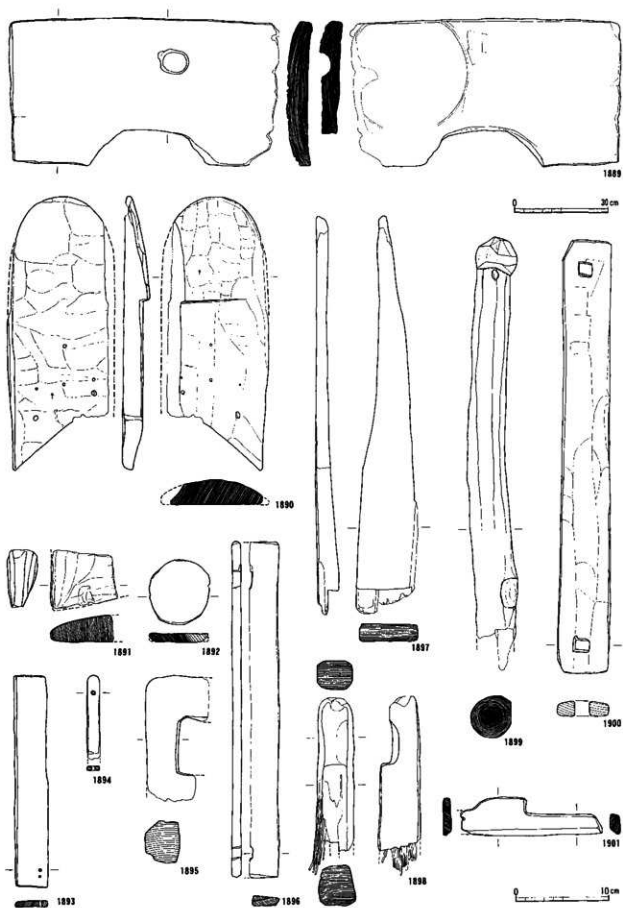
第172図 曲物・形代・下駄・土木作業用具・匙(1873~1882)

(1874~1875は1:8、その他1:4)



第173図 壁材・垂木・接合補助材(1883~1888)

(1883は1:10、1886は1:12、その他1:4)



第174図 板状具・棒状具・その他不明品(1889~1901)

(1889のみ1:12、その他1:4)

写真図版



1-1



1-2



2-1



2-2



3-1



3-2





8-1



8-2



9-1



9-2



14



15-1



15-2



16



17



18-1



18-2



19



20



21



22-1



22-2



23



24-1



24-2



26-1



26-2

26-4



26-3



26-5



27



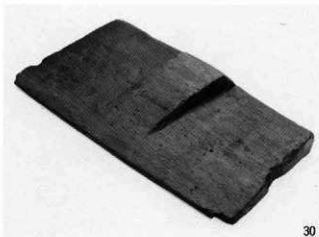
29-30



29-1



29-2



30



31



32



33



34-1



34-2



39-1



39-2



40-1



40-2



41



42



43



48



49-1



49-2



50-1



50-2



51-1



51-2



55-1



55-2



58



60



63



64



65



66



69



70



71



72



74



77



81



83



84 85



86





87



89



93



94



96



95-1



95-2



97



98



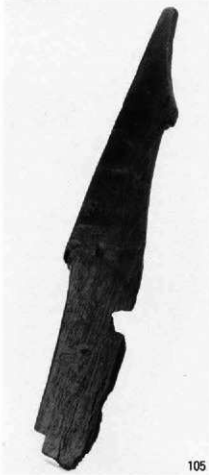
99



102



104



105



106





128



132



133



134



135



136



138



139-1



139-2



140



143



142



146-2



146-1



149-1



149-2



149-3



149-4



149-5



150-1



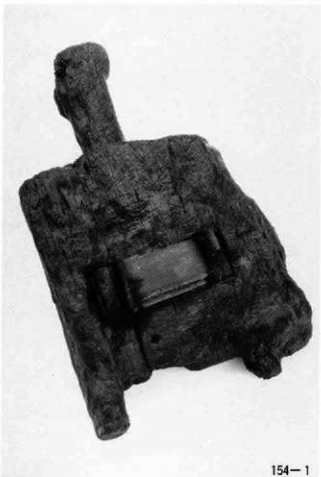
150-2



151-1



151-2





170



173-1



173-2



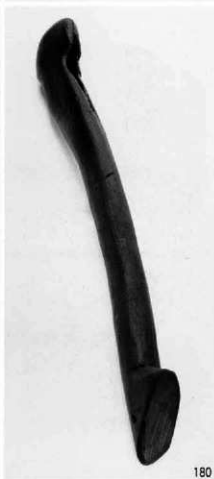
174



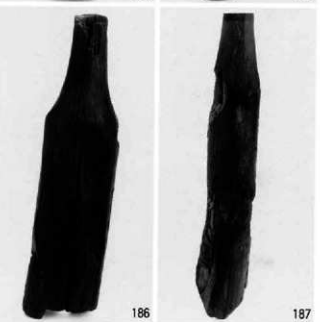
177

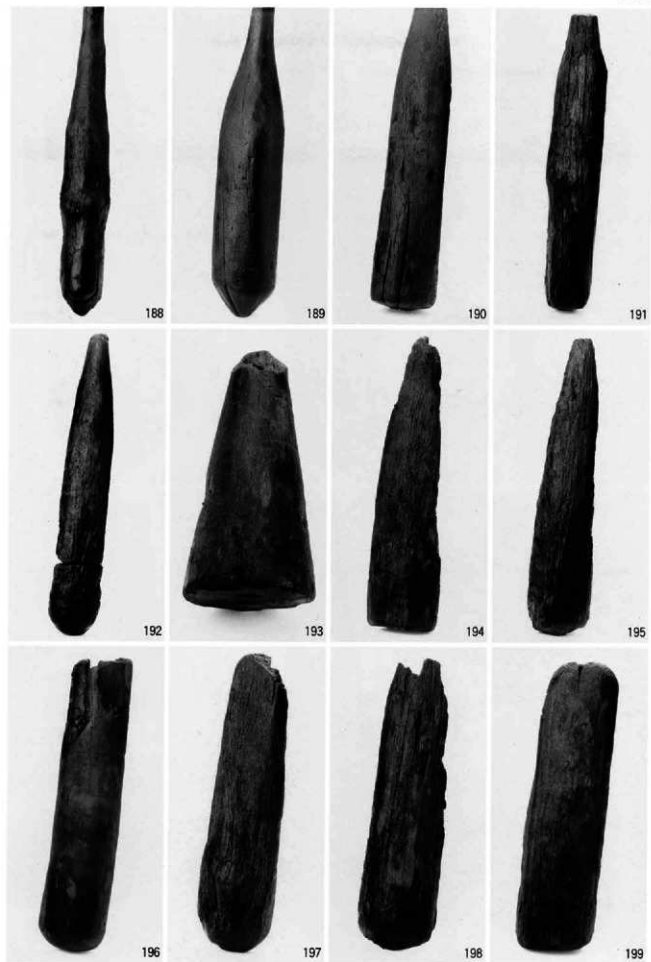


179



180







200



201



202



203



204



206



207



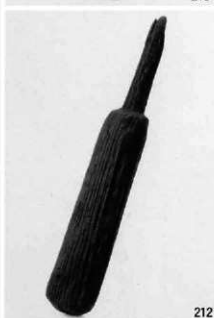
208



209



210



212



213



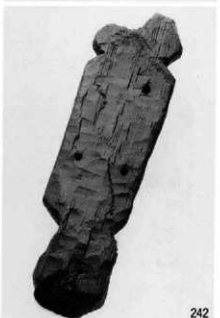
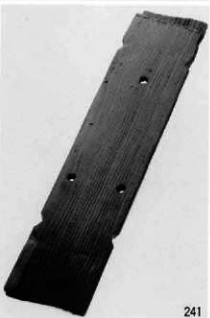
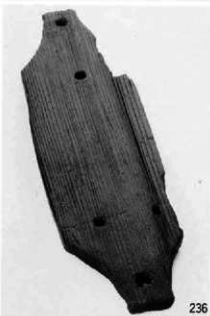
214



215





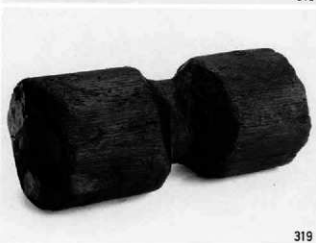
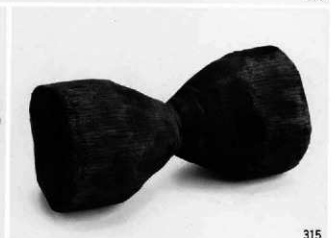
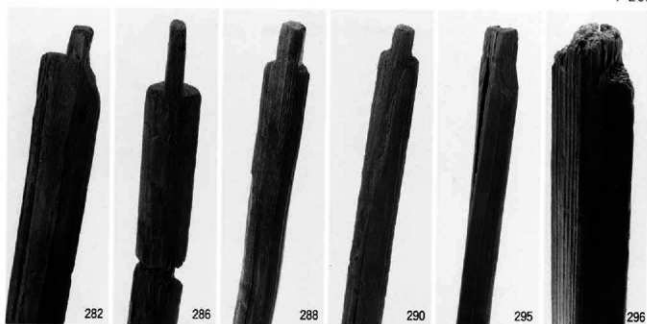




円形棒付田下駄・方形棒付田下駄

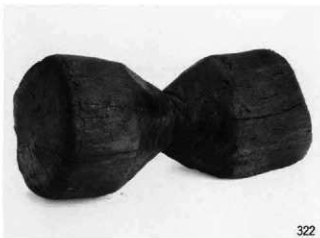


方形棒付田下駄

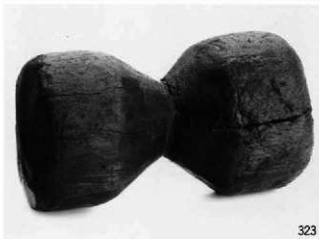




321



322



323



325



326



333



335



336



339



343



345



351



372



373

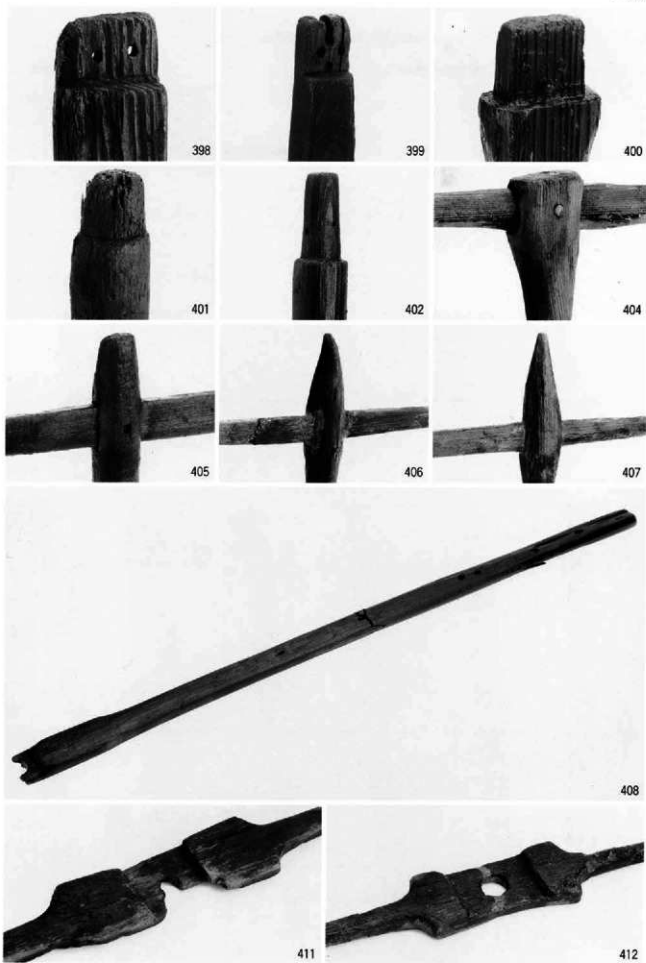


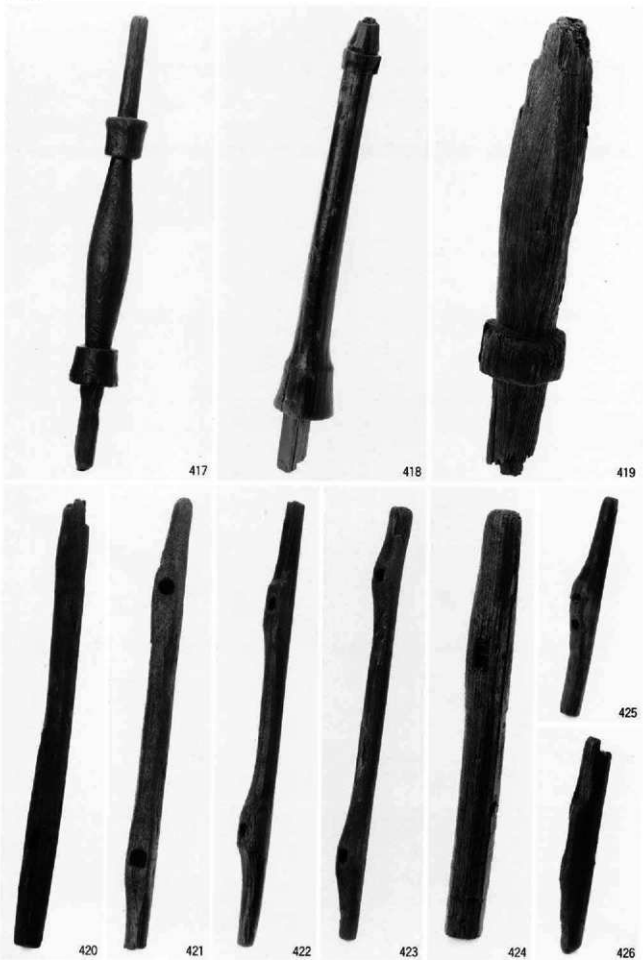
374



375









428-1



428-2



429-1



429-2



431-1



431-2



433-1



433-2



434

435



437



439-1



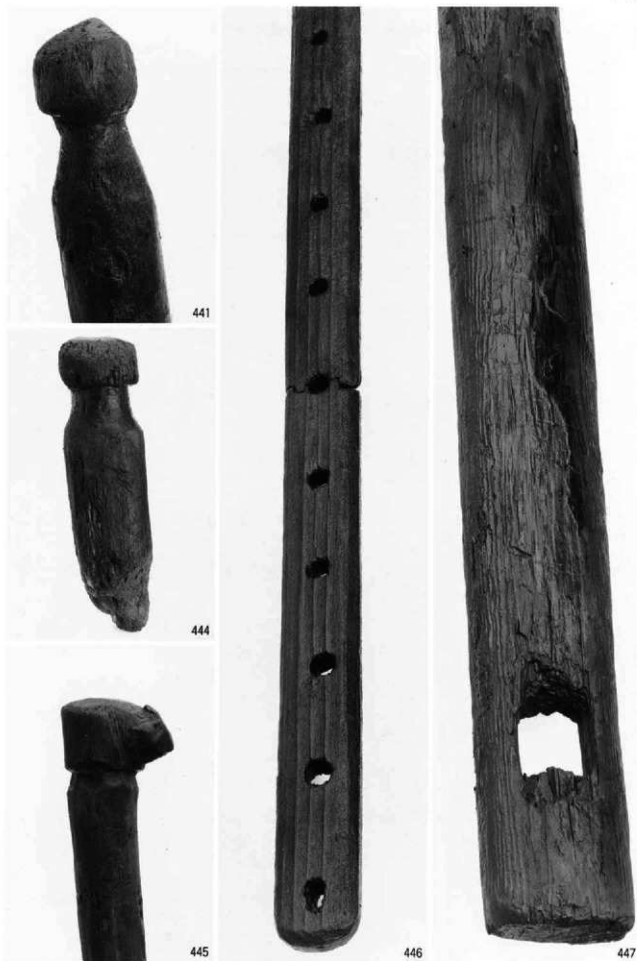
439
-2



440
-2



440-1



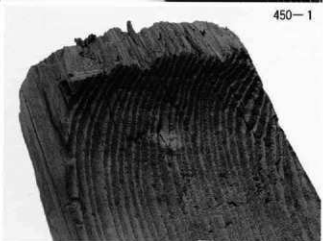
449-1



449-2



450-1



448



450-2



456-1



456-2



457-1



457-2



461-1



461-2



463-1



463-2



465-1



465-2



466-1

466-2



469-1



469-2



470-1



470-3



470-2



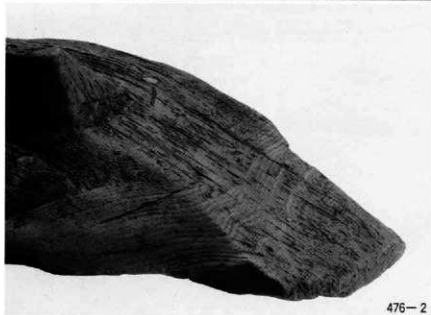
473



471-1



471-2





484-1



484-2



485-1



485-2



487-1



487-2

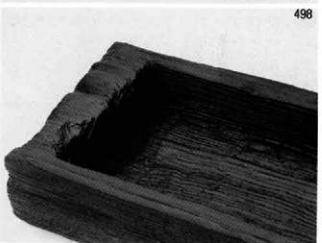


496



497

498





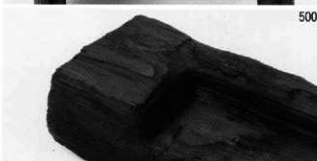
499-1



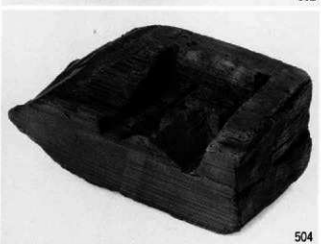
499-2



502



500



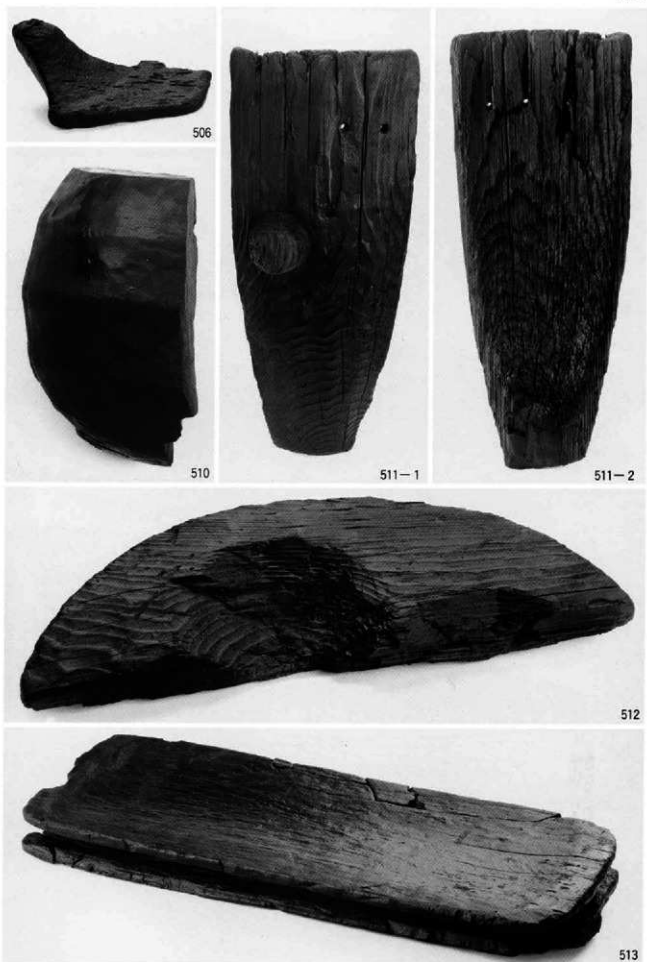
504



503



505





516-1



516-2



517-1



517-2



520-1



520-2



520-3

525



524



526



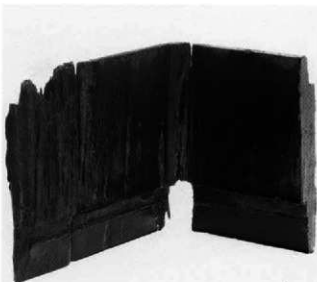
527



534



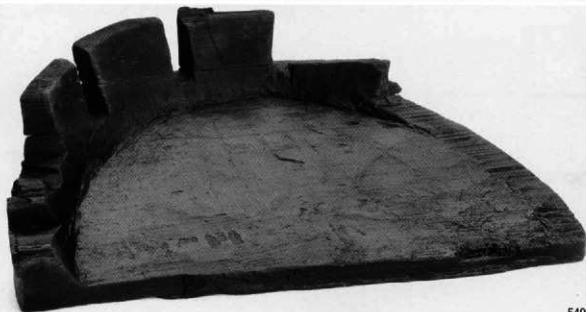
539-1



539-2



540-1



540-2



541-1



542



541-2



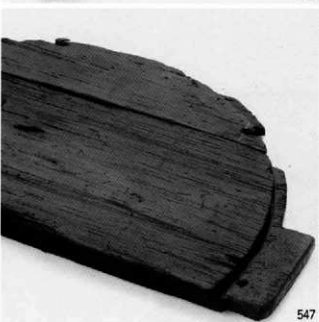
543



544



545



547



549



550



551



552



553



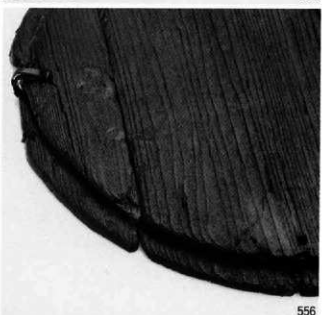
554



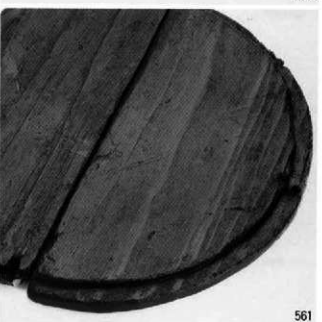
555



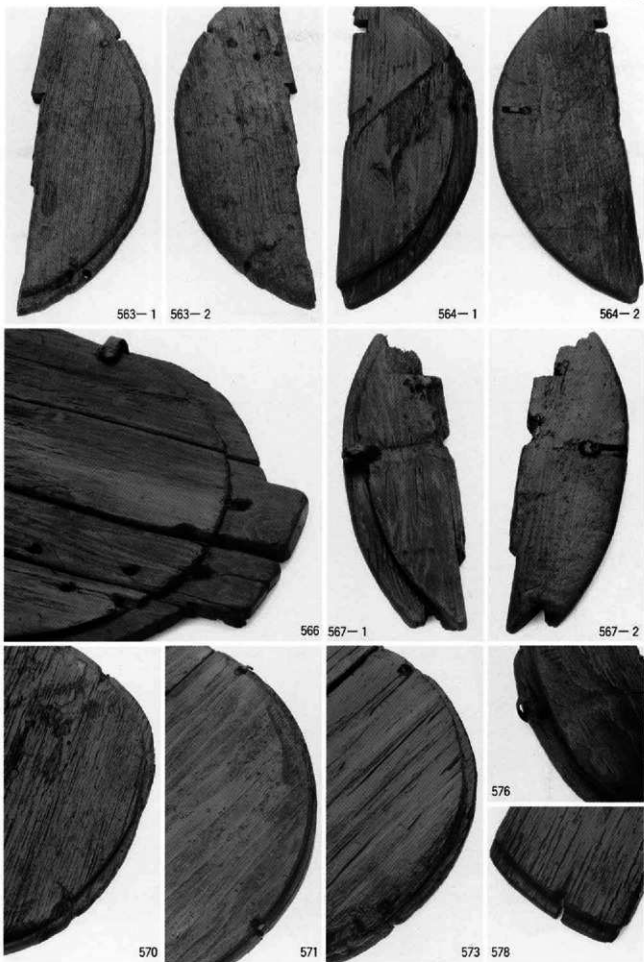
550



556



561





580



582



593



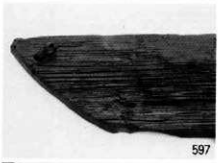
594



595



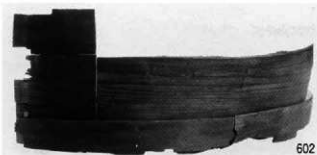
596



597



598



602



603



604



605



607



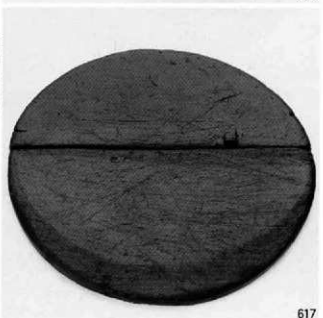
609



611



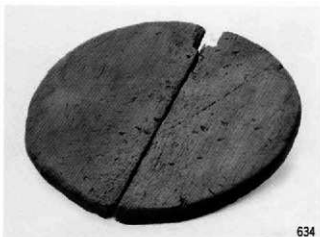
613



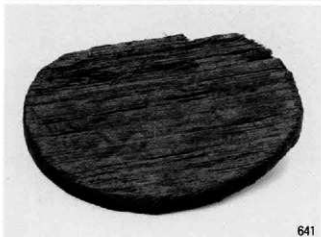
617



624



634



641



710



743



744



754



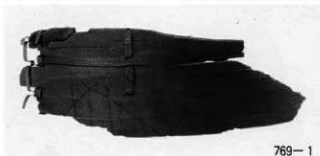
759



755



757



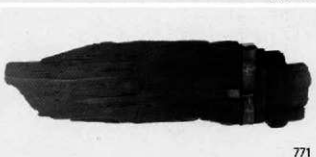
769-1



769-2



770



771



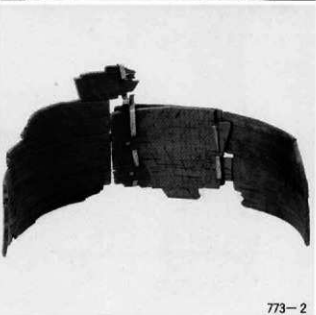
772-1



772-2

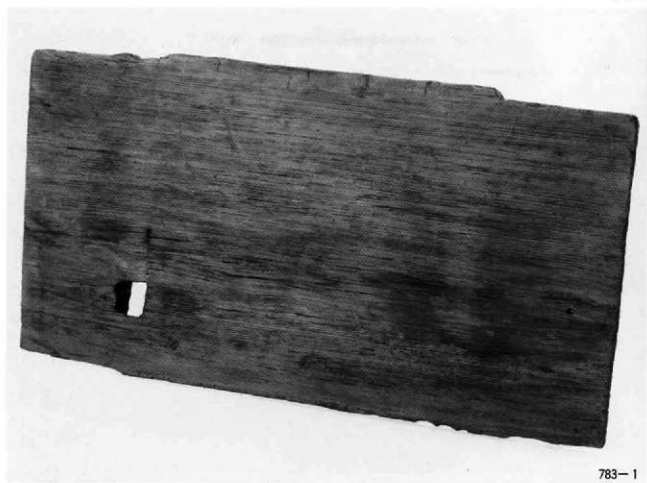


773-1

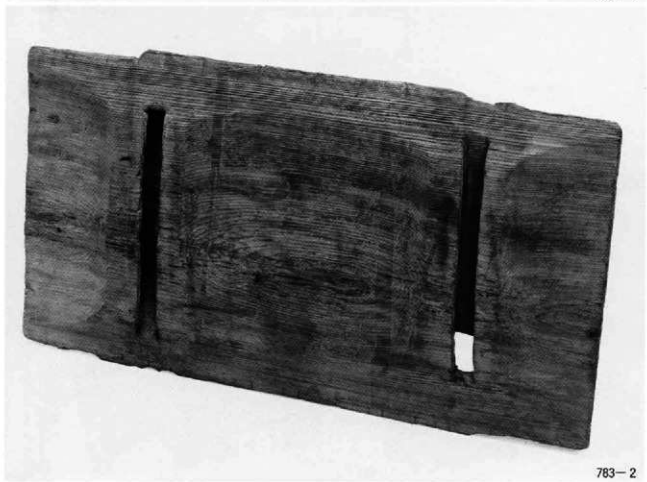


773-2

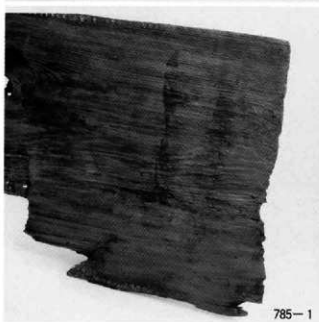
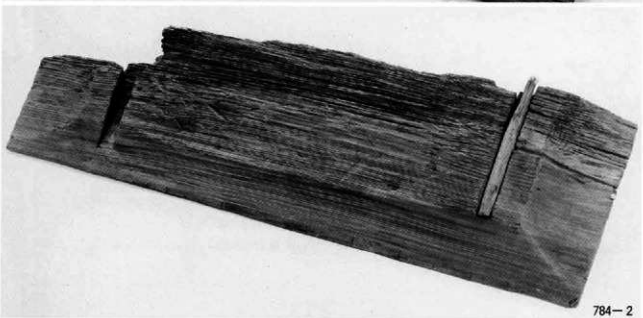




783-1



783-2





786-1



786-2



787-1



787-2



788-1



791



788-2



792



796



800



797



802



799



803-1



803-2



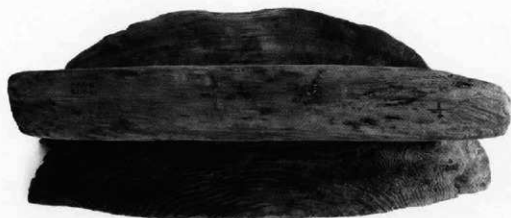
804-1



804-2



805-1



805-2



806



807



811



808



812



813



814



815



818



820



821



822-1



822-2



824



825



826



827



828



829



830



831



835



835



836-1



836-2



836-3



838-1



838-2



836-4



837-1



837-2



839-1



839-2



839-3



840-1



840-2



841-1



841-2



842



843



844-1



844-2



845-1



845-2



847-1



851



852



853



854



855



856



857



858



859



866-1



866-2



868-1



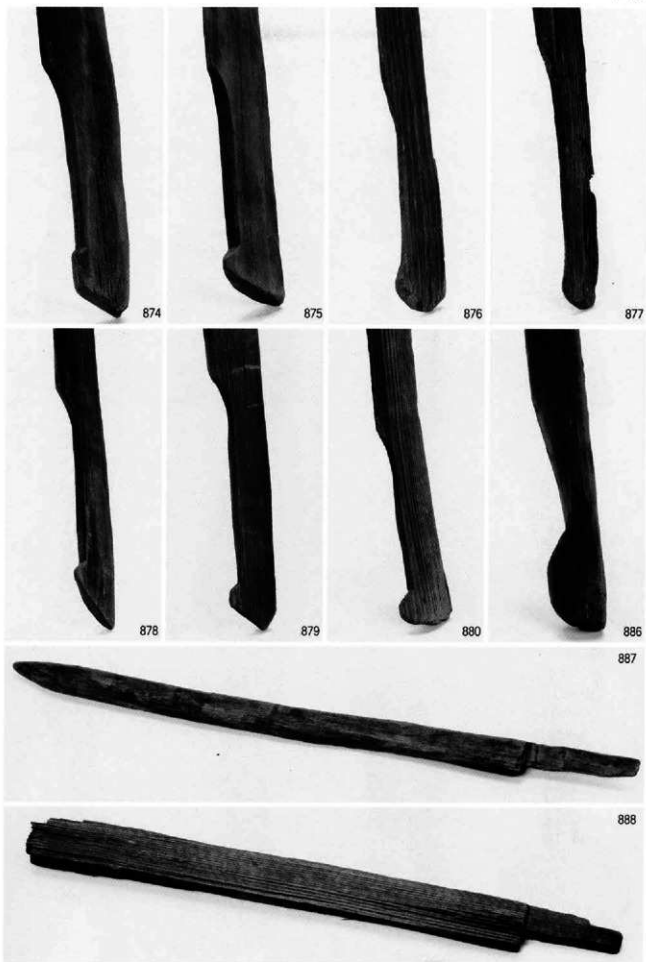
868-2



870



872





889



896



897



898



890



899



901



903



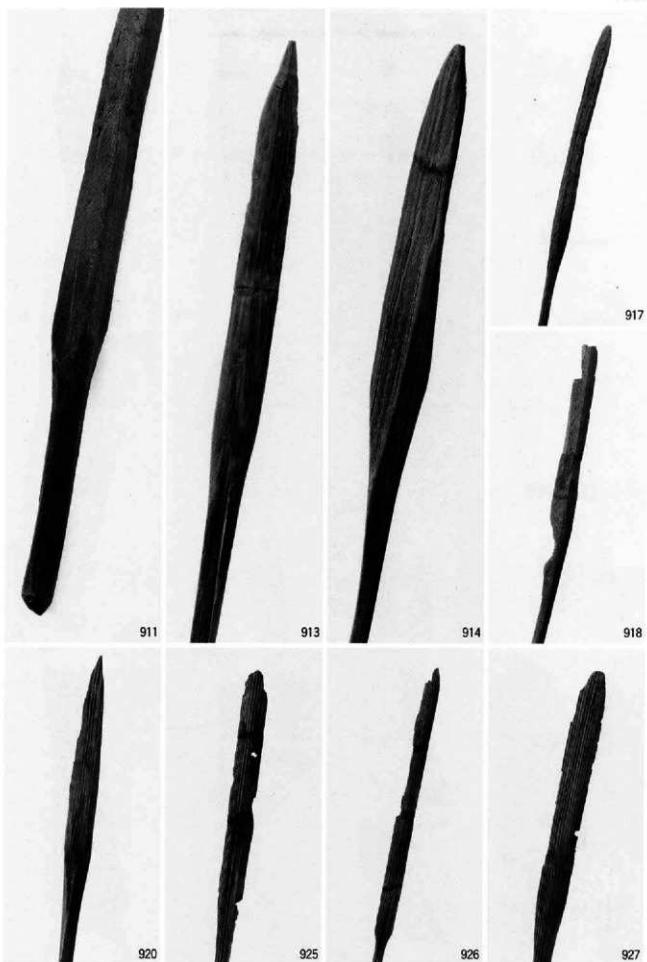
907

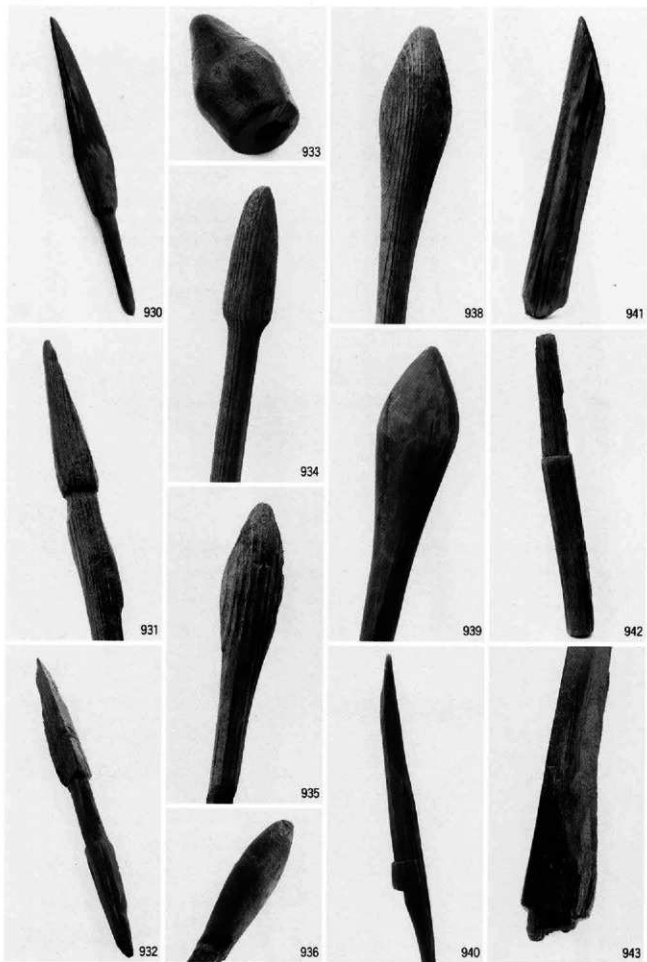


909

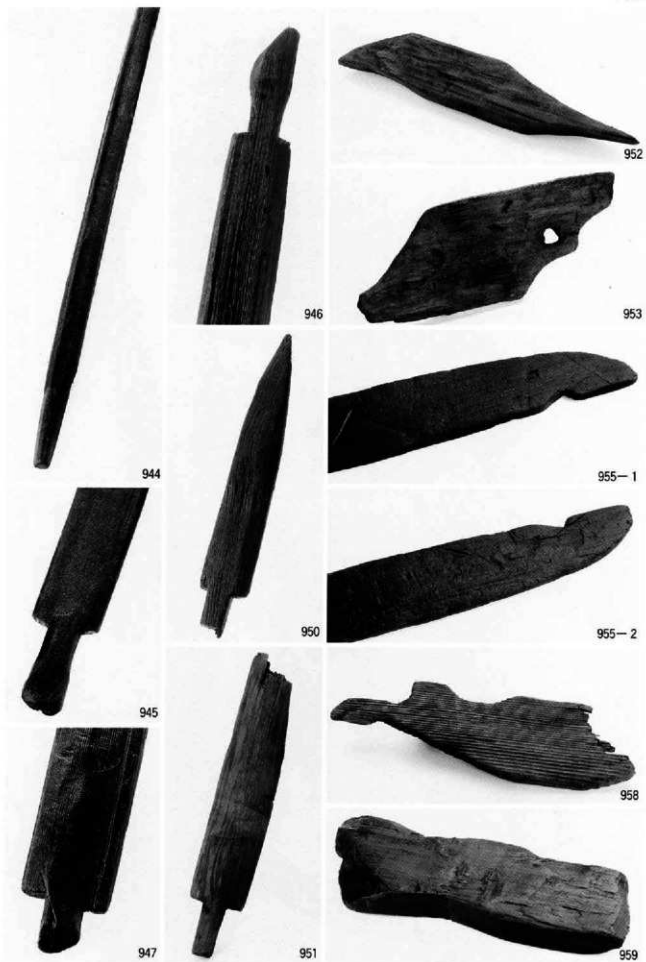


910





木鏃・小刀形・刀子形・その他武器形



その他武器形・鳥形・馬形



960-1



960-2



961



966-1



966-2



966-3



963



966-4



965



967-1



967-2



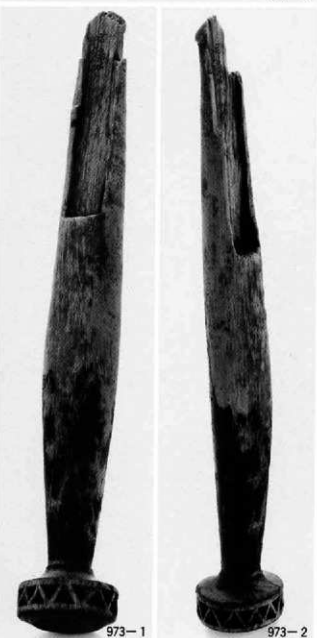
968



970

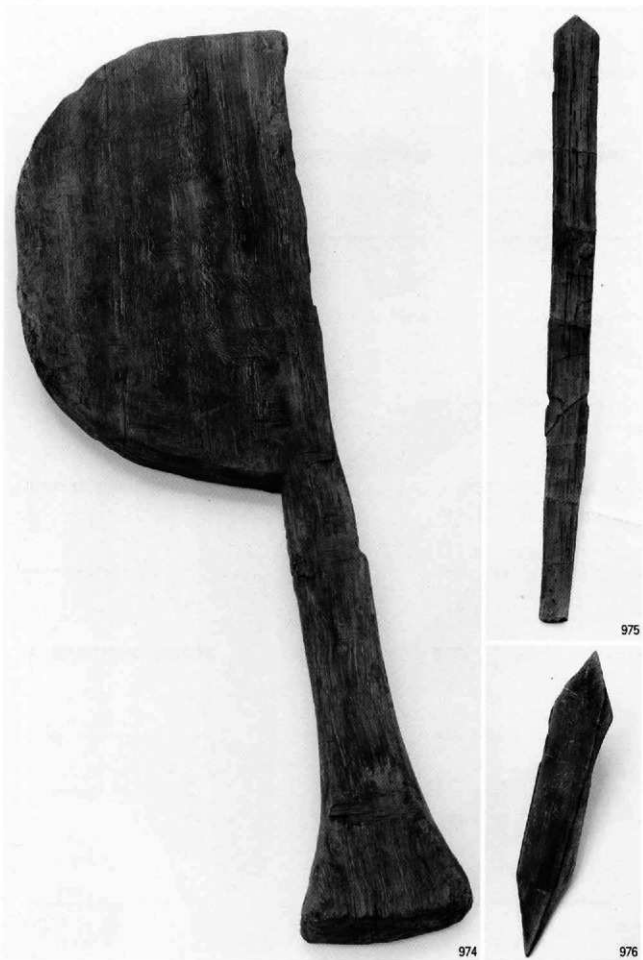


972



973-1

973-2

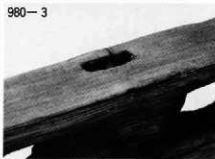


さしは形・斎串

974

975

976







984



986-1



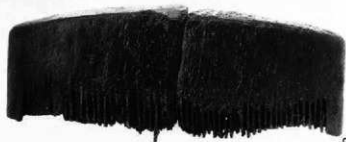
986-3



986-2



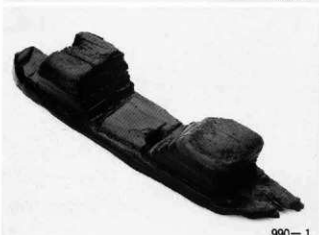
985



987-1



987-2



992-1



992-2



993



994



995-1



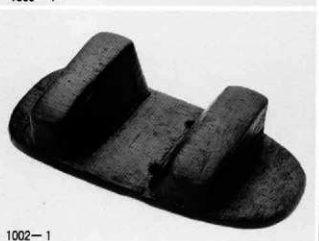
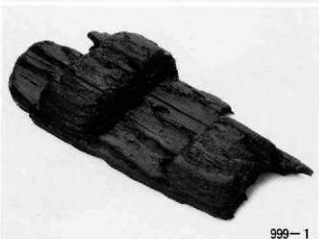
995-2



997-1

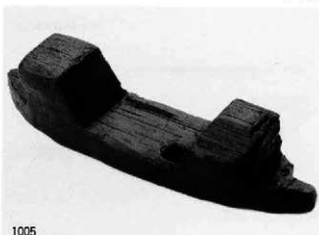


997-2

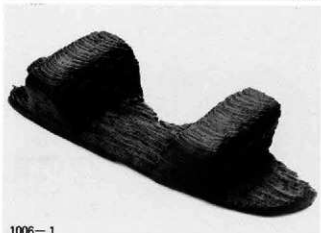




1004



1005



1006-1



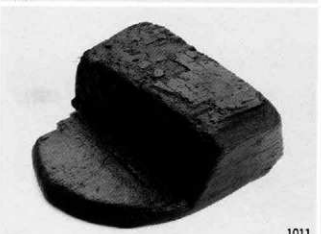
1008-1



1009-1



1010



1011



1012



1013-1



1015-1



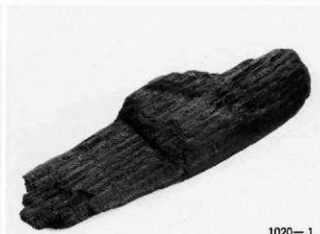
1017



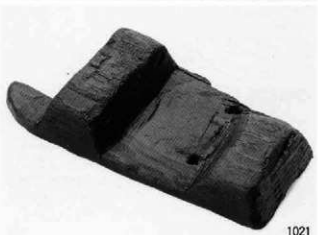
1018



1019



1020-1



1021



1022



1023-1



1024



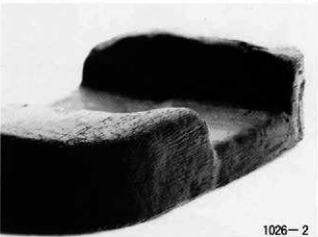
1025-1



1027-1



1026-1



1026-2

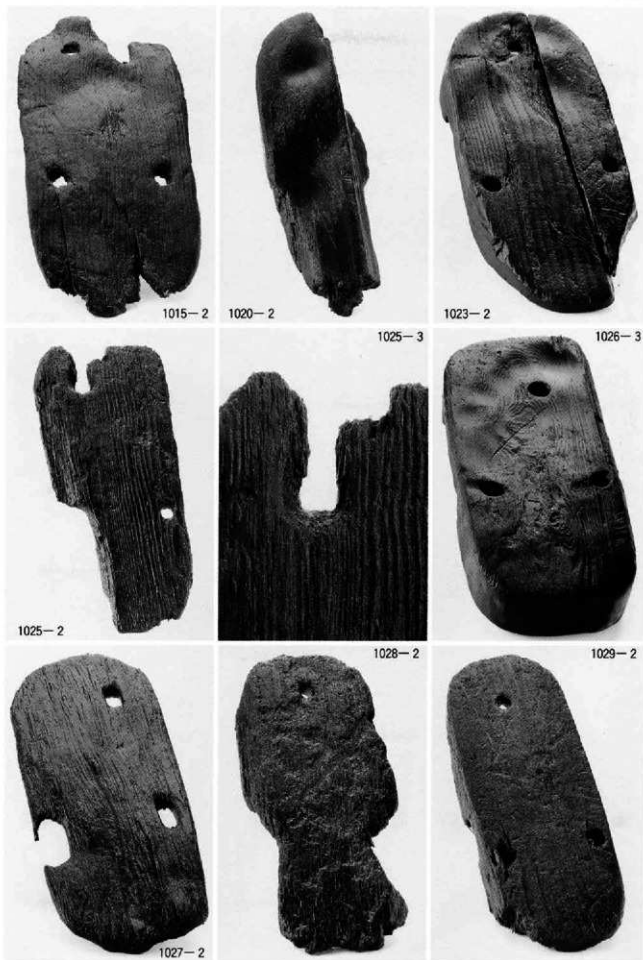


1028-1



1029-1







1031



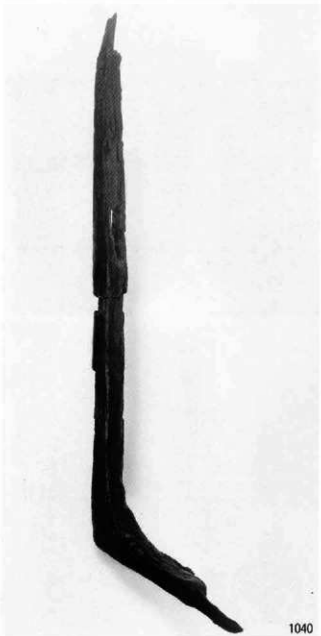
1032



1034



1035



1040



1038



1042



1041



1043-1



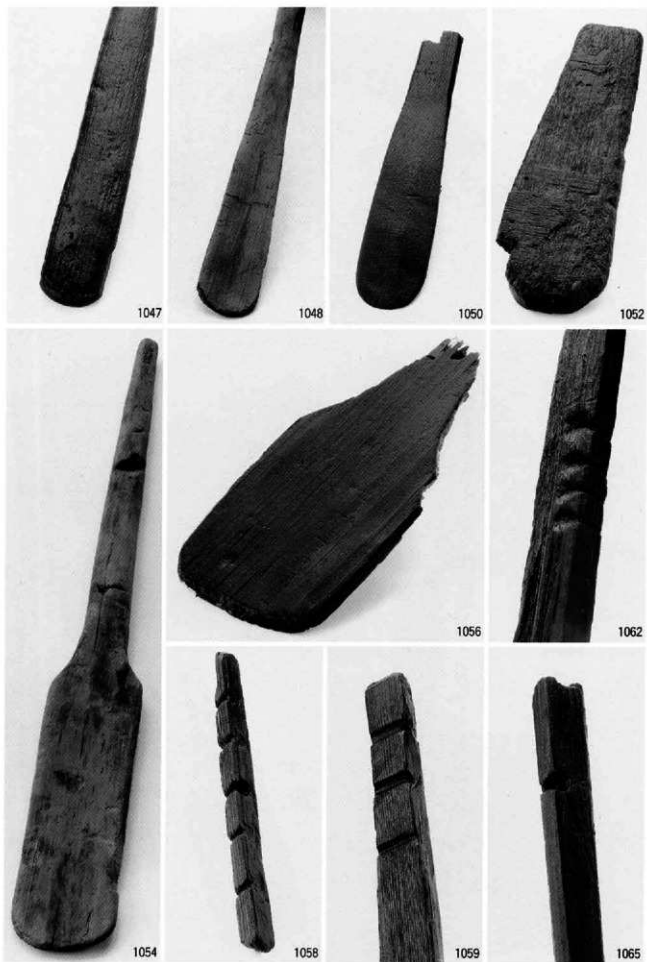
1043-2



1044



1046





1066



1067



1068



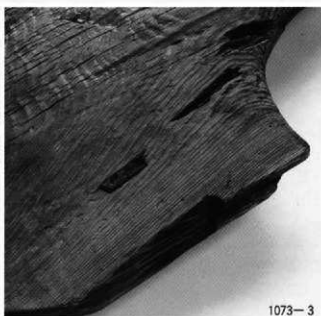
1069



1071



1072





1076



1077-1



1077-2



1077-3



1077-4



1078-1



1078-2

1078-3



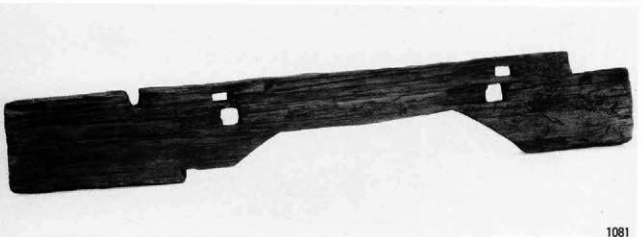
1079-1



1079-2



1080



1081



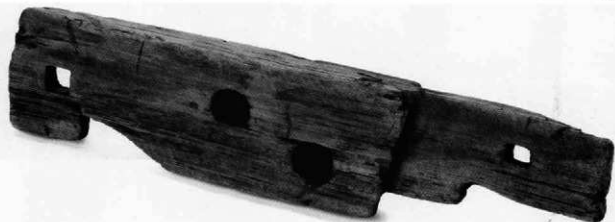
1082



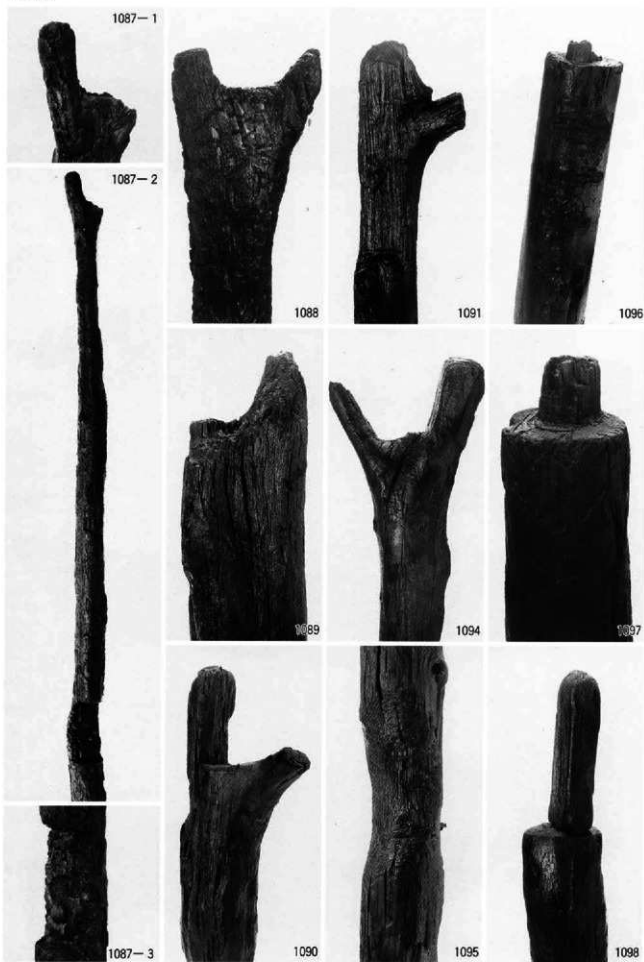
1083



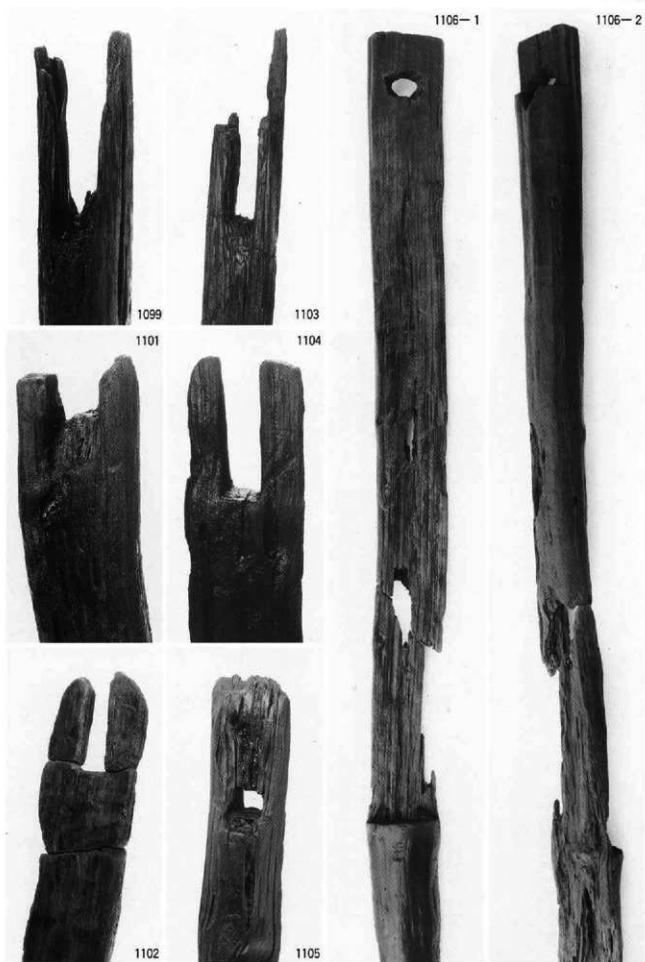
1085



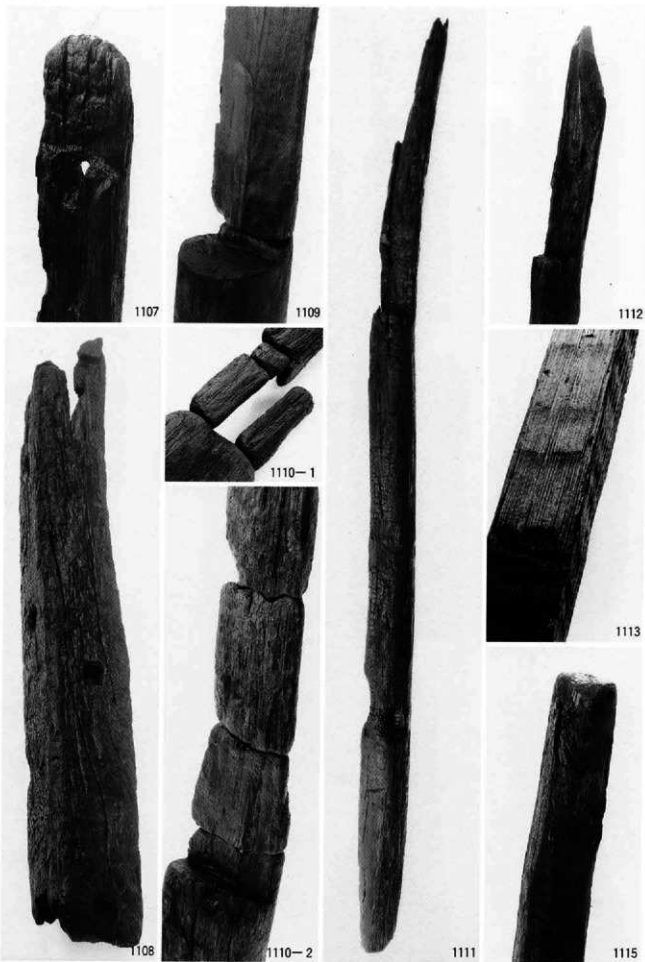
1086



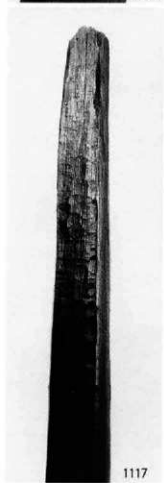
竪穴住居用柱・掘立柱建物用柱



掘立柱建物用柱



掘立柱建物用柱





1154



1155



1156



1157



1158



1159



1161



1162



1163



1164



1165



1166

掘立柱建物用水平構造材



1167



1168



1169



1170



1171



1172



1173



獨立柱建物用水平構造材



1177-1



1177-2



1178-1



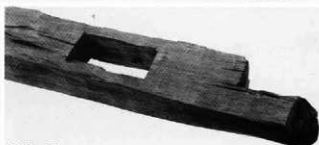
1178-2



1179-1



1179-2



1179-3



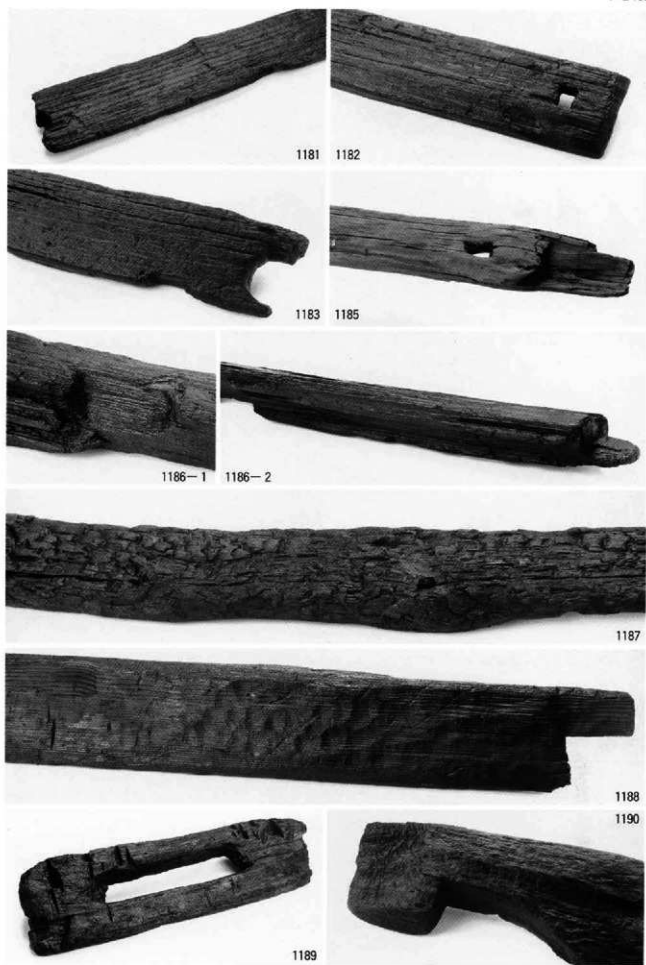
1180-1



1180-2



1180-3



掘立柱建物用水平構造材



1191



1192



1194



1195



1196



1203-1



1203-2



1204



1205



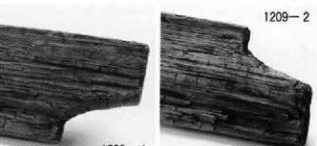
1206



1207



1208



1209-2

1209-1



1209-3

1210



1211



1212



1213-1



1213-2



1214-1



1214-2



1214-3



1215



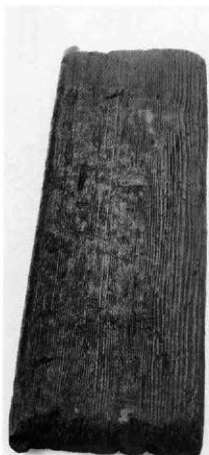
1217-1

1217-2



1216





1218



1219-1



1219-2



1220



1221



1224



1226



1227

扉板



1228



1237-1



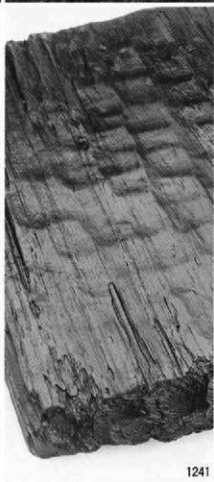
1237-2



1238-1

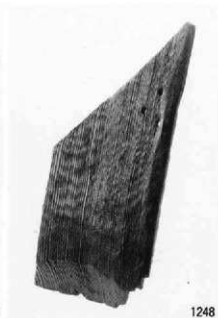


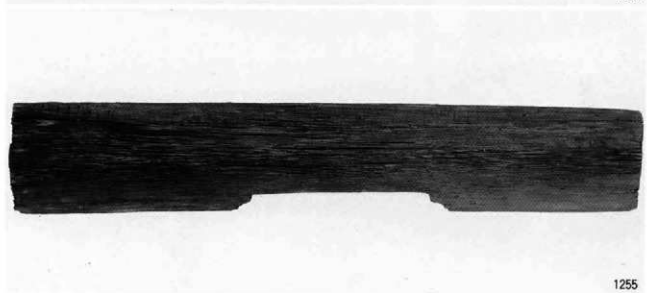
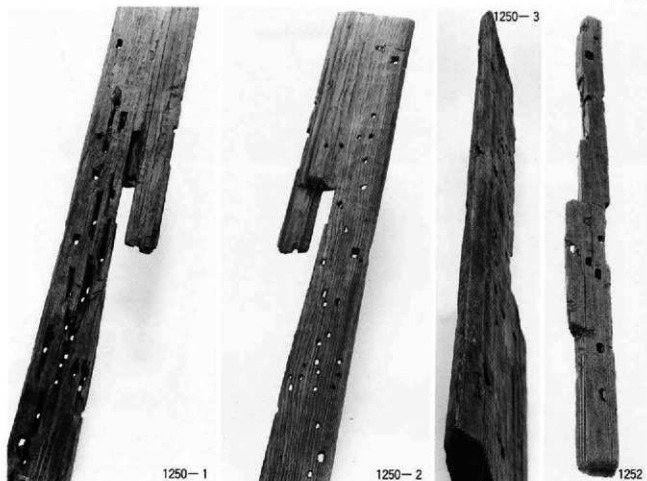
1238-2



1241

1243







1258



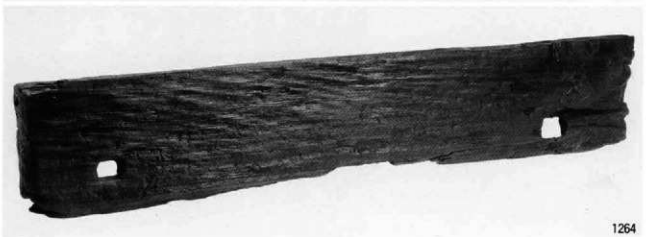
1259



1260



1263



1264



1265



1267



1268



1269



1270-1



1270-2



1271



1273



1278



1282



1283



1288



1289



1290



1291



1293



1296

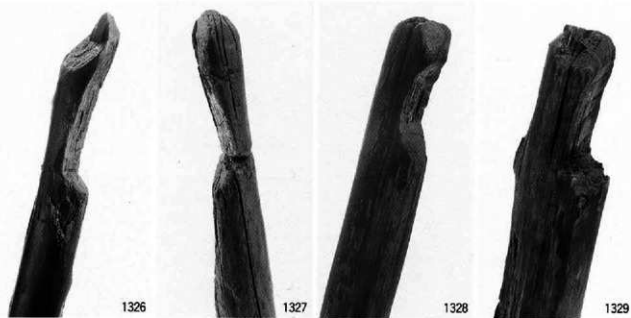
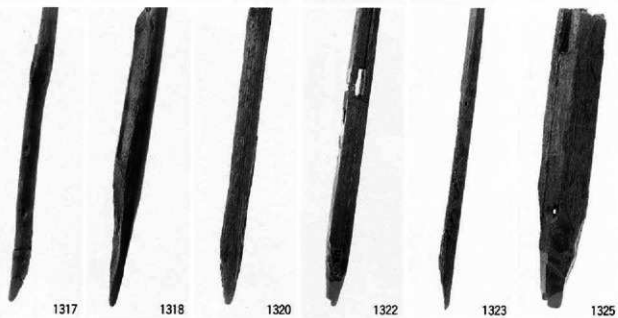
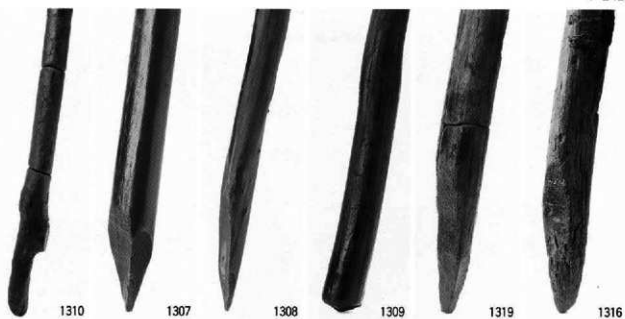


1302

板壁板



1303





1331



1332



1333



1335



1338



1341



1344



1345



1346-1



1346-2



1347-1



1347-2

1348
- 1

1348- 2



1352- 1



1352- 2



1353- 1



1353- 2



1355



1357



1358

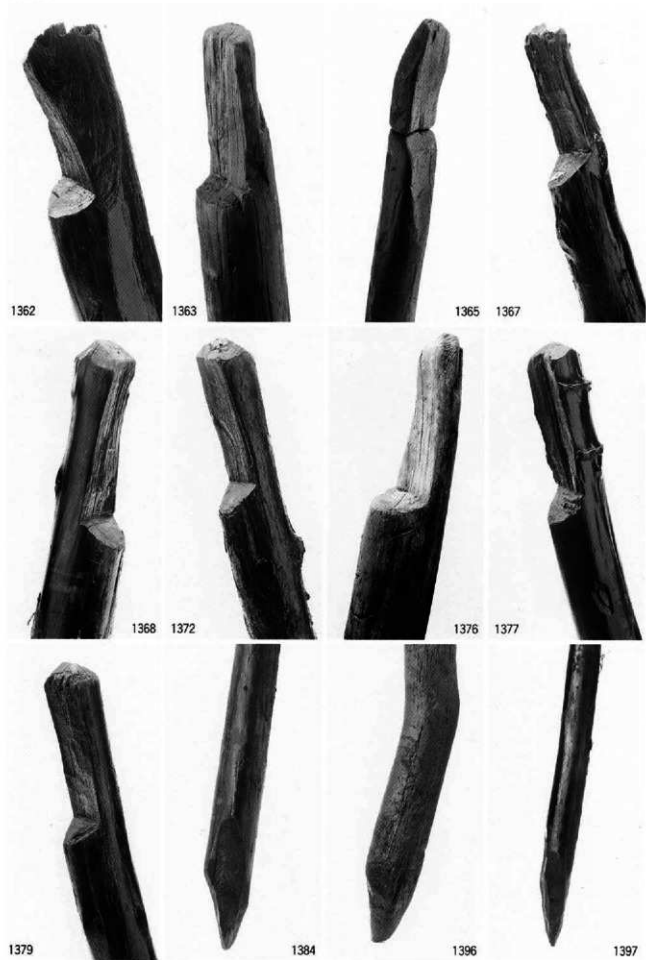
1359
- 1

1359- 2



1360







1400



1402



1405



1403



1406



1408





1422-1



1422-2



1423-1



1423-2



1434



1435



1443



1445



1447



1448



1453



1455



1456



1457



1459-1



1459-2



1460



1461



1463



1464



1465



1466



1468



1469



1470



1471



1472



1474



1475



1473



1476



1477



1478



1481



1482



1485



1483



1484



1479



1480



1486



1489



1490



1491



1493-1



1493-2



1492-1



1492-2



1494



1495



1499



1500



1505



1510



1514



1516



1524



1529



1530



1535



1540



1541



1542



1544



1545



1549



1551



1553



1554



1555



1557



1559



1562



1564



1574



1576



1577



1578



1570



1580



1583



1585



1587



1589



1590



1610



1614



1592



1595



1603



1604



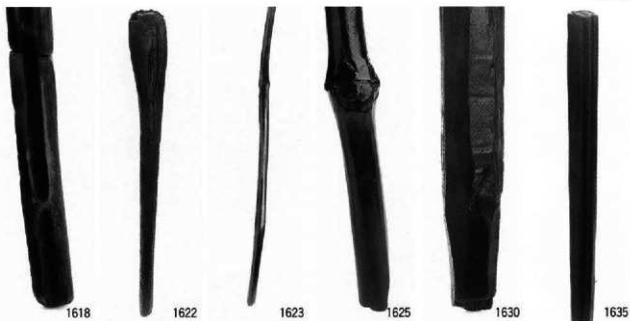
1609



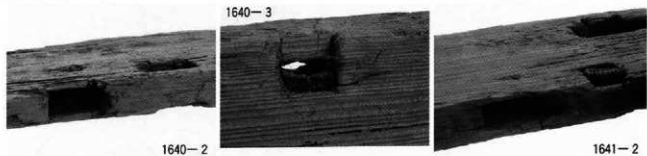
1616



1617



1640-1



1641-1



1642



1643



1645



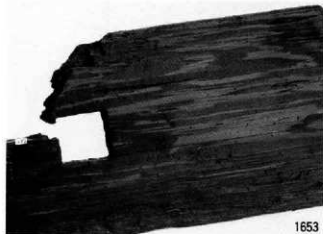
1644



1649



1651



1653



1657



1658



1668



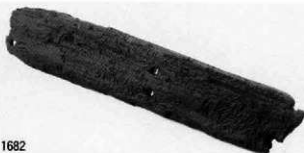
1671



1676



1679



1682



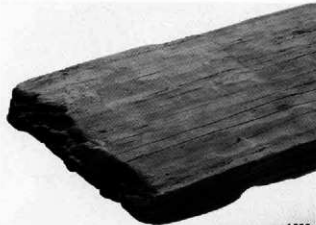
1684



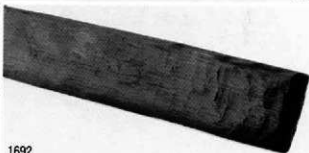
1685



1691



1693



1692



1694



1696



1699



1700



1706



1705



1708



1709



1712



1716-1



1716-2



1718



1719



1730



1720



1731



1729-1



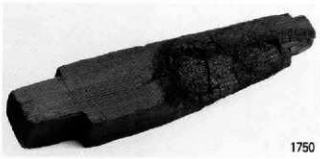
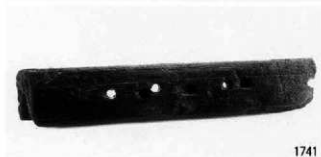
1732



1729-2



1733





1761



1762



1765



1766



1767



1768



1769



1773



1774



1776



1779



1784



1785



1786



1794



1795



1796

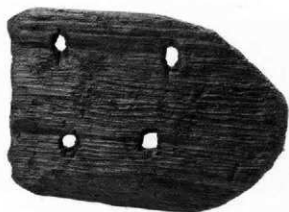


1797



1801





1866



1873



1878



1879-1



1879-2



1882



1871



1887



1888



1886



1890



1899

報告書抄録

ふりがな	いせばんこじやうじやうばんごうちせうりほちこうけんせつじやうぶたふらふら(いせ)へいせ301-ぶつじやう243こく(15)せいのん
書名	一般国道23号中勢道路(8丁区)建設事業に伴う 六人A遺跡発掘調査報告(木製品編)
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	115-17
編著者名	穂積裕昌
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-1732
発行年月日	西暦2000年3月24日

所在地名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
六人A遺跡	三重県津市大 東森田町字花 が 村	24201	693	34°	136°	19940413	8,830	一般国道23号中勢 道路建設事業に伴 う事前調査
				45°	29°	19950503		
				50°	55°	19950417	4,130	
						19960329		
						19960819	260	
						19961004		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六人A遺跡	祭祀・ 集落跡	弥生時代後期 古墳時代・古 代・中世	旧河道・大溝(本書の 所収の遺構のみ)	木製品(農具・工具・ 紡織具・容器・家具・ 武器・武具・馬具・祭 祀具・琴等の楽器・獅 と下敷・運搬具・土木 作業用具・食事具・発 火具・漁撈具・船材・ 建築部材・木簡・枕・ その他)	弥生時代後期から古墳 時代を中心とした多様 多様な木製品について の報告

平成12（2000）年3月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告115-17

一般国道23号中勢道路（8丁区）建設事業に伴う

六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）

2000.3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 オリエンタル印刷株式会社